齋藤茂吉著

柿本人麿

雜纂篇

岩波書店刊行



探幽筆人麿像　小坂順造氏藏

自序

本卷は、前巻までに收め得なかつた人麿に關する雜事諸篇を收めたものである。そのうち歌に關しては、「柿本集考證」と、「勅撰集選出歌考證」とが主なものであるが、前者は所謂歌仙歌集(三十六人集)中の柿本集で、純粹に人麿作と看做し得ぬ紛亂したものである。併し或時代に人麿の歌がかかる有樣を以て傳へられつつあつたといふことを觀察するに便利であり、訓などの上にも少しく參考とすべきもののあらむことを思ひ、夙くからその小考證を志してゐたものである。後者は評釋篇と幾たびも重複する嫌ひあるものであるが、古今集以後の勅撰集に人麿の歌がいかに取扱はれたかを知るうへに便利だらうと思つて纏めて見たのである。そのうち例へば、人麿作と謂はれてゐる、『ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれゆく舟をしぞ思ふ』といふ歌は、實は古今集に作者不詳の歌であるから、評釋篇には出て居ない。また、小倉百人一

首に人麿作とせる、『足引の山鳥の尾のしだり尾のながながし夜を一人かも寐む』といふ歌も、萬葉集では作者不詳の歌であるのに、拾遺集に人麿作として載つたために、小倉百人一首もそれを踏襲したのである。さういふ種類の歌は總て評釋篇には出て居ないので、やはり此卷で記して置く方が便利であるから、煩瑣重複を厭はずそれを纏めたのであつた。

「鴨山後考」、「辛乃埼考」、「藤原宮御井考」等は皆小考證に過ぎぬけれども、私の主觀では全五卷を通じて最も心樂しい部分に屬するものである。特に人麿臨終地に關する、「鴨山後考」は、嘗て「鴨山考」で結論した粕淵村小原の津目山（つのめやま）から、粕淵村湯抱湯谷の鴨山（かもやま）に移動したものであり、私はこの小發見を樂しんで終身厭かざらむとしてゐる。

その他の雜纂は、取立てて云ふほどのものではなく、神道で人麿を取扱つた部分、人麿肖像、人麿地理踏查錄、文獻補遺等若干の小文は、寧ろ總論篇の補遺として役立つに過ぎぬものである。

數篇の「小考」は、これもまた評釋篇の部分的補訂に類するものである。評釋篇は能ふかぎり

勉强したのであつたが、執筆年代によつて齊一の手際を缺き、いまだ顚倒錯謬の缺點を免れ得ないとおもふので、先づこの志を示したのであつた。向後も先輩の敎をあふぎつつ、みづから獨斷に僭することを懼れつつ、この企を續行したいと念ふのであるが、この拙著も既に冗長にわたつてしまつたので、本卷をあはせた五冊を以て一先づ打切ることにしたいとおもつたのである。

顧れば、總論篇を發行した昭和九年以來、この雜纂篇を發行するに至るまで足掛け七年の歲月を閲した。その間諸先生諸友人の敎示鞭撻助力を得たこと極めて多大である。私はここに深き感謝の念をささげる。

柿本人麿は皇國歌人のうち最も尊敬すべき一人である。それにむかつて縷々として論讃の語を聯ね來つたのは分を踰えた所爲であつたかも知れぬけれども、然も私の心中には常に一家見の妄縱に陷らざらむことを期して居たものの如くであつた。若し不幸にして世の人麿を崇ぶ人人のために阻碍となり羈絆となつたならば、それは私の力のいまだ足らざるがためである。

本卷の原稿は大體昭和十四年春纏つた。爾來原稿校閲・校正・索引の作製には、柴生田稔、佐藤佐太郎、山口茂吉三氏の盡力を煩はし、發行萬端は岩波茂雄氏の厚意によつたことを衷心感謝するものである。昭和十五年一月吉日、齋藤茂吉識。

目次

插圖目次

川・御園村・喜佐山・御船山。宮瀧村・傳宮址・御園村・喜佐山・御船山。喜佐山・喜佐谷・吉野山・御船山・柴橋。初瀨町・泊瀨山。三輪山。飛鳥川より南淵山。三輪山・纏向連山。纏向山・穴師村。大和三山。畝傍山・傳藤原宮址土壇の森・鴨公小學校・鷺巢神社。耳成山。雷岳・飛鳥川・豐浦村。三輪山の一部・纏向連山。纏向山・衾田墓地。飛鳥村・矢釣山。飛鳥川・二上山・畝傍山。雷岳。香具山・南浦。畝傍山・二上山。耳成山・傳藤原宮址土壇の森。大輕・見瀨の一部・畝傍山。五條野・眞弓丘の一部。岡寺より橘・眞弓丘。甘橿丘より雷・香具山・耳成山・鷺巢神社。嫩草山・三笠山・春日山・高圓山。東大寺大佛殿・奈良公園・嫩草山・三笠山・春日山。三瓶山・石見安濃郡佐比賣村の高原。石見安濃郡浮布池。石見安濃郡山道の笹。砂彌島。砂彌島の磯。淡路野島埼。明石海峽。加古川口・高砂町松原。飼飯の海・慶野松原。飼飯の海。

挿圖　**人麿肖像**　宗武考按(著者藏)。宗武考按(土岐善麿氏藏)。小堀鞆音筆(宇都野研氏藏)。小堀鞆音筆(宮森麻太郎氏藏)。瀧上寺藏。土佐光高筆(著者藏)。渡邊綱彥氏藏。仁阿彌道八作陶像(高橋道八氏藏)。北大路魯卿氏藏。文字がき人麿。人麿大明神火防神託。傳小野篁作石像(秋元氏藏)。木像(福岡某氏藏)。高取燒陶像(仲田氏藏)。

柿本集考證

柿本集に就いて

一

柿本集は、公にせられたものに、歌仙家集本（三十六人集本）と群書類從本との二種がある。前者は、正保四年刊行の流布本のほかに、和歌叢書、歌仙家集、國歌大系、續國歌大觀等に收められ、後者は復刻の群書類從二種類の中に收錄せられてゐる。私の校合に用ゐた底本は前者であつて、後者及び其他を以て比較對校した。

【歌仙家集本】 歌仙家集本柿本集の歌數は、博文館和歌叢書本（佐佐木信綱氏校訂）、及び、歌學書院歌書刊行會本歌仙家集（中川恭次郎氏校訂）共に合計三百一首である。然るに、續國歌大觀本（松下大三郎氏校訂）及び國歌大系本（與謝野寛氏校訂）共に二百九十九首である。此れは流布本歌仙家集に據つたものである。同書には、「書寫本色紙手跡古體也、建長五年六月日、此本以三ヶ之本校正了、同六年三月

日、藤原朝臣判在之、『正保四丁亥曆八月書林中野道也綉梓』とある。そして一首不足したのは、

秋風の日ごとに吹けば露おもみ萩のした葉は色づきにけり　（一二七番）

秋の田のかりほにつくりいほりしてひまなく君を見るよしも哉　（一四五番）

の二首であつて、それを他の古鈔本によつて增補すれば三百一首となるわけである。右の如く、歌仙歌集本柿本集の歌數は三百一首であるが、少しく形を變へて、寧ろ重出と看做してもいい程のものがある。

さゝなみのしがのからさき行てみれど大宮人の船まちかねつ　（五四番）

さゝなみやしがのからさき來たれども大宮人の船まちかねつ　（二一一番）

しきたへの袖かへしてし君やたれのうちのすきをまたはあはむや　（四三番）

しきたへの袖かへしきみ玉たれのをちに過ぎたる玉もあらむやは　（二三二番）

やまのかひそこども見えずしらかしの枝にも葉にも雪のふれゝば　（六四番）

あしびきのやまぢも知らずしらかしの枝もたわゝに雪のふれゝば　（一五九番）

あすかがはしがらみ渡しせかませばながるゝ水ものどけからまし　（四四番）

あじろ木のしらなみよりてせかませば流るゝ水ものどけからまし　（二一四番）

あわ雪の降るに消えぬべく思へども逢ふよしもなみ年ぞ經にける（一六五番）
降る雪の空に消えぬべくおもへども逢ふよしもなし年ぞ經にける（二三五番）
いそやまの岩ねにおける我をかも知らずていもが待ちつゝあらむ（六二番）
かみ山のいはねのたまにある我をしらぬかいもがまちつゝませる（六三番）
おふの海に船乗すらむつまともに玉藻の裾にしほみちぬらむかも（三六番）
須磨の浦に船のりすらむをとめ子があかもの裾にしほやみつらむ（五七番）

【群書類從本】。群書類從本柿本集には六百四十二首（冬。天皇御製、一立田川紅葉みだれてながるめり一計算外）と、一本所載歌十四首、合計六百五十六首を收めてゐるから、歌仙家集の約二倍の歌數になる。またその掲載の順序も違つてゐる。今試に表にしてその大體を次に示す。數字は各本に所載の歌の番號を表してゐる。

歌仙家集	群書類從	歌仙家集	群書類從	歌仙家集	群書類從	歌仙家集	群書類從	歌仙家集	群書類從	歌仙家集	群書類從
一	二二四	四	一九一	七	二四二	一〇	五四九	一三	一九一	一六	二四八
二	[illegible]	五	二一五	八	二二七	一一	一九五	一四	一八三	一七	一八
三	[illegible]	六	二二五	九	二四三	一二	二一九	一五	一九八	一八	三四四

歌仙家集	群書類従
一九	一九三
二〇	二九七
二一	二一四
二二	二二五
二三	一九四
二四	一九四
二五	一九五
二六	二四七
二七	二二八
二八	一九六
二九	二四六
三〇	二二九
三一	二七七
三二	二九八
三三	二二八
三四	二二七
三五	二四四、六四
三六（五七）	二三〇
三七	二七九
三八	二二三
三九	二二六
四〇	二五九
四一	六四四
四二	二二二
四三（三三）	二九四
四四（三四）	二六四
四五	二六五
四六	—
四七	二六六
四八	六四五
四九	四一〇
五〇	—
五一	二二三
五二	二六三
五三	四〇一
五四（二一）	二二九
五五	二二九
五六	二二一
五七（三六）	四一八（六四六）
五八	二六九
五九	二一八
六〇	二六〇
六一	二六一
六二	二六七
六三	二六八
六四（五九）	—
六五	四一二
六六	六四七
六七	四〇二
六八	二二
六九	二九
七〇	二二
七一	四〇四
七二	二七六
七三	三四一
七四	四〇五
七五	五五
七六	二八
七七	四三三
七八	四五
七九	四六
八〇	四四
八一	二七二
八二	四七
八三	二九
八四	四八
八五	—
八六	四一
八七	四九
八八	五〇
八九	五一
九〇	二七一
九一	五二
九二	五三
九三	五八
九四	五四
九五	六二
九六	六四
九七	七七
九八	六五
九九	六七
一〇〇	六八
一〇一	七〇
一〇二	七一
一〇三	九八
一〇四	七二
一〇五	七五
一〇六	一二四
一〇七	七六
一〇八	四〇六

[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	一四	一五	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	四七	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	八六	[illegible]	九一	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	一四四	一四五	一四六	一四七	一四八	一四九	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	八〇	八七	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
一六〇	一六一	一六二	一六三	一六四	一六五（一三五）	一六六	一六七	一六八	一六九	一七〇	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	一七六
[illegible]	一四	五	八	六	（一七七）	一	二	[illegible]	二三	四	七	[illegible]	三〇	四二	七三	[illegible]
[illegible]	一七八	一七九	一八〇	一八一	一八二	一八三	一八四	一八五	[illegible]	一八七	一八八	一八九	[illegible]	一九一	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	二七五	一六一	三一三	[illegible]	一八（六五二）	[illegible]	[illegible]	三三〇	二七八	二八〇	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
一九四	一九五	一九六	一九七	一九八	一九九	[illegible]	二〇一	二〇二	[illegible]	二〇四	二〇五	[illegible]	[illegible]	二〇八	[illegible]	[illegible]
一	[illegible]	二八八	[illegible]	[illegible]	（六五五）	三二五	[illegible]	[illegible]	二九〇	二九一	[illegible]	[illegible]	二九二	三三一	[illegible]	[illegible]

家仙歌集	二一一（五四）	二一二	二一三	二一四（四四）	二一五	二一六	二一七	二一八	二一九	二二〇	二二一	二二二
群書類従	—	二三三	二五四		二三二	二五三	二一七	九一	[illegible]	五五	二五八	二七三
家仙歌集	二二三	二二四	二二五	二二六	二二七	二二八	二二九	二三〇	二三一	二三二（四三）	二三三	二三四
群書類従	[illegible]	[illegible]	六五六	一八[illegible]	二五[illegible]	二五五	二〇八	二〇九	—	—	—	一七一
家仙歌集	二三五（一六五）	二三六	二三七	二三八	二三九	二四〇	二四一	二四二	二四三	二四四	二四五	二四六
群書類従	（一七七）											
家仙歌集	二四七	二四八	二四九	二五〇	二五一	二五二	二五三	二五四	二五五	二五六	二五七	二五八
群書類従												
家仙歌集	二五九	二六〇	二六一	二六二	二六三	二六四	二六五	二六六	二六七	二六八	二六九	二七〇
群書類従												
家仙歌集	二七一	二七二	二七三	二七四	二七五	二七六	二七七	二七八	二七九	二八〇	（以下略）	
群書類従												

歌仙歌集本にあつて、類従本に無い歌は次の如くである。（番號は歌仙家集本の番號である）

しきやみの路のつゝみのかくれぬの行方もしらずこねりまどひぬ（四六番）

ふすまぢのひくての山に妹を置きて山路をゆけばいけりともなし（五〇番）

あまのがは霧たちわたるたなばたの天の羽衣とひ別るかも（八五番）

秋さればかり飛び越ゆるたつた山たちてもゐても君をこそ思へ（一五一番）

夜を寒みあさ戸をあけて出でぬれば庭もはだらに雪ふりにけり（一六〇番）

あさきりあひ降來る雪の消えぬとも君には逢はむと我歸りきたる（一六六番）

こひつつもけふはありなむ玉くしげあけなむあすをいかで暮さむ（一九四番）

まきもくの山べひびきて往く水のみなわのごとに世をばわが見る（二三一番）

秋田苅るかり庵つくりわが居ればころも手さむし露ぞ置きける（二三三番）

右のうち、『こひつつもけふはありなむ』は、直ぐその前の、『わびつつも今日は暮しつ霞たつあすの春日をいかで暮さむ』（一九三番）が類從本にあるので、類從本では、重出歌として取扱つたのかも知れない。

類從本の本をなしたと思はれる寫本の終には、『萬治二とせ小春後の八日豐の前中津河にして書人の歌あり』「詠營宗連坊。華押」といふ識語があり、なほ、この寫本に無くして、歌仙家集本にある十四首の歌を、一本所載歌として増補してゐる。それから、その終に、「右人麿集以橋本肥後守經

亮本書寫以一本印本及萬葉集校正」と記してある。

類從本にあつて、歌仙家集本に無いものを次に列記する。

昨日こそ年はくれしか春霞春日の山にはや立にけり

きのふこそ月は立しかいつのまに春の霞の立にけるぞも

雪さむみ咲けどきかれぬ梅花なほこのころはしかとあるかは

梅花さきて散とはしらぬかも今まで妹か出てあひみぬ

河水に蛙なくなり夕されば衣手さむみつままくらせむ

わがせ子をならしの岡の呼子鳥君よびかへせ夜の更けぬとに

よそに有て雲ゐに見ゆる磯の上に咲散る花をとらではあらじ

朝な〳〵わがみる柳鶯のきゐて鳴くべき時にはあらぬ

とまりゐてかづらき山を見渡せばみぞれぞ降るまだ冬ながら

青柳のかづらにすべくあるまでにまてども啼かぬ鶯の聲

春雨のうちふるごとにわが宿の柳が枝はいろづきにけり

今さらに雪ふらめやもかげろふのもゆる春日となりにし物を

春雨にもゆる青柳手に持ちて日ごとにみれどあかぬ君かな

こゝにきて春日の原を見渡せば小松が上に霞たなびく

わが宿に鳴きし雁かね雲の上に今宵鳴くなりくにへ行くかも

春されば野べに鳴きてし鶯の聲も聞えず戀のしげきに

春霞たなびく山の櫻花はやくみてまし散り過ぎにけり

櫻花枝になれたる鶯のうつし心もわがおもはなくに

我宿の花橘に時鳥さけびてなかむこひのしげきに

我がせこをうらまちかねて時鳥いたくななかむ戀もやむやと

我がごとく君をまつとや時鳥こよひすがらにいねがてにする

萩の花枝もたわゝに露のおきさむくも夏のなりにけるかな

わたし守舟はやわたせおとよばふ聲もきかぬか梶音もせず

夕立の雨ふる毎に春日野の尾花が上のしらつゆおもふ

このくれに秋風吹きぬ白露のあらそふ花のあすかみざらむ

てまもなくうゑし草ばを出てみれば宿の初萩咲きにけるかも

秋風はすゞしくなりぬ駒なべていざみにゆかむ萩の花みに
秋霧のたなびくを野の萩が花今や散るらむいまだあかなくに
秋風は日ごとに吹きぬ高松の野べの秋萩ちらまくをしみ
雁がねのきなかむ日迄みつゝあらし此の萩原に雨なふりこそ
わが衣すれるにはあらず高松の野を行きしかば萩のすれるぞ
さきぬ共しられじ我はたゞにあらむ此秋萩にしらでをあらむ
みまほしく我待ち戀ひし秋萩は枝もたわゝに花咲きにけり
秋萩はちりはてぬべみ立よりてみれどもあかず借としあれば
夜をさむみころも雁がね鳴くなべに萩の下葉は色づきにけり
雁がねのさむき夕べの露ならむ春日の山をもみだす物は
かりがねの聲聞くからにあすよりは春日の山も紅葉そめなむ
雁がねのさむくなるより水くきの岡の木の葉は色づきにけり
ことさらに衣はすゞし女郎花さく野の花に匂ひてをらむ
おく山にありてふ鹿のよひさらず妻よぶ萩のちらまくをしも

白露にあらそひかねてさける萩ちらばをしくも雨な降りこそ

たづがねのけさなくなべに雁がねのいづくをさして雲隠るらむ

むば玉の夜中ばかりは覺束な幾よをへてかおのが名をよぶ

此のごろの秋のあさけの霧かくれ妻よぶ鹿の聲のさやけき

秋萩のさきたる野べはさを鹿の分れつゝ、ねは妹戀をする

山へまかりいたせる年はおほかれど嶺にも尾にもさを鹿の鳴く

きり〴〵す我が床の上になき明すおき出でぬるにぬれどねられず

白露をとらばけぬべみいさもにも露にいそひて萩の遊びせむ

ますかゞみみなふち山はけふもかも白露おきて紅葉ちるらむ

曉の時雨の雨にぬれわたりかすがの山はいろづきにけり

秋山をゆく人かくな忘れにしその紅葉ばのおもほゆるかも

物おもふとかくれのみゐてけさみれば春日の山は色付きにけり

紅葉ちる時になるらしつまをとこ桂のいたく色付きぬれば

秋の田のほむけの風のかたよりに我は物おもふつれなき物を

橘をもりへの家のたわせかるとて過ぬこしとすらしも

さを鹿のを野の草ぶしいちじるく我もとはぬに人の知るらむ

わが宿のはぎさきにけり散らぬまにとくみにこなむ都里人

草深みきり〴〵すおほく鳴く宿の萩見に君はいつかきまさむ

故里のはつ紅葉ばを手折りつゝ今ぞわがくるみぬ人のため

心なき秋の月夜の物思ひにぬれどねられずてらしつゝふる

朝な〳〵立つ川ぎりを寒みかもたかはし山のもみぢそめけむ

秋くればかぶりの山に立つ霧を海とぞみつる波たゝなくに

さを鹿の戀をしのぶと鳴く聲のいはむかぎりはなびけ萩原

など鹿のわびなきすらむよそにても秋野の萩に繁くあるらむ

足引の山の木かげに鳴く鹿の聲もしのばず山田もらすと

秋風はさむく吹くなりわが宿の淺ぢがもとにきり〴〵すなく

秋の野の尾花がくれに鳴く蟲の聲を聞けばか我も我妹も

秋萩の枝もたわゝに露もおき寒くも秋のなりにけるかな

春はもえ夏はみどりにくれなゐのいろにみゆめる秋の山かな

いもが袖まきの朝霧をしむらむ紅葉はちれるくちをしきかも

紅葉ばの匂ひは繁くなりぬとも妻なしの木を手折りかざさむ

露霜のさむき夕べの山風に紅葉しにける妻なしの木は

雁がねのきなきしからにから衣立田の山は紅葉はじまる

風吹けばもみぢ散りつゝ暫くも我まつはらにきよからなくに

妹こそは今おきてゆけ伊駒山打ちこえくればもみぢ散りつゝ

秋萩の下葉のもみぢ色に出でゝ時過ぎぬれば後戀ひむかも

色付きぬ有明の月もなふりこそ妹がたもともまかぬ此の日は

くれなゐの八しほの雨はふりけらし春日の山の色付くみれば

あやしくもきなかぬかりか白露のおきて朝はさぶしき物を

わが宿の淺茅生までも色付きぬまだこぬ君はなにの心ぞ

秋霧のおとろへなむ思ふかも野べに出でつゝきをしかのなく

妹が紐とくとむすぶと立田山今こそもみぢはじめたりけれ

足引の山田の稲はひてずともつなだにはへよもるとしるがね

たかまつの此のみね毎に風吹きて紅葉たえたる秋の月かな

妹をこひとこしの池の波まよりとりのね聞ゆ秋はきぬらし

けふくれてあすにならなむ神無月時雨にまがふ紅葉かざさむ

君が家のともしき紅葉とくは散る時雨の雨にぬらさざらなむ

おしてるや難波堀江の蘆べにはかりねたるらし霜のふれるに

いそぐともよぶかく行くな道のへのこ笹が上に霜のふれるに

あさ月の峯なほくもるうべしこそ籬のうちの雪げさえけり

ことならば袖さへぬれて通ふべく降りなむ雪の空に晴れ行く

いといたくふらぬ雪ゆゑことおほけに天つみ空は曇あひつゝ

妹が家は我まどはしつ久堅の空より雪のなべてふれゝば

笹の葉にはだれふり被ひけ永くも忘れずといはば我も頼まむ

霰ふりいたくもふぶきさむきよははたのに今宵かり人(わかひとり)のねむ

天少女のぼるの山の峯にふる雪は消えしとつげよそのこに

天とぶやかりの翅のおほひばのいづくもりてか霜の置くらむ

我がせこと朝な／＼に出でみればあは雪ふりぬ庭もはだらに

常はさも思はぬ物を此の月の過ぎかくれ行くをしきよひかな

あすの夜を照す月影かたよりに今宵によりて夜ながからなむ

玉だれのこすのま遠し獨りゐてみるしるしなき夕月よ哉

百敷の大宮人のまかり出てあそぶこよひの月のさやけき

ますかゞみ照る月影を白妙の雲かくせるか天つきりかも

足引の山川のせのあるなべにつきゆみなかく雲立ちわたる

おほうみはしまもあらなくに海原やたゆたふ波に立てる白雲

我がせこが袴の裏をそめむとてけふのこし雨に我ぞぬれぬる

いにしへのことはしらねど我みても久しくなりぬ天のかぐ山

さほ川に遊ぶ千鳥のさよふけて鳴く聲聞けばいこそねられね

皆人の戀ひしみよしのけふみればむべもいひけり山川きよみ

うむ川におひたる菅も河清みとらで來にけるつとにせましを

さよ更けて堀江こぐなる松浦舟かぢ音たかしみをはやみかも
いとまあらばとりにきませよ住吉の岸に生ひたる戀忘れ草
住吉の岸に心をおきつべによする白波みつゝ思ふらむ
すみよしの沖つ白波風吹けばきよれるはまをみればきよしも
夕されば梶音すなりあまを舟おきつめかりに出づるなるべし
草まくら旅にしあれば秋風のさむき夕べにかり鳴きわたる
玉つ島みれどもあかずいかにしてつゝみもたらむみぬ人の爲
むば玉の黑かみ山を朝こえて山下つゆにぬれにけるかも
さほ山にたな引く雲のたゆたひに思ふ心をいまぞさだむる
あまとぶやかりの使もえてしがなならの都にことづてやらむ
たびになほひもとく物をことしげみまろね獨する長き今宵を
ふな風のかく吹くまでもいつまでか衣かたしきわか獨りねむ
こ紫ほすかはくれぬいづくにかたま宿からむさとはらにして
離れいそに立むろの木うたかたも久しき年の過ぎにけるかも

こかね山したゐの下に鳴く鳥の聲だにきかば何かなげかむ

もがみ山すがきせしより心ありてまかり歸せるやかたをの鷹

草がくれ行くさを鹿はみえねども妹があたりはみれば戀しも

春雨に衣のいろはひぢつとも妹が家ぢの山はこえなむ

朝さく夕べはしぼむ月草のうつろふ色は人にぞありける

くだら川かはせをはやみ我せこがあしの底にもふれてふる哉

旅にしてあだねする夜の戀しくば我が家の方に枕せよきみ

いにしへのふるき翁のいはひつゝ植ゑし小松は苔生ひにけり

朝な／＼みすは戀ひなむ草枕たび行く君かかへりくるまで

思はずに吹く秋風か旅ねして衣かすべき妹もあらなくに

まゆねかきまたいぶかしく思ひける古へ人にあひみつるかな

おしてるや山すげかさをおきふるし後は誰きむ物ならなくに

山たかみ下行く水のおちたぎつうら波みれどあかぬ君かも

たどもなくみ吉野川の河ごゑのなりやむ時はなきに思ふきみ

瀧の上のみふねの山はおきながら思ひ忘るゝ時のまもなし

あらのらにあれはあれども大君のしきますよひは都となりぬ

稍まじる我が玉の緒をおほくには大和へかとも同じとぞ思ふ

わたつ海のもたる白玉みまほしき岩ふち巡りあさりするかも

鶯は時々鳴けど東路の君がたよりはまてどこぬかも

都ぢは我れもしりたりその道は遠くもあらず年はふれども

うちひさす宮ぢにありし人妻はねたし玉のをの思ひ亂れてねにし夜ぞ多き

かの岡に萩かるをのこしかなかりそありつゝも君がきまさむみまぐさにせむ

さゝ波やしがのてこらのまかりにし川せの道をみれば悲しも

さゝ波や志賀の大わたよどむともいにしへ人に又あはめやも

かた絲もて貫く玉の緒をよわみ亂れやしなむ人のしるべく

から錦ひもときあけてゆふ人も知らぬ命を戀ひつゝやあらむ

月しあれば明くらむわきもしらずしてねて明しゝも人見けむかも

さを鹿の岡のかやぶしいちじるく我はしらぬに人のしるらむ

つるばみのあはせの衣の裏にせば我か袖ひめや君がきまさぬ
奥山の岩かきぬまのみごもりに戀ひや渡らむあふよしをなみ
わぎも子に逢坂山のしの薄ほには出でずて戀ひわたるかな
朝はさき夕べはしぼむ月草のけぬべき戀も我はするかな
君があたりみつゝををらむ伊駒山雲なかくしそ雨はふるとも
けふの日の曉方になくつるのおもひはあかず戀こそまされ
君こふと庭にしをればうちなびき我が黒かみに霜置きまよひ
み狩する狩ばのを野のなら柴のなれはまさらで戀ぞまされる
紅のあさはの野らにかる草のつかのまもなく忘られなくに
この頃の有明の月のありつゝも君をばおきて待つ人もなし
よそにして戀はしぬれどいちじるく色には出てじ朝顔の花
宮木ひく泉の杣に立つ民のやむ時もなく我戀ふらくは
戀ふるひのけ永くあれど御園ふのからあやの花の色に出にけり
久堅のあまてる月もかくれ行く何によそへて妹をしのばむ

春日山雲ゐかくれて遠けれど家はおもはず妹をしぞ思ふ
この山の嶺に近しとわがみつる月の空なる戀もするかな
波まよりみゆるこ島のはまひさぎ久しくなりぬ君にあはずて
わぎもこは衣ならなむ秋風のさむき此の頃したにきましを
藤の花咲きて散りにき秋萩はさきて散りにき君待ちがてに
さくらあさのおふの下草露しあらば明してゆかむおや知共
三輪の山やましたとよみ行く水のみをし絶えずは後も我が妻
久かたのあまてる月の雲まにも君を忘れて我思はなくに
いへの井のたまわけ里に妹をおきて戀ひや渡らむ長き春日を
天雲をちへにかき分けあまくだる人も何せむ妹があはずは
こと絶えて今はこじとは思へどもせきあへぬ心なほ戀ひにけり
梓弓引きはり持ちてゆるさぬにわが思ふ心君はしらずや
今も思ひ後も忘れじかりごもの亂れてのみぞ我戀ひまさる
打ち靡き人もねつればます鏡とると夢にみつ我戀ひまさる

あひ思はぬ妹は何せむうば玉の一よも夢にみえもこなくに
夏草のしげきわが戀住吉の岸の白なみ千重につもりぬ
さかきにも手はふるなるをうつたへに人妻なればこひぬ物かも
島づたふはやひと舟の浪高みひとよよどまずたえむと思ふな
獨りゐて思ひみだれてあま雲のたゆたふ心わが思はなくに
我がせこが家を頼みて足引の山すげ笠をとらで來にけり
妹みては月もへだてずいそのさき道なき戀も我はするかな
夕されは野べに鳴くてふかほ鳥のかほにみえつゝ忘られなくに
時鳥鳴くさほ山の松の根のねもころみまくほしき君かな
み熊野に立つ朝霧の絶えずして我はあひみむたゝむと思ふな
後つひに君をみむとてうらなげきわが黒かみに雪のふるまで
けふ〳〵と君を待つ夜のふけぬればなげき心を思ひかねつる
雨ふるによは更けにけり今更に君きまさめや誰かきてねむ
かくてしも戀ひしわたれば玉きはる命もしらず年はへにけり

つくも川たゆる時なく思ふにはひともひも妹を忍びかねつゝ
かく戀ひむ物としりせば梓弓するのなか頃あひみてしかな
かさゝぎのはねに霜ふりさむきよを獨ぞねぬる君を待ちかね
石上ふるのわさ田のほにには出ず心のうちにこひやわたらむ
わが戀ふる心をしらず後つひにかゝる戀にもあはざらめやは
立田山嶺の白雲たゆたひに思ひしやればまつぞすべなき
あざみつむ春日の露のおきそめてしばしもみねば戀しき物を
青柳のしげりに立ちてまどふとも妹とむすびし紐とけめやは
山越えて遠くいにしをいかでかは此の山こえて夢にみえけむ
たらちめの母がて離れかくばかり佗しき戀はいまだせなくに
いつとても戀せぬ時はなけれども夕さるゝまは戀しきはなし
わが後にうまれむ人は我がごとく戀ひせむ道にあひあふな夢
よしやよしこざらむ君を如何せむ厭はぬ我は戀ひつゝをらむ
君をわれみまくほしきはこの二夜年月のごとおもほゆるかな

秋風の遠く吹くなるわが宿の淺茅がもとにひぐらしも鳴く
玉だすきかけぬ時なく我戀ふる時雨しふらば行きつゝもみむ
さもこそは身は心にもあらざらめ身さへ心にたがふなりけり
玉かつらといふけきつゝさぬるよは年のまれよにたゞ一よのみ
うちひさすみやぢに人は多かれど我が思ふ人はたゞ一人なり
あら玉の年はふれも（ママ）わが戀ふるあしなき戀のやまぬかなしき
行きゆけどあはぬ物ゆゑ久堅の朝露しもにうるひぬるかな
戀ひしきに心をやれどやられぬは山も川せもしらぬなりけり
山しなの木幡の里に馬はあれどかちよりぞゆく君を思へば
水の上に數かくがごとわが命君にあはむとうがひつるかな
我ゆゑにいはるる妹がたかき山嶺の白雲すぎにけむかも
むば玉の黑かみ山のやくさに小雨ふりしきます／＼ぞ思ふ
わが妹も我を思はばますかゞみとりても月の影ぞみざらむ
曉にさすつげぐしのふるけれど何ぞも君かみれどあかぬかも

玉ぼこの道ゆきぶりにうらなへば妹にあひぬと我につげける
敷妙の枕をしきてねず思ふ人は後にもあひなむ物を
誰かこの宿に來てとふたらちねのおやにいはれて物思ふ我を
さぬるよはちよに有ともわかせこる思ひくゆべき心はもたず
おほよそは誰かみむにかむば玉のわが黒髮をけづりてをらむ
獨りぬる床くちめやはあや筵をになるまでに君を忍ばむ
たそかれととはばこたへむすゑをなみ君が使を返しつるかな
妹戀ふとわがなく涙敷妙の枕とほりてそでぞひぢぬる
たちておもひゐてもぞなげく紅のあかものすそを引きし姿を
思ふ事あまる時にはかひもなし出でてぞ行きしその門を見よ
夢に見て猶かくばかり戀ふるわれ現にあはばましていかにぞ
あひみてはおもて隱るゝ物からに常にみまくのほしき君かな
昨日より今こそよなれ吾妹子がいかば（マヽ）かりかもみまくほしきかも
むば玉の妹が黒かみ今夜もやわがなき床になびきてぬらむ

色に出でてこひば人皆しりぬべし心のうちのかくれ妻かも

あひみてはこゝ慰むと人はいへどみての後こそ戀まさりけれ

僞りもにつきてそするいつよりかみぬ人ゆゑに戀にしにする

戀しなむ後は何せむわが命いきたる日こそみまくほしけれ

しき妙の枕うごきていねられず物思ふこよひはやく明けなむ

夢にだになどかは見えぬみえねども我かも惑ふ戀のしげさに

なぐさむる心もなきにかくてのみ戀ひや渡らむ月日かさねて

いかにして忘るゝものぞ我せこに戀はまされど忘られなくに

かひもなき戀もするかな夕されば人の手枕ねぬるものゆゑ

百よしもちよしもいきてあらめやは我が思ふ妹をおきて歎かむ

玉ぼこの道行きぶりに思はずに妹をあひみてなげく頃かな

妹が袖わかれし日より久堅の衣かたしき戀ひつゝぞぬる

むば玉のわが黒かみをなきくらし思ひみだれて戀ひ渡るかな

今さらに何が手枕さだめめやわがひものをのとゝともなしに

大原の荒野らに我妹をおきていねこそかねつ夢にみゆれば
夕けにも夢にも見えよ今宵だにこざらむ人をいつとか侍たむ
敷妙の枕かさねて君とわれぬるとはなしに年ぞへにける
山里の槇の板戸の音はやみ君があたりの霜の上にねむ
足引の山櫻戸をあけ置きてわが待つ君を誰かとゞむる
月清み妹にあはむとただちから我はくれども夜ぞふけにける
朝かげに我身はなりぬから衣たもとのあはでさびしくなれば
すり衣きると夢にみつうつゝにはたが言のはか繁くあるべき
しかのあまのしほたれ衣なるれども戀てふ物は忘れかねつも
さと遠み戀ひわびにけります鏡面影さらずゆめにみゆれば
たちのをのおひに尺さす、ますらをも戀てふ物は忘れかねつも
時もりかうちなす皷數ふれば時にはなりぬあはざるもあやし
灯のかげにかゞよふうつ蟬のいもがゑみがほおもかげにみゆ
おはたらやいたゞの橋の崩れなば桁よりゆかむこふな我妹子

片戀ふとぬれどねられぬつとめては誰がのる馬の足音かする

紅のすそひく道を中におきて君やきまさむ我や行くべき

まのの池の小菅の笠をぬはずして人のとふなを立つべき物か

わぎも子が袖を頼みてまのの浦の小菅の笠をとらできにけり

山たかみ谷べにはへる玉かづらたゆる時なくみるよしもがな

いきのをに思へばくるし玉のをのたえて亂れむ人は知るとも

玉のをのくりよせつゝもあはざらば我同じをにあはむとぞ思ふ

いせのあまの朝な夕なにかづくてふあはびの貝の片思にして

思へども思へもかねつ足引の山鳥のをのながきこよひを

我妹子を戀ふるにあらむ沖にすむ鴨のうきねの安けくもなし

明けぬとて千鳥しばなく敷妙の君手枕いまだあかなくに

おく山の木の葉がくれて行く水のおと聞きしより常に忘れず

風吹かぬうら〳〵浪になき名をばわが上に立つあふとはなしに

眉ねかき鼻ひむ時もまためやはいつしかみむと問ひつる我を

わぎも子に戀ひてかひなき白妙の袖かへしては夢にみえつゝ
我がせこが袂返せるよるの夢にまさで妹があふかことゝ〱に
おしてるや山すげ笠をおきふるし後は誰きむ物ならなくに
紅の花しありせば衣手にそめつけむとて行くべくぞおもふ
河上にあらふ若なのながれても君があたりのせにこそよらめ
百敷の大宮人は玉ぼこの道も出でぬにこふるころかな
さを鹿のなくらむ山を越ざらむひたにや君があはじとはする
石上に生ひたるあしの名を惜み人にしられで戀ひつゝぞふる
わぎもこがきずてふりぬるあか衣穢れふりなば戀やしぬべき
冬ごもり春さく花を手にとりて千かへり恨み戀もするかな
春山の霞にまよふ鶯も我にまさりて物はおもはじ
吾妹子が朝けの顔をよくみればけふのあいふを戀暮しつる
さきて散る梅が下枝におく露のけぬべく妹を戀ふる頃かな
朝霞かひやが下に鳴く蛙聲だにきかばわれこひめやも

櫻花時過ぎぬれどわが戀ふる心のうちのやむ時もなし
山吹の匂へる妹がはねず色のあかものすがた夢にみえつゝ
秋の野の尾花が末のうちなびき心もいもに我よするかも
秋山に霜ふりおきて木の葉ちる年は行くとも我忘れめや
紅葉ばに匂へる衣我はきし君がまつちはよもきこえかね
わが宿に今さく花は女郎花さらぬ色にはなほ戀ひにけり
萩の花匂ふをみれば君にあはぬまの久しくもなりにけるかな
秋さればかり人こゆる立田山立ちてもゐても君をしぞおもふ
秋の田をつとに押をりおける露消えもしなまし君にあはずは
ますらをの心はなくて秋の田の戀には花をみつゝ有なむ
我が袖にふりつむ雪の流れ出て妹がたもとに今も消えなむ
夢のごと君にあひみてかきくらし降りくる雪のきえぞ返れる
ひとめみし人はこふらく掻き暮し降りくる雪のきえぞ返れる
かきくもり降りくる雪の消えぬとも君にあはむと永らへ渡る

梅の花うちみ見られず降る雪のいちじるくしも使なやりそ
獨して物をおもふがすべなさにいけども妹があふ時もなし
うちの海に釣するあまの舟にのりのりにし心常に忘れず
今さらに妹にあはでや春霞たな引くのべの花も散なむ
相見ずて年ぞへにけるあやしくも妹は戀ずて戀ひ渡るかな
蘆鴨の入りてなくねの白菅のしらずや妹をかく戀ひむとは
衣手もさしかへつべく近けれど人めをおほみこひつゝぞをる
露草のかりなる命ある物をいかにしりてか後にあはむ君
さを鹿のふす草村のみえねども妹があたりをゆかばかなしも
たけと餘りたかねと長き妹が髮此の頃みねばあげつらむかも
山草の白つゆおほみ袖にふる心ふかくて我戀ひやまず
よならべて君をきませと千早振神の心をねがぬ日はなし
夕づくよ曉がたの朝かげに我が身はなりぬ妹をおもひかね
ま袖もてゆか打ち拂ひ君まつとをりつるほどに月かたぶきぬ

君がすむ三笠の山にゐる雲のたてば別るゝ戀もするかな
夕けとふわが袖におく露を重み妹にみせむととれば消えつゝ
待ちわびてうちへはいらじ白妙の我手(マヽ)につゆはおくとも
朝露の消えみきえずみ思ひつゝまた駒かへし君をこそみめ
足引の山鳥のをの人めをばひとめみしこを戀ふべきものを
妹が名も我名もたてはせしとこそふじの高ねももえつゝ渡れ
白波の立ちよるかたの荒磯にあらまし物を戀ひつゝあらずは
おほとものみつの白波妹をなほこふらく人のしらで久しく
おほ舟のたゆたふ浦に錨おろしいかにしてかも我戀やまむ
みさごゐる沖の荒いそに立つ浪の行へもしらず我が戀しさは
大船の沖にもへにもゐる浪のよるべも我は君がまに〳〵
なか〳〵に君に逢はずはまきの浦の蜑ならましを玉もかりつゝ
鱸とるあまのたく火のほのにだにみぬ人ゆゑにこふる頃かな
うまやぢにひき舟渡しただのりに妹が心にのりてふるかも

我宿のほたてふたからつみはやしみになる迄に君をこそまて
わが戀のこともかたらむなぐさむる君が使を待ちやかねてむ
現にはあふよしも無し夢にだにまなくみむ君が戀にしぬべし
こむといへばたゞにたやすし小くも心のう(ママ)に我が思はなくに
白妙の袖かけしより玉だれのをすのすかざるまたもあはぬに
をぐるまの錦のひもをとけむかも我を忍ばばわれも思はむ
忍ぶべしむすびもあへず小車の錦のひもをよひ〳〵ごとに
小車の錦のひもをときそめてあまたはねずはたゞ一よのみ
あらがふにしひても君が濡ぎぬかきよにぞやなそ只一よのみ
しほ衣あまの身かとぞ思ひけるうきよにふればきぬ人もなし
濡衣をほすさを鹿の聲聞けばいつしかひよと鳴くにぞありける
田子の浦蜑の濡衣きたれどもほしきに物はいはずもあるかな
吹く風のしたの塵にもあらなくにさも立ちやすき我なき名哉
ほしわびし人をそ聞きしぬれ衣わか身になして今ぞかなしき

陸奥にありといふなる名取川なきなとりてはくるしかりけり

渡りぬる身にこそありける名とり川人の淵せと思ひけるかな

なき名立つ身のきる物はぬれ衣いくかさねとぞ限らざりける

しつのをに掛けて留めよ大方はたが立そめしなきなならねば

我が屋にも君がきるなるぬれ衣をよにも嵐の風も吹かなむ

同じ名を立つとしたゝばぬれ衣きてを慰むうらぶるゝまて

おりたゝぬほどばかりをや名取川渡らぬ人もなにならなくに

夢ならであふこと難き君ゆゑに我も立つ名をたゞにやは聞く

あぢきなく名をのみたてゝ唐衣身にもならさでやまむとや君

君をわれいくたの浦のいく度かうき名を立てと思ひし物を

なきたむる涙の川のうきぬなはくるしや人にあはで立なは

君といへば何かなき名のをしからむよそへて聞くも嬉しき物を

うつくしと思ひし妹を夢に見ておきてさぐるになきぞ悲しき

たのむべき我だにこゝろつらからば深き山にも入らむとぞおもふ　（雜々の歌部）

この最後の歌は、諸國の歌の中で歌仙歌集本には、『たにご』（丹後）が缺けて、「丹後國不見如何」と注した書物もあるのだが、類從本（圖書寮本第一も）には此歌が載つてゐる。勝手に補充したものか、歌仙歌集本で脱落せしめたものか不明である。

歌仙家集本柿本集を一讀した時、右の如くに群書類從本を參照したほかに、宮內省圖書寮御藏の二本をも參照することを得た。その一つ（圖書寮本第一と假に云ふ）は、歌仙家集本系統のものであり、他の一つ（圖書寮本第二と假に云ふ）は、群書類從本系統のものである。

【圖書寮本第一】。圖書寮本第一は、歌仙家集本系統のものであるが、大體は歌仙家集と順序も等しいが、終の方の畿內五箇國の歌等は缺如して居り、その他にも缺如してゐるのがある。順序の違ふのは、例へば一〇八番が一〇七番になり、一三二番が一三〇番になり、一六八番が一六七番になつてゐる如きであり、缺如は、例へば二四番、二五番、四二番、四九番、五〇番、五六番、五七番等をはじめ三十二三首と、畿內五箇國の歌等で、また圖書寮本第一にあつて、歌仙家集本に無いのもある、例へば、「秋霧のたなびくをのゝはぎの花いまやはるらんいまだあかなくに」（一〇四番の次）の如きである。その一々は一首一首の部に記して置いた。それから、歌の違つたのも可なりある。その數例を云へば、

あき山のもみぢおしなみまどひぬる妹ををしむと山ぢくらしつ　（歌仙家集）

あき山のもみぢをしげみまどひぬる妹をもとむと山ぢくらしつ　（図書寮本第一）

かみ山のいはねのたまにある我をしらぬか妹がまちつゝませる　（歌仙家集）

かゑ山のいはねしまけるわれをかもしらずて妹がまちてらむかも　（図書寮本第一）

住吉の岸を田にはりまきし稲の刈るほどまでもあはぬ君かな　（歌仙家集）

住吉の岸を田にほりまきし稲かるまで妹があはぬなりけり　（図書寮本第一）

右のごとくで、図書寮本第一の方が萬葉集の歌に近いのがあり、或は反對のもある。そのことは一首一首のところに記入して置いた。

【図書寮本第二】　次に、図書寮本第二は、殆ど群書類従本と同じく、類従本はこの本を本としたのであらうと想像し得るものである。ただ、順序が少しく違ふところがあり、例へば、類従本の番號でいへば、八一番が八三番の次に入り、九一番と九二番がかはり、一二〇番が一二三番の次に入り、一七五番と一七六番とがかはり、三八一番が三七三番の次に、三九四番が三四四番の次に入つてゐる如くである。なほ、一〇八番の下の句、「秋の海のうらの秋萩すゝきおもほゆ」を缺如し、一一〇番の初句、「秋の花」が、「萩の花」となつて居たりする程度であり、「これしきはけなきもの」を

こよひたゞひさしかるべくあふべきものを」といふのが、二九四番に載つてゐる。

【鷹司家傳本】。なほ、私は鷹司家傳本といふ寫本をも參照することを得た。卷末に、「本云、花園左府うへの自筆云々 右近衞大將在判」以上「眞親自筆奥書、自院卿書達之由被仰下以件本光事寫之、色々色紙在薄青羅表紙、右大將ハ前相國云々。建長四年六月九日書之翌日相具貫之集遣云々。御料紙内隱色紙也。阿門眞親」以上「弘安四年秋比書之」以上右三通りの識語がある。なほ表紙裏に、「鷹司二代目基忠公。元祖兼平公男、文永五年關白、弘安八年太政大臣、正和二年七月七日薨、六十七。號同光院」とある。これはおぼえ書であらう。この寫本を假に、鷹司本と名づけて置いた。此寫本は、歌仙家集本系統の如くであるが、順序が不同である。歌仙本の一七〇番が一番、一七一番が二番、一六四番が三番になつてゐる如くである。また歌の數も少い。ただ歌仙家集本に無いものも入つてゐる、例へば次の如きものである。

やましなのこはだの森にうまはあれどかちよりぞくる君をおもへば

このをかにくさかるわらはしかなかりそありつつも君がきまさんみまくさにせむ

かすが山くもゐはなれてとほけれど家はおもはず君をこそおもへ

私は、柿本集の、「國々の名」を詠んだ歌は、後の人の恣に作つたものだといふことが分かるが、

圖書寮本第一には、この部分缺如してゐるので、この本にはどうかと思つたのであつたが、やはり缺如してゐない。たゞ詞書と歌に小さい差別があるほかに、國名は漢字で書いたのが多い。それ等の一々は一首一首のところに書しるして置いた。

二

【公任選柿本集】公任の三十六人撰、柿本集（圖書寮本）には次の十首が載つてゐる。

昨日こそ年はくれしか春霞かすがの山に早立ちにけり　（家仙歌集本に無く、其他本・赤人集にある）

明日からは若菜摘まむと片岡のあしたの原は今日ぞ燒くめる

梅の花それとも見えず久方の天ぎる雪のなべて降れれば

郭公なくや五月の短か夜も一人しぬれば明しかねつも

あすかがは紅葉ば流るかつらぎの山の秋風ふきぞしくらし　（新古今集に人丸、家持集にある）

ほのぼのとあかしの浦の朝霧に嶋がくれ行く船をしぞ思ふ

頼めつゝ來ぬ夜あまたになりぬれば待たじと思ふぞ待にまされる

足引の島のおのしだりおのながながし夜を一人かもねむ

わぎもこがねむたれ髪を猿澤の池のたまもと見るぞかなしき

もののふの八十氏川の早き瀨に漾ふ浪の寄邊知らずも

右の十首が眞に公任が選んだ歌だかどうかといふことは甚だあやしく、歌仙歌集本柿本集に無いものが二首もあるといふのは、その疑問を濃厚ならしめるし、誤寫など多くて、傳本の善くないことを示して居る。

三

【萬葉集】。柿本集の歌は、大部分はその原歌を萬葉集中に見出し得るのであるが、今それを卷別にすれば次の如くである。番號は萬葉の國歌大觀の番號である。(ノ或本歌)

卷一、21 30 37 40 41 42

卷二、132 133 134 137 140 144 168 169 170 195 197 200 201 208 209 211 212 214 216 219 221 222 223

卷三、255 256′ 264

卷四、496 500 502

卷七、1068 1092 1097 1102 1118 1247 1255 1258 1269 1271 1298 1342 1348 1351 1352 1371 1377 1399

卷八、1515

卷九、1685 1710

卷十、1914 1981 1983 1984 1987 1988 1990 1992 1993 1994 1995 2018 2037 2038 2040 2042 2043 2044 2055 2056 2063 2076 2077 2078 2079 2080 2083 2084 2085 2086 2093 2099 2100 2104 2105 2110 2111 2112 2114 2115 2117 2119 2126 2127 2128 2132 2134 2146 2148 2157 2158 2159 2160 2162 2163 2164 2168 2171 2172 2174 2175 2182 2183 2186 2193 2194 2196 2204 2218 2220 2221 2224 2225 2227 2229 2230 2231 2232 2235 2236 2237 2240 2244 2246 2248 2252 2258 2262 2267 2273 2276 2277 2282 2286 2294 2299 2300 2309 2315 2318 2321 2325 2326 2328 2331 2333 2345 2349 2350

卷十一、2366 2370 2372 2376 2389 2390 2391 2401 2416 2422 2432 2434 2453 2458 2461 2464 2465 2482

2502 2506 2513 2578 2583 2588 2604 2620 2640 2643 2648 2649 2650 2651 2652 2658 2663 2704 2745 2802′ 巻十二 2884 2904 2991 3002 3012 3064 巻十五、3610 3611 3657 3666 巻十七、3924 巻十九、4200

右の如くであるが、右の萬葉の歌は、人麿作又は人麿歌集出といふのではなく、他の人の歌が混入してゐる。人麿、三二首(外に、一七一〇・三六一〇は左注に或云人麿歌、合すれば三四首)。人麿歌集出、三一首(外に、二二一五は或云三方沙彌、一六八五は題詞間人宿禰左注人麿歌集、これを合すれば三三首)。古歌集二首。天武天皇一首、但馬皇女一首。長忌寸意吉麻呂一首、内藏忌寸縄麿一首、碁檀越一首、依羅娘子一首、作者不詳一四〇首、(外に左注に或云人麿歌とある一七一〇、三六一〇)。

【古今集】　萬葉集に無くて、古今集にあるものは次の如きものである。

うめの花それとも見えずひさ方のあまぎる雪のなべてふれゝば　(冬、讀人不知)

わが宿のいけの藤なみ咲きにけり山ほとゝぎすいつか來なかむ　(夏、讀人不知)

たつた川もみぢ葉ながる神なびのみ室の山にしぐれ降るらし　(秋下、讀人不知)

あはぬ夜のふる白雪とつもりなば我さへともに消ぬべきものを　(戀一、讀人不知)

風ふけば浪うつきしの松なれやねにあらはれてなきぬべらなり　(戀三、讀人不知)

ほのぼのとあかしの浦の朝霧に島がくれ往く船をしぞ思ふ　(羇旅、讀人不知)

陸奥にありといふなる名取川なき名とりては苦しかりけり　(戀三、忠岑)

初の六首は、いづれも歌仙家集本柿本集では下卷の方にのみあるものである。そして、大體古今集の歌の左注の、「この歌はある人のいはく柿本人麿が歌なり」といふのを參考として拔出したものである。最後の一首は類從本のみにあるものである。

【古今六帖】。次に、柿本集の歌と同じ歌が、多少の相違を以て古今六帖にも載つてをり、大體百二十一首ある。今後日の便利のため、家仙家集本の歌の番號を示せば次の如くである。

1 2 3 4 5 6 7 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 26 27 28 29 33 34 35 36 39 41 44 50 51 57 61 62 63 64 65 67 70 72 73 74 83 86 88 97 103 108 109 110 112 113

117 118 119 120 121 122 123 124 129 130 135 136 139 140 142 146 148 152 153 154 157 158 159 160 161 167 168 171 172 173 174 175 176 177 178 179 180 183 184 185 186 187 189 192 193 195 196 200 202 204 205 206 209 210 212

213 214 217 218 219 220 226 227 230 233 234

右のうち、人麿と記してあるのもあり、作者不明、作者相違のものをも混じてゐる。字句は前言の如くに多少の相違があるが、その一々は後に見えてゐる。古今六帖には、國々の名を詠込んだ歌は一つも載つてゐない。これも成立年代を推測するのに一顧していい點である。

【後撰集】　後撰集に萬葉の歌が載つて、それが柿本集にもあるものは次の五首である。

來て見べき人もあらじな我が宿の梅の初花折りつくしてむ　（後撰春上、讀人不知）

來て見べき人もあらなくに我が宿の梅の初花散りぬれどよし　（柿本集、一六四番）

天の川遠き渡りはなけれども君が舟出は年にこそまて（後撰秋上、讀人不知）

天の川遠きわたりと無けれども君が舟出は年にこそ待て（柿本集、八三番）

天の川瀬々の白波高けれどただ渡り來ぬ待つに苦しみ（後撰秋上、讀人不知）

天の川淺瀬白浪高ければたゞ渡りなむ待てば術なし（柿本集、九二番）

白露のおかまく惜しき秋萩を折りては更に我やかざさむ（後撰秋中、讀人不知）

白露のおかまく惜しき秋萩の（イを）折りてみ（イつ）折りて置きやかくらむ（イらさ）（柿本集、九五番）

かりがねの鳴きつるなべに唐衣立田の山は紅葉しにけり（後撰秋下、讀人不知）

かりがねの鳴きつるなべに唐衣立田の山は色づきにけり（柿本集、一〇九番）

これを以て見れば、大體の印象として、後撰集の歌と柿本集の歌とは直接關聯が無いごとくである。即ち、柿本集は直接後撰集に據らなかつたことが分かる。なほ「天の川遠き渡りは」の歌は拾遺集にも載つてゐる

【拾遺集】。拾遺集に載つてゐて、柿本集にある歌も可なり多く、九十四首ばかりある。これも後日の參考のために、家仙家集本の歌の番號を記せば次の如くである。

1 3 5 8 12 14 16 17 19 20 22 26 27 28 30 31 35 36 44 51 52 57 59 61 62 65 69 72 74 76 83 86 114 117 124 143 144 156 157 158 159 169 170 172 173 174 175 176 177 178 180 182 183 185 187

188 189 190 191 193 194 195 197 198 199 200 201 203 204 205 206 207 208 209 210 212 213 214 215 216 218 219 220 221 222 224 225 226 227 228 229 230 231 237

最後の二三七番は、諸國を詠込んだ中の『やまと』で、拾遺集に輔相、拾遺抄に元輔とあるものである。また、一九九番は拾遺集卷九の、藤原爲賴の作で、『廉義公の家の紙繪に旅人のぬす人に逢ひたるかたかける所』といふ詞書ある二首中の二首である。

【原歌不明】。國々の歌も一首のほか、原歌不明だが、次の二首も原歌を見出し難いものである。

山里は月日もおそくうつならむ（イらなむ）こゝろのどかにもみだ葉も見む　（六六番）

しらずともまたひく（イゆ）道をしらずともすまだをゆけばゆける（イいけり）ともなし　（四八番）

これ等は原歌不明のものだが、四八番のは、五〇番の異傳の如く、『すまだ』は衾路の誤寫、『ひく道』は一本『ゆく道』、『ゆける』は一本『いけり』であるから、大體原歌を想像することだけは辛うじて出來る。その他の一つは不明である。

右の如くに、萬葉集、古今集、古今六帖、拾遺集等と柿本集が關聯のあることは明かであるが、古今集の歌は直接古今集の左註に據つて拔出したものだらうといふことは大體の見當がつくが、その他のものは直接それらのものによつたか奈何は速斷が出來ない。或は拾遺集の人麿作といふのを

抜出したことも可能であるが、拾遺集の資料となつた、萬葉集の同じ系統の寫本等に據つたものからの抜出しであることもまた可能である。恐らくその可能性が最も多いのではあるまいか。そして、上帖が先づ出來、下帖はその増補であり、國々の歌はその次の増補であるやうにおもへる。類從本は、それにまた増補し、類聚的に整理を加へたものの如くである。

四

【赤人集】。柿本集と赤人集の二集に共通のもの十八首あり、次の如くである。それに柿本・赤人・家持三集共通の六首があるから、柿本集と赤人集とに共通のものは合計二十四首あることになる。

わび(戀ひ(赤人))(イ戀ひ)つゝも今日は暮しつ霞たつ明日の春日をいかで暮さむ　（柿本集一九三番）

ほとゝぎす鳴くやさつきの短夜も獨しぬれば明かしかねつも　（一七三番）

人ことは夏野の草の(草と(赤人))(イとこ)しげくともきみ(妹(赤人))(イいも)とわれとしたゞさはりなば　（六五番）

このごろの戀のしげけむ(しけらく(赤人))(イけく)夏草のかりはつれ(はらへども(赤人))(イはらへ)ども生ひしくがごと(しげるごと(赤人))　（六七番）

かたよりに糸をこそよれ我せこが花たちばなをぬかむと思ひて　（六八番）

ほととぎす通ふかきねの卯の花のうきことあれや君がきまさぬ　（六九番）

我こそはにくくもあらめわが宿の花たちばなを見にも（は、赤人）來じとや　（七〇番）

夏草のつゆ分ころもきぬもの（きもせぬに（赤人））を（イきもせぬに）などかわが袖の（我衣手のひるよしもなき（赤人））かわくときなき　（七三番）

あまの川こぞのわたりの移ろへば河瀬ふむ（河せをゆきて（赤人））まに夜ぞふけにける　（七六番）

逢はずてはけながきものを（なくは一本、あはずしては（赤人）一本、ものは（赤人））天の川へだつる（隔てて攻や（赤人））までやわが戀ひ居らむ（一本、わが戀ひなせん（赤人））　（七八番）

ひこ星とたなばたづめとこよひ逢はむ（逢ふ（赤人））天の河瀬（かはら（赤人））に浪たつなゆめ　（七九番）

天の川霧たちわたり（わたる（赤人））ひこぼしのかぢ音きこゆ夜の更けゆけば　（八二番）

あまの川橋打ちわたす妹がいへにやまずかよはむ（いへとまらずかよへ（赤人））時またずとも　（八四番）

あまのがは瀬をはやみかもぬばたまの夜は更け行けど（夜はあけつつ（赤人））逢はぬ彦星　（八七番）

わたし守ふねはやわたせひととせにふたたび來ます（通ふ（赤人））君（一本、道（赤人））ならなくに　（八六番）

戀ふる日はけ長きものを今夜さへ（今だにも一本、今宵だに（赤人）一本、乏しむにしや（赤人））ともしかるらむ逢ふべきものを　（七五番）

たなばたのこよひ逢ひなば（あひなは（赤人））つねのごと月日へだつる（明日を隔てて年はこえなむ（赤人））年なからなむ　（八九番）

あまの川こぞのわたりはあせにけり（これやこの、一本、荒れにける（赤人））君がきまさむ（わたらむ（赤人））あと踐らなむ（道の知らなく（赤人））　（九一番）

以上を以て觀るに、赤人集の歌は、柿本集の或一部の歌、大體同一處にかたまつて居る歌がまざれ込んでゐるらしくおもはれる。そこで、柿本集も赤人集も時を同じうして撰ばれたものでなく、恐らく、赤人集の方がおくれて撰ばれたものではなからうかと思はれる。

【家持集】 柿本集と家持集とに共通してゐる歌は二十首あり（類従本のみにあるもの二首）、次の如くである。（二〇）外に柿本、赤人、家持三集に共通歌が六首あるから合計二十六首となる。

こぞ見てし秋の月夜はやどれども（照らせれども（家持））（わたれども）（てらせども）あひみしいもはいやとほざかる　（一五一番）

妹に逢ふときかたまつと久方のあまの川原に年ぞへにける　（一七四番）

春されば霞がくれに見えざりし秋萩さけり折りてかざさむ　（一七八番）

わがやどに咲ける秋萩つねならばわれ待つひとに見せましものを　（二〇一番）

手にとれば袖さへにほふをみなへしこの下つゆに散らまくも惜し　（二[illegible]三番）

秋風に山飛びこゆるかりがねのいや遠ざかり雲がくれつつ　（一六八番）

天雲のよそのかりがねきゝしよりはだれ霜ふりさむしこのよは　（[illegible]九番）

秋田苅るかりいほつくりわが居ればころも手さむし露ぞ置きける　（二三三番）

秋さればおく白露にわがやどの淺茅がうは葉色づきにけり　（[illegible]番）

かりがねの鳴きつるなべに〔鳴くなるなべに(家持)〕唐衣たつたの山は色づきにけり〔紅葉しぬらむ(家持)〕（一一二九番）

ひととせにふたたび行かぬ秋山をところにも〔心にもあらず落し(家持)〕あらで過しつるかな（一一二八番）

さを鹿の妻とふ山のをかべなるわさ田は刈らじ霜はおくとも（家持集類從本のみ）（一一三〇番）

しら露を玉につくれる〔ぬきもて(家持)〕ながつきの有明の月は見れど飽かぬかも（一一三五番）

もみぢ葉をおとす〔散らす(家持)〕しぐれの降るなべに夜さへぞ寒き獨しぬれば（一一四一番）

秋はぎの咲きける〔咲きいづる(家持)〕（イちる）野べの夕ぐれ（イ夕露）に〔夕露に(家持)〕ぬれつゝ來ませ夜は更けぬとも（一一四六番）

夜をさむみ朝戸をあけて出でぬれば〔見わたせば(家持)〕庭もはだらに雪ふりにけり〔白雪ぞふる(家持)〕（一一六一番）

やたの野にあさぢ色づくあらちやま峯のあわ雪さむくぞあるらし〔寒くなるらし(家持)〕（家持集類從本のみ）（一一五四番）

來て見べき人もあらなくにわが宿の梅の初花散りぬれど〔散りぬとも(家持)〕（イ散りぬとも）よし（一一六四番）

わがやどに咲きたる梅を月かげに〔月きよみ(家持)〕夜な夜な來つゝ〔見せむ君をこそ待て(家持)〕見む人もがな（一一六七番）

あしびきの山したかせは吹かねども君が來ぬ夜はかねて〔たもとに(家持)〕寒しも（一一六八番）

【柿本・赤人・家持三集】。柿本集、赤人集、家持集の三集に共通のものは六首ある。

かけてのみ〔人知れず(赤人)、下にのみ(家持)〕戀ふればくるしなでしこの花にさかなむ〔咲きいでよ(赤人)、咲きいでよ(家持)〕朝な朝な見む（一一七一番）

しばしばもあひ見ぬ妹を（君は（赤人）・君は（家持））あまのがは船出はやせよ夜のふけぬとき（まに（赤人）・とき（家持））（八〇番）

秋かぜの清きゆふべにあまのがはふね漕ぎわたせ（わたる（赤人）・わたせ（家持））月人をとこ（八一番）

あまのがは霧たちわたる（わたり（赤人）・のぼる（家持））たなばたの天の羽衣とご別るかも（雲の衣のあへる空かな（赤人）・雲の衣のたなびく袖かも（家持））（八五番）

秋風の吹きにし日よりあまのがは（はら（赤人））瀬にたちいでて（出で立ちて（家持））待つとつげこせ（つげこそ（家持））（九〇番）

ひこぼしのつまゝつ船の（妹よぶ舟のひく綱の（赤人）・よぶ（家持））ひきつなのたえむと（ここにたえむと（家持））什にわが（なわれ（赤人））思はなくに（九三番）

五

藤原公任の三十六人撰に據つて、誰かが銘々の家集を編んだのが三十六人集だといふのは大體間違はないだらう。公任の三十六人撰について、後拾遺集の序に、「この外、大納言公任卿三十ぢあまり六つの歌人をぬき出でゝ、これかれたへなる歌もゝちあまり五十ぢをかきいだし、又十あまり五つがひの歌を合せて世に傳へたり。（中略）見きも賤しきも、知れるも知らざるも、玉くしげあけくれの心をやるなかだちとせずといふことなし」と云つてゐる。即ち公任の十五番歌合、和漢朗詠集、九品和歌等六種の編著の中に、三十六人撰も入つてゐたのだらう。（「もゝちあまり五十ぢ」は、百

五十首であらう。

三十六人撰に本づいて誰かの編んだ三十六人集の文獻に見えた始は千載集であつて、卷十七雜歌中に、

大納言實家のもとに三十六人集をかりて返しつかはしけるなかに、故大炊御門右大臣のかきて侍りけるさうしにかきておしつけられて侍りける

太皇太后宮

この本にかき集めたる言の葉を別れし秋の形見とぞ見る

かへし　　權大納言實家

この本にかく言の葉を見る度に頼みし蔭のなきぞ悲しき

とあるのが卽ちそれである。そこで三十六人集の成つた年代は、大凡、少くとも後拾遺集の後、卽ち堀河天皇の應徳三年九月十六日以後、實家が大納言である頃までの間に出來たと推測するのはそのためである。

三十六人集については、定家の詠歌大概に、「殊可見習者、古今、伊勢物語、後撰、拾遺、三十六人集之內、殊上手歌、可懸心」とあり、頓阿の愚問賢註に、「三十六人作者集も百首に及びたる

は少なし、花山僧正、斎宮女御、本院中納言忠辨などの集、歌僅かに侍るをや』とあるが、頓阿ごろでも、（後亀山天皇文中元年歿）歌數がそんなに多くなかつたことが分かる。

なほ契沖の河社に、『みづからあつめたるもあり、後に人のあつめたるもあり、貫之集などのやうに、みづからあつめたるだに、いかなるゆゑにかあらん、おぼつかなき事まじれゝば、まして後にあつめたるには、うたがひのこらざるにあらず。又康秀、喜撰、黒主、貞文、棟梁、元方、千里、深養父、忠房等を除て、これらには及ぶまじき後の作者を入られたる事おほきも、おぼつかなしこれおほよそなり』とある如く、當時の三十六人集も既に杜撰なものであつたのに、途中で恣に増補などをして、原形をとどめなくなつたらしいといふのである。

なほ契沖の河社に、『人まろの集は、ひたふるに信じがたきものなり。むなしく萬葉集の中より、ぬししらぬ歌までぬき出たり。六十よこくを、物の名によめる歌は、ことに用るにたらぬものなり。さすがに歌のすがたは、延喜天暦の後の作者のしわざなるべし』とある。

この國々の名を物名とした中、大和を詠んだ、『おほやまと、ふるみちに我やまとはむいにしへの野中の草もしげりあひにけり』といふ歌は、第四句、『草は』で、拾遺集卷七物名、藤原輔相の作になつて居り、拾遺抄卷九雜上には元輔の作になつてゐる。そこで群書一覽の著者尾崎雅嘉は、『雅嘉按ずる

に、（中略）此六十六首元輔の哥なるを、後の人ことがきをそへて人丸集の中に收めたるなるべし。契沖拾遺抄を考へもらされたるにや、この沙汰に及ばれず」と云つてゐる。然るに、長連恒氏は、國歌大系の解題に於て、『この六十餘首は恐らく輔相の詠と見るが正しからうと思ふ。輔相は藤原弘經の男である。尊卑分脈に據れば無官、號藤六、歌人とあつて、昭宣公基經は其の伯父に當つて居る。當意卽妙にして機智に富んだ歌人であつた。宇治拾遺物語卷三、第十一話の「藤六の事」、或は袋草子卷三の獄前の菊を詠じた事は、其の間の消息を雄辯に傳へるものであらう。和歌は拾遺集にもあるが、今日、輔相集又は藤六集と稱するものが稀に存在する。歌員三十九首殆どすべては物名を詠んで居る。景樹がこの國名歌を承平より天徳頃に至る調と言つたのは、中らずと雖も遠からずであらうと思ふ。』と云つて居る。

大體さう想像しても好からうが、或は、輔相の「やまと」を詠んだ拾遺集の歌を本とし、それを動機として、輔相よりも後の誰かがほかの諸國の歌を作りあげたと想像することが出來る。類從本の、「名立ちける女の十首よみておくりける」の中に、拾遺集第九、藤原爲賴の、『なき名のみたつたの山の』から來てゐる歌があり、それを本として、いろいろに十首作りあげ、「返し十首」の方にも、拾遺集にある二首を使つてゐる、その心理を考へれば、六十六首全部を輔相の作とせずとも好いやう

な氣持もしてゐるが、これは私の想像である。

前言のごとく、類從本の、戀部終の方に、「名立ちける女の十首よみて送りける」と返歌十首とが載つてゐる。

名立ちける女の十首よみて送りける

しほ衣あまの身かとぞ思ひけるうきよにふればきぬ人もなし
なき名のみいはれの池のみぎはかなよにも嵐の風も吹かなむ
濡衣をほすさを鹿の聲聞けばいつしかひよと鳴くにぞありける
田子の浦蜑の濡衣きたれどもほしきに物はいはずもあるかな
吹く風のしたの塵にもあらなくにさも立ちやすき我なき名哉
ほしわびし人をぞ聞きしぬれ衣わが身になして今ぞかなしき
陸奥にありといふなる名取川なきなとりてはくるしかりけり
渡りぬる身にこそありける名とり川人の淵せと思ひけるかな
なき名立つ身のきる物はぬれ衣いくかさねとぞ限らざりける
しつのをに掛けて留めよ大方はたが立そめしなきならねば

右の十首の中、歌仙家集本にあるのは、『なき名のみ』だけであり、然かも、拾遺集の歌どほりに、『なき名のみ立田の山のふもとには世にもあらしの風も吹かなむ』になつてゐる。そして、拾遺集には別に讀人不知で、『なき事をいはれの池の浮きぬなは苦しき物は世にこそありけれ』といふ歌かあり、類從本の方は他の歌の句の攙入してゐることが分かる。或は意識してさう企てたのかも知れない。なほ、『陸奥にありといふなる名取川』の歌は、古今集、忠岑の歌であり、『人の淵瀬』の入つてゐる歌は、拾遺集讀人不知に、『行く水の泡ならばこそ消えかへり人の淵瀬を流れてもみめ』があり、『蜑の濡衣』は、源氏物語夕霧に、『松島の蜑の濡衣なれぬとて脱更へつてふ名をたゝめやは』がある。なほ、『吹く風の下の塵』の歌は、後撰集、伊勢の、『吹く風の下の塵にもあらなくにさもたち(散)やすき我なき名哉』と全く同じである。また、『ほしわび』の入つてゐる歌には、拾遺集、躬恒の『かりてほす山田の稲をほし詫びて守る假庵に幾夜へぬらむ』があるけれども、斯くの如く、人麿の歌と關係無きのみならず、古今集、後撰集から作者明瞭の二首を持つて來、他も類似句のある歌を持つて來て、十首連作なるかの如くに組立てたものだといふことが分かる。そして歌仙家集本にこの連作の無いのを見れば、類從本は、歌仙家集に恣に增補して行つたものだといふことも推察するに難くはない。

返し十首

我が屋にも君がきるなるぬれ衣をよにも嵐の風も吹かなむ
同じ名を立つとしたゝばぬれ衣きてを慰むうらぶるゝまで
なき名のみたつの市とは騒げどもいさまた人をうる由もなし
おりたゝぬほどばかりをや名取川渡らぬ人もなにならなくに
夢ならであふこと難き君ゆゑに我も立つ名をたゞにやは聞く
あぢきなく名をのみたてゝ唐衣身にもならさでやまむとや君
君をわれいくたの浦のいく度かうき名を立てと思ひし物を
竹のはにおちゐる露の轉びあひてぬるとはなしに立つ我名哉
なきたむる涙の川のうきぬなはくるしや人にあはで立なは
君といへば何かなき名のをしからむよそへて聞くも嬉しき物を
うつくしと思ひし妹を夢に見ておきてさぐるになきぞ悲しき

返し十首とあるが、十一首ある。また、この中に拾遺集にあり、歌仙家集本に入つてゐるのに、「なき名のみ」(一九八番)と「竹の葉に」(一九七番)がある。そして、後者は、拾遺集・歌仙歌集共に第二

句『おきゐる』となつてゐる。それから、最後の、『うつくしと思ひし妹を』の歌は、拾遺集卷二十、讀人不知の歌であつて、歌仙家集本には無い。そのほか、次の如き歌を參考しつつ作つたと想像し得るところがある。

きて歸る名をのみぞ立つ唐衣したゆふひもの心解けねば （後撰集、讀人不知）

幾度かいくたの浦に立ちかへる浪に我身を打ち濡すらむ （後撰集、讀人不知）

立歸りぬれては干ぬる汐なればいくたの浦のさがとこそみれ （後撰集、讀人不知）

泣きたむる袂こほれる今朝みれば心とけても君をおもはず （後撰集、讀人不知）

流れいづる涙の川の行末は遂にあふみの海とたのまむ （後撰集、讀人不知）

君といへば見まれ見ずまれ富士の根の珍しげなく燃ゆる我が戀 （古今集、忠行）

ふりぬとて思ひも捨てじ唐衣よそへてあやな恨もぞする （後撰集、雅正）

右の如き狀態であるから、歌仙家集本が既に、人麿以外の歌を載せてゐるのに、類從本は、二たびそれに增補し、古今、後撰、拾遺あたりの讀人不知の歌、或は作者明瞭の歌を參考して作りかへつつ、贈答連作歌の如き體裁に作りあげたものだらうと推察せられるものである。

六

次に、柿本集は諸本によつて異同のあるのは、いづれかが誤寫をしてゐるためである。

しら露のおかまく惜しき秋はぎのをりてみをりておきやかくらむ　（歌仙歌集本、九五番）

しら露のおかまく惜しき秋はぎををりのみをりておきやからさむ　（圖書寮本第一）

しら露をあかまく惜しみ秋はぎをおりのみおりてをきやかくさむ　（圖書寮本第二）

白露のおかまくをしき秋萩を折のみ折ておきやからさん　（類從本）

白露乃置卷惜秋芽子乎折耳折而置哉枯　（萬葉集卷十・二〇九九）

この歌は、歌仙歌集系統本にも、類從本系統本にもあつて、萬葉集の原歌も分かるものであるが、各本同一ではない。つまり傳寫されてゐるあひだに、斯くのごとくに違つて來たものである。さういふ事實を示さうとしてこの一首を選んだが、若し後世このうちから一つに整理しようとするならば、圖書寮本第一、類從本に據らねばならぬこととなる。

わびつつも今日は暮しつ霞立つあすの春日をいかで暮さむ　（歌仙歌集本、一九三番）

こひつつも今日は暮しつ霞立つあすの春日をいかで暮さむ　（圖書寮本第二）

こひつつも今日は暮しつ霞立つあすの春日をいかで暮さむ（類従本）

こひつつも今日は暮しつ霞立つあすの春日をいかで暮さむ（拾遺集）

戀乍毛今日者暮都霞立明日之春日乎如何將晩（萬葉集卷十・一九一四）

はじめ歌仙歌集の『わびつつも』をば、當時の萬葉の或る一つの訓に據つたものかともおもつたが、同じ系統の圖書寮本第一には、明かに、『こひつつも』とあるところを見ると、これは傳寫のあひだに誤つたので、最初の柿本集のは、『こひつつも』であつただらうと考へて間違が無い。かういふのも若し一つに整理するのであつたら、『こひつつも』と極めるのだが、今はただ有りの儘に記すにとどめるのである。

時雨のみめにはふれゝばまきの葉もあらそひかねて紅葉しにけり（歌仙歌集本、一八一番）

時雨の雨まなくしふればまきの葉もあらそひかねてうつろひにけり（圖書寮本第一）

時雨のあめまなくしふればまきの葉もあらそひかねていろづきにけり（類従本）

四具禮能雨無間之零者眞木葉毛爭不勝而色付爾家里（萬葉集卷十・二一九六）

斯くの如くだが、かう比較して見ると、歌仙歌集中の、『時雨のみめにはふれゝば』といふのは確かに誤寫である。結句の、『紅葉しにけり』もほかに根據が無いとすると、筆寫のあひだに都合で恣

に變へたもののやうである。圖書寮本第一の、『うつろひにけり』も、古鈔本の訓に無いからこれも勝手に變へたものと看做せば、どうしても、『色づきにけり』とせねばならぬところである。

たが宿の梅の花ぞもひさかたの清き月夜にのこらざりけり　（歌仙歌集本、一六二番）

たが宿のうめの花かもひさかたの清き月夜にここら散りたる　（圖書寮本第一）

たが宿の梅の花ぞもひさかたの清き月夜にここだ散りくる　（類從本）

誰苑之梅花毛久堅之淸月夜爾幾許散來（タガソノノウメノハナゾモヒサカタノキヨキツクヨニココダチリクル）　（萬葉集卷十・二三二五）

萬葉の、『梅花毛』は、舊訓ウメノハナソモ。古寫本（元）ウメノハナカモ。圖書寮本第一ウメノハナカモ。『幾許散』は、舊訓ココラチリクル。古寫本中（類）ココタフリクル。代匠記ココダチリクル。圖書寮本第一の、『梅の花かも』は元曆校本に等しく、『ここら散りたる』は舊訓に近いから、古い訓に根據を置いてゐる。歌仙歌集の、『のこらざりけり』は恣に變へたものと見える。類從本が一番よいが、圖書寮本が或は原本に近いともおもふ。

言にいでていはばゆゆしみ山川の瀧つ心をせきぞかねつる　（歌仙歌集本、一八四番）

言にいでていはばゆゆしも朝顏の匂ひひらけぬ戀もする哉　（類從本）

萬葉集卷十一（二四三二）に、言出云忌忌山川之當都心塞耐在。結句、舊訓セキゾカネタル。古寫

本中（嘉・類・古）セキゾカネツルがあるから、歌仙歌集本は大體萬葉に據つたことの推測が出來るが、類從本の方はどうして、かういふ風になつたか、推測も出來ない有様にある。そこで類從本には二たび一本所載歌中に一八四番と同じ歌を收めた。

長月を君に戀ひつつ生けらずば咲きて散りにし花ならましを（歌仙歌集本、一五五番）

長き夜を君に戀ひつつ生けらずば咲きて散りにし花ならましを（類從本）

この場合は、萬葉の原歌は、『長夜乎』（卷十。二二八二）であるから、類從本の方が正しいのである。また、圖書寮本第一には第四句、『咲きて散りぬる』となつてゐるが、これが原歌が、『落西』だから、『散りにし』と訓むのが順當で、『散りぬる』は誤寫といふことになる。

かりがねの初聲ならで咲きて散る宿の秋萩見にこわがせこ（歌仙歌集本、一五三番）

雁金の初聲ききて咲き出たる野べの秋萩見にこわがせこ（類從本）

鴈鳴之始音聞而開出有屋前之秋芽子見來吾世古（萬葉集卷十・二二七六）

第二句の、『初聲ききて』とある類從本の方が萬葉に同じで、第三句、『咲きでたる』も類從本の方が正しい。然るに、第四句の、『野べの秋萩』になると、寧ろ歌仙歌集の方が原歌に近いのであるから、兩本が一部分づつ原歌に同じだといふことになるのである。そして圖書寮本第一では、『初聲き

きて』とあるから、『ならて』の誤寫なることは確かだが、『咲きて散る』は勝手に變へたもののやうである。

なにすとか君をいとはむ秋萩のその初花の戀しきものを（歌仙歌集本、一五二番）

なにすとか妹をいとはむ秋萩のその初花のうれしきものを（類從本）

何爲等加佶乎將厭秋芽子乃其始花之歡寸物乎（萬葉集卷十・二二七三）

これを見ると、歌仙歌集本（圖書寮本第二）の方が萬葉と同じのところもあり、類從本（圖書寮本第二）の方が萬葉と同じところもある。傳寫の間に一部分づつ變化してゐる有樣がこれて分かるのである。類從本の『妹を』は誤寫か或は恣に變へたものである。

このよひはさよ更けぬらしかりがねの聞ゆる空に月たちわたる（歌仙歌集本、一三二番）

このよひはさよ更けぬらしかりがねの聞ゆる空に月わたる見ゆ（圖書寮本第一）

このよらはさ夜更けぬらしかりがねの聞ゆる空に月さえわたる（圖書寮本第二）

このよらはさ夜更けぬらしかりがねの聞ゆる空ゆ月わたるみゆ（類從本）

此夜等者沙夜深去良之鴈鳴乃所聞空從月立渡（萬葉集卷十・二二二四）

から並べて見ると、歌仙家集本が一番萬葉の原歌に近いことになる。圖書寮本第一・類從本の結

句は誤寫であらうし、圖書寮本第二の結句は恣に變へたものであらう。それにも拘らず、圖書寮本第二・類從本初句の、『このよらは』が萬葉どほりであるから、相交錯してゐるのである。

かりがねの鳴きつるなべにからごろも立田の山は色づきにけり（歌仙歌集本、一二九番）
かりがねの來鳴きし日よりからごろも立田の山は色づきにけり（圖書寮本第一）
かりがねを聞きつるなべに高松ののゝうへの草はもみぢはじまる（圖書寮本第二）
かりがねを聞きつるなべに高松ののゝうへ草は色づきにけり（類從本）
かりがねの鳴くなるなべにからごろも立田の山は紅葉しにけり（古今六帖）
鴈鳴乃來鳴之共韓衣裁田之山者黄好有（萬葉集卷十・二一九四）

かうして見ると、萬葉集の原歌に同じなのは一つもなく、少しづつ違つてゐる。『黄好有』を「色づきにけり」と訓めば圖書寮本第一が一番原歌に似るといふことになる。

秋萩の咲きける野べの夕ぐれにぬれつゝ來ませ夜は更けぬとも（歌仙歌集本、一四六番）
秋萩の咲きちる野べの夕霧にぬれてをいませさ夜はふくとも（圖書寮本第一）
秋萩の咲きちる野べの夕露にぬれつつ來ませ夜は更けぬとも（類從本）
秋芽子之開散野邊之暮露爾沾乍來益夜者深去鞆（萬葉集卷十・二二五二）

これで見ると類從本のが萬葉集の歌と同じだから、どれか一つに極める場合には類從本のを採用するといふことになる。

以上は大體を示したに過ぎぬけれども、誤寫といふ事實が意外に多いといふことが分かる。なほ一首一首のくはしいことは後に載せる各論の部にゆづる。

七

既に記したごとく、柿本集は單に萬葉集のみでなく、その他の歌集の歌をも取入れられてゐるが、次にその趣をなほ一應分析することとする。一首一首のくはしい事は後段の柿本集各論の部に讓り、此處にはその一端を示すにとどめるのである。

梅の花それとも見えず久方のあまぎる雪のなべて降れれば（歌仙歌集本、一七一番）

古今集卷六に題しらず、讀人不知として載り、「この歌はある人のいはく柿本人麿が歌なり」と注してあるが、それに據つたものであらう。萬葉卷八（一四二六）、赤人の歌に、吾勢子爾令見常念之梅花其十方不所見雪乃零有者といふのがあるけれども、初句が違つて居る。

わがやどの池の藤なみ咲きにけり山時鳥いまや（圖書寮本第一・第二・類從本、いつか）來鳴かむ（歌仙歌集本、七一番）

この歌は、萬葉集には類歌が無いのに、古今集卷三に、題しらず、讀人不知、結句『いつか來鳴かむ』として載り、『この歌、ある人のいはく、柿本人麿がなり』と注してある。即ち、柿本集の此歌は、古今集の歌に本づいてゐることが分かるのである。

あはぬよのふる白雪と積りなば我さへ共に消ぬべきものを（歌仙歌集本、一七九番）

古今集卷十三、題不知、讀人不知。左注に、『この歌はある人のいはく柿本人麿が歌なり』とある。萬葉集には類歌がない。

風吹けば浪立つ（圖書寮本第一・第二、浪うつ）岸の松なれやねに現はれてなきぬべらなり（歌仙歌集本、一八五番）

古今集卷十三、題しらず、讀人しらず、第二句『浪うつ岸の』、左注『この歌は或人のいはく、柿本人麿がなり』に據つたものであらう。萬葉集には類歌が見つからない。

ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれゆく船をしぞ思ふ（歌仙歌集本、二一七番）

古今集卷九、題しらず、讀人不知、『この歌はある人のいはく柿本人麿がなり』といふ左注がある。萬葉集に類歌が無い。

たつた川もみぢ葉流る神なびのみむろの山に時雨降るらし（歌仙歌集本、一七八番）

古今集卷五に、題しらず、讀人不知としてあり、古今六帖、拾遺集にも載つた。萬葉集に類歌は

無い。

　ますらをのうつし心も我はなし夜晝わかず戀ひしわたれば（歌仙歌集本、一九二番）

この歌は、歌仙歌集本 圖書寮本第一、類從本（圖書寮本第二）、鷹司本共に同一であるが、萬葉集（卷十・二三七六）の、「夜晝不云」が「夜晝わかず」といふ訓が無く、この歌が古今六帖にかく載つてゐるところを見ると、六帖に據つたかともおもふがどうであらうか。

　なき名のみたつの市とは騷げどもいさ又人をうる由もなし（歌仙歌集本、一九八番）

この歌は、諸本皆同一で、拾遺集卷十二、題しらず、人麿として載つて居り、萬葉集に類似の歌が見當らない。拾遺集はどういふ系統の萬葉集に據つたか不明であるが、柿本集は同一系統の萬葉に據つたか、或は直接拾遺集に據つたかいづれかであらう。併し、拾遺集の爲賴・輔相等の歌が入つてゐるところを見れば、直接拾遺集に據つたと考へる方が穩當である。

　いはみなるたかまの山の木の間よりわがふる袖をいも見けむかも（歌仙歌集本、一番）

この歌は人麿の歌で、結句は、「妹見つらむか」（卷二・一三二）で、袖中抄にもさうなつてゐるのに、拾遺集卷十九にはこのとほりにあるから、柿本集は直接萬葉集に據らずに、拾遺集に據つたことが分かる。

いはしろの野中に立てる結び松心もとけずむかしおもへば　（歌仙歌集本、三番）

これは拾遺集卷十九に人麿として載つてゐるが、萬葉では長忌寸意吉麿の歌（卷二・一四四）であるところを見ると、直接拾遺集に據つたことが分かる。

明日よりは（類從本からは）若菜摘まむと片岡の朝の原はけふぞ燒くめる　（歌仙歌集本、一六九番）

從明日者春菜將採跡標之野爾昨日毛今日毛雪波布利管　（萬葉集卷八・一四二七）

下の句はどうしても萬葉の諸古寫本に見つからないが、拾遺集卷一には人丸として斯く載つてゐるから、柿本集の此歌は、拾遺集あたりに據つたものであらうといふことは大體考察することが出來る。

たごの浦の底さへ匂ふ藤浪をかざして往かむ見ぬ人のため　（歌仙歌集本、一七二番）

秋風の日ごとに吹けば我宿の岡の木の葉も色づきにけり　（歌仙歌集本、一七六番）

あしびきの山下とよみゆく水の時ぞともなく戀ふる我身か　（歌仙歌集本、一八〇番）

一七二番の歌は萬葉集（卷十九・四二〇〇）では、内藏忌寸繩麿であるから、拾遺集で人麿作としたのに據つたことが分かる。一七六番は、萬葉集（卷十・二一九三）では讀人不知であるから、拾遺集の人麿作に據つたものか。一八〇番は、萬葉集（卷十一・二七〇四）から來てゐるが、結句は、拾遺集『こひ

わたるかな」、圖書寮本第一「こひわたるかな」であるから、拾遺集に據つたといふ可能性が多い。

青柳のかつらぎ山にゐる雲の立ちても居ても君をこそ思へ　（歌仙歌集本、一八二番）

あしひきのかつらぎ山にゐる雲の立ちても居ても君をこそ思へ　（圖書寮本第一）

あしびきのかつらぎ山にゐる雲の立ちてもゐても妹をしぞ思ふ　（圖書寮本第二。類從本）

足曳のかつらぎ山にゐる雲の立ちてもゐても君をこそ思へ　（拾遺集）

春楊　葛山　發雲　立座　妹念（ハルヤナギカツラキヤマニタツクモノタチテモヰテモイモヲシゾオモフ）　（萬葉集卷十一・二四五三）

萬葉集の初句、古寫本中アヲヤギノ（嘉・細）と訓んだのがあり、なほ、漢字の左にアヲヤギノ（西・温・京・矢）と書いたのがある。然らば柿本集歌仙歌集本は、萬葉集に據つたかといふに、結句の「君をこそ思へ」は拾遺集に據つてゐる。次に、圖書寮本第二、類從本の結句は、「妹をしぞ思ふ」で、萬葉集に據つたかとおもふと、初句は、「あしびきの」で、寧ろ拾遺集系統である。斯くの如くに、互に交錯してゐるのである。併し、歌仙歌集本系統と考へられる、圖書寮本第一が拾遺集と同じであるところを見ると、初句だけ變化してゐる、歌仙歌集本は、やはり拾遺集に據つたものと推考することもまた可能だと思ふのである。或は拾遺集の據つた萬葉集と同じ系統の萬葉集に據つたといふ方が好いかも知れない。

みなそこに生ふる玉藻のうち靡き心をよせて戀ふる此ごろ　（歌仙歌集本、一八三番）

みなそこに生ふる玉藻のうち靡き心をよせて戀ふるころかな　（類從本）

みなそこに生ふる玉藻のうち靡き心をよせて戀ふるころかな　（拾遺集）

水底　生玉藻打靡　心依　戀　比日　（萬葉集卷十一・二四八二）

歌仙歌集本（圖書寮本第一同じ）は結句は萬葉集と同じく、類從本（圖書寮本第二同じ）は結句は拾遺集と同じである。この關係が交錯してゐて一樣ではないが、圖書寮本第一及び歌仙歌集本は、直接萬葉集に據つたか、或は一たび拾遺集に據つたかはつきりしないのである。

渡し守船はや渡せひととせにふたたび來ます君ならなくに　（歌仙歌集本、八六番）

渡し守はや船寄せよひととせにふたたび來ます君ならなくに　（拾遺集卷十七）

これは萬葉卷十（二〇七七）の、渡守舟早渡世に據つたものだから、拾遺集に據つたのでないことが分かる。即ち直接萬葉集に據つた例である。

たまゆらに昨日の暮に見し物を今日のあしたに問ふべき（類從本、こふべき）ものか　（歌仙歌集本、二〇二番）

玉響　昨夕　見物今　朝可戀物　（萬葉集卷十一・二三九一）

これは、萬葉集に原歌があつて拾遺集にない。即ち直接萬葉集に據つた明かな證據である。

秋の夜の月かも君は雲隱れしばしも見ねばここら戀ひしき　（歌仙歌集本、一五六番）

秋夜之月疑意君者雲隱須臾不見者幾許戀敷　（萬葉集卷十・二二九九）

この萬葉の訓は新訓萬葉に據つたが、『須臾』は舊訓及古寫本シバシモ。『幾許』も、舊訓及古寫本ココラで、ココダは代匠記の訓である。しかし此歌は拾遺集にも人麿作としてこの儘載つてゐるから、或は拾遺集に據つたかも知れない。

さを鹿のいる野の薄はつ尾ばないつしかいもが手枕にせむ　（歌仙歌集本、一五四番）

左小牡鹿之入野乃爲酢寸初尾花何時加妹之手將枕　（萬葉集卷十・二二七七）

この萬葉の訓は新訓萬葉集に據つたけれども、『入野』は舊訓及び古寫本イルノであり、四五句も舊訓及び古寫本イツシカイモガ・タマクラニセムであるから、そのあたりの訓に據つたものだといふことが分かる。イリノは考の訓、イヅレノトキカ・イモガテマカムは代匠記の訓である。この歌は拾遺集にないから、直接萬葉集に據つたことが分かる。以上の如き直接萬葉集に據つた例は多く、各論の方でそれを示して置いたし、前項に萬葉集の國歌大觀の番號を示して置いたから、それによつて檢出することもまた容易である。

八

柿本集の大部分が、萬葉集の歌に直接據つたことは動かすべからざる事實であるが、その萬葉集は現在分かつてゐる古寫本のうち、どの系統に屬する萬葉集であつただらうか。この事は一概には云はれないとおもふが、まづ神田本系統のものに據つた形跡があるやうである。今次にその數例を示すこととする。

秋田かるひたの庵にしぐれ降りわが袖ぬれぬほす人もなし（歌仙歌集本、一三九番）
秋田苅客乃廬入爾四具禮零我袖沾干人無二（萬葉集卷十・二二三五）

第二句、『客乃廬入爾』であるから、ヒタノとなるわけはないが、神田本にはヒタノイホリニとなつてゐる。

たまぼこの君が使のたをりたる此秋萩は見れど飽かぬかも（歌仙歌集本、一〇〇番）
玉梓公之使乃手折來有此秋芽子者雖見不飽鹿裳（萬葉集卷十・二一一一）

この初句、『たまぼこの』はどうしてかうなつたか、これは神田本・元暦校本にタマボコノとあるに據つたものである。

さを鹿の妻とふ山の岡べなるわさ田は刈らじ霜はおくとも（歌仙歌集本、一三〇番）

左小牡鹿之妻喚山之岳邊在早田者不苅霜者雖零（萬葉集巻十・二二二〇）

萬葉集の第二句、「妻喚山之」は舊訓ツマコブヤマノであるが、神田本にはツマトフヤマノとあり、結句、「霜者雖零」は、古寫本中（元・類・神）シモハオクトモと訓じてゐるのがある。卽ち柿本集の此歌は、それらの古寫本に據つただらうと想像することが出來る。

戀ひしくば形見にせむと吾背子が植ゑし秋萩花咲きにけり（歌仙歌集本、一〇五番）

戀しくばかたみにせよと吾背子が植ゑし秋萩花咲きにけり（類従本）

萬葉集（巻十・二一一九）は「形見爾爲與登」であるが、神田本にはカタミニセントの訓がある。そこで歌仙歌集本はその系統のものに據つたものか、或は、恣に分かり易きに従つたものか、一概にいふことが出來ないが、少くも歌仙歌集の歌は神田本系統の萬葉集に據つただらうと想像することが出來る。

なほあらじことなし草にいふことをきゝてしあらば嬉しからまし（歌仙歌集本、二五番）

默然不有跡事之名種爾云言乎聞知良久波少可者有來（萬葉集巻七・一二五八）

からで、原歌とその形態が類似してゐるが、何に據つたか不明であつたが、神田本には、第一二句

を、『なほあらじとことなしぐさに』と訓んでゐる。

手にとれば袖さへにほふ女郎花この下つゆに散らまくも惜し（歌仙歌集本、一〇三番）

手にとれば袖さへにほふ女郎花木下つゆに散らまく惜しみ（類從本）

右の結句の差につき萬葉集（卷十・二一一五）の原文は、『散卷惜』で、舊訓チラマクヲシモ。神田本チラマクモヲシ。類聚古集チラマクヲシミ。京大本チラマクオシミ等がある。これで二本の系統が大體區別せられるやうに思ふのであるが、必ずしもさうではなからうか否か。

足曳の山より聞けばさをしかの妻よぶ聲をきかましものを（歌仙歌集本、一一二番）

足引の山ならませばさをしかの妻よぶ聲をきかましものを（類從本）

第二句、萬葉集（卷十・二一四八）の原文は、『山從來世波』で、舊訓ヤマヨリキセバ。古寫本中、神田本のみ、ヤマヨリマセバである。さうすれば類從本の方が神田本系統の萬葉集に據つたやうにも見えるが、或は類從本の方は全くの誤寫だかも知れない。兎に角書留め置くのである。

もののふの八十うぢ川のあじろ木にいさよふ浪のよるべ知らずも（歌仙歌集本、二一一番）

圖書寮本第一には、『ただよふ浪の』とあり、神田本には、『ただよふ浪のよるべしらずも』とあるらしい。

但し、全部神田本に據つてはゐず、寛永流布本舊訓に同じいのが幾つかある。或は、神田本に從はないのもあり（一〇六番、ハナチリニケリ）、或は類聚古集の訓と同じのもあり（九〇番、マツトツゲコセ）、或は元暦校本に同じいのもあり（九一番、アセニケリ）、必ずしも神田本だけによつて律することが出來ないけれども、さういふ様子を感じたので書留め置くこととした。

九

以上をかいつまんでいへば次の如くになるだらう。

柿本集は、公任の選んだ三十六人を本として、誰かが三十六人集といふものを作つた、その一つであるだらう。

內容は人麿の歌と人麿歌集出の歌のみでなく、萬葉集でも天武天皇の御製はじめ數人の作と、讀人不知の歌とを混じてゐる。古今集の讀人不知の歌で、「この歌はある人のいはく柿本人麿が歌なり」といふ左注のある六首が入つて居り、また、拾遺集に載つた藤原爲賴、藤原輔相（または元輔）の歌も入り、その他は作者不明が多く入つてゐる。柿本集には、歌仙歌集本（圖書寮本第一）と、群書類從本（圖書寮本第二）と二つの系統があり、歌仙歌集本の方が古く、類從本は後に恣に增補した

ものの如くである。歌仙歌集本でも、上帖が先づ出來て、下帖がそれに增補したものであらう。をはりにある諸國の歌六十六七首は、前言の輔相の歌が一首入つてをり、他は作者不明だから、或は輔相(または元輔)等の作つたものではなからうかと想像せられる。柿本集の成立は後拾遺集の後遠くない頃だらうと考へられてゐる。文獻に見えたのは千載集の太皇太后宮の御歌の詞書がはじめてある。

柿本集の歌は、萬葉集の歌から直接取つたものが一番多いらしく、その萬葉集は神田本系統に屬するものではなかつただらうかとおもへる樣子がある。併し成立は數次にわたつてゐるから、必ずしも一本のみに據つたのではなからう。萬葉集のほかに、古今集に據つたもの、古今六帖に據つたもの、拾遺集に據つたもの等の歌がある。

柿本集は萬葉校合の發達した時にあつて、もはや價値の無いものだが、三十六人集の一つとして、尊重せられた時代があり、作歌稽古上にも利益を與へたものと謂ふことが出來る。さういふ意味で常に一顧すべきものである。

十

この集が作歌稽古上參考せられても、その當時の歌言葉に適するやうに按配しつつ採用せられて、純粹の萬葉調といふものはその儘は採用せられてゐない。人麿は歌聖として尊敬せられてゐても、その人麿の歌といふものは、この程度のものとして受納れられてゐたものである。

ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれ行く船をしぞ思ふ

この歌をば人麿の歌と信じきつて、そしてそれを學んだ歌人も幾人か居たであらう。試に、藤原公任の撰といはれる、「九品和歌」に、上品上として、この「ほのぼのと」の歌が載り、「これは言葉妙にして、あまりに心さへあるなり」とさへ說明せられて居るものである。また、この歌と一處に、「春たつといふ許りにやみよし野の山も霞みて今朝は見ゆらむ」といふ壬生忠岑の歌が、やはり上品上の歌として置かれてゐるから、大體の目安とするところが分かるのである。さうであるから、縱ひ萬葉の言葉を取るにしても、名詞とか動詞とかいふものを部分的に取るに過ぎなかつた。例へば、俊賴の散木奇歌集の、「きぎす鳴くすだのに君がくら据ゑて朝踏ますらむいざ行きて見む」といふ歌の、「朝踏ますらむ」は、萬葉卷一(四)の、玉刻春、內乃大野爾、馬數而、朝布麻須等六、其草深野に本づき、「さくらあさのをふの浦波たちかへり見れども飽かぬ山梨の花」は、卷十一(二六八七)の、櫻麻乃、苧原之下草、露有者、令明而射去、母者雖知に本づいてゐる。そのやうに部分的

の採用であつた。併し、さういふ部分的の採用でも採用しないよりも好いのであつて、さういふ氣運が遂に實朝の歌の如き萬葉調を見得るやうになつたのである。さういふ意味に於て、柿本集の如きも亦棄て難いものと解釋すべきであらう。（昭和十一年四月）

參考文獻

阿闍梨契沖　河社（契沖全集第八卷）

香川景樹　三十六人集解略（桂園遺稿下卷）

尾崎雅嘉　群書一覽

佐佐木信綱　柿本集解題（和歌叢書三十六人集大正三年）

長連恒　柿本集解題（國歌大系）

山岸德平　平安時代の文學と萬葉集（萬葉集講座第四卷）

武智雅一　柿本集に就いて（立命館文學第三卷第四號）

〇

いはみの國よりきける人に

1　いはみなるたかまの山の木の間よりわがふる袖をいも見けむかも

詞書、流布一本には、「きける時に」。圖書寮本第一には、「いはみのくにから來たる女に」。圖書寮本第二及び類從本には、「いはみにて京をおもひやりて」。鷹司本には、「石見國にありける女のきたりけるに」とある。この歌は拾遺集卷十九の歌と全く同じであるが、拾遺集の歌の詞書には、「いはみに侍りける女のまうで來りけるに」とある。「たかまの山」は、拾遺集も同樣であるが、圖書寮本第一、第二、類從本、鷹司本等皆、「たかつの山」であり、六帖にも、「石見のやたかつの山の木の間より我が袖振るを妹見つらむや」とあるし、袖中抄にも、「石見ノヤ高角(タカツ)山ノコノマヨリワカフルソテヲイモミツラムカ」とあつて、皆タカツノヤマである。またタカマは萬葉集卷七（一二

三七）に、葛城乃高間草野があるのみで他の卷には無い。そこで、拾遺集で誤りそれを踏襲したものと思へるが、他本が皆タカツノであるのは注意すべき事である。この歌は、萬葉集卷二、柿本朝臣人麿從石見國別妻上來時歌二首幷短歌中（一三二）の、石見乃也高角山之木際從我振袖乎妹見都良武香と、（一三四）の、石見爾有高角山乃木間從文吾袂振乎妹見監鴨とに本づいてゐる。

○

2 秋山に散るもみぢばの暫くも散りな亂れそ妹があたりみむ

萬葉集卷二（一三七）、やはり人麿上來時の歌に、秋山爾落黃葉須臾者勿散亂曾妹之當將見（一云、知里勿亂曾）がある。そして古寫本中（神・細）にはシバラクモ、（元・金・類・細）にはチリナミダレソになつて居る。六帖には第二句以下、『落つるもみぢ葉暫くもいりな亂れそ』。圖書寮本第一、鷹司本はこの流布本に同じく、圖書寮本第二及び類從本は、初句、『秋風に』、第四句、『散りなみだりそ』、類從本は更に、結句、『君があたりみむ』となつて居る。

○

3　いはしろの野中に立てる結び松心もとけずむかしおもへば

拾遺集巻十四及び巻十九にも斯く載つてゐる。萬葉集巻二（一四四）、長忌寸意吉麿見結松哀咽歌に、磐代乃野中爾立有結松情毛不解古所念があり、結句、舊訓ムカシオモヘバ。古寫本の多くもさうである。そこで此歌は萬葉集の歌の紛れこんだのに相違ないが、人麿と關係なきものである。圖書寮本第一、第二、類從本これに同じい。鷹司本、結句、『むかしおもほゆ』。六帖には、結句、『むかしをぞおもふ』。

○

4　紫に匂へるいもがかくしあらば人妻ゆゑにわれ戀ひめやも

萬葉集巻一（二一）、皇太子答御歌に、紫草能爾保敝類妹乎爾苦久有者人嬬故爾吾戀目八方がある。即ち、天武天皇（大海人皇子）が額田王に答へられた御歌であるが、どうして柿本集に紛れこましめたものか、萬葉の歌を材料にして興味本位に作つたものか、そして、『憎くあらば』が當時の心持に合はぬので、『かくしあらば』としたものか。いづれにしても人麿とは關係は無い。圖書寮本第

一、『人つまゆへにわれこひめやは』。同第二、『ゆへにわがこひめやは』。類従本、『一（人つまイ）ちとゆゑにわかこひめやは』。鷹司本此歌缺く。六帖には、第二句、『いもをにくくあらば』となつてゐる。

○

5　み熊野の浦の濱木綿百重なる心は思へどただにあはぬかも

拾遺集卷十一にも六帖にも斯く載つてゐる。圖書寮本第一、第二、類従本同樣。鷹司本、結句、『あはぬかな』。萬葉集卷四、柿本朝臣人麻呂歌四首中（四九六）に、三熊野之浦乃濱木綿百重成心者雖念直不相鴨がある。そして第三句は、舊訓モモヘナル。古寫本の多くもさうであつて、代匠記初稿本で、モモヘナスの一訓を試み、諸家それに從ふに至つたのだから、柿本集は舊い訓に據つたことがわかる。

○

6　神風の伊勢の濱荻をりふせてたびねかすらむあらき濱邊に

流布本、初句、『秋風の』。萬葉集卷四（五〇〇）、碁檀越往伊勢國時留妻作歌一首に、神風之伊勢乃

濱荻折伏客宿也將爲荒濱邊爾があるが、此は無論人麿の歌ではない。併し、その次に直ぐ柿本朝臣人麻呂歌三首があつて、その一首が柿本集に載つてゐるから、不注意にして紛れたのかも知れない。萬葉のこの歌、初句、舊訓カミカゼノ。略解カンカゼノ。圖書寮本第一、初句、『神風と』、第四句、『たびねやすらん』。圖書寮本第二、類從本、詞書、『旅の歌、伊勢のみゆきの時』、初句、『神風や』、第四句、『たびねやすらん』。類從本、第三句、『折敷て』。鷹司本に此歌缺く。この歌は、六帖にも新古今集卷十にも讀人不知として載り、六帖、初句、『かみかぜや』、第四句、『旅寢やすらむ』。新古今、第四句、『旅寢やすらむ』となつてゐる。

○

7 夏野行くをじかの角の束の間もわすれず思ふ妹がこころを

圖書寮本第一、第四句、『わすれずぞおもふ』。圖書寮本第二、類從本、第四句、『忘れずおもへ』。鷹司本此歌缺。萬葉集卷四(五〇二)に、人麿作として、夏野去小牡鹿之角乃束間毛妹之心乎忘而念哉がある。六帖に、『夏野ゆく牡鹿の角のつかのまも見れば戀しき君にもあるかな』。新古今集卷十五に、『夏野ゆく牡鹿の角のつかのまも忘れず思へ妹がこころを』として載つてゐる。いづれも下の

句を變化せしめてゐるのは當時の氣持に合はなかつたからであらう。

〇

8 朝寢髮われはけづらじうつくしき人の手枕ふれてしものを

拾遺集卷十四にも同樣に載つてゐる。萬葉集卷十一(二五七八)に、朝宿髮吾者不梳愛君之手枕觸義之鬼尾がある。此は讀人不知の歌であるのを人麿作としたもので、實は人麿とは關係は無い。

圖書寮本第一、第二、類從本、鷹司本同樣。

〇

9 夕されば君來まさむと待ちし夜の名殘ぞ今もいねがてにする

此歌は新勅撰集卷十四に柿本人丸として載つてゐるのはこれに本づいたものとも思ふが、萬葉集卷十一(二五八八)に、夕去者公來座跡待夜之名凝衣今宿不勝爲があり、讀人不知の歌である。圖書寮本第一、第二、類從本同樣。鷹司本此歌缺。

〇

10 おもひつつ音には泣くとも著く人の知るべくなげきすな君

萬葉集卷十一(二六〇四)、讀人不知の歌に、念出而哭者雖泣灼然人之可知嘆爲勿謹がある。結句、舊訓及び古寫本訓ナゲキスナユメ、第三句、嘉曆本イチジルク。圖書寮本第一、第三句、『いちじろく』、結句、『なげきすなゆめ』。鷹司本、初句、『おもひいでて』。圖書寮本第二、類從本、戀部の終に近くあり、初句、『おもひ出て』、結句、『なげきすなゆめ』。六帖には、初句、『おもひいでて』、第三句、『いちじろく』、結句、『なげきすなゆめ』とある。

〇

11 解衣の思ひ亂れてこふれどもなど汝がゆゑといふ人もなし

萬葉集卷十一(二六二〇)、讀人不知の歌に、解衣之思亂而雖戀何如汝之故跡問人毛無があり、第四句、古寫本中(嘉・京)ナドナガユヘトといふ訓がある。萬葉集の結句、『問ふ人』が、『いふ人』になつてゐる。然るに圖書寮本第一には、『なとなかゆへとといふ人なし』とあるから流布本の『いふ』は途中からの變化であらう。圖書寮本第一の『とふ人なし』は『も』字を脱した。圖書寮本第

二、類従本、第四・五句、『なぞ何ゆへ(ゑ)ととふ人もなき』。鷹司本此歌缺。六帖には、『なぞ何故と問ふ人もなし』とある。

○

12 梓弓引きみ引かずみこずはこずこばこそはなぞ外(よそ)にこそ見め

流布本、第四句、『こばこそをなぞ』。萬葉集卷十一(二六四〇)、讀人不知に、梓弓引見弛見不來者不來來者來其乎奈何不來者來者其乎がある。第二句、古寫本中(嘉・類・古・細)ヒキミヒカズミ。圖書寮本第一には、『こはこそ人をこすはこはしを』とあるから、いづれも訓がむづかしかつたので斯く諸訓があつたのであらう。圖書寮本第二、類従本此歌に同じ。鷹司本、第四句、『こばこそもなど』。六帖に、きの女郎として、第四句、『こばこそをなど』、拾遺集卷十八に、題しらず、柿本人麿として、第四句、『こばこそなほぞ』となつてゐる。此歌、それらの訓に據つたものであらう。

○

13 玉桙(たまほこ)の道行(みちゆ)き疲れいなむしろしきても人を見るよしもがな

圖書寮本第一、第二、類從本同樣。鷹司本此歌缺。新勅撰集卷十四に人丸作として入る。萬葉集卷十一(二六四三)、讀人不知に、玉戈之道行疲伊奈武思侶敷而毛君乎將見因母鴨がある。袖中抄・釋日本紀に、萬葉集の如く載り、六帖・和歌色葉集に、『君を見むよしもがな』として載つてゐる。

○

14 とにかくに物は思はず飛驒たくみうつ墨繩のただひと筋に

圖書寮本第一、結句、『一すじに』、同第二、『一すぢに』、類從本、『一すじに』。鷹司本此に同。拾遺集卷十五にかく載り、六帖には、『言ひし言はば物は思はじ飛驒人のうつ墨繩の唯一道に』とある。此等は、萬葉集卷十一(二六四八)に、云云 物者不念斐太人乃打墨繩之直一道二とあるに本づいて居る。此は讀人不知の歌である。萬葉集の古寫本中(嘉・類・古・細)トニカクニ、(類)ヒダタクミの訓があり、また結句は舊訓及び多くの古寫本タダヒトスヂニとなつてゐる。

○

15 足曳の山田守るをの置く蚊火の下焦れつつわが戀ふらくは

萬葉集卷十一(二六四九)、讀人不知の歌に、足日木之山田守翁置蚊火之下粉枯耳余戀居久がある。圖書寮本第一に、『したこがれのみわがこひをらく』とあつて、萬葉の下の句に同樣であるのは注意すべきである。六帖には、下の句、『したこがれのみわが戀ひをらむ』。圖書寮本第二、類從本、第二句、『山田もる庵に』。鷹司本此歌缺。新古今集卷十一に載り、第二句、『山田もる庵に』となつてゐる。萬葉、『山田守翁』は舊訓ヤマタモルヲノであるから、其に據つたものであらう。そして新古今は類從本系統の柿本集に據つたものであらうか。

○

16 杉板もてふける板間の合はざらばいかにせむとかあひみ初めけむ

一本、結句、『わかれそめけむ』。一本、『わがねそめけむ』。圖書寮本第一、第二、初句、『杉いたもて』とある。類從本、『杉板もて』。拾遺集卷十二に、結句、『わがねそめけむ』として載り、六帖には、下の句、『いかにせよとてわかねそめけむ』となつてゐる。萬葉集卷十一(二六五〇)、讀人不知に、十寸板持蓋流板目乃不令相者如何爲跡可吾宿始兼がある。第二・三句、舊訓フケルイタマノ・アハザラバ。初句、舊訓ソギイタモテ。古寫本中(嘉・古・細)スギイタモテ、(類)スギタモテと訓

んだのもあるから其訓が此に傳はつたのである。鷹司本もやはり初句、『すぎたもて』である。

○

17 難波人葦火たくやはすすたれど己が妻こそとこめづらなれ

拾遺集卷十四にかく載つた。流布本一本、第三句、『すきたれど』、圖書寮本第一、第二、類從本、鷹司本、『すゝたれど』。六帖に、上句、『難波女の蘆火たく屋はすしたれど』とある。萬葉集卷十一(二六五一)、讀人不知に、難波人葦火燎屋之酢四手雖有己妻許増常目頰次吉がある。舊訓ススタレドであるから此に傳はつてゐる。神田本にはススタレドとあり、スの右にシィと記入がある。第二句、類聚古集アシビタクヤハとある。

○

18 妹が髪うつをささのの放れ駒たはれにけらしあはぬ思へば

六帖に、第二句、『あげをささのの』となつてゐる。圖書寮本第一、第二句、『あげさゝはのの』。圖書寮本第二、類從本、第二句、『あげをささのの』、第四句、『こかれにけらし』。鷹司本此歌缺。

萬葉集卷十一（二六五二）、讀人不知に、妹之髮上小竹葉野之放駒蕩去家良思不合思者があり、舊訓アゲサ、バノ、、類聚古集ウヘハサ、ハノ、となつてゐる。柿本集流布本の『うつをささのの』は、『うへをささのの』の誤讀であらうか。なほ萬葉の結句、舊訓アハヌオモヘバであり、京都大學本、『蕩去』の左に赭くタハレと記してある。

○

19 天雲のやへ雲がくれ鳴る神の音にのみやはききわたるべき

拾遺集卷十一にかくあり、六帖に結句、『ききわたりなむ』としてある。萬葉集卷十一（二六五八）、讀人不知に、天雲之八重雲隱鳴神之音耳爾八方聞度南がある。第四句は、舊本及び多くの古寫本に音爾耳八方とあり、和歌童蒙抄も同じく、嘉曆本・類聚古集はヲトニノミヤハと訓んでゐる。圖書寮本第一には、結句、『ききわたりなむ』とあるところを見れば、流布本及び拾遺集のは如何なる徑路を取つた變化であらうか。圖書寮本第二、類從本、結句、『こひわたりなむ』。鷹司本、結句、『ききわたりなむ』。

○

さみの郎女あひわかれ侍りけるときの

20 思ふなと君はいへども逢ふ事をいつと知りてかわが戀ひざらむ

流布本一本、第二句、『人はいへども』。圖書寮本第一には詞書、『をむなのあひわかれけるとき』。圖書寮本第二、類從本、詞書が無い。鷹司本此歌缺。拾遺集卷十二に、題しらず人麿として載り、六帖に、第二・三句、『妹は言へども逢はむとき』として載つてゐる。此は萬葉集卷二(一四〇)、柿本朝臣人麿妻依羅娘子與人麿相別歌一首、勿念跡君者雖言相時何時跡知而加吾不戀有牟に本づいてゐる。『依羅娘子』を、『さみの郎女』としてゐる。萬葉、『勿念跡』は、舊訓オモフナトであり、『雖言』は、舊訓イフトモであるが、古寫本中(元・金・神)イヘドモと訓んだのがある。

○

近江よりのぼりて宇治川のほとりにて

21 もののふの八十うぢ川のあじろ木にいさよふ浪のよるべ知らずも

圖書寮本第一に、詞書、『近江よりのぼるうぢかはのほとりにてよめる』、第四・五句、『ただよふ

浪のよるべしらずも』になつてゐる。圖書寮本第一、類從本、第四・五句、『いさよふ浪の行衞しらずも』。類從本、詞書、『近江よりのぼるに宇治川のほとりにてよめる』。鷹司本此歌缺。六帖に、結句、『よるべ知らずも』として載り、新古今集卷十七に、題しらず、結句、『ゆくへ知らずも』として載つてゐる。此は萬葉集卷三(二六四)、柿本朝臣人麻呂從近江國上來時至宇治河邊作歌一首、物乃部能八十氏河乃阿白木爾不知代經浪乃去邊白不母に本づいてゐる。萬葉古寫本中、神田本は『ただよふ浪のよるへ知らずも』と訓んだらしく、また、袖中抄には、『イサヨフナミノヨルヘシラスモ』。和歌童蒙抄には、『タヽヨフナミノユクヘシラスモ』になつて居る。

○

22 我背子をきませの山と人はいへど山の名ならし君もきまさぬ

流布本一本、結句、『君もきまさず』。圖書寮本第一、鷹司本、第四・五句、『きみもきまさぬやまの名ならし』。圖書寮本第二、類從本、『君がきまさぬ山の名ならし』。拾遺集卷十三に載り、題しらず人麿、下の句、『君もきまさぬ山の名ならし』になつてゐる。又六帖には、石河郎女の歌として、第二句、『こませの山と』、第四・五句、『君もきませぬ山の名ならし』になつてゐる。萬葉集

卷七(一〇九七)、讀人不知に、吾勢子乎乞許世山登人者雖云君毛不來益山之名爾有之があり、第四句、舊訓キミモキマサヌ。結句、元曆本ヤマノナナラシとある。

○

かはを

23 大君がみかさの山を帶にするほそたに川のおとのさやけさ

流布本一本、第二句、『みかきの山を』。萬葉集卷七、詠河中(一一〇二)に、大王之御笠山之帶爾爲流細谷川之音乃淸也がある。此は讀人不知にある。第二句、古葉略類聚鈔にはミカサノヤマヲとある。六帖に、黑主の作として、第一・二・三句、『まかねふくきびの中山帶にせる』となつてゐるのは古今集卷二十にある讀人不知の歌と同じで、古今集には、『此歌は承和のおほむべのきびの國の哥』といふ注がある。圖書寮本第一、上句、『すべらぎのみかさの山のおびにせる』。圖書寮本第二、類從本、山の部にあり、初句、『大君の』、第三句、『帶にせる』。類從本、第二句、『みかさの山の』。鷹司本無題。

○

24 つき草に衣ぞ染むる君が爲色どりごろもすらむとおもひて

萬葉集卷七（一二五五）、臨時、讀人不知に、月草爾衣曾染流君之爲綵色衣將摺跡念而がある。此は古歌集に出づといふ注のあるものである。第二句、舊訓コロモゾソムル。第四句、舊訓イロトルコロモ。古寫本中（古・西・細）イロトリコロモの訓がある。結句、舊訓スラムトオモヒテ。圖書寮本第一、鷹司本、此歌缺。圖書寮本第二、類從本、第四・五句、『色のわかはのかけとおもひて』。

○

25 なほあらじことなし草にいふ事を聞きてしあらば嬉しからまし

萬葉集卷七（一二五八）、古歌集出、臨時、讀人不知に、默然不有跡事之名種爾云言乎聞知良久波少可者有來がある、第一・二句、神田本にナホアラシトコトナシクサニの訓がある。圖書寮本第一、鷹司本此歌を缺く。圖書寮本第二、類從本、『猶あへとことなし草にいふ事を聞てもしらばうれしからまし』。

○

26 山たかみ夕日がくれの淺茅原のち見む爲にしめゆはましを

六帖に、同樣に載り、拾遺集卷九に、題しらず、人麿として、第二句、『夕日かくれぬ』となつて載つてゐる。一本、第二句、『夕日かくれぬ』。萬葉集卷七（一三四二）、寄草、讀人不知、山高夕日隱奴淺茅原後見多米爾標結申尾がある。第二句、舊訓ユフヒカクレヌ。圖書寮本第一、『夕日かくれぬ淺ぢふののち見むためと』。圖書寮本第一、類從本、この歌仙流布本に同。鷹司本、此歌缺。

○

27 みしま江の玉江の芦をしめしより己がとぞ思ふ未だからねど

圖書寮本第一、第二、類從本、同樣。鷹司本、第二句、『玉江のこもを』。萬葉集卷七（一三四八）、寄草、讀人不知、三島江之玉江之薦乎從標之已我跡曾念雖未苅がある。斯く原歌が『玉江之薦乎』で、鷹司本に、『玉江のこもを』とあるのだから、もとは、『玉江のこもを』であつただらうと推することも出來る。然るに、此歌拾遺集卷十九に、題しらず、柿本人麿として載り、『玉江の芦

を』となつてゐるから、もとは拾遺集に據つたとせば、必ずしも、『玉江のこもを』であつたと解釋せずとも好いこととなる。なほ六帖には、讀人不知で、同様『玉江の芦を』として載つてゐる。

○

28 つき草に衣はすらむ朝つゆにぬれての後はうつろひぬとも

圖書寮本第二、類從本、鷹司本、同樣。圖書寮本第一、『うつろひぬとも』。一本、『あさ霧に』萬葉集卷七（一三五一）、寄草、讀人不知に、月草爾衣者將摺朝露爾所沾而後者徒去友かある。第四句、舊訓ヌレテノノチハ。代匠記精以來ヌレテノチニハとなつた。古今集卷四と、六帖とに、讀人不知、拾遺集卷八に、人麿作として載り、訓み方は皆柿本集と同樣である。

○

29 わが心ゆたのたゆたにうき蓴邊にもおきにも成りにけるかな

一本に第三句、『うきぬれば』、結句、『よらん方なし』。六帖に結句、『よりや兼ねまし』となつてゐる。萬葉集卷七（一三五二）、寄草、讀人不知に、吾情湯谷絶谷浮蓴邊毛奥毛依勝益士がある。結句、

舊訓ヨリカタマシヲ。古寫本の多くは、ヨリヤカネマシ。代匠記ヨリガテマシヲ。ヨリカツマシジは橋本博士訓である。圖書寮本第一、結句、『よりやしぬらむ』。圖書寮本第一、類從本、第三句、『こきぬれば』、結句、『よらむかたなく』『よらむかたなし』。鷹司本、此歌鈌。

○

30 久方の雨には着ぬをあやしくもわが衣手のひるときもなき

圖書寮本第一、第二、類從本、同樣。鷹司本、鈌。拾遺集卷八に、題しらず、人麿として載つてゐる。萬葉集卷七(一三七一)、寄雨、讀人不知に、久堅之雨爾波不著乎恠毛吾袖者干時無香がある。結句、古寫本等に如是の訓がない。恐らく拾遺集に據つたものであらう。

○

31 木綿かけて祈るみむろの神さびて否にはあらず人目繁みぞ

圖書寮本第一、『神さびしいむにはあらずひとめつゝみぞ』。圖書寮本第二、類從本、『神さびていむにはあはす人めおはみぞ』。鷹司本、鈌。萬葉集卷七(一三七七)、寄神、讀人不知に、木綿懸而

祭二諸乃神佐備而齋爾波不在人目多見許增。（一三七八）に、木綿懸而齋此神社可超所念可毛戀之繁爾がある。（一三七七）の舊訓、ミムロノカミサビテイムニハアラズとなつてゐる。

○

32 もゝつたひ八十の島邊にこぐ船にのりにし心わすれかねつも

流布一本、第二句、『やすのしまべに』。圖書寮本第一、『百傳ひ八十の島へにこぐ舟の』。圖書寮本第二、類從本、『もゝへなる八十の島へをこぐ舟に』。鷹司本、此歌缺。萬葉集卷七（一三九九）、寄船、讀人不知に、百傳八十之島廻乎榜船爾乘西情忘不得裳がある。

○

33 言繁き里に住まずは今朝鳴きし雁に比ひていなましものを

六帖にかく出てゐる。圖書寮本第一、同樣。同第二、類從本、初句、『ことしげに』、結句、『きなましものを』。鷹司本、此歌缺。萬葉集卷八（一五一五）、但馬皇女御歌一首（一書云子部王作）、事繁里爾不住者今朝鳴之鴈爾副而去益物乎（一云國爾不有者）がある。結句、古寫本中（類・神）イナマシモノヲの訓がある。

○

34 河の瀨に渦巻く見れば玉藻かる散亂れたるかはのふねかな

圖書寮本第一、「河のせの……はりみだれたるかはのふねかも」。圖書寮本第二、類從本、結句、「川の舟かも」。鷹司本、此歌缺。萬葉集卷九(一六八五)、泉河邊間人宿禰作歌に、河瀨激乎見者玉藻散亂而在河常鴨があり、人麿歌集出である。第二句、古寫本中(藍・壬・類・古・神)、ウヅマクミレバと訓んだのがある。舊訓タギルヲミレバ、古義タギツヲミレバである。なほ、古寫本中、初句、カハノセニ(古)、第三・四句、タマモカモチリミタレタル(藍・壬・類・神)、タマヲカモチリミタレタル(古)と訓んだのもある。拾遺集卷八に、「藻を詠める、人麿「川の瀨のうづまく見れば玉もかるちりみだれたる川の舟かも」といふのが載つてゐるから、柿本集は恐らくそれに據つたものであらう。六帖には、「川の瀨になびくを見れば玉もかも散りみだれたる川の常かも」となつてゐる。

○

よしの山にみゆきする時の

35 見れど飽かぬ吉野の山の常滑（とこなめ）にたゆる時なく又かへりみむ

圖書寮本第一、詞書、『芳野川のみゆきのうた』。第二句、『よしのゝかはの』。圖書寮本第二、類從本、上句、『みよしののあきつの河の萬代に』。類從本、結句、『又かへりこむ』。無題。そして、終の『一本所載歌』中に、上句、『見れど飽かぬ吉野の河とこなめに』として此歌を補つてゐる。鷹司本、此歌缺。六帖に、上句、『みよしののあきつの川の萬代に』として載り、拾遺集卷九、『吉野の宮にたてまつる歌、人麿』の反歌に、第二・三句、『吉野の川の流れても』、結句、『行きかへり見む』として載つてゐる。萬葉集卷一（三七）、幸于吉野宮之時柿本朝臣人麿作歌の反歌、雖見飽奴吉野乃河之常滑乃絶事無久復還見牟がある。

○

伊勢の國にみゆきする時に京にとどめられて詠める

36 おふの海に船乘すらむつまともに玉藻の裾に汐滿ちぬらむかも

一本、初句、『みをうみに』、第四句、『袂（あかもイ）のすそに』。圖書寮本第一、『伊勢國にみゆきありしとき

京にとどめられて。いせの海にふなのりすらむつまどもの玉藻のすそにしほみつらんか」。圖書寮本第二、「おみのうらに船のりすらむわぎもこが玉ものすそに鹽みつらんか」「あすの海に花の香すらむわぎもこが玉ものすそに浪やよすらん」。鷹司本、「あみの浦に舟乗すらむわぎもこがころもの裾に汐やみつらむ」。萬葉集卷一(四〇)、幸于伊勢國時留京柿本朝臣人麿作歌に、鳴呼見乃浦爾船乗爲良武𡢳嬬等之珠裳乃須十二四寶三都良武香がある。六帖に、人麿として、『をふの浦に舟乗すらん少女子が玉藻の裾に潮滿つらむか』 拾遺集卷八に、「伊勢のみゆきにまかりとまりて、人麿」として、「をふの海に舟乗すらむ我妹子が赤裳の裾に汐滿つらむか」とある。なほ、後出(五七番)、「須磨の浦に舟乗すらむ」の歌參照。

37 潮さゐにいつしの浦に漕ぐ船に妹乗るらむか荒きはまべに

圖書寮本第一、「いらしのうらに」。圖書寮本第二、「ぬるらむか」。類從本、「いつものうみにこぐ舟に妹るらんかあらき磯へに」。萬葉集卷一(四二)、前の歌の續きに、潮左爲二五十等兒乃島邊榜船荷妹乗良六鹿荒島回乎がある。この島回は舊訓シマワで、代匠記・僻案抄・考・略解・燈等皆其に

從つたが、荒木田久老が、シマミと訓み、『其證は卷二に磯前摎手回行者とありて回を美の假字に用ひたり。又四に稻日都麻浦箕乎過而など』（信濃漫錄）と云ひ、古義で贊成し、卷十七の之麻未を證とし、守部も鐘の響（六十三段）檜嫣手等にて贊成し、註疏、講義も同說で、講義は、道乃久麻尾、礒浦箕をも證例とした。併し、攷證は宣長のシマヽ說を持し、美夫君志はシマソを持してゐる。

38 たちはきのたぶさのすゑに今もかも大宮人の玉藻刈るらむ

圖書寮本第一、第二句、『たふさのさきに』。圖書寮本第二、類從本、『たちはきのたまさの末にいつしかと大宮人の玉もかるらん』。鷹司本、此歌缺。萬葉集卷一（四〇）、やはり三首中の一首、釵著手節乃埼二今日毛可母大宮人之玉藻苅良武がある。初句は舊本『劍著』で、舊訓タチハキノ。古寫本中（細）タチワキノ。『劍』は古寫本中（類・冷・文・神・西）『釵』に作つてをり、美夫君志で『釵』の誤としてクシロツクと訓んだ。それより先、僻案抄で、『釧』の誤としてクシロツクと訓んだ。第三句は、舊本、『今毛可母』となつてをり、古寫本中（京）イマモカモと訓んでゐる。

〇

石見國に女をおきてのぼりて詠める

39 笹の葉はみ山もさよに亂るらむわれは妹思ふ別れきぬれば

一本、結句、『置きて來つれば』とある。圖書寮本第一に、『石見國に女ををきてのほるとてよめる。さゝの葉にみ山もそよとみだるらんわれはいもおもふわかれきぬれば』とあり、圖書寮本第二、類從本、『さゝのはのみ山もそよにみだるめり』。鷹司本、此歌缺。萬葉集卷二(一三三)、柿本朝臣人麿從石見國別妻上來時歌二首幷短歌の短歌第二に、小竹之葉者三山毛淸爾亂友吾者妹思別來禮婆とある。元曆本、ミヤマモソヨニと訓んでゐる。新古今集卷十に、人麿作、『み山もそよに亂るなり』として載り、六帖に、人麿作、『み山もよそに別るらむ我は妹にし別れきぬれば』として載つた。

○

なみの宮のうせたるとき

40 久方の雨ふることに□□□□宮のみことのあれまくもをし

一本、第三句、『あふぎみし』とある。圖書寮本第一では、上卷の終の方、『竹の葉におきゐる露

のまろびあひて」の歌の次にあり、「ひさかたのあめを見るごとあふぎみし宮のみことのあれまくおしも」とある。萬葉集卷二（一六八）、日並皇子尊殯宮之時柿本朝臣人麿作歌一首并短歌の反歌第一に、久堅乃(ヒサカタノ)天見如久(アメミルゴトク)仰見之(アフギミシ)皇子乃(ミコノ)御門之(ミカドノ)荒卷惜毛(アレマクヲシモ)があり、新拾遺集卷十に、人麿作、「日置皇子かくれ給ひける時よみ侍りける」『ひさかたの空見るごとく』、以下萬葉と同じで採られてゐる。

圖書寮本第一には、「南の宮うせ給へるとき」といふ詞書があり、「たまゆらにきのふの暮に見し物をけふいつのまにこひしかるらむ」「かくばかりこひしきものとしらませばよそにぞ見るべくありけるものを」と二首續けてあるが、この二首は流布本には下卷に出でてゐるものである。圖書寮本第二、類從本、「ひなみのうせたまへるとき」「久堅の雨のふることとあふきみしみこのみことのあれまくをしも』。鷹司本、此歌缺。

41 茜さし日は照らせどもぬば玉の夜渡る月のかくらくをしも

（　）

萬葉集卷二（一六九）、前の反歌第二に、茜刺(アカネサス)日者(ヒハ)雖照有(テラセレド)烏玉之(ヌバタマノ)夜渡月之(ヨワタルツキノ)隱良久(カクラク)惜毛(ヲシモ)があり、第二句、古寫本中（金・類・古・神・溫）テラセドモの訓がある。圖書寮本第一には前の歌の次に、上卷の終

りに配列されてゐること同前である。「あかねさす日はてらせどぬばたまのよわたる月のかげしくらしき」となつてゐる。圖書寮本第二、鷹司本、此歌缺。類從本には、一本所載歌」中に收む。六帖には、「茜さす日は照りながら……隱らくをしも」となつて載つてゐる。

〇

あら人にいはく

42 しまみやのみかりの池の放ち鳥人目きらひて人におよばず

一本、第三句、「はま千鳥」。圖書寮本第一、鷹司本、此歌缺。圖書寮本第二、類從本、題無し。「しま宮のまかりの池のはなちどり人めをこひておきに及ばず」。萬葉集卷二（一七〇）或本歌一首に、「嶋宮勾乃池之放鳥人目爾戀而池爾不潜」とある。初句、古寫本中（金・類・神）シマミヤノの訓あり。

〇

はせのわう女おさかべの宮に奉る

43 敷妙の袖かへしてし君やたれのうちのすきを又はあはむや

ひとつにいはく、をちにすきぬと。又ある本にいはく、はつせのわう女に
奉れるなり

圖書寮本に、詞書、『伊勢王女をゝさめたてまつる。しきたえの袖かへしきみたまたれのをちのにすきぬまたはあはしや』。左注缺。圖書寮本第二、類從本、詞書、『八さ伊の女王のおさかへの御子に奉る哥』、歌、『しきたへの袖かへし君たまたれのおちのすきせるきえてあらんやは』。左注無。鷹司本、此歌缺。萬葉集卷二(一九五)、柿本朝臣人麿獻泊瀨部皇女忍坂部皇子歌一首并短歌の反歌に、敷妙乃袖易之君玉垂之越野過去亦毛將相八方がある。結句、古寫本中(類・神)アハンヤハと訓んだのがある。

○

飛鳥のわう女をさむる時に詠める

44 飛鳥川しがらみ渡しせかませば流るる水ものどけからまし

ひとつにいはく、見むと思ふや。また、見むと思ふらむ。わか大君のみなを
忘れぬ。ひとつにいはく、みな忘れずと

圖書寮本第一に、詞書、「あすかの王女をかりにおさむるによめる」。第二句、『しらなみたかし』。左注缺。圖書寮本第二、類從本、詞書、「あすかの女王をおさむる時によめる歌」。歌同じ。鷹司本、第二句、『しらなみたかし』。詞書無。拾遺集卷八に、『あすかの女王ををさむる時よめる、人麿』として、同じく載り、六帖には第二句、『棚かけて』になつてゐる。萬葉集卷二(一九七)、明日香皇女木瓱殯宮之時柿本朝臣人麿作歌一首并短歌の短歌に、明日香川四我良美渡之塞益者進留水母能杼爾賀有萬思がある。結句、古寫本中(金・類・古・神)ノドケカラマシの訓がある。

○

たけちのかみをしきのかみにかりにおさめたてまつるときいうた

45 久方のあめにしをるる君故に月日も知らで戀ひわたるらむ

流布本、『しをるる』、『月日もしらず』。圖書寮本第一、前歌につづく。詞書、「たけちのかみをしまにおさめたてまつりけるに」。第三句以下、「君によりて月日もしらずこひわたるかな」。圖書寮本第二、類從本、詞書、『ならの御かどをおさめたてまつりけるをみて』。第四・五句、「月日もしらず戀ひわたるかな」。鷹司本、缺。新古今集卷八に、『奈良の帝ををさめ奉りけるをみて、人麿』と

ここに載つてゐる。萬葉集卷二（二〇〇）、高市皇子尊城上殯宮之時柿本朝臣人麿作歌一首并短歌の短歌第一に、久堅之天所知流君故爾日月毛不知戀渡鴨がある。舊訓アメニシラルル。

○

46 しきやみの路のつつみの隱れ沼の行方も知らずこねり惑ひぬ

圖書寮本第一、『はにやすのいけのつゝみのかくれぬのゆくへもしらずとねりはまどふ』。圖書寮本第二、類從本、鷹司本、此歌缺。萬葉集卷二（二〇一）、前の續き短歌第二に、埴安乃池之堤之隱沼乃去方乎不知舍人迷惑がある。第三句、舊訓カクレヌノ。第四・五句、舊訓ユクヘヲシラズトネリハマドフで、古寫本中（金・類・古）トネリマドヒヌと訓んだのもある。

○

女の死にて後に詠める

47 秋山のもみぢをしなみまどひぬる妹ををしむと山ぢくらしつ

圖書寮本第一、詞書、『妻のしにて後によめる』。第二句、『もみぢをしげみ』、第四句、『いもをも

とむとこ」圖書寮本第二、類從本、詞書、「ためにおくれて」、第二句、「紅葉をしげみ」、第四句、「いもをもとむと」。鷹司本、此歌缺。萬葉集卷二（二〇八）、柿本朝臣人麿妻死之後泣血哀慟作歌二首并短歌の短歌第一に、秋山之黄葉乎茂迷流妹乎將求山道不知母がある。第二句、舊訓マドヒヌル。第四句、舊訓イモヲモトメム。古寫本中（古）モトムト、（京）モトムル。

48 知らずともまたひく道を知らずともすまぢを行けばゆけるともなし

しらすとも又いはく、みちしらすとも

流布一本、結句、「ゆけにともなし」。圖書寮本第一、第二句、「またゆく道を」、結句、「いけりともなし」。左注缺。圖書寮本第二、鷹司本、此歌缺。類從本、「一本所載歌」中にあり、結句、「いくたひおもほゆ」。萬葉集卷二（二一二）、右第二長歌の短歌第二に、衾道乎引手乃山爾妹乎置而山徑往者生跡毛無がある。併し著しく訛ってしまってゐるから、この歌に本づくといふことが直ちには分かり難い程であり、また、「衾道乎」云々の歌は一つ置いて次に出て來て居る。

49 もみぢ葉の散りぬる秋を玉づさの使を見ればつかひ思ほゆ

圖書寮本第一、鷹司本、此歌缺。圖書寮本第二、類從本、第二句、『ちりぬるなへに』、類從本、結句、『あひしひおもほゆ』。萬葉集卷二（二〇九）、右第一長歌の反歌第二に、黄葉之落去奈倍爾玉梓之使乎見者相日所念がある。第二句、落去を代匠記初稿本書入校本萬葉にチリヌルといふ訓あるほか、古寫本に此訓は無い。

○

50 衾道の引手の山に妹を置きて山路をゆけばいけりともなし

圖書寮本第一、第二、類從本、鷹司本、此歌缺。萬葉集卷二（二一二）、右第二長歌の短歌第二に、衾道乎引手乃山爾妹乎置而山徑往者生跡毛無があり、この方は直ちにこの歌に本づくといふことが分かる。六帖には第二・三句、『衾ぢを引き手の山に』、第四句、『山べを見れば』になつてゐる。

○

又いはく

51 こぞみてし秋の月夜は宿れどもあひ見し妹はいや遠ざかる

圖書寮本第一、詞書缺。第三句、『わたれども』。圖書寮本第二、類從本、詞書、「かへるとしの秋月おもしろきに」、第三句、「てらせども」(第二)、『照らすとも』(類從)。鷹司本、此歌缺。拾遺集巻二十、六帖、家持集に載り、いづれも第三句、『照らせども』になつてゐる。拾遺集の詞書、「妻にまかりおくれて又の年の秋月を見侍りて、人麿」。萬葉集巻二(二一一)、第二長歌の短歌第一に、去年見而之秋乃月夜者雖照相見之妹者彌年放がある。第三句、舊訓テラセドモ、考テラセレド。

52 家にいきてわがやを見れば玉ゆかのほかにおきける妹がこ枕

流布一本、第三・四句、『玉さきのほのかにをける』。圖書寮本第一、第四・五句、「ほかにおきたるいもがをまくらに」、圖書寮本第二、類從本、詞書、『めのしにたるをかなしみてよめる』。第三句、『しきたへの』、結句、「妹か手まくら」(第二)、『妹かこ枕』(類從)。鷹司本、此歌無。拾遺集巻二十

に、『妻の死に侍りて後悲びてよめる、人麿』とし、『玉笹のほかに置きたる』となつて居る。萬葉集卷二(二一六)に、家來而吾屋乎見者玉床之外向來妹木枕がある。第三句、舊訓タマユカノ。第四句、(類・神・西・細・溫・矢・京・附)ホカニムキケル。(古)ホカニムカヘルの訓がある。

○

ひきての采女身なくなる時よめる

53 あめのこがみつの日にあはむ日ぞおほのみしかば今ぞ悔しき

一本、結句、『今もくやしき』。圖書寮本第一、此歌缺。圖書寮本第二、類從本、詞書、『ひきてのうねへの身なけたる(身なけたる、類從)時の歌』とあり、圖書寮本第二には、或本、『わきもこかすゝしののへのあはむひをおほのみしかはいまそくやしき』とあり、類從本には、戀部に、『あめのこるすゝしののへのあはん日をおほのはしかは今そ戀しき』とあるのは、この歌の變化で、甚だしく亂れてゐることが分かる。ただこの二書には詞書について、『さゝ波やしかのてこらかまかり(類從)にしかはせのみちをみれはかなしも』が載つて居る。萬葉集卷二(二一九)、吉備津采女死時柿本朝臣人麿作歌一首并短歌の短歌第二に、天數凡津子之相日於保爾見敷者今叙悔と比較すれば、その變形の趣が知れる。

近江の荒れたる宮を見て

54 さゝなみのしがの辛崎行きてみれどおほみや人の船待ちかねつ

圖書寮本第一に、詞書、「近江宮のあれたるをみて」。第三句、「さきはあれど」とある。圖書寮本第二、類從本、「さゝなみや志賀のからさきさきくあれど」とある。鷹司本、詞書無。第三句、「きたれども」。下卷（三〇一番）に、「さゝ浪やしがのからさき來たれどもおほみや人の船待ちかねつ」とあるのは、重出であらう。そして鷹司本と一致してゐる。萬葉集卷一（三〇）、過近江荒都時柿本朝臣人麿作歌の反歌第一に、樂浪之思賀乃辛碕雖幸有大宮人之船麻知兼津 とある。第三句、古寫本は「サキハアレド」、「サキクアレド」、「サキクアレドモ」で、「行きてみれど」、「來たれども」等の訓は無い。

○

55 あまさかる鄙の長路を漕行けば明石のとよりやまと嶋見ゆ

流布一本、結句、「家のあたりみゆ」。圖書寮本第一、第三句、「こぎくれば」、結句、「家のあたり

見ゆ」。圖書寮本第二、類從本、第三句、『こぎくれば』。鷹司本、此歌缺。新古今集卷十に、題しらず、人麿として載り、第三句、『漕ぎくれば』となつてゐる。萬葉集卷三（二五五）、柿本朝臣人麻呂羇旅歌八首の中に、天離夷之長道從戀來者自明門倭島所見がある。第二句、舊訓ナガヂヲ。第三句、古寫本中（類・神）コギクレバ。

○

56 みこの海はよくこそあるらし漁する蜑の釣船波のうへに見ゆ

一本、第三句、『いさりせる』。圖書寮本第一に此歌缺。圖書寮本第二、類從本、『むこのうらのとまり成らし』。鷹司本、缺。玉葉集卷十五に、題しらず、人麿、『武庫の浦のとまりなるらし……波間より見ゆ』。萬葉集卷三（二五六）、右羇旅歌の一本云に、武庫乃海能舳波好有之伊射里爲流海部乃釣船浪上從所見がある。第二句、（古・細）トマリニハアラシ。結句、（細）ナミノウヘニミユ。

○

57 須磨の浦に船のりすらむをとめ子が赤裳の裾に潮みつらむ

圖書寮本第一に此歌缺。既出の萬葉集巻一（四〇）に、嗚呼見乃浦爾船乘爲良武𡢳嬬等之珠裳乃須十二四寶三都良武香があるが、これよりも寧ろ、巻十五（三六一〇）に、安胡乃宇良爾布奈能里須良牟乎等女良我安可毛能須素爾之保美都良武賀とあるのに本づいてゐるであらう。その頃、安胡の浦よりも須磨の浦が有名であるからさう直し、『少女等』を『少女子』とし、『潮みつらむか』が調子が惡いといふので、『潮やみつらむ』と直したものであらう。併し兎も角萬葉集巻十五の歌あたりをものぞいてゐることが分かる。類從本、戀部に、詞書、『伊勢のみゆきに京にまかりとまりて』として、『あすの海に花の香すらんわきちこか玉ものすそになみやよすらん』とあるのは此歌に據つたものらしいが、既に出でた（三六番）、『おふの海に船乘すらむつまともに』と重複してゐることもまた明かである。類從本には、なほ、『一本所載歌』中に、この歌を載せてゐる。拾遺集巻八に、『伊勢のみゆきにまかりとまりて。おふの海に船乘すらむ我妹子か赤裳の裾に潮みつらむか』、六帖に、『おふの浦に船乘すらむをとめ子が玉藻の裾に潮みつらむか』があること、前述の如くである。

○

58 大船にまかぢしげぬきうなちとり漕ぎでて渡る月人をとこ

一本、第二句、『まかぢのしづくに』。圖書寮本第一に此歌缺。圖書寮本第二、類從本、第三・四句、『おほかちをこきつゝわたる』。鷹司本、此歌缺。萬葉集卷十五(三六一一)、七夕歌一首、於保夫禰麻可治之自奴伎宇奈波良乎許藝弖天和多流月人乎登祜(右柿本朝臣人麿歌)に本づいてゐる。

○

近江の宮の荒れたるを見て

59 さざなみや近江の宮は名のみして霞たなびき宮木もりなし

流布本、第二句、『あふみのおほつのうらは』、結句、『えあきもいなん』。圖書寮本第一、第二句、『しがのみやこは』。圖書寮本第二、類從本、『おふつの宮は』。鷹司本、『おほつの宮は』。拾遺集卷八に、『大津の宮のあれて侍りけるを見て、人麿』として、かう載つてゐるから、此歌は恐らく其に據つたものであらうか。萬葉集には、『名のみして』、『宮木もりなし』の句のある歌は無い。そして拾遺集の歌は何に本づいたかといふに、卷一(二九)、長歌の、春草之茂生有霞立春日之霧流百磯城之大宮處見者悲毛あたりから、恣に作つたものではあるまいか。

○

讃岐のみ井のこしまにして岩の上にて死にたるくひをみて

60 妻もあらばつみてたかましさみ山のとこのおはしき過ぎぬべしやは

圖書寮本第一、詞書、「讃岐のさみの〻しまにてしにたる人をみて」。第三句以下、「さみの山のかみのおはきすきぬへしやは」。圖書寮本第二、類從本、詞書、「さぬきのさみねの山にして岩の上になくなれる人をみて」。歌、「つましあらはつみてはかましさみ山（さみの―類從）のうへのおはり（ら類從）に過ぎにけらしも」。鷹司本、此歌缺。萬葉集卷二（二二一）、讃岐狹岑島視石中死人柿本朝臣人麿作歌一首幷短歌の短歌第一、妻毛有者採而多宜麻之佐美乃山野上乃宇波疑過去計良受也がある。第三句、金澤本サミヤマノ、第四句、舊訓ノカミノウハギ。

石見の國にてなくなりぬべきをりに詠める

61 おきつ浪よるあら磯のしきたへの枕となりてなれる君かも

圖書寮本第一に、詞書、『なくなりぬべきおりいはみのくににてよめる』。第二句、『よるあら磯を』、第四句、『まくらになして』とある。圖書寮本第二、類從本は、詞書なく、直に前の歌につづいてある。第二句、『よるあらいそを』、第四句、『まくらとしても』。萬葉集卷二(二二二)、同じく短歌第二、奧波來依荒礒乎色妙乃枕等卷而奈世流君香聞があり、卷二(二二六)、丹比眞人名闕擬柿本朝臣人麿之意報歌一首、荒浪爾緣來玉乎枕爾置吾此間有跡誰將告がある。つまり歌の方は狹岑島死人のことで、詞書の方は石見で死んだときの歌になつてゐる。これは順序が誤まつたので、圖書寮本第二、類從本の方が正しい。萬葉集の第二句、舊訓ヨルアライソヲ。金澤本ヨルアライソヲ、結句、金澤本ナレルキミカモ。拾遺集卷二十に、人麿作、詞書、『讃岐のさみねの島にしていはやのなかにてなくなりたる人を見て』。第二句、『よるあら磯を』、下句、『枕とまきてなれる君かも』とあり、六帖に、人麿作、第二句、『よるあら磯を』、下句、『枕にまきて臥せる妹かな』とある。

○

62 いも山の岩ねにおける我をかも知らずて妹が待ちつつあらむ

圖書寮本第一に此歌缺。圖書寮本第二、類從本には、『石見國に有てなくなりぬへき時にのそみ

て』といふ詞書があり、第四句、『しらすといまかに』(第二)、結句、『待ちてやあらむ』とある。鷹司本、此歌缺。拾遺集卷二十、人麿作、『石見に侍りてなくなり侍りぬべき時にのぞみて』といふ詞書があつてこの歌がある。六帖には、第一・二句、『神山の岩根しまける』、結句、『待ちつつをらむ』となつてゐる。萬葉集卷二(二二三)、柿本朝臣人麿在石見國臨死時自傷作歌一首、鴨山之磐根之卷有吾乎鴨不知等妹之待乍將有がある。第四句、舊訓シラストイモガ。古寫本中(金・神・細)シラステイモガ。

○

63 かみ山の岩根のたまにある我を知らぬか妹が待ちつつませる

圖書寮本第一、『かも山のいはねにまけるわれをかもしらずていもがまちてらむかも』。圖書寮本第二、類從本、『かも山の岩ねのたかにある我をしらずて妹かまちつゝませる』。鷹司本、此歌缺。此もまた萬葉集(二二三)の歌に本づいたとおもふが、餘程變化してゐる。六帖に、『かみ山のいはね、まける我をかも知らずて妹が待ちつゝ居らむ』とあること前述の如くである。

○

64 山のかひそことも見えず白樫の枝にも葉にも雪のふれれば

下卷（一五九番）に、『あしびきのやまぢも知らずしらかしの枝もたわわに雪のふれれば』といふ歌がまた出てゐる。圖書寮本第一、第二、類從本、鷹司本、ともに『あしびきの』の方だけを載せ、その第四句が、『枝にも葉にも』になつてゐる。萬葉集卷十七（三九二四）、紀朝臣男梶應詔歌一首、山乃可比曾許登母見延受乎登都日毛昨日毛今日毛由吉能布禮禮婆があり、卷十（二三一五）、冬雜歌、足引山道不知白杜杙枝母等乎乎爾雪落者 或云枝毛多和多和（右柿本朝臣人麿之歌集出也但件一首或本云三方沙彌作がある。六帖に、『山のかひそことも見えず一昨日も昨日もけふも雪の降れれば』と『あしびきの山路も知らず白樫の枝にも葉にも雪の降れれば』と二首並んでゐる。拾遺集卷四に、題しらず、人麿として、後者がある。

以上で、柿本集上卷が終つてゐる。

○

65 人ごとは夏野の草の繁くとも君とわれとしたづさはりなば

拾遺集卷十二、人麿として載つてゐる。六帖には、作者名なく、第四句、『妹と我とし』となつてゐる。萬葉集卷十(一九八三)、寄草、讀人不知、人言者夏野乃草之繁友妹與吾攜宿者がある。萬葉古寫本中、一つも『君と吾とし』といふのは無く、又結句も元暦本・類聚古集の書入以外に、『なば』といふのは無い。然るに、和歌童蒙抄には、『ヒトゴトハナツノ、クサノシゲクトモイモトワレトシタヅサハリナバ』とあり、赤人集には、『ひとことはなつのゝくさにしげくともいもとわれとしたづさはりなば』とある。なほ圖書寮本柿本集第一には、第四句『妹とわれとし』とあるから、これは『妹と吾とし』に據る方が好いと思ふ。結句の『なば』と變化したのはどういふ徑路に由つたものかといふに、これも當時の人に理會し易かつたためであつただらう。一本第四句、『君と』に

なつてゐるのもさうであらう。圖書寮本第二、類從本、第四句、『妹とわれとし』。鷹司本、此歌缺。

○

66 山里は月日もおそくうつならむ心のどかにもみぢ葉も見む

一本、第三句、『うつらなむ』。圖書寮本第一、第三句、『うつらなむ』。圖書寮本第二、鷹司本、此歌缺。類從本、『一本所載歌』中にある。これに類似の歌は萬葉集、拾遺集等に無いやうであるから後考を俟つ。後撰集卷九に、『夢にだに見る事ぞなき年を經て心のどかにぬる夜なければ』。拾遺集卷三に、『紅葉を今日は猶みむ暮れぬとも小倉の山の名にはさはらじ』があるが、いづれもただ參考になる歌のみで、無論類似の歌ではない。

○

67 此頃のこひの繁けむ夏草の刈り果つれども生ひしくがごと

圖書寮本第一に、『こひのしげけく夏草のかりはらへども生ひしげるらん』とあり、圖書寮本第二、類從本には、『此比の戀のしけゝは夏草のかりそくれどもおひらくのごと』とある。鷹司本、此歌缺。

一本、第二句、『戀のしけらん』。又一本、第四句、『かりそくれども』とある。萬葉集卷十（一九八四）、寄草、讀人不知に、頃者之戀乃繁久夏草乃苅掃友生布如がある。結句の訓は、古寫本の多く、及び舊訓オヒシクガゴトである。第四句は舊訓カリハラフトモ。古寫本にカリソクレドモの訓があるが、カリハツレドモの訓は無い。六帖には、『このごろの戀の繁くて夏草の刈りそくれども生ひしくがごと』、赤人集には、『このごろの戀の茂らく夏草の刈り拂へども生ひ茂るごと（おもひけることと・西本願寺本）』となつてゐる。さうすれば柿本集の『刈り果つれども』は、恣に改めたもののやうにおもへる。

○

68 かたよりに糸をこそよれ我がせこが花橘をぬかむと思ひて

圖書寮本第一に、第四・五句、『□□□にはなをぬかんとおもひし』とある。圖書寮本第二、類從本 夏部にあり、結句、『ぬはむ（か類從）と思ひて』。鷹司本、此歌缺。萬葉集卷十（一九八七）、寄花、讀人不知に、片搓爾絲叫曾吾搓吾背兒之花橘乎將貫跡母日手がある。第二句、舊訓イトヲゾワガヨル。古寫本中（元・神）イトヲコソヨレの訓があるから、それに據つたものであらう。赤人集にはやはり、『花によす。片よりに絲をこそよれ我がせこが花橘をぬかむとおもひて』になつてゐる。

○

69 時鳥かよふかきねの卯の花のうきことあれや君がきまさぬ

圖書寮本第一、同樣。圖書寮本第二、類從本、夏部にあり、同樣。拾遺集卷十六に、題しらず人麿としてあり、一本、初句、『鶯の』とある。萬葉集卷十（一九八八）、寄花、讀人不知に、鶯之往來垣根乃宇能花之厭事有哉君之不來座がある。そこで初句、『鶯の』とある方は原歌に近いのであるが、萬葉集（一九九一）に、霍公鳥來鳴動崗部有が接近してゐるのでそれを取つて用ゐたのかも知れない。赤人集には、『花によす。時鳥かよふ垣根の卯の花のうきことあれや君が來まさぬ』とあるから、柿本集のと同一である。初句を『時鳥』としたのは、どちらが早いのであるか不明である。

○

70 我こそはにくくもあらめわが宿のはな橘は見にも來じとや

圖書寮本第一に、第四・五句、『はなたちばなを見にはこじとや』とある。圖書寮本第二、類從本、夏部。第四・五句、『花橘を見にはこじとや』。鷹司本、缺。萬葉集卷十（一九九〇）、寄花、讀人不知

に、吾社葉憎毛有目吾家前之花橘乎見爾波不來鳥屋がある。六帖、赤人集にも、萬葉集と同様になつてゐる。西本願寺本の赤人集には、第二句、『さくゝもあらめ』となつて居り、『このうた人丸集にあり』といふ注が附してある。

〇

71 かけてのみ戀ふれば苦し撫子の花に咲かなむ朝な朝な見む

圖書寮本第一、初句、「かけてのみ」。圖書寮本第二、類從本、戀部。此歌に同。鷹司本、缺。萬葉集卷十（一九九二）、寄花、讀人不知に、隱耳戀者苦瞿麥之花爾開出與朝旦將見がある。初句、舊訓カクシノミ、古寫本中（類・神）シタニノミ、（神別訓）カクレノミ、ヒトシレズ。第四句、舊訓ハナニサキイデヨ、古寫本中（類）ハナサキイデヨ、（神）ハナニサキテヨ、（西・温・細）ハナニサキイテヨ。結句、舊訓アサナサナミム。古寫本中（類・神）アサナ／＼ミム、（温）アサケサナミム。赤人集には、「人しれずこふれば苦し撫子の花に咲きてよあさな／＼みむ」、家持集には、「下にのみ戀ふれば苦し撫子の花に咲きいでよ朝な／＼みむ」になつてゐる。柿本集の「かけてのみ」「咲かなむ」は恣に改めたやうでもあり、或はかういふ傳本に據つたやうでもある。

○

72 よそにのみ見つつや戀ひむ紅の末摘む花の色にいでぬとも

一本、結句、『いろに出ぬと』。圖書寮本第一、此歌と同様、圖書寮本第二、結句、『いでなむ』。類從本、『出なで』。鷹司本、『いでずとも』。拾遺集卷十一に、よみ人しらずとして、第二句、『見てやは戀ひむ』、結句、『色に出でずは』とあり、六帖に、第二句、『見つつを戀ひむ』、結句、『色に出でずとも』とある。萬葉集卷十（一九九三）、寄花、讀人不知に、外耳見筒戀牟紅乃末採花乃色不出友がある。第一・二句、古寫本及び舊訓ヨソニノミ・ミツツヤコヒム。第四句、古寫本及び舊訓スヱ(エ)ツムハナノ。ウレツムハナノは略解宣長訓。結句、古寫本及び舊訓イロニイデズトモ。

○

73 なつ草の露分衣着ぬものをなどかわが袖のかわくときなき

圖書寮本第一に此歌缺。圖書寮本第二、類從本、戀部。第三・四句、『きもせぬになどわが袖の』。鷹司本、缺。新古今集卷十五に、作者人丸、第三・四句、『着もせぬになどわが袖の』として載り、

六帖に、作者を記さず、『きもせぬにわが衣手の』として載つた。萬葉集卷十（一九九四）、寄露、讀人不知に、夏草乃露別衣不著爾我衣手乃干時毛名寸がある。第三句、舊訓キモセヌニ。古寫本同訓。第四・五句、舊訓ワガコロモデノ・ヒルトキモナキ。古寫本同訓。赤人集、『夏草の露分ごろもきもせぬに我が衣手のひるよしもなき』（流布本）。『夏草のつゆわけごろもまだきぬにわがころもでにひるよしもなし』（西本願寺本）。

○

74 みな月の土さへさけて照る日にも我袖ひめや妹にあはずて

圖書寮本第一、此歌缺。圖書寮本第二、類從本、戀部。歌同。鷹司本、此歌缺。六帖に載り、同樣。拾遺集卷十三には、讀人不知として、結句、『妹にあはずして』。萬葉集卷十（一九九五）、寄日、讀人不知に、六月之地副割而照日爾毛吾袖將乾哉於君不相四手がある。第四句、舊訓ソガソデヒヌヤ、古寫本中（元・類・神・溫・矢）ソガソデヒメヤ。結句、古寫本中（類・神）イモニアハズシテ。赤人集には、「日によす。みなつきのつちさへさけてゝる日にもわが袖ひめやいもにあはずして。このうた人丸集にあり」（西本願寺本）とある。流布本には見えないやうである。

○

75 戀ふる日はけ長き物を今夜（こよひ）さへともしかるらむ逢ふべきものを

圖書寮本第一、此歌缺。類從本、第四句、『ともしかるべく』。圖書寮本第二、初句、『戀しさは』、第三・四句、『こよひただひさしかるべく』。鷹司本、缺。萬葉集卷十（二〇七九）、七夕、讀人不知に、戀日者氣長物乎今夜谷令乏應哉可相物乎がある。初句、舊訓コフルヒハ。第四句、舊訓トモシムベシヤ。赤人集には、『こひするはけながきものをこよひだにくるゝべしやはとくあけずして』（西本願寺本）。『戀ふる日はけ長きものを（いまだにも／こよひだに）乏しむべしや逢ふべきものを』（流布本、重出）とある。

○

76 天の川こその渡りの移ろへば河瀬踏むまに夜ぞふけにける

圖書寮本第一、缺。圖書寮本第二、類從本、秋部。第四句、『あさせふむまに（ふまに、類從）』。鷹司本、缺。一本、第二句、『秋の渡りの』、第四句、『淺瀬踏むまに』。萬葉集卷十（二〇一八）、七夕、柿本朝臣人麿歌集出に、天漢去歳渡代遷閉者河瀬於踏夜深去來がある。第二句、渡伐（流布本）、渡代（類・神・西・温・矢・京・無）

舊訓コソノワタリハ。古寫本中（類・元・神）コソノワタリノ。第四句、舊訓カハセヲフムニ。古寫本中（元・神）カハセフムマニ。拾遺集卷三に、柿本人麿として、『天の川こぞの渡りのうつろへば淺瀨ふむまに夜ぞ更けにける』とあり、赤人集に、「あまのがはこぞのわたりのうつろへばかはらを行くに夜ぞふけにける」（西本願寺本）。「天の川こぞの渡りの移ろへば川瀨を行きて夜ぞ更けにける」（流布本）とあり、和歌童蒙抄に、『アマノガハコゾノワタリノウツロヘバカハセフムマニヨゾタケニケル。同（万十）ニアリ』とある。

○

77 年の戀今夜つくしてあすよりは常の戀にやわがこひをせむ

圖書寮本第一、此歌無し。圖書寮本第二、類從本、秋部。第四句、「常のことにや我戀をいはん」。鷹司本、此歌缺。萬葉集卷十（二〇三七）、七夕、讀人不知に、年之戀今夜盡而明日從者常如哉吾戀居牟とある。

78 逢はずてはけ長きものを天の川隔つる迄やわがこひ居らむ

○

圖書寮本第一、此歌無し。圖書寮本第二、類從本、第四句、『へたててまたそ』。鷹司本、此歌缺。萬葉集卷十(二〇三八)、七夕、讀人不知に、不合者氣長物乎天漢隔又哉吾戀將居がある。初句、舊訓アハザルハ。古寫本中(元・類)アヒミテハ、(神)アヒミヌハ。アハナクハは代匠記精の訓である。赤人集には、『あけすぐしけながきものはあまのがは隔てゝまたやわが戀をせむ』(西本願寺本)。『あはなくはけ長きものを天の河隔てゝ又やわが戀ひをらむ』(流布本)とある。

79 彦星とたなばたつめと今宵逢はむ天の河せに浪立つなゆめ

○

圖書寮本第一、此歌無し。圖書寮本第二、此歌に同。類從本・第四句、『天河原に』。鷹司本、缺。萬葉集卷十(二〇四〇)、七夕、讀人不知に、牽牛與織女今夜相天漢門爾波立勿謹がある。第三句、舊訓及び古寫本コヨヒアハム。『天の河瀬』は改めたものであらうか。赤人集に、「彦星とたなばた

つめと今宵あふ天の河原に波たつなゆめ」となつてをり、それが續千載集卷四に、作者山邊赤人として載つてゐる。

○

80　しばしばもあひ見ぬ妹を天の川船出早せよ夜のふけぬとき

圖書寮本第一、此歌無し。圖書寮本第二、類從本に、秋部。「あはずてはけながきものを天河ふなではやせよ夜の深ぬ時に」とある。前半は誤寫であらう。萬葉集卷十（二〇四二）、七夕、讀人不知に、「數裳相不見君矣天漢舟出速爲夜不深間」がある。第二句、舊訓アヒミヌキミヲ、古寫本中（類）アヒミズキミニ、（神）アヒミヌキミニ、（京）アヒミズキミヲ。赤人集に、「しばしばもあひ見ぬ君はあまのがはふなではやせよよのふけぬときに」（西本願寺本）。「しばしばも相見ぬ君を天の河舟出はやせよ夜の更けぬまに」（流布本）とある。又、家持集に、「しるしるもあひ見ぬ君は」とある。

○

81　あきかぜのきよきゆふべに天の川船漕ぎわたせ月人をとこ

圖書寮本第一、此歌無し。圖書寮本第二、類從本、戀部の少し前にあり、初句、『神風の』。鷹司本、此歌缺。萬葉集卷十（二〇四三）、七夕、讀人不知に、秋風之清夕天漢舟榜度月人壯子がある。第四句、舊訓フネコギソタル。古寫本中（神の一訓）フネコキソタセ。赤人集に、『秋風のきよきゆふべに天の川ふねこぎわたせつきひとをとこ』（西本願寺本）。『秋風のきよき夕に天のがは舟こぎわたる月人をとこ』（流布本）とある。家持集に、やはり第四句、『ふねこぎわたせ』となつてゐる。

○

82 天の川霧たち渡りひこぼしのかぢ音きこゆ夜の更けゆけば

圖書寮本第一、此歌無し。圖書寮本第二、類從本、秋部。鷹司本、此歌缺。萬葉集卷十（二〇四四）、七夕、讀人不知に、天漢霧立度牽牛之檝音所聞夜深往がある。第二句、舊訓キリタチワタル。古寫本中（類・神）キリタチソタリ。第四句、舊訓カヂノオトキコユ。古寫本中（類）カヂオトキコユ、（神・京）カジヲトキコユ。赤人集に、『あまのがは霧たちわたるひこぼしのかぢおときこゆよのふけゆけば』（西本願寺本・流布本）とある。續後拾遺集卷四に、讀人しらずとして載つた。

○

83　天の川とほきわたりとなけれども君が船出は年にこそ待て

圖書寮本第一、第二・三句、『とほきわたりいなけれども』。圖書寮本第二、類從本、第二・三句、『わたりにあらねども』。鷹司本、此歌缺。一本、第二・三句、『遠きわたりにあらねども』。拾遺集巻三、六帖にもさうあり、作者人麿としてある。後撰集巻五には、讀人しらずとし、第二・三句、『遠きわたりはなけれども』となつてゐる。萬葉集巻十（二〇五五）七夕、讀人不知に、天河遠度者無友公之舟出者年爾社候がある。

○

84　天の川橋うちわたす妹がいへにやまず通はむ時またずとも

圖書寮本第一、第四句、『たえずかよはむ』。圖書寮本第二、類從本、第二句、『打橋渡し』。鷹司本、此歌缺。一本、第三句、『いふいかに』。萬葉集巻十（二〇五六）、七夕、讀人不知に、天河打橋度妹之家道不止通時不待友がある。第二句、舊訓ウチハシワタス。古寫本中（類・神）ウチハシワタシ。赤人集に、『あまのがはうち橋わたす妹が家とどまらずかよへ時またずとも』（西本願寺本）と

まらず通へ』（流布本）とある。

○

85 天の川霧たち渡るたなばたのあまのはごろもとひ別るかも

圖書寮本第一、第二、類從本、鷹司本、此歌缺。一本、第三句、『たなばたは』。萬葉集卷十（二〇六三）、七夕、讀人不知に、天漢霧立上棚幡乃雲衣能飄袖鴨がある。赤人集に、『天の川きりたちのぼりたなばたの雲のころものあへるそらかな』（西本願寺本）『天の川霧たちわたる七夕のくものころものかへる袖かな』（流布本）とある。家持集に、『天の川霧たちわたり七夕の雲のころものなびく袖かも』とあり、續後撰集卷五に、人丸として、『雲の衣のかへる袖かも』となつてゐる。

○

86 渡し守船はや渡せひととせにふたたび來ます君ならなくに

圖書寮本第一に、第二句、『ふねはやかくせ』、第四句、『ふたたび來べき』。圖書寮本第二、類從本、第二句、『はや舟わたせ』。なほこの前に、『渡守舟はやわたせおとよばふ聲もきかぬか梶音も

せず」を載す。鷹司本、此歌缺。六帖に、歌仙歌集本と同樣にあり、拾遺集卷十七に、題しらず、人麿としてあるが、第二句、「はや舟寄せよ」、一本、『はや舟かくせ』になつてゐる。萬葉集卷十(二〇七七)、七夕、讀人不知に、渡守舟早渡世一年爾二遍往來君爾有勿久爾がある。古寫本中、初句、(元・類・神)ワタシモリ。第四句、(元・類・神)フタタビキマス。結句、(元・神)キミナラナクニ。赤人集に、「わたしもり舟はやはたせひとことにふたたびかよふきみならなくに」(西本願寺本)。『渡守舟はやわたせ一年にふたたびかよふ君ならなくに』(流布本)とある。

87 天の川瀨を早みかもぬばたまの夜は更け行けど逢はぬ彥星

流布本、圖書寮本第一、類從本、第三句、「むばたまの」。圖書寮本第二、此歌に同。鷹司本、此歌缺。萬葉集卷十(二〇七六)、七夕、讀人不知、天漢瀨乎早鴨烏珠之夜者闌爾乍不合牽牛がある。赤人集に、「あまのかは瀨をはやみらむ、はたまのよるはあけつゝ、あはぬひこほし」(西本願寺本)。『瀨をはやみかも』(流布本)とある。

88 天の川夜はふけにつつさぬるよの年のまれらにただ一夜のみ

圖書寮本第一、同じ。圖書寮本第二、類從本、第二句、『夜はふけゆきて』、第三・四句、『さぬる夜はとしのわたりに』。鷹司本、此歌缺。萬葉集卷十（二〇七六）、七夕、讀人不知に、天漢瀨乎早鴨烏珠之夜者闌爾乍下合牽牛があり、同卷（二〇七八）に、玉葛不絕物可良佐宿者年之度爾直一夜耳がある。第三句、『佐宿者』の訓、古寫本中（元・類・神）サヌルヨハがある。六帖に、『玉かづらたえぬものからさぬるよは年のわたりにただ一夜のみ』が載り、後撰集卷五に、『玉かづらたえぬものからあら玉の年のわたりはただ一夜のみ』が載つた。

○

89 たなばたの今宵逢ひなば常のごと月日隔つる年なからなむ

圖書寮本第一、第四句、『あすをへだつる』。圖書寮本第二、類從本、第四句以下、『秋をへだつることなからなむ』。鷹司本、此歌缺。萬葉集卷十（二〇八〇）、七夕、讀人不知、織女之今夜相奈婆如常

明日乎阻而年者將長がある。結句、舊訓ナガケレ。古寫本中（元・類・西・細・溫・京）ナガケム、（神）ナカナム。赤人集に、『たなばたのこよひあかねばつねのごとまたこひてやわたさむたなばたわたせ』（西本願寺本）。『七夕の今宵あけなば常のごとあすをへだてて年は越えなむ』（流布本）とある。

つ

90 秋風の吹きにし日より天の川瀨に立出でて待つとつげこせ

圖書寮本第一、同じ。圖書寮本第二、類從本、繼部の直ぐ前にあり、第四句、『瀨にいでてたちて』（川瀨）鷹司本、此歌缺。萬葉集卷十（二〇八三）、七夕、讀人不知に、秋風乃吹西日從天漢瀨爾出立待登告許曾とある。結句、舊訓マツトツゲコソ。古寫本中（類）マツトツゲコセ。家持集に、第四句、『瀨にいでてたちて』とあり、赤人集に、『秋風のふきにし日よりあまのはらせにいでてたちてまつとつげこせ』（西本願寺本）。『たちいでてて』（流布本）とある。萬葉の連用段から續く願望のコソが、コセになつてゐる。連用段を受ける願望の助詞コソは、柿本集成立時代には既に用法が絶えてゐたので、分かり易きに就いたものであらう。

○

91 天の川こその渡りはあせにけり君が來まさむあと殘らなむ

圖書寮本第一、此歌無し。圖書寮本第二、類從本、結句、『あとの白浪』。鷹司本、此歌缺。萬葉集卷十（二・八四）、七夕、讀人不知に、天漢去年之渡湍有二家里君將來道乃不知久がある。第三句、舊訓アレニケリ。古寫本中、元暦本にはアレの右に墨を以てアセイと記してある。赤人集には、『あまのがはこそのわたせはありけるを君かきたらむみちのしらなく』（西本願寺本）、『渡りは荒れけるを』（流布本）とある。

○

92 天の河あさせ白浪高ければただわたりなむ待てばすべなし

圖書寮本第一、第三句、『たどりつつ』 圖書寮本第二、第二・三句、『せせの白浪たかければ』、類從本、『せせの白浪ふかければ』。兩本、第四句、『たたわたりしぬ』。鷹司本、此歌缺。一本、第二句以下、『せせの白波ふかければただわたりしぬまてばすべなし』とある。萬葉集卷十（二・八五）、

七夕、讀人不知に、天漢湍瀬爾白浪雖高直渡來沼待者苦三がある。第三句、舊訓タカケレド。古寫本中(神)タカケレハ。結句、舊訓マテバクルシミ。古寫本中(元)マテバクルシモ、(温)マチハクルシミ。後撰集卷五に、讀人しらずとして、『天の川せゝの白浪高けれどただわたりきぬまつに苦しみ』とあり、それと同樣のものが友則集にも載つてゐる。

(○)

93 彦星の妻待つ船のひきつなのたえむと君にわが思はなくに

圖書寮本第一に、第三句、『つなひきの』。圖書寮本第二、類從本、第二・三句、『つまよぶふねのひくつなの』。鷹司本、此歌缺。萬葉集卷十(二〇八六)、七夕、讀人不知に、牽牛之嬬喚舟之引綱乃將絶跡君乎吾念勿國がある。第三句、舊訓ヒキツナノ。元曆本ヒの右に朱でキ。京大本、引の左に赭『ヒキ』あり。赤人集に、『ひこぼしのいもよぶこゑのふきつなのたえむときみをわがおもはなくに』(西本願寺本)『よぶ舟の引綱の』(元布本)とある。家持集に、『彦星の妻よぶ舟の引綱の今にたえむと我思はなくに』とある。

○

94 妹に逢ふときみまたまつと久方の天の川原に年ぞへにける

圖書寮本第一、此歌無し。圖書寮本第二、第二句、『君かたまつと』。類從本、第一・二句、『妹にあふときかたまつと』。兩本、結句、『月ぞへにける』。鷹司本、此歌缺。萬葉集卷十(二〇九三)、長歌の反歌、讀人不知に、妹爾(イモニ)相時片待跡(アフトキカタマツト)久方乃(ヒサカタノ)天之漢(アマノカ)原爾(ハラニ)月叙(ツキゾ)經來(ヘニケル)がある。又、家持集にもある。

○

95 白露のおかまく惜しき秋萩のをりてみをりておきやかくらむ

圖書寮本第一、第三句以下、『あき萩をおりのみおりてをきやからさん』。圖書寮本第二、『白露をあかまくをしみ秋はぎをおりのみおりてをきやかくさむ』。類從本、『秋萩を折のみ折ておきやからさん』。鷹司本、缺。後撰集卷六に、讀人不知として、第三句以下、『秋萩を折りてはさらに我やかざさむ』といふのがあり、宗于集に、『白露のおかまく惜しみ秋萩の折りてはさらにおきやまさらむ』といふのがある。萬葉集卷十(二〇九九)、詠花、讀人不知に、白露乃(シラツユノ)置卷惜(オカマクヲシミ)秋芽子(アキハギ)平(チ)折耳折而(ヲリノミヲリテ)

置哉枯がある。古寫本中、第四句、（西・温）オリノミオリテ、（細）オリノミツリテ。結句、（類）オキヤカクサム、（神・温）ヲキヤカラサム。

○

96 秋の田のかりほの宿の匂ふまで咲ける秋萩見れど飽かぬかも

圖書寮本第一、第二句、『かりいほのやどの』。圖書寮本第二、類從本、此歌に同。鷹司本、此歌缺、一本、第二句、『したほのやどの』。後撰集卷六に、讀人不知として、第二句、『かりほの庵の』とある。萬葉集卷十（二一〇〇）、詠花、讀人不知に、秋田苅借廬之宿匂經及咲有秋芽子雖見不飽香聞がある。

○

97 朝顏の朝露おきて咲くといへど夕顏にこそにほひましけれ

圖書寮本第一、此歌無し。圖書寮本第二、『夕かげにこそさきかかりけれ』。類從本、初句、『朝顏は』、第四・五句、『夕影にこそ咲きかかりけれ』。鷹司本、此歌缺。一本に、第四・五句、『夕かげ

にこそ咲きかかりけれ』とある。六帖には、初句、『朝がほは』、第四・五句、『夕かげにこそ咲きまさりけれ』となつてゐる。萬葉集巻十(二一〇四)、詠花、讀人不知に、朝杲朝露負咲雖云暮陰社咲益家禮(アサガホハアサツユオヒテサクトイヘドユフカゲニコソサキマサリケレ)とある。第二句、舊訓アサツユオヒテ。古寫本中(類)アサツユオキテ。

○

98 春されば霞がくれに見えざりし秋萩咲けり折りてかざさむ

圖書寮本第一、鷹司本、此歌缺。圖書寮本第二、類從本、此歌に同。新拾遺集巻四に、題しらず、人麿として載つた。なほ、家持集に、『春くれば霞にこめてみせざりし萩咲きにけり折りてかざさむ』とある。萬葉集巻十(二一〇五)、詠花、讀人不知に、春去者霞隱不所見有師秋芽子咲折而將插頭(ハルサレバカスミガクリテミエザリシアキハギサケリヲリテカザサム)がある。第二句、舊訓カスミガクレテ。古寫本中(元・類・神)カスミニカクレ。

○

99 ひとはみな萩を秋とはいふなれど尾花がすゑを秋とはいはむ

圖書寮本第一に、第二・三句、『秋といふいなわれは』。圖書寮本第二、類從本、初句、『皆人は』、

第二・三句、「萩を秋といふいなわれは」。鷹司本、此歌缺。一本、第四句、「をばなのすゑを」。萬葉集卷十（二一一〇）、詠花、讀人不知に、人皆者芽子乎秋云縱吾等者乎花之末乎秋跡者將言がある。初句、舊訓ヒトミナハ。古寫本中（元・類）ミナヒトハ、（類或本）ヒトハミナ。第二句、舊訓ハギヲアキトイフ。古寫本中（元）ハギヲアキテフ、（京）ハギヲアキトノフ。第三句、舊訓及び多くの古寫本イナワレハ。第四句、舊訓ヲバナガスヱヲ。古寫本中（元・神）ヲバナノスヱヲ。

○

100 たまほこの君が使のたをりたるこの秋萩は見れど飽かぬかも

圖書寮本第一、第四句、「たなこのあきはぎを」。圖書寮本第二、類從本、此歌に同。鷹司本、缺。萬葉集卷十（二一一一）、詠花、讀人不知に、玉梓公之使乃手折來有此秋芽子者雖見不飽鹿裳がある。初句は古寫本中に、玉梓と注したものもあり、元暦本・神田本にはタマホコの訓があるから、柿本集のこの初句は恣に改めたのではなく、さういふ系統のものに據つたものかも知れない。第三句、舊訓タヲリケル。古寫本中（元・類・神）タヲリタル。

101 わが宿に咲ける秋萩常ならば我待つ人に見せましものを

○圖書寮本第一、同じ。圖書寮本第二、類從本、第三・四句、『あきならばわが待つ人に』。鷹司本、此歌缺。家持集に載り、第四句、『わが待つ人に』。萬葉集卷十（二一一二）、詠花、讀人不知に、吾屋前爾開有秋芽子常有者我待人爾令見猨物乎がある。

102 わが宿に植ゑて置きたる秋萩を誰かしめさし我に知らせぬ

○圖書寮本第一に、『我やどにうへおほしたる』、『我にしらせず』。圖書寮本第二、類從本、第四・五句、『たれかしめさす我に知らせで』。類從本、第二句、『うゑ生したる』。鷹司本、此歌缺。萬葉集卷十（二一一四）、詠花、讀人不知に、吾屋外爾殖生有秋芽子乎誰標刺吾爾不所知がある。結句、舊訓シラセデ。古寫本中（類）シラセズ、（神）シラレズ。

○

103 手にとれば袖さへにほふをみなへしこの下つゆに散らまくも惜し

圖書寮本第一に、第四・五句、『このしらつゆにをかまくおしみ』。圖書寮本第二、類従本、『ちらまくおしみ』に、鷹司本、此歌缺。六帖に、結句、『散らまく惜しも』とある。新續古今集卷四に、題しらず、柿本人丸として、歌仙歌集本の形のものが載つてゐる。萬葉集卷十（二一一五）、詠花、讀人不知に、手取者袖并丹覆美人部師此白露爾散卷惜があるが、結句、神田本でチラマクモヲシと訓み、類聚古集チラマクヲシミ、家持集に、初句、『手に折れば』、第四句、『この白露の』とある。

○

104 吾妹子が行合の稻の刈るときになりにけるかな萩の花咲く

圖書寮本第一に、第二句、『ゆきあひのわせを』、第四句、『なりにけらしな』、圖書寮本第二、類従本、初句、『わきもこに』、第二句、『ゆきあひのわせを』（圖）、『わさを』（類）、第四句、『なりにけらしな』（圖）、『なりにしな』（類）。新拾遺集卷十八に、題しらず、人丸として、圖書寮本第二の形のものが載つてゐる。萬葉集卷十（二一一七）、詠花、讀人不知に、𡢳嬬等行相乃速稻乎苅時成來下芽

子花咲がある。結句、舊訓ハギノハナサク。

○

105 戀ひしくば形見にせむと吾背子が植ゑし秋萩花咲きにけり

圖書寮本第一にはこの歌の前に、『あききりのたなびくをのゝはぎのはないまやはるらんいまたあかなくに』一首がある。此歌第三句、『わぎもこが』となつてゐる。圖書寮本第二、類從本、第二・三句、『かたみにせよとわがせこが』。鷹司本、此歌缺。萬葉集卷十(二一一九)、詠花、讀人不知に、戀之久者形見爾爲與登吾背子我殖之秋芽子花咲爾家里がある。第二句、舊訓カタミニセヨト。神田本カタミニセント。

○

106 秋萩は鴈にあはじといへればか聲をききては花散りにけり

圖書寮本第一、同じ。圖書寮本第二、類從本、初句、『秋萩を』、結句、『花の散らん』。鷹司本、此歌缺。一本、第四・五句、『聲をたてては花咲にけり』。萬葉集卷十(二一二六)、詠花、讀人不知に、

秋芽子者於鴫不相常言有者香一云言有可聞音乎聞而者花爾散去流かある。結句、舊訓ハナニチリヌル。古寫本中（類・神）ハナノチリヌル。

107 秋されば妹に見せむと植ゑし萩露霜置きて散りにけらしも

圖書寮本第一、第二句、「いもにせんと」。圖書寮本第二、類從本、結句、「ちりにけるかも」。鷹司本、此歌缺。續後撰集卷七に、人丸として載り、一本の結句、「散りにけるかな」となつてゐる。萬葉集卷十（二一二七）、詠花、讀人不知に、秋去者妹令視跡殖之芽子露霜負而散來毳がある。初句、舊訓アキサレバ。第四句、神田本に、負而の左にオキテの訓がある。

108 秋風に山飛びこゆるかりがねのいや遠ざかり雲がくれつつ

圖書寮本第一、二、第二句、「峯とびこゆる」。圖書寮本第二、類從本、戀部の中程にあり、此歌に同。鷹司本、缺。六帖、新古今集卷五に、人麿作として、かく載り、家持集に、第四句、「聲とほ

ざかり』として載つた。萬葉集卷十(二一二八)、詠鴈、讀人不知に、秋風爾山跡部越鴈鳴者射矢遠放雲隱筒がある。第二句、舊訓ヤマトヒコユル。諸本みなヤマトヒコユルで、ただ元暦本ヒの右にヘを書いてゐる。第四句、舊訓イヤトホサカル。古寫本中(神)イヤトヲサカリ、(温)イヤトホサカリ。結句、舊訓クモガクレツツ。

○

109 天雲のよそのかりがねききしよりはだれ霜ふり寒し今宵は

圖書寮本第一、同じ。圖書寮本第二、類從本、第二句、『よそにかりがね』、結句、『さむし此よは』。一本、第四句、『いたく霜ふり』。鷹司本、此歌缺。六帖に、作者おとくろとして、第二句、『よそにかりがね』、第四・五句、『はだれ雪ふりさえしこの夜は』となつてをり、家持集に、第二句、『よそにかりがね』、第四・五句、『あられしもふる寒きこよひか』となつてゐる。また新拾遺集卷五に、人丸として、類從本同樣に載つてゐる。萬葉集卷十(二一三二)、詠鴈、讀人不知に、天雲之外鴈鳴從聞之薄垂霜零寒此夜者がある。結句、舊訓コノヨハ。古寫本中(元・類)ココヒハ、(神)漢字の左にコヨヒハ。柿本集のこの結句はさういふ系統の訓に據つたものであらう。

110 垣根なる萩の花さく秋風の吹くなるなべにかり鳴きわたる

圖書寮本第一、第二句、「萩の花さきて」。圖書寮本第二、類從本、戀部、「かきほなる荻のはさやぎ吹風の吹なるなへに雁ぞ鳴なる」。鷹司本、此歌缺。萬葉集卷十(二一三四)、詠鴈、讀人不知に、「葦邊在荻之葉左夜藝秋風之吹來苗丹鴈鳴渡」がある。柿本集の、「垣根なる萩の花」は、「葦べなる荻の葉」を恣に改またものの如くである。「垣根」の用例は、萬葉集卷十(一九八八)に、「鶯之往來垣根乃宇能花之」があり、拾遺集卷二に、「山賤の垣根に咲ける卯の花はたが白妙の衣かけしぞ」卷三に、「什こずは誰に見せましわがやどの垣根に咲ける朝顔の花」等がある。六帖に、人丸として、「葦べなる荻の葉そよぎ秋風の吹き來るなへに雁鳴きわたる」とあり、新古今集卷五に、人麿として、「垣ほなる荻の葉そよぎ秋風の吹くなるなべに雁ぞなくなる」とある。

111 山近く家居をせればさを鹿の聲をききつついもねかねつも

圖書寮本第一、結句、『いをねかねつも』。圖書寮本第二、類從本、結句、『いねんこゝろかも』。類從本、第二句、『家をしをれば』。鷹司本、此歌缺。萬葉集卷十（二一四六）、詠鹿鳴、讀人不知に、山近家哉可居左小牡鹿乃音乎聞乍宿不勝鴨がある。『家居をせれば』は分かり易く改めたものであらう。萬葉集卷十（一八四二）に、山片就而家居爲流君があり、古今集卷一に、『野べ近く家居しをれば鶯のなくなる聲は朝な朝な聞く』。拾遺集卷二に、『この里にいかなる人か家居して山郭公絶えず聞くらむ』等がある。

○

112 あしびきの山より聞けばさをしかの妻呼ぶ聲をきかましものを

圖書寮本第一、第四句、『妻呼ぶこゑは』。圖書寮本第二、類從本、第二句、『山ならませば』。鷹司本、此歌缺。六帖に、人麻呂として、第四・五句、『妻呼ぶ聲もかつ聞かましを』となつてゐる。萬葉集卷十（二一四八）、詠鹿鳴、讀人不知に、足日木笑山從來世波左小鹿之妻呼音聞益物乎がある。第二句、舊訓ヤマヨリキセバ。神田本ヤマヨリマセバ。六帖、柿本集のは、分かり易いやうに恣に改めたものであらう。

113 夕影に鳴く茅蜩のここばくに日ごとに聞けど飽かぬ君かな

○

圖書寮本第一に、初句、『夕かけて』、第四・五句、『なけどもあかぬ君にもあるかな』。なほこの歌より直ちに、『なき名のみたつの市とは』の歌につづき、『ますかがみ』の歌で一段落をなしてゐる。圖書寮本第二、第四句以下、『日ごとになけどあかぬ君かも』。類從本、初句、『夕かけて』、第三句以下、『そくばくの日ごとに聞とあかぬ君かも』。鷹司本、此歌缺。六帖に、第二・三句『きなくひぐらしいくそばく』、結句、『あかぬ聲かな』。萬葉集卷十(二一五七)、詠蟬、讀人不知に、暮影來鳴日晩之幾許毎日聞跡不足音可聞がある。第三句、舊訓コ、ダクノ。元曆本に訓の右にイカバカリ。『ここばくに』は、萬葉集卷四(七五一)の幾許久毛。同卷(六六六)の幾許吾者。卷八(一四七五)の幾許戀流などを、ココバクモ、ココバクワレハ、ココバクコフルと訓んだ例に等しいので、これは、卷十七(三九九一)の許己婆久毛見乃佐夜氣吉加の訓に據つたのであらう。今は多くココダクと訓んでゐることと此處(二一五七)に示したごとくである。

114 秋風の寒く吹くなるわが宿の淺茅(あさぢ)がもとに日ぐらしもなく

○

圖書寮本第一は、『ますかがみ』の歌で一段落をなし、この歌から、『竹の葉におきゐる露の』の歌まで一群をなし、『ひさかたのあめを見るごと』の歌につづいてゐる。此歌第四句、『あさぢがはらに』。圖書寮本第二、類從本、第二句、『寒く吹くなべに』、第四句以下、『あさぢがすゑは色づきにけり』。鷹司本、結句、『日ぐらしぞなく』。拾遺集卷十七に、題しらず、人麿として、かく載つてゐる。萬葉集卷十(二一五八)、詠蟋蟀、讀人不知に、秋風之寒吹奈倍吾屋前之淺茅之本蟋蟀鳴毛(アキカゼノサムクフクナベワガヤドノアサヂガモトニコホロギナクモ)がある。結句、舊訓キリギリスナクモ。元暦本ヒグラシナクモ。訓の右に墨でキリギリスナクィとある。

○

115 かげ草の生ひたる宿の夕影に鳴く茅蜩(ひぐらし)はきけど飽かぬかも

圖書寮本第一、此歌無。圖書寮本第二、類從本、第三句、『夕露に』。鷹司本、此歌無。萬葉集卷十(二一五九)、詠蟋蟀、讀人不知に、影草乃生有屋外之暮陰爾鳴蟋蟀者雖聞不足可聞(カゲクサノオヒタルヤドノユフカゲニナクコホロギハキケドアカヌカモ)がある。『蟋蟀』

は傳訓キリギリス。ここには元暦本もキリギリスと訓んである。

○

116 神なびの山下とよみ行く川にかはづ鳴くなり秋といはばや

圖書寮本第一、第三句、「行く水に」、結句、「いはんとや」。圖書寮本第二、類從本、第三句、「ゆく水に」。鷹司本、此歌缺。萬葉集卷十（二一六二）、詠蝦、讀人不知に、神名火之山下動去水丹川津鳴成秋登將云鳥屋とある。

○

117 庭草に村雨ふりて日ぐらしの鳴くこゑ聞けば秋は來にけり

圖書寮本第一、結句、「秋づきにけり」。圖書寮本第二、類從本、此歌に同じ。鷹司本、此歌缺。拾遺集卷十七に、題しらず、人麿として、また六帖に、村雨と題し、讀人不知で、かく載つてゐる。萬葉集卷十（二一六〇）、詠蟋蟀、讀人不知に、庭草爾村雨落而蟋蟀之鳴音聞者秋付爾家里とある。蟋蟀は、舊訓キリギリス。元暦本ヒグラシノ、訓の右に墨でキリギリスイ。このあたりのヒグラシ

は元暦本にさうあるのだから、ただ恣に改めたものではあるまい。

○

118 草枕旅に物思ふわがきけばゆふかたかげになく日ぐらしか

圖書寮本第一、第四・五句、『ゆふかたかけてなくかはづかも』。圖書寮本第二、類從本、第三句以下、『わが聞ばゆふかげつけ（き（類））て鳴かはづかも』。鷹司本、此歌缺。一本、第四・五句、『夕かけつきてなくかはづかも』とある。六帖に載り、第三句以下、『わが聞くに夕かたかけてなくかはづかも』。萬葉集卷十（二一六三）、詠蝦、讀人不知に、草枕客爾物念吾聞者夕片設而鳴川津可聞（クサマクラタビニモノオモフワガキケバユフカタマケテナクカハヅカモ）がある。第二句、舊訓タビニモノオモフ。略解タビニモノモヒ。第四句、舊訓ユフカタマケテ。古寫本中（神一訓）ユフカタカケテ。原歌のカハヅは此處ではヒグラシとなつてゐる。

○

119 瀨を早み落ちたぎつらし白浪にかはづ鳴くなり朝夕ごとに

圖書寮本第一、第二句、『おちたぎるらし』。圖書寮本第二、類從本、春部にあり、初句、『風はや

み』。鷹司本、缺。六帖に載り、第二句、『河落ちたぎつ』。萬葉集巻十(二一六四)、詠蝦、讀人不知に、瀬乎速見落當知足白浪爾川津鳴奈里朝夕毎がある。第二句、舊訓オチタギチタル。古寫本中(元)オチタキツラシ。結句、舊訓アサヨヒコトニ。古寫本中(元・類・神・京)アサユフゴトニ。

○

120 秋萩に置けるしらつゆ朝な朝な玉とぞ見ゆる置けるしら露

圖書寮本第一、初二句、『わがやどに咲ける秋はぎ』。圖書寮本第二、類従本、第四句、『玉とこそ見れ』。鷹司本、缺。六帖に、家持として斯くある。萬葉集巻十(二一六八)、詠露、讀人不知に、冷芽子丹置白露朝朝珠年曾見流置白露がある。第四句、流布本、『珠斗曾見流』であるが、古寫本中(元・類・神)『斗』が『年』になつてゐるので、今新訓に従つてさうして置いたが、古寫本の訓は皆タマトゾミユルであるから、柿本集のは大方それによつたものであらう。

112 しら露と秋の花とをこきまぜてわくことかたきわが心かな

○

一本、第四句、『あくことかたき』。圖書寮本第一、類從本、第四句、『あくことかたき』。鷹司本、此歌に同じ。六帖、讀人不知、『しら露を秋の萩原に』とある。此歌、柿本人丸として新勅撰集卷四に入つた。萬葉集卷十（二一七一）、詠露、讀人不知に、白露與秋芽子者戀亂別事難吾情可聞がある。第二句、神田本アキノハナトハになつてゐる。

○

122 我宿の尾花おしなみ置く露に手ふれ吾妹子散らまくも惜し

圖書寮本第一、結句、『ちらまく惜しも』。圖書寮本第二、此歌に同じ。類從本、第三句、『おく露の』。鷹司本、此歌缺。六帖、讀人不知、下句、『手ふれ我が兒子散らさでも見む』とある。萬葉集卷十（二一七二）、詠露、讀人不知に、吾屋戶之麻花押靡置露爾手觸我妹兒落卷毛將見がある。第二句、舊訓オシナミ。第四句、舊訓テフレ。

○

123 このごろの秋風寒し萩が花散らすしらつゆ置きにけらしな

圖書寮本第一、此歌無し。圖書寮本第二、類從本、戀部。第二句、「秋風寒み」、第三句、「萩の花」、結句、「けらしも」。鷹司本、無。六帖、讀人不知、第二句、「秋風寒み」、結句、「おきにけらしも」。新勅撰集卷四に入り、題しらず、讀人しらず、歌は類從本に同じである。萬葉集卷十（二一七五）、詠露、讀人不知に、日來之秋風寒芽子之花令散白露置爾來下がある。第二句、舊訓アキカゼサムシ。古寫本中（元・類・神）アキカゼサムミ。第三句、舊訓ハギノハナ。

○

124 此ごろのあかつき露にわがやどの萩の下葉は色づきにけり

圖書寮本第一、此歌に同。圖書寮本第二、類從本、第二句、「秋風さむみ」。鷹司本、此歌に同。拾遺集卷十七、題しらず、人麿として載つた。六帖、第一・二句、「このごろの曉露に」になつてゐる。萬葉集卷十（二一八二）、詠黄葉、讀人不知に、比日之曉露丹吾屋前之芽子乃下葉者色付爾家里がある。第二句、舊訓アカツキツユニ。第三句、舊訓ワガヤドノ。童蒙抄ワガニハノ。新訓もそれに從つたので暫くさうして置いた。

125 雁がねは今はきなきぬわが待ちしもみぢ早つげ待てば苦しも

○

圖書寮本第一、第四句、『もみぢはやせよ』。圖書寮本第二、類從本、第二句、『今ぞきなきぬ（か、類）』。鷹司本、此歌缺。萬葉集卷十（二一八三）、詠黃葉、讀人不知に、鴈鳴者今者來鳴沼吾待之黃葉早繼待者辛苦母がある。古寫本中、元曆本はナキヌの右に赭でカと書いてあり、類聚古集はイマハキナカヌであるから、類從本のキナカヌは、ただ恣に替へたのではあるまい。

126 あきされぱおく白露にわがやどの淺茅が上葉色づきにけり

○

一本、第四句、『あさぢがうへは』。圖書寮本第一、第四句、『あさぢがうへは』。圖書寮本第二、類從本、第四句、『淺茅がうれは』。鷹司本、初句、『秋なれば』、結句、『淺茅の色は移ろひにけり』。新古今集卷五に、人麿として入つた。家持集に、第四句、『淺茅がうれは』。萬葉集卷十（二一八六）、詠黃葉、讀人不知に、秋去者置白露爾吾門乃淺茅何浦葉色付爾家里がある。第三句、舊訓ワガカド

ノ」古寫本中（元・類）ツガヤドノ」和歌童蒙抄に、「アキクレバヲクシラツユニツガヤドノアサヂガハラハイロヅキニケリ』とある。

○

127 秋風の日ごとに吹けば露おもみ萩のした葉は色づきにけり

流布一本、此歌缺。圖書寮本第一、第三・四句、『みづくきのをかの葛葉は』。圖書寮本第二、類從本、第二句、『ひのかさね』。鷹司本、此歌缺。六帖に、第三・四句、『水莖の岡の木葉も』。萬葉集卷十（二二〇四）、詠黄葉、讀人不知に、秋風之日異吹者露重芽子之下葉者色付來とある。第二句、舊訓ヒニケニソフケバ。古寫本中（元・類・神）ヒゴトニフケバ。第三句、舊訓ツユヲモミ。古寫本中（元）ツユヲオモミ、（類）ツユシゲミ。また同じく萬葉集卷十（二一九三）、詠黄葉、讀人不知に、秋風之日異吹者水莖能岡之木葉毛色付爾家里がある。第二句、古寫本中（元・類・神）ヒゴトニ。圖書寮本第一は、六帖とともにこの方から來てゐると見るべきである。

128 ひととせに再びゆかぬ秋山をところにもあらで過しつるかな

○

圖書寮本第一、第四句、『こゝろにもあらず』。圖書寮本第二、類從本、第四句、『心にあかず』。鷹司本、缺。家持集に、第三句以下、「秋山に心にはあらず暮しつるかな」。萬葉集卷十(二二一八)、詠黃葉、讀人不知、一年二遍不行秋山乎情爾不飽過之鶴鴨がある。『ところにもあらで』は『こころにもあかで』の誤寫かも知れない。

129 かりがねのなきつるなべに唐衣たつたの山は色づきにけり

○

一本、第二句、『鳴にしともに』。圖書寮本第一、第二句、「來鳴きし日より」。圖書寮本第二、類從本には、この歌なく、『かりがねを聞きつるなべに高松ののゝうへの草は色づきにけり(もみちはじまる(圖))』がある。鷹司本、『雁のきなきし日より』。後撰集卷七に、讀人不知、「大和にまかりけるついでに」と題し、結句、『紅葉しにけり』。六帖、第二句、『鳴くなる』、第五句、『紅葉しにけり』。家持集に、第二句、

『鳴くなる』」、第五句、『紅葉しぬらむ』」。玉葉集卷五に、赤人作とし、第二句、「鳴くなる」、第五句、「紅葉しぬらし」。家持集にはなほ、類從本系統の方の「かりがねを聞きつるなべに高圓の野べの草葉ぞ色づきにける」といふ歌もある。萬葉集卷十（二一九四）、詠黄葉、讀人不知に、鴈鳴乃來鳴之共韓衣裁田之山者黄始有がある。第二句、舊訓キナキシトモニ。古寫本中（類）キナケルナベニ。類從本系統の方の原歌としては、萬葉集卷十（二一九一）、詠黄葉、讀人不知に、鴈之鳴乎聞鶴奈倍爾高松之野上之草曾色付爾家留がある。第四句、舊訓ノノウヘノクサゾ。

○

130 さを鹿の妻とふ山の岡べなるわさ田はからじ霜はおくとも

一本、第四・五句、『わさ田はからず霜はふれども』。圖書寮本第一、第二、類從本、同じ。鷹司本、缺。六帖、讀人不知、第二句、「妻まつ山の」。新古今集卷五に、人麿作とし、歌ここと同じ。萬葉集卷十（二二二〇）、詠水田、讀人不知、左小牡鹿之妻喚山之岳邊在早田者不苅霜者雖零がある。第二句、舊訓ツマヨブヤマノ。古寫本中（神）ツマトフヤマノ。第四句、舊訓ワサダハカラジ。古寫本中（西・細・温）ソサダハカラズ。結句、舊訓シモハフルトモ。古寫本中（元・類）シモハオクトモ、

(神)シモハヲクトモ。家持集(類從本)にも出てゐる。

131 我宿のまもる田みればさはの内に秋はみつにて思ほゆるかな

一本、第三句、『さはのうらに』。圖書寮本第一、此歌無し。圖書寮本第二、下の句缺。類從本、『我宿にまもる田みれど秋の海のうらの秋萩すゝきおもほゆ』。鷹司本、缺。萬葉集卷十(二二二一)、詠水田、讀人不知に、我門爾禁田乎見者沙穗内之秋芽子爲酢寸所念鴨(ワガカドニモルタヲミレバサホノウチノアキハギススキオモホユルカモ)がある。『さはの内に』は書誤であらうが、『澤のうらに』として味つてゐたものか。『秋はみつにて』は難讀であつたためにかうしたものか不明である。類從本もいたく亂れて居り、圖書寮本第二の如きは下の句を書かずに居る。

○

132 此宵はさよ更けぬらしかりがねの聞ゆるそらに月たち渡る

圖書寮本第一、『さを鹿の』の前にあり、結句、『月わたる見ゆ』。圖書寮本第二、初句、『このよ

らは」、結句、「月さえわたる」。類從本、初句、「このよらは」、第四・五句、「空は月わたるみゆ」。
鷹司本、缺。萬葉集卷十（二二二四）、詠月、讀人不知に、此夜等者沙夜深去良之鴈鳴乃所聞空從月立
渡ルがある。初句、舊訓コノヨラハ、古寫本中（元）ココヒソノ、（類）ココヒヨバ、（神）ココヒテハ、
第四句、舊訓キコユルソラニ。

○

133 我背子がかざしの枝に置く露を清く見せむと月は照るらし

圖書寮本第一、第二句、「さゝのゝはなに」、圖書寮本第二、類從本、第二句、「かざしの花に」。
鷹司本、此歌缺。一本、第二句、「かざしの花に」、又一本、第二句、「をく露の」とある。萬葉集卷
十（二二二五）、詠月、讀人不知に、吾背子之插頭之芽子爾置露乎清見世跡月者照良思がある。第四句、
舊訓サヤカニミヨト。古寫本中（元・類・神）キヨクミセムト。

○

134 おもはずにしぐれの雨は降りたれど天雲はれて月は清きを

圖書寮本第一、第三句、『降りたれば』。圖書寮本第二、類從本、冬部。此歌に同。鷹司本、缺。萬葉集卷十（二二二七）、詠月、讀人不知に、不念爾四禮乃雨者零有跡天雲霽而月夜清焉とある。初句、舊訓オモハズニ。結句、舊訓ツキヨキヨキヲ。古寫本中（元）ツキコサヤケシ、その右に赭く、キヨキヲ。

○

135 白露を玉につくれるなが月の有明の月は見れどあかぬかも

圖書寮本第一、第四句、『殘月は』。圖書寮本第二、鷹司本、此歌缺。類從本、「一本所載歌」中にある。六帖に、讀人不知第二、句、『玉になしたる』、第四句、『有明の月よ』。家持集に、第二句、「玉にぬきもて」。萬葉集卷十（二二二九）、詠月、讀人不知に、白露乎玉作有九月在明之月夜雖見不飽可聞がある。第二句、舊訓タマニナシタル。古寫本中（類）タマニツクレル。然るに、校本萬葉集に據れば、神田本には、「作有」の左に、「ツクレル人丸集説」とある。これは、此柿本集に據つて記したものか、或は後に仙覺などの記したものか、識者の增補を待つ。

○

136 戀ひつつも稲葉かき分け家居れば乏しくもあらず秋の夕暮

圖書寮本第一、結句、「秋の夕かげ」。圖書寮本第二、類從本、第三句、「我をれば」、結句、「秋の初風」。鷹司本、此歌缺。六帖、讀人不知、第三句、「家居せば」、第四・五句、「乏しくもあらじ秋の夕風」。新續古今集卷五に、柿本人麿として、第三句、「家居して」、結句、「秋の夕風」。萬葉集卷十（二二三二）、詠風、讀人不知に、戀乍裳稲葉掻別家居者乏不有秋之暮風とある。舊訓イヘヰセバトモシクモアラジ。

○

137 萩の花咲きたる野邊は茅蜩の鳴くなるともに秋かぜぞ吹く

圖書寮本第一、同じ。圖書寮本第二、類從本、第二句、「咲たる野への」、初句、類從本「秋の花」は誤寫。鷹司本、缺。萬葉集卷十（二二三一）、詠風、讀人不知に、芽子花咲有野邊日晩之乃鳴奈流共秋風吹とある。初句、舊訓ハギノハナ。第二句、舊訓サキタルノベニ。古寫本中（？）サキタルノベノ。第四句、舊訓ナクナルトモニ。代匠記精ナクナルムタニ。結句、舊訓アキカゼノフク。古寫

本中（元・類・神・温）アキカゼゾノヵ。

○

138 秋山の木の葉もいまだもみぢねばけさ吹く風は霜きえぬべし

圖書寮本第一、「今はもみぢつゝけさ吹く風に霜おきにけり」。圖書寮本第二、類從本、第三句、「もみぢねど」、結句、「霜もけぬべし」。鷹司本、缺。續後撰集卷七に、題しらず、人丸として、圖書寮本第一と同じになつてゐる。萬葉集卷十（二二三二）、詠風、讀人不知に、秋山之木葉文未赤者今旦吹風者霜毛置應久がある。萬葉古寫本中に、モミヂネドといふ訓は無い。

○

139 秋田かるひたの庵にしぐれ降りわが袖ぬれぬほす人もなし

圖書寮本第一、此歌缺。圖書寮本第二、類從本、初句、『秋田もる』、結句、『ほす人なしに』。鷹司本、此歌缺。六帖、人麿とし、第二句、『旅の客にて』、結句、『乾す人なしに』。新勅撰集卷五に、題しらず、人丸として、初句、「秋田もる」、以下ここと同じになつてゐる。萬葉集卷十（二二三五）、

詠雨、讀人不知に、秋田苅客乃廬入爾四具禮零我袖沾干人無二がある。第二句、舊訓タヒノイホリニ。古寫本中、神田本ヒタノイホリニとあるから柿本集と同じである。

140 玉だすきかけぬ時なく我戀ふるしぐれしふらば濡れつつもこむ

圖書寮本第一、第三句、「我戀ふと」。圖書寮本第二、類從本、「行きつつも見む」(圖で「わが待ちし時雨しあらば佗つつもゆかん」(同)。六帖、讀人不知、結句、「濡れつつもいかむ」。萬葉集卷十(二二六三)、詠雨、讀人不知に、玉手次不懸時無吾戀此具禮志零者沾乍毛將行がある。第二・三句、舊訓カケヌトキナシワガコヒハ。古寫本中(元)カケヌトキナクワガコフル。

○

141 もみぢ葉を落す時雨の降るなべに夜さへぞ寒き獨しぬれば

圖書寮本第一、同じ。圖書寮本第二、類從本、第三句、「ふるころは」。鷹司本、缺。玉葉集卷六に、題しらず、人麿として載つた。家持集に、第二句、「おちらすしぐれの」。萬葉集卷十(二二三七)、

詠雨、讀人不知に、黄葉乎令落四具禮能零苗爾夜副衣寒一之宿者（モミヂバヲチラスシグレノフルナベニヨサヘゾサムキヒトリシヌレバ）がある。第二句、舊訓チラスシグレノ。古寫本中（元・類）オトスシグレノ。第四句、舊訓ヨサヘゾサムキ。古寫本中（類）フスマモサムシ。古義がフスマモサムシ訓を採用してゐる。

○

142 たれかれと我をなとひそ長月の時雨（しぐれ）にぬれて君まつわれぞ

圖書寮本第一、同じ。一本、『君まつ我を』。圖書寮本第二、鷹司本、此歌缺。類從本、「一本所載歌」中にある。六帖に載り、結句、『君待つ人を』。玉葉集巻十に、題しらず、人麿として載り、第四句、『露にぬれつつ』。萬葉集巻十（二二四〇）、秋相聞、人麿歌集出に、誰彼我莫問九月露沾乍（タソカレトワレヲナトヒソナガツキノツユニヌレツツ）君待吾（キミマツワレヲ）がある。初句、舊訓タレカレト。古寫本中（類）タレカラニ、（西・細・温）タソカレト等。結句、舊訓キミマツワレヲ。神田本キミマツワレゾ。『露』をば、『時雨』に直したのであらうか。

○

143 住吉（すみよし）の岸を田にほりまきしいねの刈る程までもあはぬ君かな

一本、第四・五句、「かるまでいねにあはぬなりけり」。圖書寮本第一、「さきしいねかるまでいもにあはぬなりけり」。圖書寮本第二、類従本、第三・四句、「蒔きし稲かりほすまでも」。鷹司本、缺。拾遺集卷十三に載り、題しらず、人麿。萬葉集卷十（二二四四）、寄水田、讀人不知に、住吉之岸乎田爾墾蒔稲乃而及苅不相公鴨がある。初句、舊訓スミノエノ、古寫本中（類・神）スミヨシノ。

○

144 秋の田のほのかに置ける白露のけぬべく我は思ほゆるかな

圖書寮本第一、第二句、「ほのうへに置ける」。圖書寮本第二、類従本、第二句、「ほの上に」。一本、第四句、「すぎにぬべくも」。拾遺集卷十三に前の歌と共にある。第二句、「ほの上に置ける」。萬葉集卷十（二二四六）、寄水田、讀人不知に、秋田之穂上爾置白露之可消吾者所念鴨がある。第二句、舊訓ホノウヘニオケル。ホノカニは恣に改めたものであらう。

145 秋の田のかりほにつくり庵してひまなく君を見るよしもがな

流布一本に此歌缺。圖書寮本第一、「かりほにいほりつくりしてまなくもいらを」。圖書寮本第二、類從本、「つくる庵してまつらん君を」。鷹司本、缺。萬葉集卷十（二二四八）、寄水田、讀人不知に、秋田叫借廬作五百入爲而有藍君叫將見依毛欲將がある。初句は、古寫本中（元・類・神）「田」を「山」に作つた。第二句、舊訓カリイホツクリ。古寫本中（元）カリイホニツクリ、（類）カリイホツクリテ、（神）カリホニツクリ。結句、舊訓ミムヨシモガモ。古寫本中（元・類）ミルヨシモガナ。

○

146 秋萩の咲きける野邊の夕暮にぬれつつ來ませ夜は更けぬとも

○

圖書寮本第一、「秋萩のさきちる野べのゆふ霧にぬれてをいませさ夜はふくとも」。圖書寮本第二、類從本、第二句、「咲きちるのべの夕露に」。鷹司本、缺。六帖に載り、讀人不知、「咲ける岡べの夕露に」、「濡れつつもませ」。家持集に載り、「咲出る野邊の夕露に」。新古今集卷四に載り、題しらず、人麿、「咲き散る野邊の夕露に」。萬葉集卷十（二二五二）、寄露、讀人不知に、秋芽子之開散野邊之暮露爾沾乍來益夜者深去鞆がある。

147 秋萩の枝もたわわに置く露の消えもしなましわれ戀ひつつあらば

圖書寮本第一、「きえもしぬべしこひつゝあはずは」。圖書寮本第二、類從本、第二句、「枝もとをゝに」、結句、「われ」無し。鷹司本、缺。萬葉集卷十(二二五八)、寄露、讀人不知に、秋芽子之枝毛十尾二降露乃消者消香二戀乍不有者がある。第四句、舊訓ケカモシナマシ。古寫本中(元)ケエモシナマシ。六帖に、讀人不知、「秋のほを篠に押なべ置く露の消えもしなまし戀ひつつあらずは」。玉葉集卷十二に、題しらず、家持、「秋の田のしのにおしなみ置く露の消えやしなまし戀ひつつあらずは」とあるのも同じ歌であらうか。

○

148 秋萩におとす時雨のふる時は人をおき居て戀ふる夜ぞ多き

圖書寮本第一、「秋萩を」「ひとりおきゐて」、圖書寮本第二、類從本、上句、「秋萩をおとすながめのふるところは」、類從本、下句、「ひとりおきゐて戀ふることおほき」。鷹司本、缺。萬葉集卷十(二二六二)、寄雨、讀人不知に、秋芽子乎令落長雨之零比者一起居而戀夜曾大寸がある。「時雨」は

『長雨』を改めたものであらう。『ひとをおきゐて』は、『ひとりおきゐて』の誤寫に本づいて、斯くなつたものであらう。圖書寮本、類從本に據つてそれを證することが出來る。萬葉元暦本に『人りおきゐて』とあるのも參考すべきである。六帖に、讀人不知で、『秋萩をおとすながめのふるほどはひとり起きゐて戀ふる夜ぞ多き』及び『秋萩を散らすながめの降るなべにひとり起きゐて戀ふる夜ぞ多き』がある。また玉葉集卷十二に、題しらず、人麿として、『秋萩をちらす時雨の降る頃はひとり起きゐて戀ふる夜ぞ多き』となつてゐる。

○

149 さを鹿の朝ふすをのの草若み隱れかねてか人に知られぬる

圖書寮本第一、『かくろへかねて人に知らるゝ』。圖書寮本第二、類從本、第四句以下、『かくろひかねて人に知らるな』。鷹司本、缺。新勅撰集卷十二に、題しらず、讀人しらず、第四・五句、『かくろへかねて人にしらるな』として載つた。萬葉集卷十(二二六七)、寄鹿、讀人不知に、左小牡鹿之（サヲシカノ）朝伏（アサフス）小野之（ヲヌノ）草若美（クサワカミ）隱不得而（カクロヒカネテ）於人所知名（ヒトニシラユナ）がある、第四句、舊訓カクロヒカネテ。古寫本中(類・神・西・細・温)カクロヘカネテ。結句、舊訓ヒトニシラルナ。類聚古集ヒトニシラルナの右にシレヌルの訓

がある。シラユキは略解の訓に從つた。

150 わが宿に咲ける秋萩散りはてて秋にもあへぬ身とやなりなむ

〔　　〕

一本、第三・四句、「ちりはてては秋にもあはぬ」。圖書寮本第一、第二、此歌無し。既出の、「我宿に咲ける秋萩あきなくば」と同一に看做して棄てたるか。鷹司本、緞、類從本、「一本所載歌」中にあり。第三句、「ちりはてば」、第四句、「秋にもあへぬ」。萬葉集卷十（二二八六）、寄花、讀人不知に、吾屋戶爾開秋芽子散過而實成及丹於君不相鴨とある。「みになるまでに」のところを、「身とやなりけむ」とし、「君にあはぬかも」のところを、「秋にもあへぬ」とした。第二句は、舊訓サケルアキハギ。古寫本中（類）サキシアキハギ。

151 秋されば鴈飛び越ゆる立田山立ちても居ても君をこそ思へ

〔　　〕

一本、第四句、「立つと居るとに」。圖書寮本第一、第四句、「たつとゐるとに」。圖書寮本第二、

類從本、鷹司本、此歌缺。萬葉集卷十（二二九四）、寄山、讀人不知に、秋去者鴈飛越龍田山立而毛居而毛君乎思曾念がある。新古今集卷十七に、題しらず、人麿として、第二句、『狩人こゆる』、結句、『ものをしぞ思ふ』となつてゐる。

○

152 なにすとか君をいとはむ秋萩のその初花の戀ひしきものを

圖書寮本第一、同じ。圖書寮本第二、類從本、第二句、『妹をいとはん』、結句、『うれしきものを』。鷹司本、此歌缺。六帖に載り、讀人不知、結句、『うれしきものを』。萬葉集卷十（二二七三）、寄花、讀人不知に、何爲等加君乎將厭秋芽子乃其始花之歡寸物乎がある。

○

153 かりがねの初聲ならで咲きて散る宿の秋萩見にこわがせこ

圖書寮本第一、第二句、『はつ聲ききて』。圖書寮本第二、類從本、第二句以下、『初聲ききて咲きでたるのべの秋はぎ』。鷹司本、此歌缺。六帖に、讀人不知、『初聲聞きてたつ宿の秋萩咲けり』。萬

葉集卷十（二一七六）、寄花、讀人不知に、鴈鳴之始音聞而開出有屋前之秋芽子見來吾世古がある。『初聲なきて』はさう改めたものである。『散る』もまたさうであつて、古寫本の異訓も、サキイデタルばかりで、サケルの訓は一つも無い。さういふ點で、類從本の方が原歌に近い。それでも、『屋前』を、『野べ』に變へてゐる。

○

154 さを鹿のいる野の薄はつ尾ばないつしかいもが手枕にせむ

圖書寮本第一、第二、類從本、此歌に同じ。鷹司本、此歌缺。新古今集卷四に、人麿として入る。六帖に、人麿として載り、下句、『いつしか君が手枕をせむ』。萬葉集卷十（二二七七）、寄花、讀人不知に、左小牡鹿之入野乃爲酢寸初尾花何時加妹之手將枕がある。『入野』は、舊訓及古寫本イルノ、イリノは誤の訓である。第四・五句は、舊訓及古寫本イツシカイモガ・タマクラニセム、イツレノトキカ・イモガテマカムは代匠記精撰本の訓である。

155 長月を君に戀ひつつ生けらずは咲きて散りにし花ならましを

○

圖書寮本第一、第四句、『咲きて散りぬる』。圖書寮本第二、類從本、初句、『長き夜を君に』(圖)。なほ、類從本には、『一本所載歌』に此歌を載せてある。鷹司本、此歌缺。一本、第一・二句、『長き夜を君を戀ひつつ』とある。萬葉集卷十(二二八二)、寄花、讀人不知に、長夜乎於君戀乍不生者開而落西花有益乎がある。結句、舊訓ハナニアラマシヲ。古寫本中(元・類・神・細・京)ハナナラマシヲ。『長月』の語は古寫本にも見當らない。ただ、(二三〇〇)に九月之在明能月夜云々がある。

○

156 秋の夜の月かも君は雲隱れしばしも見ねばここら戀ひしき

一本、結句、『君ぞ戀しき』。圖書寮本第一、第二句、『つきかも君か』、結句、『ここらこひしき』、『こひしかるらん』。圖書寮本第二、類從本、結句、『戀しかるらむ』。鷹司本、初句、『ながつきの』。拾遺集卷十三に、人麿としてかくある。萬葉集卷十(二二九九)、寄月、讀人不知、秋夜之月疑意君者

雲隱須臾不見者幾許戀敷がある。「雲隱」『幾許』は、舊訓及古寫本訓クモカクレ。ココラ。

○

157 長月の有明の月のありつつも君し來まさばわれ戀ひめやも

一本、結句、「我こひんかも」。圖書寮本第一、結句、「われこひめかも」。圖書寮本第二、類從本、下句、「戀しきまさばわれかこひめやも」。鷹司本、「君をなきにぞ待つ人ぞなき」。拾遺集卷十三に、題しらず、人麿として載つたが、六帖、人麿、結句、「我ぞ忘れじ」。小町集に、下句、「君しもまさば待ちこそはせめ」。萬葉集卷十二（[illegible]）に、寄月、讀人不知、九月之在明能月夜有乍毛君之來座者吾將戀八方（[illegible]）。第二句、舊訓アリアケノツキヨ。古寫本中（元）アリアケノツキノ。第四句、舊訓キミガキマサバ。古寫本中（元・神・西・温）キミシキマサバ。結句、舊訓ワレコヒムヤモ。古寫本中（元・神）ワレコヒメヤハ、（類）ワレコヒムカモ、（細）ワレコヒヌヤモ、（西・温）ワレコヒメヤモ。

○

158 祝子が祝ふ社のもみぢ葉もしめをばこえて散り來るものを

圖書寮本第一、結句、『ちるてふものを』。圖書寮本第二、類從本、題、『たびのうた』。結句、『散といふものを』。鷹司本、結句、『しめなはくちてちるてふものを』。拾遺集卷十七、題しらず、よみ人しらず、結句、『散るといふものを』。六帖に、讀人不知、結句、『散るてふものを』なほ、六帖には、人まろとして、第一・二句、『い垣して守る社の』、結句、『散るてふものを』となつたのがある。萬葉集卷十(二三〇九)、譬喩歌、讀人不知に、祝部等之齋經社之黄葉毛標繩越而落云物乎がある。第四句、舊訓シメナハコエテ。古寫本中(元・神)シメヲバコエテ。結句、舊訓チルテフモノヲ。古寫本中(元・類・古)チルトイフモノヲ。

○

159 あしびきの山路も知らず白樫の枝もたわわに雪のふれれば

圖書寮本第一、第二、類從本、鷹司本、第四句、『枝にも葉にも』。拾遺集卷四、人麿、第四句、『枝にも葉にも』。六帖、作者無。第四句、『枝にも葉にも』。萬葉集卷十(二三一五)、冬雜歌、人麿歌集出(或本云三方沙彌作)、足引山道不知白杜枝枝母等乎乎爾雪落者、或云、枝毛多和多和がある。

歌仙歌集本の此歌は、卷上の終の方に(六四番)、『やまのかひそことも見えず白樫の枝にも葉にも雪

のふれれば」と重出したやうにおもへる。併し、「山のかひ」の方は、萬葉集卷十七（三九二四）の、山乃可比曾許登母見延受乎登都日毛昨日毛今日毛由吉能布禮禮婆に本づくだらう。

160 夜を寒みあさ戸をあけて出でぬれば庭もはだらに雪ふりにけり

圖書寮本第一、第三句、「けさ見れば」。圖書寮本第二、類從本、鷹司本、此歌缺。六帖に、讀人不知、第三句、「出て見れば」、結句、「雪はふりつゝ」。家持集に、第三句、「見わたせば」、結句、「泡雪そふる」。續後撰集卷八に、題しらず、人丸、第三句、「けさ見れば」として載つた。萬葉集卷十（二三一八）、詠雪、讀人不知に、夜乎寒三朝戸乎開出見者庭毛薄太良爾三雪落有（一云、庭裳保杼呂爾雪曾零而有）とある。第二句、舊訓アサトヲアケテ、結句、舊訓ミユキフリタリ。類聚古集ユキフリニケリ。

161 泡雪はけさはな降りそ白妙の袖まきほさむ人もあらなくに

圖書寮本第一、第四句、「袖まきほさん」。圖書寮本第二、初句、「あわ雪の」、第四・五句、「袖ま

きほさん妹もあらなくに』。類從本、初句、『淡雪は』、第四・五句、『袖まきほさん妹かあらなくに』
鷹司本、缺。六帖、讀人不知、第四句、『袖まきほさむ』。萬葉集卷十（二三二一）、詠雪、讀人不知に、
沫雪者今日者莫零白妙之袖纒將干人毛不有君がある。ソデマキをソマキとしたものであらう。

○

162 たが宿の梅の花ぞもひさかたの淸き月夜にのこらざりけり

圖書寮本第一、第二句、『うめの花かも』、結句、『こゝらちりたる』。圖書寮本第二、類從本、春部。結句、『ここらちりくる』。鷹司本、缺。萬葉集卷十（二三二五）、詠花、讀人不知に、誰苑之梅花毛久堅之淸月夜爾幾許散來がある。結句、舊訓コヽラチリクル。古寫本中（類）ココダフリクル。

○

163 梅の花まづ咲く枝を折持ちてつととなづけて袖を見むかも

圖書寮本第一、『たをりもていとゝなつけてよそへ見むかも』。圖書寮本第二、類從本、『手をりもてつととなつけてよそへてむかも』。鷹司本、缺。一本、第四句、『いとゝなつけく』。萬葉集卷十

（二三二六）、詠花、讀人不知に、梅花先開枝手折而者裹常名付而與副手六香聞がある。コソヘテムカモをソデヲミムカモとしたものであらう。この場合は、圖書寮本が正しい。

○

164 來て見べき人もあらなくにわが宿の梅の初花散りぬれどよし

圖書寮本第一、鷹司本、同じ。圖書寮本第二、類從本、結句、「ちりぬともよし」。家持集に、結句、「散りぬともよし」。萬葉集卷十（二三二八）、詠花、讀人不知に、來可視人毛不有爾吾家有梅早花落十方吉がある。第二句、舊訓ワギヘナル、古寫本中（元）ワガイヘナル、（温）ワカヘナル等

○

165 泡雪の降るに消えぬべく思へども逢ふ由もなみ年ぞ經にける

後に諸國の歌の前（二二五番）に、「降る雪の空に消えぬべく思へども逢ふ由もなしに年ぞ經にける」があり、重出と認められる。圖書寮本第一、第二句、「降るにけぬべく」。圖書寮本第二、類從本、題、「ゆきにあひきて」。第一・二句、「降雪の空にけぬべし」、第四句、「あふよしなくて」、鷹司本、

缺。一本、結句、『程ぞへにける』。萬葉集卷十（二三三三）、冬相聞、人麿歌集出に、零雪虛空可消雖戀相依無月經在がある。第四句、舊訓アフヨシヲナミ。類聚古集アフヨシモナク。結句、舊訓ツキゾヘニケル。『虛空』は舊訓ソラ。古寫本中、元曆本『心ニケヌベク』と訓んでゐたのを、墨を以て『心』を消して、その右に『ソラ』と入れてある。柿本集のは、『泡雪の降るに』と直してしまつたものであらう。

○

166 あさぎりあひ降來る雪のきえぬとも君には逢はむと我歸りきたる

○

圖書寮本第一、第二、類從本、鷹司本、此歌缺。萬葉集卷十（二三四五）、寄雪、讀人不知に、天霧相零來雪之消友於君合常流經度がある。初句、舊訓アマキリアヒ。古寫本同。第三句、舊訓キユレドモ。古寫本中（元）キエヌトモ。代匠記之を認容した。柿本集のは、ナガラヘワタルを、似た音調のソガカヘリキタルに改めたものである。

○

167 わが宿に咲きたる梅を月影に夜な夜な來つつ見む人もがな

圖書寮本第一、第三句、「月きよみ」。圖書寮本第二、類從本、第二句以下、「咲きたる梅を月清みよる／＼きつつ」。鷹司本、缺。續古今集卷一に、題しらず、柿本人丸として載つた。家持集に、「我が宿に咲きたる梅を月きよみ夜々見せむ君をこそまて」。六帖に、讀人不知、「わが宿に咲きたる梅の月清み夜な夜な見せむ君をこそまて」。萬葉集卷十（二三四九）、寄花、讀人不知に、吾屋戸爾開有梅乎月夜好美夕夕令見君乎祚待也がある。第四句、舊訓ヨナヨナミセム。結句、舊訓キミヲコソマツヤ。古寫本中（元・類・神）キミヲコソマテ。

168 あしびきの山下風は吹かねども君が來ぬ夜はかねて寒しも

圖書寮本第一、同じ、順序は「わが宿に」の前にある。圖書寮本第二、類從本、戀部にあり。六帖に、人麿、新勅撰集卷十四に、題しらず、柿本人丸として載つた。家持集に、結句、「たゆとさむしも」。萬葉集卷十（二三五〇）、寄夜、讀人不知に、足檜木乃山下風波雖不吹君無夕者豫寒毛がある。

第二句、舊訓ヤマシタカゼハ。考ヤマノアラシハ又はアラシノカゼハ。第四句、舊訓キミナキヨヒハ。古寫本中（元・神）キミガコヌヨハ。

○

169 明日よりは若菜摘まむと片岡のあしたのはらはけふぞ燒くめる

圖書寮本第一、同じ。圖書寮本第二、類從本、春部。初句、「明日からは」。鷹司本、初句、「明日からは」、第二句、「若菜つませむ」。拾遺集卷一に、題しらず、人丸として載り、初句、「あすからは」ともある。萬葉集卷八（一四二七）、山部赤人歌に、從明日者春菜將採跡標之野爾昨日毛今日毛雪波布利管。初句、舊訓アスヨリハ。古寫本中（類）アスカラハ、（京）漢字の左に赭くアスカラハと記す。「春菜」は、舊訓及古寫本訓ワカナ。古今集卷五に、『霧たちて雁ぞなくなる片岡のあしたの原は紅葉しぬらむ』がある。此歌は、拾遺集に據つたことは大體想像せられるが、『片岡の朝の原はけふぞ燒くめる』は何處より來たか、なほ攷ふべきである。

○

170 梅の花それとも見えず久方のあまぎる雪のなべてふれれば

圖書寮本第一、第二、類從本、鷹司本、此歌に同じ。古今集卷六に、題しらず、讀人不知として載り、「この歌はある人のいはく、柿本人麿が歌なり」と注してあり、又拾遺集卷一に、題しらず、柿本人丸として載つたものである。そして、萬葉集卷八(一四二六)、赤人歌に、吾勢子爾令見常念之梅花其十方不所見雪乃零有者とあるのに本づいたのかも知れない。

○

171 わがやどのいけの藤なみ咲きにけり山ほととぎす今や來なかむ

圖書寮本第一、第二、類從本、結句、「いつか來なかん」。鷹司本、此歌缺。古今集卷三に、題しらず、讀人不知として載り、結句、「いつかきなかむ」、「この歌ある人のいはく柿本人麿がなり」と注してある。また、人麿として、六帖に入つた。萬葉集卷十(一九九一)、寄花、讀人不知、霍公鳥來鳴動崗部有藤浪見者君者不來登夜 同卷十(一九四〇)、詠鳥、讀人不知、朝霞棚引野邊足檜木乃山霍公鳥何時來將鳴 同卷十九(四二一〇)、詠霍公鳥、久米廣繩作、敷治奈美乃志氣里波須疑奴安志比紀

乃夜麻保登等藝須奈騰可伎奈賀奴等があるけれども、直接この歌には關係はなく、古今集の歌の左注をその儘採用したものであらう。

○

たこの浦にて藤の花を見て思をのぶ

172 たこの浦の底さへ匂ふ藤浪をかざして往(ゆ)かむ見ぬ人のため

圖書寮本第一、同じ。圖書寮本第二、類從本、初句、『田子の浦』。鷹司本、缺。拾遺集卷二に、『田子の浦の藤のはな（イ咲花を見て）を見侍りて、柿本人麿』として載つてゐるが、これは萬葉集卷十九（四二〇〇）、内藏忌寸繩麻呂作、多祜乃浦能底左倍爾保布藤奈美乎加射之氐將去不見人之爲に本づくので、實は繩麻呂の作なのである。そこで柿本集は、直接萬葉集に據つたといふよりも、この歌の場合は拾遺集に據つたもののやうである。なほ六帖には、讀人不知で載つてゐる。

○

173 ほととぎす鳴くやさつきのみじか夜も獨しぬればあかしかねつも

圖書寮本第一、第二、類從本、此歌に同じ。鷹司本、缺。拾遺集卷二、題しらず、讀人不知として載つてゐる。また六帖に載り、讀人不知。赤人集にも載つた。萬葉集卷十（一九八一）、寄鳥、讀人不知に、霍公鳥來鳴五月之短夜毛獨宿者明不得毛がある。第二句、古寫本中（元・類・神）ナクヤと訓んだのがある。

○

174 年にありて一夜妹に逢ふ彦星の我にまさりて思ふらむやそ

圖書寮本第一、初句、「年にあひて」、第二句、「天人を」。圖書寮本第二、類從本、初句、「年にあひて」、拾遺集卷二、題しらず、人麿、第二句、「彦星も」、結句、一本、「思らんやは」とある。六帖、讀人不知、第三句、「彦星も」、結句、「思ふらめやは」。萬葉集卷十五（三六五七）、遣新羅使人等、七夕仰觀天漢各陳所思作歌中、等之爾安里弖比等欲伊母爾安布比故保思母和禮爾麻佐里弖於毛布良米也母があり、讀人不知である。

○

175 吾妹子が赤裳ぬらして植ゑし田を刈りて收めむ倉なしの濱

圖書寮本第一、同じ。圖書寮本第二、類從本、結句、『くらなしの山』。鷹司本、第四句、『かりて收めよ』。拾遺集卷十七に、題しらず、人麿として、第四句、『刈りてをさむる』。六帖第二に、夏の田、人まろ、上句、『濡れつつ植うる田を』。同第三に、濱、人麿、初句、『わが背子が』になつて居る。萬葉集卷九(一七一〇)、吾妹兒之赤裳泥塗而殖之田乎苅將藏倉無之濱があり、『或云柿本朝臣人麻呂作』と注されてゐる。『泥塗而』は、舊訓ヒツチテ。古寫本中(藍・壬・古・神)ヌラシテ。

○

176 秋風の日ごとに吹けばわが宿のをかの木の葉も色づきにけり

一本、第三句、『久方の』。圖書寮本第一、第三句、『みつくきの』、第四句、『をかの葉は』。圖書寮本第二、類從本、第三句、『みづくきの』。鷹司本、第四句、『岡の葛葉も』。拾遺集卷十七にあり、初句、『秋風し』、第四句、『木の葉は』、題しらず、人麿とある。六帖には、讀人不知、第三句、『みづくきの』になつてゐる。萬葉集卷十(二一九三)、詠黃葉、讀人不知、秋風之日異吹者水莖能岡之木

葉毛色付爾家里。第二句、舊訓ヒニケニフケバ。古寫本中（元・類・神）ヒゴトニフケバ。

177 我背子をわが戀ひ居れば我宿の草さへおもひうらがれにけり

圖書寮本第一、初句、「我妹に」。圖書寮本第二、類從本、戀部。此歌に同じ。拾遺集卷十三に、人麿として載つてゐる。六帖には、作者笠の女郎、初句、「わが背子に」になつてゐる。萬葉集卷十一に寄物陳思、人麿歌集出、我背兒爾吾戀居者吾屋戸之草佐倍思浦乾來とある。

○

みかどたつた川のわたりにおはしますお供につかうまつりて

178 たつた川もみぢ葉ながる神なびのみむろの山にしぐれ降るらし

圖書寮本第一、詞書缺。第三句、「神なびの」。圖書寮本第二、類從本、鷹司本、此歌に同じ。圖書寮本第二、類從本には、詞書、「天皇立田川のわたりに行幸ありけるに御供にまゐりて紅葉おもしろかりけるに、天皇御製、立田川紅葉みだれてながるめり渡らばにしき中や絶えなむ、とありける

「に」となつてゐる。古今集卷五に、題しらず、讀人不知として入り、「又はあすか川もみぢ葉流る」とも注してある。拾遺集卷四には、『奈良のみかど龍田川に紅葉御覽じに行幸ありける御ともにつかうまつりて、柿本人麿』となつてゐる。また六帖にも人麿として載つた。大和物語にも出てゐる。萬葉集卷十(二一八五)に、大坂乎吾越來者二上爾黃葉流志具禮零乍。同卷(二一九四)に、鴈鳴乃來鳴之共韓衣裁田之山者黃始有がある。

○

179 あはぬよのふる白雪と積りなば我さへ共に消ぬべきものを

圖書寮本第一、結句、『きえぬべきかな』。圖書寮本第二、類從本、戀部。結句、「消ぬべき哉」。鷹司本、此歌に同じ。古今集卷十三、題しらず、讀人不知、「この歌はある人のいはく、柿本人麿が歌なり」といふ左注がある。六帖に人麿として載つてゐる。萬葉には類歌が餘り見當らない。卷八(一六六二)に、沫雪之可消物乎至今流經者妹爾相曾。卷十(二三四〇)に、一眼見之人爾戀良久天霧之零來雪之可消所念がある。

○

180 あしびきの山下とよみゆく水の時ぞともなく戀ふる我身か

圖書寮本第一、結句、「こひわたるかな」。圖書寮本第二、類從本、戀部。結句、「戀わたるかな」。鷹司本、結句、「戀わたるかな」。拾遺集卷十一、題しらず、讀人不知として載り、結句、「戀ひわたるかな」になつてゐる。六帖、讀人不知、結句、「思ほゆるかな」。萬葉集卷十一（二七〇四）、寄物陳思、讀人不知に、惡氷木之山下動逝水之時友無雲戀度鴨がある　第四句、舊訓トキトモナクモ。古寫本中（嘉）トキゾトモナク。

○

181 時雨のみめにはふれれば槇の葉も爭ひかねてもみぢしにけり

圖書寮本第一、初二句、「しぐれの雨まなくしふれば」、結句、「うつろひにけり」。圖書寮本第二、類從本、第一・二句、「時雨の雨まなくし降れば」、結句、「色つきにけり」。鷹司本、缺。新古今集卷六に、題しらず、人麿として載つた。第一・二句、「時雨の雨まなくし降れば」。萬葉集卷十（二一九六）、詠黄葉、讀人不知に、四具禮能雨無間之零者眞木葉毛爭不勝而色付爾家里がある。六帖に、「し

ぐれの雨まなくしふれば神なびの森の木葉も色づきにけり』といふのもある。

○

182 青柳のかつらぎ山にゐる雲の立ちても居ても君をこそ思へ

圖書寮本第一、初句、『あしひきの』。圖書寮本第二、類從本、戀部。初句、『あしひきの』、結句、『妹をしぞ思ふ』。類從本に初句『青柳の イ』と注す 鷹司本、缺。拾遺集卷十二に、題不知、讀人不知、初句、『あしびきの』。萬葉集卷十一（二四五三）、寄物陳思、人麿歌集出に、春楊葛山發（ハルヤナギカツラキヤマニタツ）雲立座妹念（クモノタチテヰテモイモヲシゾオモフ）がある。初句、舊訓ハルヤナギ。古寫本中（嘉・細）アヲヤギノ。結句、舊訓イモヲシゾオモフ。古寫本中（嘉）イモヲコソオモヘ。

○

183 みなそこに生ふる玉藻のうち靡き心をよせて戀ふる此ごろ

圖書寮本第一、同じ。圖書寮本第二、類從本、鷹司本、結句、『戀ふるころかな』。拾遺集卷十一、題しらず、人丸、結句、『戀ふる頃かな』。六帖に人麿として載る。萬葉集卷十一（二四八二）、寄物陳

思、人麿歌集出に、水底生玉藻打靡心依戀比日がある。第四句、舊訓ココロヲヨセテ。

○

184 言にいでていはばゆゆしみ山川のたぎつ心をせきぞかねつる

圖書寮本第一、同じ。圖書寮本第二、類從本、『ゆゆしみ朝貌の匂ひひらけぬ戀もする哉』。なほ、類從本には、「一本所載歌」中にこの歌を載せてゐる。鷹司本、缺。古今集卷十一、題しらず、讀人しらずに、『足引の山下水のこがくれてたぎつ心をせきぞかねつる』があり、後撰集に、よしの朝臣作として再錄、六帖に人麿作とし、第三句、『云はばいみじみ』とある。六帖には別に、古今・後撰と同じものをも、作者源よしの朝臣として載せてゐる。然らばこれは柿本集の歌とは別歌と見るべきか。萬葉集卷十一(二四三二)、寄物陳思、人麿歌集出に、言出云忌忌山川之當都心塞耐在があるが、結句、舊訓セキゾカネタル。古寫本中(嘉・類・古)セキゾカネツル。

○

185 風吹けば浪立つ岸の松なれやねにあらはれてなきぬべらなり

一本、第二句、『波うつ岸の』。圖書寮本第一、第二、鷹司本、第二句、『なみうつきしの』。類從本、『浪たつ岸の』。古今集卷十三、題しらず、讀人不知、第二句、『浪うつ岸の』、左注に、『この歌は或人のいはく柿本人麿がなり』。六帖、人麿、第二・三句『波こす磯の磯馴松』。

○

186 日の曇り雨ふる川のさざら浪まなくも人の戀ひらるるかな

圖書寮本第一、初句、『日ぐらしに』。圖書寮本第二、此歌缺。類從本、『一本所載歌』中にあり、一下句、『人を戀わたるかな』。鷹司本、初句、『日ぐらしに』、結句、『君がおもほゆる』。拾遺集卷十五、題しらず、人麿、初句、『かき曇り』。六帖、素性或本、初句、『日暮しの』。萬葉集卷十二（三〇一二）、寄物陳思、讀人不知、登能雲入雨零河之左射禮浪間無毛君者所念鴨がある。第三句、古寫本中（類・古）サ、ラナミ。なほ、後撰集卷十九に、『人毎に今日けふとのみ戀ひらるる都近くもなりにけるかな』がある。

○

187 たらちねの親のかふこの繭ごもりいぶせくもあるか妹にあはずて

一本、結句、『君にあはずて』。圖書寮本第一、第二、類從本、此歌に同じ。鷹司本、結句、『妹にあはずして』。拾遺集卷十四、題しらず、人麿とある。六帖に、讀人不知。六帖になほ、作者いへのおとくろまろとして、結句、『妹にまかせて』となつたのもある。萬葉集卷十二(二九九一)、寄物陳思、讀人不知、垂乳根之母我養蠶乃眉隱馬聲蜂音石花蜘蟵荒鹿異母二不相而がある。第二句、舊訓ハハガカフコノ。古寫本中(元・類)オヤノカフコノ、(西)ヲヤガカフコノ、(細)オヤガカフコノ。

○

188 戀ひ戀ひて後に逢はむと慰むる心しなくば生きてあらめや

圖書寮本第一、同じ。圖書寮本第二、類從本、鷹司本、第二句、『のちも逢はむと』。拾遺集卷十四、題しらず、人麿、第二句、『のちあはむと』、結句、『いのちあらめや』。萬葉集卷十二(二九〇四)、正述心緒、讀人不知、戀戀而後裳將相常名草漏心四無者五十寸手有目八面がある。第二句、舊訓ノチモアハムト。元暦本ノチニアハムト。第三句、舊訓ナグサムル。

○

189 戀するに死ぬるものにしあらませば我身は千たび死にかへらまし

圖書寮本第一、『戀するにしにするものにあらませば我身いくたびしにかへらまし』。圖書寮本第二、類從本、第二句、『死にするものにし』、第四句、『千たびぞわれは』。鷹司本、『死にするものに』、『いくたび』。拾遺集卷十五、題しらず、人麿として載つてゐる。第二・三・四句、『死にする物にあらませば千たびぞ我は』。六帖に、讀人不知（或本かさの郎女）、第四句、『ちたびぞ我は』。萬葉集卷十一（二三九〇）、正述心緒、人麿歌集出に、戀爲死爲物有者我身千遍死反（コヒスルニシニスルモノニアラマセバワガミハチタビシニカヘラマシ）がある。初句、舊訓コヒヲシテ。嘉暦本コヒスルニ。

○

190 こひこひて戀ひて死ねとや我妹子が我家（わがや）の門を過ぎてゆきぬる

圖書寮本第一、結句、『過ぎて行くらん』。圖書寮本第二、類從本、初句、『戀ひて死ね』、結句、『過て行くらむ』。鷹司本、『戀ひも死なば戀ひも、死ねとや』、結句、『行くらむ』。拾遺集卷十五に、

題しらず、人麿として、圖書寮本第二、類從本に同じい。萬葉集卷十一（二四〇一）、正述心緒、人麿歌集出に、戀死戀死哉我妹吾家門過行がある。第四句、細井本ソガイヘノカドヲ。

○

191 あら磯のほかゆくなみの外心われは思はじ戀ひは死ぬとも

圖書寮本第一、鷹司本、同じ。圖書寮本第二、此歌缺。類從本、「一本所載歌」中にある。拾遺集卷十五に、題しらず、人麿としてある。萬葉集卷十一（二四三四）、寄物陳思、人麿歌集出、荒礒越外往波乃外心吾者不思戀而死鞆がある。初句、舊訓アライソコエ。結句、舊訓コヒテシヌトモ。古寫本中（古）コヒハシヌトモ。

○

192 ますらをのうつし心も我はなし夜晝わかず戀ひしわたれば

圖書寮本第一、第二、類從本、鷹司本、此歌に同じ。六帖に、讀人不知でかく載り、なほ別に、初句、「あらしほの」、第四句、「よるひる人を」となつたものもある　風雅集卷十四に、題しらず、

讀人しらず、第四句、『よるひる言はず』とある。萬葉集卷十一(二三七六)、正述心緒、人麿歌集出、健男現心吾無夜晝不云戀度（マスラヲノウツシゴコロモワレハナシヨルヒルトイハズコヒシワタレバ）がある。第四句、舊訓ヨルヒルイハズ。古寫本中(嘉)ヨルヒルイハヌ、(神)ヨルヒルイワヌ。

○

193 わびつつも今日は暮しつ霞立つあすの春日をいかで暮さむ

圖書寮本第一、初句、『こひつつも』。圖書寮本第二、類從本、初句、『こひつつも』。拾遺集卷十一に、題しらず、人麿、『戀ひつつもけふは暮しつ霞立つあすの春日をいかで暮さむ』。六帖、『照る日』と『霞』の二つの題に重出し、共に讀人不知、初句、『戀ひつつも』、『照る日』の方は、第三句、『茜さす』になつてゐる。萬葉集卷十(一九一四)、寄霞、讀人不知、戀乍毛今日者暮都霞立明日之春日乎如何將晩（コヒツツモケフハクラシツカスミタツアスノハルヒヲイカニクラサム）。結句、舊訓イカデクラサム。赤人集に、『こひつゝもけふは暮しつかすみたつあすの春日をいかでくらさむ』とある。

○

194 戀ひつつもけふはありなむ玉櫛笥明けなむ明日をいかで暮さむ

圖書寮本第一、第二、類從本、此歌缺。鷹司本、此歌に同。拾遺集卷十一、題不知、人麿としてある。第四句、「あけむあしたを」。萬葉集卷十二(二八八四)、正述心緒、讀人不知、戀管母今日者在目杼玉匣將開明日如何將暮がある。結句、舊訓イカデクラサム。古寫本中(細)イカヾクラサム。

○

195 ちはやぶる神の忌垣も越えぬべし今は我身の惜しけくもなし

圖書寮本第一、第二、類從本、同じ。鷹司本、第四句、「今は我名も」。拾遺集卷十四、題しらず、柿本人麿としてある。六帖に、讀人不知、結句、「惜しからなくに」になつてゐる。萬葉集卷十一(二六六三)、寄物陳思、讀人不知、千葉破神之伊垣毛可越今者吾名之惜無がある。

○

196 山の端にさし入る月のはつはつに妹をぞ見つる戀ひしきまでに

圖書寮本第一、第二、類從本、第一・二句、『山のはをさし出る月の』。鷹司本、「さしいづる」、第三句、「はつかにし」。六帖、人麿、第二句、『さしいづる』、第四句、『君をぞ』。萬葉集卷十一（二四六一）、寄物陳思、人麿歌集出、山葉進出月端端妹見鶴及戀がある。

○

197 竹の葉におきゐる露の轉(まろ)びあひてぬる夜はなしにたつ我名(わがな)かな

圖書寮本第一、第四句、『ぬるとはなしに』。圖書寮本第二、類從本、戀の終、「名立ける女」云々の『返し十首』中にある。第二句、『おちゐる露の』、第四句、「ぬるとはなしに」。拾遺集卷十一、題しらず、人麿としてあり、第四句、『ぬるとはなしに』。萬葉集卷十一（二六一五）、正述心緒、讀人不知、敷栲乃枕卷而妹與吾寐夜者無而年曾經來がある。後撰集卷九に、『逢ふことはいとど雲居の大空に立つ名のみしてやみぬばかりか』、同卷に、『見そめずてあらましものを唐衣立つ名のみしてきるよなきかな』がある。

○

198 なき名のみたつの市とは騷げどもいさ又人をうる由もなし

圖書寮本第一、同じ。順序は、前の（二一三番）「夕かけて」の歌につづく。圖書寮本第二、類從本、鷹司本、同じ。拾遺集卷十二、題しらず、人麿として載つてゐる。類似の歌萬葉集にあるか奈何未考である。ただ、卷十一（二七二八）に、風不吹浦爾浪立無名乎吾者負香逢者無二があり、また、卷十七（三九三一）に、吉美我餘里吾名波須泥爾多都多山とある。併し此歌との直接關係は無い。

○

199 なき名のみ立田の山の麓には世にもあらしの風も吹かなむ

圖書寮本第一、初句、「うき名のみ」。圖書寮本第二、類從本、第二・三句、「いはれの池のみぎはかな」。鷹司本、第四句、「世にあらしてふ」。拾遺集卷九に、作者は藤原爲賴として載つてゐる。即ち、人麿とは關係のない歌である。類從本には、なほ、「一本所載歌」中にこの儘入れてゐる。

○

200 みな人の笠に縫ふてふ有間菅ありての後も逢はむとぞ思ふ

圖書寮本第一、第二、類從本、此歌に同じ。鷹司本、第四句、『ありての後は』。拾遺集卷十四、題しらず、人麿として載つてゐる。六帖、讀人不知とし、結句、『あはざらめやは』。萬葉集卷十二(三〇六四)、寄物陳思、讀人不知、人皆之笠爾縫云有間菅在而後爾毛相等曾念がある。初句、舊訓ヒトミナノ。古寫本中(元・類・古・西)ミナヒトノ。第二句、舊訓カサニヌフテフ。

○

201 増鏡手にとり持ちて朝な朝な見れども君に飽くときぞなき

圖書寮本第一、結句、『あふよしぞなき』。圖書寮本第一の歌は、これより以下缺。圖書寮本第二類從本、第四・五句、『見れどもあかぬ君にもあるかな』。鷹司本、結句、『飽くことのなき』。拾遺集卷十四に、題しらず、人麿として載つてゐる。萬葉集卷十一(二五〇二)、寄物陳思、人麿歌集出、眞鏡手取以朝朝雖見君飽事無がある。初句、古寫本中(嘉・類・古・細)マスカガミ。結句、舊訓

キミヲアクコトモナシ。古寫本中（嘉・古）キミガアクコトノナキ、（類）キミヲアル（ク）コトノナキ。

○

202　たまゆらに昨日の暮に見しものを今日のあしたに問ふべきものか

一本、結句、『こふべき物か』。圖書寮本第二、類從本、『けふ（の（類））あしたにこふへきものか』。鷹司本、初句、『たまくらに』、第四・五句、『今日いつのまにこひしかるらむ』。六帖、人麿、第二句、『昨日のゆふべ』、結句、『戀ふべきものか』。風雅集卷十一に、題しらず、讀人しらず、第二句、『昨日の夕べ』、第四・五句、『今日のあしたは戀ふべきものか』。萬葉集卷十一（二三九一）、正述心緒、人麿歌集出、玉響昨夕見物今朝可戀物がある。第四句、舊訓ケフノアシタハ。萬葉にあつて拾遺にない場合である。

○

203　かくばかり戀しきものを知らせばや外に見ゆべくあらましものを

圖書寮本第二、類從本、『戀しきものと知らませばよそにぞ見つつ有けるもの（ん（類））を』。鷹司本、同樣。

拾遺集巻十四に、題不知、人麿として、『かくばかり戀しきものと知らませばよそに見るべくありけるものを』とあり、萬葉集巻十一（二三七二、正述心緒、人麿歌集出、是量戀物知者遠可見有物（カクバカリコヒムモノトシラマセバトホクミツベクアリケルモノヲ）がある。第二句、舊訓コヒシキモノト。第四句、舊訓ヨソニミルベク。

○

204 戀ひ死なば戀ひも死ねとか玉桙（たまほこ）のみちゆき人に言傳（ことづて）もなし

圖書寮本第二、類從本、第二句、『戀ひも死ねとや』、結句、『ことづてもなき（なし〔類〕）』。鷹司本、結句、『なき』。六帖、或本作者人麿、第三句、『戀ひも死ねとや』、結句、『言傳もせぬ』。拾遺集巻十五、題しらず、人麿、『戀ひも死ねとや玉桙の道ゆく人に言傳もなし』。萬葉集巻十一（二三七〇、正述心緒、人麿歌集出、戀死戀死耶玉桙路行人事告無（コヒシナバコヒモシネトヤタマボコノミチユキビトニコトヅテモナク）がある。結句、舊訓コトモツゲケム（事告兼）。嘉曆本『事告無』。古寫本中（嘉）コトツケモナシ、（古・細）コトモツゲカネ。

○

205 あしびきの山より出づる月待つとひとにはいひて君をこそ待て

圖書寮本第二、類從本、鷹司本、同じ。拾遺集卷十三、題しらず、人麿。六帖に、讀人不知、「山高み出でこずいざよふ月待つと人にはいひて君待つ我ぞ」。萬葉集卷十二（三〇〇二）、寄物陳思、讀人不知、足日木乃從山出流月待登人爾波言而妹待吾乎 がある。結句、舊訓イモマツワレヲ、古寫本中（西）イモヲコソマテ。

○

206 あひ見ては幾ひささにもあらねども年月のごと思ほゆるかな

圖書寮本第二、鷹司本、同じ。類從本、第二句、「いく久しさにも」。拾遺集卷十二、題不知、人麿。六帖、人麿。萬葉集卷十一（二五八三）、正述心緒、讀人不知、相見而幾久毛不有爾如年月所思可聞 がある。第二句、舊訓イクヒサシサモ。古寫本中（嘉・細）イクヒサヽニモ。

○

207 岩根ふみかさなる山はなけれども逢はぬ日かずを戀ひ渡るかな

鷹司本、これに同じ。圖書寮本第二、類從本、第三句、「へだてねど」、結句、「戀わたるかも」。

拾遺集卷十五に、題しらず、坂上郎女として載り、結句、『戀ひやわたらむ』。伊勢物語に載り、『重なる山にあらねども逢はぬ日多く』。萬葉集卷十一（二四二二）、寄物陳思、人麿歌集出、石根蹈重成山雖不有不相日數戀度鴨がある。第二句、舊訓カサナルヤマハ。古寫本中（嘉・類・古・細）カサナルヤマニ。第四句、舊訓アハヌヒアマタ。古寫本中（嘉・類・古）アハヌヒカズヲ。アハヌヒマネミは略解の訓に從つた。和歌童蒙抄に、『イハネフミカサナルヤマニアラネトモイハヌヒアマタコヒワタルカモ』となつてゐる。

○

208 賴めつつ來ぬ夜あまたになりぬれば待たじと思ふぞ待つに勝れる

圖書寮本第二、類從本、鷹司本、同樣。拾遺集卷十三に、題しらず、人麿として載つてゐる。

○

209 鳴神のしばしうごきてさし曇り雨も降らなむ君とまるべく

一本、第二句、『しばしは空に』。圖書寮本第二、類從本、第二句、『しばしくもりて』。鷹司本、

此歌に同。六帖、人まろ、第一・二句、『鳴神をとよますばかり』、結句、『君を留めむ』。拾遺集巻十三に、題しらず、人麿として、第三句、『空くもり』。萬葉集巻十一（二五一三）、問答、人麿歌集出、雷神小動刺雲雨零耶君将留がある。第二句、舊訓シバシトヨミテ。古寫本中（嘉・細）シバシウゴキテ。第四・五句、舊訓アメノフラバヤキミヤトマラム。古寫本中（嘉）アメモフラナムキミトマルベク、（類・細）アメモフラナムキミヲトドメム、（温・京）アメノフラバヤキミガトマラム。

210　ぬばたまの今宵なあけそ明けゆかば朝往く君を待つも苦しも

一本、初句、『むば玉の』、第三句、『明ゆけば』。圖書寮本第二、類從本、初句、『むば玉の』、結句、『まつくるしきに』。鷹司本、『今宵はなあけそ』、『まつくるしきに』。拾遺集巻十二に、題しらず、人麿、結句、『待つ苦しきに』『待つが苦しき』として載り、六帖に、『あらたまのこの夜な明けそあかひかるあしたゆく君待てば苦しも』と載つた。萬葉集巻十一（二三八九）、正述心緒、人麿歌集出、烏玉是夜莫明朱引朝行公待苦とある。第二句、舊訓コノヨナアケソ。古寫本中（嘉）コヨヒナアケソ。

211 ささ浪やしがのからさき來たれども大宮人の船待ちかねつ

前に（五四番）、第三句『行てみれど』としてあり、此處に重出か。圖書寮本第二、類從本、既に出づ。第三句、『さきくあれど』。鷹司本、既出。第三句これと同じ。萬葉集卷一（三〇）、過近江荒都時柿本朝臣人麿作歌の反歌第一に、樂浪之思賀乃辛碕雖幸有大宮人之船麻知兼津がある。

212 あしびきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜を獨かもねむ

圖書寮本第二、類從本（第三句、『の』脫）、鷹司本、此に同じ。六帖、讀人不知、結句、『わが獨りぬる』。六帖には別に、第一・二句が『にはとりのかけの垂り尾の』となつた歌もある。拾遺集卷十三、題しらず、人麿として載り、萬葉集卷十一（二八〇二或本歌）、寄物陳思、讀人不知、足日木乃山鳥之尾乃四垂尾乃長永夜乎一鴨將宿がある。第四句、舊訓ナガナガシヨヲ。

213 ちはやぶる神のたもてる命をもたが爲と思ふ我ならなくに

圖書寮本第二、類從本、第四・五句、『たが爲（我すら（類））にかはながくとおもはむ』。鷹司本、『たれがためにかながくと思はむ』。六帖、第二句以下、『神のたもたるいのちあらば誰かためとかは我は思はむ』。拾遺集卷十、題しらず、人麿として載り、『いのちをばたれがためにかながくと思はむ』。萬葉集卷十一（二四一六）、寄物陳思、人麿歌集出、千早振神持在命誰爲長欲爲（チハヤフルカミノモタセルイノチヲバタガタメニカモナガクホリセム）がある。舊訓カミノタモテルイノチヲモタガタメニカハナガクホリフスール。ナガクホリセムは考の訓に從つた。

214 網代木（あじろぎ）の白浪よりてせかませば流るる水ものどけからまし

既出（四十四番）の、『あすかがはしがらみわたしせかませばながるゝ水ものどけからまし』と類似してゐる。圖書寮本第二、類從本、既出、四十四番に同じ。鷹司本、既出、第一・二句、『あすかがはしらなみたかし』。拾遺集卷八、『あすかの女王ををさむる時よめる、人麿、飛鳥川柵わたしせかませば流るる水ものどけからまし』。六帖、讀人不知、『あすかがは柵かけて』。萬葉集卷二（一九七）、

明日香皇女木瓲殯宮之時柿本朝臣人麿作歌一首并短歌の短歌第一に、明日香川四我良美渡之塞益者進留水母能杼爾賀有萬思がある。結句、古寫本中（金・類・古・神）ノドケカラマシ。

○

215 白浪はたてど衣にかさならす明石も須磨もおのがうらうら

圖書寮本第二、類從本、鷹司本、同様。拾遺集卷八に、題しらず、人麿として載つてゐる。又榮花物語に、柿本人麿作として出てゐる。

○

216 あらちをのかるやのさきに立つ鹿もいとわればかり物は思はじ

一本、第四句、『いとわがごとに』。圖書寮本第二、類從本、『立つ鹿のいとわがごとく』（も類）。鷹司本、缺。拾遺集卷十五に、題しらず、人麿として載つてゐる。

○

217 ほのぼのと明石の浦の朝霧にしまがくれ往く船をしぞ思ふ

圖書寮本第二、缺(?)。類從本、此歌に同。鷹司本、缺。古今集卷九、題しらず、讀人不知、『この歌はある人のいはく柿本人麿がなり』といふ左注がある。六帖に、人麿作として入る。今昔物語では小野篁の作になつて居る。

○

218 鳴神の音にのみ聞くまきもくの檜原(ひはら)の山をけふみつるかな

一本、第三句、「卷向の」。圖書寮本第二、類從本、題「山」、此歌に同。鷹司本、缺。拾遺集卷八に、人麿作、「山を詠める」と題して載る。六帖に入り、讀人不知。萬葉集卷七(一〇九二)、詠山、人麿歌集出、動神之音耳聞卷向之檜原山乎今日見鶴鴨がある。第二・三句、舊訓オトニノミキクマキモクノ。結句、元暦本ケフミツルカナ。

219 古にありけむ人もわがごとやみわの檜原にかざしをりけむ

圖書寮本第六、類從本、此歌に同じ。鷹司本、此歌缺。拾遺集卷八、人麿、『詠葉』としてあり、また、人麿として六帖に入る。萬葉集卷七(一一一八)、詠葉、人麿歌集出、古爾有險人母如吾等架彌和乃檜原爾插頭折兼がある。第三句、類聚古集ワガゴトヤ。和歌童蒙抄に、『イニシヘノアリケムヒトモワカコトヤミワノヒハラニカサシヲリケム』。

〇

220 よそにして雲居に見ゆるいもが家に早くいたらむ歩め黑駒

圖書寮本第二、類從本、初句、『よそにありて』。鷹司本、此歌缺。拾遺集卷十四、『道をまかりてよみ侍りける、人麿』として載り、初句、『よそにありて』。六帖に、同じく作者人麿、初句、『遠くありて』となつて居る。萬葉集卷七(一二七一)、行路、人麿歌集出、遠有而雲居爾所見妹家爾早將至歩黑駒がある。

〇

猿澤の池に身をなげたるうねべを見て詠める

221 わぎも子がねくたれ髪をさる澤の池の玉藻と見るぞ悲しき

圖書寮本第二、類從本、詞書、「さる澤の池にうねべの身なげたるを」。歌此歌に同じ。鷹司本、缺。この歌、大和物語に出で、拾遺集卷二十に、「さる澤の池に采女の身なげたるを見て、人麿」として載つてゐる。

〇

222 みなといりの芦分小船さはり多み我思ふ人に逢はぬ頃かな

一本、第四句、「こひしき人に」。圖書寮本第二、類從本、此歌に同じ。拾遺集卷十四、題しらず、人麿としてあり、萬葉集卷十一（二七四五）、寄物陳思、讀人不知、湊入之葦別小舟障多見吾念公爾不相頃者鴨とある、第四句、古寫本中（古）ワカヲモフ人ニ。

223 朝霜の消えみ消えずみ思へどもいかでか今宵明しつるかも　○

圖書寮本第二、此歌に同じ。類從本、第四句、『いかでこよひを』。鷹司本、第三句、『思ひつつ』。一本（和歌叢書頭注）、『朝霜の消えみ消ずみ思ひつつまた駒かへし君をこそ見め』とある。萬葉集卷十一（二四五八）、寄物陳思、人麿歌集出、朝霜　消消　念乍何此夜　明鴨（アサシモノケナバケヌベクオモヒツツイカニコノヨヲアカシナムカモ）がある。第四・五句、舊訓イカデコノヨヲアカシナムカモ。古寫本中（嘉・細）イカデカコヨヒアカシツルカモ。

224 みか月のさやけくもあらず雲隠れ見まくぞほしきうたて此頃　○

圖書寮本第二、類從本、此歌に同じ。鷹司本、上句、『ひさかたのあまてる月もかくれゆく』。拾遺集卷十二、題しらず、人麿としてあり、第二句、『さやかに見えず』。萬葉集卷十一（二四六四）、寄物陳思、人麿歌集出、若月　清不見雲隠　見欲　宇多手比日（ミカヅキノサヤニモミエズクモガクリミマクゾホシキウタテコノゴロ）がある。第二・三句、舊訓サヤカニミエズクモガクレ。結句、舊訓ウタタコノコロ。寫古本中（嘉・類・細）ウタテコノコロ。

225　まさしてふやその衢に夕占とふ占正にせよいもに逢ふよし

（　）

圖書寮本第二、此歌缺。類從本、『一本所載歌』中にあり、結句、『妹にあふべく』。鷹司本、第二句、『やそちまたそち』。拾遺集卷十三、題しらず、人麿、結句、『逢ふべく』。萬葉集卷十一（二五〇六）、寄物陳思、人麿歌集出、事靈八十衢夕占問占正謂妹相依がある。結句、舊訓イモニアヒヨラム。古寫本中（嘉）イモニアハムヨシ。

226　空の海に雲のなみ立ち月の船星のはやしに漕ぎかへる見ゆ

（　）

一本、第二句、『雲の波たつ』。圖書寮本第二、類從本、題『蒼天』。初句、『あめのうみに』。鷹司本、結句、『こぎかくされぬ』。拾遺集卷八、詠天、人麿』。六帖、人麿、初句、『天の川』、結句、『こぎかくる見ゆ』。萬葉集卷七（一〇六八）、詠天、人麿歌集出、天海丹雲之波立月船星之林丹榜隱所見。初句、古寫本中（細）ソラノウミニ、（神）アマノカハがある。和歌童蒙抄に、初句アマノカハ、

結句コキカクサレヌと訓んでゐる。

○

227 ちちに人はいふとも人はおりつがむわがはた物に白き麻ぎぬ

圖書寮本第二、類從本、『ちゝ、わくに人はいへどもをりてきむ我はたものに(の類)』。鷹司本、缺。拾遺集卷八、題しらず、人麿、『ちちわくに人はいふともおりてきむわがはた物に白き麻衣』。六帖、讀人不知、『ちなにはゝ人はいふともおりつがむわがはたもののゝ』。萬葉集卷七(一二九八)、寄衣、人麿歌集出、干各人雖云織次我二十物白麻衣。初句、舊訓チナニハモ。古寫本中(元・類・古)トニカクニ。第二句、古寫本中(元・古・神)ヒトハイヘドモ。結句、古寫本中(類・古・神)シロキアサキヌ。

○

せんとう歌

228 ます鏡見しかと思ふ妹に逢はむかも玉の緒の絶えたる思繁きこの頃

圖書寮本第二、類從本、『たえたる戀の』。(類從本、第四句、タマノヲノノと誤る。)。拾遺集卷九、柿本人麿、『みしかと

ぞ思ふ」、「たえたる戀の」。萬葉集卷十一(二三六六)、旋頭歌、古歌集出、眞十鏡見之賀登念妹相可聞玉緒之絶有戀之繁比者。初句、古寫本中(嘉・細)マスカヽミ。第三句、舊訓イモニアハムカモ。

229 夕されば秋風寒しわぎもこがときあらひ衣往きてはやきむ

圖書寮本第二、缺。類從本、此歌に同(第四句、「ときあらひぎぬ」と假名書)。拾遺集卷八、「もろこしへ遣はしける時によめる、人麿」として此歌がある。第二句、「ころもでさむし」。萬葉集卷十五(三六六六)、遣新羅使人等の海邊望月作歌九首中、由布佐禮婆安伎可是左牟思和伎母故我等伎安良比其呂母由伎弖波也伎牟がある。

230 おほなむちすくなひかみの造れりし妹背の山を見るがうれしさ

類從本、第二句、「すくなみかみの」、結句、「見るがともしも」。拾遺集卷十、「旅にてよみ侍りける、人麿」、第二句、「すくなみかみの」、結句、「見るぞ嬉しき」とあり、六帖には、人まろ、第二

句、『少彦名の作りたる』、結句『みるはしもよし』になつてゐる。萬葉集卷七（一二四七）、覊旅作、人麿歌集出、大穴道少御神作妹勢能山見吉がある。結句、舊訓ミレバヨシモ。古寫本中（神）ミレバウレシキ、（西・細）ミルハシヨシモ。

231 まきもくの山べ響きて往く水のみなわのごとに世をばわが見る

一本、第四句、『みつのあはこと』。圖書寮本第二、類從本、鷹司本、此歌缺。拾遺集卷二十に、『めの死に侍りて後かなしびてよめる、人麿』、第四句、『みなわのごとく』として載つてゐる。萬葉集卷七（一二六九）、就所發思、人麿歌集出には、卷向之山邊響而往水之三名沫如世人吾等者とある、第二句、舊訓ヤマベヒビキテ。第四句、古寫本中（類・神・細）ミナワノゴトク。

232 しきたへの袖かへしきみ玉だれのをちに過ぎたる玉もあらむやは

前に（四十三番）、『しきたへの袖かへしてし君やたれのうちのすきを又はあはむや』がある。圖書寮

本第二、類從本、既に出づ。「しきたへの袖かへし君たまだれのおちのすきせるきえてあらむやは」。鷹司本、此歌缺。萬葉集卷二（一九五）、柿本朝臣人麿獻泊瀬部皇女忍坂部皇子歌一首并短歌の短歌に、敷妙乃袖易之君玉垂之越野過去亦毛將相八方 とある。

233 秋田刈るかりいほつくりわが居れば衣手さむし露ぞ置きける ○

圖書寮本第二、類從本、鷹司本、此歌缺。新古今集卷五、題しらず、讀人しらず、初句、「秋田もる」として載り、萬葉集卷十（二一七四）、詠露、讀人不知に、「秋田苅借廬乎作吾居者衣手寒露置爾家留」とある。第四句、舊訓コロモデサムシ。六帖に、讀人不知、「秋田刈るかりほを見つつこきくれば衣手さむし露おきにけり」といふのがある。家持集に、初句、「秋の田の」とある。

234 やたの野に淺茅色づくあらち山峯の泡雪さむくぞあるらし ○

圖書寮本第二缺（マヽ）、類從本、此歌に同。鷹司本、此歌缺。六帖、讀人不知、初句、「矢田の野

り)。新古今集卷六、題しらず、人麿としてあり、萬葉集卷十(二三三一)、詠黃葉、讀人不知に、八田乃野之淺茅色付有乳山峯之沫雪寒零良之(ヤタノヌノアサヂイロヅクアラチヤマミネノアワユキサムクフルラシ)がある。結句、元曆本サムクアルラシ、類聚古集サムクゾアルラシ、神田本サムクゾフルラシ。家持集(類從本)にも出てゐる。

○

235 降る雪の空に消えぬべく思へども逢ふ由もなし年ぞ經にける

これは既出(一六五番)の、「あわ雪の降るに消えぬべく思へども逢ふよしもなみ年ぞ經にける」に類似し、重出と謂つていい。一本、第二句、「空に消ぬべく」。圖書寮本第二、類從本、既出。題、「ゆきにあひきて」。第二句、「空にけぬべし」、第四句、「あふよしをなみ」。鷹司本、缺。萬葉集卷十(二三三三)、冬相聞、人麿歌集出に、零雪虛空可消雖戀相依無月經在(フルユキノソラニキヌベクコフレドモアフヨシナクテツキゾヘニケル)がある。第四句、舊訓アフヨシヲナミ。類聚古集アフヨシモナク。結句、舊訓ツキゾヘニケル。

○

柿本の人丸、あからさまに京近きところに下りけるを、とく上らむと思ひけれど、いささかに障ることありてえ上らぬに、正月さへ二つありける年にて、いと春な

がき心地して、なぐさめがてらに此世にある國々の名を詠みける。これなんゐなかにまかり下りたり(二本、たりナシ)つるとて、或やむごとなき所にたてまつりけるとなむ(二本トナシ)

この詞書、圖書寮本第二、類從本には、『柿本人麿……京近き所にしはすの廿余り(廿よる(國))くだりけるを……とうのぼらむと……正月さへふたつあるとしにていとど……なぐさめかねて……國々をよみける……まかりたりつるつとて……』云々となつてゐる。なほ、圖書寮本第一には、この國々の歌は全部無い。鷹司本詞書、『人丸、あからさまに、京近きところへしはすの二十よる下りけるに、とく上らむと思ひけれど、いささか障ることありてえ上らぬに、正月さへ二つある年にていと侘ながき心地してなぐさめがてら此世にある國々を詠みける、これなんゐなかにまかりたりつるつとゝて或やごとなき所にたてまつりける』とある。

契沖の河社に、「人まろの集は、ひたぶるに信じがたき物なり。むなしく萬葉集の中より、ぬししらぬ歌までぬき出たり。六十よこくを、物の名によめる歌は、ことに用るにたらぬものなり。さすがに歌のすがたは、延喜天暦の後の作者のしわざなるべし」といひ、香川景樹の三十六人集解略には、「柿本集は後人の物せしは本よりの事ながら、いや果にあつめたる國名の歌は承平より天徳あたりにわたれるすがたにて、しかも上手のわざと見ゆめれば、その證とすべき事或はうつし謬まれる

こと、かつ〳〵かい出す』云々とある。

この詞書に據ると、人麿が京近きところに下つた趣にしてある。また、『正月さへ二つありける』といふのは、正月と閏正月と二つあつた歳といふことである。閏正月といへば、文武天皇の慶雲三年か、聖武天皇の神龜二年か、天平十六年か、桓武天皇の延暦元年か、延暦二十年かに當るわけである。そしてこの詞書は後人のいたづらだと看做しても、人麿歿年につき、神龜元年說や、大同二年說は除外していいと思ふし、天平元年說も除外していいとすれば、和銅二年說、慶雲四年說などが殘る。閏正月のあつた慶雲三年ごろは大體人麿は石見に居ただらうと推測していい。併しそれでは、『京近きところ』には該當しない。いづれにしても具合の惡いものであるから、ただ後人のおもひつきとして讀むべきである。

それから、なぜ、『正月さへ二つありける年にて』などと書いたかといふに、これは、下の『いと春ながき心地して』と聯絡があるのであつて、なほ、古今集の、『ふる年に春立ちける日よめる』とか、後撰集の、『しはすばかりに、大和へ事につきてまかりけるほどに、宿りて侍りける人の家のむすめを思ひかけて侍りけれども、やむことなき事によりてまかりのぼりにけり。あくる春、親の許につかはしける』などといふのと、同一系統に屬する心の使ひ方である。また、當時の人々は、閏

月について心が牽かれたらしく、「閏三月盡によみ侍りける」とか、「閏六月七日よめる」とか、あるのによつてそれを知ることが出來る。

また、國々の名を咏んだのは、萬葉卷十四あたりの影響といふよりも、古今集の物名の歌、大歌所御歌あたりの影響のやうである。

畿内五箇國

○

やましろ

236 うちはへてあな風さむの冬の夜やま白に霜の置けるあさみち

鷹司本に、結句、「ふれる朝道」。「夜やま白に」の「やましろ」と、「山城」と言ひ掛けてゐる。出所不明。古今集卷十九に、「秋の野になまめき立てる女郎花あなかしがまし花も一時」。風雅集卷十五に、「山さむし秋も暮れぬとつぐるかも槇の葉ごとに置ける朝霜」がある。景樹評して、「本末はなれたりと誰もおもふべし。しからず。又朝道めづらし」と云つてゐる。古今和歌六帖、夫木和

歌抄に、讀人不知、『朝道のふる道わけてなく鹿の立ち別れにし妻や戀しき』が載つて居る。夫木、第三句、『なくしかは』、結句、『人や戀しき』。古今和歌六帖の『朝道』の語を取つて、この歌を作つたものか、さういふ可能性もある訣である。

○

やまと

237 ふるみちに我やまどはむ古の野中の草もしげりあひにけり

一本、第四句、『草と』。『我やまどはむ』の中に『やまと』を含ませてゐる。これは拾遺集卷七、續古今集卷三に載り、『野中の草はしげりあひにけり（あひけり（續古今））』とある。拾遺集にもやはり、物名『やまと』を詠みこんだ歌とし、藤原輔相の作としてあり、拾遺抄には、清原元輔として載つてゐる。續古今集に、『題しらず、柿本人丸』とあるのは、この柿本集によつたのであらう。群書一覽に、『この歌拾遺抄に元輔とて一首入れたり。されば此の六十六首元輔の歌なるを後の人こと書きをそへて人丸集の中に收めたるなるべし』と説明した。類似の語あるものには、古今集卷二十神あそびの歌に、『神垣の三室の山の榊葉は神のみまへにしげりあひにけり』。拾遺集卷十二に、『み吉野の雪に籠れ

る山人もふる道とめてねをや鳴くらむ」等がある。

○

かうち

238 朝まだきわがうちこゆる立田山ふかくも見ゆる松のみどりか

「わかうち」の中に、「かうち」（河内）を含ませてゐる。この歌は新後拾遺集巻十に、題不知、人丸として載つたが、結句は「松の色かな」になつてゐる。景樹云。「こは河内をよめる也。假字はかふちなるを、かうちとよめるいかゞ。是をもて天暦のころより假名のみだれたるをしる。天暦のころかゝるを見て、延喜のころもかつ〳〵はたじろぎけん事しらる。然るに誰も和名抄の正しきを見て天暦のころまでは、みだりたることなしといふはあたらず。此頃しか亂れたるによりてこそ和名抄のえらびはおほせごともありつるなめれ。式みだれて延喜式あるたぐひなり」。元輔集に、「増鏡こたび世にやくもるとて塵を出ぬときくは誠か」といふ歌あり、これには結句に「か」があるが、なほ古今集の「か」止めの歌を拾ふと次のごとくである。「留むべき物とはなしにはかなくも散る花毎にたぐふ心か」。「秋風の吹上にたてる白菊は花かあらぬか浪の寄するか」。刈れる田に生ふる

ひつぢのほに出でぬはよを今更にあき果てぬとか』。『わがうへに露ぞおくなる天の川とわたる船のかいの雫か』。『老いぬとてなどか我身をせめぎけむ老いずば今日にあはまし物か』。

○

いつみ

239 蜑（あま）ならで海の心を知らぬかないつみてしほにみるめ刈るらむ

『いつ見』と『和泉（いづみ）』と言掛けてゐる。類從本には、第四句、『いつみつしほに』、結句、『からなむ』とある。拾遺集卷十九に、『玉藻かる蜑のゆきがたさす竿の長くや人を恨み渡らむ』がある。

○

つのくに

240 あし鴨の騒ぐ入江のみづならで世に住み難き我身なりけり

『みづ』の『つ』と『津』とに言掛けてゐる。類從本に、第三句、『水の江の』。新古今集卷十八に、題不知、人麿、第三句、『みつのえの』として載つた。契沖云。『これは、新古今雜に、人丸と

て入たるは、家集によれるなるべし。つのくにをば、いかにかくせるにか。みづのえといへるは足らず』。古今集卷十一に、『芦鴨のさわぐ入江の白波のしらずや人をかく戀ひむとは』。後撰集卷十九に、『初瀨川渡る瀨さへや濁るらむ世に住み難き我身と思へば』がある。

東海道十五箇國

○

いが

241 散りぬともいかでか知らむ山ざくら春の霞の立ちし隱せば

一本、第二句、『いかでかしらなむ』。類從本、題、『伊賀』。『いかで』の『いが』と『伊賀』と言掛けてある。續古今集卷二に、『春の歌とて、人丸』として載つた。類似の語のある歌は、古今集卷一に、『山櫻わが見にくれば春霞峯にも尾にも立ち隱しつゝ』、『誰しかもとめて折りつる春霞立ちかくすらむ山の櫻を』。『散りぬとも香をだに殘せ梅の花戀しき時の思ひ出にせむ』等がある。

○

伊勢

242 二葉より引きこそ植ゑめ見る人の老いせぬ物と松をきくにも

『老いせぬ』の中に、『いせ』（伊勢）を含ませてゐる。新續古今集卷一に、『題しらず、柿本人麿』として載つた。景樹云。『老の假名、おひならざる證とすべし。伊勢をよめる歌なり』。拾遺集卷五に、『二葉より頼もしきかな春日山木高き松の種ぞとおもへば』があり、後撰集卷四に、『二葉よりわがしめゆひし撫子の花の盛りを人に折らすな』がある。

○

しま

243 山がはの石間（いしま）をわけて行く水は深き心もあらじとぞ思ふ

類從本、題『しまのくに』（イ無）。『いしま』の『しま』と『志摩』と言掛けてゐる。續古今集卷十四に、『題しらず、柿本人丸』として載つてゐる。景樹云。『石走るなど、古へ皆いはばしるとよみていし

とはよまずと、ある人のいへるはさることなれど、古今集のいしばしるを後人のさかしらに直したる也とて、いはとのみしひてよまれたるは過たり。こゝにいはまといはでいしまとよめり。さらば古今集のこれ、いしばしるとよまんこと論あるべからず。この歌は志摩をよめる也』。古今集巻十四に、「石間ゆく水の白浪立返りかくこそは見めあかずもあるかな」がある。

○　をはり

244　春たてばうめの花がさ鶯のなにをはりにて縫ひとどむらむ

『何を針にて』の「をはり」と「尾張」と言掛けてゐる。景樹云、『尾張をよめる也。尾はをのかななることとしるべし』。古今集巻二十に、「青柳をかたいとによりて鶯のぬふてふ笠はうめの花がさ」。後撰集巻一に、「春雨の降らば野山に交りなむ梅の花がさありといふなり」がある。

○　みかは

245 あだ人の言に附くべき我が身かは知らばやよそに戀してふらむ

圖書寮本第二、類從本、鷹司本には、題、『參河』。第四句以下、『知らでや人の戀むといふらむ』とある。『我が身かは』の『身かは』と『三河』と言掛けてゐる。後撰集卷八に、『身をわけて霜や置くらむあだ人の言の葉さへに枯れもゆくかな』。古今集卷十一に、『立ち返りあはれとぞおもふよそにても人に心をおきつ白浪』がある。結句の『戀してふらむ』は、類從本の、『戀ひむといふらむ』の方が好いやうだが、後拾遺集卷十一に、『戀してふことを知らでや止みなましつれなき人の無き世なりせば』がある。

○

とほたあふみ

246 ひねもすにとほたあふみに種蒔きて歸る田長は苦しかるらん

『とほたあふみ』と遠た淡海、『遠江』に言掛けてゐる。景樹云。『遠江をとほたあふみといふは、あの字あまりてあやまり成事誰もしれり。このころよりはやく誤れり。されど此歌いかなる意とも

たしかにいひかたければ、證とまではなしかたし。もし遠田畔踏か。さらば、に文字ての誤なるべし。遠江は遠つ淡海の義で、和名抄に止保太阿不三。萬葉集に等保都安布美、又等倍多保美に作つてゐる。拾遺集卷十四に、「根蓴の苦しかるらむ人よりも我ぞます田のいけるかひなき」がある。

○

するが

247 ふじのねの絶えぬ思をするからに常磐に燃ゆる身とぞなりぬる

「するからに」の「するか」と「駿河」と言掛けてゐる。後撰集卷九に、「人こふる涙は春ぞぬるみけるたえぬ思のわかすなるべし」。古今集卷十九長歌に、「富じの根の燃ゆる思ひもあかずして別るる涙」。同じく卷十九に、「ふじのねのならぬ思に燃えば燃え神だに消たぬ空し煙を」、卷十四に、「昔といへば見まれ見ずまれ富士の根の珍しげなく燃ゆるわが戀」があり、後撰集卷五に、「明暮し守るたのみをからせつゝ袂そほづの身とぞ成ぬる」がある。

いづ

248 逢ふ事をいつしかとのみまつしまの變らず人を戀ひ渡るかな

類從本、題『伊豆』。『いつしか』の『いつ』と『伊豆』と言掛けた。また松と待と言掛けた。續古今集卷十二に、『題しらず、柿本人丸』として載つてゐる。古今集卷四に、『けふよりは今こむ年の昨日をぞいつしかとのみ待渡るべき』。拾遺集卷十一に、『逢ふ事をいつとも知らで君がいはむ常盤の山の松ぞ苦しき』がある。

○

249 すまの浦に鶴(つる)のかひ子(こ)のある時はこれか千世へむ物とやは見る

かひ

類從本、初句、『須磨のうらの』。『卵(かひ)』の『かひ』と『甲斐』と言掛けた。拾遺集卷十八に、『松の苔千年をかけておひ茂れ鶴(つる)のかひこの巣とも見るべく』。後撰集卷十一に、『千代へむと契置きてし姫松のねざしとめてし宿は忘れじ』がある。

○

さがみ

250 足柄のさか見に行かむ玉くしげ箱根の山のあけむあしたに

鷹司本、第四句、『ふたみのうらの』。『坂見に』の『さかみ』と『相模』を言掛けた。拾遺集巻十一に、『戀ひつゝもけふはありなむ玉くしげあけむあしたをいかで暮らさむ』。後撰集巻十九に、『足柄の關の山路を行く人は知るも知らぬもうとからぬかな』。千載集巻十九に、『燈して箱根の山に明けにけりふたよりみより逢ふとせしまに』がある。

○

むさし

251 栞（しをり）せむさしてたづねよあしびきの山のをちにてあとはとどめつ

類從本、第二句、『尋ねに』、結句、『とゞめん』。鷹司本、『たづねん』。『せむさして』の『むさし』を『武藏』とした。景樹云。『六帖に、行かよふ山の細道いかなればしをりも見えで跡はたゆらん。下紐はとけてやつけぬ玉鉾のしをりもしらぬ谷にわび（ぶ・た）ればとあると、此歌しをりのふるき

證なるべし』。千載集卷六に、『跡も絶えしをりも雪にうづもれてかへる山路に迷ひぬるかな』がある。

○

あは

252 春の田の苗代どころ作るとてあはけふよりぞせきは始むる

『畔は』を『安房』とした。類從本、題、『安房』。結句、『せきはじめつる』。鷹司本、『せきはじめける』。景樹云。『こは安房をよめる也。此ころまで畔をばあとのみいひけん。今雅俗ともにあせといふ。せは今俗に一うねをひとせといふせにてあにへだての意までをそへていふなるべし。せはへだつことなり。馬柵をマセ、關をセキといふ類皆しかり。セキのキは城なり』。後撰集卷十一に、『小山田の苗代みづは絶えぬとも心のいけのいひは放たじ』がある。『あは』は景樹が云つたごとく『畔』の意であらう。古事記上卷に、『營田之阿(畔)』。祝詞大祓に、『畔放』の語がある。

○

かむつふさ

253　とめゆかむ具（つぶさ）に跡は見えずとも鹿（しか）のはかりは知るといふなり

類從本、第二句、「つふさにあはと」。「行かむ具（つぶさ）に」の「かむつふさ」を「上つ總」とした。契沖云。「はかりは、和名集云。續搜神記云、聶支少時家貧。常照射。見二一白鹿一、射中レ之。明晨尋二蹤血一矣。今按俗云、照射、止毛止之、蹤血、波加利　今もゐなかには申す詞にや。肥前の國のもの丶申たるを、うけたまはりき」。頭註云、「萬葉ニ、イユシ、ヲトメルカハヘノニコ草ノトヨメルモ、ハカリヲタツネテ、シ、ヲモトメユクナリ」。景樹云。「かみつふさとのみ今はいへど、かむつふさともいふなるべし」。和名抄に、上總、加三豆不佐とある。

○

しもつふさ

254　梢しもひらけざりけり櫻花しもつふさこそまづは咲きけれ

「下つ房」を「下總」とした。圖書寮本第二、類從本、第二句、「開けざりつる」になつてゐる。景樹云。「下總をよめるなり」。和名抄に、下總、之毛豆不佐とある。「しもつふさ」は、「下つ房」

であらう。

ひたち　○

255 いつしかと思ひたちにし春がすみ君が山路にかからざらめや

類従本、第四句、『君が斗山に』。『思ひ立ち』の『ひたち』を『常陸』とした。景樹云。『かゝるいつしかのつかひざまを見て、寛治の頃よりいつのまになどやうの意に思ひとりそこなはれけんかし。これも猶いつしかとまち〳〵て思ひ立にしといふこゝろなり』。古今集卷十九に、『思へども猶うとまれぬ春霞かゝらぬ山のあらじと思へば』がある。

東山道八箇國

あふみ　○

256 流れあふみなとの水のうまければかたへも汐(しほ)はあまきなりけり

圖書寮本第二、第三句、『むちふれば』。類從本、『むしふれば』。類從本、第二句、『みかとの水の』。兩本、第四・五句、『かたへもしおはむまきなりけり』になつて居る。『合ふみなとの』の『あふみ』を『近江』とした。後撰集卷十三に、『たえぬとも何思ひけむ涙川流れあふ瀬もありけるものを』がある。圖書寮本及類從本の第三句不明。

○

257 わたつうみの沖にこち風早からしかのこ斑(まだら)に浪たかく見ゆ

みの

類從本、題、『美濃』。圖書寮本第二、第三句、『たかからし』。『わたつ海の』の『みの』を『美濃』にした。景樹云。『こちかせめづらし』。拾遺集卷十六に、『こち吹かば匂おこせよ梅の花主人なしとて春を忘るな』。後拾遺集卷十九に、『にほひきや都のはなは東路の東風(こち)の返しの風につけしは』があり、伊勢物語に、『時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿子(かのこ)斑(まだら)に雪の降るらむ』。續古今集卷十、

家持の歌に、『舟出する沖つ汐さゐ白妙のかしはのわたり波たかく見ゆ』がある。

○ ひだ

258 さして往く三笠の山し遠ければ今日は日たけぬあすぞ到らむ

圖書寮本第二、類從本、題、『飛驒』、第四句、『今は日たけぬ』。『日たけぬ』の『ひた』を『飛驒』にした。後撰集卷十四の問答歌に、『さしてこと思ひしものを三笠山かひなく雨のもりにけるかな』。『もるめのみ數多見ゆれば三笠山しるしる如何さして行くべき』があり、後拾遺集卷四に、『さしてゆく道は忘れて雁がねの聞ゆるかたに心をぞやる』があり、古今集卷八に、『けふ別れあすはあふみと思へども夜や更けぬらむ袖の露けき』。卷十に、『いさゝめに時待つ間にぞ日は經ぬる心ばせをば人に見えつつ』がある。

○ しなの

259 あだなりと云ひそめられし濡衣ひしなのみこそ立ち増りけれ

流布本一本、第三句、「ぬれ衣は」、（イぬれごろも」）。圖書寮本第二、類從本、題、「信濃」。第二句、「いひそめられし」、第三句以下、『濡衣はひしなのみこそたちまさるらめ』となつてゐる。鷹司本、「濡衣の」、「まさるらめ」。「干しなのみこそ」の「しなの」を「信濃」にした。景樹云。「こは信濃をよめり。上の歌は美濃也。此頃濃はのとよみて、みぬしなぬとははやくいはざりし證也。本より古今など野濃の假字のとのみかけれど、是に限らず假字をばちかき世に皆わたくしに引直したれば、その世のまゝにつたはれるはなし。されば皆またくはうけられず。梅などみなむめとかけれど、物名にあなうめとあるをもて、たま〳〵あやまちをしる類ひにて、ひし名のみわたつみのなどかく書まぎらはされぬ歌によりてさだむるの外あるべからず。物の名の歌はいとたはれてよからぬ物なから、いにしへの假字をしるにうへなきたまもの也けり。貫之あるは道風などの眞筆にあるによりてたゞすをあきらかなりとするもさることなめれど、こと誠にそのぬしたちのかき給へるにや、後の手かきのかきまがへたるにや、おぼつかなき限りはいかにすともまぬがれず。ちかき世にさる人々の眞跡といふものちりほふるを見るに、大かた疑はしき物なり。歌はその世々のさまその人々のす

がた外より似すべき術なきものにて塵もまがはぬ千歳の鏡也けり』。古今集巻一に、『仇なりと名にこそ立てれ櫻花年に稀なる人も待ちけり』。巻十三に、『秋の夜も名のみなりけり逢ふといへば事ぞともなく明けぬるものを』。『あふ事は玉の緒ばかり名の立つは吉野の川の瀧つ瀬のごと』。後撰集巻三に、『山櫻咲きぬる時は常よりも峯の白雲立ち増りけり』。なほ、後撰集巻三に、『春くれば咲くてふ事を濡衣にきするばかりの花にぞありける』。拾遺集巻十九に、『天の下遁るゝひとの無ければやきてし濡衣ひる由もなき』がある。『ひしな』は『干し名』であらう。

○

かむつけ

260 音に聞くよしのの櫻見に行かむ告げよ山もり花のさかりを

流布本一本、圖書寮本第二、類從本、題、『かんつけ』。『行かむ告げよ』の『かむつけ』を『上野』にした。續千載集巻一に、『題しらず、柿本人丸』として載り、結句、『花のさかりは』。和名抄に、上野、加三豆介乃とある。上毛野を略して上野と書いたものであらう。後撰集巻十五に、『音にきく松が浦島今日ぞ見るむべも心ある蜑はすみけり』。拾遺集巻九に、『音にきく鼓の瀧を打見れば

ただ山川の鳴るにそありける』。後撰集卷二に、『山守はいはゞいはなむ高砂の尾のへの櫻をりてかざさむ』。拾遺集卷一に、『告げやらむまにも散りなば櫻花僞り人にわれやなりなむ』がある。

○

しもつけ

261 春來ぬと人しもつげず逢坂のゆふつけどりの聲にこそ知れ

類從本、第二句、『つけよ』、第四句、『ゆふ付とりに』とある。『人しも告げず』の『しもつけ』を『下野』にした。續後拾遺集卷一に、『題しらず、柿本人麿』として、この歌仙歌集のとほりに載つた。和名抄に、下野、之毛豆介乃とある。古今集卷十一に、『逢坂のゆふつけ鳥もわが如く人や戀しきねのみなくらむ』。卷十二に、『こひこひて稀に今宵ぞ逢坂のゆふつけ鳥は鳴かずもあらなむ』卷十四に、『相坂のゆふつけ鳥にあらばこそ君がゆききをなくなくも見め』、なほ卷一に、『春來ぬと人はいへども鶯の鳴かぬ限はあらじとぞおもふ』がある。

○

むつのくに

262 いつか生ひむつのくに葦を見る程は難波の浦も名のみとぞ思ふ

流布本一本、鷹司本、第二句、『つのくむあしを』。圖書寮本第二、類從本、第四句、『なにはの浦の』とある。『生ひむ津のくに』の『むつのくに』を『陸奥の國』とした。『津の國葦』であるが、或は『つのくむ』のつもりであつたかも知れぬ。いづれにしても巧ではない。景樹云。『陸奥をよめる也。むつのくともいへりし證也』。和名抄に、陸奥、三知乃於久と注せられてゐる。古今集卷十二に、『津の國の難波の芦のめもはるに繁きわが戀人しるらめや』。後拾遺集卷一に、『難波潟浦ふく風に浪たてばつのぐむ芦の見えみ見えずみ』。拾遺集卷九に、『難波江の芦の花げの離れるは津の國かひの駒にやあるらむ』がある。流布本一本及び鷹司本に、『つのくむ葦』とあるから、原本がさうあつたらうといふ推察は無理でないやうである。併しさうすれば、『むつのくに』と合はぬ。山田孝雄博士は、『むつのく』とせば別に不可ではあるまいと云はれた。

○

いでは

263 夕やみはあな覺束な月かげの出でばや花の色もまさらむ

『出でばや』の『いでは』を『出羽』とした。續古今集卷二に、『題しらず、人丸』として載つた。出羽は、和名抄に以天波とあり、出庭の義だらうと云はれてゐる。萬葉集卷四（七〇九）に、『夕やみは道たづたづし月待ちて行かせ吾背子その間にも見む』。後撰集卷十二に、『夕やみは道も見えねど古さとはもとこし駒に任せてぞくる』。古今集卷十九に、『そへにとてとすればかかりかくすればあな云ひしらずあふさきるさに』。後撰集卷二に、『春くれば木隱れ多き夕づく夜覺束なしも花かげにして』がある。

北陸道 七ヶ國 類從本）

○

わかさ

264 春立てばわかさはみづに摘む芹の根深く人を思ひぬるかな

圖書寮本第二、類從本に、第二句、『わかさゝ水に』、結句、『思ひけるかな』とある。『わか澤』の『わかさ』を『若狹』とした。拾遺集卷一に、『澤水に蛙なくなり山吹のうつろふかげやそこにみゆらむ』。千載集卷十一に、『いかにせむ御垣が原に摘む芹のねにのみなけどしる人のなき』。萬葉集卷十一(二七六二)に、『奥山の石もと菅の根深くも思ほゆるかも吾が念妻は』がある。萬葉集も千載集もこの歌と直接の關聯を豫想することは無理とおもふが、參考のため抽出して置いた。

○

265 しが山を越えゆく人をつづらつゐちとせまたすときくは誠か

ゐちせむ

類從本、題、『越前』。『つづら杖ちとせ』から『越前』を導くことは困難であつて、誤寫を想像せしめるが、圖書寮本第二、類從本には、第二句以下、『越ゆく人のつくしつゐちせんわたすと聞くはまことか』になつてゐる。景樹云。『ゐちせんをよめる也。ちとせといふ所かきあやまれりとみゆれど、いかにともおもひよらず。つゝらつゐは鞭杖か、つゐのかなの證とすべし』。後の例の如く、肥前をヒゼ、豐前をブゼと云つたとせば、越前をヱチゼと云つて、ち歲の歲(セイ)をセとのみ云つたとも

解せられるが、いかにしても無理があるやうである。和名抄には、越前、古之乃三知乃久知と注されてある。大日本國語辭典には、葛杖を藤杖のこととし、『志賀山を越えゆく人はつゞらづゑつくし』ちせんまたずと』として引いてゐるが、未解決である。後撰集卷十七に、『わがためにおきにくかりしはしたかの人の手にありと聞くは誠か』。後拾遺集卷十六に、『生ひ立つをまつとたのめしかひもなく浪こすべしと聞くは誠か』竹取物語に、『年を經て浪立ちよらぬ住の江の待つかひなしと聞くは誠か』があり、その他『か』止めの歌については、前に『河內』の歌のところにあげた。

追考。圖書寮本第二、及び類從本には、『越ゆく人のつくしつゑちせんわたすときくはまことか』となつてゐるが、『つくしつゑ』は、『つゞらつゑ』の誤だとし、『志賀山を越ゆく人の葛籠杖ちせんわたすときくはまことか』といふ一首に落着くことになると思ふ。そして、『つゞらつゑ』は、山越ゆる旅人・修驗者・山人の用ゐる葛籠の杖だと解し、『ちせん』は、『地錢』のことだと解したい。『地錢』は、古へ畿內地方で私に鑄た錢で、東大寺文書に、『地錢』の內云々とあるのが即ちそれである。私鑄の錢のことが當時の人々に特殊な印象を與へたものと見え、かういふ言ひ方をしたものであらう。以上で、言掛けの、『ちせん』『越前』の解釋が出來た。そこで歌仙歌集の方の、『ちとせふたすに』は誤寫だらうといふことを大體確めることも出來た。

○

かが

266 おのがかくあけけるものを花と云へば、一つ匂に思ひけるかな

圖書寮本第二、類從本、題、『加賀』。第一・二句、『おのが香のありけるものを』、第四句、『一つ匂と』とあり、なほ鷹司本に『ありけるものを』とあるから、斯く落著く句であらう。『おのがかぐ』の『かが』を『加賀』とした。古今集卷九に、『夕づく夜覺束なきを玉くしげ二見の浦はあけてこそ見め』があり、卷十六に、『夢とこそいふべかりけれ世中に現あるものと思ひけるかな』がある。『花といへば』のごとき句は、續後拾遺集卷七に、『花といはば孰れか匂なしと見む散りかふ色の異ならなくに』。源氏物語蜻蛉の卷に、『花といへば名こそ仇なれ女郎花なべての露に亂れやはする』があり、共に紫式部の歌である。第一の歌、家集には、初句『花といへば』、第四句『ちりまがふ色の』になつてゐる。なほ右京大夫家集に、『花といへばうつろふ色もあだなるを君がにほひは久しかるべし』がある。時代を餘り顧慮せず參考のため書記して置く。

○

のと

267 咲けばかつ散りぬる山の櫻花こころのどかに思ひけるかな

圖書寮本第二、類從本、鷹司本、題、『能登』。第三句、『花さくら』とある。『のどかに』の『のと』を『能登』にした。續後撰集卷三に、『題しらず、人麿』として載つてゐる。古今集卷二に、『空蟬の世にも似たるか花櫻咲くと見しまにかつ散りにけり』。卷六に、『ふる雪はかつぞ消ぬらし足引の山の瀧つ瀬おとまさるなり』があり、後撰集卷九に、『夢にだに見る事ぞなき年を經て心のどかにぬる夜なければ』。拾遺集卷一に、『春はなほわれにてしりぬ花ざかり心のどけき人はあらじな』がある。

ゐちう

268 花のすゐちうにまさりて匂せばそれをぞ人は折りてとらまし

『すゐちうに』の『ゐちう』を『越中』とした。景樹云、『越中をよめるなり。ちうには中にとい

ふ意なるべし』。和名抄に、越中、古之乃三知乃奈加とある。『花のすゑ』の語は、玉葉集、風雅集に見えるが、古今集、後撰集、拾遺集あたりには見えないやうである。また、『ちう』は『中』、『宙』で、あひだ、中間の義で、すゑと對照せしめてゐる。ここは字音その儘用ゐてゐるのは注意すべきである。玉葉集巻十四に、『過ぎにける花の今まで匂せば今日のかざしに先づぞ折らまし』といふ歌がある。

○

ゑちご

269 人に似ずさがなき親の心ゆゑちごさへにくくおもほゆるかな

流布本一本、第四句、『につゝ』。『心ゆゑちごさへ』の『ゑちご』を『越後』とした。景樹云。『越後也。故の假字ゆゑなる證とすべし』。和名抄に、越後、古之乃美知乃之利とある。『さがなし』は、垂仁紀、推古紀等に不良の文字を當て、神代紀には性惡の文字を當ててゐる。伊勢物語に、『さるさがなきえびす心を見ては』。宇津保物語に、『ゆゆしくさがなき事をしつつ』等の例がある。拾遺集巻十七に、『ここにしも何匂ふらむ女郎花人の物いひさがにくき世に』。『ちご』は、乳兒（ちご）、孩子、

赤子、稚兒。和名抄に、『赤子、知古、今案合₂乳之義也₁』とある。『にくく』は憎くの意である。

○ さと

270 東路のもろこしさとに織りて裁つ布をや唐の衣といはむ

流布本一本、『きぬをや』。圖書寮本第二、鷹司本、『きぬをやからのころもといふらむ』。類従本、『きぬをやからのきぬといふらむ』。『里』を『佐渡』とした。『もろこしさと』は、『唐里』で、東國にさういふ物を織る歸化人の一部落があるものの如くに思つたいひあらはし方のやうである。或は『もろこし里』は固有名詞でもあつたのであらうか。『もろこし里』といふ名詞は、『もろこし人』、『もろこし舟』などと同様な合成名詞である。相模の中郡に高麗寺山があり、諸越原（唐原）があるから、其邊を、『もろこし里』と稱したのであらうと考へることも出來る。

山陰道

○

271 春雨にたには水こそまさるらしたはたたきこえ音高くなる

流布本一本、題、『たは、ィたには』。第二句、『はには、ィたには』。第四句、『たはたたきこゑ』。岡書寮本第二、類從本、第二句、『よには』、第四句、『たにはたきえは』。鷹司本、第四句、『たにはたきこえ』になつてゐる。『たには』を『丹波』とした。和名抄に、丹波、太邇波とあり、なほ古書には旦波とも作つてある。和銅六年に丹後と分離した。『たには』は、『田には』であつて、『谷は』ではあるまい。『たはたきこえ(ゑ)』は、『田は唯聞こえ』か、『田は叩き聲』かであらう。千載集卷一に、『三室山谷にや春の立ちぬらむ雪の下水岩たたくなり』があるから、田に水の増さつた趣を、『田は叩きこゑ』と云つたものかも知れない。若し『たには』は、『谷は』だとすると、第四句も鷹司本に從つて、『たには』を採り、『谷叩きごゑ』と解しても解釋の出來ないことはない。此は識者の敎を乞ひたい。

○

たにご

たのむべき我だにこゝろつらからば深き山にも入らむとぞおもふ

「我だに心」の「たにこ」を「丹後」とした。此歌は、流布本にも鷹司本にも缺けて居り、流布本には、山陰道の下に「丹後國不見如何」と注してあるが、今、圖書寮本第二、類從本によつて補つて置いた。和名抄に、丹後、太邇波乃美知乃之利とある。後撰集卷二に、「時しもあれ花の盛につらければ思はぬ山に入りやしなまし」。拾遺集卷十五に、「恨みての後さへ人のつらからば如何に言ひてかねをもなかまし」。後拾遺集卷十二に、「わか心こころにもあらでつらからば夜かれむ床の形見ともせよ」がある。「深き山にも」の句は、他に見あたらぬやうである。萬葉では、山に「深し」とは言つてゐない。後撰集に「山深み」があり、西行あたりになると「深き山」と言つてゐる。「深き山路」といふ句も、古今集、後撰集あたりには見えぬが、新古今集卷十に、「白雲のかかる旅ねもならはぬに深き山路に日はくれにけり」があり、新古今以後の勅撰集には數例見えてゐる。なほ、後撰集卷十二、「足引の山におふてふもろ蔓もろともにこそ入らまほしけれ」があり、玉葉集卷九に、「うちたのむ君か心のつらからば野にも山にも行きかくれなむ」といふのがある。

○

たぢま

272 春がすみ立ちまふ山と見えつるはこのもかのもの櫻なりけり

『立ちまふ』の『たぢま』を『但馬』とした。續後撰集卷二に、『題しらず、人丸』として載つた。景樹云。『かのつくば山のこのもかのもは山のあなたおもて山のこなたおもてをいふ事と人もいひ、さもときこえたれど、此歌によりて思へば、たゞ見渡したる山のこゝかしこ成べし。大井川のみゆきの序なるは河のうへなればこゝにかゝはらず』。新古今集卷五に、『薄霧の立ちまふ山の紅葉はさやかならねどそれと見えけり』。古今集卷二十に、『筑波根のこのもかのもに蔭はあれど君がみ蔭に增すかげはなし』。後撰集卷七に、『山風の吹きのまにまに紅葉はこのもかのもに散りぬべらなり』がある。

○

いなば

273 鶯の聲をほのかにうち啼きていなばいづれの山をたづねむ

類從本、結句、「山に尋む」。「去なば」を「因幡」とした。古今集卷四に、「秋風に聲をほにあげてくる船は天のと渡る雁にぞありける」。濱松中納言物語に、「み吉野の雪の内にも住み侘びぬいづれの山を今は尋ねむ」がある。このあたりの歌は、濫りに句割があり、無理があつて、決して巧ではないことが分かる。

○

ははき

274 山ぎははきよく見ゆれどあまつ空ただよふ雲の月やかくさむ

圖書寮本第二、類從本、初句、『山のはゝ』、第三句、『天の原』。『山ぎは山のはゝはきよく』の『ははき』を『伯耆』とした。續古今集卷四に、『題しらず、柿本人丸』、初句、「山のはは」として載つた。景樹云。「山きはといふは、山のはわたりをいふと見ゆる證とすべし」。和名抄に、伯耆、波々岐とある。「きよく見ゆれど」は他に見あたらず、「ただよふ雲の」の如き用例も、古今・後撰・

拾遺あたりには見えない。

○

いはみ

275 よとともに浪なき磯の岩見ればかたへぞ乾く時はありける

類從本、鷹司本、第二句、『浪なれ磯の』とある。『岩見れば』の『いはみ』を『石見』とした。景樹云。『磯はやがて岩のことにて、いと〳〵ふるくはさこそのみ見ゆめれ、この時などよりは、さるかたのみにあらざる證とすべし』。古今集卷三に、『夏と秋とゆきかふ空の通路はかたへ涼しき風や吹くらむ』がある。

○

おき

276 草の葉におきゐる露の消えぬ間は玉かと見ゆる事のはかなさ

流布本一本、第二句、『おきぬる露の』。『置き』を『隱岐』とした。新拾遺集卷十に、『題しらず、

人丸」として載り、第三句、「消えぬまに」となつて居る。後拾遺集卷十七に、「草の葉に置かぬばかりの露の身はいつ其數に入らむとすらむ」、後撰集卷九に、「夕暮はまつにもかかる白露のおくる朝や消えははつらむ」がある。

○

いづも

277 程もなく今朝ふる雪の朝まだきいつもと云ふは虚言か君

圖書寮本第三、類從本には、初句、「あともなく」、第三・四句、「あさまたいつもると聞くは」（鷹司本同）になつてゐる。『何時も』を『出雲』とした。拾遺集卷十一に、「程もなく消えぬる雪はかひもなし身をつみてこそ哀と思はめ」。卷三に、「朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦きぬ人ぞなき」。卷二十に、『思ふよりいふは愚に成りぬれば譬へていはむ言の葉ぞ無き』があり、萬葉集卷十一（二四六六）に、「淺茅原小野に標結ふ空ことをいかなりと云ひて君をし待たむ」。後撰集卷十六に、『雲居路の遙けき程のそらごとはいかなる風の吹きてつげけむ』がある。

山陽道

○ はりま

278 立ちかはります田の池の浮蓴(うきぬなは)くれども絶えぬ物にぞありける

『かはります田』の「はりま」を「播磨」とした。「來れども」と「繰れども」と言掛け、初句に聯關せしめてゐる。拾遺集卷十二に、「なき事を磐余(いはれ)の池の浮きぬなはくるしき物はよにこそありけれ」。後拾遺集卷十四に、「我戀はますたの池のうきぬなは苦しくてのみ年をふるかな」。卷十八に、『出づる湯のわくに懸れる白絲はくゝる人絶えぬものにぞありける』がある。

○ みまさか

279 君がみまさがなく常にはなれつつわが花園を踏みしだくめり

流布本一本、圖書寮本第二、類從本、第四句、『我が花そのに』。『御馬さがなく』の『みまさか』を『美作』とした。後拾遺集卷三に、『夏刈の玉江の芦をふみしだき群れ居る鳥のたつ空ぞなき』があり、催馬樂、竹河に、『竹河の橋のつめなる橋のつめなる花園に花ぞのに我をば放てや我をば放てやめざしたぐへて』がある。

○

びぜ

280 ときは山二葉の松の年を經てくひぜにならむ年を見てしか

類從本、題、『ひせに』。圖書寮本第二、結句、『ときを見てしな』（類從本同）、『ときをこそまて』。『くひせ(に)』の『ひせ(に)』を『備前』にした。景樹云、『備前也。くひの假字くゐならざる證也』。和名抄に、備前、岐比乃美知乃久知とある。『くひせ』は代株の事で、和名抄に、株、久比世と注してある。時代は後れるが、散木奇歌集卷九に、『若々となりばえしても見ゆるかなくひせにもとはまことなりけり』。夫木和歌抄卷十六に、『枯れたてる櫨のくひせのわかだちに色づくと見し葉さへちりぬる』があり、なほ後撰集卷二十に、『植ゑ置きし二葉の松はありながら君か千歳のなきぞ悲し

き』。古今集卷七に、『秋くれど色も變らぬときは山よその紅葉を風ぞかしける』がある。

○

びちう

281 袂ひぢうきて身さへぞ流れつるわりなきこひのあはぬ涙に

流布本一本、第四句、『わかなき』。圖書寮本第二、『わりなき』。類從本、『わかなき』。『ひぢ浮きて』の『ひちう』を『備中』とした。和名抄に、備中、吉備乃美知乃奈加とある。古今集卷一に、『袖ひぢて結びし水の氷れるを春たつけふの風やとくらむ』。後撰集卷五に、『露かけし袂ほすまもなきものをなど秋風のまだき吹くらむ』。金葉集卷四に、『おとにだに袂をぬらす時雨かな槇の板屋のよるの寐覺に』があり、後撰集卷十二に、『浪の上に跡やはみゆる水鳥の浮きてへぬらむ年は數かは』。卷九に、『思ひだに驗なしてふ我身にぞあはぬ歎きの數はもえける』。古今集卷十四に、『心をぞわりなきものと思ひぬるみる物からや戀しかるべき』がある。

○

びご

282 ひごろ經て見れどもあかぬ櫻花風のさそはむことのねたさよ

「日ごろ」の「ひごろ」を「備後」とした。和名抄に、備後、吉備乃美知乃之利とある。後拾遺集巻五に、「見渡せば紅葉しにけり山里はねたくぞ今日は一人きにける」、拾遺集巻一に、「足引の山がくれなる櫻ばな散り殘れりと風に知らるな」がある。風のさそふといふ風の句は、勅撰集では續古今集・新後撰集・新千載集等にある。「見れどもあかぬ」の句は、古今集・後撰集には無く、拾遺集巻三に、「日ぐらしに見れども飽かぬ女郎花野べにや今宵旅寝しなまし」、巻四に、「ひねもすに見れども飽かぬ紅葉はいかなる山の嵐なるらむ」がある。

あき

283 鶯のあきてたちぬる花の香をかぜのたよりに我は待つかな

図書寮本第二、類従本、結句、「まつるかな」。「あきて」の「あき」を「安藝」とした。「あきて」は「飽きて」であらう。後撰集巻五に、「心ありて鳴きもしつるか蜩の何れも物のあきてうければ」

古今集卷一に、『花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる』。拾遺集卷二十に、『君まさばまづぞ折らまし櫻花風のたよりに聞くぞかなしき』がある。

○

すはう

284 水鳥のたちゐてさわぐ磯のすは浮べる舟ぞよそに過ぎける

圖書寮本第二、類從本、第三句、『みつのすは』、結句、『うきていにける』。鷹司本、『みづのすは浮べる舟ぞよきていそける』になつて居る。『巣はうかべる』の『すはう』を『周防』とした。景樹云。『周防也。いそのすは磯の洲也。沖つ洲にむかへる名なり』。和名抄に、周防、須波宇とある。拾遺集卷四に、『水鳥のしたやすからぬ思にはあたりの水も氷らざりけり』。古今集卷十七に、『水の上に浮べる船の君ならばこゝぞ泊りといはましものを』。後撰集卷十七に、『大井川うかべる舟の篝火にをぐらの山も名のみなりけり』。後撰集卷十五に、『うば玉の今宵ばかりぞあけ衣あけなば人をよそにこそ見め』がある。

○

ながと

285 海の中ときはに入りてかづく蜑(あま)も人にあはびはともしかりけり

圖書寮本第二、第二句、『ことにいでいふて』、第四句、類従本共に、『人にはあはび』になつてゐる。『中常盤(なかときは)』の『なかと』を『長門』とした。後撰集卷十二に、『常盤にと頼めし事は待つ程の久しかるべき名にこそありけれ』があるが、『ときはに入りて』の句は素人じみて巧でない。古今集卷十四に、『伊勢の蜑の朝な夕なに潜(かづ)くてふみるめに人をあくよしもがな』。古今集卷十九に、『人にあはむ月のなきには思ひ置きてむね走り火に心やけをり』があるが、『人にあはびは』は俗調甚しいものであらう。

南海道

○

きのくに

286 淺緑（あさみどり）野邊のあを柳出でて見むいとを吹き來る風はありやと

『吹き』の『き』を『木』とした（木國、紀伊）。新拾遺集卷一に、『題しらず、柿本人丸』として載つてゐる。景樹云。『紀伊也。題にきのくにとはいかでかける』。拾遺集卷一に、『淺緑野べの霞はつつめどもこぼれて匂ふ花ざくらかな』。古今集卷一に、『青柳の糸よりかくる春しもぞ亂れて花のほころびにける』がある。

○

あはぢ

287 わが誓ふことを誠と思はずばあはちはやぶる神に問へきみ

『あはち早振神』の『あはち』を『淡路』とした。『あは』は感動詞である。拾遺集卷六に、『君が世を長月とだに思はずばいかに別れのかなしからまし』。榮花物語に、『住吉の神に問はばや古もかかるみゆきはあらじとぞ思ふ』がある。『あは』につき山田孝雄博士の敎をあふいだ。

○

288 木末(こずゑ)のみあはと見えつつ帚木(ははきぎ)の本(もと)をもとより見る人ぞなき

類従本、結句、『しる人ぞなき』。『あはと』の『あは』を『阿波』とした。景樹云。『そのはら伏やのうたによりて、箒木の説委しくのちのものにいはれたるを、いかにぞやおぼえたるに、此歌によりておもへばさることも也けんかし。ありとは見えて逢ぬ君哉とよめると時代いくばくもかはらなければ也。又あはとは見つゝとありてはきこえず、いかゞ、聊か書誤あるべし』。大鏡及大和物語にある、『濱千鳥飛び行く限ありければ雲たつ山をあはとこそ見れ』も、源氏物語松風の、『廻來て手に取るばかりさやけきや淡路の島のあはと見し月』も『あは』は此處も感動詞だらうか、『淡と』といふ意味にも使つてゐるやうである。新古今集卷十六の躬恒作、『淡路にてあはと遙かに見し月の近きこよひは所からかも』もさうであるから、この歌もさう解していいやうである。

○

さぬき

289 我はけさぬぎて歸りぬ唐衣（からごろも）よのまといひしことを忘れず

圖書寮本第二、類從本、第二句、『歸りつ』、結句、『忘れで』。『けさ脱ぎて』の『さぬき』を『讃岐』とした。千載集卷六、相模の歌に、『哀にも暮れゆく年の日數かな歸らむ事は夜のまと思ふに』があつて參考となる。なほ土佐日記に、『白散を或者よのまとて船屋形にはさめりければ』云々とある。夜間、夜中のことである。この歌は表現は巧ではない。『よのまにいひし』ぐらゐのつもりとも思ふが確かではない。古今集卷十、物名に、『我はけさうひにぞ見つる花の色をあだなるものといふべかりけり』がある。

○

いよ

290 はかなしや風にうかべる蜘蛛のいよ心細くも空にわたれる

流布本一本、第四句、『心ほ(そ)くそ』。類從本、第二句、『風にまがへる』、第四句、『心ほそくて』。『巢（い）よ心細く』の『いよ』を『伊豫』とした。『いよ』は『いや』と同じく愈の意も存するであ

らう。景樹云。「伊豫也。蛛のゐとはかくべからず、いなる證也」。千載集卷十一に、『はかなしや枕定めぬうたたねにほのかにまよふ夢の通路』。後撰集卷十八に、『風ふけば絶えぬと見ゆる蜘蛛のいも又かきつかでやむとやはきく』。後拾遺集卷十七に、『大空に風まつほどの蜘蛛のいの心細さをおもひやらなむ』がある。

○ とさ

291 湊さる舟こそけさは怪しけれ日たけて風の吹きてかへるに

圖書寮本第二、類從本、第四・五句、「日たけば風のふきてかへすに」。『湊さる』の『とさ』を『土佐』とした。拾遺集卷十一に、『湊いづる蜑の小舟のいかりなは苦しきものと戀をしらぬ』。卷十五に、『怪しくもいとふにはゆる心かないかにしてかは思絶ゆべき』がある。

西海道（十一ヶ國　類從本）

○

ちくせ

292 かたみちくせにつくれと言ひ遣らむましき若菜も生ひば摘むべく

圖書寮本第二、類從本、初句、『かたみちち』（鷹司本同）、第三句、『蒔きし』。『片道くせに』の『ちくせ』を『筑前』とした。初句は『かたみち』と訓んでゐるが、『かたつ道とよむか』といふ長連恆氏の説を參考とすべきである。和名抄に、筑前、筑紫乃三知乃久知とある。ゼンを單にゼとしてゐる。『くせ』は久世の地名か。或は『曲』、『癖』の意か。初句、類從本、『片身乳癖（かたみちくせ）』でもあらうか。『籠（かたみ）』と關係あるか。識者の教を乞ふ。筑後缺如。流布本に、『西海道』の下に『ちくご不見』、類從本に、この歌の後に、『ちくご哥本になし』と注してある。

○

ひせ

293 人を戀ひせめて涙のこぼるればこれたかかたの袖ぞ濡れける

圖書寮本第二、類從本、題、『ひせん』（流布本に、本も同じ）。第四句、『こなたかなたの』。『戀ひせめて』の

『ひせ』を『肥前』とした。續古今集卷十四に載り、『戀の歌の中に、人丸』、第四句、『こなたかなたの』となつてゐる。和名抄に、肥前、比乃三知乃久知とある。後拾遺集卷十一に、『逢ふまでとせめて命のをしければ戀こそ人の命なりけれ』。卷十二に、『恨むとも今は見えじと思ふこそせめてつらさの餘りなりけれ』がある。『たかかた』は播磨の地名であらう。後撰集卷十六に、『物思ふと行きても見れば高潟(たかかた)の蜑の苫屋は朽ちやしぬらむ』がある。後撰集の歌で見るに、高潟は海濱であるから、そこでこの浦でも、『袖ぞ濡れける』といつたものであらう。

○

ひご

294 誰しかも我を戀ふらむ下紐の結びもあはず解くるひごろは

圖書寮本第二、類從本、第四・五句、『結びもあへず解くるこころは』になつてゐる。『日ごろは』の『ごろ』を『肥後』とした。續古今集卷十四に、『題しらず、柿本人丸』として載つた。第四・五句、類從本に同じ。和名抄に、肥後、比乃美知乃之利とある。古今集卷一に、『誰しかもとめて折りつる春霞立ちかくすらむ山の櫻を』、後拾遺集卷十一に、『朽ちにける袖の印は下紐の解くるになど

か知らせざりけむ』がある。

○

ぶせ

295 春の野にきのふうせにしわが駒をいづれの方にさして求めむ

圖書寮本第二、類從本に、題、『ふうせ』とある。『きのふ失せ』の『ふうせ』を『豊前』とした。景樹云。『豊前なり。次の豊後に花にてふこゝにて常に云々とありて、ぶごとよみたれば、こゝもぶせとのみよむべきを、ぶうせとあるは、ふの韻脚ぅなれば、ふうとのばへたるならん。木の國をきい、屠蘇をとおそとのばへし類也。此時まではもとのことわりだにきはめぬれば、心の行にしたがひて、詞をおのがまにまに、のべもつゞめもうたへる也けり』。一本題ブゼニ。ブゼンをブゼともブゼニともしてゐたものと思ふ。和名抄に、豊前、止與久邇乃美知乃久知とある。拾遺集卷十の神樂歌に、『わが駒は早く行かなむ朝日子がやへさす岡の玉笹のうへに』。後撰集卷十四に、『もるめのみ數多見ゆれば三笠山しるしる如何さして行くべき』がある。

○

296 花に蝶ここにて常に睦れなむのどけからねば見る人もなし

『蝶ここに』の『ぶご』を『豊後』とした。はじめはブゴと言つたのがブウゴとなりブンゴとなつたのであらう。和名抄に、豐後、止與久邇乃美知乃之利とある。拾遺集卷二十に、『女郎花匂ふあたりにむつるればあやなく露や心置くらむ』がある。『花に蝶』といふ句といひ、『のどけからねば』といふ句といひ、俗調の甚しきもののごとくである。

○

297 あはぬ戀うかりけりとぞ思ひぬる身をば焦せど驗なければ

『戀ひうかり』の『ひうか』を『日向』とした。景樹云。『日向也。いと古へはひむかといひけり。はや〳〵此世のころはひうかとのみいひし證也。是なんやがて上のぶんごをぶうごとかよはせるうらへなりけり』。後撰集卷十一に、『伊勢の海に汐やく蜑の藤衣なるとはすれどあはぬ君かな』。後拾

遺集卷十三に、『來じとだに云はで絶えなばうかりける人の誠をいかで知らまし』。千載集卷三に、『ともしする火串を妻と思へばや逢見て鹿の身を焦すらむ』。後撰集卷十の貫之の歌に、『涙にも思ひのきゆるものならばいとかく胸は焦さざらまし』。卷九に、『消えはててやみぬばかりか年をへて君を思ひの驗なければ』がある。

〇

おほすみ

298 わが宿におほすみ山のいかなれば秋を知らずてときはなるらむ

圖書寮本第二、類從本、初句、『我がやどの』。『おほすみ山』の『おほすみ』を『大隅』とした。『大すみ山』は山城の綴喜郡の大住のことであらうか。ほかのところにも『久世』があつたから、さう解していいやうである。後拾遺集卷五に、『いかなれば同じ時雨に紅葉する柞の森の薄く濃からむ』。古今集卷一に、『常磐なる松のみどりも春くれば今一しほの色まさりけり』。拾遺集卷十八に、『花の色も常磐ならなむなよ竹の長きよに置く露しかゝらば』がある。

〇

さつま

299 春の野の花をくさぐさつまむとてさも筐(かたみ)をもつくりつるかな

「くさ摘まむ」の「さつま」を「薩摩」とした。「かたみ」は「かたま」即ち籠である。風雅集巻十八に、「くさぐさの草木の種と思ひしを潤す雨は一つなりけり」。後拾遺集巻十一に、「逢事はさもこそ人め難からめ心ばかりはとけて見えなむ」。千載集巻十二に、「などやかくさも暮れがたき大空ぞ我待つ事はありと知らずや」がある。拾遺集巻七に、「白露の懸るかやがて消えざらば草葉ぞ玉の櫛笥ならまし」がある。

○

ゆき

300 ゆき通ふ雲井は路も無きものをいかでか雁のまどはざるらむ

図書寮本第二、類従本、第二三句、「ゆきかへる雲井に道も」。「ゆき通ふ」の「ゆき」を「壹岐」とした。續千載集巻四に、「題しらず、人麿」として載つた。結句、「迷はざるらむ」。羣書一覧に、

『丹後筑前の兩國かけたれど、壹岐對馬入りたる故、六十六首となれり。壹岐を假名にてゆきとかけり』。景樹云。『壹岐也。是もいとふるくは伊岐島ともかければ、いきといはん事もとより論なし。壹をゆとはよむべからざるを、萬葉のころより由吉とかけるよりさのみいひきたりて、此ころもなほゆきといへればぞ此歌はありける。和名抄もおなじ。今はまたいきとのみいひて、ゆきとはいはず。いつよりもとにかへりけんおぼつかなし。是も本はいきかよふとよみたるにもやあらんともいはるれど、猶さにはあらじかし』。萬葉集卷十五(三六九四)に、毛奈久由可牟登由吉能安末能保都手乃宇良敝乎。同卷(三六九六)に、新羅奇敝可伊敝爾可加反流由吉能之麻由可牟多登伎毛於毛比可禰都母等とあり、『由吉』は皆、『壹岐』を示してゐる。なほ、壹岐守板氏安麻呂。壹岐目 村氏彼方。到二壹岐島一雪連宅滿忽遇二鬼病一等の例があり、『壹』をユと訓んでゐる。これは、漢次音、ユだからである。『壹』のイツは阿行の伊でなくて、也行の以であるから、由となるのである。これは太田全齋の解説である。『愚案。是ニテ影一母第四等の耶一行ナルヲ證二ベシ』(漢呉音徵)。後撰集卷十九に、『我をのみ思ひつるがの越ならば歸るの山はまどはざらまし』。拾遺集卷七に、『水もなく舟も通はぬ此島にいかでか海士のながめかるらむ』がある。

○

301 山川に水しまさらば水上(みなかみ)につもる木の葉はおとしはつらむ

類從本、初句、『山きはに』。『水し增らば』の『つしま』を『對馬』とした。新後拾遺集卷八に人丸作として入つた。初句、『山川の』。金葉集卷三に、『歸るさは淺瀨も知らじ天の河あかぬ涙に水しまさらば』。後拾遺集卷五に、『水上に紅葉ながれて大井川むらごに見ゆる瀧の白絲』がある。

右で大體の考を了へた。ついでに對馬に關係ある歌は、萬葉卷一から見當るから、參考のためその數首を記し置かうとおもふ。

三野連名闕入唐時春日藏首老作歌

在根良對馬乃渡渡中爾幣取向而早還許年（卷一、六二）

到對馬島淺茅浦舶泊之時、不レ得二順風一、經停五箇日、於是瞻二望物華一各陳二慟心一

毛母布禰乃波都流對馬能安佐治山志具禮能安米爾毛美多比爾家里（卷十五、三六九七）

古今集以後の歌で、氣づいたもの、

嘉言對馬になりて下り侍りけるに人にかはりて遣しける　相模

厭はしき我命さへゆく人のかへらむまでぞをしく成ぬる

對馬になりてまかり下りけるに津の國のほどより能因法師がもとにつかはしける　大江嘉言

命あらば今(イまた)歸りこむ津の國の難波ほりえの芦のうらわに

かういふ歌が目についた。筑紫に旅した歌が可なりあるし、新古今には、「入唐し侍りける時いつほどか歸るべきと人のとひ侍りければ。旅衣たちゆく浪路とほければいざ白雲のほどもしられず」といふ歌もあつて、壹岐、對馬を通つて行つたものであるから、國づくしの歌ならば自然壹岐對馬までも及ぶこととなるのである。對馬は、津島、津のある島の義だといはれてゐる。魏志に對島と見え、書紀、和名鈔等に對馬島などと書いた。

勅撰集選出歌考證

〔古今集〕　總數七首

卷三	夏歌	一
卷四	秋歌上	一
卷六	冬歌	一
卷九	羇旅歌	一
卷十三	戀歌三	二
卷十七	雜歌上	一

〔拾遺集〕　總數百四首（内長歌一首、旋頭歌二首、重出一首）

卷一	春	二
卷二	夏	一
卷三	秋	三
卷四	冬	三
卷六	別	一
卷八	雜上	十二
卷九	雜下	五（長歌一旋頭歌一）
卷十	神樂歌	三
卷十一	戀一	六
卷十二	戀二	七
卷十三	戀三	十八
卷十四	戀四	十一
卷十五	戀五	九
卷十六	雜春	一
卷十七	雜秋	八
卷十八	雜賀	一
卷十九	雜戀	六（重出一）
卷二十	哀	七

〔新古今集〕　總數二十三首

卷三	夏歌	一
卷四	秋歌上	二
卷五	秋歌下	六
卷六	冬歌	二
卷八	哀傷歌	一
卷十	羈旅歌	二
卷十一	戀歌一	三
卷十三	戀歌三	一
卷十五	戀歌五	二
卷十七	雜歌中	二
卷十八	雜歌下	一

〔新勅撰集〕　總數六首

卷四	秋歌上	一
卷五	秋歌下	一
卷十四	戀歌四	三
卷十八	雜歌三	一

〔續後撰集〕　總數十一首

卷一	春歌上	一
卷二	春歌中	一
卷三	春歌下	一
卷五	秋歌上	一
卷七	秋歌下	二
卷八	冬歌	一

巻十一	戀歌一	一
巻十二	戀歌二	一
巻十五	戀歌五	一
巻十九	羇旅歌	一

〔續古今集〕 總數二十六首

巻一	春歌上	二
巻二	春歌下	二
巻三	夏歌	一
巻四	秋歌上	二
巻五	秋歌下	一
巻九	離別歌	一
巻十	羇旅歌	三
巻十一	戀歌一	二

巻十二	戀歌二	一
巻十四	戀歌四	六
巻十七	雜歌上	一
巻十八	雜歌中	二
巻十九	雜歌下	二

〔玉葉集〕 總數二十四首

巻一	春歌上	三
巻三	夏歌	一
巻四	秋歌上	二
巻五	秋歌下	一
巻六	冬歌	二
巻八	旅歌	四
巻九	戀歌一	二

卷十	戀歌二	三
卷十二	戀歌四	一
卷十三	戀歌五	二
卷十五	雜歌二	二
卷十八	雜歌五	一

〔續千載集〕　總數四首

卷一	春歌上	一
卷四	秋歌上	一
卷七	雜體	一
卷十二	戀歌二	一

〔續後拾遺集〕　總數十一首

卷一	春歌上	一
卷二	春歌下	一
卷四	秋歌上	一
卷五	秋歌下	二
卷六	冬歌	一
卷八	離別歌	一
卷十一	戀歌一	一
卷十二	戀歌二	一
卷十三	戀歌三	二

〔風雅集〕　總數九首

卷一	春歌上	三
卷二	春歌中	四
卷九	旅歌	一
卷十四	戀歌五	一

〔新千載集〕　總數十首

卷一　春歌上　一

卷三　夏歌　一

卷四　秋歌上　一

卷五　秋歌下　一

卷六　冬歌　一

卷十一　戀歌一　二

卷十二　戀歌二　二

卷十三　戀歌三　一

〔新拾遺集〕　總數十五首

卷一　春歌上　一

卷二　春歌下　一

卷四　秋歌上　二

卷五　秋歌下　三

卷九　羇旅歌　一

卷十　哀傷歌　二

卷十一　戀歌一　二

卷十四　戀歌四　二

卷十八　雜歌上　一

〔新後拾遺集〕　總數三首

卷五　秋歌下　一

卷八　雜秋歌　一

卷十　羇旅歌　一

〔新續古今集〕　總數三首

○

我がやどの池の藤波さきにけり山ほとゝぎすいつか來なかむ

古今集卷三夏歌にあり、題しらず、讀人しらずとして、左注に、『この歌ある人のいはく柿本人麿がなり』とある。六帖に、人麿として載り、結句、『今やきなかむ』となつてゐる。柿本集に載り、歌仙歌集本は六帖に同じく、圖書寮本第一、第二、類從本は、古今集に同じである。

○

夜を寒み衣かりがねなくなべに萩の下葉もうつろひにけり

古今集卷四秋歌上にあり、題しらず、讀人しらずとして、左注に、『この歌はある人のいはく柿本の人麿がなり』とある。六帖及び拾遺集卷十七に、人麿として載り、六帖の結句、『色つきにけ

り』、拾遺集の第四・五句、『萩の下葉は色づきにけり』となつてゐる。

○

梅のはなそれとも見えず久方のあまぎる雪のなべてふれれば

古今集巻六冬歌にあり、題しらず、讀人しらずとして、左注に、『この歌は或人のいはく柿本人麿が歌なり』とある。拾遺集巻一に、題しらず、柿本人丸として載り、また柿本集に載つた。萬葉集巻八（一四二六）、山部宿禰赤人歌に、吾勢子爾令見常念之梅花其十方不所見雪乃零有者がある。

○

ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれ行くふねをしぞおもふ

古今集巻九羇旅歌にあり、題しらず、讀人しらずとして、左注に、『この歌はある人のいはく柿本人麿がなり』とある。六帖に人麿として載り、また柿本集に載つた。今昔物語には小野篁の作になつてゐる。

○

逢はぬ夜のふる白雪とつもりなばわれさへ共にけぬべきものを

古今集卷十三戀歌三にあり、題しらず、讀人しらずとして、左注に、『この歌はある人のいはく柿本人麿が歌なり』とある。六帖に人麿として載り、また柿本集に載つた。

○

風ふけば波うつ岸の松なれやねにあらはれて泣きぬべらなり

古今集卷十三戀歌三にあり、讀人しらずとして、左注に、『此歌は或人のいはく柿本人麿がなり』とある。六帖に、人麿として、第二・三句、『波こす磯の磯馴松』となつてゐる。柿本集に載り、類從本では第二句、『波たつ岸の』となつてゐる。

○

あづさゆみ磯邊の小松たがよにか萬代かけてたねをまきけむ

古今集卷十七雜歌上にあり、題しらず、讀人しらずとして、左注に、『この歌はある人のいはく

柿本人麿がなり』とある。一本、第四句、『よろづよかねて』。六帖に、讀人不知で、第三・四句、『たが世にも萬代かねて』となつてゐる。

○

梅の花それとも見えず久方のあまぎるゆきのなべて降れれば

拾遺集卷一春にあり、題しらず、柿本人丸とある。古今集卷六に、題しらず、讀人しらずとして載り、左注に、『この歌は或人のいはく柿本人麿が歌なり』とある。柿本集に載つた。萬葉集卷八（一四二六）、赤人の歌に、吾勢子爾令見常念之梅花其十方不所見雪乃零有者がある。

○

あすからは若菜摘まむと片岡のあしたの原はけふぞ燒くめる

拾遺集卷一春にあり、題しらず、人丸とある。柿本集に載り、初句、歌仙歌集本、『あすよりは』になつてゐる。萬葉集卷八（一四二七）、山部宿禰赤人歌に、從明日者春菜將採跡標之野爾昨日毛今日

毛雪波布利管がある。第二句、舊訓ワカナ。初句、類聚古集アスカラハ。

○

たごの浦の底さへにほふ藤浪をかざして行かむ見ぬ人のため

拾遺集卷二夏にあり、『たごの浦の藤の花を見侍りて、柿本人麿』とある。萬葉集卷十九（四二〇〇）、內藏繩麻呂の歌に、多祜乃浦能底左倍爾保布藤奈美乎加射之氐將去不見人之爲がある。六帖に讀人不知で載り、また柿本集に載つた。

○

あまの川遠きわたりにあらねども君が船出はとしにこそまて

拾遺集卷三秋にあり、題しらず、柿本人麿とある。萬葉集卷十（二〇五五）、七夕、讀人不知に、天河遠度者無友公之船出者年爾社候があり、後撰集卷五にも、七夕をよめる、讀人しらずとして、萬葉集の通りに載つてゐる。六帖に、人麿として、この拾遺集の如くある。柿本集に載り、第二・三句、歌仙歌集本、『とほきわたりとなけれども』、類從本は拾遺集の通りである。

○

天の川こその わたりの移ろへば淺瀬ふむまに夜ぞ更けにける

拾遺集卷三秋にあり、前の歌につづいて出てゐる。萬葉集卷十（二〇一八）、七夕、人麿歌集出に、天漢去歲渡代遷閉者河瀨於踏夜深去來がある。第二句、舊訓コゾノワタリハ。古寫本中（元・類・神）コゾノソタリノ。第四句、古寫本中（元・神）カハセフムマニ。柿本集に載り、圖書寮本第二・類從本は、拾遺集に同じく、歌仙歌集本は、『淺瀬』が『かはせ』になつてゐる。また赤人集には、西本願寺本、第二句、『そこのわたりの』、第四句、『かはらをゆくに』。流布本、第四句、『川瀨を行きて』になつてゐる。

○

年にありて一夜妹に逢ふ彦星もわれにまさりて思ふらむやぞ

拾遺集卷三秋にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十五（三六五七）、遣新羅使人等の七夕仰觀天漢各陳所思作歌三首中に、讀人不知、等之爾安里比等欲伊母爾安布比故保思母和禮爾麻佐里弖

於毛布良米也母（オモフラメヤモ）がある。六帖に、讀人不知で載り、結句、『思ふらめやは』になつてゐる。柿本集に載り、第三句、『彥星の』、他は拾遺集の如くである。

○

龍田川もみぢ葉ながる神なびのみむろのやまに時雨ふるらし

拾遺集卷四冬にあり、『奈良のみかど龍田川に紅葉御覽じに行幸ありける御供につかうまつりて、柿本人麿』とある。古今集卷五に、題しらず、讀人不知として載り、『又はあすか川もみぢ葉流る』と注してあり、六帖に、人麿として載つてゐる。柿本集に、詞書、『みかど龍田河のわたりにおはします御供につかうまつりて』（歌仙歌集本）として載つた。また大和物語に出てゐる。

○

浦ちかく降り來る雪はしらなみの末の松山こすかとぞ見る

拾遺集卷四冬にあり、題しらず、人麿とある。寛平御時后宮歌合に興風としてあり、古今集卷七にも、『寛平の御時きさいの宮の歌合の歌、藤原興風』として載り、また興風集にも載つてゐる。

即ち興風の歌である。六帖には、作者を記さずに載せてゐる。

あしひきの山路も知らずしらかしの枝にも葉にも雪の降れれば

（　）

拾遺集卷四冬にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十（二三一五）、冬雜歌、人麿歌集出（或本云三方沙彌作）に、足引山道不知白杜杙枝母等乎乎爾雪落者 或云枝毛多和多和）がある。六帖に、讀人不知で、拾遺集の如く出てゐる。柿本集に載り、歌仙歌集本、第四句、『枝もたわわに』になつてゐる（圖書寮本第一・第二・類從本等拾遺集に同じ）。

あま飛ぶやかりの使にいつしかも奈良の都にことづてやらむ

（　）

拾遺集卷六別にあり、『ふることにて、柿本人麿』とある。萬葉集卷十五（三六七六）、遣新羅使人等の引津亭舶泊之作歌七首中に、讀人不知、安麻等夫也可里乎都可比爾衣弖之可母奈良能彌夜古爾許登都礙夜良武がある。

○

月草にころもはすらむ朝露にぬれてののちはうつろひぬとも

拾遺集卷八雜上にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷七(一三五一)、寄草、讀人不知に、月草爾衣者將摺朝露爾所沾而後者徙去友があり、第四句、舊訓ヌレテノノチハである。古今集卷四に、題しらず、讀人しらずとして載り、六帖にも讀人不知で載つてゐる。柿本集に載り、流布本一本、第三句、『あさ霧に』とある。

○

ちちわくに人はいふとも織りて著む我がはたものに白き麻衣

拾遺集卷八雜上、前の歌につづいて出てゐる。萬葉集卷七(一二九八)、寄衣、人麿歌集出に、干各人雖云織次我二十物白麻衣がある。初句、舊訓チナニハモ。古寫本中(元・類・古)トニカクニ。第二句、古寫本中(元・古・神)ヒトハイヘドモ。第四・五句、古寫本中(類・古・神)ワガハタモノハ・シロキアサギヌとなつてゐる。六帖に、作者不詳で載り、初句、『ちなにはも』、第三・四句、『お

りつかむわかはたゝのの」となつてゐる。柿本集に、「わかれに人はいふとも人はおもひかむわかはたゝのに白き麻ぎぬ」（歌仙歌集本）、「わかれはには人はいへどもおりてきん我はた物の白きあさ衣」（類從本）といふ具合に載つた。

○

久方のあめには著ぬをあやしくもわが衣手のひるときもなき

拾遺集巻八雜上、前の歌につゞいて出てゐる。萬葉集巻七（一三七一）、寄雨、讀人不知に、「久堅之雨爾波不著乎怪毛吾袖者干時無香」がある。古寫本等にヒルトキモナキの訓は見當らない。柿本集にこの拾遺集の通りに載つた。

○

白浪は立てど衣にかさならずあかしも須磨もおのがうらうら

拾遺集巻八雜上、前の歌につゞき、以上四首「題しらず、人麿」となつてゐる。榮花物語に柿本人麿作として載り、柿本集に載つた。

○

夕されば衣手さむしわぎもこがときあらひ衣ゆきてはや著む

拾遺集卷八雜上、前四首につづいてあり、『もろこしへ遣はしける時によめる』と詞書がある。萬葉集卷十五（三六六六）、遣新羅使人等の海邊望月作歌九首中、讀人不知、由布佐禮婆安伎可是左牟思和伎母故我等伎安良比其呂母由伎弖波也伎牟がある。柿本集に、第二句、『秋風寒し』と、萬葉集どほりに載つた。

○

ささ浪や近江の宮は名のみしてかすみたなびき宮木もりなし

拾遺集卷八雜上にあり、『大津の宮のあれて侍りけるを見て、人麿』とある。柿本集に、『あふみの宮のあれたるを見て』として載つた。萬葉集に類似の歌はない。

○

空の海にくものなみたち月のふね星のはやしに漕ぎかへる見ゆ

拾遺集卷八雜上、『詠天、人麿』とある。萬葉集卷七（一〇六八）、詠天、人麿歌集出に、天海丹雲之波立月船星之林丹榜隱所見がある。初句、細井本ソラノウミニとある。六帖に、人麿として、初句、『天の川に』、結句、『漕ぎ隱る見ゆ』とある。柿本集に、拾遺集通り載つた（類從本は初句、あめのうみに）。

○

川の瀨のうづまく見れば玉藻かるちりみだれたる川の舟かも

拾遺集卷八雜上、前の歌につゞいてあり、『藻を詠める』と題してある。萬葉集卷九（一六八五）、泉河邊間人宿禰作歌に、河瀨激乎見者玉鴨散亂而在河常鴨があり、人麿歌集出である。第一・二句、舊訓カハノセノ・タギルヲミレバ。古寫本中（藍・壬・類・神）カハノセヲ・ウヅマクミレバ、（古）カハノセニ・ウヅマクミレバ。第三句、寬永本其他、『玉藻鴨』とあり、舊訓タマモカモ。タマモカルの訓は見當らない。第四句、舊訓チリミダレテアル。古寫本中（藍・壬・類・古・神）チリミダレタル結句、寬永本、『此河常鴨』とあり、舊訓コノカハトカモ。古寫本の大部分『此』字なく、（藍・壬・

類・古・神）カハノツネカモ。『川の舟』はこれを誤つたものであらう。六帖に、『川の瀬になびくな見れば玉もかも散り亂れたる川の常かも』とある。柿本集に、大體この拾遺集の通りに載つた。歌仙歌集本初句、『川の瀬に』（圖書寮本第一、『川の瀬の』）、結句、『川の舟かな』（類從本其他『川の舟かも』）。

○

なる神の音にのみ聞くまきもくの檜原（ひばら）の山を今日みつるかな

拾遺集卷八雜上、前の歌に續いてあり、『山を詠める』と題してある。萬葉集卷七（一〇九二）、詠山、人麿歌集出に、動神之音耳聞卷向之檜原山乎今日見鶴鴨（ナルカミノオトノミキキシマキムクノヒハラノヤマヲケフミツルカモ）がある。第二・三句の舊訓オトニノミキク・マキモクノで、拾遺集と等しい。結句、元曆本ケフミツルカナ。六帖に、『山』の題、讀人不知としてある。柿本集に載つた。

○

いにしへにありけむ人もわがごとや三輪のひばらにかざし折りけむ

拾遺集卷八雜上、前の歌に續いてあり、『詠葉』と題してある。萬葉集卷七（一一一八）、詠葉、人

麿歌集出に、古爾有險人母如吾等架彌和乃檜原爾挿頭折兼がある。第三句、類聚古集ソガゴトヤ。六帖に、人麿と題してある。柿本集に載つた。

○

をふの海に船のりすらむ吾妹子が赤裳の裾にしほ滿つらむか

拾遺集卷八雜上にあり、『伊勢のみゆきにまかりとまりて、人麿』とある。萬葉集卷十五（三六一〇）、遣新羅使人等の當所誦詠古歌に、安胡乃宇良爾布奈能里須良牟乎等女良我安可毛能須素爾之保美都良武賀があり、これは、卷一（四〇）、幸于伊勢國時留京柿本朝臣人麿作歌、嗚呼見乃浦爾船乘爲良武媙嬬等之珠裳乃須十二四寶三都良武香に基いてゐる。六帖に、「人麿イ」として、「をふの浦に舟乘すらむをとめごか玉藻の裾に潮滿つらむか」とある。柿本集（歌仙歌集本・流布本）に、『おふの海に船乘すらんつまともに袂のすそに鹽みちぬらむかも』及び『須磨の浦に舟のりすらん乙女子があかものすそに鹽やみつらん』と載り、諸本異同が多い。

○

あすか川しがらみ渡しせかませば流るる水ものどけからまし

拾遺集卷八雜上にあり、『あすかの女王をさむる時よめる、人麿』とある。萬葉集卷二（一九七）、明日香皇女木瓲殯宮之時柿本朝臣人麿作歌一首并短歌の短歌に、明日香川四我良美渡之塞益者進留水母能杼爾賀有萬思があり、結句、古寫本中（金・類・古・神）ノドケカラマシである。六帖に、第二句、『しがらみかけて』になつてゐる。柿本集にこの拾遺集の通りに載り、別に、第一・二句、『網代木の白浪よりて』となつたものも載つた。

○

山高みゆふひかくれぬ淺茅原のち見むためにしめ結はましを

拾遺集卷九雜下にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷七（一三四二）、寄草、讀人不知に、山高夕日隱奴淺茅原後見多米爾標結申尾があり、第二句、舊訓ユフヒカクレヌである。六帖に、讀人不知、第二句、『夕日かくれの』。柿本集にも、第二句、『夕日がくれの』（圖書寮本第一、『夕日かくれぬ』）となつてゐる。

○

ますかがみ見しかとぞ思ふ妹に逢はむかも玉の緒のたえたる戀のしげきこのごろ

拾遺集卷九雜下旋頭歌にあり、柿本人麿とある。萬葉集卷十一（二三六六）、旋頭歌、古歌集出に、眞十鏡見之賀登念妹相可聞玉緒之絶有戀之繁比者がある。初句、古寫本中（嘉・細）マスカガミ。第三句、舊訓イモニアハムカモ。柿本集に載り、第二句、「見しかと思ふ」である。

○

かのをかに草かるをのこしかな刈りそ有りつつも君が來まさむみまくさにせむ

拾遺集卷九雜下旋頭歌にあり、前の歌につづいてゐる。萬葉集卷七（一二九一）、旋頭歌、人麿歌集出に、此岡草苅小子勿然苅有乍君來座御馬草爲がある。第二句、京大本「小子」の左に赭でヲノコとある。第三句、舊訓シカナカリソ。

○

ちはやぶる　わがおほきみの　きこしめす　あめのしたなる　くさの葉も　うるひにたりと　やまかはの　澄めるかふちと　みこころを　よしのくにの　はなざかり　あきつの野邊に　みやばしら　ふとしきまして　ももしきの　おほみやびとは　ふねならべ　あさかはわたり　ふなくらべ　ゆふかはわたり　このかはの　絶ゆることなく　このやまの　いやたかからし　たまみづの　たきつのみやこ　見れどあかぬかも

拾遺集卷九雜下長歌にあり、『吉野の宮にたてまつる歌、人麿』とある。萬葉集卷一（三六）、幸于吉野宮之時柿本朝臣人麿作歌に、八隅知之、吾大王之、所聞食、天下爾、國者思毛、澤二雖有、山川之、清河內跡、御心乎、吉野乃國之、花散相、秋津乃野邊爾、宮柱、太敷座波、百磯城乃、大宮人者、船並氐、旦川渡、舟競、夕河渡、此川乃、絶事奈久、此山乃、彌高良之、珠水激、瀧之宮子

波、見禮跡不飽可聞がある。今、萬葉集古寫本中から、拾遺集に參考になる訓を拾ふと、『澤ニ雖有』は、冷泉本一訓サハルヒニナタリトがあり、船並氏には、元暦本フナナミラベ、『舟競』は、元・古・神・細ニフナキホヘ、『夕河渡』は、舊訓ユフカハワタリとあり、又『珠水激瀧』を、舊訓、珠水ノ激瀧と訓み、元暦本・神田本は、タギノミヤコハタギツミヤコハと訓んでゐる。その他は、ちはやぶるについても『くさの葉も』についても、拾遺集特有の句の原據となつたやうなものは見出せない。

○

見れどあかぬ吉野の河の流れても絶ゆる時なく行きかへり見む

拾遺集卷九雜下、前の長歌の反歌である。前出萬葉集卷一（三六）の長歌の反歌（三七）に、雖見飽奴吉野乃河之常滑乃絶事無久復還見牟がある。柿本集に、『吉野の山の常滑にたゆる時なく又かへり見む』となつてゐる。

○

ちはやぶる神のたもてるいのちをばたれがためにか長くとおもはむ

拾遺集卷十神樂歌にあり、題しらず、人まろとある。萬葉集卷十一（二四一六）、寄物陳思、人麿歌集出に、千早振神持在命誰爲長欲爲（チハヤブルカミノモタセルイノチヲバタガタメニカモナガクホリセム）がある。第二句、舊訓カミノタモテル。第三句、舊訓イノチヲモ。六帖に、『ちはやふる神のたもたる命あらば誰がためとかは我は思はむ』。柿本集に、第三句以下、『命をもたが爲と思ふ我ならなくに』（歌仙歌集本）、『我が爲にかは長くと思はん』（類從本）として載つた。

○

ちはやふる神も思ひのあればこそ年へて富士の山も燃ゆらめ

拾遺集卷十神樂歌にあり、前の歌につづいて出てゐる。類似の歌萬葉集になく、他の歌集にも見當らない。

○

おほなむちすくなみ神の造れりし妹背の山を見るぞうれしき

拾遺集卷十神樂歌にあり、『たびにてよみ侍りける、人まろ』とある。萬葉集卷七（一二四七）、覊

旅作、人麿歌集出に、大穴道少御神作妹勢能山見吉がある。第三句、舊訓ツクリタル。結句、舊訓ミレバシヨシモ。神田本ミレバウシシキ。六帖に、（人まろ）として、第二・三句、『すくなひこなの造りたる』、結句、『見るはしもよし』とあり、柿本集には、第二句、『すくなひかみの』、結句、『見るがうれしさ』となつてゐる。

○

天雲の八重ぐもがくれ鳴る神の音にのみやは聞きわたるべき

拾遺集卷十一戀一にあり、題しらず、人丸とある。萬葉集卷十一（二六五八）、寄物陳思、讀人不知に、天雲之八重雲隱鳴神之音耳爾八方聞渡南がある。第二句、舊訓ヤヘグモガクレ。第四句、寛永本等『音爾耳八方』とあり、舊訓オトニノミヤモ。古寫本中（嘉・類）オトニノミヤハ。『聞きわたるべき』の訓は見當らない。六帖に、結句、『聞きわたりなむ』。柿本集流布本は、拾遺集に同じであるが、圖書寮本第一、『ききわたりなむ』、類從本、『戀渡りなむ』とある。

○

みなそこに生ふる玉藻のうちなびき心をよせて戀ふるころかな

拾遺集卷十一戀一にあり、題しらず、人丸とある。萬葉集卷十一（二四八二）、寄物陳思、人麿歌集出に、水底生玉藻打靡心依戀比日がある。第四句、舊訓ココロヲヨセテ、『戀ふるころかな』の訓は見當らない。六帖に、人麿として載り、結句、『戀ふるころかな』である。柿本集では、歌仙歌集本系統、『戀ふるこのごろ』、類從本系統、『戀ふるころかな』になつてゐる。

○

奥山のいはがき沼のみごもりに戀ひや渡らむ逢ふよしをなみ

拾遺集卷十一戀一にあり、題しらず、人まろとある。萬葉集卷十一（二七〇七）、寄物陳思、讀人不知に、青山之石垣沼間乃水隱爾戀哉渡相緣乎無がある。初句、古寫本中（類・神）の一訓にオクヤマがあり、和歌色葉集・和歌童蒙抄にいづれもオクヤマとして引かれてゐる。六帖にも、拾遺集と同様になつてゐる。

○

み熊野の浦のはまゆふ百重なる心は思へどただに逢はぬかも

拾遺集卷十一戀一にあり、題しらず、柿本人麿とある。萬葉集卷四（四九六）、柿本朝臣人麻呂歌に、三熊野之浦乃濱木綿百重成心者雖念直不相鴨かあり、第三句、舊訓モモヘナルである。六帖に、人麿として載り、また柿本集に載つた。

○

戀ひつつも今日は暮しつ霞たつ明日の春日をいかでくらさむ

拾遺集卷十一戀一にあり、題しらず、人まろとある。萬葉集卷十（一九一四）、寄霞、讀人不知に、戀乍毛今日者暮都霞立明日之春日乎如何將晩があり、結句、舊訓イカデクラサムである。六帖に、「霞」の題下に載り、又、「照る日」の題下に、第三句、「霞さす」として載つてゐる。赤人集と柿本集とに載つた。柿本集諸本中流布本のみは、初句、「わびつつも」になつてゐる。

○

戀ひつつも今日はありなむ玉くしげ明けむあしたをいかで暮さむ

拾遺集卷十一戀一にあり、前の歌につゞいて出てゐる。萬葉集卷十二、(二八八四)、正述心緒、讀人不知に、戀管母今日在目杼玉匣將開明日如何將暮がある。結句、舊訓イカデクラサム。柿本集に載り、第四句、『明けなむ明日を』になつてゐる。

○

無き名のみたつの市とは騷げどもいさまた人をうる由もなし

拾遺集卷十二戀二にあり、題しらず、人麿とある。柿本集に載つた。萬葉集に類似の歌は見當らない。

○

竹の葉におきゐる露のまろびあひてぬるとはなしに立つ我が名かな

拾遺集卷十二戀二にあり、題しらず、人麿とある。柿本集に載り、流布本、第四句、『ぬるよは

なしに』であるが、圖書寮本第一、類從本等には、やはり『ぬるとは』になつてゐる。

○

うばたまの今宵なあけそ明けゆかば朝ゆく君をまつがくるしき

拾遺集卷十二戀二にあり、人まろとある。結句一本『待つくるしきに』。萬葉集卷十一（二三八七）、正述心緒、人麿歌集出に、烏玉是夜莫明朱引朝行公待苦がある。第二句、嘉曆本コヨヒナアケソ。柿本集に載り、第三句、『明ゆけば』（流布本）、『明ゆかば』（類從本）。結句、『まつもくるしみ』（流布本）、『待つくるしきに』（類從本）。六帖には、『あらたまのこの夜な明けそあかひかるあしたゆく君待てば苦しも』となつてゐる。

○

逢ひ見てはいくひささにもあらねども年月のごと思ほゆるかな

拾遺集卷十二戀二にあり、題しらず、人まろとある。萬葉集卷十一（二五八三）、正述心緒、讀人不知に、相見而幾久毛不有爾如年月所思可聞がある。第二句、舊訓イクヒサシサモ、古寫本中（嘉・

細）イクヒサヽニモ。六帖に、人麿として載り、又柿本集にも載つた。ともに拾遺集と同じになつてゐる。

○

としを經て思ひ思ひて逢ひぬれば月日のみこそ嬉しかりけれ

拾遺集卷十二戀二にあり、前の歌につゞいてゐる。躬恒集にも載つて居り、萬葉集に類似の歌は見當らない。

○

杉板もてふける板間のあはざらばいかにせむとか我が寢そめけむ

拾遺集卷十二戀二にあり、前の歌につゞいてゐる。萬葉集卷十一（二六五〇）、寄物陳思、讀人不知に、十寸板持蓋流板目乃不令相者如何爲跡可吾宿始兼がある。初句、古寫本中（嘉・古・細）スギイタモテ、（類）スキタモテ。第二・三句、舊訓フケルイタマノ・アハザラバ。六帖に、第四句、『いかにせよとて』。柿本集に、結句、『あひみそめけむ』となつてゐる。

○

思ふなと君はいへども逢ふことをいつと知りてかわが戀ひざらむ

拾遺集卷十三戀二、題しらず、人麿とある。萬葉集卷二（一四〇）、柿本朝臣人麿妻依羅娘子與人麿相別歌一首に、勿念跡君者雖言相時何時跡知而加吾不戀有牟がある。初句、舊訓オモフナト、第二句、舊訓キミハイフトモ。古寫本中（元・金・神）キミハイヘトモ。六帖に、第二・三句、「妹は言へども逢はむ時」となつてゐる。柿本集に、この拾遺集どほりに載つた。

○

あしびきの山鳥のをのしだり尾の長々し夜をひとりかもねむ

拾遺集卷十三戀三にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十一（二八〇二）或本歌、寄物陳思、讀人不知に、足日木乃山鳥之尾乃四垂尾乃長永夜乎一鴨將宿がある。第四句、舊訓ナガナガシヨヲ、即ち拾遺集はこれに同じである。柿本集に載つた。六帖に、結句、「わがひとりぬる」となつてをり、また別に、第一・二句が「にはとりのかけの垂り尾の」となつてゐるものもある。

〇

あしびきの山より出づる月まつと人にはいひて君をこそまて

拾遺集卷十三戀三にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十二(三〇〇二)、寄物陳思、讀人不知に、足日木乃從山出流月待登人爾波言而妹待吾乎がある。西本願寺本イモヲコソマテ。六帖に、『山高み出でずいざよふ月待つと人には言ひて君待つ我ぞ』とある。柿本集に拾遺集の通りに載つた。

〇

三日月のさやかに見えず雲がくれ見まくぞほしきうたてこの頃

拾遺集卷十三戀三、前の歌につづいて出てゐる。萬葉集卷十一(二四六四)、寄物陳思、人麿歌集出に、若月清不見雲隱見欲宇多手比日がある。第二・三句、舊訓、拾遺集に同じ。結句、舊訓ウタタコノゴロ。古寫本中(嘉・類・細)ウタテコノゴロ。柿本集に、第二句、『さやけくもあらず』となつて載つた。

〇

秋の夜の月かも君は雲がくれしばしも見ねばここらこひしき

拾遺集卷十三戀三、題しらず、人麿。萬葉集卷十（二二九九）、寄月、讀人不知に、秋夜之月疑意君者雲隱須臾不見者幾許戀敷があり、第三句以下、舊訓、拾遺集と同じである。柿本集に載り、結句、『君ぞこひしき』『戀ひしかるらむ』などともなつてゐる。

○

ひさかたのあま照る月もかくれ行く何によそへて君をしのばむ

拾遺集卷十三戀三、題しらず、人麿。萬葉集卷十一（二四六三）、寄物陳思、人麿歌集出に、久方天光月隱去何名副妹偲かある。第四句、舊訓ナニノソヘテ。古寫本中（嘉・類）ナニニヨソヘテ。和歌童蒙抄ナニニヨソヘテ。

○

長月のあり明の月のありつつも君し來まさばわれ戀ひめやも

拾遺集卷十三戀三、題しらず、人麿。萬葉集卷十（二三〇〇）、寄月、讀人不知に、九月之在明能月夜有乍毛君之來座者吾將戀八方がある。第二句、古寫本中（元）アリアケノツキノ。第四句、古寫本中（元・神・西・溫）キミシキマリバ。結句、舊訓ソレコヒムヤモ。古寫本中（元・神）ワレコヒメヤハ、（西・溫）ソレコヒメヤモ。六帖に、人麿とし、結句、『我も忘れじ』。小町集に、下句、『君しもまさば待ちこそはせめ』。柿本集に載り、結句、流布本『我こひんかも』、なほ諸本少しづつ違ふ。

〇

ことならば闇にぞあらまし秋の夜のなぞ月影の人だのめなる

拾遺集卷十三戀三、前の歌に續き『月のあかき夜人を待ちはべりて』と詞書があつて出てゐる。六帖第一『夏の月』と、同第五『人をまつ』とに、『ことならば闇にもあらなむ夏の夜の照る（は第五）月影ぞ人だのめなる』がある。他に類似の歌が見當らない。因に言ふ。さきに柿本人麿總論篇の『人麿評論史略』に於いて、拾遺集中人麿作とあるものを列擧した時には（總論篇一一六頁）、この歌を入れずして、旋頭歌短歌一〇二と數へたのであつたが、これはやはり、拾遺集撰者は人麿作としてこの歌を載せたものと認むべきであり、總論篇の數に一首を加ふべきである。契沖の拾遺集考要にも、

『人丸とありて不審の歌』といふ中にあげてある。

○

まさしてふやそのちまたに夕占とふ占まさにせよ妹に逢ふべく

拾遺集卷十三戀三、題しらず、人麿。萬葉集卷十一(二五〇六)、寄物陳思、人麿歌集出に、事靈八十衢夕占問占正謂妹相依がある。柿本集に、拾遺集の如くに載り、結句、一本、『妹に逢ふよし』ともある。

○

夕占とふ占にもよくあり今夜だに來ざらむ君をいつかまつべき

拾遺集卷十三戀三、前の歌につづいてある。萬葉集卷十一(二六一三)、正述心緒、讀人不知に、夕卜爾毛占爾毛吉有今夜谷不來君乎何時將待がある。第二句、舊訓ウラニモツゲアル。嘉曆本ウラニモトツアリ。第四句、嘉曆本コサルキミヲ。六帖に、『夕けにもうらにもつげる今夜だに來まさぬ君をいつとか待たむ』がある。

夢をだにいかで形見に見てしがな逢はでぬる夜の慰めにせむ

拾遺集卷十三戀三、前の歌につゞいてある。萬葉集はじめ他の歌集等に同樣の歌は見當らない。

○

うつつには逢ふことかたし玉の緖のよるは絕えせず夢に見えなむ

拾遺集卷十三戀三、前の歌につゞいてある。萬葉集卷五(八〇七)、大伴旅人の歌に、宇豆都仁波安布余志勿奈子奴波多麻能用流能伊味仁越都伎提美延許曾(ウツツニハアフヨシモナシヌバタマノヨルノイメニヲツギテミエコソ)がある。貫之集に、第四句、『夜は絕えずも』となつて載つてゐる。なほ、拾遺集では、この歌に續けて、『いにしへをいかでかとのみ思ふ身にこよひの夢をはるになさばや』といふ歌を載せてゐるが、これは詞書に、『ひろはたのみやす所久しう內にも參らざりける夢になむ例のやうにて內にさぶらひ給ひつると人のいひ侍りけるを聞きて』とあつて、人麿作と見るべきものではない。廣幡(ひろはた)の御息所は村上天皇の妃である。

○

我が背子をきませの山と人はいへど君もきまさぬ山の名ならし

拾遺集卷十三戀三、題しらず、人麿。萬葉集卷七（一〇九七）、詠山、讀人不知に、吾勢子乎乞許世山登人者雖云君毛不來益山之名爾有之がある。第二句、元曆本コ、セノヤマト。第四句、舊訓キミモキマサヌ。結句、元曆本ヤマノナナラシ。六帖に、石河郎女の作として載り、第二句、「こませの山と」、第四句、「君もきませぬ」となつてゐる。又、柿本集に載り、圖書寮本第一・鷹司本は、拾遺集に同じく、圖書寮本第二・類從本は、第四句『君が來まさぬ』となり、流布歌仙歌集本は、『山の名ならし君もきまさす』となつてゐる。

○

なる神のしばしうごきて空くもり雨も降らなむ君とまるべく

拾遺集卷十三戀三、題しらず、人麿。萬葉集卷十一（二五一三）、問答、人麿歌集出に、雷神小動刺雲雨零耶君將留が有る。第二句、舊訓シバシトヨミテ。古寫本中（嘉・細）シバシユルキテ第四句、古寫本中（嘉・類・細）アメモフラナム。結句、舊訓キミヤトマラム。嘉曆本キミトマルベク。

柿本集に、第二・三句、『しばしは空にさしくもり』となつてゐる。六帖に、人まろとして、『鳴神をとよますばかりさし曇り雨も降らなむ君を留めむ』とある。

○

人ごとは夏野の草のしげくとも君とわれとしたづさはりなば

拾遺集卷十三戀三、前の歌につづいてある。萬葉集卷十(一九八三)、寄草、讀人不知に、人言者夏野乃草之繁友妹與吾携宿者があある。結句、古寫本中元曆本にネの右に赭でナとあり、類聚古集に『宿者』の右に朱でナハとあり、和歌童蒙抄・八雲御抄等に、『たづさはりなば』として引かれてゐる。六帖に、『妹とわれとしたづさはりなば』。柿本集も同樣で、なほ第二句、『夏野の草と』ともある。赤人集に、『夏野の草に……いもとわれとしたづさはりなば』とある。

○

秋の田の穗の上におけるしら露の消ぬべく我はおもほゆるかな

拾遺集卷十三戀三、題しらず、人麿。萬葉集卷十(二二四六)、寄水田、讀人不知に、秋田之穗上爾

置白露之可消吾者所念鴨がある。第二句、舊訓ホノウヘニオケル。柿本集に載り、第二句、流布本は『ほのかに置ける』であるが、他の諸本、「ほのうへに」「ほの上に」とある。

住吉の岸を田にほり蒔きし稲の刈るほどまでも逢はぬ君かな

拾遺集卷十三戀三、前の歌につゞいてある。萬葉集卷十（二二四四）、寄水田、讀人不知に、住吉之岸乎田爾墾蒔稲乃而及苅不相公鴨がある。初句、類聚古集及び神田本スミヨシノ。和歌童蒙抄に、『スミヨシノキシヲタニホリ』云々とある。柿本集に載り、第四・五句、『刈るまで妹にあはぬなりけり』ともある。

○

我が背子をわが戀ひをれば我が宿の草さへ思ひうらがれにけり

拾遺集卷十三戀三、人麿。萬葉集卷十一（二四六五）、寄物陳思、人麿歌集出に、我背兒爾吾戀居者吾屋戸之草佐倍思浦乾來がある。六帖に、笠の女郎の作とし、初句、萬葉集同樣『我背子に』と

ある。柿本集に拾遺集の如くに載つてゐる。

○

頻めつつこぬ夜あまたになりぬればまたじと思ふぞ待つに勝れる

拾遺集卷十三戀三、題しらず、人麿。柿本集に載つた。萬葉集等に原歌らしきものを見ない。

○

朝寢がみわれはけづらじうつくしき人の手枕ふれてしものを

拾遺集卷十四戀四にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十一（二五七八）、正述心緒、讀人不知に、朝宿髮吾者不梳愛君之手枕觸義之鬼尾がある。結句、舊訓フレテシモノヲ。六帖に、讀人不知とし、歌は拾遺集に同じである。柿本集にも同様に載つてゐる。

○

みなといりの蘆わけ小舟さはり多み我が思ふ人に逢はぬころかな

拾遺集卷十四戀四にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十一（二七四五）、寄物陳思、讀人不知に、湊入之葦別小舟障多見吾念公爾不相頃者鴨がある。第四句、古寫本中（古）ソカヲモフ人ニ、柿本集に載り、第四句、『こひしき人に』ともある。

○

岩しろの野なかに立てるむすび松心も解けずむかしおもへば

拾遺集卷十四戀四に、前の歌につづいてあり、後に、卷十九雜戀にも重出してゐる。萬葉集卷二（一四四）、長忌寸意吉麿見結松哀咽歌に、磐代乃野中爾立有結松情毛不解古所念があり、結句、舊訓ムカシオモヘバである。六帖に、結句、『むかしをぞおもふ』とある。柿本集に、拾遺集のごとくに載つた。

○

ますかがみ手に取りもちて朝な朝な見れども君にあくときぞなき

拾遺集卷十四戀四にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十一（二五〇二）、寄物陳思、人麿歌集

出に、眞鏡手取以朝朝雖見君飽事無がある。初句、古寫本中（嘉・類・古・細）マスカガミ。「君飽事無」は、舊訓キミヲアクコトモナシ。古寫本中（嘉・古）キミカアクコトノナキ、（類）キミヲアクコトノナキ。柿本集に、拾遺集どほりに載つた。「類從本系統は、「みれどもあかぬ君にもあるかな」、六帖に、下句、「見む時さへや戀の繁けむ」となつたのがあるが、これは萬葉集卷十一（二六三三）、眞十鏡手取持手朝旦將見時禁屋戀之將繁の歌である。

○

皆人の笠にぬふてふ有間すげありての後も逢はむとぞおもふ

拾遺集卷十四戀四、前の歌につゞいてある。萬葉集卷十二（三〇六四）、寄物陳思、讀人不知に、人皆之笠爾縫云有間菅在而後爾毛相等曾念がある。初句、寛永本等『皆人之』とあり、訓は古寫本中（元・類・古・西）ミナヒトノとある。第二句、舊訓カサニヌフテフ。第四句、アリテノノチモといふ訓は見當らない。柿本集に、拾遺集の如くに載つた。六帖には、結句、『あはざらめやは』となつてゐる。

○

戀ひ戀ひてのちも逢はむと慰むる心しなくばいのちあらめや

拾遺集卷十四戀四にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十二（二九〇四）、正述心緒、讀人不知に、戀戀而後裳將相常名草漏心四無者五十寸手有目八面がある。第三句、舊訓ナグサムルニ。柿本集に載り、結句、「生きてあらめや」、なほ第二句、流布本に「のちに」とあるが、他の諸本はやはり『のちも』である。

○

かくばかり戀ひしきものと知らませばよそに見るべくありけるものを

拾遺集卷十四戀四、前の歌につづいてある。萬葉集卷十一（二三七二）、正述心緒、人麿歌集出に、是量戀物知者遠可見有物があり、第二句、舊訓コヒシキモノト。第四句、舊訓ヨソニミルベク。即ち舊訓は拾遺集と同じである。柿本集に載り、流布歌仙歌集本は、「かくばかり戀ひしきものを知らせばなよそに見ゆべくあらましものを」で、大分違つてゐるが、圖書寮本第二・類從本は、下句、「よそにぞ見つつ有けるものを」の他は、拾遺集に同じである。

○

難波人葦火たくやはすすたれどおのが妻こそとこめづらなれ

拾遺集卷十四戀四、題しらず、人麿。萬葉集卷十一（二六五一）、寄物陳思、讀人不知に、難波人葦火燎屋之酢四手雖有己妻許曾常目頰次吉がある。第二句、類聚古集アシビタクヤハ。第三句、舊訓ス、タレド。六帖に載り、下句は拾遺集と同じであるが、上句、『難波女の蘆火たく屋はすしたれど』とある。柿本集は、拾遺集に全く同じである。

○

たらちねの親のかふこのまゆ籠りいぶせくも有るか妹にあはずて

拾遺集卷十四戀四にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十二（二九九一）、寄物陳思、讀人不知に、垂乳根之母我養蠶乃眉隱馬聲蜂音石花蜘蛛荒鹿異母二不相而がある。第二句、古寫本中（元・類）オヤノカフコノ、（細・西）オヤガカフコノ。京都帝國大學本は『母』の傍に『オヤ諸本如此』と注してある。六帖の第五『わぎもこ』と第二『親』に載り、後者は、いへのおとくろまろ作、結句、

『妹にまかせて』となつてゐる。柿本集に載り、流布本結句、『君にあはずて』とあるが、他の諸本『妹に』である。

○

よそにありて雲居に見ゆる妹が家に早くいたらむあゆめ黑駒

拾遺集卷十四戀四、『道をまかりてよみ侍りける、人麿』とある。萬葉集卷七（一二七一）、行路、人麿歌集出に、遠有而雲居爾所見妹家爾早將至步黑駒がある。古寫本等にヨソニアリテの訓はない。六帖に、人麿として載り、初句、『遠くありて』となつてゐる。柿本集に載り、流布本は、『よそにして』となつてゐるが、類從本系統『よそにありて』である。

○

ちはやふる神のいがきも越えぬべし今はわが身の惜しけくもなし

拾遺集卷十四戀四、題しらず、柿本人麿とある。萬葉集卷十一（二六六三）、寄物陳思、讀人不知に、千葉破神之伊垣毛可越今者吾名之惜無がある。六帖に、『今はわが身の惜しからなくに』となつ

てゐる。柿本集に、拾遺集のごとく載つてゐる。

○

住吉のきしにむかへる淡路島あはれときみをいはぬ日ぞなき

拾遺集卷十五戀五にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十二（三一九七）、悲別歌、讀人不知に、住吉乃崖爾向有淡路島阿怜登君乎不言日者無がある。初句、古寫本中（元・類・古・西）スミヨシノ。六帖に、拾遺集と同じに載つてゐる。

○

こひするに死する物にあらませば千たびぞ我は死にかへらまし

拾遺集卷十五戀五、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十一（二三九〇）、正述心緒、人麿歌集出に、戀爲死爲物有者我身千遍死反がある。初句、舊訓コヒヲシテ。嘉暦本コヒスルニ。六帖に、かさの郎女本あるとして、第二句、『しぬるものにし』、他は拾遺集と同じで載つてゐる。柿本集に載り、流布本、『死ぬるものにし』『我身は千たび』、類從本、『死にするものにし』となつてゐる。

（　　）

戀ひて死ね戀ひて死ねとや吾妹子が我が家の門を過ぎてゆくらむ

拾遺集卷十五戀五、前の歌につづいてある。萬葉集卷十一(二四〇一)、正述心緒、人麿歌集出に、戀死戀死哉我妹吾家門過行がある。第四句、細井本ツガイヘノカドヲ。柿本集に載り、流布本、初句『こひこひて』、結句、『過ぎてゆきぬる』。類從本は拾遺集に同じである。

（　　）

戀ひ死なば戀ひも死ねとや玉鉾の道行く人にことづてもなき

拾遺集卷十五戀五、前の歌につづいてある。一本、結句、『ことづてもなし』。萬葉集卷十一(二三七〇)、正述心緒、人麿歌集出に、戀死戀死耶玉桙路行人事告無がある。結句、舊訓コトモツゲケム「事告兼」、嘉曆本コトツケモナシ「事告無」。六帖に、人麿或る本として載り、結句、『言づてもせぬ』とある。柿本集に載り、類從本、『ことづてもなし』、流布本、『こひゐ死ねとか』『ことづてもなし』となつてゐる。

○

あらちをのかる矢の先にたつ鹿もいとわればかり物はおもはじ

拾遺集卷十五戀五、題しらず、人麿。柿本集に載り、第四句、『わがごとに(われはかりイ)』(流布本)、『わがごとく』(類從本)とある。

○

荒磯(あらいそ)のほかゆく浪のほかごころ我はおもはじ戀ひは死ぬとも

拾遺集卷十五戀五、前の歌につづいてある。萬葉集卷十一(二四三四)、寄物陳思、人麿歌集出に、荒礒越外往波乃外心吾者不思戀而死鞆がある。初句、舊訓アライソコエ。結句、古寫本中(古)コヒハシヌトモ。柿本集に、拾遺集の如くに載つた。

○

かきくもり雨ふる川のさざら浪まなくも人の戀ひらるるかな

拾遺集卷十五戀五、前の歌につゞいてある。萬葉集卷十二（三〇一二）、寄物陳思、讀人不知に、登能雲入雨尒河之左射禮浪間無毛君者所念鴨がある。第三句、古寫本中（類・古）サ、ラナミ。六帖に、業性（或本）として載り、初句、「日暮しの」。柿本集に載り、初句、「日のくれに」である。

○

我がごとや雲の中にもおもふらむあめも涙もふりにこそ降れ

拾遺集卷十五戀五、前の歌につゞいてある。伊勢集に載り、初句、「わが宿や」（流布本）、「わがごとや」（類從本）となつてゐる。

○

とにかくに物は思はず飛驒たくみ打つすみなはのただ一筋に

拾遺集卷十五戀五、題しらず、人麿。萬葉集卷十一（二六四八）、寄物陳思、讀人不知に、云云物者不念斐太人乃打墨繩之直一道二がある。初句、古寫本中（嘉・類・古・細）トニカクニ。第三句、類聚古集ヒダタクミ。結句、舊訓タダヒトスヂニ。古寫本中（古・京）タダヒトミチニ。六帖に、人麿と

し、『云ひし云はば物は思はじ飛驒人の打つすみなはのただ一道に』とある。柿本集に、拾遺集の通りに載つた。

○

郭公かよふかきねの卯の花のうきことあれやきみが來まさぬ

拾遺集卷十六雜春にあり、題しらず、人麿。初句、一本に、『うぐひすの』とある。萬葉集卷十(一九八八)、寄花、讀人不知に、鶯之往來垣根乃宇能花之厭事有哉君之不來座がある。柿本集及び赤人集に載り、初句いづれも『ほととぎす』である。

○

わたし守はや舟よせよひととせに二たび來ます君ならなくに

拾遺集卷十七雜秋にあり、題しらず、人麿。第二句の『よせよ』は、一本に『かくせ』とある。萬葉集卷十(二〇七七)、七夕、讀人不知に、渡守舟早渡世一年爾二遍往來君爾有勿久爾がある。初句、古寫本中(元・類・神)ワタシモリ。第四句、古寫本中(元・類・神)フタタビキマス。結句、古寫本

中（元・神）キミナラナクニ。六帖に、第二句、『舟はやわたせ』。赤人集に、第一句、『舟はやわたせ』、第四句、『ふたたびかよふ』とある。柿本集に、第二句、『船はやわたせ』（流布本）、『ふねはやかくせ』（圖書寮本第一）、『はや舟わたせ』（類從本）となつてゐる。

○

庭草にむらさめ降りてひぐらしの鳴くこゑきけば秋は來にけり

拾遺集卷十七雜秋、題しらず、人麿。萬葉集卷十（二一六〇）、詠蟋蟀、讀人不知に、庭草爾村雨落而蟋蟀之鳴音聞者秋付爾家里がある。第三句、舊訓キリギリス。元暦本ヒグラシノ。六帖に、讀人不知とし、歌は拾遺集に同じである。柿本集にもその通りに載つた。

○

秋風のさむく吹くなる我が宿の淺茅がもとにひぐらしも鳴く

拾遺集卷十七雜秋にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十（二一五八）、詠蟋蟀、讀人不知に、秋風之寒吹奈倍吾屋前之淺茅之本蟋蟀鳴毛がある。結句、舊訓キリギリスナクモ。元暦本ヒグラシ

ナクモ。柿本集に、拾遺集の通りに載つた。

○

秋風し日ごとに吹けば我が宿のをかの木の葉はいろづきにけり

拾遺集卷十七雜秋にあり、前の歌につづいてある。萬葉集卷十(二一九三)、詠黄葉、讀人不知に、秋風之日異吹者水莖能岡之木葉毛色付尓家里がある。第二句、古寫本中(元・類・神)ヒゴトニフケバ。六帖に、讀人不知とし、初句、『秋風の』、第二・四句、『水莖の岡の木の葉も』とある。柿本集に載り、初句、『秋風の』。第三句、『久方の』(流布本)、『みづくきの』(類從本等)。第四句、『岡の木の葉も』となつてゐる。

○

秋霧のたなびく小野の萩の花今や散るらむいまだあかなくに

拾遺集卷十七雜秋、前の歌につづいてある。萬葉集卷十(二一一八)、詠花、讀人不知に、朝霧之棚引小野之芽子花今哉散濫未猒尓がある。初句、神田本アキヽリノ。第三句、舊訓ハギノハナとな

つてゐる。

このごろのあかつき露に我がやどの萩の下葉はいろづきにけり

拾遺集卷十七雜秋にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十（二一八二）、詠黄葉、讀人不知に、比日之曉露丹吾屋前之芽子乃下葉者色付爾家里がある。第二句、舊訓アカツキツユニ。六帖に、讀人不知とし、初句、『このごろは』とある。柿本集に載つた。

夜をさむみ衣かりがね鳴くなべに萩の下葉はいろづきにけり

拾遺集卷十七雜秋、前の歌につづいてある。先にあげた如く、古今集卷四に、題しらず、讀人しらず、下句、『萩の下葉もうつろひにけり』とあり、左注に『この歌はある人のいはく柿本の人麿がなりと』とある。又、六帖に、人麿とし、下句、『萩の下葉も色づきにけり』とある

わぎもこが赤裳ぬらして植ゑし田を刈りてをさむる藏なしの濱

拾遺集卷十七雜秋にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷九(一七一〇)、右二首或云柿本朝臣人麻呂作と注された歌に、吾妹兒之赤裳泥塗而殖之田乎苅將藏倉無之濱がある。第二句、古寫本中(嘉・元・古・神)アカモヌラシテ。六帖第二、『夏の田』に、人まろとして、第二句以下『赤裳ぬれつつ植うる田を刈りてをさめむ』云々とあり、同第三、『濱』に、人麿として、『我背子が……刈りてをさめむ』云々とある。柿本集に、第四句、『刈りてをさめむ』として載つた。

〇

梓弓ひきみ引かずみこずはこずこばこそ猶ぞよそにこそみめ

拾遺集卷十八雜賀にあり、柿本人麿とある。萬葉集卷十一(二六四〇)、寄物陳思、讀人不知に、梓弓引見弛見不來者不來來者來其乎奈何不來者來者其乎がある。第二句、古寫本中(嘉・類・古・細)ヒキミヒカズミ。六帖に、きの女郎として、第四句、『こばこそをなど』とある。柿本集に載り、第四句、『こばこそをなぞ』(流布本)、『こばこそはなぞ』(類從本)とある。結句は、六帖、拾遺集、柿本

集、皆同一であるが、萬葉集古寫本に原據が見當らない。

○

少女子が袖ふる山のみづがきのひさしき世よりおもひそめてき

拾遺集卷十九雜戀にあり、題しらず、柿本人麿とある。萬葉集卷四（五〇一）、柿本朝臣人麻呂歌に、未通女等之袖振山乃水垣之久時從憶寸吾者があり、初句、類聚古集・神田本ヲトメゴガ。第四句、舊訓ヒサシキヨヨリ。卷十一（二四一五）、寄物陳思、人麿歌集出に、處女等乎袖振山水垣久時由念來吾等者と重出し、初句、嘉暦本・類聚古集ヲトメラガ。第四句、舊訓ヒサシキヨヨリである。卷四の歌は、和歌童蒙抄にも、「ヲトメコカソテノルヤマノミツカキノヒサシキヨヽリヲモヒソメテキ」として引かれてゐる。六帖にも、人麿として同樣に載つてゐる。

○

三島江の玉江の菰をしめしよりおのがとぞ思ふいまだ刈らねど

拾遺集卷十九雜戀にあり、題しらず、柿本人麿とある。萬葉集卷七（一三四八）、寄草、讀人不知に、

三島江之玉江之薦乎從標之已我跡曾念雖未苅がある。六帖に、讀人不知、第二句拾遺集に同じ。柿本集も同樣である。

○

石見なるたかまの山の木の間より我がふる袖を妹見けむかも

拾遺集卷十九雜戀にあり、『いはみに侍りける女のまうで來りけるに、人麿』とある。萬葉集卷二(一三二)、柿本朝臣人麿從石見國別妻上來時歌の反歌に、石見乃也高角山之木際從我振袖乎妹見都良武香があり、その或本歌(一三四)に、石見爾有高角山乃木間從文吾袂振乎妹見監鴨がある。この拾遺集の歌はその或本歌の方から來てゐると思はれる。第三句、舊訓コノマニモ。古寫本中(元・金・類)コノマヨリ。第四句、古寫本中(元・金・類・神・溫)ワガフルソデヲで、拾遺集と一致する。但し『たかまの山』の訓は、萬葉の諸本に見當らない。六帖には、人麿として、『石見のや高角山の木の間より我が袖ふるを妹見つらむや』とある。柿本集に載り、流布本は拾遺集同樣であるが、他の諸本みな『たかつの山』になつてゐる。

○

山科のこはたの里に馬はあれどかちよりぞ來る君を思へば

拾遺集卷十九雜戀にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十一（二四二五）、寄物陳思、人麿歌集出に、山科强田山馬雖在歩吾來汝念不得かある。第二句、舊訓コハタノヤマニ。第四句、舊訓カチヨリソレク。古寫本中（嘉）カチヨリゾクル。結句、舊訓ナレヲオモヒカネ。古寫本中（嘉・古・細）キミヲナモヒカネ、（細）キミオモヒカネである。

○

春日やま雲ゐがくれてとほけれど家はおもはず君をこそおもへ

拾遺集卷十九雜戀にあり、前の歌につづいてゐる。萬葉集卷十一（二四五四）、寄物陳思、人麿歌集出に、春日山雲座隱雖遠家不念公念かあり、舊訓クモヰガクレテトホケレドである。

○

いはしろの野中にたてるむすび松心も解けずむかしおもへば

拾遺集卷十九雜戀、題しらず、人麿。前出卷十四と重出してゐる。萬葉集卷二（一四四）、磐代乃野中爾立有結松情毛不解古所念（舊訓ムリシナモヘバ）があり、六帖（結句ムカシヲゾオモフ）、柿本集に載つてゐること前述の如くである（本書三一七頁）。

○

こぞ見てし秋の月夜はてらせどもあひ見し妹はいや遠ざかる

拾遺集卷二十哀傷にあり、『妻にまかりおくれて又の年の秋月を見侍りて、人麿』とある。萬葉集卷二（二一一）、柿本朝臣人麿妻死之後泣血哀慟作歌の反歌に、去年見而之秋乃月夜者雖照相見之妹者彌年放がある。なほ、右の或本歌に去年見而之秋月夜雖度相見之妹者益年離があつて、この方の結句を、類聚古集では『いやとをさかる』としてゐる。六帖に拾遺集と同じに載つてゐる。家持集も同樣で、『この歌人丸集にいでたり』と注がある。柿本集には、第三句が『宿れども』（流布本）、『わたれども』（圖書寮本第一）、『てらせども』（圖書寮本第二）、『照らすとも』（類從本）などいろいろになつてゐる。

○

わぎもこがねくたれがみを猿澤の池の玉藻と見るぞかなしき

拾遺集卷二十哀傷にあり、「猿澤の池に采女の身なげたるを見て、人麿」とある。この歌は大和物語に出てゐる。また柿本集に載つた。

○

ささ波やしがのてこらがまかりにし川瀨の道を見れば悲しも

拾遺集卷二十哀傷にあり、「吉備津の采女なくなりて後よみ侍りける、人麿」とある。萬葉集卷二・二一八、吉備津采女死時柿本朝臣人麿作歌の反歌に、樂浪之志我津子等何罷道之川瀨道見者不怜臣とある。第四・五句、古寫本中（温・神）カハセノミチハミレバカナシモとある。和歌童蒙抄にも、さうなつてをり、又第二句「シカノツコラカ」とあるのは、「しかのてこら」への轉訛の徑路を想像せしめるものである。

○

沖つ浪よる荒磯をしきたへのまくらとまきてなれるきみかも

拾遺集卷二十哀傷。前の歌につづき、『讚岐のさみねの島にしていはやのなかにてなくなりたる人を見て』と詞書がある。萬葉集卷二（二二二）、讚岐狹岑島視石中死人柿本朝臣人麿作歌一首幷短歌の反歌に、奧波來依荒礒乎色妙乃枕等卷而奈世流君香聞がある。第二句、舊訓キヨルアライソヲ。金澤本ヨルアライソヲ。結句、金澤本ナレルキミカモ。卽ち、拾遺集は、萬葉古寫本中金澤本の訓と全く一致してゐることがわかる。六帖に、人麿とし、下句、『枕にまきてふせる妹かな』となつてゐる。柿本集に載り、流布本、第二句、『よる荒磯の』、第四句、『枕となりて』。

○

家にいきて我が家を見れば玉笹のほかにおきたる妹がこまくら

拾遺集卷二十哀傷にあり、『妻の死に侍りて後悲しびてよめる、人麿』とある。萬葉集卷二（二一六）、柿本朝臣人麿妻死之後泣血哀慟作歌の或本歌反歌に、家來而吾屋乎見者玉床之外向來妹木枕がある。柿本集に載り、第三・四句、『玉ゆかの外におきける』となつてゐる。

○

まきもくの山べ響きて行く水のみなわの如くよをば我がみる

拾遺集卷二十哀傷。前の歌につづいて出てゐる。萬葉集卷七（一二六九）、就所發思、人麿歌集出に、「巻向之山邊響而往水之三名沫如世人吾等者」がある。初句、舊訓マキモムノ。古寫本マキモクノ。第二句、舊訓ヤマベヒビキテ。第四句、古寫本中（類・神・細）ミナワノゴトク。結句は拾遺集の如き訓は見當らない。柿本集に載り、第四句、「みつのあはことに」となつてゐる。

○

いも山の岩根におけるわれをかも知らずて妹が待ちつつあらむ

拾遺集卷二十哀傷、前の歌につづき、詞書、「石見に侍りてなくなり侍りぬべき時にのぞみて」とある。萬葉集卷二（二二三）、柿本朝臣人麿在石見國臨死時自傷作歌一首に、「鴨山之磐根之卷有吾乎鴨不知等妹之待乍將有」がある。第四句、舊訓シラズトイモガ。古寫本中（金・神・細）シラズテイモガ。六帖に、「神山の岩根しまける我をかも知らずて妹が待ちつつをらむ」となつてゐる。柿本集

に拾遺集の如くに載つた。

新古今集

○

鳴く聲をえやは忍ばぬほととぎす初卯の花のかげにかくれて

新古今集卷三夏歌にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集其他に同樣の歌は見當らない。

○

秋萩のさきちる野邊の夕露にぬれつつ來ませ夜はふけぬとも

新古今集卷四秋歌上にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十（二二五二）、寄露、讀人不知に、「秋芽子之開散野邊之暮露爾沾乍來益夜者深去鞆」がある。六帖に、第二句、「咲ける岡べの」、第四句、「ぬれつつをませ」とあり、柿本集流布本に、第二・三句、「咲ける野への夕暮に」（類從本は新古今に同じ）とあり、家持集に、第二句、『咲出る野べの』とある。

○

さをしかのいる野のすすきはつ尾花いつしか妹が手枕にせむ

新古今集卷四秋歌上にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十（二二七七）、寄花、讀人不知に、左小牡鹿之入野乃爲酢寸初尾花何時加妹之手將枕がある。第二句、舊訓イルノノススキ。「手將枕」は、舊本「將手枕」となつてをり、下句の舊訓イツシカイモガ・タマクラニセムである。今の訓は代匠記の訓で、古寫本中（元・類・神）に、『手將枕』とあるから、萬葉本來の訓み方としてはこれに從ふべきであるが、「將手枕」とある古寫本も多く、古寫本の訓は皆舊訓乃至舊訓類似のものであるから、新古今集の訓み方は由來のあるものであることが分かる。柿本集に同樣にあり、六帖に、人麿として、下句『いつしか君が手枕をせむ』とある。

○

秋されば雁のはかぜに霜ふりてさむき夜な夜な時雨さへ降る

新古今集卷五秋歌下にあり、題しらず、人麿とある。第二句、一本、「雁のつばさに」。萬葉集、

他の勅撰集等に同じ歌と認むべきものがない。萬葉集卷一（六四）、志貴皇子御作歌に、葦邊行鴨之羽我比爾霜零而寒暮夕倭之所念、定家が、雁がねの雲行く羽に置く霜の寒き夜頃に時雨さへ降るといふ歌を作り、拾遺愚草に載つてゐる。

○

さを鹿の妻とふ山の岡べなるわさ田は刈らじ霜はおくとも

新古今集卷五秋歌下にあり、前の歌につづいて出てゐる。萬葉集卷十（二二二〇）、詠水田、讀人不知に、左小牡鹿之妻喚山之岳邊在早田者不苅霜者雖零があり、第二句、古寫本中（神）ツマトフヤマノ。結句、古寫本中（元・類・神）シモハオクトモの訓がある。即ち萬葉の古訓と一致してゐる。柿本集にも同様にある。六帖には、讀人不知、第二句、『妻待つ山の』となつてゐる。

○

秋さればおく白露にわが宿の淺茅がうは葉いろづきにけり

新古今集卷五秋歌下にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十（二一八六）、詠黄葉、讀人不知に、

秋去者置白露爾吾門乃淺茅何浦葉色付爾家里があり、第三句、古寫本中（元・類）ソガヤドノとあり、和歌童蒙抄の引用にもさうある。柿本集に、第四句、『あさぢがうへは』ともあり、家持集には、『あさぢがうれは』となつて載つてゐる。

○

かきほなる荻の葉そよぎ秋風の吹くなるなべに雁ぞなくなる

新古今集卷五秋歌下にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十（二一三四）、詠鴈、讀人不知に、葦邊在荻之葉左夜藝秋風之吹來苗丹鴈鳴渡がある。六帖に、人丸として、『葦べなる荻の葉そよぎ秋風の吹き來るなべに雁鳴きわたる』とある。柿本集類從本に、第二・三句、『荻の葉さやぎ吹風の吹なるなべに』とあり、その他はこの新古今集と同じである。柿本集流布本は、『垣ねなるはぎの花さく秋風の吹なるなべにかり鳴わたる』となつてゐる。

○

秋かぜに山とび越ゆる雁がねのいや遠ざかりくもがくれつつ

新古今集卷五秋歌下にあり、前の歌につづいてゐる。萬葉集卷十（二一二八）、詠鴈、讀人不知に、秋風爾山跡部越鴈鳴者射矢遠放雲隱筒がある。第二句、舊訓ヤマトビコユル。結句、舊訓、クモガクレツツ。第四句、古寫本中（神・溫）イヤトホザカリ。同じく萬葉集卷十（二一三六）、詠鴈、讀人不知に、秋風爾山飛越鴈鳴之聲遠離雲隱良思といふ歌もあり、第四句、古寫本中（元）イヤトホザカル、（神）ノイヤトヲサカリと訓んでゐる。六帖に、『人まろ』として載り、又柿本集にも載り、新古今集と同樣になつてゐる。家持集は、第四句、『聲遠ざかり』となつたのが載つてゐる。

○

飛鳥川もみぢ葉ながるかつらぎのやまの秋風吹きぞしぬらし

新古今集卷五秋歌下にあり、題しらず、柿本人麿とある。一本、結句、『吹きぞしぬらむ』。萬葉集卷十（二二一〇）、詠黃葉、讀人不知に、明日香河黃葉流葛木山之木葉者今之散疑がある。結句、舊訓イマシチルラシ。古寫本中（元）イマシチルラン、（類・神）イマカチルラン。萬葉集には『山の秋風』といふ句は見當らない。六帖に、第三句以下、『かつらぎや山には今ぞしぐれふるらし』となつてをり、家持集に、下句、『山の木の葉は今か散るらむ』となつてゐる。

○

しぐれの雨まなくし降れば槇の葉もあらそひかねて色づきにけり

新古今集巻六冬歌にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集巻十（二一九六）、詠黃葉、讀人不知に、四具禮能雨無間之零者眞木葉毛爭不勝而色付爾家里がある。六帖に、第三・四句、『神なびの森の木葉も』となつてゐる。柿本集類從本は、萬葉・新古今に同じく、流布本は、第一・二句、『時雨のみめにはふれゝは』、結句、『紅葉しにけり』となつてゐる。

○

矢田の野に淺茅いろづく荒乳やま嶺の泡雪さむくぞあるらし

新古今集巻六冬歌にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集巻十（二三三一）、詠黃葉、讀人不知に、八田乃野之淺茅色付有乳山峯之沫雪寒零良之がある。結句、類聚古集サムクゾアルラシ、元暦校本サムクアルラシ、神田本サムクゾフルラシとなつてゐる。六帖に、初句、『矢田の野の』、結句は新古今と同じ。柿本集にも載り、これは全く新古今と同じである。

○ 久方のあめにしをるる君ゆゑに月日もしらで戀ひわたるらむ

新古今集卷八哀傷歌にあり、『奈良の帝ををさめ奉りけるを見て、人麿』とある。萬葉集卷二(二〇〇)、高市皇子尊城上殯宮之時柿本朝臣人麿作歌の反歌に、久堅之天所知流君故爾日月毛不知戀渡鴨がある。第二句、舊訓アメニシラルルであるから、『あめにしをるる』はそれから來てゐるのであらう。ツキヒモシラデとかコヒワタルラムとかの訓は、萬葉古寫本にはない。柿本集流布本は、『あめにしくるゝ君ゆへに月日もしらず戀わたるらん』、類從本は、『あめにしほるゝ君ゆゑに月日もしらず戀渡るかも』で、大分新古今と共通點が出て來てゐる。

○ あまざかるひなの長路を漕ぎくれば明石のとより大和島みゆ

新古今集卷十羈旅歌にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷三(二五五)、柿本朝臣人麻呂羈旅歌八首の中に、天離夷之長道從戀來者自明門倭島所見(一本云家門當見由)がある。第二句、舊訓ヒナノ

ナガヂヲ。第三句、古寫本中（類・神）コギクレバ。卽ち新古今はこれらの訓によつたものであることが分かる。柿本集流布本は、第三句、『こぎゆけば』、結句、『家のあたりみゆ』となつてをり、同じく類從本は、新古今集と一致してゐる。

○

篠の葉はみ山もそよに亂るなりわれは妹思ふ別れ來ぬれば

新古今集卷十羇旅歌、前の歌に續いて出てゐる。萬葉集卷二（一三三）、柿本朝臣人麿從石見國別レ妻上來時歌の反歌に、小竹之葉者三山毛淸爾亂友吾者妹思別來禮婆がある。第二句、元曆校本にはソヨニとあるが、ミダルナリといふ訓は、萬葉古寫本に見當らない。六帖に、人麿として載つたが、これは『み山もよそに別るらむ我は妹にし別れ來ぬれば』となつてゐる。柿本集流布本は、『みやまもそよにみだるらん我はいも思ふおきてきつれば』であり、同じく類從本は、『そよにみだるめり我は妹思別きぬれば』である。

○

あしびきの山田もる庵におくかびの下こがれつつ我が戀ふらくは

新古今集卷十一戀歌一にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十一（二六四九）、寄物陳思、讀人不知に、足日木之山田守翁置蚊火之下粉枯耳余戀居久がある。新古今集のやうな訓は古寫本等にも見當らない。六帖には、『山田もるをのをくかびの下焦れのみ我戀ひをらむ』とあり、柿本集流布本には、『山田もるおのをくかびのしたこがれつつわがこふらくは』とある。兩者の第二・三句は、萬葉の舊訓ヤマダモルヲノ・オクカビノに一致し、柿本集の下の句は新古今と一致する。一本、『いほに』とあるのは、類從本系統がさうであつて、これなら全然新古今と同じである。

○

石の上ふるのわさ田のほには出でず心のうちに戀ひやわたらむ

新古今集卷十一戀歌一、前の歌に續いて出てゐる。萬葉集卷九（一七六八）、拔氣大首任二筑紫一時娶二豐前國娘子紐兒一作歌三首の中に、石上振乃早田乃穗爾波不出心中爾戀流比日がある。六帖にも、萬葉のとほりに、結句、『こふるこのごろ』となつてゐる。

○

みかりするかりばのをののなら柴の馴れはまさらで戀ぞまされる

新古今集卷十一戀歌一にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十二（三〇四八）、寄物陳思、讀人不知に、御獵爲鴈羽之小野之櫟柴之奈禮波不益戀社益がある。第四句、舊訓ナレハマサラデ。結句、西本願寺本の一訓にコヒゾマサレルがある。

○

衣手に山おろし吹きて寒き夜を君來まさずばひとりかも寢む

新古今集卷十三戀歌三にあり、題しらず、人丸とある。萬葉集卷十三（三二八二）、讀人不知に、衣袖丹山下吹而寒夜乎君不來者獨鴨寢があり、第二句、舊訓ヤマオロシフキテである。六帖に載り、第四句、『君來まさねば』となつてゐる。

○

夏野ゆく牡鹿の角のつかのまも忘れずぞ思ふ妹がこころを

新古今集卷十五戀歌五にあり、題しらず、人丸とある。一本、第四句、「忘れず思へ」。萬葉集卷四(五〇二)に、柿本朝臣人麻呂歌三首の中に、夏野去小牡鹿之角乃束間毛妹之心乎忘而念哉がある。六帖に、人麿作として、「鹿」と「夏野」の二箇所に載つたが、これは下の句が「見ねば戀しき君にもあるかな」となつてゐる。柿本集流布本には、「忘れず思ふいもが心を」、一本、「みねばこひしき君にも有哉」とあり、なほ「忘れず思へ」(類從本)、「忘れずぞおもふ」(圖書寮本第一)などともなつてゐる。

○

なつくさの露分ごろもきもせぬになどわが袖のかわく時なき

新古今集卷十五戀歌五、前の歌につづいて出てゐる。萬葉集卷十(二九九四)、寄露、讀人不知に、夏草乃露別衣不著爾我衣手乃干時毛名寸があり、第三句、舊訓キモセヌニである。六帖に、第四句、「我が衣手の」、他は新古今集と同じになつてゐる。柿本集に載り、類從本は、新古今集と同じく、流布本、第三句以下、「きぬ物をなどか我袖のかわく時なき」となつてゐる。又、赤人集にも載り、

流布本、『きもせぬに我が衣手のひるよしもなき』。西本願寺本、『まだきぬにわがころもでにひ（は）るよしもなし』である。

○

もののふの八十うぢ川の網代木にいさよふ波のゆくへ知らずも

新古今集巻十七雑歌中にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集巻三（二六四）、柿本朝臣人麻呂従二近江國一上來時至二宇治河邊一作歌一首に、物乃部能八十氏河乃阿白木爾不知代經浪乃去邊白不母がある。六帖に、人麿として載り、結句、『寄べ知らずも』となつてをり、柿本集も六帖と同様である。（但し類從本系統は『行衞しらずも』）。因に、その『よるべ』といふ訓も、萬葉古寫本中神田本にあり、又袖中抄でもさう訓んでゐるのであるが、新古今集はそれを採用しなかつたらしい。和歌童蒙抄では『タヽヨフナミノユクヘシラスモ』としてゐる。

○

秋されば狩人こゆる立田山たちても居てもものをしぞ思ふ

新古今集卷十七雜歌中にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十(二一九四)、寄山、讀人不知に、秋去者鴈飛越龍田山立而毛居而毛君乎思曾念がある。古寫本等に、『狩人こゆる』、『ものをしぞ思ふ』等の訓はない。柿本集にあり、第四・五句、『たつとゐるとに君をこそ思へ』、或は『立ちても居ても物をこそ思へ』になつてゐる。

○

蘆鴨の騷ぐ入江の水の江の世にすみがたき我が身なりけり

新古今集卷十八雜歌下にあり、題しらず、人麿とある。第一・二句に就いては、萬葉集卷十一(二七〇五)、寄物陳思、讀人不知に、葦多頭乃颯入江乃白菅乃知爲等乞痛鴨がある、古今集卷十一戀歌一に、『蘆鴨のさわぐ入江の白波のしらずや人をかく戀ひむとは』があるけれども、同じ歌と見るべきものは、萬葉集にも他の勅撰集にも見當らない。柿本集に、國名の歌の中『つのくに』の歌としてあり、流布本、第三句、『みづならで』ともなつてゐる。

新勅撰集

○

白露と秋の花とをこきまぜてわくことかたきわが心かな

新勅撰集卷四秋歌上にあり、題しらず、柿本人丸とある。萬葉集卷十（二一七一）、詠露、讀人不知に、白露與秋芽子者戀亂別事難吾情可聞がある。第二句、神田本アキノハナトハ。第三句、舊訓コヒミダレ。コキマゼテといふ訓は萬葉古訓に見當らない。六帖に、第一・二句、『白露を秋の萩原に』として載り、第三句以下新勅撰と同樣である。柿本集には、第四句、『あくことかたき』とあるほかは（一本は『わくこと』）、新勅撰と同樣になつてゐる。

○

秋田もるひたのいほりに時雨ふりわが袖ぬれぬほす人もなし

新勅撰集卷五秋歌下にあり、題しらず、人丸とある。萬葉卷十（二二三五）、詠雨、讀人不知に、秋田苅客乃廬入爾四具禮零我袖沾干人無二がある。第二句、神田本はヒタノイホリニと訓んでゐる。柿本六帖に、人麿として、第一・二句、「秋田かる旅の客にて」、結句、「乾す人なしに」とある。柿本集流布本は、初句、「秋田かる」、同類從本は、結句、「ほす人なしに」と、それぞれ一部分づつ新勅撰と小差異がある。

○

夕されば君來まさむと待ちし夜の名殘ぞ今も寢ねがてにする

新勅撰集卷十四戀歌四にあり、題しらず、柿本人丸とある。萬葉集卷十一（二五八八）、正述心緒、讀人不知に、夕去者公來座跡待夜之名凝衣今宿不勝爲がある。第二句、舊訓キミキマスカトであり、古寫本中（嘉・細）キミヤキマスト、（西）キミキマスヤトで、新勅撰と一致するキミキマサムトといふ訓は、考に始まるのである。柿本集に、全く同樣に載つてをり（一本、「今に寢ねがてにする」）、新勅撰はこれから採つたのであらう。

○

あしびきの山下風は吹かねども君が來ぬ夜はかねてさむしも

新勅撰集卷十四戀歌四、前の歌につづいて出てゐる。萬葉集卷十（二三五〇）、寄夜、讀人不知に、足檜木乃山下風波雖不吹君無夕者豫寒毛がある。第二句、舊訓ヤマシタカゼハ。第四句、古寫本中（元・神）キミガコヌヨハである。六帖に、人麿として、新勅撰と同樣に載り、柿本集も諸本皆新勅撰と一致してゐる。家持集には、結句、『袂寒しも』となつてゐる。

○

玉ほこの道行きつかれいな筵しきても人を見るよしもがな

新勅撰集卷十四戀歌四にあり、題しらず、人丸とある。萬葉集卷十一（二六四三）、寄物陳思、讀人不知に、玉戈之道行疲伊奈武思侶敷而毛君乎將見因母鴨がある。六帖に、結句、『見むよしもがな』と載つた。柿本集には、新勅撰と同じく、『見るよしもがな』と載つてゐる。

○

み吉野の御舟の山にたつ雲の常にあらむとわが思はなくに

新勅撰集巻十八雜歌三にあり、題しらず、人丸とある。萬葉集巻三（二四四）、或本歌、人麿歌集出に、三吉野之御船乃山爾立雲之常將在跡我思莫苦二がある。家持集にも載り、第四句、『常ならむとも』となつてゐる。

続後撰集

○

青柳のかづらにすべくなるまでにまてどもなかぬ鶯の聲

續後撰集卷一春歌上にあり、題しらず、柿本人丸とある。他の歌集等に見當らない。

○

春霞立ちまふ山と見えつるはこのもかのもの櫻なりけり

續後撰集卷二春歌中にあり、題しらず、人丸とある　柿本集、國名の歌の中、「但馬」の國の歌として載つてゐる。それを採つたものであらう。

○

咲けばかつ散りぬる山のさくら花こころのどかにおもひけるかな

續後撰集卷三春歌下にあり、題しらず、人麿とある。柿本集、國名の歌の中『能登』の國の歌にある。（類從本等第三句、「花さくら」）。續後撰はそれをとつたのであらう。

○

あまの川霧たちわたるたなばたの雲の衣のかへる袖かも

續後撰集卷五秋歌上にあり、『七夕の心を』と題した一聯の終に、人丸として出てゐる。萬葉集卷十（二〇六三）、天漢霧立上棚幡乃雲衣能飄袖鴨（アマノガハキリタチノボルタナバタノクモノコロモノカヘルソデカモ）がある。キリタチソタルといふ訓は見當らない。赤人集に、『あまのがはきりたちのぼりたなばたのくものころものあへるそらかな』（西本願寺本）、『天の川霧たちわたる七夕のくもの衣のかへる袖かな』（流布本）とあり、柿本集に、『天の川霧立ちわたるたなばたはあまのは衣とひわかるかも』とあり、家持集に、『天の川霧たちわたり七夕の雲のころものなびく袖かも』とある。即ち赤人集流布本がほとんど同一である。

○

秋さればいもに見せむと植ゑし萩露霜おきて散りにけらしも

續後撰集卷七秋歌下にあり、『秋の歌の中に』と題した歌につづき、人丸としてある。一本、結句、「散りにけるかな」。萬葉集卷十（二一二七）、詠花、讀人不知に、秋去者妹令視跡殖之芽子露霜負而散來毳（アキサラバイモニミセムトウヱシハギツユジモオヒテチリニケルカモ）がある。初句、舊訓アキサレバ。第四句、神田本の一訓にオキテがある。結句、元曆校本チリニケムカモ。柿本集に、後撰と同樣に載つてゐる。（類從本系統は結句、「ちりにけるかも」）。

○

秋山の木の葉も今はもみぢつつ今朝吹く風に霜おきにけり

續後撰集卷七秋歌下にあり、題しらず、人丸とある。萬葉集卷十（二二三二）、詠風、讀人不知に、秋山之木葉文未赤者今旦吹風者霜毛置應久（アキヤマノコノハモイマダモミチネハケサフクカゼハシモモオキヌベク）がある。第四句、京都大學本ケサフクカゼニとあるほかは、續後撰集に一致する古訓は見當らない。柿本集に載り、流布本、『いまだもみぢねば今朝吹風はしもきえぬべし』、類從本、『いまだもみぢねどけさ吹風は霜もけぬべし』であるが、圖書寮本第

一のみは全く續後撰と一致してゐる。

○

夜を寒み朝戸をあけてけさ見れば庭もはだらに雪ふりにけり

續後撰集卷八冬歌にあり、題しらず、人丸とある。萬葉集卷十（二三一八）、詠雪、讀人不知に、夜乎寒三朝戸乎開出見者庭毛薄太良爾三雪落有（一云庭裳保杼呂爾雪曾零而有）がある。第二句、舊訓アサドヲアケテ。結句、類聚古集ユキフリニケリである。六帖に、第三句、「出でて見れば」、結句、「雪は降りつつ」と載り、家持集に、第三句、「見渡せば」、結句、「あわ雪ぞ降る」と載つた。柿本集は、流布本では、第三句、「出でぬれば」となつてゐるが、圖書寮本第一は、第三句、「けさ見れば」で、全く續後撰と一致してゐる。

○

磯の上に生ひたる葦の名を惜しみ人に知られで戀ひつつぞふる

續後撰集卷十一戀歌一にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十二（二八六一）、寄物陳思、人麿

歌集出に、儀上生小松名惜人不知戀渡鴨がある。六帖に、『岩の上に立てる小松の名を惜しみ言には出でず戀ひつつぞ經る』がある。これは、萬葉では、右（二八六二）の或本歌、巖上爾立小松名惜人爾者不云戀渡鴨の方に近いが、結句が續後撰集と一致する點は注意すべきである。

○

かくてのみ戀ひやわたらむたまきはる命も知らず年はへにけり

續後撰集卷十二戀歌二にあり、題しらず、柿本人丸とある。萬葉集卷十一（二三七四）、正述心緒、人麿歌集出に、是耳戀度玉切不知命歳經管がある。初句、舊訓カクシノミ。古寫本中（嘉・細）カクテノミ。結句、舊訓トシハヘニツツ。『年は經にけり』の訓は見當らない。

○

あし引の山田のひたのひたぶるに忘るる人をおどろかすかな

續後撰集卷十五戀歌五にあり、題しらず、人丸とある。萬葉集に原歌と認むべきものは見當らない。六帖に、『おどろかす』といふ題で載つてをり、續後撰はそれをとつたのであらうか。又、詞花

集卷九雜上の能因法師の歌に、「ひたぶるに山田もる身となりぬれば我のみ人をおどろかすかな」とあるのも關係がありさうに思はれる。

（一）

わぎも子が袖をたのみてまのの浦のこすげの笠をきずて來にけり

續後撰集卷十九羇旅歌にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十一（二七七一）、寄物陳思、讀人不知に、吾妹子之袖乎憑而眞野浦之小菅乃笠乎不著而來二來有がある。六帖にも載つたが、初句、「わがせこが」となつてゐる。なほ六帖拾遺に、第二句以下が「あしびきの山すげの笠を取らできにけり」となつたものもある。

續古今集

○

ここに來て春日の原を見わたせば小松がうへに霞たなびく

續古今集卷一春歌上にあり、題しらず、柿本人丸とある。六帖に、『ここにして春日の山を見渡せば小松が枝に霞たなびく』となつてゐる。萬葉集に原歌と認むべきものは見出せない。

○

わが宿に咲きたる梅を月影に夜な夜な來つつ見む人もがな

續古今集卷一春歌上にあり、題しらず、柿本人丸とある。萬葉集卷十(二三四九)、寄花、讀人不知に、吾屋戸爾開有梅乎月夜好美夕夕令見君乎祚待也（ワガヤドニサキタルウメヲツクヨヨミヨヒヨヒミセムキミヲコソマテ）がある。第四句、舊訓ヨナヨナミセム。結句、舊訓キミヲゾマツヤ。古寫本中(元・類・神)キミヲコソマテである。柿本集に載り、流布本は全く續

古今と同じであり、類從本は、第二句以下、『さき散梅を月清みよるよるきつつ』となつてゐる。又六帖に、『咲きたる梅の月清み夜な夜な見せむ君をこそ待て』とあり、家持集に、『咲きたる梅を月きよみ夜々見せむ君をこそ待て』とある。續古今は恐らく柿本集から採錄したのであらう。

○

夕やみはあなおぼつかな月影のいでばや花の色もまさらむ

續古今集卷二春歌下にあり、題しらず、人丸とある。柿本集に、國名の歌の中、『いでは（出羽）』の國の歌として出てゐる。これは、續古今集が柿本集の歌を人麿作として採錄したものと考へることが出來る。なほ、以下にも幾つか、柿本集の國名の歌が續古今に入つてゐる。

○

散りぬともいかでか知らむ山櫻春の霞の立ちしかくせば

續古今集卷二春歌下にあり、『春の歌とて、人丸』とある。柿本集に、國名の歌の中、『いが（伊賀）』の國の歌として載り、流布本、第二句、『いかでかしらなむ』となつてゐる。類從本は、續古今

と同じである。

○

ふる道に我やまどはむいにしへの野中の草は茂りあひけり

續古今集卷三夏歌にあり、題しらず、柿本人丸とある。この歌は、もと拾遺集卷七物名に載り、藤原輔相が「やまと」を詠みこんだ歌であるのを、柿本集の國名の歌の中に入れられ、續古今はそれから採つたものと考へられる。但し、拾遺集は、結句、『茂りあひにけり』。柿本集は、下の句、『野中の草としげりあひにけり』(流布本)、「野中の草もしげりあひにけり』(類從本)となつてゐる。

○

萩の花散らば惜しけむ秋の雨しばしな降りそ色のつくまで

續古今集卷四秋歌上にあり、題しらず、人丸とある。萬葉その他に原歌と認むべきものが見當らない。

○

山の端は清く見ゆれど天つ空ただよふ雲の月やかくさむ

續古今集卷四秋歌上にあり、題しらず、柿本人丸とある。一本、結句、「月やか〻らむ」。柿本集に、國名の歌の中、「はゝき」の國の歌として載り、流布本、初句、「山ぎはは」、類從本、第三句、『天原』となつてゐる。續古今はそれをとつたものであらう。

○

この頃の秋の朝けの霧がくれ妻よぶ鹿の聲のさやけさ

續古今集卷五秋歌下にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十（二一四一）、詠鹿鳴、讀人不知に、比日之秋朝開爾霧隱妻呼雄鹿之音之亮左（コノゴロノアキノアサケニ・キリガクリツマヨブシカノコヱノサヤケサ）がある。第三句、舊訓キリガクレ。結句、舊訓コヱノハルケサ。古寫本中（元・類・神・西・細・温）オトノハルケサ。元暦本の一訓にのみサヤケサがある。一般にサヤケサと訓むやうになつたのは拾穗抄以後である。六帖に、「このごろの秋の朝けに霧がくれ妻よぶ鹿の音のさびしさ」と載つてゐる。

○

おくれゐて我やはこひむ春霞たなびく山を君し越えなば

續古今集卷九離別歌にあり、『(大寶二年正月贈從三位高市丸長門になりてくだりけるに三輪川のほとりにて餞すとてよみ侍りける、柿本人丸)』とある。萬葉集卷九(一七七一)、古歌集出、大神大夫任二長門守一時集二三輪河邊一宴歌二首の中に、於久禮居而吾波也將戀春霞多奈妣久山乎君之越去者がある。結句、類聚古集は、『君しこえなば』になつてゐる。家持集に、『後れゐてあれはや戀の春霞たなびく山を君が越ぬる』と載つてゐる。

○

白鳥の鷺坂山の松かげにやどりてゆかむ夜も更けにけり

續古今集卷十羇旅歌にあり。『さぎさか山をこゆとてよめる、人麿』とある。萬葉集卷九(一六八七)、鷺坂作歌一首、人麿歌集出に、白鳥鷺坂山松影宿而往奈夜毛深往乎がある。第四句、舊訓ヤドリテユクナ。古寫本中(藍・壬・古)ヤドリテユカム、(神・西)ヤドリテユカナ。『夜も更けにけり』は萬葉の古訓に見當らない。

○

うば玉の黒髪山を今朝こえて木のした露に濡れにけるかな

續古今集卷十羈旅歌にあり、題しらず、人丸とある。萬葉集卷七（一二四一）、羈旅作、古歌集出に、黒玉之玄髮山乎朝越而山下露爾沾來鴨がある。『けさこえて』、『木の下露』、ともに萬葉の古訓に見當らない。六帖第一に、『雫』の題で、人麿として、『ぬばたまの黒髮山をけふ越えて雫にいたくぬれにけるかな』。同第二に、『山』の題で、『ぬばたまの黒髮山を朝こえて木の下露にぬれにけるかも』と載つてゐる。

○

草まくら旅にしあれば秋風の寒きゆふべに雁鳴きわたる

續古今集卷十羈旅歌にあり、題しらず、柿本人麿とある。萬葉集卷七（一一六一）、羈旅作、讀人不知に、離家旅西在者秋風寒暮丹鴈喧渡がある。初句の異訓は、古寫本中（元・類・神）イヘハナレ位で、『草まくら』は故意に改めたものであらうか。六帖には、初句、『家はなれ』になつてゐる。

○

この山の嶺にちかしとわが見つる月の空なる戀もするかな

續古今集卷十一戀歌一にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十一（二六七二）、寄物陳思、讀人不知に、此山之嶺爾近跡吾見鶴月之空有戀毛爲鴨があり、結句、類聚古集コヒモスルカナである。六帖に載り、第二句、『みねのあらしと』となつてゐる。

○

かくしつつさてや止みなむ大荒木の浮田の杜のしめならなくに

續古今集卷十一戀歌一、前の歌につづいて出てゐる。萬葉集卷十一（二八三九）、寄標喩思、讀人不知に、如是爲哉猶八戌牛鳴大荒木之浮田之社之標爾不有爾があり、第二句、舊訓ナヲヤヤミナムである。

○

逢ふ事をいつしかとのみまつしまのかはらず人を戀ひわたるかな

續古今集卷十二戀歌二にあり、題しらず、柿本人丸とある。柿本集に、國名の歌の中、「いづ（伊豆）」の國の歌として載つてゐる。續古今集はそれを採つたのであらう。

○

志賀のあまの鹽燒衣なるれども戀てふものは忘れかねつも

續古今集卷十四戀歌四にあり、題しらず、柿本人丸とある。萬葉集卷十一（二六二二）、寄物陳思、讀人不知に、志賀乃白水郎之鹽燒衣雖穢戀云物者忘金津毛がある。第三句、舊訓ナルトイヘドで、古訓にナルレドモは見當らない。第四句、舊訓コヒテノモノハ、古寫諸本コヒテフモノハ。六帖に載り、第三・四句、「なれゆけば戀てふものは」となつてゐる。

○

君こふとわがなく涙しきたへの枕とほりて袖は濡れつつ

續古今集卷十四戀歌四にあり、『戀の歌の中に、人丸』として以下三首ならんでゐる。萬葉集卷十一(二五四九)、正述心緒、讀人不知に、妹戀吾哭涕敷妙木枕通袖副所沾(イモコフトワガナクナミダシキタヘノコマクラトホリソデサヘヌレヌ)がある。初句、舊訓イモコフト。第四句、舊訓マクラトホリテ。六帖に、人麿として載り、『妹を戀ひわが泣く涙しきたへの枕とほりて袖さへぬれぬ』となつてゐる。

○

人を戀ひせめて涙のこぼるれば此方彼方の袖ぞぬれける

續古今集卷十四戀歌四、前の歌につづいて出てゐる。柿本集に、國名の歌の中、『ひせん(肥前)』の國の歌として載り、第四句、流布本、『これたかかたの』、類從本は、續古今と同じく『こなたかなたの』である。この歌は、これも續古今が柿本集から採つたものと考へていいであらう。

○

うば玉のわが黑髮をなきぬらし思ひみだれて戀ひわたるかな

續古今集卷十四戀歌四、前の歌につづいて出てゐる。萬葉集卷十一(二六一〇)、正述心緒、讀人不

知に、夜干玉之吾黒髪乎引奴良思亂而反戀度鴨がある。第四句、舊訓ミダレテカヘリ。六帖に、萬葉舊訓と同様に載つた。

〇

誰しかもわれを戀ふらむ下紐のむすびもあへずとくる心は

續古今集卷十四戀歌四にあり、題しらず、柿本人丸とある。萬葉集には、卷十二(三一四五)、吾妹兒之阿乎偲良志草枕旅之丸寢爾下紐解の如きものはあつても、ここの原歌と認むべきものは見當らない。柿本集に、國名の歌の中、「ひご(肥後)」の國の歌として「たれしかも我をこふらん下ひものむすびもあはずとくる日ごろは」があり、續古今の歌は、それから來てゐるのであらう。柿本集類從本は、下句、「むすびもあへずとくる心は」と續古今と同じになつてゐる。

〇

山川の石間を分けて行く水はふかき心もあらじとぞ思ふ

續古今集卷十四戀歌四、前の歌につづいてゐる。柿本集に、國名の歌の中、「しま(志摩)」の國の

歌として載つてをり、續古今はそれを採つたものと考へられる。

○

卷向の檜原にたてる春霞晴れぬおもひはなぐさまるやは

續古今集卷十七雜歌上にあり、『霞をよめる、人丸』とある。萬葉集卷十（一八一三）、卷向之檜原丹立流春霞鬱之思者名積米八方がある。第四句、舊訓クレシオモヒハ。古寫本中（元・類・神）ハレヌオモヒハ。結句、舊訓ナツミケメヤモ。古寫本中（元・神）ナグサメツヤハ（一訓、ナグサマレヤハ）。赤人集に載り、西本願寺本、『まきもくがひはらにたてるはるがすみ』とのみあり、流布本は、下句、『晴れぬ思ひにわかな摘まめや』となつてゐる。

○

さ夜更けて堀江こぐなるまつら舟かぢ音たかしみを早みかも

續古今集卷十八雜歌中にあり、題しらず、人丸とある。萬葉集卷七（一一四三）、攝津作、讀人不知に、作夜深而穿江水手鳴松浦船梶音高之水尾早見鴨があり、第四句、舊訓カヂオトタカシである。

○

大海は島もあらなくに海原やたゆたふ波に立てる白雲

續古今集卷十八雜歌中にあり、題しらず、柿本人丸とある。萬葉集卷七（一〇八九）、詠雲、伊勢從駕作、讀人不知に、大海爾島毛不在爾海原絶塔浪爾立有白雲がある。六帖には、萬葉と全く同じに載つてゐる。

○

年つもるをすての山の槇の葉もひさしく見ねば苔おひにけり

續古今集卷十九雜歌下にあり、題しらず、柿本人丸とある。萬葉集卷七（一二一四）、羇旅作、讀人不知に、安太部去小爲手乃山之眞木葉毛久不見者蘿生爾家里があり、結句、舊訓コケオヒニケリである。續古今の初句、「年つもる」は、恣に改めたものであらうか。六帖には、「あたへゆく小鹽の山の槇の葉もひさしく見ねば苔生ひにけり」となつてゐる。

○

穴師川川音たかしまきもくの弓槻がたけに雲たてるらし

續古今集卷十九雜歌下、前の歌につづいて出てゐる。萬葉集卷七(一〇八七)、詠雲、人麿歌集出に、痛足河河浪立奴卷目之由槻我高仁雲居立有良志(アナシガハカハナミタチヌマキムクノユツキガタケニクモヰタテルラシ)がある。第三句、舊訓マキモクノ。結句、舊訓クモタテルラシであるが、續古今の『川音たかし』は何から來てゐるか、未だ知ることを得ない。

○

うちなびき春たちぬらし我が門の柳のうれに鶯なきつ

玉葉集卷一春歌上にあり、『鶯をよみ侍りける、柿本人麿』とある。萬葉集卷十(一八一九)、詠鳥、讀人不知に、打靡春立奴良志吾門之柳乃宇禮爾鶯鳴都 がある。赤人集に載り(西本願寺本缺)、第三句以下、『我が宿の柳の枝にうぐひす鳴くも』となつてゐる。又家持集に載り、第二・三句、『春は來ぬらし我が宿は』となつてゐる。

春雨のうちふるごとに我が宿の柳のすゑは色づきにけり

玉葉集卷一春歌上にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集に原歌らしいものは見當らない。六帖

に載り、初句、「春の雨の」となつてゐる。

○

春の野に心やらむと思ふどちいでこし今日はくれずもあらなむ

玉葉集巻一春歌上にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集巻十(一八八二)、野遊、讀人不知に、春野爾意將述跡念共來之今日者不晩毛荒粳がある。第二句、舊訓ココロヤラムト、第四句、古寫本中(類・古・神)イデコシケフハとなつてゐる。又、六帖に載り、第四句、「ちぎりし今日は」となつてゐる。

○

かくばかり雨のふらくにほととぎす卯の花山になほか啼くらむ

玉葉集巻三夏歌にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集巻十(一九六三)、詠鳥、讀人不知に、如是許雨之零爾霍公鳥宇之花山爾猶香將鳴がある。赤人集に、第二句、「雨のふるをや」として載つてゐる。(西本願寺本は、他に結句、「なほやなくらむ」になつてゐる)。

○

かりがねのさむくなるより水莖の岡のくず葉は色付きにけり

玉葉集卷四秋歌上にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十(二二〇八)、詠黄葉、讀人不知に、鴈鳴之寒鳴從水莖之岡乃葛葉者色付爾來がある。第二句、舊訓サムクナクヨリ。古寫本中神田本はサムクナルヨリである。

○

草深みきりぎりすいたく鳴く宿の萩見に君はいつかきまさむ

玉葉集卷四秋歌上にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十(二二七一)、寄花、讀人不知に、草深三蟋多鳴屋前芽見公者何時來益牟がある。第二句、舊訓キリギリスイタク。第三句、舊訓ナクヤドニ。古寫本中類聚古集ナクヤドノ、神田本にもヤドノの訓がある。

○

つまかくすやのの神山露霜に匂ひそめたり散らまくもをし

玉葉集卷五秋歌下にあり、「紅葉を」の題で、人丸とある。一本、結句、「散らまくをしも」。萬葉集卷十（二一七八）、「詠黄葉、人麿歌集出に、妻隱矢野神山露霜爾爾寶比始散卷惜があり、初句、古寫本中（元・類・神）ツマカクスである。六帖に載り、下句、『匂ひそむらし散らまく惜しみ』となつてゐる。

○

紅葉ばをおとす時雨のふるなべに夜さへぞさむきひとりし寝れば

玉葉集卷六冬歌にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十（二二三七）、詠雨、讀人不知に、黄葉乎令落四具禮能零苗爾夜副衣寒一之宿者があり、第二句、元暦校本・類聚古集オトスシグレノである。柿本集に載り、流布本は玉葉と同樣、類從本は、第三句、「降比は」となつてゐる。又家持集に載り、これは第二句、『散らす時雨の』となつてゐる。

○

けふにありてあすは過ぎなむ神無月時雨にまよふ紅葉かざさむ

玉葉集巻六冬歌、前の歌につゞいてある。萬葉集に原歌と認むべきものが見當らない。六帖に、人麿として載り、第一・二句、「今日ありて明日すぎぬらむ」、第四句、「時雨にまがふ」となつてゐる。

○

あづまののけぶりのたてる所みてかへりみすれば月かたぶきぬ

玉葉集巻八旅歌にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集巻一(四八)、輕皇子宿于安騎野時柿本朝臣人麿作歌の反歌に、東野炎立所見而反見爲者月西渡がある。上句、舊訓アヅマノノ・ケブリノタテル・トコロミテであつて、今の萬葉の訓は眞淵の考に始まるのである。だから中世に萬葉から採るとせば、玉葉集の如くになるのが當然であると言ふことが出來る。

○

たづがねの聞ゆる田居にいほりしてわれ旅なりといもに告げこせ

玉葉集卷八旅歌にあり、前の歌につづいてある。萬葉集卷十（二二四九）、寄水田、讀人不知に、鶴鳴之所聞田井爾五百入爲而吾客有跡於妹告社がある。結句、古寫本中類聚古集はイモニツゲコセであり、元暦校本と神田本の一訓にも、ツゲコセがある。六帖には、第二句、『聞ゆるなべに』、下句、『旅にありきと妹に告げなむ』となつてゐる。又、後の新後拾遺集卷十羇旅歌に、題しらず、讀人しらずとして載り、初句「たづのねの」、他は玉葉と同様である。

○

名に高きいはみの海の沖つ波ちへにかくれぬやまと島ねは

玉葉集卷八旅歌にあり、『筑紫に下りける時海路にてよめる、人丸』とある。一本、第四句、『ちへぬかくりぬ』。萬葉集卷三（三〇三）、柿本朝臣人麻呂下筑紫國時海路作歌二首の中に、名細寸稲見乃海之奥津浪千重爾隱奴山跡島根者がある。初句、古寫本中（類・神）ナニタカキであり、和歌童蒙抄にもナニタカキとしてある。第四句、舊訓チヘニカクレヌである。

近江路の野島がさきの濱風にいもが結びしひも吹きかへす

玉葉集卷八旅歌にあり、『旅の歌、人麿』とある。萬葉集卷三（二五一）、柿本朝臣人麻呂羇旅歌八首の中に、粟路之野島之前乃濱風爾妹之結紐吹返がある。初句、舊訓アハミチノであるから、それから近江路ノとなつたものであらうか。第二句、古寫本中（西・細・温・京）ノジマガサキノとあつて、玉葉と一致してゐる。

○

心にはちへに思へど人にいはぬわが戀妻はみるよしもなし

玉葉集卷九戀歌一にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十一（二三七一）、正述心緒、人麿歌集出に、心千遍雖念人不云吾戀嬬見依鴨がある。第二・三句、舊訓チヘニオモヘド・ヒトニイハヌ。結句、舊訓ミルヨシモガモ。六帖に載り、結句、「見むよしもがな」、其他は玉葉集と同樣である。

○

吾妹子にこひてすべなみ夢にみむと我は思へどいこそねられぬ

玉葉集卷九戀歌一にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十一（二四一二）、正述心緒、人麿歌集出に、我妹戀無乏夢見吾雖念不所寐がある。第二句、舊訓コヒテスベナミ。第三句、舊訓ユメミント。古訓には、『夢に見むと』は見當らず、童蒙抄でユメニミムト、考でイメニミントと訓むに至つた。結句、舊訓イネラレナクニ。古寫本中（細・西・温・京）の一訓にイコソネラレネがある。

○

かささぎのはねに霜ふりさむき夜を獨りかねなむ君を待ちかね

玉葉集卷十戀歌二にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集に原歌と認むべきものは見出せない。六帖に、人まろとして載り、下句、『ひとりや我が寢む君待ちかねて』となつてゐる。

○

たれかれと我をなとひそ長月の露にぬれつつ君まつわれぞ

玉葉集卷十戀歌二にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十（二二四〇）、秋相聞、人麿歌集出に、誰彼我莫問九月露沾乍君待吾があり、初句、舊訓タレカレト。結句、神田本キミマツソレゾである。六帖に、下句、「時雨にぬれて君待つ人を」として載り、柿本集に、下句、「時雨にぬれて君まつ我を」として載つてゐる。それらに比べて、この玉葉の「露にぬれつつ」は萬葉と符合してゐるから、この場合、玉葉は六帖や柿本集から採つたのでないと考へていいであらう。

○

秋の夜を長しと思へどつもりにし戀をつくせばみじかかりけり

玉葉集卷十戀歌二にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十（二三〇三）、寄夜、讀人不知に、秋夜乎長跡雖言積西戀盡者短有家里があり、第二句、古寫本中（元・神）ナガシトナモヘド、（京）ナガシトナモヘドモ。結句、舊訓ミジカカリケリで、即ち玉葉集の句は、萬葉古訓の或るものに一致してゐる。

○

秋萩を散らす時雨の降る頃はひとりおきゐて戀ふる夜ぞ多き

玉葉集卷十二戀歌四にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十(二二六二)寄雨、讀人不知に、秋芽子乎令落長雨之零比者一起居而戀夜曾大寸がある。第二句、古寫本等に、シグレといふ訓は見當らない。六帖第一、『雨』に、第二句、『おとすながめのふる程は』として載り、同じく六帖第五、『夜ひとりをり』に、第二句、『ちらすながめのふるなべに』として載つてゐる。柿本集流布本に、『秋萩におとす時雨のふる時は人をおきゐて戀ふる夜ぞ多き』とあり、なほ諸本異同がある。

○

今も思ふ後も忘れじかり菰の亂れて後ぞわれ戀ひまさる

玉葉集卷十三戀歌五にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集其他に原歌と認むべきものが見當らない。六帖に載り、『今も思ふ後も忘れずかりごもの亂れてのみぞ我戀ひわたる』となつてゐる。

○

いかならむ神にぬさをも手向けばか我が思ふ妹を夢にだにみむ

玉葉集巻十三戀歌五、前の歌につづいてある。萬葉集巻十一（二四一八）、寄物陳思、人麿歌集出に、何名負神幣嚮奉者吾念妹夢谷見がある。舊訓イカナラム・カミニヌサヲモ・タムケバカ・ソガオモフイモヲ・ユメニダニミムで、玉葉集は全くこれに一致してゐる。

○

ささ波の志賀のおほわたよどむとも昔の人にまたあはめやも

玉葉集巻十五雑歌二にあり、「近江のあれたる都をすぐとてよみ侍りける、人麿」とある。萬葉集巻一（三一）、過近江荒都時柿本朝臣人麿作歌の反歌に、左散難彌乃志我能大和太與杼六友昔人二亦母相目八毛がある。

○

武庫の浦の泊りなるらしいさりするあまの釣舟波まよりみゆ

玉葉集巻十五雜歌二にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集巻三(二五六)、柿本朝臣人麻呂羇旅歌八首中第八首の一本云に、武庫乃海爾波好有之伊射里爲流海部乃釣船浪上從所見があり、又巻十五(三六〇九)、遣新羅使の當所誦詠古歌の中にも、武庫能宇美能爾波余久安良之伊射里須流安麻能都里船奈美能宇倍由見由があつて、柿本朝臣人麿歌曰云々の注がついてゐる。巻三の歌は、第二句、多くの本に、舶爾波有之とあつて、舊訓フネニハナラシ、古寫本中(古・細)トマリニハアラシとなつてをり、又、結句、古寫本中細井本の一訓にナミマヨリミユとある。一方、巻十五の歌は、結句、舊訓ナミノウヘニミユで、諸本に大して異訓もないから、玉葉集の歌は、萬葉の巻三の方から來てゐると大體考へて差支ないであらう。柿本集にも載り、「みこのうみはよくこそ有らしいさりせるあまの釣舟波の上にみゆ」(類從本は上句、『むこのうらのとまり成らしいさりする』)となつてゐる。

○

後見むと君がむすべるいはしろのこ松がうれを又みつるかな

玉葉集巻十八雜歌五にあり、「紀伊國にみゆき侍りける時むすび松を見てよみ侍りける、人麿」とある。萬葉集巻二(一四六)、大寶元年辛丑幸于紀伊國時見結松歌一首に、後將見跡君之結有磐代

乃子松之宇禮乎又將見香聞があり、古寫本の大部分に、題詞のあとに、「柿本朝臣人麻呂歌集中出也」といふ注がある。結句、古寫本中（元・類・古・神）マタモミムカモ、（金）マタミツルカモの訓がある。六帖に、人麿として載り、結句、「またも見むかも」となつてゐる。

續千載集

○

音にきく吉野の櫻見にゆかむ告げよ山守花のさかりは

續千載集卷一春歌上にあり、題しらず、柿本人丸とある。柿本集に、國名の歌の中、『かんつけ（上野）』の國の歌として載り、結句、『花のさかりを』である。續千載は、それを採つて人丸の歌としたのであらう。

○

行きかよふ雲居は道もなきものをいかでか雁の迷はざるらむ

續千載集卷四秋歌上にあり、題しらず、人麿とある。柿本集に、國名の歌の中、『ゆき（壹岐）』の國の歌として載り、結句、『まどはざるらむ』である。（類從本はなほ、第一・二句、『ゆきかへる雲

ゐに道もことなつてゐる。それを、續千載は採つたものであらう。

○

池のべの槻が下に篠な刈りそ其をだに君がかたみに見つつ偲ばむ

續千載集卷七雜體にあり、旋頭歌、題しらず、人麿とある。萬葉集卷七（一二七六）、旋頭歌、人麿歌集出に、池邊小槻下細竹莫苅嫌其谷君形見爾監乍將偲がある。第二句、舊訓ヲツキガシタノ。古寫本中（古）古寫本中（元）ヲツキガシタニ。（古）ヲツキガモトニ。第三句、舊訓シノナカリソネ。ササナカリソネ。

○

奧山の木の葉がくれにゆく水の音聞きしより常に忘れず

續千載集卷十二戀歌二にあり、題しらず、柿本人麿とある。萬葉集卷十一（二七一一）、寄物陳思、讀人不知に、奧山之木葉隱而行水乃音聞從常不所忘がある。第二句、舊訓コノハカクレニ。結句、舊訓ツネソワスラレス、類聚古集ツネニソワスレズである。六帖に、續千載と同様に載つてゐる。

續後拾遺集

○

春來ぬと人しもつげず逢坂のゆふつけ鳥の聲にこそしれ

續後拾遺集卷一春歌上にあり、題しらず、柿本人麿とある。柿本集に、國名の歌の中、「しもつけ（下野）」の國の歌として載つてゐる。類從本は、第二句、「人しもつげよ」、第四句、「ゆふ付とりも」となつてゐるが、流布本は、全く續後拾遺と一致してゐる。これも、續後拾遺が柿本集から採錄したものと考へてよいであらう。

○

櫻花ころ過ぎぬれど我が戀ふる心のうちはやむ時もなし

續後拾遺集卷二春歌下にあり、題しらず、人丸とある。萬葉集卷十一（二七八五）、寄物陳思、讀人

不知に、開花者雖過時有我戀流心中者止時毛梨とある。初句、類聚古集サクラハナハとあるが、ラは朱で消してある。第二句、嘉曆本トキスギマトモ、類聚古集トキスギテアレド。續後拾遺の第一・二句のやうな訓は見當らない。

○

あやしくも鳴かぬ雁かも白露の置きし淺茅生色付きにけり

續後拾遺集卷四秋歌上にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集に原歌らしきものは見當らない。六帖に、あやしくも來鳴かぬ雁か白露の置きにし秋は久しきものをといふのが出てゐる。

○

木の間よりうつろふ月の影をしみ立ちやすらふにさ夜更けにけり

續後拾遺集卷五秋歌下にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十一（二八二一）、問答、讀人不知に、木間從移歷月之影惜徘徊爾左夜深去家里がある。第四句、舊訓タチヤスラフニである。

○

天飛ぶや雁の翼の蔽ひ羽のいづく漏りてか霜の置くらむ

續後拾遺集卷五秋歌下にあり、人麿とある。萬葉集卷十（二二三八）、詠霜、讀人不知に、天飛也鴈之翅乃覆羽之何處漏香霜之零異牟、第四句、舊訓イヅコモリテカ。神田本イヅクモルカ。結句、元暦校本の一訓にシモノオクラムがあり、それから、和歌色葉集や和歌童蒙抄にもシモノオクラムと出てゐる。

○

近江の海夕浪千鳥なが鳴けば心もしのに昔おもほゆ

續後拾遺集卷六冬歌にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷三（二六六）、柿本朝臣人麻呂歌一首に、淡海乃海夕浪千鳥汝鳴者情毛思努爾古所念がある。第四句、舊訓ココロモシノニ。結句、類聚古集ムカシオモホユとなつてゐる。六帖に載り、下句、『心もしらぬむかしおもほゆ』となつてゐる。

○

朝な朝な見ずば戀ひなむ草枕旅行く君が歸り來るまで

續後拾遺集卷八離別歌にあり、題しらず、人丸とある。萬葉集卷九（一七四七）の長歌の終が、草枕客去君之及還來となつてゐるが、この短歌全體としての原歌らしきものは見當らない。

○

同じ名をたちと立ちなば唐衣きてこそ馴れめうらぶるるまで

續後拾遺集卷十一戀歌一、題しらず、人麿とある。六帖に、全く同樣に出てゐるから、それがもとであらうか。但し、六帖では人麿作とはしてゐない。

○

いきのをに思へばくるし玉の緒の絶えて亂れむ知らば知るとも

續後拾遺集卷十一戀歌一、題しらず、人丸とある。萬葉集卷十一（二七八八）、寄物陳思、讀人不知に、生緒爾念者苦玉緒乃絶天亂名知者知友がある。第二句、舊訓オモヘバクルシ、タエテミダレ

ムといふ訓は見當らない。六帖に載り、これは第四句、『絶えて亂るな』となつてゐる。古今集卷十三戀歌三の友則の歌に、『下にのみ戀ふれば苦し玉の緒の絶えて亂れむ人なとがめそ』といふのがある。

○

足引の山櫻戶をあけおきてわがまつ君を誰か留むる

續後拾遺集卷十三戀歌三にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十一（二六一七）、正述心緒、讀人不知に、足日木能山櫻戶乎開置而吾待君乎誰留流がある。六帖にも、同樣に載つてゐる。

○

をはただの板田の橋のこぼれなば桁より行かむこふな我が兄子

續後拾遺集卷十三戀歌三にあり、人麿とある。萬葉集卷十一（二六四四）、寄物陳思、讀人不知に、小墾田之板田乃橋之壞者從桁將去莫戀吾妹がある。初句、古寫本中（嘉・類・古・細）ヲハタヽノ、結句、舊本訓缺。古寫本中（嘉・類・西・温）コフナワカイモ。類聚古集に「いも」の右に朱で「セコ」と

ある。（古・細）コフナワギモコ。和歌童蒙抄には、初句、「オハタ、ノ」、結句、「コフナワカイモ」とある。六帖に載り、結句、「戀ふなわぎもこ」、他は續後拾遺と一致してゐる。

風雅集

○

子等がてをまきもく山に春さればこの葉しのぎて霞たなびく

風雅集巻一春歌上にあり、『春の歌の中に、柿本人麿』とある。一本、初句、『こしかてを』。萬葉集巻十（一八一五）、春雜歌、人麿歌集出に、子等我手乎巻向山丹春去者木葉凌而霞霏霺がある。第二句、舊訓マキモクヤマニ。第四句、舊訓コノハシノギテである。六帖に、上句、『せながてを巻もく山にこの夕べ』として載つた。又、赤人集に載り、流布本、第三句、『春くれば』、西本願寺本は、第三句は『春されば』であるが、初句、『としかみを』、第四句、『このはるしきて』となつてゐる。

○

山ぎはに鶯鳴きてうちなびき春と思へど雪ふりしきぬ

風雅集卷一春歌上にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十（一八三七）、詠雪、讀人不知に、山際爾鶯喧而打靡春跡雖念雪落布沼がある。初句、舊訓ヤマノハニ。古寫本中（元・類・神）ヤマキハニ、第三句、舊訓ウチナビキである。赤人集に、二箇所に載り、始の方のは、第四句、「春と思へば」。後の方のは、第二句、「うぐひす鳴きつつ」、第四句、「春と思へば」となつてをり、その他は風雅集と一致する（西本願寺本には後者のみある。）。それから六帖には、初句、「山の端に」、結句、「雪は降りつつ」として載つてゐる。

○

妹がためほつえの梅を手折るとてしづえの露にぬれにけるかも

風雅集卷一春歌上にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十（二三三〇）、詠露、讀人不知に、爲妹末枝梅乎手折登波下枝之露爾沾家類可聞がある。第三句、神田本の一訓にタヲルトテがある。家持集に載り、風雅集と全く一致してゐる。

○

もゝしきの大宮人のかざしたるしだり柳はみれど飽かぬかも

風雅集巻二春歌中にあり、『柳を詠める』の題で、人丸とある。萬葉集巻十（一八五二）、詠柳、讀人不知に、百礒城大宮人之蘊有垂柳者雖見不飽鴨がある。第三句、舊訓カツラナル。古寫本中（元・神一訓）カザシタルである。家持集に載り、第三句、『かづらする』となつてゐる。

○

朝霧にしののに濡れて呼子鳥み船の山を鳴き渡る見ゆ

風雅集巻二春歌中、題しらず、人麿とある。萬葉集巻十（一八三一）、詠鳥、讀人不知に、朝霧爾之怒怒爾所沾而喚子鳥三船山從喧渡所見がある。第二句、古寫本中（西・細・矢・京）シノヽニヌレテ。第四句、舊訓ミフネノヤマニ。古寫本中（元・西・細）ミフネノヤマヲである。

○

見渡せば春日の野べに霞たち開くる花は櫻花かも

風雅集卷二春歌中にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十(一八七二)、詠花、讀人不知に、見渡者春日之野邊爾霞立開艷者櫻花鴨がある。赤人集に載り、風雅集と同じく、第四句、『開くる花は』。西本願寺本では、なほ、第二句、『かすがのうへに』となつてゐる。又、家持集に載り、下句、『咲きみだれたる櫻花かな』となつてゐる。

○

鶯の木づたふ梅のうつろへば櫻の花の時かたまけぬ

風雅集卷二春歌中にあり、前の歌につづいてゐる。萬葉集卷十(一八五四)、詠花、讀人不知に、鶯之木傳梅乃移者櫻花之時片設奴がある。赤人集(西本願寺本)に、『うくひすのこつたふえたのうつりかはさくらのはなのときのまへきぬ』と載つた。同じく流布本には、初句『うくひすが』、結句、『ときかたつきぬ』となつてゐる。

○

いざや子等やまとへはやく白菅のまのの萩原手折りてゆかむ

風雅集卷九旅歌にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷三（二八〇）、高市連黑人歌二首の中に、去來兒等倭部早白菅乃眞野乃榛原手折而將歸がある。初句、舊訓イザヤコラ。第四句、舊訓マノノハギハラで、即ち風雅集と同じである。

○

敷妙の枕せし人こと問へやその枕には苔おひにけり

風雅集卷十四戀歌五にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十一（二五一六）、問答、人麿歌集出に、敷細布枕人事問哉其枕苔生負爲がある。第二句、舊訓マクラセシヒトで、古寫本等すべて同じである。結句、舊訓コケムシニタリ。古寫本中（嘉・類・古）コケオヒニケリである。

○

春日なる三笠の山に月は出でぬさける櫻の色も見ゆらむ

新千載集卷一春歌上にあり、題しらず、柿本人丸とある。萬葉集卷十(一八八七)、旋頭歌、讀人不知に、春日在三笠乃山爾月母出奴可母佐紀山爾開有櫻之花乃可見かある。この旋頭歌は、六帖にも採られ、結句、「花を見るべく」、他は右の萬葉の訓と同じである(萬葉舊訓ハナノミユベク)。又赤人集に、「かうべをめぐらす」として、「かすかなるみかさのやまのつきもいでぬかもせきやまにさけるさくら花」(西本願寺本)、「さける櫻の花も見るべく」(流布本。上句西本願寺本に同じ)といふ具合に載つてゐる。

○

結ぶ手の岩間をせばみ奥山の石垣清水あかずもあるかな

新千載集巻三夏歌にあり、題しらず、人丸とある。六帖に、人麿として載つてゐる。

○

天の原雲なき空にうば玉の夜わたる月の入らまくも惜し

新千載集巻四秋歌上にあり、題しらず、人丸とある。萬葉集巻九(一七一二)、登二筑波山一詠レ月一首、讀人不知に、天原雲無夕爾烏玉乃宵度月乃入巻惜毛がある。六帖に、第三句、『雲なき宵に』、結句、『かくらく惜しも』となつて載つてゐる。

○

住吉の遠里小野の眞萩もて摺れる衣のさかり過ぎゆく

新千載集巻五秋歌下にあり、題しらず、人丸とある。萬葉集巻七(一一五六)、攝津作、讀人不知に、住吉之遠里小野之眞榛以須禮流衣乃盛過去がある。初句、古寫本中(元・類・神)スミヨシノ。第三句、舊訓マハギモテ。結句、舊訓サカリスギユク。袖中抄・和歌童蒙抄にも、新千載集と同様に訓んで引かれてゐる。六帖に、やはり同様に載つてゐる。

○

風にちる紅葉の色や神無月からくれなゐの時雨なるらむ

新千載集卷六冬歌にあり、題しらず、人丸とある。躬恒集に、『風に散るもみぢの色は神無月からくれなゐの時雨こそふれ』といふのがある。

○

淺羽野にたつみわ小菅根深めて誰故にかは我が戀ひざらむ

新千載集卷十一戀歌一にあり、題しらず、人麿とある。一本、結句、『こひつらむ』。萬葉集卷十二(二八六三)、寄物陳思、人麿歌集出に、淺葉野立神古菅根惻隱誰故吾不戀がある。第二句以下、舊訓タツミワコスゲ・ネカクレテ・タレユヱニカハ・ワガコヒザラムとなつてゐる。

○

谷川の水陰に生ふる山菅のやまずも人に戀ひわたるかな

新千載集卷十一戀歌一にあり、題しらず、人丸とある。萬葉集卷十二(二八六二)、寄物陳思、人麿歌集出に、山河水陰生山草不止妹所念鴨がある。和泉式部集に、『山陰にみがくれおふる山草のやまずよ人を思ふ心は』。式子内親王集に、『君が代のみかげにおふる山菅の止まずぞ思ふ久しかれとは』といふ如きものもある。

○

敷妙の枕をまきて妹とわがぬる夜はなしに年ぞ經にける

新千載集卷十二戀歌二にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集卷十一(二六一五)、正述心緒、讀人不知に、敷栲乃枕卷而妹與吾寢夜者無而年曾經來がある。第三句、舊訓イモトソレ。古寫本中(細)イモトアレトである。六帖に、第三・四句、『妹とあれとぬる夜はなくて』となつて載つてゐる。

○

思へどもおもひもかねつ足引の山鳥の尾の長きこよひを

新千載集卷十二戀歌二にあり、題しらず、人丸とある。萬葉集卷十一(二八〇二)、寄物陳思、讀人

不知に、念友念毛金津足檜之山鳥尾之永此夜乎がある。結句、嘉暦本には、ナガキコヨヒヲとなつてゐる。

○

君がきる三笠の山にゐる雲の立てばわかるる戀もするかな

新千載集巻十三戀歌三にあり、題しらず、人丸とある。萬葉集巻十一（二六七五）、寄物陳思、讀人不知に、君之服三笠之山爾居雲乃立者繼流戀爲鴨がある。結句、舊訓コヒヲスルカモ。古寫本中（細・神）コヒモスルカモである。六帖第一、「原」と、同第五、「かさ」とに、「君がきる三笠の原に（第五、山に）ゐる雲の絶えて別るる戀もするかな」となつて載つてゐる。

新拾遺集

○

あさみどり野べの青柳出でて見む絲を吹きくる風はありやと

新拾遺集卷一春歌上にあり、題しらず、柿本人丸とある。萬葉集に原歌と認むべきものが見當らない。柿本集に、國名の歌の中、『きのくに(紀伊)』の歌として載つてゐるから、それを採録したものであらう。

○

春霞たなびく山のさくら花はやく見てまし散り過ぎにけり

新拾遺集卷二春歌下にあり、題しらず、人丸とある。萬葉集・六帖・勅撰集等に、原歌と認むべきものが見當らない。

○

秋風は涼しくなりぬ駒なべていざ見にゆかむ萩の花見に

新拾遺集卷四秋歌上にあり、題しらず、人麿とある。一本、結句、『秋の花見に』。萬葉集卷十(二一〇三)、詠花、讀人不知に、秋風冷成奴馬並而去來於野行奈芽子花見爾がある。第三句、古寫本中(元・類)コマナベテ、(神・細)コマナメテ。第四句、古寫本中(元)イサノニユカンである。六帖に、第四句、『いざ野にゆかむ』として載つてゐる。

○

春されば霞がくれに見えざりし秋萩さけり折りてかざささむ

新拾遺集卷四秋歌上にあり、前の歌につづいてゐる。萬葉集卷十(二一〇五)、詠花、讀人不知に、春去者霞隱不所見有師秋芽子咲折而將插頭がある。第二句、舊訓カスミカクレテ。古寫本中(元・類・神)カスミニカクレである。柿本集に載り、新拾遺と全く同樣である。なほ、家持集に、『春くれば霞にこめてみせざりし萩咲きにけり折りてかざさむ』となつて載つてゐる。

○

あま雲のよそに雁がね聞きしよりはだれ霜降りさむし此夜は

新拾遺集卷五秋歌下にあり、題しらず、人丸とある。萬葉集卷十（二一三二）、詠鴈、讀人不知に、天雲之外鴈鳴從聞之薄垂霜零寒此夜者がある。柿本集に載り、類從本、新拾遺に同じく、流布本、第二句、『よそのかりがね』、第四・五句、『いたく霜ふりさむしこよひは』となつてゐる。六帖に、作者『おとくろ』として載り、第四・五句、『はだれ雪ふりさえしこの夜は』とあり、又、家持集に、第四・五句、『あられしもふる寒き今夜か』として載つてゐる。

○

故鄕の初もみぢ葉を手折りもてけふぞ我が來る見ぬ人のため

新拾遺集卷五秋歌下にあり、前の歌につづいてゐる。萬葉集卷十（二二一六）、詠黄葉、讀人不知に、古鄕之始黄葉乎手折以今日曾吾來不見人之爲がある。第三句、舊訓タヲリモチであるが、今殘る古訓は皆タヲリモテとなつてをり、第四句は、舊訓ケフゾワガクルである。

○

紅のやしほの雨は降り來らし立田の山の色づく見れば

新拾遺集卷五秋歌下にあり、題しらず、人丸とある。六帖に載つてゐて、句々全く同一である。萬葉集に原歌らしきものは見當らない。

○

玉藻かるとしまを過ぎて夏草の野島が崎に舟近づきぬ

新拾遺集卷九羇旅歌にあり、題しらず、人丸とある。萬葉集卷三(二五〇)、柿本朝臣人麻呂羇旅歌八首の中に、珠藻苅敏馬乎過夏草之野島之埼爾舟近著奴がある。第二句、古寫本中(古・細)トシマヲスギテ、(神)トシマヲスギツとあるから、新拾遺の句もよりどころあるものといふことがわかる。第四句、舊訓ノジマガサキニ。古寫本中(類・神・細)ノジマノサキニ。ノジマノが古點で、ノジマガは仙覺の新點である。六帖に載り、第二句はやはり「としまをすぎて」であるが、第四・五句、「野島か崎にいほりする我」で、萬葉の「一本云」の方によつてゐる。

○

草の葉に置きゐる露の消えぬ間に玉かと見ゆることのはかなさ

新拾遺集卷十哀傷歌にあり、題しらず、人丸とある。萬葉集に原歌と認むべきものが見當らない。柿本集に、國名の歌の中、『おき(隱岐)』の國の歌として載り、第三句、『きえぬまは』となつてゐる。それを採つたものであらうか。

○

久方の空見るごとく仰ぎみしみこの御門の荒れまく惜しも

新拾遺集卷十哀傷歌にあり、前の歌につづき『日置皇子かくれ給ひける時よみ侍りける』と題してある。萬葉集卷二(一六八)、日並皇子尊殯宮之時柿本朝臣人麿作歌一首并短歌の反歌第一に、久堅乃天見如久仰見之皇子乃御門之荒卷惜毛があり、第二句、古寫本中(金・類)ソラミルコトク、(古・神)ソラミルカコトとあるから、新拾遺の句は、放恣なものでないことがわかる。柿本集にも載つたが、流布本、『なみの宮のうせたる時。久方のあめふることに□□□□□みやのみことのあれまくもを

し』類從本、『みなみのうせ給へきときゝ久堅のあめのふることゝおふきみしみこのみことのおれまくをしも』で、大分違つてゐる。

○

空に知る人はあらじなしら雪の消えてもの思ふ我が心とは

新拾遺集卷十一戀歌一にあり、題しらず、人丸とある。萬葉集に原歌らしきものは見當らない。六帖に、結句が『わが心かな』となつて出てゐるのが、もとであるやうである。

○

相思はぬ妹をなにせむ烏羽玉の今宵も夢に見えも來なくに

新拾遺集卷十一戀歌一にあり、『戀の歌の中に、人丸』とある。萬葉集に原歌が見當らない。六帖に、人麿として、第三・四句、『ぬばたまの一夜も夢に』となつて出てゐるから、それがもとになつたのであらうか。

○

今のみも妹をば戀ひず奥山の岩根苔生ひて久しきものを

新拾遺集卷十四戀歌四にあり、題しらず、人麿とある。萬葉集に原歌が見當らない。六帖に、初句、『今のみは』、第四句、『岩に苔生ひ』として出てゐる。『岩根苔生ひ』は、『岩に苔生ひ』を誤つたものであらうか。

○

ます鏡絶えにし妹を逢ひ見ずは我が戀やまじ年は經ぬとも

新拾遺集卷十四戀歌四にあり、題しらず、人丸とある。萬葉集卷十一（二六三二）、寄物陳思、讀人不知に、眞素鏡直二四妹乎不相見者我戀不止年者雖經がある。『絶えにし妹を』は、萬葉の訓には見當らない。六帖に載り、第二句、『ただにし妹を』、第四・五句、『わが戀やまず年はふれども』となつてゐる。

○

我妹子にゆきあひのわせを刈る時になりにけらしも萩の花咲く

新拾遺集卷十八雜歌上にあり、題しらず、人丸とある。萬葉集卷十（二一一七）詠花、讀人不知に、娘嬬等行相乃速稻乎苅時成來下芽子花咲がある。初句の異訓は、類聚古集ヲトメゴニで、ワギモコニといふのは見當らない。結句、舊訓ハギノハナサク、柿本集に載り、流布本、『わぎも子がゆきあひのいねのかる時に成にけるかな萩の花さく』であるが、類從本には、『わぎもこに行あひのわさをかる時に成にけらしな萩の花さく』とあり、更に、圖書寮本第二（類從本系統）は、全く新拾遺と同樣になつてゐる。

新後拾遺集

○

露霜の置くあしたより神なびの三室の山は色づきにけり

新後拾遺集巻五秋歌下にあり、『山紅葉を』と題した歌のあとに、『同じ心を』として、柿本人丸とある。萬葉集に原歌と認めるべきものが見當らず、他の勅撰集、六帖等にも載つてゐないやうである。

○

山川の水し增らば水上につもる木の葉は落しはつらむ

新後拾遺集巻八雜秋歌にあり、人丸とある。萬葉集に原歌らしきものが見當らない。柿本集に、國名の歌の中、『つしま(對馬)』の國の歌として載り、初句、『山川に』となつてゐる。新後拾遺の歌

は、これから來てゐるのであらう。

○

朝まだき我が打ち越ゆる立田山深くも見ゆる松の色かな

新後拾遺集卷十羇旅歌にあり、題しらず、人丸とある。萬葉集に原歌らしきものが見當らない。柿本集に、國名の歌の中、「かうち（河内）」の國の歌として載り、結句、「松のみどりか」となつてゐる。新後拾遺の歌は、これにもとづくものであらう。

新續古今集

○

二葉より引きこそ植ゑめ見る人の老いせぬものと松を聞くにも

新續古今集卷一春歌上にあり、題しらず、柿本人麿とある。萬葉集に原歌と認めるべきものが見當らない。柿本集に、國名の歌の中、「いせ（伊勢）」の國の歌として載つてゐる。卽ち新續古今は、それを採つたものであらう。

○

手に取れば袖さへ匂ふ女郎花木の下露に散らまくも惜し

新續古今集卷四秋歌上にあり、題しらず、柿本人丸とある。萬葉集卷十（二一一五）、詠花、讀人不知に、手取者袖幷丹覆美人部師此白露爾散卷惜があり、結句、類聚古集チラマクヲシミ、神田本チ

ラマクモヲシと訓んでゐる。コノシタツユといふ訓は、萬葉諸本には見當らない。六帖に、結句、「散らまくをしも」として載り、柿本集に、新續古今と全く同樣に載つてゐる。類從本は、結句「ちらまくをしみ」。新續古今は、多分柿本集から採つたものではあるまいか。

（ ）

戀ひつつも稻葉掻き分け家居してともしくもあらず秋の夕風

新續古今集卷五秋歌下にあり、題しらず、柿本人麿とある。萬葉集卷十（二二三〇）、詠風、讀人不知に、戀作蘘稻葉掻別家居者乏不有秋之暮風がある。第三句、舊訓イヘヰセバ。元暦校本イヘヰセン。イヘヰシテは古訓に見當らない。第四句は、舊訓トモシクモアラジで、トモシクモアラズは、萬葉としては考で初めて訓んだ訓である。六帖に、第三・四句、「家居せばともしくもあらじ」として載つてゐる。又、柿本集に載り、流布本、第三句、「いへをれば」、結句、「秋の夕暮」、類從本、第三句、『我をれば』、結句、『秋の初風』である。

右の如く、「二葉より引きこそ植ゑめ」といふ歌を人麿作としたのは、柿本集に據つたものであらうし、また、「手に取れば袖さへ匂ふ」の歌も、萬葉では讀人不知であるのに、人麿作としたの

は、やはり柿本集に據つたものであらうと推側することが出來る。さうして、『戀ひつつも稻葉かき分け』の歌も、やはり柿本集から取つたと看做し得るが、第三句の、『家居して』は、柿本集には、『家居れば』とあり、萬葉の舊訓及び多くの古寫本訓はイヘヰセバであるから、新續古今で收錄に際して、時樣に、『家居して』と變化せしめたものであらう。なほ、先にあげたやうに、右の萬葉の訓を、現在はイヘヲレバと訓むのが一般になつてをり、柿本集とあたかも一致してゐるわけであるが、これは古義に至つて始めて試みた訓であつて、古寫本等には見當らぬものである。要するに、新續古今時代では、この柿本集を稍廣く用ゐただらうと想像することが出來るのである。

柿本朝臣人麻呂歌師說

香川景樹

香川景樹 柿本朝臣人麻呂歌師說

過近江荒都時柿本朝臣人麻呂作歌

玉手次畝火之山乃橿原乃日知之御世從（或云自宮）阿禮座師神之盡「玉だすきうねび」此枕詞、手次をうなじにかくる事とは聞ゆれど、うねとのみにては少しことたらぬ心ちす。此までかゝる意ありや考ふべし。同じ事を手次懸くなどあらんにはうねとのみにかけて論なし。○日知は、月夜見命夜之食國を知すにむかへて、日之食國知たまふ云々といふ略解の說いかゞなり。日はすべて秀るの稱にておほくいへり。しりはいちじるきの意にやあらん。さては只すぐれたる人をいふなり。かの日の食國の說の如きは、僧などひじりといふ時はさらにかなはず。○從はよりと同じ。されど所により今と語勢異なるなり。そこに解べし。○或本自宮も聞えぬにはあらねど、こゝは本文にてしか

るべし。○阿禮座は、有無の有にて、人の死ぬるをなくなるといふ裏にて、形あらはれて有るやうになれば也。生ずる事也。○惣意は、神武天皇より以來天子御代々々といふ心なり。

樛木乃彌繼嗣爾天下所知食之乎（或云食來）天爾滿倭乎置而青丹吉平山乎越（或云虚見倭乎置青丹吉平山越而）何方御食可（或云所念計米可）つがの木詞を重ねたる枕詞。○或云食來を用べし。調すぐれたり。○天爾滿以下も或云の方よろし。○何方いかさまにと訓來れど猶今少しの訓也。卷二に「何方爾御念食可由縁母無眞弓乃岡云云、同三卷「何方爾念鷄目鴨都禮毛奈吉」云々などありて意も詞もこゝと似たる所也。卽「いづかたにおもほしめせか」と訓て、いかなる思召ありてか此大津に云々、いかなる意ありてか所も多きに此佐保山に云々とやうに方の字は所にあたりて聞べき歟。さらば此大津いかなる所とて御心とまりけんといふやうの意になるべし。只いかさまにおもほすならば其大和の國より思ひたゝせ給ふ時の事なるべし。奈良山越てといふ次にゆくりなく出べからず。調おもふべし。○或云計米可の方後より押はかる意にはよろし。○倭乎置以下天智の御心をはかり奉るなり。

天離夷者雖有石走淡海國乃樂浪乃大津宮爾天下所知食兼天皇之神之御言能大宮者此間等雖聞大殿者此間等雖云春草之茂生有霞立春日之霧流（或云霞立春日香霧流夏草香繁成奴留）石はしはならべたる

石の間といふ意にかゝれり。「石ばしのまぢかき」といふにおなじ。逢といふ心にいふは迂しといふべし。○春草の茂て生たる云々を都のあれたる實景と見ても、結句「大宮所見れど見えぬ鴨」などあらば聞ゆべきを、「此間ときけ共「此間といへども」といふには「見えず」ともいはれず」といふが語の轉にて、「こゝと聞けどもこゝといへども荒にけり」とはつゞけがたき理なれば、或云の二ッの香文字あるを用べし。さて意は大宮大殿の跡は此間といへども、草の茂たるか、霞の立さらふか、しられずといふ意になれり。いひつめたる重ね詞のしらべのよければ、おのづからさと聞ゆるなり。○春草と霞と時のたがへるは、畧解にいかなる事ぞと思ひまどへるかたなりといへるはわろし。四月ころよまれたりともいづれもいひてさまたげなかるべし。後世のうたよみの意にはあらず。

百磯城之大宮處見者悲毛 或云見者左夫思母 これは一首の大旨をいひむすびたる意なり。結句は、本文或云いづれにてもあるべけれど、上皆或本を用れば是も或本なるべき歟。

反歌

樂浪之思賀乃辛崎雖幸有大宮人之船麻知兼津 さきの言は、ものゝ格外にさし出たる事にて山の崎、花の咲、鋒のさきなどすべてものゝ〳〵によりて趣はかはれども心はおなじ。老人も大かた人壽の限より越たるは幸ひ也。天子の行もとある所は必ことなる幸ひあればなり。今からさきも年

へてそのまゝあるは幸ひの意也。○二卷「やすみしゝ我大君の大御ふね待か戀なんしがのからさき」とあるにおなじく、からさきが大宮人の船まつなるべし。○まちかねつは待がたくするなり。

（左散難彌乃志我能一云比良乃 大和太與杼六友昔人二亦母相目八毛一云將會跡母戸八 榎並ノ說モ語勢はさる事ながら、かの水海常に流るゝ所ならず。和太といふ名もよめる所の名なれば是も上のうたと同じく、さやうによどみ居るとも昔の人に又あふべしや、あはじといふ意なるべし。古人はかやうの所おほく同意をよめれば上はから崎の船まちかぬる心、これは大和たのむかし人を戀る心なるべし。

○

幸于吉野宮之時云々

○八隅知之　仙覺の說に、安く見てなはすといへる意よろしかるべし。安きといふは甚だやすらかによろしき限の語にて今俗輕きかたにつきてやすしといふの類にはあらず。又今休息をヤスムといふも一轉の語也。シゝは爲しにてせしといふと同じ。さるは今なるかたちをいふなればスルとこそいふべきを、シシといふは如何といふに、枕詞は調を專らといふ故に此類多し。いさなとるといふべきをいさなとりといふが如し。されば次の歌安見と書るを正字とすべし。一說は隅を知スル也

といへれど、かゝる所をスミといふことなし。漢字の意に取てはすむことなれど詞はいかゞなり。されば上の説によるものなり。

吾大王之所聞食　キコシメスとよむべし。ヲスもメスも似たる事ながら、メスはおほしめす、知しめすなどのメス也。しろしをすといへどおほしをすとはいはず。メスはマスと同じくて何にもつけいふなり。もとミスといふが本躰にてメスはその立たるなり。マスはその居たる也。ムスはその伏たるなり。かく五音は强弱の音あり。其中尤つよきを躰とし語のもとゝす。されども第二立たる音よりも用る多し。これらもメスマスと轉ずるなり。さればヲスといふは異音にてあれば先こゝは、メスとよまん方まさるべし。猶音の例考見るべし。

天下爾國者思澤二雖有山川之　此山川は山と川にてあれば、清てよみてわくべしといふ説は次の此山の云々此川の云々に對していふにてしるべけれど、猶よく考れば一首すべて河の清きをめづる事のみにて、山を取立てほめたる歌にあらず。實に川こそよろしけれ。山は此宮所のむねとする所にあらず。清河内といふも清きは川にのみかゝりて山によるにあらず。さればやはり山川のにて山みづの意にてしかるべし。此山の此川のといへる次の二句はさいわひて所のものもて序に用たるにてふかきこゝろなし考べし。

清河内跡　河内は河の内なる地をいふにて、今も河内國其外所々此名あり。今は秋津の野べ卽河内の地なり。跡はとしてといふ心也。

御心乎　枕詞。心よしとかゝるなり。御心ヲ廣田國などいふ類天子の心をさすにあらず、又乎の字は瀨乎早みなどの乎にて今俗には此をなし、古への用ざまなり。

吉野乃國之花散相　枕詞なるべし。必枕詞なるべき所なり。さて秋津野といふを秋野とみて萩すゝきなどのちりかふ秋野といふにや。萬葉十四花ちらふ此向峯云々とあるも枕なるべき歌さまなり。猶考べし。

秋津乃野邊爾宮柱太敷座波　これはかの離宮を營造し給ふを古語もていへる也。座ばはその營し給ふをいふなり。さて幸し給ふ事ならばおのづからこもる文勢なり。混ずべからず。

百磯城乃大宮人者船並氏　次をもふなきほひとよめば、これもふななめてとよむべし。ふなきほふ堀江の川のともあれば也。次の語の躰用にかゝはらずフナとも調によりては唱る也。

旦川渡舟競夕河渡　夕川ワタルとよむはわろし。心はこれにてきるれども調は夕川わたり此川の云々とかゝるなり。次の歌の上瀨に鵜川を立下瀨にさてさしわたしも心はきるれどわたしとよむがごとし。

此川乃絶事奈久此山乃彌高良之　これたゆる事なくとは絶ず幸し給はんをいふ。彌高からしとは十分さかんに見えさせ給ふをいふなり。古へ高々にと云詞あり。皆今云とは異なり。高々にまつ高々に思ふなどの類萬葉中にある皆心に盃十分などいふ意也　よりて今も高く尊きなどいふ高也。さて川といひ山といふは、時所のものもて序として何をおこせるなり。川の如く山のごとくといふにはあらぬ事、余の序歌體詞などのごとし。

珠水激　眞淵の石ばしるとよめるによるべし。

瀧之宮子波見禮跡不飽可聞　此二句は太敷ます大宮所のめでたきをいひむすべるにて一首の惣意なり。

反歌

雖見飽奴吉野乃河之常滑乃　常なめは水中に顯れたる石に常になめらかなる苔のごときものゝつきてかはかぬをいふ。巻十一豐初瀬路は常滑のかしこき道ぞといへれば、さる道は踏すべりあやまつものなるをいふにて、今しか谷越など即常滑道なり。されば此よしのゝ離宮なども、往通ふ常滑道なるをもて序に用たるなるべし。さなくては常滑の名はありとも水中に隠れたるを取出すべくもあらはれず。考べし。

絕事無久復還見牟　しば〳〵御供してかへりみんの心なり。

○

安見知之吾大王神長柄神佐備世須登　神ながらといふ詞は、いにしへ天皇の御上又さなくても神のうへにもかゝらくつけていひし詞にて、言意はくにて其けぢめを斷りたる詞なり。神代のごとく光輝を放ち空をもかけり給はんには奇妙事現に見ゆればかけても言べき詞にあらず。下に神隨爾有之などはたらかし用たるも見るべし。又考絓(マヽ)紀に惟神我子應治故寄とありて、古註に惟神者謂隨神遺亦自有神遺也とある註はおぼつかなし。可考。さて神ながら、御容に付ていふもあり、御行に付ていふもあり、此うたなどは次々常のことなるを奇妙きさまにいひなしたるが一首の主意なれば、その意をもていへり。又たゞ夫までもなくかろく用たるもあり。○神佐備は「つげの小櫛も神さびにけり」などの類多くいふ神さびにはあらず。こゝは翁さびをとめさびの類にて、神でありながら神ぶりたるわざし給ふといふ心也。さびはぶりといふやうの意也。ふりの考は別にくはしくせり。

芳野川多藝津河內爾高殿乎高知座而上立國見乎爲(さゝハ)波　此所國見をすればとよめるはわろし國見し給ふをかたはらより見奉りていふなれば、セレバとよむべし。上の舒明天皇の御製はみづからのたまふなればすればにてよし。

疊有靑垣山山神乃奉御調等春部者花挿頭持秋立者黄葉頭刺理　花や紅葉や、うつくしくなり出るを人のかざし遊ぶなど、春秋のけしきをおしこめて、山神の調進としてかの高殿より見そなはしうけ行給ふ意なり。

遊副川之神母　此所落文あるべし。疊有靑垣山の山神のといふ對句なれば必かくてはとゝのはず。川戸の神もなどやうの句猶ふさはしきがありしものなるべし。

大御食爾仕奉等上瀬爾鵜川乎立下瀬爾小網刺渡　これらの事比（皆か）川神のみにへ奉るとするなり。鵜川を立の說畧解に鵜川する人を立るをいふと解るは非なり。鵜使ふ業を起し立るを言にて、何にてもかりそめならぬ目立ばかりの事を言。やがて目立の詞も同意也。御獵立、市を立などより轉りて名を立、志を立、功を立など皆たやすからぬ業を云詞也。こゝてさしわたしとよみて次につゞくべし。意はこゝにてきるゝ心なり。上の長歌の夕河渡とおなじ。

山川母依氐奉流神乃御代鴨　これ一首の意を結ぶなり。かく山川も依合なびきて仕へ奉るは、古言に神ながらといふにたがはず、實に現神にて神めきたるわざしたまふなりと言なり。

反歌

山川毛因而奉流神長柄多藝津河内爾船出爲加母　此神ながらは、はたらかして用ひたり。上

の句につけて意得べし。上の長歌は高殿より見そなはすをいふ。短歌には船にて遊び給ふをいへり。

○

幸于伊勢國時留京柿本朝臣人麿作歌

嗚呼兒乃浦爾船乘爲良武𡢳嬬等之珠裳乃須十二四寶三都良武香

釧著手節乃崎二今毛可母大宮人之玉藻苅良武

潮左爲二五十良兒乃島邊榜船荷妹乘良六鹿荒島囘乎　囘をわとよめれど、上も島邊なればこゝもへとよむべきか。○しほさゐは防州三田尻の浦人、海底に岩ある處は其上自から打さわぐを潮さやと申てかしこき事として、さる所と見れば舟を榜そけて行通ふ事也。そのけぢめ常人は見分難く、あやまつ事多しとかたれり。今席に多田韶ありていはく、今も潮さゐといふ詞もありといへり。いづれ潮のさわぐ事とは聞ゆれば、こゝはいらごの島のめぐり底は岩なればおのづから潮のわきかへるなるべし。あながち滿干の汐にかゝはるにもあるべからねど、滿潮にはいとゞさわぐなるべし。

○

輕皇子宿于安騎野時柿本朝臣人麻呂作歌

八隅知之吾大王高照日之皇子云々　此歌の解已前の師説に、大かたかはることなし。其中隱口乃枕、久老の說可然やとあり。三雪落を已前は師說枕詞なるべしとありしを、再び此度はやはり景物にて、此行啓は十月頃なるべければ實の雪にやとあり。

短歌

阿騎乃野爾宿旅人云々

眞草苅荒野二者雖有云々

東野炎立所見而云々

以上以前の師說にかはらず。

日雙斯皇子命乃馬副而御獵立師斯時者來向　きまけりと讀べしと言り。

○

柿本朝臣人麻呂從石見國別妻上來時歌二首幷短歌

石見乃海角乃浦回乎　上に回とよめればこゝもべとよむべし。猶所による。

○

日並皇子尊殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌

天地之初時之　之の字シとよめるもあれど猶ノとよめる方おだやかにて調もまさるべし。白雲の棚引國の青雲のなどのノの如し。

久堅之天河原爾　畧解天の安川の安の字を畧きたりといへど、それまでもなく天の川ともおほくいへり。

八百萬千萬神之神集集座而神分分之時爾天照日女之命天乎波所知食登葦原乃水穗之國乎天地之依相之極所知行神之命等　八百萬千萬神の云々、畧解に天孫を水穗の國へまゐらせんとの神議なれば、天照の句以下四句を隔てゝ、葦原云々といふへかゝれりといふは非なり。天照日女命云々以下、皆天孫を下し奉る神議の意をのべたるなり。今諸侯たらん人の嗣子を議定するに、大殿には云々あらせられて其御子は云々などいひ述るが如し。夫故諸神議定して此天上をば日神しろしめすとして、かの下つ國をば御孫の命長くしろしめすべしとてといふ心也。天地之依相之極は、

祝詞などに天雲の向伏限といふに同じく、天と地と遠く見放れば依相たるが如く見ゆるをいふにて、畢竟此國土の限り天の覆ふ限りの事也。是を分れたる天地の又末にてよりあふ事といふはわろし。さる祝言あるべくもなし。

天雲之八重搔別而神下座奉之（カンクダリイマシマツリシ） さて上にいふ如く神議定りしかば、天孫天雲を押分下りましませりといふ也。イマセマツリシとよめるは如何也。さては天雲云々も八百萬神の方にていふなれば、神議より引つゞきて雲をわくるも下し奉るも皆諸神のする事となれり。さては此所次の文に應じもわろく又カンクダシとよむべき所也。さる詞も如何なれば、かたがた天雲以下天孫の方にていふなり。

高照日之皇子波 是日並知皇子をいふなり。かの雲搔別天下りし給ひし天孫より次々相續し來り給ふ此日並知命はといふほどの語也。次の飛鳥之淨之宮以下、此皇子の思召趣をいふなり。

飛鳥之淨之宮爾神隨太布座而天皇之敷座國等 是は持統天皇を申奉るにて、皇子の思し給ふ旨をいふなり。此日本の國は淨之宮に持統おはしませば、事かくことなしとして、皇子は天に上り給ふよしなり。敷座國等はくにとしてといふほどのこゝろなり。すべて上すも兩所等文字あるは皆輕からぬ等にて多く意を含めり。こゝも則しかり。畧解に、皇子波の下暫く切て天原へかゝるとい

ふはわろし。上の日女命天乎波所知等といふ解のわろきと同じ事なり。さるよしはすでにいふがごとし。

天原石門乎開神上上座奴　是薨じ給ふ事をいふなり。さて意は神代の神議に天をば日神しろしめすとして、天孫を此地にくたり給へり。その御末なる今此皇子は又此國は持統のしろしめす國なりとして天にのぼり給へりといふなり。かの例を打返して用ひ給ひし意なり。上は或本に登と書しもあればノボリとよむべし。扨是迄は皇子薨去の事を神例など引て、さる故よしあるが如く申なし奉りたるなり。さて打返してそれはさる事なれども、此皇子薨じ給はずして天位にものぼり給はゞ云々と、次よりは實の悲しみをのべたり。

吾王皇子之命乃天下所知食世者　上はおほやけざまに申なす故、高照日皇子などいひこゝは實の悲しみを述る故に、親み奉りて吾大王云々などいへり。シロシメシセバとよむべし。

春花之貴在等　貴をたふとゝ訓たるはわろし。春花といふ詞もたふとしとはかゝらぬをや。又天位しろしめして政事とり給はん事を四方人のおもひまつるもたふときとては今少也。めでたと訓むべし。おそらくは貴は賞の字誤もはかりがたし。

望月乃滿波之計武跡天下四方之人之大船之思憑而天水仰而待爾　諸註にくはしければとく

に及ばず。タタハシケンはゆきわたらぬ所もなきなり。

何方爾（いづかた）　いづかたにとよむべし。眞弓の岡をいづ方と思し召てかゆきかくれ給ひしといふなり。

御念食可由縁母無眞弓乃崗爾宮柱太布座御在香乎高知座而明言爾　朝毎といふを只毎日の事とするはわろし。朝は一日の初なれば、仕へ奉る人どもも先伺ひ奉る事あるべし。それにつきては必御言も承ることなり。憶良の子のうせにし時の長歌にも「朝な〳〵いふこともやみて」とあり。これも夜は寢て常にも言問ぬものなるが朝は先おき出て言とふたるを死てよりいはねばいふ事やみてといふなり。すべて朝な〳〵など皆朝の用ありていたづらならず。只日毎と心得るはわろし。

御言不御問日月之　ひつきのと訓むべし。

數多成塗　さまねくと訓るにしたがふべし。さまねくなどいふ語もあれば古言なり。

其故皇子之宮人行方不知毛　畧解にここは、御墓にて宮殿はなけれど云々といへれ共、宮人等の行かへりとのゐするばかりの御墓なれば、天子の殯ほどこそならね、さばかりの殿舎はあるべきなり。

反歌

久堅乃天見如久云々

茜刺日者雖照有烏玉之夜渡月之隱良久惜毛　この歌は、畧解には此時持統にて天皇はおはしまさねば、天子を日にいひかけしにはあらずといへれど、いかにも日を天皇によそへ奉らではかなはぬうた也。さらば或本云以件歌爲後皇子尊殯宮之時反歌也といふにしたがひて、こゝは上の一首のみとすべし。

或本歌一首

島宮勾乃池之放鳥人目爾戀而池爾不潛　本文云はく、是は水鳥の、たまたま陸にあがりて集りをるを見て、かくいひなせしなりといへり。隨ふべし。

○

柿本朝臣人麻呂獻泊瀨部皇女忍坂部皇歌(ママ)　此端詞は或本のかたちにしたがふといへる諸說にしたがふべし。

飛鳥明日香乃河之上瀨爾生玉藻者下瀨爾流觸經(ナカレフラヘ)　宣長古事記を引てフラバへとよめれどあし。ハへは意はへなどのハへにてラへともライともナイともはたらく語にて只フレといふ事にはあらず。又眞淵はフラヘリとリ文字を付られたれどフレリといふ詞もなければ無理なり　フルのルをのべて調をなす所なればナガレフラヘと四言によみて次へつゞくべし。

玉藻成　此成を如くなりとして聞說あり。又或は似スといふ人もあれど似スとは無理なり。やはりナスにて五月蠅なすわきは、五月蠅のさまをなしてわき、泣子成したふは、泣子のしたふ樣をなしてしたふなり。こゝも玉藻のなびくさまなしてかよりかくよりなびく也。

彼依此依靡相之　これは婦夫互になびきよりあひ共寐し給ふなり。

嬬乃命乃多田名附　枕詞。意考ふべし

柔膚尚乎　スラはソレヲサナガラなど解するもかたはらならぬにはあらねど語勢はかはれり。畢竟つよむる詞にて、こゝには柔はだをもよつとも身にそへたまはぬといふ心にめぐりてあたれり。

劍刀於身副不寐者烏玉乃　ヌハタマ久老寐程也といへるおもしろし。

夜床母荒良所虛故名具鮫魚天氣留敷藻相屋常念而　此所舊點のまゝにてはとゝのひがたし。久老の說、魚は飡、留は田としてよめるにしたがふべし。ケタシは蓋の字をあてたれど蓋はつよき詞にて十の物を八九はといふ詞也。古への詞のけたしはいとよわき語にて十の物三四より以下にかかる詞也。俗に第二義におもて但しなどいふににたること葉なり。

玉垂乃越乃大野之旦露爾玉藻者泥打夕霧爾衣者沾而草枕旅宿鴨爲留　タビといふ詞は本田人の意にて、古へ田作るには、家よりは遙の所に田のあるに、かり庵などつくりて往かよひして

居つゝ作る、その居るを田居(タヰ)といひ、やどるを田廬(タブセ)といふ、田臥(タフシ)の意也。さるかたち家になくして他所に寐るさまなどに似たれば、旅をもタビといひしなり。民(タミ)はもとよりの事也。

不相君故　此君ゆゑは俗にいはゞ君じやにといふほどの事也。

玉藻の上瀬に生る下瀬になびくさまなど已前の師說の如し。こゝに畧す。

敷妙乃袖易之君玉垂之越野過去亦毛將相八方

○

明日香皇女木䢺殯宮之時云々

玉藻毛會云々　モゾのてにをはゝ、必然る事のいまだしからぬを、あらかじめ推定むる詞なり。玉藻もかるれば必生るは必定ながら、今めのまへにしからざればモゾといふなり。

何然毛吾王乃云々ヨリ忘賜哉云々背賜哉　これまで自問の意なり。以下自答の如くみるべし。

宇都曾臣跡云々ヨリ味澤相目辭毛絕奴　是迄自答のごとし。さばかりあかぬ朝宮夕宮を何しに忘れそむき給ひしやといひて、それは御在世のふし時々諸共にあそび給ひし木のへ故に常宮とさだめ給ひし也といふ意なり。

反歌

明日香川明日谷云々　これ川の皇子を見んと思ふよし也。しがのから崎におなじ。我大王の御名わすれせぬことは此川の明日香といふ名をおひてあるをいふなり。

四　大船ヲユキノ進ニ石ニフリ

柿本朝臣人麻呂妻死之後泣血哀慟作二首并

天飛也輕路者云々妹之名喚而袖曾振鶴　これ只妹をこひて狂亂のごとくなりて、名をよび袖ふりしにはあらず　古への喪送などの禮に名をよび袖ふるやうの事もありしなるべし。おのづからの人情しかるべきものなり。

或本歌曰

宇都曾臣等云々　此長歌は惣て或本のかたまされり。取べし。

好雲叙無　此一句は解がたし。本文にも吉雲曾無寸とあれば誤ともいひがたし。猶可考也。すべての解は以前におなじ。

去年見而之　長歌も次の短歌も死後無程よめりしとみゆるを、これのみは一周の後なるべく見ゆるは異時の詠か。

○

吉備津釆女云々

秋山下部留妹奈用竹乃騰遠依子等者何方爾(イツカタニ)　此何方爾は、古點のごとくイカサマニとよむ方よろしきやうに聞ゆ。それは次にさす所なければ也。されども次に必二三句も落句ありと見ゆれば、そのところに必死たる事、且墓所のさまなどもありつらん。さらば何方爾は、上にいふごとくイツカタニとよみてかなひし事ならん。脱文の所は次にいへり。必なくてはうたの意通らぬなり。

念居可怜紲之長命乎　此次にまだわかくして死たる事などあるべし。さてその墓所へ通ふ道の露こそは云々、霧こそは云々とやうにいひつゞけしならん。

露己曾婆、朝爾置而、夕者、消等言、霧己曾婆、夕立而、明者、失等言、梓弓、音聞吾母、髣髴見之、事悔敷乎　ほのかにだにも見ざらましかば、今かくなげかざらましを、見しことのくやしきといふなり。短歌のも同心なり。

布栲乃云々、時不在、過去子等我　此下にも一句ばかり脱句あるべし。さなくては七言三句つゞけり。さて次二句の也文字は此所の句によりてよむべし。如何なれば等の句ならばヤと訓べき歟。さなくば置字にて訓べからず。惣ては以前の解のごとし。

天數、凡津子之、相日、於保爾見敷者、今叙悔　これは、ほのかに見たるによりて、今死たるをきくが悔しきとやうにも聞ゆるやうなれど、やはり長歌と同意に聞かたまされり。

○

讃岐狹岑島視石中死人云々

玉藻吉、讃岐國者、國柄加、雖見不飽、神柄加、幾許貴寸　此カラカをガラと濁りてよむはわろし。ガラと濁る時は上に屬して人ガラ家ガラなどの語となりてカのてにはは付られず。カラは必用言ならではかなはず。されば必清てよむべし。扨意は、四國は神代の故事もありて、即神なれば、神の故にや貴かるらん、國のすぐれたる故にや、見れどもあかぬといふ心なり。○此歌の解諸注と異にて、中の湊より乘出せし舟の、俄に風おこり海あれてあやうければ梶引返し、狹岑島にこぎよせしかども、猶舟にありがたければ磯に上りて庵りせし事などなべて先の解にくはし。又短歌に、うはぎの花をよめれば凡八月頃なるべし。其頃は野分吹立時にて海上も俄にあるゝ事今もあり

て船人のかしこむ時也。これもさるゆくりなき難風なるべし。此死人も此難風に破船せしが波に打あげられたるにてもあるべしかし。

家知者、往而毛將告、妻知者、來毛問益乎　此死人の郷里もしれてあらば行ても告ましを、妻もしれてあらば行てもいはましものを、といふこゝろなり。

玉桙之、道太爾不知、欝悒久、待加戀良武、愛伎妻等者　玉鉾之道以下家なる妻の上をいふなり。以前の解には道太爾不知までを上につけしかども、今再び考るに、「たにしらすおゝしく」と續きたる語勢にて、きれがたければ玉鉾以下妻にかけて意汲べしといへり。惣ては先解のごとし。

妻毛有者、採而多宜麻之、佐美乃山、野上乃宇波疑、過去計良受也　此解、蒿の花の盛過たるが、死體のかたはらにあるをみて、あはれ妻もあらばやがて採て手向ましをといへるなること以前の解にくはし。さるは死たる人に花手向る事今のごときのみならず、いにしへは猶甚だしかりけん。故先思ひよせたるなるべし。タケは手擧にて兩の手を向さまにさし出して物するをいふ。ムダク、タグル、タガヌル、イダク等の語皆其心よりいへるなり。馬ダキ行テなどいふもこれなり。

○

柿本朝臣人麻呂在石見國臨死時云々

鴨山之、磐根之卷　之を助字なりといふはあしゝ。必シマクと續く詞也。今俗にも此詞のこれり。

人麻呂妻云々

且今日且今日、吾待君者、石水、貝爾（一云谷爾）交而、有登不言八方　貝は借字にて山のかひのかひなり。交るは「春の山べにまじりなん」などの交るに同じ。そこに葬りてあるをいふ也。さて一云谷もカヒとよむなり。後世谷をカヤ或はカヘなどいふももとカヒなる事しらる。此贈答すべて石見にての事なるべし。次の擬歌は後に心得違ひてよめるものなるべし。

○

三卷ノ中

天皇御遊雷岳之時柿本云々

皇者、神二四座者、天雲之、雷之上爾、廬爲流鴨　此うた下句の調の打靜りたるをみれば、恐らくは御墓所を菴するかもとよめるにて、御遊の歌にはあらじ歟。荒山中に海をなすの歌は別なり。

○

長皇子遊獵云々柿本云々

八隅知之、吾大王云々十六社者、伊波比拜目、鶉己曾、伊波比囘禮、四時自物、伊波比拜、鶉成、伊波比毛等保理、恐等云々　上の鹿鶉は、御獵場の物もていひて序とせりとも見ゆれど、拜目といふ詞をかけたれば、鹿鶉も王に仕奉る意あるべし。扨又自物といふ詞、成と對ひたれば、鹿のやうにと心得べき所なれ共、男自物といふ詞のさは聞がたきにより、是は如成などと同詞にはあらず。「夕されば」と同じく只夕といふ事にも聞え、又夕になり行といふ處にも聞ゆるなり。畢竟詞のそひて長くなればおのづから意こもらざる事なし。男自物の時は男たる者のといふやうに聞え、かく「鹿じものいはひ拜み」などは、その鹿の如くといふ意味にも轉るなり。

反歌

久堅乃、天歸月乎、綱爾刺、我大王者、蓋爾爲有　畧解に、蓋を月にたとへたりといへるもさる事にて、今も丸き蓋なきにしもあらず。菅などの蓋はもとより丸きなり。されども蓋を月にたとへんには「天行月を蓋にせり」といはんこそ詞も意もやすらかならめ、月を綱にさしといふは必月を綱にさして、さてきぬがさにする事也。今考るに大寶令蓋の定などはもとより後の事にて、古へは色々の蓋もなどかなからん。天子の御蓋には或は日輪の御形を作りて、今の鳳凰の有所に立て、皇太子はそれにしたがひて月輪の形を作りしなどいふ事もやありけん。さらばその月の形の左右より

御綱引はへてその下に蓋釣たらんには、うたのおもていとよくかなふべし。されど何にも證の見えぬ事なればしひては定がたし。

○

柿本云々羇旅歌八首

三津埼云々　此うたは、下句いたく落字あれば手を下しがたし。

珠藻苅云々

粟路之云々　畧解に、古事記の文をあしく見て、青摺衣などあるより、今の小忌の赤紐のやうにおもひて、肩にある紐也といへるは誤也。古事記の文しからず。腰の紐也。さればこゝも只衣の紐にてよし。必出立時妹が結びしならずとも、紐結ふなどは常に妹がわざなればかくいはん事何のうたがひかあらん。

荒栲、藤江之浦云々　この歌などは、陸路ゆきし時のなるべし。此八首は後に取あつめたる物と見ゆれば、必一時の往來にはあらじ。これは旅にやつれて、月もかくまではとおもふさまよりおもひよせて、海人とや見らんなどもいへるなるべし。

一本云白栲乃　誤とせる說もあれど、葛布ならんからに白からずばこそあらめ。眞の布にも增り

て白ければしろたへといふとも必誤とのみはいひがたきか。

稻日野毛云々

留火之、明大門爾、入日哉、滂將別、家當不見　是歌上ノボル時のとせるはわろし。必下る時のなるべし。いかにといふに攝津より舟出すれば直に此大門なり。此歌いらん日やなどある調一兩日の中に滂入べきをいふなり。實に此せとに入て西國の方見えずなり果るなり。久老がアカシオホトとよめるもおもしろきにや。

天離、夷之長道從、戀來者、自明門、倭島所見　是は陸路を登りし時、やうやう播磨路にかゝりて、淡路島のはづれよりはるかに大和の山々の見えたるをよろこびてよめるなるべし。泉州はあまり高山なければ大和の志貴山などは打こして見ゆるとぞ。

飼飯海乃、庭好有之云々　ミダレイデ見ユと古點のまゝによむも難なし。

○

同石田王卒之時云々

角障經、石村之道乎云々　此歌は試ニイハヾ、石村ノアタリニ別庄ニテモ造ラレテ、春ノ頃ナドハ専ラ通ヒ玉ヒ、猶度々末カケテ通ヒ樂ミ玉ンノアラマシノアリテ俄ニカクレ玉フニヤ。橘紅葉等

モイマダ物セヌサマ也。又或ハカノアタリニ思ヒ妻ナドイデキテカヨヒ玉ヒシニヤ。イヅレイハレアルベキ也。

○

柿本云々香具山云々

草枕、羇宿爾、誰嬬可云々　古ヘ旅人ハイホリサシテヤドルナレバ、コレラモイホリサシテ死テ居ルナルベシ。サテ此結家待莫國ノ訓ノヿ且畧解等ニ古歌ヲ解ソンジタルヿハ先ノ會ノトメニクワシクセリ。

○

土形娘子云々

隱口能、泊瀬之、山際爾云々　意ハ明ケシ。際ハスベテ波ト訓ベシ。山ノハト云カナハ見ユレドマト云ヿナシ。末ナドハ義ヲモテカケルニテ、ヤハリハトヨムベキ也。

○

溺死出雲娘子云々

山際從、出雲兒等云々

八雲刺、出雲子等云々　ナヅサフといふ詞は、萬葉などすべて水によりていふ。後世いづくにもなれそふやうの事にいふにあらず。されどもナヅが本誤にてソフの附たるなるべければ、世後にいふ方よくかなへり。ナル、、ナヅク、ナヅカシ、ナヅル、ナヅムなどのナヅにそふの付たる也。おそらくは大古はそと同じかりしか、萬葉の頃ふと水にのみよることゝなりて、又いにしへに歸りしにもやあらん。世の久しき中にはさる事も多かるべし。

柿本云々四首

三熊野之、浦乃濱木綿、百重成云々　モヽヘナスとよむよし。

古爾、有兼人毛云々　ガテニケンのガテは、皆カネの意に聞てよし。猶くはしく先の注にあり。

今耳之、行事庭不有云々　結句ネニサヘナキシと訓べし。ナキサヘナキシはあしく聞ゆ。

百重二物、來及毳常云々　キオヨベカモトとよみ來れども、及オヨビとよみし所もありやしらず。今少のよみなり。宣長キタリシケカモとよまれたるはよろしけれど、猶キタリとよむ事今少也。キシケカモトと六字によまんか。猶よき訓あるべし。可考。結句の哉は武の寫誤ならんといふ說に從

ふべし。さなくてはよめがたし。

柿本云々三首

未通女等之云々

夏野去云々　妹之心乎といふは、其妻アルハ待、アルハ別ヲシミさらでも常に心を用ふるうたよりいふにて、いたづらに心をといへるにはあらじ。さて此二首のうた序の妙はいふべくもあらず。

折返し感ずべし。

珠衣乃、狹藍左謂云々　これは十四にも出て、東歌なるべし。必人丸のには在らじ。さてサヰサヰの語しれがたし。東語なるべし。もしは今俗に、サイサイ來々、サイノ\／云フなどいふサイサイにはあらぬか。是は再三にやともおもへど、試にいふなり。シヅミは思ひしづみなるべき事、以前の注にくわし。

附記。此柿本朝臣人麿歌師説は、文政二年夏、香川景樹の講述せしを門人熊谷直好の書きしるしたるものに係る。これを正宗敦夫氏が嘗て手寫して置かれたのであるが、このたび同氏の厚意により、本篇に公にすることを得た。

鴨山後考其他

鴨山後考

萬葉集卷二(二二三)の、「柿本朝臣人麿、石見國に在りて死に臨みし時、自ら傷みて作れる歌一首。鴨山の磐根し纏ける吾をかも知らにと妹が待ちつつあらむ」中にある、「鴨山」について、私は昭和九年に「鴨山考」を作り、大體、石見國邑智郡粕淵村江川岸の「津目山」だらうと結論して置いた。即ち、人麿は伊甘郷の國府で死せずに、訣があつて粕淵・濱原あたりで死したのであらうと想像したのであつた。

なぜ津目山を鴨山としたかといふに、津目山と相對して龜村があり、龜は賀茂(鴨)の轉化で、その類例は、「加賀國河北郡高松村大字横山字龜山の縣社賀茂神社」其他によつて證據だてることが出來るからである。

併し、明かに「鴨山」と名のつく山が存在してゐなかつたので、津目山をそれに當てたのであつた。ついで、「鴨山考補註」を作つたとき、「人麿時代のカモをも、現在の龜・濱原一箇處よりも範

圍を廣めることも亦可能である。これも可能の一假說と看做し得る』とも云つて置いた。

然るに、昭和十二年一月七日、石見邑智郡粕淵村の大字湯抱に『鴨山』と名づける山があるといふ通信を受けた。そこで念のため、粕淵村役場土地臺帳の調査を依頼したところが、次の如くであつた。

湯抱村字鴨山　第五百廿五番
七等　雜木山
一、山林反別　八町六反五畝廿一歩
此地價金貳圓九拾貳錢八厘
此地租金　七錢三厘
事理　寄附　所有者氏名　粕淵村中

この臺帳は明治廿三年根基で、地圖は明治二十七八年の頃作製してゐる。卽ち、『鴨山』は、古くからその名がついてゐて近時の命名でないことが分かる。

私は昭和十二年五月十五日自ら踏查して見たが、津目山よりも少し低く（海拔三六〇米、營林署調査）、峯が二つあつて間がくびれてタヲを形成し、筑波山を小さくしたやうなところがある。麓にめら谷

川が流れ、鳴瀬(なるせ)の川と合し津目山の麓で江ノ川にそそいでゐる。隣に大釣山(おほつりやま)があり、道は一方別府の方に通じ、一方此處を越せば出雲境でもう佐比賣(さひめ)村に近い。

この鴨山を濱原粕淵中間の四日市といふあたりの畑上から遠望すると、西北方に津目山の山續きとして見える。實際は小さい谿を隔ててゐるのだが、遠目には連續として見えるし、古代には道路が今日程發達してゐないからやはり山續と看做していい有様だつたかも知れない。湯抱の湯谷には炭酸鹽類泉が湧いて居る。

大體右の如くで、津目山のある同じ村内(粕淵)に『鴨山』といふ名のついた山が見つかつたのである。そして、津目山との距離は直徑やうやく半里程である。また粕淵村小原の小學校境内から種種土器の出土したことは既に幾たびも記したが、昭和八年に鴨山の麓でそれと同じ系統の土器を土民が拾つてゐる。さういふことをいろいろ綜合すれば、粕淵村の小原にも湯抱にも古代に人が住んでゐたことが明かである。

この新しく發見した『鴨山』といふ山を、どう處理すべきか。同じ粕淵村内の山であるから、賀茂族に關係ある山とせば大勢からいつて大變動は無いのであるが、鴨山をば單一の山と是非解釋せねばならぬなら、津目山にすべきか、湯抱の鴨山にすべきかが未決定の問題であつた。

實地に鴨山を踏査しない以前は、やはり津目山を以て鴨山とし、湯抱の鴨山は、そのあたりに古へ賀茂族の住んでゐた名稱の殘存せるものと解釋し、『龜』もその殘存名稱のまた變化したものと解釋せば、「鴨山考」で結論した如く津目山を以て鴨山に當てて差支ないとも思つたのであるが、湯抱の鴨山を實際踏査するに及んで、やはり人麿臨終地の『鴨山』は、この湯抱の『鴨山』ではなからうかと推考するやうになつたので、このたび報告を敢てしたのである。

そんなら、なぜ人麿は臨終のときこんな處に來てゐたか、それは既に「鴨山考」で論じた如くであるが、なほ井上通泰博士の人麿の役人としての職掌は班田使のやうなもので、出張して歩いたと解する說（アララギ昭和十一年十二月號）をも參考とすることが出來る。

この「鴨山後考」は取りあへず、「鴨山考」後の追考の結論だけを記したが、結論に到つた經路等は拙著「柿本人麿雜纂篇」中に記して置いた。（昭和十二年五月稿「文學」昭和十三年一月號所載）

粕淵村湯抱の「鴨山」に就いて

一

昭和十二年一月七日附を以て、島根縣石見國邑智郡粕淵村大字湯抱の苦木虎雄氏から手紙を貰つた。これは、苦木氏の住んで居る湯抱に、「鴨山」といふ山があるといふ通信であつた。

前略 現在私が住んで居ります湯抱に溫泉がありまして、小字名を湯谷と申しますが、その谷から君谷村別府へ拔ける山道の傍に、「かも山」と呼稱される山がある事であります。この山は參謀本部から發行されてゐる五萬分の一地圖には名が出てゐないのでありますが、土地の人は皆、「かも山」と呼び、古老あたりにたづねても、古くから、「かも山」で通つて來てゐるやうであります。この土地は昔から、俗にいふ「かぢや者」の群が部落をなして純粹の土著の人は少ないのでありますが、「かも山」は依然昔から「かも山」に違ひないとの事であります。

この山は相當な高さを持ち、地圖にあるやうに(添付しました)ふんばりのある山であります。昨秋から官行造林を始め、今頃降雪が無い爲、植栽を急いで居りますが、人夫監督に來てゐる森林官に、「かも山」の「かも」はどんな字を書くのだらうかと訊ねたところ、「かも山」は「鴨山」で、古くから鴨が澤山ゐたのではないかなどといふのであります。鴨のゐるゐないは兎もあれ、この湯抱に「かも山」といふ山があることを既に先生が御存知なれば、この一文もお笑草に過ぎませんが、もし御存知ないなれば、或は參考になりはせぬかと思ひまして拙ない文を認めました。下略

私は苦木氏に感謝し、なほ一應粕淵村役場について、その土地臺帳を調べてもらふことを依頼したところが、一月十六日附を以てその調査を報告せられた。

湯抱村字鴨山　　第五百廿五番
　　　　　　　七等　雜木山

一、山林反別　八町六反五畝廿一歩
　此地價金貳圓九拾貳錢八厘
　此地租金　　　七錢三厘

登記通知　大正十年五月廿三日

事理　寄附　所有者氏名　粕淵村中

なほ苦木氏は臺帳の附圖の映寫をも送られ、そして云ふ。『現在の粕淵村臺帳は、明治廿三年根基となつてをります。その以前のものはあると思つて居りましたが、役場が燒失した時、一緒に燒けた由であります。地圖は明治廿七、八年頃の調製だと役場の吏員たちが申しますが、これは地圖の表紙に何年の調製と記してゐないので正確なところが不明なのであります。併し當時の湯抱村戸長が波多野顯作であつたところから推定して大體間違ひないだらうと思ひます。此の地圖の調製人は林善松、梨原久治、當時の地主惣代は景山恒吉、眞苅廣七郎。湯抱村戸長は波多野顯作でありますが、いづれも故人であります下略』。

二

苦木氏の通信を得て私の喜んだのは、私が柿本人麿の歿處『鴨山』をば、濱原、龜、粕淵あたりの山だらうと考へ、粕淵にある『津月山』を以てそれに當ててゐるからである。そして私の根據とするところは、現在の『龜村』のカメといふ名は、古へのカモ「賀茂・鴨」の變化したもので、その

名殘だらうと假定したのに本づいて居た。

それから、其他の論據としては人麿の妻依羅娘子の歌に、『石川』とあるのが、現在の川本町が古往『石川』と稱したといふ神社緣起によつて、大體そのあたりの江ノ川のことであらうといふこと。それから、粕淵から出土した種々の土器によつて古代民族が其處に住居して居つた事實を確認し得ること。さういふ事柄をも私の鴨山考の論據として居るのである。

さうして見れば、同じ粕淵村の大字で湯抱といふ一里足らずのところに、『鴨山』といふ名のついた山があるといふことは、ただの偶然と謂ふよりも、古へのカモといふ名の殘存してゐるものと考へる方が順當である。『鴨山』の『鴨』といふ名は、鴨が澤山住んでゐたための名といふよりも、石見以外の他の國にこの名の殘つてゐるやうな理由（後段參看）によるものと考へる方が正しいやうである。

約めていへば、川本あたりから粕淵・濱原・龜あたりにかけて、江ノ川は古へ石川と云つたものであらう。そしてこのあたりに賀茂氏族が土著し、從つて賀茂社もあれば、賀茂山、鴨山といふ名も出來てゐたものに相違ない。人麿時代にはその界隈で最も目立つ現在の津目山が鴨山であつたであらう。それが名が細かく分化するに從つて、別な細かい名に變り、古へのカモといふ名は、現在のカメ、湯抱の『鴨山』のカモとして、その名殘をとどめて居るのであらう。さう考へて來れば、

同じく粕淵村に『鴨山』と名の付く山の現存してゐるといふことは、私の『鴨山考』にもう一つ重大な論據として役立つことになるのである。

次に、私は人麿が石見から京に上つた道順をば、備後に拔けさせ瀬戸内海を舟行せしめるやうに考へてゐるのであるが、その時の人麿の歌の、『小竹の葉はみ山も清に亂れども』といふのは、人麿が湯抱あたりを通る時の吟詠だらうと想像した（評釋篇卷之上參看）のは、當時交通道路は此處を通つてゐたと考へたからであるが、この考はただの空想ではなく、粕淵小原から古土器が出土する如く、湯抱からも石器が一個出てゐるし、未發掘の圓墳があつたりして、古代住民との交渉のあることを確かに示してゐるからである。なほ此邊の交通路は一方は赤名を越えて備後、一方は三瓶山（佐比賣山）の麓、現在の安濃郡佐比賣村の方を經て出雲の方へ通つてゐたやうである。

なほ、ついでにいふが、人麿上來の道筋で、若し『辛の崎』をば、現在の宅野の『韓島』あたりだとすると、大田あたりから東に折れることになるが、愚案のやうに、現在の『唐鐘浦』を以てその『辛の崎』に當てるとせば、大田などよりもずつと南方、例へば湯ノ津あたりから東へ折れてもいいことになつて却つて解釋に便利である。

カミ（神）、カモ（賀茂・鴨）、カメ（龜）の流通してゐる實例については、鴨山考補註篇で既に記述したが、此處でも少しく補充しながら再び言及しようと思ふ。

三

平賀元義の歌に、『鴨山の瀧の白浪さにづらふ少女（をとめ）と二人見れど飽かぬかも』といふのがある。この鴨山といふのは、備前國兒島郡莊內村・灘崎村・日比町あたりの地域は古への賀茂郷であつた。そこで莊內村の大字長尾の鴻ノ巣山の西麓に、郷社鴨神社（郡中式內二社の一）が鎮座したまふ。そこで、元義の歌の『鴨山』は恐らくこの鴻ノ巣山を指したものであらう。現在は役場の臺帳にも『鴨山』といふ名稱はない。鴨川（現在加茂川）は源を此處に發し、北流して同村大字瀧に至り瀑となる。早瀧が卽ちこれである。元義のこの題に、『天保八年四月十四日遊二于早瀧一』とあるその『早瀧』である。また、同じく元義の歌に、『打日さすみやびをもがも水鳥の鴨の社のあきをしめさむ』とある、『鴨の社』も同處である。なほ元義の歌には、『あれはもや早花得たり水鳥の鴨山越えてはや花得たり』『鴨山にひるは梅見つ夕されば逢崎のいそにつきを吾まつ』といふのもある。

この例でも分かるやうに、『賀茂郷』があつたので、『賀茂神社』があり、それを『鴨神社』と書

いたものである。元義の歌の、『鴨山』といふのも、つまり『鴨神社』に本づくのである。

なほ云ふに、賀茂郷は和名鈔の賀美郷であるが高山寺本の和名鈔には賀茂郷に作つてゐる。即ちカミとカモと同義に用ゐたことが分かる。なほ地名辭書を檢するに、『鴨神社は延喜式の官社なり。今上加茂村大字長尾の神峰に在り。蓋神と鴨は古音相通じて同義とす。後世加茂の庄名は更に鴨社より轉じたるなり』云々とある。

なほ例をいへば、常陸の加茂部は鴨部ともいひ、鴨部の名は伯耆・讃岐・伊豫・土佐等にもある。また、播磨の賀茂郡は、鴨國造から出でた名だといふことである。また、神川、鴨川、賀茂川等は相通じて用ゐられてゐる。

それから、『龜』と『神』との交流の例は、既に補註篇にも云つたごとく、備後の神石と龜石と同じ處であり、常陸の神代と龜熊と同じ處であり、加賀の河北郡高松村大字横山の縣社賀茂神社のある山を龜山と云つてゐる。即ち、カミ、カモ、カメの交流してゐる實例である。また、單に發音の方からいへば、石見山間部方言（石田春昭氏調査）には、ナリカメ（雷、鳴神、ナリカミ）。オオカメ（狼、オホカミ）があるから、カミ、カメが流通してゐることが分かる。

四

なほ、苦木氏からの通信により、「鴨山」と、それに關係ある事柄を次々と記載して置くこととする。

『鴨山は左程高い山ではありませず、粕淵の小原からも見える山であります。距離は江ノ川から一里すこしあるばかりであります。岩山でしのぶ、岩松(いはまつ)が生へて居ります。しのぶ、岩松は津日山にもある草ですが、他の山には滅多に生へて居りませぬ』。

『鴨山の裾を流れて居る幅一間ばかりの谷川は江ノ川へ注ぎます。川に沿うて傳道があり、これは什谷村へ拔けます。鴨山に對立する笹ヶ谷は高い山で、鴨山と並ぶ大釣山は頂上に三角點のある高い山であります。鴨山の奥小屋谷には大きい蹈鞴(たたら)の跡があり、以前は數百人のかぢや者が住居してゐた由であります』。

『湯谷(湯抱の温泉のある谷)の出口に千人塚がありますが、愚考致しますに、これは昔、この湯抱で戰があつたか、多くの人が病死したか、乃至は多くの人が住みついてゐたかたみではないかと思はれます』。併しこれは苦木氏の意見で古墳だらうといふことになつた。この古墳は既に邑智郡史に載り、

拙著鴨山考補註篇にも載つた古墳（圓墳）なのである。昭和八年に鴨山の近くで、粕淵村役場吏員某が古代土器を拾つて居る。

なほ苦木氏は新舊道路の地圖をも添へて報せられたが、大田・濱原間の縣道は明治二十四年の工事で、それを改良して目下は大田・赤名間の省營バスが通つてゐる。舊銀山街道は少し南寄りで、潮道といひ幅四尺乃至一間、山上を通つてゐる。

鴨山の近くを流れてゐる川のうち、鴨山から湯谷入口迄を女良谷川といひ、湯谷から粕淵に來て江ノ川に入るまでを尻無川と云ふ。鴨山のある谷一帶を女良谷といふので川にもこの名稱がある。

五

湯抱の小字名。邑智郡粕淵村役場土地臺帳。明治廿三年根基。（苦木虎雄氏報）。

古寺。菰澤。菰澤家ノ前。菰澤家ノ上。菰澤道ノ下。菰澤頭。竹ノ迫。竹ノ迫ノ奥。竹ノ廻リ北平。竹ノ上ヘ曾根。菰澤道ノ脇。重迫。重迫下タ切。二反田。屋敷田。二反田竹ノ迫。二反田竹ノ上。二反田南平。二反田北平。坂根。坂根家ノ上。坂根砂田。ナメシ平。御堂原。神田道ノ下。竹ノ下タ川原田。竹ノ下タ。竹ノ下往來ノ上。神田道ノ上。柳田。柳田ノ上。柳ノ木。先ノ以後。机段。

和田。和田隱居後ロ。和田ノ前。向和田。和田門田。道ノ上。畑ケ尻リノ上。畑ケ尻。柳ノ本道下、末ノ谷。末ノ谷尻。沓原道ノ上。森ノ下。森ノ前。森ノ上。沓原。廻リ子。後田。後平前田。後ロ平。原ノ先。沓原上ノ中。門田。釜ケ谷。猪ノ迫。清水。才ノ峠。鑪ケ原。稗畑。中ノ原。中原井手ノ下。中原川邊。向稗畑。大平谷ノ尻。大平。大平大畑。大向。田代。果瀬清水下ノ向。果瀬川南。果瀬古屋敷。曲リ。曲リ家ノ迫。眞苅家ノ下道ノ下。岩根。果瀬奥。清臺。果瀬。果瀬道ノ上下。果瀬川北。果瀬清水。川木谷。果瀬清水道ノ上。果瀬川邊。與太郎田。與太郎井手下。堂田坂根。堂田。堂田田ノ上。堂田道ノ上。樫ケ迫。堂田下。堂田屋敷。屋敷田。大向井。花畑。花畑後ロ。松本。ハンノ木 白瀧。馬ノ脊。先ノ曾根。ハゲノ下。外ケ内。寺ケ原。寺ケ原川邊。湯屋田。四反田下モノ下。四反田下モノ中。四反田上。四反田上ミノ下。岡田。岡田家ノ前。柳ケ原。竹ノ前。竹ノ前川平。柳ノ本。女良谷尻。向段。上ミ中ノ原。湯本。湯ノ谷道ノ上。野丈ケ原。竹ノ内。竹ノ内下モ。竹ノ内道ノ下。竹ノ垣内。竹ノ端。シツタテ。苦木。新屋。迫。迫田。下モ段原。シツタテ田ノ上。中屋敷。中ノ原。中屋敷上。シツタテ道ノ下。梨ケ原。中田。殿畑。青木。殿畑家ノ奥川邊。殿畑ケ向イ。杉谷市。道運田。アヤメ谷。境ケ谷。後ノ谷。雨堤。雨包以後田。雨堤大下。堂ノ脇。桁道下。雨包桁道ノ上。桁道ノ下タ尻。桁道下タ下切。下モノ原。桁道ノ脇。七本松。

堺ヶ田。與右ヱ門田、堂門。牛ヶ曾根、和田山　後ロ山。未谷頭。沓原山。栗林、赤城。足谷東平、足谷西平。井手山。大平鑪ヶ原　鳥屋ヶ丸。菅澤。廻リ山。果瀬東平。當田山。櫨谷山、灰谷山。灰谷。釜ヶ廻、下モ釜ヶ廻。猪ノ木谷山。樫ヶ廻。屋敷田山。蛇蝮山。先ソ子。白瀧頭南平。若宮山。豌豆ヶ平。荒神森、アナツケ。カヤケ谷。モミソ。小屋ノ谷。下全長。上全長。上笠木。葛籠ヶ丸。菅床。ナルセ。鴨山、弓木谷。小屋ノ谷東平、登宇ノ古。小屋ノ谷大瀧ノ奥、小屋ノ谷大瀧ノ下西平　鷹ノ巣。大釣リ。女良谷頭。笹ヶ谷。大釜ヶ谷、矢櫃山。野犬ヶ原。シツタテ山。洞ロ谷、洞ロ谷西平。洞ロ谷東平。洞ロ谷頭。長畑。向圓佛。圓佛梅ノ木谷、大圓佛。小圓佛。杉谷市山、宮ノ原、猫ノ城道運。ツブレケ谷、辷リ坂。猫ノ城奥口、猫ノ城頭ノ口、後ロノ谷北平。駄道ヶ以後。境ヶ谷大道ノ上。雨包西平。堂ノ奥。後ノ谷頭、雨包後脊戸。雨包。脊戸山。後ノ谷下端、花屋山。雨包下小丸。一里塚上ノ口。一里塚下ノ口。大年上ノ口、大年下ノ口。ボウボウ坂上ノ口、小田山。與志古。殿畑道下。ボウホウ谷、三瓶隠レ。シヤラシヤラ瀧。上段原、迫田山。新屋山。苦木山、新屋谷。苦木谷、寺床山　上大向山。大向山。鉄穴流谷、井戸ノ奥、再進坂　天狗岩。砰畑山、柒召平山、原ノ先、繩手下。シツタテ釜場。梨ヶ原道ノ上、

六

以上は昭和十二年一月から三月に至るまでの記入であるが、五月十五日その『鴨山』を見に行つた（土屋氏夫妻同道）。濱原を過ぎて粕淵に行く途中、一本松澁谷といふ處から、四日市といふあたりの岡の上にのぼつて行つて展望するに、粕淵を眼下に見おろし、津目山を左にしてその山つづきの彼方にこの『鴨山』を見ることが出來る。實際は谿で切れてゐるのだが、此處からの展望では、津目山と連續した山續きのやうになつて見える。寫眞は好く出來なかつたけれども大體の位置を知ることが出來る。

それから粕淵の小原を過ぎ、湯抱湯谷の湯抱溫泉に行つた。湯抱溫泉は炭酸鹽類泉で、湧出のものは飮むことも出來、溫めて浴し、神經痛・僂麻質斯系統の病に利くので浴客が絶えない。特に二月から四月迄が最も盛である。此處を流れる湯谷川には河鹿がしきりに鳴いてゐた。この川の源が鴨山の麓を流れるめら谷川で、それに鳴瀨（なるせ）の方の川をも合せて流れ來てゐる。鴨山は湯抱から正面に見ることの出來る山で、現在は植林のために形が變つてゐるが、よく見ると峯が二つになつてゐて所謂タヲを形成し、形の好い山である。樹木を少しく除去したとすると常陸の筑波山を小さくし

たやうな形ではなからうかなどとも思つた程である。その麓をめら谷川が流れて、そこの道路は今はさびれてゐるが、恐らくは古へは相當便利なもので君谷、別府から川合の方へ出る大切な道路のやうである。隣の大釣山と共に植林せられ、粕淵村大釣外三公有林野官行造林地、昭和十二年四月植栽、面積三〇ヘクタール、樹種、アカマツ三九〇〇〇本、ヒノキ二一〇〇〇本、スギ五二〇〇本と記されてゐた。なほ、營林署の調査に據るに、鴨山の高さは、海拔三六〇米。谷から頂まで二七〇米。周圍二・四〇〇米で、大釣山の高さは海拔三八八・六米、谷から頂まで二七〇米。周圍は二・一〇〇米である。

　私は、十五日十六日の兩日この鴨山のほとりを歩き、昭和八年に鴨山附近で役場吏員某が古代土器を拾つた舟木賢寛氏の鑑定を經たこと、粕淵小學校地内出土の土器と同系統のものであつたこと、此處の山地を越せば出雲境で、安濃郡の佐比賣村に近いこと、さういふ事柄を顧慮しつつ徘徊したのであつたが、いづれにしても鴨山といふ名は隣りの大釣などと共に近い代の名ではあるまいといふ心持がした。大釣の釣は役場の臺帳には立偏になつてゐるが、其は恐らく誤記で、類聚名義抄、新撰字鏡其他にもさういふツリの字が見つからない。陸地測量部の地圖には釣の字に改めて居る。

　さて、私は二日間湯抱に滯在して鴨山を見たのであるが、前記の如くに、此處の鴨山をば、津田

山あたりをも籠めた鴨山の一部と見做すか、卽ち賀茂族のゐたところの山といふ意味に廣く取るか、或は此の鴨山が卽ち人麿の歌の鴨山であるか、この決定は、一たびは前言の如くに考へたのであつたが、二たび考へて未だ決定し兼ねてゐる。

卽ち、鴨山の所在地は同じ粕淵村內にあるのだから大勢から云つて大變動は無いのであるが、津目山にするか、湯抱の鴨山にするかが未決定の問題なのである。

私が實地に鴨山を見ない以前は、前言の如く廣義に鴨山を解したから、やはり津目山として結果が移動しなかつたのであるが、實際を踏査するに及んで、人麿の歌の鴨山が卽ち現在この湯抱の鴨山に當るのではあるまいかとも考へるやうになつた。その理由は大凡次の如くである。

津目山を鴨山とするのは隣地にカメといふ名の殘存に據つたのであるが、湯抱の方は直ちに鴨山といふ名であつて、同系統の賀茂族、賀茂神等に本づくものだと云つても、湯抱の方の名がもつと直接である。

津目山を鴨山だとするのは、前言の如くカメからの推定に據るのだが、湯抱の方のは、その儘鴨山なのであるから、寧ろその方と考へる方が適當ではなからうか。

此處の鴨山の名は役場の土地臺帳にも載つてゐる古い名で、中野村或は平賀元義の歌にあるやう

な、賀茂神社のある山を里人が鴨山と稱へるのとは稍趣を異にし、文學的乃至史學的第二次の名稱でないことをも尊重すべく、また今回の發見は偶然であつて、「鴨山考」に强ひて附會せしめるための名稱でなかつたことをも亦尊重せねばならぬのである。

そんなら、なぜ人麿がこの湯抱の鴨山あたりに來て死したか、その理由は既に鴨山考で記したのによつて明かであり、それに井上博士の近い考證（アララギ昭和十一年十二月號）による人麿の役人としての職務班田使勤務、即ち出張して歩くものであつただらうといふ職務について顧慮すれば、人麿は石見のこの邊に來てゐても毫も怪しむに足らぬのである。

班田使は、公民に戸籍に照して田地を頒與する役で、十一月一日から翌年二月の末まで四箇月に亙つて足跡國内に徧きものであるが、若しその季節に積雪でもあつて困難な場合には幾分時日の手加減をも行つたものであらうし、「春草を馬咋山ゆ越え來なる雁の使は宿過ぐなり」も班田使としての歌だとせば、歸雁だから陰曆二月末のものとなるであらう。

さういふ具合に、冬から春にかけて人麿が此土地に來てゐたとも解せられるし、また必ずしもその用のために、その季節に來たとせずに、他の用のために晩春から夏にかけて出張してゐても不思議では無いのである。併し、其處まで細かくなれば空想が放恣になるから、既に總論篇で推察的に言

及してゐた、『人麿の役人としての出張』云々といふことが、井上博士の考證に據つて或る根據を得たのである。（昭和十二年六月十日）

七

湯抱の微溫泉の起原は、私は想像を以て隨分古いもの、つまり人類に注意せられたのは、ひよつとせば人麿時代に溯ることが出來るだらうとおもつたのであるが、口碑傳說に據ると、戰國時代に尼子・毛利が爭つたとき、その落武者がこの溫泉に浴した。また德川時代になつてから、砂鐵作業に關係する勞働者等がここの部落に移り住んだ。明治初年湯抱村の林一松氏が浴場を作り宿屋をも兼ねたのが、溫泉場のはじまりである。その後一時眞刈幸太郎氏に委ねられたことがあるが、二たび林一松氏の經營となり、大正三年浴場を新築し、旅館も四軒となつた。昭和十三年に山崎氏二たび浴場を新築改良せられた。溫泉の分析表は次の如くである。

一、クロールナトリウム	六・六五五八
一、重炭酸ナトリウム	二・二三五〇
一、遊離炭酸	〇・八八六二

一、重炭酸マグネシウム　〇・七六九一
一、硫酸カルシウム　〇・六二七二
一、重炭酸カルシウム　〇・五三七四
一、クロールカルシウム　〇・四九八一
一、硅　酸　〇・一四六〇
一、アルミニウム　痕　跡
一、硼　酸　痕　跡
一、燐　酸　痕　跡
一、ヨード　痕　跡

即ち、アルカリ性食鹽炭酸泉で、この外にラヂウム含量が多い。特效は神經痛・僂麻質斯などで、浴客は、昭和十、十一、十二年三年間の平均を見るに、島根縣（一八〇三人）、廣島縣（五三一人）、山口・鳥取・岡山・大阪（一〇一—二〇人）、京都・東京・奈良・兵庫・福岡・佐賀・愛媛・香川（一—九人）等である。

八

粕淵小學校敷地から出土した土器については既に記載するところあつたが、そのうちの把手ある彌生式土器につき一言附記すると、この種の土器は丹波の久美濱からも出土し、朝鮮では金海貝塚から出る。朝鮮との古代交通が江ノ川筋に行はれたことは、既に「鴨山考補註篇」にも記して置いたが、江ノ川沿岸の粕淵あたりにもその名殘をとどめてゐることが實證せられるのである。なほ舟木賢寛氏は川本町から出土した朝鮮青磁香爐を持つてゐる。それにつき、專門家の鑑定を經たといふが、これなども朝鮮交通の一證を示すものである。

なほ粕淵小學校敷地から出土した土器は、那賀郡下府村中の濱から發見した土器と同系統のものである。江ノ川筋と朝鮮との交通が略明かとなつたとせば、無論國府との關係もあつたことであらう。これはその土器の類似を見ても分かるのである。果して然らば、國府に近き只今の唐鐘浦をば、「カラ」といふ名のついたもの、即ち「カラ」の部落でもあつたものと空想しても、妄なるただの空想にをはらぬだらうといふことも出來るのである。

九

以上から歸納した大體の結論は、「鴨山後考」といふ題で、雜誌文學第六卷第一號（昭和十三年一月）に發表した。

なほ村の小字に「鴨山」といふ名稱のついた山がそのほかにあるかどうかにつき、鴨山考補註篇で大體記したが、其後、昭和十二年から十三年にかけて、吾郷村、君谷村、川合村方面の調査を濟ませ、昭和十四年になつて安濃郡佐比賣村の調査を濟ませた。而していづれにも「鴨山」といふ山を發見することが出來なかつた。

私の望としては、石見國全體の小字を調査したく、或時は縣廳の助力を仰ぎたいといふ空想をいだいたこともあるが、一小「鴨山考」のためにさういふ手數をかけることを恐れ、大體このくらゐにして忍耐することにした。若しも將來、石見國の小學校などの助力を得て、その調査が完成せられるやうなことがあるならば私は多幸であらう。（昭和十四年四月記）

人麿閲歴の一暗指

萬葉巻九（一七〇八）に、泉河邊作歌一首、『春草を馬くひ山ゆ越えくなる雁の使は宿過ぐなり』といふのがある。この泉河は今の木津川であるから、咋山はその木津川の邊にあつたものであらう。そして現在の綴喜郡誌草内村大字飯岡に當る。井上通泰博士は、この一首の研究から引いて、「柿本人麻呂の閲歴の一暗示」（アララギ昭和十一年十二月號）を著した。今その主要部を次に手抄する。

『泉河も久世鷺坂も宇治河も皆藤原都から東山道及北陸道に下る道であるから、其道を通る時に彼歌どもはよんだと見てよいが、人麻呂は何の爲に、又は如何なる使に名木河の邊を通つたであらうか。名木河は泉河から鷺坂を經て宇治河に到る道より西方に在つて、北陸道又は東山道に下る（又は二道より上る）人の通る處で無い。又咋山の歌は其山のどちらの方面で作つたであらうか。大和から山城へ出るには般若寺坂と歌姫越と二路があるが、古、奈良坂と云つたのは歌姫越で、後に奈良坂と呼ばれたのは般若寺坂である。』

「人麻呂が、春草を馬くひ山ゆこえくなる雁の使は宿をすぐなり、とよめるは無論咋山の南方又は西方でよん

だのでは無く、咋山の東麓か又は北方か即歌姫越の見當が咋山で隱れる方面でよんだもので無ければならぬ。否咋山の東麓は直に泉河に臨んで居るから若東方でよんだものとすると、泉河の東岸でよんだものとせねばならず、然も咋山は蕞爾たる孤立に過ぎず、又歌姫越は咋山の西南に當つて居るのでは無く、適に南方に當つて居るのであるから、泉河の東岸から見ると歌姫越の見當は咋山に隱れはせぬ。もし雁が大和から人の如く歌姫越を越えて來るものとすると、作者が咋山の北方（泉河の西岸）に居たので無ければ、クヒ山ユコエクナルとは云はれぬ。さて古の官道は咋山より東南方（たとへば今の玉水橋附近）で泉河を渡つたのであらうから、咋山の北方は明に官道以外である。』

かやうに人麻呂が官道以外の名木河や咋山の北方に彷徨したのは、特に咋山の北方には（雁ノ使ハ宿ヲスグナリとあるを思ふと）少くとも一夜以上滯在したのは何の爲であらうか。或は人麻呂は山城の國廳に勤務し職務上部內を巡行したのかも知れぬ。否確證は無いが、山城國班田使の下僚として勤務したのではあるまいか。班田使の事は、略、本集卷三なる攝津國班田史生丈部龍麻呂自經死之時判官大伴宿禰三中作歌の註（新考五四三頁）に書いておいたが、六年目毎に天下の公民に戸籍に照して田地を頒與する役で、十一月一日から翌年二月の末まで四箇月に亙つて足跡國內に遍きものである。さて其職員は長官・次官・判官・主典・史生で、史生は等外官の小役人である。天平元年の班田の時の歌は右の大伴三中作の長歌の外に、卷九に笠金村作の長歌並短歌二首あり、又卷二十に葛城王と薩妙觀命婦とが贈答した短歌二首がある。

右の如くであるが、人麻呂歌集出の歌を人麿作として、官道以外、普通旅人の通るところで無い名木河、咋山の北方あたりになぜ人麿か彷徨したであらうかと疑問して、博士は、或は人麻呂は山城の國廳に勤務し職務上部内を巡行したのかも知れぬ。否確證は無いが山城國班田使の下僚として勤務したのではあるまいか』といふ結論に到つてゐるのである。

井上博士のこの假說的考證は、私の「鴨山考」にとつて極めて大切なものになるのであつて、鴨山を邑智郡の濱原・粕淵近くになぜ見出さうとしたか、なぜ人麿か死ぬ時に、國府を出でてそんな處に來てゐたかについては、世の學者等はただ疑つて驚くのみであるが、私が既に總論篇に於て推論してゐたごとく、「役人としての出張」といふことが、井上博士のこの論文によつて支持せられることとなるのである。從つて、世の學者等がただ驚くことを要せなくなるわけである。

特に、『鴨山』と名づくる山が、同じ粕淵村内の大字湯抱に發見せられたうへは（別項參照）、「鴨山考」にもう一つの證據を得たこととなり、ただ前考の『津目山』と、この『鴨山』との關係をどう取扱ふべきかといふにとどまるのである。そして、若し現在の湯抱の『鴨山』を人麿の歌の『鴨山』とせば、なぜ人麿が死ぬ時に、そんな處に來てゐたか。といふことが問題になるのだが、これは既に「鴨山考」で考へた事柄と同樣にして解明が附くのである。卽ち、粕淵小原から湯抱あたりにかけ

て部落のあつたことは出土する土器によつて知ることが出來、それら純粹な日本系統と朝鮮系統と相混じて居り、其等の土器は石見國府のあつた下府村出土の土器と相似のものである等の證據があり、人麿がただ漫然とこんな山中に來てゐたので無いことが分かるのである。

なほ云ふならば、萬葉集に大伴三中及び笠金村の、天平元年の班田の時の歌があるから、それから六年目六年目と繰つて行けば、丁度慶雲二年の十一月から慶雲三年の二月にかけて班田が行はれたことになる。そして、續日本紀に、慶雲三年閏正月、『京畿及紀伊・因幡・參河・駿河等國疫、給二醫藥一療レ之』。夏四月、『河内・出雲・備前・安藝・淡路・讃岐・伊豫等國飢疫、遣レ使賑二恤之一』。十二月、『是年、天下諸國疫疾、百姓多死、始作二土牛一大儺』等の記事があることは、既に總論篇に引用した通りであるが、人麿が鴨山のほとりに來てゐたことと、鴨山のほとりに於て病死したこととを説明し得る大切な事柄のやうに思へるのである。

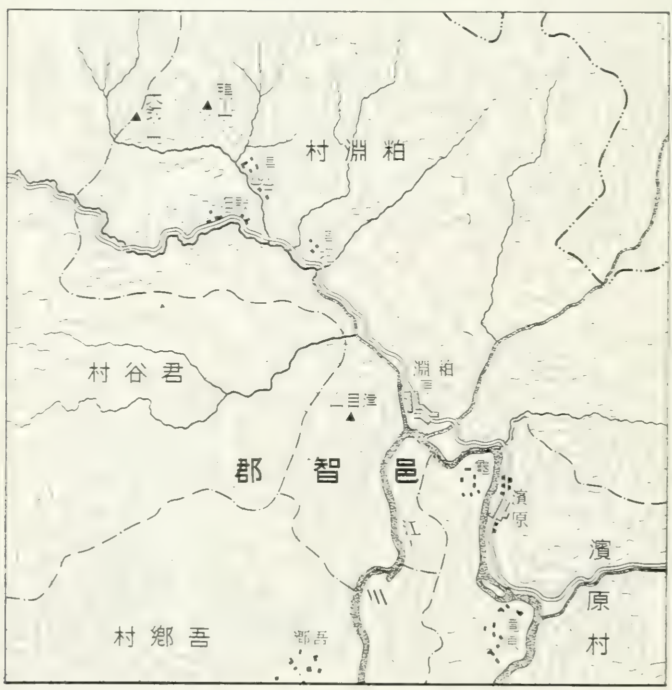
『湯抱』は『湯が谷』か

石見では、『谷』を概ね『たに』と訓ませ、『かひ』と訓ませる例は甚だ稀で、酒谷(さけだに)、君谷(きみだに)、澤谷(さはだに)等は皆『たに』と呼んでゐる。さうして『かひ』といふ時には『貝』の字を當ててゐる。然るに邇摩郡の大森町の東南に、炉谷があり、『カタラガイ』と呼んでゐる。即ち『谷』を『カヒ』と云つてある例である。この例は、時代は違ふにしても、萬葉集の、『石川の貝(一に云ふ谷)』を理會するに都合の好い例ではなからうかと思つて記した。

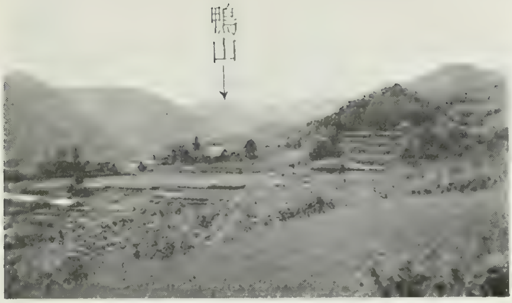
なほ、『湯抱』はこの字どほりとすると、『ユガカヘ』であるが、發音は『ユガカイ』らしいので、陸地測量部の地圖には『ユガカヒ』と傍訓がしてある。さすれば、この地名の語原は『湯(ゆ)が谷(かひ)』、『湯が峽(かひ)』だかも知れないのである。伯耆の『松谷』を『マツガタニ』と呼ぶその『が』に等しいだらう。

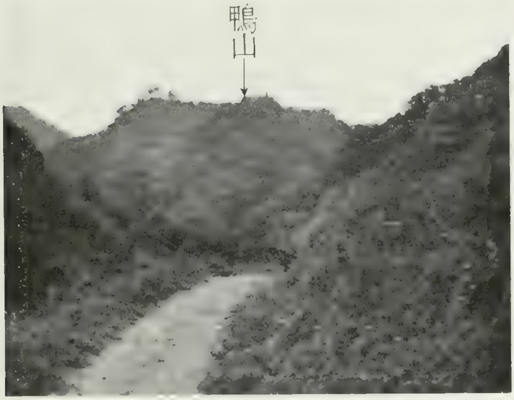


鴨山（粕淵村湯抱）土地臺帳寫

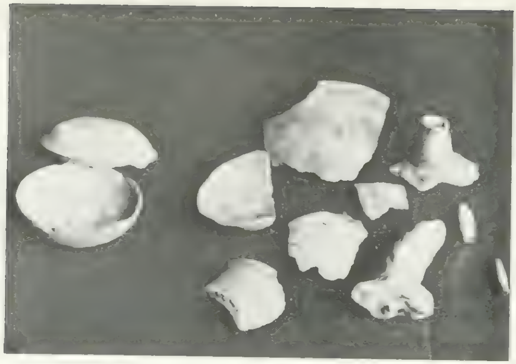


鴨山（粕淵村湯抱）の位置を示す地圖


鴨山


鴨山

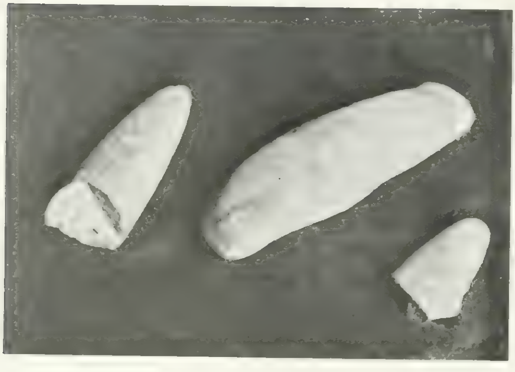

鴨山



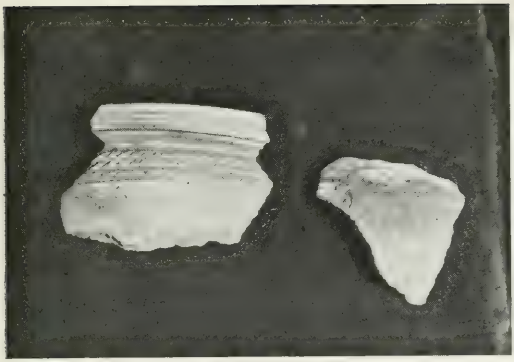
土器（柏淵村小學校境內出土）



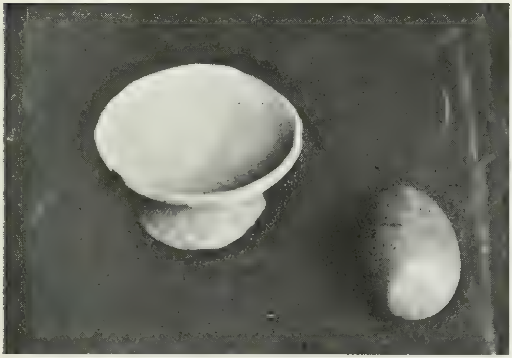
齋部式及彌生式土器（柏淵村小學校附近出土）



石器（柏淵村小學校境內出土）



繩紋土器（粕淵村小學校境內出土）



彌生式土器及敲石（濱原村上川戸出土）



石器（粕淵村小原及高畑出土）

辛乃埼考其他

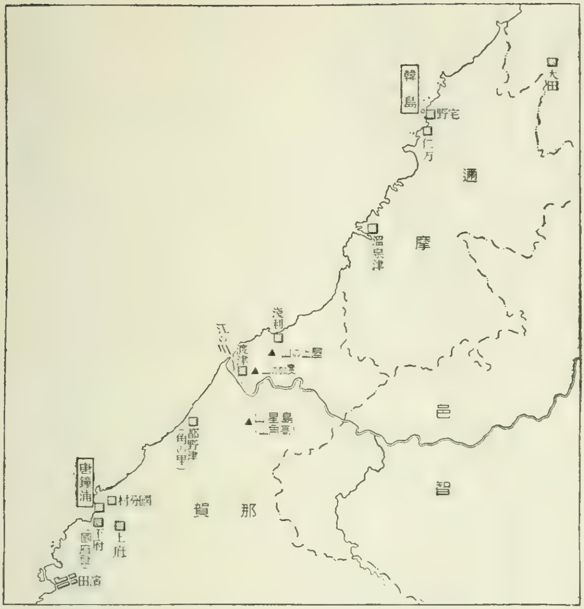
辛乃埼考

一

萬葉卷二（一三五）、柿本朝臣人麿從石見國別妻上來時歌二首の第二首の長歌に、『角障經　石見之海之　言佐敝久　辛乃埼有　伊久里爾曾』云々とある中の、『辛乃埼』は現在石見の何の邊に當るだらうかといふに、仙覺抄に、『辛乃埼ハ、所ノ名ナルベシ』とあり、攷證に、『この外ものに見えず、郡しりがたし、猶たづぬべし』とあり、檜嬬手に、『辛埼は邇摩郡宅野の海邊に、今唐島と云ふ是也』とあり、古義に、『辛乃埼は、石見國邇摩郡託農浦にありと國人云り』とあつて、近頃の萬葉註釋書は大體この託農說に從つてゐるやうであるから、私も「柿本人麿總論篇」に於て、大體さう記して置いた。

この託農說の本をなしたものは恐らく石見國人の著書であらうから、少しく手抄するならば、石

見風土記邇摩郡の條に、『可良農浦 船泊濱也 唐郷山周二里一十歩 有松數株芽雜木 可良嶋秀ニ海中一 因之可良埼トモ云度半里嶋二而 有松芽四邊海草蚫蛤在』云々とあり、方角集、名所記にも、『邇摩郡宅野浦の沖にありて今の俗から島』とあり、事蹟考辨、石海集、八重葎、底迺伊久里等も大體さう記して居る。



唐鐘浦と韓島との位置を示す圖

二

大體、辛乃埼をば今の宅野あたりの海邊の埼と見當をつけ、さて人麿作の第一の長歌(二三二)を見るに、

『石見之海 角乃浦囘乎 浦無等 人社見良目 潟無等 人社見良目』云々とあつて、大體、那賀郡の都野津町あたりの海邊を想像せしめる語句である。即ち當時の石見國府は伊甘郷(今の下府・上府・國分)にあつたものとし、其處の海岸から出發した趣で、江ノ川

に至るまでのことを敍してゐるやうに思へる。そこで、はじめから、『石見の海、角の浦廻を』と云つて、それから江ノ川を渡つた向う岸の、『和多豆乃　荒磯乃上爾　香青生　玉藻息津藻』云々と云つて居り、大體旅行の順序に從つて語句を置いてゐる。

次に第二の長歌を二たび顧慮するに、『角障經　石見之海之　言佐敝久　辛乃埼有　伊久里爾曾深海松生流』云々とあつて、數句を隔てて置いて、『大舟之　渡乃山之　黄葉乃　散之亂爾　妹袖清爾毛不見　嬬隱有　屋上乃山乃』云々と云つて居り、これも第一の長歌と同じく、大體旅行の順序に從つて語句を置いてゐることが分かる。つまり、『渡乃山』も、『屋上乃山』も既に江ノ川を渡つてからの地名であり、大體それに間違は無いとおもふ。さうすれば『辛乃埼』をば、『渡乃山』、『屋上乃山』よりもずつと以北に持つて來て解釋するのは少しく道理に叶はない。歌句の据ゑ方から見ても、突如としてそんなに北方の土地を持つて來て、それから二たび、それよりも南方の、『渡乃山』だの、『屋上乃山』などを逆行せしめて敍するのは、どうも不自然のやうにおもへる。

私は前からこの事が氣に懸つてゐた。そしてひよつとせば、この『辛乃埼』は江ノ川以南の地ではあるまいか、もつと國府に近く、第一の長歌の如くに、都野津あたりの土地ではなからうか、さうする方が歌としては極めて自然になると思つたのであつた。これが、「辛乃埼考」を作らうとした動

機である。

三

那賀郡國分村に、『唐鐘』といふところがある。これは現在、「タウガネ」と云つて居り、昔は、『唐金』と書いた。

徳川時代に、「安藝より石見を通過する道の記」といふのがあり、拙著「柿本人麿鴨山考補註篇」に載せて置いたが、二たびその一部を抄すれば次の如くである。

廿日。けふは空も晴わたりけれど、此比の雨にて行先の山川とも水まし、ことに玉江のわたりとて、海流れおつる入江の水かさまさりて、越がたしと聞えければせんすべなく、はたこゝより百町あまり行ば琴高の磯とて、見所も多しと聞ゆるを見殘さむもいとおしければ、巳の時ばかり湯谷をいで上府村より山路へかゝり、國府村を過、國分寺へまうで、唐金の浦へいづ。古へは、國府萬軒唐金千軒とて賑ひし湊なりといへど、今は衰へ、國分はきたなげなるわら屋二つ三つ見へわたり、唐金は海べの家のみ百あまりもありぬべく見ゆ。此浦よりあまの乘れる舟に乘て出るに、犬島猫島といふ島の間をすぎ、岩屋の內へこぎ入る。大きさは相模の國江の島の洞ほどにて、奥へ三十間ばかり行ば、いはほに佛の狀ちしたるあや自然にありて、穴の觀音といふ。そこより

跡の方へ別るゝほらのあンなるを行ば又海へいづ。（こゝはほりなどせし跡にはあらで自然の淵と見ゆ）やゝこぎ行。琴高の磯へ下りて見るに、そびえし岸にそひて、長さ六七丁海の表三四丁又は二丁ばかりさし出たる岩のたゞ一ひらにたゝみ出しける如く、いといと平らかに、ゆほびかなる所々に、巾二尺ほどづゝ、みぞの様にくぼかなるすきまありて潮魚なども行かひぬるを、飛越つゝ沖の方へうち出て見わたせば、海原かぎりなう西のはてなりと聞しもしるく、日も月も波に入ぬべくおもはる。此先の岸に大釜小釜などいへる石とびこゆべき程の巾して、深さはかりがたき淵などもありと舟人どもかたりけれど、潮みち風あしければ、えいたりがたく、もとの道をかへり、湯谷のやどりにつく。（けふの道は凡二百五十丁なり）

廿一日。辰上刻湯谷を立て、有福村のはづれより山路を行。頂きに古へ火のいでし穴とて、わたり五六尺ばかり、けたなる石をふたとし、内も石もて箱の如くかまへ、畳六ひら程しかれぬべしといへるは、例のはうぶりのあなたにや、高田山のすそへ下り、唐山（大上いとよく見わたる頂きより朝鮮も時々見ゆと云）などふりさけ見つゝ、都野津、加久志、江津を経て、江の川のわたしをこえ、（川四百九十間といふ、[illegible]）渡津村を過、海邊へいで、湖戸鹽田淺利（[illegible]）の浦々を行。尾濱（[illegible]）黒松浦吉浦今浦など今蜑のみすめる蘆の屋にて、福光村より温泉津にいづ。大船つどふ湊にて、家居多くにぎはし。（[illegible]）出湯はこゝも山のなかばよりわき出るを室の中へひけり。にごりてしほはゆく、やまひにはよかなれど、きよらならねばゆあみ一たびにてやむ。

此の文中、「唐金」の犬島、猫島、穴の觀音などの記載を讀めば、人麿の歌の、「辛乃埼なるいくり

りにぞ深海松(ふかみる)生ふる荒磯(ありそ)にぞ玉藻(たまも)は生ふる』と決して相反してはゐない。却つて、邇摩郡宅野の韓島あたりよりも親しみがあつて、その頃の國府の人々も遊覽し得たところのやうに思へるから、若しこの『唐金』が『辛乃埼』だとせば、實際の風景の上からもその歌の句を適切に説明することが出來るのである。

次に、右の如き假說を證據だてる理由として、『唐金』は今は『タウガネ』と稱してゐるが、古くは、『カラカネ』と稱したのではなからうか。若しさうだとせば大に都合もよく、また文中に、『高田山のすそへ下り、唐山などふりさけ見つゝ』とある中の『唐山』は『カラヤマ』と訓ませるに相違ないから、この紀行文を書いた頃には『カラヤマ』といふ名があつて、その『カラ』は遠き古への『カラノサキ』の『カラ』の名殘でもあり得ると考へたのであつた。

併し、『唐金』を『タウガネ』と云つてゐるのは徳川末期の書物に見えて居るし、島根縣廳に依賴して調べてもらつたのによると明治初年以後ずつと『タウガネ』と云つてゐる。併し私は今でも古へは『カラカネ』と云はせたものではなからうかと想像してゐるものである。

その傍證として、やはり那賀郡で、『唐金』の近くの有福村に、大津村・姉金(アニカネ)村があつたのを明治二十一年合併して大金(オホカネ)村と名づけた。それから田野村と千金(チカネ)村とを合併して金田(カネタ)村にした。また島

星山の南方に谷金村がある。皆『金』のついた村の名で、その上の字を皆和訓にして呼んでゐる。『大金』は『オホカネ』で『ダイカネ』では無いのである。かういふ實際例を參考すれば、『唐金』を古へ『カラカネ』と云つただらうと想像してもそんなに虛妄な想像でないことが分かる。

併し、訓讀を音讀に變へる例はあるかといふに、長崎では支那寺のことを、『タウデラ』(唐寺)と云つてゐる。これも古くは必ず、『カラデラ』と云つたものに相違ないが、いつのまにか『タウ』の音になつて居る。そしてこれは、宋人をソウヒト、胡人をコヒトと訓ませる如き習慣とは違ふやうである。『湖尻』なども今は『コジリ』と云つてゐるが、これも『ウミジリ』からの變動であり、かういふ實例はもつとあり得るので、また、『唐金』を『唐鐘』と變へたのなども、誰か後人の爲業であるに相違ないことをもいろいろ考へ合せれば、古くは『カラカネ』と云つたものと想像推論してよく、さうすれば、『カラ』といふ地名の名殘と看做し得べく、それが人麿時代の『カラノサキ』の『カラ』にも連續し得ることとなるのである。

吉田博士の大日本地名辭書には吉田桃樹の槃游餘錄の文として載せて居る文章は、『安藝より石見を通過する道の記』といふのと殆ど同樣であるから、槃游餘錄の文と元は一つものなのかも知れない。そして地名辭書では、『唐金』を『カラカネ』と訓ませてゐるのは吉田氏の參考した槃游餘錄

にさういふ傍訓があつたのかも知れないが、帝國圖書館藏のものにはさういふ傍訓がないから、槃游餘錄が書かれた元祿頃に、『カラカネ』と云つたか奈何か不明であるが、またその頃『タウガネ』と明かに云つてゐたといふこともまた不明であるから、地名辭書の『カラカネ』といふ訓をも私は全然誤謬として棄てずに參考として居る。また、姓氏に『カラカネ』（唐金）といふのがあるから、地名にさういふのがあつてもあへて不思議ではない。

ついで私は、前記の文中の『唐山』は『カラヤマ』と訓むべきものとし、國分村、川波村の小字に類似の音のつくもの、つまり、『カラ』の附くものを搜し求めたが見附けることが出來なかつた。卽ち現在では、『カラヤマ』といふ名稱は湮滅してしまつてゐる。また、文中の『高田山』も、恐らく『タカタヤマ』と云ふつもりらしいが、現在は『カウダヤマ』と云つてゐるところを見れば、『タカ』といふ和訓が『カウ』といふ音訓になつたものと看做していいであらう。もつともある人の說に、『カウダ』は『神田』の訛轉だといつてゐるが、そのあたりには神田の跡と看做すべきものは見つからないのであるから、私はやはり前說の方に傾いてゐるのである。名所集等には、『高田山』を、『タカタヤマ』と訓ませ、さういふ訓の和歌をも載せてゐるのを見れば、『カウタ』は『タカタ』の轉だらうと推論して大體いいやうにもおもへる。

唐鐘（唐金）の浦は、一に床の浦ともいひ、前記の如く犬島、猫島があり、なほ千疊敷と稱する巖がある。底適伊久里に、『此處、疊千万敷タル如クニシテ、敷合セノ如キ溝アリテ、誠ニ面白ク、實ニ行見ルベキ所也』とある。

昭和十年四月二十日、山口茂吉氏と共にそのあたり一帶を實地踏査した。

四

以上の記述をば大凡次の如くに約めることが出來る。

（一）人麿の石見から上來する時の第一の長歌の、『石見の海、角の浦囘を、浦なしと、人こそ見らめ、潟なしと、人こそ見らめ』云々といふ歌句は、伊甘の國府に近い、江川を渡らぬ手前の敍述として先づ間違が無いとせば、第二の長歌の、『つぬさはふ、石見の海の、言さへぐ、辛の埼なる、いくりにぞ、深海松生ふる、荒磯にぞ、玉藻は生ふる』云々といふ歌句の中の、『石見の海』も、『辛の埼』も、やはり、第一の長歌同様、國府に近い、江川を渡る手前の敍述と解釋するのは適當のやうである。

（二）從つて、『辛の埼』をば、邇摩郡宅野近くの韓の島の邊に置いて解釋する從來の說に疑問を抱

かねばならぬ。そしてこの疑問は正しい疑問のやうである。

(三) 然らば、江ノ川の手前で、國府の近くに、『いくりにぞ、深海松生ふる、荒磯にぞ、玉藻は生ふる』云々に該當する場處は何處だらうかといふに、先づ現在の唐鐘浦で、其處の犬島、猫島、千疊敷、疊ケ浦、赤鼻あたり一帶のうちの埼ではなからうか。

(四) さういふ見當をつけて、現在の『唐鐘』を一顧すると、これは元は、『唐金』と書いたもので、もつと古くは、『カラカネ』と云つたのではあるまいか。若しさうだとすると、槃游餘錄の中の、『唐山』などと共に、『カラ』の音が殘留したことになり、この『カラ』は人麿時代の、『辛の埼』の『カラ』の名殘ではあるまいか。

(五) さうすれば、現在の唐鐘浦を中心とする埼は、人麿の歌の中に咏みこまれてゐる、『辛の埼』だらうといふことになる。

五

以上の愚案は、昭和十年に、拙著『柿本人麿評釋篇』に記載し、未だ發表の運に到らなかつたものである。そして、其後文獻を渉獵してゐるうち、この說は私がはじめて立てたものでなく、既に

遠い過去に石見の學者が明言してゐることが分かつた。

それは、石見八重葎の中の、小篠大記の說であつて、「辛ノ崎ハ、今ノ唐鐘ナランカ。唐ノ嶺ナド云シヲ訛（ヨコナマリ）シテ唐鐘ト云ヘルナランカ。古ヘヨリ山陰道ノ往來ノ道ノ濱邊ナリ。伊久里は日本書紀應神天皇ノ卷ニ白羅海中ノ石ト云フ古來ヨリ傳ヘナレバ、辛ノ崎ノ伊久里ハ今ノ唐鐘浦ノ千疊敷トイヘル岩ナリ。是ナランカ。千疊敷ハ又ハ疊ケ浦トモ云。皆俗稱ナリ」といふのである。これで見ると元祿年間の槃游餘錄の影響のやうにも思はれるが、小篠大記は石見の學者だから必ずしもさうではあるまい。また八重葎の成つた文化十四年頃までは唐嶺（カラノミネ）に類した名の山のあつたことが想像せられ、從つて槃游餘錄の唐山（カラノヤマ）もその名が確かにあつただらうと想像し得るのである。（昭和十二年一月「文學」第五卷第一號所載）

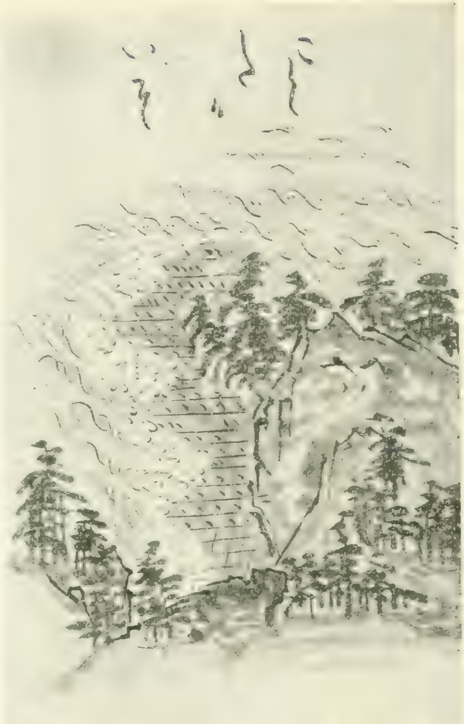
琴高磯・辛の浦・床の浦其他

一

槃游餘錄の文に、『又海へいづ。（こがねほりなどせし跡にはあらで自然の洞と見ゆ）やゝこぎ行。琴高の磯へ下りて見るに、そびえし岸にそひて、長さ六七丁海の表三四丁又は二丁ばかりさし出たる岩のたゞ一ひらにたゝみ出しける如く、いと／＼平らかに、ゆほひかなる所々に、巾二尺ほどづゝ、みぞの樣にくぼかなるすきまありて』とある。（鴨山考補註篇二二〇頁參看）これで見ると、今の唐鐘（唐金）浦、疊ケ浦と云つてゐるあたりを、琴高の磯と稱して居ることが分かる。この紀行文は天明のものだから、少くともそのあたりはさう稱してゐた確證である。

次に石見名所集に、床浦の條に、『那賀郡唐金浦なり』と注し、なほ、『新清が云。いまだ詳ならずと。又云、古登高磯は唐金浦なりと。案ずるに、浦磯は共に海邊なれども、その別をいはば、浦

は海邊人家等有べし。人家もなく船よすべきにもあらぬ所を浦とはいひがたし。磯はすべて海邊波際はみな磯なるべし。琴高磯は唐金浦の東にあり。いまの人たゝみが浦と云習はしなり。岩平にして疊敷たる如くなればなり。疊の縁よりして床の浦と云たる說ありと。拾遺相模 燒とのみ枕の上にしほたれて煙り絕せぬ床の浦哉。とよみたるにて明白なり。疊が浦は、一面の岩疊にて、しほなど燒べき所にあらず。唐金浦はむかしより鹽燒ことをぎやうとして烟りたへせぬ所なり』と記してゐる。また、琴高磯につき、『古登多加磯。ことたか磯は唐金浦の東にあり。今疊が浦といふ。一說に横にほ〳〵



唐鐘浦古圖（ことたか磯）

ならびたる石を琴の柱にみなして、ことたか磯といふと云々。又說に波の音たかき所なれば言葉たかからざればきく事を得ず、故にことたか磯といふと。堀川百首 石見かたことたか磯による波のくだけ

て歸る音をしらずや。俊頼。岩の間筋立て切あり。打來る波歸ることなく、岩の切間々々にながれて、歸るなみの音なし。此うたもし此磯による波のごとく歸る音をばしらざるや否ととがめたるにや、猶浦磯の取あやまり、證歌并畫圖兩所引合て考へ有べし」云々と記してゐる。この文でも、琴高磯、床の浦、疊が浦、唐金浦は相近接して居る場處だとしてゐるから、この書を書いた安永三年頃にはさう稱へてゐたことが分かる。堀川百首などに、『石見がたことたか磯』と咏まれて、一つの歌名所になつてゐるのを見れば、伊甘國府以來、珍らしい場所として注意せられてゐるうちに、『ことたか』などといふ名も附いたものであらう。

二

石見八重葎に、『辛浦は宅野村にして、又古登多加磯といふ。今汐吹と呼び、岩に穴ありて、中より汐を吹きあげる。古歌に、石見潟ことたか磯の寄波のくだけて歸る者と知らずや。と傳へり。又辛之埼の波踏寺觀音堂は、濤來山と號し、海中出現の佛とぞ』云々とある。

八重葎の文に據れば、古登多加磯（ことたかのいそ）は宅野の海岸にあることとなり、『邇摩郡神子地（カミコチ）ノ濱をいふ。今俗琴の濱といふ是也』とも云つてゐる。金子杜駿の石見海底廼伊久里にも、この八重葎の説に贊

成し、『名所記方角集ともに那賀郡唐金にあり、今俗疊か浦といふ是也云々。此說非也。疊カ浦ハ床ノ浦ナル事床ノ浦ノ條ニ云リ。八重葎ニ云。邇摩郡神子地ノ濱をいふ、今俗琴の濱といふ是也ト繪圖イト委シク書セリ。少モ違ズ。此濱ヲ歩ムニ琴彈如キ足音セリ。マタ沖ニ琴ノ形シタル大磐ノアリシガ文化元年甲子ノ大地震ニ大津浪ヨセ來リテツヤ／＼動崩シテ今ハナシ。近キ頃迄モ覺居タル者多カリシトカヤ。琴ノ形海上ニ顯レシヨリ號ケタルヤ、マタ彼足音ヨリ云ニヤ』云々と云つてゐる。

併し、この二つよりも古い名所集方角集等で、古登多加磯は唐金浦近くだとしてあるのに、それよりも新しい八重葎等で宅野まで持つて行つたのは、推するに、八重葎の著者が、邇摩郡に近い安濃郡の人であつて、那賀郡の人でないからであらう。若しこの推測が餘り穿ちに過ぎるならば、顧みなくとも好い性質のものであるが、一つの、『古登多加磯』でも何かのはずみに移動して考證されてゐる事實を示せば足りるのである。然かも、八重葎でなぜこの磯を宅野まで移動せしめたか、その根據が薄弱であり、八重葎に贊成した底酒伊久里で琴の形した大磐云々といふのも猶根據が薄弱のやうに思はれるので、私は、唐金浦說に贊成するに傾いてゐるが、これは直接『幸乃埼考』には關係はない。

併し、八重葎で古登多加磯をなせ宅野に持つて行つたかといふにつき、著者が宅野に近い人であるといふのみでなく、暗默のうちにまた一つの理由があるやうにもおもふのである。名所集には、『辛埼。邇摩郡宅野浦』。『から浦 同郡大浦にあり』とあつて、いづれも江ノ川以北と考へてゐるのは、宅野に『韓島』があるためと、天正十五年の九州道の記に、『廿九日。石見の大からと云所にとまりて明るあした仁間といふ津まで』云々とあるのに據つたものであらう。

此處で一寸註を挿入するが、この九州道の記は群書類從第三百三十八紀行部十二にも載つてゐるが、活字本には、『大うらといふ所』になつてゐる。若し『大浦』だとすると、宅野や韓島よりももつと東北になるが、この紀行文を見ると、仁萬よりも南方のやうである。岡田眞氏が群書類從の木版本を檢してくれたところが、どうしても『大から』と讀めるやうになつてゐるから、活字本の『大うら』は『大から』の誤だらうといふことであつた。また大日本地名辭書の引用にも『大から』になつてゐる。今次にこの紀行を抄出するに、

廿九日。石見の大うらと云所にとまりて、明るあした、仁間といふ津まで行に、石見のうみあらきといふ古事にもたがはず、

白波かゝる磯山のいはほそばだちたるあたりをこぎ行とて、

これやこのうき世をめぐる舟の道石見の海のあらき浪風

それよりやがて銀山へこえてみるに、やまぶきと云城在所の上に有をみて、

城の名もことはりなれやまぶよりもほる白銀を山吹にして

やどりける慈恩寺發句所望。庭前に楓の有をみて、

深山木の中に夏をやわかかへで

溫泉の津まで出て、寶塔院にやどりけるに、先年連歌の一卷見せられし事などかたみに百韻をつらね侍りぬ。

浪の露にさゝしましける磯邊かな

かういふのである。さてこの紀行は、出雲の方から石見に來たので、この文の前に、『廿九日。朝なぎの程にまはしつるもの共順りきて、いそぎ舟にのれ。日もたけにけりといへば』とある如く、出雲から舟に乘つて來たものである。さうして見れば仁萬以北には、『大うら』があるが、『大から』は無い。其處で、木版本のは誤で、やはり活字本で直した方が正しいことになり、大日本地名辭書の『大から』も間違だといふことが分かつたのである。卽ち、細川幽齋は出雲から舟で來て宅野の少し北にある大浦に一泊し、そこを立つて銀山を經、溫泉津に一泊したことになり、順序も合理的になるわけである。

以上の註を挿入して、なほ考を述べることとする。八重葎には、『大浦』を『からの浦』だとして、繪圖まで畫いて居り、底湎伊久里では、『宅野、大浦ナベテヲ云ル也』と云つてゐるが、宅野の近

くに韓島があるから、それからの同音聯想で、辛埼を其處だとするのは好いが、大浦をからの浦だとするのは、大からと讀んだのから來てゐるのではあるまいか。そのへんの連結は極めて不自然で曖昧である。そこで、からの浦が今の大浦だといふ説には根據が少く、それよりも輿地圖などのからの浦を都農近くの海に記入してある方が寧ろ正しいのではなからうかとも思へるのである。

さう思つて、八重葎が古登多加磯をば神子地の琴の濱に持つて行つたり、もつと北の宅野に持つて行つたりしてゐるのは、同時にからの浦をも大浦の方に持つて行つたとも看做し得るのではなからうか。私が、前の方で、『暗默のうちに』移動せしめたやうに云つたのは、このためであつた。からの浦が大浦だとする名所集の無根據の説を採用して持つて行つたと同時に、古登多加磯が床浦即ち唐金浦だとする、古い口碑に本づく比較的根據ある説をも、同時に其處へ持つて行つてしまつたものである。

かういふ移動の事實を種々參考すれば、八重葎、底迺伊久里等の國人の書いた書物だからといつて、直ちに信用し難いものだといふことを云はむと欲して、以上の絮語した。見む人とがめたまふことなかれ。

三

鐵道省編纂日本案内記に、疊ケ浦につき次の如き記載がある。

【石見疊ケ浦】下府驛の北約二粁、國分村にある。臺地性を帶びたる第三紀丘陵が海に臨みて波蝕崖をなし、崖下に千疊敷と稱する廣さ三七七アールに餘る隆起海床があるのを云ふのである。明治五年頃濱田地震の際隆起したもので、有史後の隆起海床として模範的のものだと云ふ。崖及床にはこの地方に洽布する第三紀新層の砂岩、礫岩、頁岩の互層より成り、これ等の諸岩が水平層をなして相重なる狀が頗る美しい。砂岩には淺海性の貝化石及鯨骨化石がある。この層の特色とすべきは、貝化石、鯨骨、流木片を核心とする球塊の數多存在することである。これ等の球塊は幾多の層列をなして砂層中に介在し、風化浸蝕の兩作用に抵抗して海床上及崖側に半球狀の凸起をなし、頗る奇觀である。

記載は、新科學的記載で有益であるが、明治五年濱田地震の際の隆起のみであらはれたものでないことは、既に徳川時代の安永、天明あたりから、床の浦、疊が浦等の名があり、繪圖さへも附してあるのだから、縱ひ明治五年に隆起したとしても、さう著しいものではなかつただらうと考へられる。一體、口碑は餘程注意しないと誤を傳へるもので、萬壽三年の地震などもさうであるが、此處の隆起説なども、もつと古代と考へて差支なかるべく、人麿時代に既に現今と大同小異であつたのではなからうか。

『カラノ浦』に就いて

私が評釋篇卷之上で、『辛乃埼』を考へた時、國郡全圖の中に、都野に近く、『カラノ浦』と記したのがあることを注意して置いた。併しこの國郡全圖は誤寫もあるし、木版彫刻にする時の誤もあり、その他あやしい點もあるので、この『カラノ浦』についてもたいして重きを置かずに、ただ參考としたに過ぎなかつた。

然るに昭和十二年一月に兵庫縣の金田賢作氏から通信があり、私の「辛乃埼考」(文學所載)を讀んだが、金田氏所藏の大日本輿地便覽といふのに、都野に近くの海に、『カラノウラ』と記してあるといふことであつた。そこで金田氏からその大日本輿地便覽を借覽するに、これは大體、國郡全圖を本にして、それを模寫してゐるものだといふことが分かつた。

國郡全圖は尾張の靑生東谿(元宣)といふ人の著で、文政十一戊子年の自序と同年に奥田叔建の跋とがついてゐるが、享和三年九月に書いたといふ菅原長親の序文もあるから、前から出來てゐたも

ののやうである。

次に、大日本輿地便覽は、津の山崎義故といふ人の著で、天保五甲午年の跋文がある。その跋文には、「元祿の比、開祖衡の分域指掌圖ありと云。余いまだみず。たま〳〵其類本をえて參酌互照」云々とあるが、この地圖は國郡全圖に據つた形跡が充分あるけれども同一ではない。

次に、國郡全圖には、「カラノ浦」と記入した處に黑い三角の標がある。凡例に據るにこの黑い三角の標は、『陵或は名所舊跡』をあらはしてゐるのだから、「カラノ浦」は名所舊跡の一種と看做してゐることが分かる。輿地便覽にはその黑い三角の標は無いが、やはりさういふつもりであらう。さて、「カラノ浦」を名所舊跡として、之を都野附近の海濱に求むるに、唐金浦の千疊敷、穴觀音あたり以外には見當らない。そこで推察するに、此等の地圖を作製するについてその本をなした地圖には「カラノ浦」の名稱が明かに載つてゐたものであつただらう。そして、二つとも人丸神社が海岸に近くあるところを見れば、時代が現在の神社移轉以前に屬し、益田川と高津川が一しよになつて海に入つてゐるのを見ても、略その時代を想像することが出來る。

私ははじめ、この「カラノ浦」については、餘り重きを置かぬのであつたが、熟考すれば、これは大切な一つの根據になるべきものと思へるし、「カラ山」の「カラ」と同じく、「辛乃埼」を考へ

る上に棄ててはならぬものと思つたのである。

その後、岡田眞氏から、嘉永版、本邦輿地圖（水戸、長赤水原圖、江戸、鈴木驥園增訂）を借覽するに、やはり都野の近くに、『カウノ浦』といふところがある。岡田氏は附言して、『井上通泰流にゆけば、ウはラの誤か』と云つたが、蓋し正鵠と謂ふべく、この地圖で、『糟淵』が『糟津』と刻せられてゐるのを見ても、ウがラを誤つて彫したものと看て不當ではないことが分かる。

その後注意するに、この二つの系統を引いた地圖が見當るので、一つはカラノ浦となつて居り、一つはカウノ浦となつてゐるものであるが、いづれも江ノ川よりも西南で、都野の近くに記入してゐる。

文久三年官許、菊亭殿御藏版（菊亭實順）の銅鐫大日本國細圖にはカラノ浦としあり、明治五年開板、東京山崎清七瀨山庄助合梓の、校正大日本輿地全圖にもカラノウラと記入してゐる。また、前出の嘉永版が明治四年再刻し、一枚の大地圖とし、增訂大日本國郡輿地路程全圖にはカウノ浦とし、明治八年、津江左太郎編輯の大日本國郡便覽にもカウノ浦となつてゐる。明治二年官許荏窻貞雅の大日本海陸輿地全圖にはカラタウラとしてあるのは、カラノウラの誤寫であらう。

斯くの如くで、實際の踏査よりも、據つた原地圖に從ふのであるから、何處までも二とほりのも

のか傳はるわけである。併し原地圖が、縦ひ大體の想像にせよ、カラノ浦を都野の近くに記入し、大浦は別に大浦として記してあるのは、やはり注意して好いのではあるまいかとおもふのである。

「カラノ浦」が現在の地名でなく、名所として記入したのだとしても、國郡全圖以前のどういふ地圖に載つたものか、未だ詳にすることが出來ない。「分域指掌圖」には見ることを得ずにゐるが、文化三年浪華筱應道撰文化五年浪華高麗橋藤屋彌兵衛版の、大日本細見指掌全圖には、カラノ浦の記入が無い。

地圖調査等につき、村岡典嗣、岡田眞、金田賢作、佐藤佐太郎諸氏の教示を得たことを深く感謝する。

『唐の島』其他

今の『唐鐘』が、實際『唐』の文字と關係があるか否か、若し關係がありとすると、私の辛乃崎考に都合がよいのである。このことわりを何故するかといふに、上總の東鐘（東金）は、鴇之嶺といふ山の名から由來したので、今の『東』の文字とは關係が無い。さういふことが唐鐘にもあると具合が惡いからである。

國分村の小字名にトウノシマといふ處がある。これは一體何處の邊であるか審にしなかつたから、昭和十二年五月十六日唐鐘を訪うて見た。そして漁家に行つて古老に一々たづねて歩いた。

トウノシマは金周布の前にある小さい島である。そこで案内人を雇ひ大年神社のところから山越をして金周布に行つた。トウノシマは低い巖から成つてゐるもので、殆ど陸に續いてゐるとも謂つていい程な近い扁平な巖の小島である。金周布は、小舟のもやふことの出來る處で六戶ばかりの人家がある。

次にトウノシマと唱へる島がもつとある。これは字名でいふ犬島・猫島のことで、前者を沖ノトウシマ又は後ロノトウノシマといひ、猫島のことを前ノトウノシマといふ。これは漁師だけのとほり語で、鬼頭魚を漁る時の目標となつてゐるといふことであつた。そしてこの方の『トウ』は『唐』で、『唐ノ島』だと古老が一人ならず云つてゐる。私は數軒の家を訪うてそれを知つた。さうしてみれば、金周布のトウノシマも『唐ノ島』だといふことは推するに難くはない。

ここに於て、唐鐘のあたりに、『唐の島』といふところが三つあるといふことが分かつた。そして犬島猫島などといふのよりも唐の島の方が古い名であるらしく思へるし、漁夫等はずつと古くからさう云ひならはしてゐたものであらう。そして、『唐の島』の『唐』は、『唐鐘にある島』といふのの略稱とも考へ得るが、或は、唐金などと同じく、最初から唐の島といふ名であつても好いわけであるから、やはり『唐』に關係ある文字と推考してもそんなに不道理ではない。特に金周布にある唐の島は唐鐘にある島の略稱でないことが分かるから、古いころからの獨立した名として、『唐の島』を認容することが出來る。

約めていへば、現在、唐鐘のほかに、唐の島といふ名稱が殘つてゐるから、其處は『唐』の文字に關係のあることが分かる。『唐』は平安朝以後トウと云つてゐたが、もつと時代を溯させればカラ

である。そこで人麿時代にカラといふ名のつく地が現在の唐鐘あたりにあつたと考證し得るのである。即ち、『唐の島』といふ名の現在は、私の『辛乃崎考』に一つの根據を與へることになる。なほ、この疊浦は若布、海苔を産し、特に海苔は石見海苔の一部をなして有名であつた。かういふことも人麿の長歌を解するうへに必要條件の一つである。

次に、この旅行のをり、湯抱に於て舟木賢寛氏に會ひ、粕淵小學校裏地から出土した土器は、下府村出土のものと共に、朝鮮系統の土器をも混じてゐるといふことが分かつた。これも亦興味深いことであつて、愚案の鴨山考に一つの積極的な證據を與へるものである。この調査は東京の專門博士の手によつて爲されたものである。

次に、これは序であるが、唐鐘の疊浦が床の浦だといふことは、國分村小字名に、『床浦石所』といふのがある。これ床浦と云つた積極的な證據であるから、序を以て此處に記し置く。

次に、都野津町、都濃村、江津町につき、カラ又トウの附く地名の殘存について調査したが、其處には無かつた。これは山田儔氏の勞を煩はした。

屋上山

萬葉卷二（一三五）の人麿作長歌中の、『屋上乃山』を、私は總論篇以來、ヤガミノヤマと濁つて書いてゐたが、これはヤカミノヤマと清んで訓む方がよいやうである。

石見には邑智郡に矢上村があり、これも私はヤガミと云つてゐたが、土地の人に問ひただしてヤカミと清むことが分かり、なほ今回、石見那賀郡下松山村にある八神も、問ひただしてヤカミと清むことが分かつたから、人麿の歌の屋上山もヤカミヤマとすることにする。

諸注釋書では、鴻巣氏の全釋と私の書物だけが濁つてよませ、他の諸書は皆清んでよませてゐるやうである。

古事記、『八上比賣』につき記傳卷十に、『八上比賣（ヤカミヒメ）、和名抄に、因幡國八上（夜加美）郡あり、此により出つる名なり』とあり。石塚龍麿の、古言清濁考には、清むやうに書いてある。

なほ、大日本地名辭書索引、日本地圖帖地名索引其他に據ると、石見のは皆ヤカミと清んでゐる

兵庫縣多紀郡の八上も、鳥取縣八頭郡の八上も、岡山縣阿哲郡の矢神も淸んでゐるが、長崎縣西彼杵郡の矢上、岐阜縣羽島郡の八神等はヤガミと濁つて稱へてゐる。岩手縣二戶郡の矢神嶽もヤガミダケと濁つてゐる。人麿時代には濁音が多くなかつただらうから、現在石見の人々の發音してゐるやうに發音したと看做して大體好いやうである。

なほ、現在吾等はツマゴモルと發音してゐる『嬬隱有』といふ枕詞もツマコモルと淸んで發音したかも知れない。つまり、『都麻胡非』も只今ではツマゴヒと發音してゐるが、そのころではツマコヒと發音してゐたとも考へられるのである。斯くすれば、ツマコモル・ヤカミノヤマノと全部淸んで發音して調和がとれることになるのである。



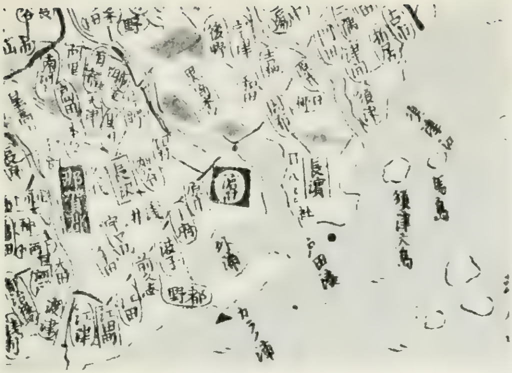
唐鐘・豊浦・大島



[illegible]



唐鐘・豊浦



カラノ浦（國郡全圖）



カラノウラ（大日本輿地便覧）



カラノ浦（大日本國細圖）

藤原宮御井に就いて

藤原宮御井考

一

萬葉集卷一（五二）の藤原宮御井歌の、『御井』は現在どの邊に當つてゐるだらうかといふことは、誰でも念頭に浮ぶ事柄であるか、先賢の書いたものにも此は明かに記されてゐない。

考に、「上つ代より異なる清水有て、所の名とも成しものぞ、香山の西北の方に今清水有といふは是にや」とあつて、略解・古義その他の注釋書も概ねそれを引用したにとどまつてゐる。

なぜ斯くの如く御井阯に就いて諸學者が考察しなかつたかといふに、第一、藤原宮阯についての定說が無かつたためである。考に、「宮の所は十市郡にて、香山耳成畝火の三山の眞中なり。今も大宮殿と云て、いさゝかの所を畑にすき殘して、松立てる是なり」と云ひ、古義も其を引用し、なほ増補して、「さて香山は十市郡なれども、宮地は其西にて高市郡に屬るなるべし。釋紀に氏族略記を引て、『藤原宮在二高市郡鷺栖坂北地一と云り』」と云つたが、喜田貞吉博士も其等を參考しつつ、次

の如くに考證を進めた。

其宮城の位置は、釋日本紀引く所の氏族略記に、藤原宮は、「高市郡鷺巣阪の北の地に在り」とある。扶桑略記には、「大和高市郡鷺巣阪の地是なり」とある。兩者稍相異はあるけれども、要するに藤原宮城は、鷺巣阪と稱する地の附近にあつたに相違ない。今藤原宮の所在として知られたる、大和三山の中間の地を調査するに、日高山とか、小山とかいふ小丘陵はあるけれども、位置東に偏して、宮城に充つべき場所では無い。然るに延喜式に高市郡鷺巣神社が有る。今同郡白橿村大字四分の鷺巣八幡社即是で、其の地は阪と言う可き地勢では無いけれ共、略ゝ畝傍・香久兩山の中央を通過する南北線の附近にあつて、藤原京の朱雀大路が此の神社と遠からざる場所を過ぎて居つた事は明かである。して見れば、宮城を此の鷺巣神社の北方に求めて、ほゞ其位置を知ることが出來やうと思ふ。古事記垂仁天皇の條に鷺巣池が有る。扶桑略記及氏族略記に鷺巣阪とあるのは、或は鷺巣の池若くは杜の誤寫であるかも知れない。今鷺巣八幡の所在の地に、小字門の脇といふのがある。是或は宮城朱雀門の脇の名を傳へて居るのであるかも知れない。(中略)ともかくも藤原宮城が、鷺巣神社と耳成山との中間にあつた事は動くまい。(下略)(帝都)

然るにその後、新研究が進み、奥野氏の「萬葉大和志考」には、「高市郡の東北隅、鴨公村大字醍醐・高殿を中心とせる地方。枝葉には異説なきにあらざるも、ほぼ北は鐵道、南は上飛驒、東は香具山、西は四分附近に限れる殆ど方形の地域を占めしならむ。飛鳥川其西半部を貫流せり。」『藤原宮。

鴨公村小學校の南に接して土壇あり。持統、文武二帝藤原宮趾と傳ふ」と記載してゐる。

その後、昭和九年十二月以來日本古文化研究所で發掘調査を行ひ、昭和十一年十一月に、足立康、岸熊吉兩氏の「藤原宮阯傳說地高殿の調査一」が發行になつた。此は精細な學術的報告であるから、續行的調査を必要とする點もあるが、從來の文獻に據つて、宮殿の模樣を推すに、朝堂院内の北部中央に南面して立つ正殿は卽ち大安殿（大極殿）で、其が大宮土壇の處の殿堂阯として發掘調査せられた。それから東安殿西安殿で、これも大體發掘調査せられた。小安殿が後方にあり、其等の殿堂に所屬の建築もあり、廻廊があり、外部には築垣が繞らされ、四面には門が開いてゐた。朝堂は國家の儀式を行ふところで、正殿は前言のごとく、大安殿（大極殿）で南面して聳え、それに東殿西殿東樓西樓と其等に附屬の諸建築が布置され、朝堂の四周にも廻廊或は築垣の類があり四方に門があつたに相違ない。そして朝堂の左右の建築は南方に延びてゐたのだから、朝堂の建築は今の別所の近くまで延長してゐたらしい。この朝堂阯については、發掘調査中で、その一部分は調査濟の由であるが、未だ公表には至つてゐない。（足立博士は關野博士に從つて、大安殿と大極殿とは全く別のものと解釋して居る。）

次に、萬葉卷一の藤原宮御井の歌中の、「埴安の堤の上に在り立たし見し給へば」といふ埴安の池の位置であるが、現在は天香久山（天香具山）の北方の池にその名をとどめて居るけれども、それで

は萬葉の歌に合はないのであるから、藤原宮のころは、香具山の西の方にあつたのではなからうかといふ説がある。其は別所部落よりも西で、小貯水池の北に當つてゐる。さうすれば、埴安池は朝堂よりも南方にあり、その大きさは不明だが、今の別所の新池といふ貯水池のせいぜい二倍位なものででもあつたらうか。かく香具山の西にあつたとすれば、萬葉卷一の舒明天皇の天皇登二香具山一望國之時御製歌をも、また、藤原御井の歌をも理解か容易になるやうに思へるからして、大體さう想像して置くこととする。

次に、藤原京の範圍であるが、之を平城京の東西八里、南北九里の標準によれば、香具山にかかる事となつて具合か惡いので、現在の大宮土壇及び鴨公小學校を中心として、東西約七町の處に線を引くと、東方は、下八釣木之本を通ずる街道よりも半町程東に當り、西方は四分木殿を通ずる線に當ることとなる。それから北方は、土壇から約九町、鐵道線路を越えて八木西之宮櫻井に通ずる道路に及び、南方は土壇から約十五町、小山、川原田中の線まで及んだものと想像し得る。その西片寄りに飛鳥川が流れてゐて、時々氾濫して位置が變つたとしても、大體の位置は變らないであらう。鷺巣神社は現在四分にあるが、古老の話（現在もさう話す）には、古は鷺巣神社は下飛驒の日高山にあつ

たのが、飛鳥川氾濫のため現在の處まで流されたのだと云つてゐる。さすれば、釋日本紀引用の氏族略記の鷺栖阪といふのは、或は日高山のことであるのかも知れない。

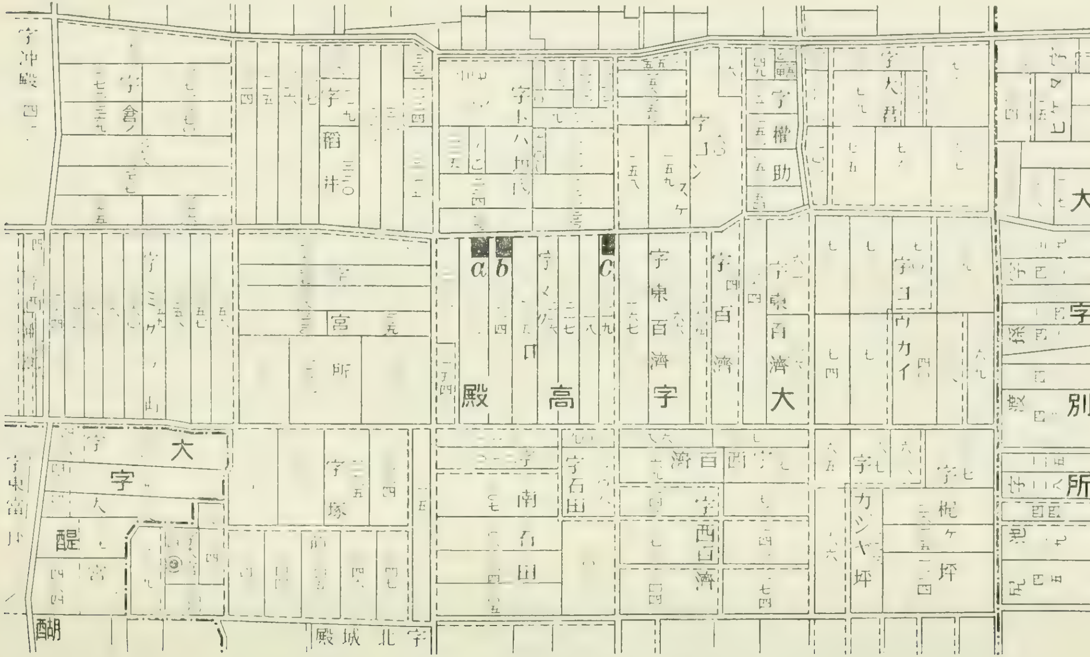
藤原京の範圍を大體右の如くに想像して、藤原宮御井を考察することとする。

二

藤原宮殿、藤原京をば大體右の如くに假定して、藤原宮御井を考へるとき、先づ現在井泉の分布狀態かどうなつてゐるか、特に大宮土壇を中心として、それから餘り遠距離で無い場處に、古代の井泉を偲ばしめるやうなものがないだらうか。それを昭和十年十一月から昭和十二年六月に至る間に、調査したのであつて、其等のいづれかが藤原宮御井と關係あるものと假定しつつ考證を進めて行つて、一定の結論に達しようと欲したのである。そして便利のため、現在目擊した井泉を分類して記載すること次の如くにした。

第一部。 大字高殿、小字メクロにあるもの。

【a】字メクロ、反別番號二一三。中浦忠太郎氏所有。現在、縱九尺二寸、横四尺五寸。なほ凝視するに、泉はもつと大きいもので、丸太、板を以て保護整理してゐる。此は耕作上の關係



井泉第一部abcの位置を示す

(◉は大宮上壇 ■は井泉)

行爲で、時期は三四十年前と推し得る。深さ十六尺二寸より十六尺五六寸。目高、鮒等が僅かに生息してゐる。表面は水綿等のために、よごれて見えるが、一たび其を除いて見ると、極めて清冽な井泉で、黄褐色の水綿の豊かに靡いてゐるのが見える。氣泡が斷えず少しづつ浮上つて水の湧くことを示し、水が斷えず田畔の間へ流れ出でてゐる。試に水質を檢査するに次の如くである。

色及清濁。　少量の類褐色沈澱物を有するも濾過後は殆ど無色澄明である。
臭味。　異臭味なし。
反應。　微弱アルカリ性。
亞硝酸。　檢出せず。
鉛及銅。　檢出せず。
アンモニア。　檢出せず。
過マンガン酸カリ消費量。　六・九五
硝酸。　痕跡。
硫酸。　少量。

鹽素。　壹七・參八
硬　度（獨逸硬度）。　七・九貳
蒸發殘渣量。　貳七〇・〇〇
細菌聚落數。　――
大腸菌。　――
適否及備考。右化學的試驗の成績に據れば、本水は濾過後飮料に適するものとす。

右は、内務省東京衞生試驗所の檢査成績であつて、露天の井泉その儘で、濾過も何もせずに汲んで持參したものであることを一言强調して置く。

この井泉は、昭和十年十一月十日藤森朋夫氏と藤原宮阯を踏査したとき、私が始めて注意したものである。ついで、昭和十二年五月二十四日私獨りで調査し、昭和十二年六月十八日、藤森朋夫氏と共に再調査した。

【b】右のaの井泉から東南一直線上、六十七尺を隔ててあるもので、小字メクロ。反別番號二一四。吉田久四郎氏所有。縱三尺七寸、横三尺八寸。深さ十七尺五寸。魚類僅かに住み、岸に雜草生え、水綿がある。水面は種々のものが浮いてゐるので清水で無いやうに見えるが、水

質はaと略同様である。昭和十年十一月十日藤森氏同道注意し、昭和十二年五月二十四日再見。

六月十八日藤森氏同道調査。

【c】同一直線上、bから略百四十四尺（二十四間）を隔ててある井泉で、小字メクロ、反別番號二一九。森田熊次郎氏所有。縦六尺六寸。横四尺五寸。深さ九尺七寸。水は一見澄明で無いやうに見える。魚類僅かに住む。水質未檢。此は昭和十二年六月十八日藤森氏と共に始めて注意したものである。昭和十年の時は稲刈に近く、穰つた稲の間にあつて注意し難く、昭和十二年五月二十四日には麥畑で刈るばかりになつてゐた麥の間にあつて見つけ難かつたのに、六月十八日の時には田植最中の水田になつてゐたために見つけることが出來たものと見える。

以上の三つを私等は注意した。この三つの中、はじめのaと大安殿阯と想像し奉ることとの出來る小字大宮の土壇との距離は目測約一町半から二町足らずである。私は以上の中abの二つに注意し、藤原御井との關聯について想像しつつ、拙著柿本人麿評釋篇卷上に、「私は、小學校から高殿に通ずる小道路を行きつつ、稲田の隅に井戸二つを發見して、非常に喜んだのであつたが、此は土地の習慣で、水を溜めるために掘つて置く井であつた。併し、その邊には、地下水が豐かで、掘れば清い水が湧き出づるといふことを證明するものであるから、私はひそかに、御井はあはれ大安殿の近

くの宮中にあつたので、常願寺或は鷺栖神社の方では無かつただらうと空想しつつ暫く其處に佇立してゐたのであつた一と書いて置いた。今でも土地の農夫は、旱魃のときのための溜水の如くに謂ふし、また他の田の隅にもさういふ性質の溜水があるので、そこで此は土地の習慣で水を溜める、云々と書いたのであつたが、實際に當つてみると、單な溜水でなく、湧水過剩のため水田にも畑にもなり得ないために、態々かく保護してゐるやうな形式になつたものと看做していい。この事は、高殿の部落の田の中にある井泉で證明することが出來る。（第二部ヒ參照）

第二部。　大字高殿。部落中及びその附近にあるもの。

【a】三橋彌一郎氏邸内に、ヒデズミの井（秀泉井）阯といふのがある。今はその阯を斷つて、何等の認むべきものが無いが、古老の傳說に據ると、此處に井泉があつて、今の常願寺の井は、この井の移轉の如きもので、常願寺の井を圍んでゐる石の一部は此處から持つて行つたものである云々。併し、井泉の阯が現在斷えてゐるのだから、藤原御井と關聯せしめることは困難であらう。

【b】常願寺庭の井。此は、秀泉井（シウセンヰド）と稱し、秀泉山常願寺にある。鴨八重事代主命の御用水だといふ傳說がある。この神は大宮土壇に齋き祀つてゐる神で、鴨公村七箇大字の氏神である。

この井に就き、古來次の如き傳説がある。此井水を使ふと天罰が當る。此井附近の土を踏荒したり土を移動させたりすると腹痛が起る。附近で不淨なことをすると頭痛が起る。長い間、井に石蓋をしてあつたが、明治初期其を取除いた。此水は旱魃の時にも涸れることが無いと云々。右は昭和十年十一月、鶴公村小學校を訪うて、校長吉田宇太郎氏に面會し、その調査を依頼した材料である。その時(十一月十日)藤森朋夫氏と共にこの井を見たが、水量も少く、稍濁つてゐた。昭和十二年六月十八日、藤森氏と共に二たび見たが、水が矢張り濁つて居り、飲料水に適せないやうに見えた。この井は、昭和十年十一月以來、常に氣に懸けてゐたものであるが、秘かに、藤原御井趾では無いかと思ひ、拙著柿本人麿評釋篇卷上にもさう書いて置いたのであつた。そして、昭和十二年六月再踏査するに及んで、いよいよその結論を强めるに至つた。約めていへば、この常願寺の井は藤原御井とは先づ先づ關係はあるまい。なほ、常願寺にはもう一つ井がある。此は普段用ゐてゐるものである。

【c】 高殿部落の北方の端に東源次郎氏の家があり、その北隣に井泉がある。此は昭和十二年三月十五日、土屋文明氏が注意し、藤原宮井泉の一部と看做して、「藤原が御井の清水にふし長になびきてありし春草おもほゆ」と詠んだものであつた。私は昭和十六年五月二十二日二十四

日調査（高安氏同道）。六月十八日調査（藤森氏同道）した。水質澄明、常に飲料にしてゐる。現在、横四尺二寸。縦四尺。深さ十尺四寸。鹽見彌太郎氏所有の田にある。此水は湧出量も多く、清冽であつて、藤原京の飲料水の一部を必ずなしてゐたに相違ない。但し、『御井』とは考へてない理由は後段に見えてゐる。この泉は大宮土壇から直線に目測して約二町半餘である。

【d】この井と南方同一線上の道側に、板を以て覆うてある井が二つある。水が濁つて、飲料に堪へないやうであるが、やはり同一系統の水が湧いてゐるのでは無からうか。此は委しく調べる暇が無かつた。

【e】cから北方略一町半の路傍の田の中に一つの井泉がある。此は昭和十二年六月十九日初めて注意したもので、田植時であつたから障礙物が除去せられ初めて注意することを得たものである。田の中にあるため、縦横深の計算も叶はず、水質も不明であるが、水が常に湧出して田とならぬために、その部分だけを井泉として保存してあるものであらう。從つてその水質もそんなに惡いものでないことを推察することが出來る。

【f】高殿部落の中、喜多奈良吉氏家近くの廣場にある井泉で、不正形。縦十五尺五寸程、横十四尺五寸程、深さ四尺から四尺七八寸程。水澄明、水草生えてゐる。現在は飲料にせず、物

を洗ふに使つてゐるが、これも手入すれば無論飲料水にすることが出來る。岸に川柳の古木が殘つてゐる。おもふに、此もまた藤原京の飲料水の一部であつただらう。ただ「御井」の一部とは看做し難い。

【g】その他、この部落には、自家用の多くの井戸がある。併し、私の見た限では、水質は概ね同樣で、cの水程好くはないやうである。

第二部の井泉は右の如くである。cの如き、fの如き井泉が露天の儘現在も殘つてゐて、涸れることが無く、田地にも邸宅地にもなり得ずにゐるところを見ると、古代から連續して湧いてゐたものであるだらう。そして、藤原宮の諸官人等も飲料に使つたものであらう。斯くの如く現在の狀態から古代の狀態を推測し得るほど、地下水が豐富である。

第三部。 高殿部落から別所に行く途中のもの。

【a】高殿から別所へ通ずる路傍の流に近く、時に麥畑、時に稻田になる處にある井泉で、山本スヱさん所有である。不正長方形に近く、縱十六尺。橫六十一尺。深さ四尺から十尺程。水草群生し、田の水流れ入り濁つてゐる。併し、自然に湧出してゐることは確かで、盛夏と雖涸れることが無い。昭和十二年五月廿四日村民の案内にて知つた。六月十八日再調査した。魚類

住む。

【b】其より南方約一間の處にある井泉で、縱横共約七尺。深さ八尺二寸程。稍濁つてゐる。魚類住む。

この二つは、第二部、aと同一線上の道路の傍にあるもので、地質學上何等かの關係あるものの如きも、私にはよく分からない。また、古くはこの二つは一つであつたかと想像することが出來る。そして、小さい方だけを人工的に保護して、或時期には飲料水として役立たしめたこともあつたのであらう。此等の井泉の東隣に俗に新池（しんいけ）と名づける貯水池があるが、この貯水池は今から三十七八年以前に出來たもので、井泉はこの新池よりももつと古くからあつたものであることを村の古老が知つてゐる。

第四部。 日高山東麓にあるもの。

【a】別所春日神社の境内を通拔けて南に行くと、日高山から約半町の處に一つの井泉がある。昭和十二年五月廿四日初めて知つた（高安氏同道）。其時は麥畑の中にあつた。六月十八日再調査（藤森氏同道）。横十四尺。縱八尺。深さ四尺二寸程。水微かに濁る。魚類住む。水綿ある。飲料に堪へるやうである。この泉から大宮土壇、耳成山の中腹迄一直線である。

【b】aから約十五六間の處にある不正形の井泉で、横二十七尺程。縱十六尺程。深さ一尺。周邊に川柳生え、黒色の水綿浮き、人工を加へざる井泉の有樣を示してゐる。水質澄明、飲料に適してゐる。氣泡たえず浮上り居る。西方は日高山、東方は香具山に向つてゐる。昭和十二年五月十九日私が一人來りて見つけた。

【c】bから數間離れた處、時には麥畑、時には稻田の間にある井泉で、横十尺、縱八尺程。深さ一尺二寸程。不正形。水澄明。昭和十二年六月十八日見付けた。藤森氏同道。

右の三つの井泉は、同一系統のもので、古代耕地の無かつた時には、一つの井泉であつたやうにも思ひ、或る時には、土壇は大安殿、耳成山との位置の關係上、藤原御井陛ではなからうかとも空想し、或る時には、釋日本紀引用の、藤原宮在二高市郡鷺栖坂北地一の鷺栖坂を現在の日高山と想像し、現在の四分の鷺栖神社は後世移轉したものと考へると、延喜式の鷺栖社、古事記の鷺巣池を顧慮するときに、この一群の井泉は或は鷺栖池の名殘では無かつたらうかとも空想した。なほ此等のことは後段に於て繰返すつもりである。

三

右の如くに露天の井泉群を現在見ることが出來るが、大宮土壇を藤原宮の大安殿阯と看做し、諸殿堂がそれから南方にあつたとして、前記の如き、宮殿と外郭のひろがりを假定して、さて、藤原宮御井は以上の如き井泉群のどの邊に當るであらうかと推測せねばならぬ。そしてこの推測は、藤原宮時代の井泉が現在まで續き湧き出でてゐるといふ要約のもとに成立つものであるが、この要約は地質上、大變化の無い限り可能であることは、他の實例、例へば、櫻井や石見伊甘池等に於て類推することが出來るのみならず、昭和十年一月以來の發掘調査によつて、地質上の大變化の無いことをも證明せられたのであるから、藤原宮御井の水が、現在見得る井泉のいづれかと相連續し相關聯してゐるだらうといふ要約を假定することが出來るのである。卽ちその要約は決して無道理では無いのである。

さう大體極めて、井泉のいづれに當るだらうかといふに、昭和十年十一月十日の調査に際し、第一部のaとbの二つの井泉を稻田の隅に見附けて、殆ど直感的の如くに、藤原宮の御井との關係を想像したのであつた。そして、大宮土壇から二町足らずの場所であること、卽ち古の宮墻の内にあつたらしいこと、湧出する泉であること、水が湧出でて耕地にはなり得ないために、却つて其を保護して、旱魃の時の灌漑に役立たしめようとしたこと、abと二つ並んでゐるのは同一系統の水脈

であるらしく、古へはこの二つは融合して一つの大きい井泉であつたらしいこと等、種々空想して、その根據としたのであつた。その時のことを拙著評釋篇卷上では、『空想しつつ暫く其處に佇立してゐたのであつた』と記し、藤森氏の日記には、『腰をおろして二三十分も瞑想』と記してゐる。

然るに、此形式の井らしいものは、小學校の西の方にも北の方にも田の隅に見つかり、やはり溜め水で、湧出しないものもあつたので、abを藤原宮御井にするには、稍根據が薄弱になつた感がしたのであるが、歸京後降雨の尠い時に小學校長吉田宇太郎氏に依賴して、實際湧出してゐる井泉か奈何を調べて貰つたりしたものである。そして、やはり湧出するものだといふことを確めたが、なほ疑問を存じつつ昭和十二年に至つたものである。

昭和十二年三月十五日に、土屋文明氏が高殿部落の北端に、第二部cを注意し、その水の豐富澄明なることと、大宮土壇から約三町弱であるところから、藤原宮御井との關係を想像し、五月二十三日に、第二部d、六月十九日に、第二部e等を發見し、其等の井泉を綜合して觀れば、北方に、稍西にそれて耳成山を望み、西に大宮土壇を望み得る位置にあり、高殿の小字には、稻井などといふ名もあるので、ひよつとせば、この第二部の井泉が藤原宮御井となるのではあるまいかとも思つたのである。

次に、別所に近い、第三部 a b を視察し、日高山の麓に近い、第四部を昭和十二年五月二十三日、二十四日の二日に視察した時、第四部 a は大宮土壇と耳成山中腹と三つ一直線上にあることを注意し、水質も清く、a b と融合すれば極めて豐かな井泉であるから、或はこれが藤原宮御井阯ではあるまいかと想像し、斯様に殆ど結論を極めようとして歸京した。ついで六月十八日調査した時にも、未だその考を棄てず、特に同日第四部 c を發見し、また、そのあたりの流に古代瓦の群を目擊し得たので、この第三部の井泉を以て藤原宮御井阯とする考は棄て得なかつたのである。ただ大宮土壇から此處まで七町半程の距離がある。その遠距離だといふことが一つの消極的な點であるが、この點を除けば、宮殿の南面に當る堂々たる井泉で、幾何學的な形式から云つても、水質から云つても先づ申分が無いと思つたのである。

右の如くに種々迷つて解決が附かなかつたのであるが、五月二十四日には斯ういふことを思つた。私が藤原宮阯を極めるのに迷ふのは、藤原宮御井と藤原京の用水とを混用してゐるからである。藤原宮御井は一つであつても、藤原京の用水（飲料水）は一つではなく、多元的であるべきである。また藤原宮殿（内裏朝堂）だけの御用水でも、上記の第一部の井泉からも、第二部の井泉からも役立てることが出來る。然らば、さういふ御用水と『御井』とは唯一同一でなくともいい。然らば位置か

ら云つても最も好い位置を占めてゐる日高山麓の井泉、卽ち第四部の井泉を以て藤原宮御井としたならばどうであらうか。距離の大きいものなどは、位置の好きを以て補ふことが出來るであらう、云々。

斯くの如くに想像しつつ歩いたのであるが、別所から大宮土壇の方向に歩みつつ、第一部ａｂのほかに、新たにｃを發見するに及んで、ａｂｃの三つの井泉群を綜合して靜かに再考するに至つたのである。第一土壇からの距離が、他の諸部の井泉よりも近い。卽ち宮殿の墻の內部に當るらしく、その東方に小字トハノ垣內があるところを見ても、略さうと想像してよいやうである。この宮墻の內だといふことは、一たびは重きを置かなかつたが、再考では、やはり重きを置かねばならぬと思ふやうになつた。それから水面の水綿などを除去して日光を透して見れば、水質は昭和十年あたりに歡喜した時の印象と違ひ、もつと水量が豐富で且つ澄明である。それから、其處に立つて見れば、三山をば共に障礙なく見ることが出來る。位置としても好位置にある。それからａｂｃが一直線上にあるから、此等は古代は一つの大きな井泉であつただらうと想像することが出來る。以上の如き理由で、この第一部の井泉群は、藤原宮御井阯の候補として二たび復活して來たのであつた。

次に二たび萬葉の歌に歸つて、『高知るや、天の御蔭、天知るや、日の御影の、水こそは、常し

へならめ、御井のま清水」を味ふと、これはどうしても宮殿に近い御井の感じである。この感じは所詮除去することが出來ない。また、生活に大切な飮料水は、形式的と共に實用的なることを要求し、運搬等の點でもなるべく便利な點を欲するのが自然だとせば、やはり、七八町を隔てた日高山麓の井泉よりも、二町足らずの此處の第一部の井泉の方が、藤原宮御井に該當する可能性が多くなつて來てゐる。さういろいろと考へて、先づ日高山麓の井泉を棄てようと思つた。

さうすれば、高殿部落の第二部井泉群が殘る。その中特に土屋氏の注意したeの如きは、土壇からの距離といひ、三山を一時に望み得る位置といひ、湧出量といひ、水質といひ、御井址と考へてその根據が充分である。そこで私は、この二つの井泉群のいづれにしようかと思ひつつ、鴨公村役場に寄つて小字を調べたかへりに、小學校長の吉田宇太郎氏に面會した。

そして昭和十年以來の久闊を謝したが、その時吉田氏は、昭和十一年度に於ける發掘調査の結果を話された。その或る機會に、私の發見した井泉あたりから以東、高殿部落にかけて、古瓦が發見せられない。そこで、小字には宮殿に關係あるやうな名があつても、その邊は宮殿ではなく、宮墻の外であつただらう、といふことを云はれた。

このことは、私の藤原宮御井址に結論を與へるのに大切な暗指になつたものである。その夜、私

は旅宿にあつて熟慮したすゑに、遂に高殿部落の井泉即ち、第二部のものを棄てることにした。さうすれば殘るものはやはり第一部の井泉といふことになる。この第一部の井泉は、昭和十年十一月十日に注意して、種々考察の動搖を經過しつつ二たび元に戻つたのである。

私のはじめて注意して、最後の結論に達した、この第一部の井泉が何故に世の學者の注意を牽かなかつたか。それに就いて數言を費したい。高殿常願寺の秀泉井等には傳説があつて、その秀泉井は現在の常願寺邸内でなく、元は三橋彌一郎氏邸にあつたといふ傳説もあつて、同一ではないが兎も角傳説は高殿部落内に殘つて居り、大宮土壇に關する傳説が、發掘調査の結果殆ど事實として證明せられつつあるのであるから、井泉に關する傳説も尊重せねばならぬ道理であり、吉田宇太郎氏の如きは、私の依囑により第一部の井泉を目撃して居られながら藤原宮御井との關聯につき毫も聯想してゐない。世の學者も亦同樣である。次に村民が此等の井泉に重きを置かない。他の田地の隅にある同一形式の溜水と同一視して居るから、その水質等に就いても細かい調査をしようとはしない。試に一二の古老に問うて見ても、溜水の如くに取扱つて、「あれはあかん」などといふ。さういふ關係でこれまで藤原宮御井として誰も顧みなかつたのを、私が顧みて、新説として學界に提出するのである。そして私の提出した、この假説的結論は、今後續行せらるべき發掘調査に據つ

てもつと積極的な根據を得るものと豫感せしめられるものである。

四

以上の事柄を約めて、說の結果のみを次に云はうとおもふ。

一、萬葉卷一（五二）の藤原宮御井は現在目擊し得る井泉を以て、その趾を想像し得るだらう。

一、日下發掘調査中の高市郡鴨公村大字高殿小字大宮の土壇を中心とする礎石等を藤原宮の礎石と認定し得るとせば、御井はその近く、宮墻内と看做すべき邊にあつたものと思へる。

一、鴨公村大字高殿小字メクロ、反別番號二一三、二一四、二一九に各井泉がある。其等が御井の名殘であるだらう。

一、此等の三つの井泉（前文の分類中、第一部abc）は、第一第三卽ちaとcとの距離が三十五間餘であるから、古へは三つの井泉が融合して三十五間程の一大井泉であつたであらう。縱ひabだけの融合と考へても十二間程の大井泉になるわけである。

一、その不斷に湧出した清澄な井泉、卽ち、『水こそは、常しへならめ、御井のま淸水』は、現在の衞生學的檢査によつても其を證明することが出來る。

一、この假說的結論は、今後續行せらるべき發掘調査に據り更に積極的な根據を得るであらう。

後記。　以上の中、藤原京についての記載には不備の點があり、既に公表せられた論文の結論記載の如きもまた不完成であつた。例へば、喜田貞吉文學博士の大阪朝日新聞、岩波歷史講座、夢殿等に公表せられた諸論文、足立康工學博士の大和志、史蹟名勝天然紀念物、夢殿等に發表せられた諸論文、田村吉永氏の大和志、大阪朝日新聞等に發表せられた諸論文等である。右の中、田村吉永氏の「藤原京に就いて」（大和志第三卷第十號）のみを抄記して、參考とする。田村氏の論文は從來の諸說記載が丁寧である。

○藤原京の廣袤

北京極　櫻井初瀨間を通ずる初瀨街道の一町南におく。即ち路東條里區、高市郡東鄕廿四條三町通以南

東京極　高殿村落の東方一町八釣高殿の境界線に當り、條里の三里の西二町通以西

西京極　四分鷺栖八幡宮の東北方所在の溜池の東堤防の南北線で、條理の一里東一町通以東

南京極　高殿南方の溜池の北堤防の東西線で、條里廿六條北三町通以北

以上を四至とした東西七町南北十二町の地域を占めるものである。

○藤原宮の地域

藤原宮の內裏及朝堂の位置について。平城京及平安京では共に唐の長安城を模して、中央以北に位置したのであるが、藤原宮では中央以南にあつたのであらう。即ち東から五町以南で恰も鏡池と俗稱する東當の坪池の一町分の南に接する小字を大宮と稱し、これより以南南京極路まで南北五町東西三町にて十五町分をば內裏及朝堂の地域と考へる。

鷺栖阪・鷺栖神社

現在四分の鷺栖神社は實は春日大明神であるから、大和志（享保丙辰刊）の、在四分今稱鷺栖八幡といふのと合はない。

然るに現在上飛驒にあるのが八幡宮であるから却つて大和志の記載に合致する。またこの上飛驒の八幡神社は元は八十米の標高を有する日高山の頂上に鎭座してゐたのを後年現在の地に移したもので、元の宮阯を古宮と稱し、明治初年迄祭典には必ずこの地に於てした。また神社の東方下に續いて昔から池跡といはれるものがあつて、この形跡を保つてゐる。これ等の地點は大宮の南方八町に當り、十米高く阪を爲しこの神社及池の存在する日高山の北面傾斜地である。よつて上飛驒神社は神名帳に記す處の鷺栖神社であり、元古宮の地に存したものとするもので、現四分の神社は上飛驒から流れ來たものと傳へるものも一つの傍證であらう。從つて北面傾斜地は氏族略記いふ處の鷺栖阪に當つべく、こゝに鷺栖池を求むべきで、現四分の鎭座神社を以て鷺栖神社に當つるは大和志の誤とすべきである。すると藤原宮の地は氏族略記記す處の鷺栖阪の北に合致するものと云へよう。

○

田村氏の說は大體右の如くである。藤原京の南京極は、現在の別所の北際に及んでそれから南迄は及んでゐないやうに解してゐる。そして、朝堂の南端がその南京極に至つてゐると解するから、私の發見した、第三部と第四部の井泉は、それぞれ朝堂の飮用水として役立つたものとも想像することが出來る。藤原宮殿、藤原京の廣袤等についてはなほ今後學說の移動があるべく想像せられるが、藤原宮御井阯の考證にはたいした移動的影響を來さない筈であるから、私の記載は大體にとどめて置く。此小論を作るに際し、土屋文明、藤森朋夫、石井庄司、吉田宇太郎、高安やす子諸氏、及鴨公村役場の助力を感謝する。昭和十二年六月二十七日、齋藤茂吉謹識。

附記。 私の文中『大安殿』とあるのは、從來の解釋による『大極殿』に等しい意味に使つてゐる。然るに、關根博士、足立博士、喜田博士共に、大安殿と大極殿とを全く別棟と解釋してゐるので、私の文中齟齬する點があると思ふから、そこをコントロールしつつ讀まれんことを希ふ。

二たび藤原宮御井に就いて

一

昭和十三年一月九日より、私は發熱臥床した。その間にたまはつた諸友の書簡類を月末に至つて整理したところが、その中に、大阪の上村孫作氏から一月十四日附で贈られた大阪朝日新聞奈良版（昭和十二年十二月二十二日）と、東京大森の足立康博士から一月十一日附で贈られた、「藤原宮の御井に就いて」（史蹟名勝天然紀念物第十三集第一號別刷）といふ論文とが入つてゐた。私は兩氏に感謝の手紙を出したが、體力衰へて意見を論として書き記すことが出來なかつた。その後も私の意圖を實行し得ず、上村氏から得た旱魃の材料などをも整理し得ぬうちにはやくも盛夏に入つた。今やうやく初秋の小閑を得て、此の備忘を書きしるすのである。

大阪朝日新聞奈良版の記事は、「齋藤博士の藤原宮御井は灌漑用の野井戸。足立博士の駁論出づ」、

といふ見出しで、次のやうなことが書いてあつた。

○目下同地の藤原宮址を發掘調査中の日本古文化研究所工學博士足立康氏は、「齋藤氏が千三百年間不斷に清澄な清水の湧出したとする藤原宮御井なるものは、近年村民によつて掘鑿された灌漑用の野井戸に過ぎない」としてその誤謬を指摘した駁論を近く發表することになり、兩博士を知る人の間にセンセーションを起してゐる。○齋藤氏が御井の名殘りとする三つの井戸につき調査したところ、第一の井戸は大正十三年の大旱魃の際村民の中浦忠太郎氏ほか三氏が灌漑用に掘つた野井戸であり、第二の井戸は四、五十年前に東某氏が同じ目的から掘つたことが判明した。第三のものも恐らく同様の原因で作られたものであらうとして、齋藤氏の說は全面的に成立し得ないとし、御井の調査は非常に大切なことであるが、それは藤原宮址の確定をまつて行ふべきものであらうと結んでゐる。

これは普通新聞の記事であるから、これ以上は分からぬが、足立博士が私の「藤原宮御井考」（昭和十二年八月文學發表）を讀んで、その刺戟を受けられたことは當然と解釋せねばならぬ。次に、足立博士の、「藤原宮の御井に就いて」といふ論文の方は、朝日新聞の記事よりももつと委しく、また博士自身の筆に成つたものであるから、私は直接この論文を讀みつつ、二たび私の意の存するところを記して置く方が便利だと思つたのである。それがやがて前論の補訂としても役立つわけである。

二

先づ、私の「藤原宮御井考」といふ小論はその研究方法が妥當でなかつたといふ批難であるが、これは私自身も承認する。告白すれば、豐富な研究費と有能なる多くの助手と背景としての官の勢力と、少くとも十年の歳月と、さういふものをいろいろ豫想するならば、何とかなるだらう、ああも爲たいかうも爲たいといふやうな欲望も腦裏を往來したものである。けれども斯る事は現在の私にとつては夢想に過ぎない。私が人麿の歌を評釋して行くあひだに逢著した藤原宮御井につき、從來の言説に滿足せずにもう一歩具體化せしめようとしたのがこの小論であるから、謂はば人麿歌評釋の副産物のやうなものである。然から萬事が單獨で、二三私に同情せられる人々の助力をあふいだに過ぎぬのである。その同情者のことは次の末に記して感謝の意を表して置いた。さういふ具合であるから、これを古文化研究所の足立博士の場合と同一標準を以て論ずることが出來ぬのである。さうして學問の研究をば全體的に觀るときに、便利な立場にあるもの、不便利な立場にあるもの、官學にあるもの、私學にあるもの、孤獨的に野にあるもの、皆協力して學問を助長せしめるといふのが物の順序とおもふのである。

併し、それがかなはぬとすれば、先づ現在の私の狀況の許す限りに於て、論を立てなければならぬといふことになるであらう。特に、千數百年を經過した一つの井泉について考察するやうな場合

に、またその井泉といふのもただ一つの長歌以外に何の手がかりが無いといふやうな場合に、文獻も不足で何處から手をつけてよいか分からぬといふやうな場合に、その正しい結論が最初から易々として決定せられるといふことなどは先づ先づ不可能だと謂つていいのである。そこで先づ假說的結論を作り、その假說の動搖を或る程度まで許容しつつ進んで行くのもまた研究の一方法と謂つていいであらう。かの喜田博士の論文中に、『されば余輩は暫く右の臆說を提示して、徐ろに後の發見を待たうとする』（日本都制と藤原京）とあるのなどもまた、同樣の要求から出たものだと思ふのである。世人はよく研究方法の妥當不妥當などと輕々しくいふが、藤原宮御井考のやうなむづかしい研究題目について、完全無缺、つまり「einwandfrei」といつたやうな研究方法は先づ先づ當分はあり得ない。併し、假りにどんな方法であつても、「眞」に一歩でも近づき得るならば、それはそれだけで、一歩だけの學問上の業績と看做さなければならぬのである。また、「假說」の自由にして直觀的な妙味もおのづから其處に存じてゐるものであつて、喜田博士の第一の藤原宮阯考の如きは、今では改良せらるべきものであつても、先づその第一歩を出た業績といふ意味で不滅の價値があるのである。私の御井考の如きにしてもまた同樣である。若し私のこの言が不遜ならば許されよ。

三

次に、私の御井考について、まだ藤原宮趾が學術的に決定せられないのに、その宮殿のすぐ近くにあつたと云ふ御井の遺趾を求めるなどといふのは不都合だといふ批難である。未だ藤原宮の遺趾さへ正確に決定されぬ今日、たゞ徒らに御井の位置などを云々するのは甚だ穏當でない、といふのである。

この批難も一應もつともな批難である。誰でも云ひ得るやうな常識的批難である。けれども、私の御井考は、最初から藤原宮趾をあそこと推定し、大安殿東安殿西安殿などの位置もあそこと推定し、それ等を要約として、それ等を條件として成立つてゐる假說なのである。それであるから、若しそれ等の要約が誤であるならば私の假說は成立しないのである。その條件が破れるならおのづから私の說は破れるのである。よつて、若しもあの處が藤原宮趾で無いといふ立證さへ確實に擧げて呉れるなら、私は何時でも私の假說を撤回するのである。私の說は、藤原宮趾の研究は世の學者に願つて、差向き毫も容喙してゐるのではない。よつて、若し私の假說を根本から覆へさうとするならば、先づあの場處が藤原宮趾でないといふ實證を擧げて來られねばならぬのである。それをも敢て爲

し得ず、ただ『徒らに御井の位置を云々するな』、といふぐらゐな程度の批難では、單純幼稚で大局の批判としては價値の少いものであらう。

また、足立博士は、あの處は未だ藤原宮阯だかどうか決定して居らぬといふ。これも實際である。それを私は藤原宮阯だと推定して、御井の調査を進めたのであつた。そんならなぜさう推定して調査を進めたかといふに、大體の學的傾向がさういふ具合になりつつあつたからである。（推定といつてもこれはあへて足立博士のみが推定程度に考へてゐるのではない。現在ではどの學者も推定といふことを先づ念頭に置いて此處の藤原宮阯を論じてゐるのである）これは何も足立博士ただ一人の說に從つたのではない。木村一郎氏以來、奈良縣教育會で大正四年大宮土壇の上に持統文武兩帝の藤原宮阯顯彰の石標の立てられた以來、喜田、田村諸氏、その他の萬葉地理書をもまた參考しての末なのである。そのうち、特に喜田博士の如きは寧ろ足立博士の論敵の位置にある學者であるが、それでも喜田博士は、「藤原京再考」に於ては、大寶元年以前の藤原京は左右兩京の區別がなかつたとし、また大宮土壇傳說地の礎石等を、はじめ寺院阯と推察したのを、次のやうに改めてゐるのである。『近ごろ古文化研究所の手によりて發掘調査中の鴨公村小學校庭の遺蹟は、それが內裏であつたか、朝堂であつたかは暫く問題として保留するとしても、ともかくも其の建物の配置から、それが寺院として設けられたものでなく、恐らく當初に營まれた藤原宮の一部であつたと察せられる』と改める

に至つたのである。なほ、博士の「日本都制と藤原京」に於ては、「此の大宮土壇を中心とする地域も、其の地名から恐らく、内裏址であつたと思はれる。果して然らば所謂大宮土壇は大安殿址であり、其の左右にあるものは、恐らく東安殿及び西安殿の遺址であらうと推定せられるのであるが、勿論それも確ではない」と云つてゐるのであつて、いづれも昭和十一年の言説なのである。即ち私の立てた論の要約はさういふ諸家の説の上に立てられたものであつた。

それから、私の「御井考」は、足立博士等の學術決定論の出現を必ずしも待たぬのである。かういふ態度は不備といへば不備には相違ないが、喜田博士なども、「而もそれは余輩の到底待ち得べき所ではない」（日本都制と藤原京）と告白してゐるほどであつて、足立博士等の發掘研究とは必ずしも一しよでなく進んで居るのである。

以上の如き心持で、私は、「從來の文獻に據つて、宮殿の模樣を推すに、朝堂院内の北部中央に南面して立つ正殿は即ち大安殿（大極殿）で、其が大宮土壇の處の殿堂址として發掘調査せられた」と書いたものである。それについて足立博士は、「これは甚だ迷惑なお言葉であつて、第一吾々は未だ高殿をば藤原宮址と決定して居らず」云々と云はれるのであるが、これは私の文章中の、「として發掘調査せられた」といふのに迷惑を感ぜられたのであらう。然らば迷惑を感ぜぬやうに自由

に訂正せられてかまはぬのである。卽ち皆『推定』の二字を附加すればいいのである。實際「推定」に相違なく、私のいふ意味もそれなのだから、極めて容易なことなのである。私は御非の考察をば前言の如くに先づ要約を提げて出發したが、藤原宮阯についての考證は私自身では差當り爲てゐるのではないからである。

因みになほ一言を添ふるに、足立博士が私の小論につき迷惑を感せられたといふ條下の文中に、『吾々の立場としては、一切の先入主を去り、出來るだけ客觀的の中正なる見地から調査を行つてゐるのである』、『或る先入主のもとに發掘でも行つてゐるかのやうに誤解される虞もあるので』云云といふのがある。あの土地の發掘調査に際してのかういふ態度は一面には極めて大切なことである。發掘した礎石に一つ一つ先入見の牽强な意味を附けられては溜まつたものではないからである。また私は嘗ての足立・岸兩氏の報告を讀んで一たびもさう感じたことはなく、また斯く公言したこともない。そこで、「此は精細な學術的報告である」と云つてゐるのである。併し、足立博士等といへども、あの發掘作業を行ふに際し、『藤原宮傳說阯』といふ概念を意識に有ちつつ行つたに相違ない。ひよつとせば發掘の結果が藤原宮阯として符合するかも知れない。符合する方が都合が好い。實際の藤原宮阯だかも知れない、さういふ寫象がいろいろ複雜して博士の意識を往來したと考へる

のが順當であらう。卽ち嚴密な意味に於て、「一切の先入主を去り」などといふのは虚僞の告白と謂はなければならない。若しも一切の史的先入見、史的豫感を離れて、純的な發掘作業だけであるのなら、いくら精細に發掘作業を續行しても、永遠に、藤原宮阯であるか藤原宮阯でないかなどといふ結論には到達し得ないのである。また得る筈は無いのである。石は飽くまで永遠にただの石で、礎石といふ意味概念さへ附けられぬものである。況んや藤原宮の礎石か否かといふやうな問題に於ては、一語をも附加することの出來ざるものである。併し、其處に藤原宮阯の傳說といふ寫象、豫感、假說、推定を結合せしむることに依つて始めて、藤原宮阯か否かといふ概念にむかつて進嚮し得るのである。

喜田博士が古文化研究所の發掘作業について、『現に古文化研究所に於ても、之を藤原宮址なりとの推定の下に調査を進めて居られるのである』といふやうに書いてゐる。この「推定の下に」も、若し難癖をつけるつもりで讀むなら、一種の『先入見の下に』といふ風にも解釋出來る筈であつて、從つて足立博士に迷惑を感ぜしめる底のものとなるべきである。けれども私見によれば、喜田博士の書き方はこの儘で別に差支が無いのであつて、足立博士を輕蔑したり誤解したりしてゐるのでは無いとおもふのである。私の文章もまたこれに等しい。右は、いかにも言語の末梢に關することの

やうであるが、足立博士が私の小論に對した批難が既に如是である以上、一言の附加を必要としたものである。

四

私が小論中第一部の井泉を藤原宮御井の名殘だらうと云つたのは、第一部の井泉が藤原宮御井『そのもの』だといふ意味ではない。現在地表に見得る第一部の井泉が、過去千數百年前の藤原宮御井と、何等かの關聯、聯結卽ち „Zusammenhang" があるだらうといふ說なのである。假說(Hypothese)なのである。それゆゑ私は、『其等のいづれかが藤原宮御井と關係あるものと假定しつつ考證を進めて行つて、一定の結論に達しようと欲したのである』といひ、『現在の狀態から古代の狀態を推測する』といひ『種々空想しつつ』といひ、『藤原宮の御井との關聯を想像した』といひ、『藤原宮御井との關係を想像した』といつて居るのである。さうして、その『關聯』といひ、『聯結』といふのは、無論、『水文的關聯』を意味し、地下水、水脈の關聯を意味して居ることは言ふことを須ゐないのである。私の小論にむかつてただ難癖をつけるために、あら搜しをするために讀むのならいざ知らず、全體として私の意圖を汲み取つてくれる同情があるのなら、誰が讀んでもさう

受取れる文章なのである。

然らば、その『關聯』、『水文的關聯』とはどういふ意味であるか。第一部の井泉群は、現在では灌漑用の井戸である。これは現在誰でもさう言つて居るし、私もさう認めてゐる。ただそういふ人人（足立博士もまた）はただ灌漑用の野井戸としてのみ取扱つて、それ以上何等の史的意味を持たせないのに、私は過去に於ける藤原宮御井との關聯を持たせようとしたものである。『關聯』とはさういふ意味なのである。一部の學者等は、調査について、『愼重の態度』などと口癖のやうにいふが、私の假説が公表せられた今日と雖、ただの『野井戸』と稱して私の説を冷笑してゐるのである。そこで結論の差別は實に明白となつて來るのである。

次に、然らば、その『水文的關聯』をばどういふ具合に想像するか。藤原宮は既に千數百年の過去に屬し、特に藤原宮御井歌は持統天皇御造營の藤原宮殿建立のころの作と私には想像せられるから、若し喜田博士の假説の如く、文武天皇の慶雲元年に藤原宮が大擴張せられて、その時の宮殿が現在の醍醐小字長谷田の芝地だらうといふのが本當だとすると、その時既に藤原宮御井の觀念に變化を來して居たものにちがひない。それから奈良朝となり、平安朝となり、今日に至るまで、その御井の水が、或は地表から無くなつたり、或はある機會に地表にあらはれたり、多様の變化を閲し

つつ現在に及んでゐるものと想像せられる。そこで、私の調査の根本の考は、その藤原宮御井の水と水文學的に關聯を有する水が、ひよつとせば何等かの形で現在地表のうへに出現してはゐないだらうかといふのにあつた。そして第一部の井泉をば、推定大安殿との位置關係からして、藤原宮御井との關聯を想像したのであつたが、これは少し位置の移動するぐらゐは假説の性質上免れ得ないことで、例へば鴨公小學校建築の際に土壇の東方八九間のところを掘つて清水を得たといふ、その水なども、御井と關聯を有つと考へ得る一つの候補者なのである。

私の『關聯』といふのはさういふ意味なのであるから、第一部の井泉が現在は灌漑用の野井戸であらうが、大正十三年の旱魃時に新に鑿つたものであらうが、それはかまはぬのである。私の説の根據にこそなれ、否定する材料にはならぬのである。

次に、それならば、なぜ、第一部井泉の深さを計つたり、大きさを計つたり、水質を調査したりするか。答へていふ。これにはまたこれの理由が存じてゐる。私には目撃した井泉等のその時の狀況を出來るだけくはしく記載して置く必要があるからである。井泉などは、いつの間にどう變化するか分からぬものであつて、現に石見の伊甘池でさへ數年見ざるうちに樣子が變化してゐた。さうして見れば、藤原宮址としての學説の最も有力な大宮土壇に程近いところにある井泉につき、現在

の状況を記載して置くことがなかなか大切だと思惟したからであつた。これは後の學者にも必ず參考となると信じたからであつた。

五

前言は私の小論の内容を繰返したに過ぎぬか、それでも注釋として役立つであらう。それは私の小論に對する足立博士の批難中次のやうな事があるからである。

藤原宮御井は現在目撃し得る井泉を以てその阯を想像しうると云ふ前提のもとに、高殿附近に於て御井阯を探査されてゐる。しかしこの前提にも疑問がないとは云へぬと思ふ。元來人里にある井泉の類は必ずしも永久的のものではなく、一種の日用品的性質を帶びてゐるから、それが果して千年以上もそのまゝ舊位置を儼存しうるか否やは疑問であらう。勿論殘る場合もあらうが、堙滅する場合も亦決して尠くないであらう。

かういふ足立博士の文章であるが、いかにも無難な常識である。併し、かういふ當然過ぎるほど當然な常識に對しても、私は一言いふことが出來る。第一、前提とか要約とかいふものに、疑問が無いなどといふのは學問界に一つでも無い。それは通り一遍の常識世間のあひだに於てのみ辛うじて存續するに過ぎぬのである。私の場合はその疑問を或るところで押切つて、前提を先づ一つ立てたのである。「元來人里にある井泉の類は必ずしも永久的のものではなく」などといふのは餘りに通

俗的に當りまへのことである。そんなら、反對に千年以上もその關聯してゐる水が地表上にあらはれて『ゐない』といふ證據が何處にあるかといふと、博士は何もいへぬだらう。そこで遁辭として、『勿論殘る場合もあらうが』といふやうな注脚をいふに至るのである。『勿論殘る場合もある』といふことを認容するなら、なぜその事をば學問研究の一方法として『前提』として惡いのであるか、その事がなぜ前提となり要約となり得ないのであるか、私は、殘らぬ場合は假りに傍に置いて、先づ、殘る場合、何等かの形式でその關聯を考察し得る場合の方を以て、前提とし、要約としたのである。私が、『この推測は、藤原宮時代の井泉が現在まで續き湧き出でてゐるといふ要約のもとに成立つものであるが』と云つたのは卽ちそれである。なほ現に石見の伊甘池を以て類推上の補助實例としたものである。足立博士と雖、私の謂ゆる第一部の井泉が藤原宮御井の水と水文學上の關聯が全然無いとはどうして實證し得るか。これは永久に出來ないだらう。恰も現在の伊甘池が國府の用水と關聯無いといふ實證が永久に出來ないが如くにである。また、一つの題を以て研究せむとするとき、その前提に確乎不動な唯一の前提を用ゐ得る學者がゐたら、それは量り知るべからざる大學者であらずんばおめでたい愚物であらう。吾等が一つ事を研究する場合の前提は一つ二つでなく、幾つもの前提を用ゐ得ると謂つていいのである。

尤も藤原宮の敷地が其後連綿としてそのまゝ今日まで保存されてきたものであればいざ知らず、その遺址は既に荒廢し、或は田畑となり、或は宅地となり、今ではその位置すら不明であるやうな場合に於て、果してその御井が舊位置にその儘殘存しうることは、輕々しく認めがたいと思ふ（但し地下水に惠まれた土地ならば、その水脈に屬する井泉が何かの形で殘りうるに相違ないが、位置そのものは必ずしも不變であるとは限らない）。

から足立博士は云ふ。博士の通俗程度はいよいよ茲に著しいが、現時にあつて、「藤原宮の敷地が其後連綿としてそのまゝ今日まで保存されてきたものならばいざ知らず」などとは一體誰にむかつていふつもりか、まことにをかしなものである。また、『その御井が舊位置にそのまゝ殘存』などといふ文句も、ただの難癖のための難癖で、ひとの論文を讀破せざる證據でもあり、『そのまゝ殘存』などといふ語を平然として使ふ通俗性を暴露してゐるのである。水文學上「關聯」といふことを私の論文中に讀み得ない彼は、批難中に、『但し地下水に惠まれた土地ならば、その水脈に屬する井泉が何かの形で殘りうるに相違ないが』といふやうなことを云つてゐるのである。そもそもこの文句は、私の論文の要約上の骨子ではないか。それをば彼此難癖を附けつつ、「全面的」に私の説を否定するの何のといひつつ、私の口眞似の如きことをいふのはどういふ訣であるか。「地下水に惠まれた土地ならば」と彼はいふ。一體高殿地方は地下水に惠まれてゐるのかゐないのか、これは彼

の文中に明かに見えて、地下水の多いことを認めてゐる。『この邊は地下水が多いと見えると云つてゐるのが卽ちそれである。それから、『その水脈に屬する井泉が何かの形で殘りうるに相違ないか』は、取りもなほさず私の說の肯定では無いか。博士は橫からも縱からも私の說を打破らむと努めつつ、不用意の時に、私の說を認容してゐるのは、まことに愉快な現象と謂はねばならない。『位置そのものは必ずしも不變であるとは限らない』といふ文句に至つては餘り幼稚であるから、別に言葉を要しないが、位置のことをそんなに嚴密に彼此いふなら、藤原宮時代（然かも持統御治下）に刻刻に變化したともいひ得るではないか。私の考說は、そんな單純なものでは無いのだから、そのつもりで對せられたいのである。

六

私は井泉第一部井泉abcに就き、『藤原宮御井との關聯』につき聯想し、特にそのうちのabに重きを置いたのであるが、足立博士は、『今回博士が御井阯であると推定されたものは、實に大正十三年村人が新に鑿井した灌漑用の野井戸』に過ぎないと云はれ、なほ委しく次の如くに云はれた。

大變な誤があり、三つの井泉中、博士が最も重視され態々その水質の化學的檢査まで行はれてゐるaなるものは、實のとこ

る大正十三年の旱魃の際、その田の所有者たる高殿の中浦忠太郎及び三橋彌一郎・森井德藏の三氏が新に鑿井されたもので、即ち今より僅か十數年前の新しい野井戸にすぎないのである。これ即ち土地の古老が「あれはあかん」と云ふ理由であり、また吉田宇太郎氏や世の學者が問題にされなかつた所以でもあらう。この野井戸が田の東南隅にあるのは、高殿邊の地は西北に下降してゐるため、この位置に井戸を掘れば、それより湧水する水が（この邊は地下水が多いと見え井戸を掘れば水が湧き外へ流れ出すところがある）、自然田面を灌漑するからである。尙博士はこの井戸に就いて、「丸太、板を以て保護整理してゐる。此は耕作の關係行爲で、時期は三四十年前と推し得る」と云はれてゐるが、僅か十數年前に造られた井戸側でさへ既に三四十年の物と見誤られる一事から見ても、この種のものの調査は頗る愼重に行はねばならぬ事が窺はれよう。（因みに高殿附近の他の水田の隅にも、同形式の灌漑用の井泉が相當見受けられる。）次に博士がb及びcと呼ばれてゐるものは、aよりも古いものであるが、その位置がaと同じく矢張り田の東南の隅にある事や、またそれらの東側には條里制と一致する道が通つてゐる事などから考へると、これらもaと同じく、曾つて灌漑用に掘られた野井戸でないとは誰も保證し得ないであらう。一般にこの邊の田中に存在する同形式の野井戸を考へる際には一應この點にも留意して置く必要があると思ふ。要するに、小字メクロの井泉を藤原宮御井に擬定されるに當り、それが如何なる性質のものであるかに就いて、普通の調査をもされずに、輕々しく事を定められたのは、甚だ遺憾な事と云はねばならぬ。追記。其後判明したところによれば、小字メクロにある井戸bも今より四五十年前高殿の東氏が灌漑用に掘られたものである。

から足立博士は云ふのである。此批評はいかにももつともの言説であり、批評の内容としてもなかなか好いものである。而して、博士は私の假説を、全面的に否定しようとした批難の文であるが、よく吟味すると、私の說の增補として役立つ大切な材料が含まつてゐるのである。以

下、その事に就いて少しく記述して置くこととする。私は第一部井泉aをばその井泉中の丸太や板等を目撃して三四十年前のものと推測したのは誤で、實は大正十三年の作業であつた。併し、bの方は今から四五十年前の鑿井といふことであるなら、やはり私の大體の「感じ」は當つてゐた。私にはその當時二つの井泉の周圍をなす木材を科學的に調査することが叶はず、この二つの井戸を殆ど同時代ぐらゐに考へたのは、結論の錯誤を來たした本であるが、藤原宮御井との關聯を考察するうへには、鑿つた年代が二三十年ぐらゐ違つてゐたところで、そんなに大影響が無いからである。足立博士が、『僅か十數年前に造られた井戸側でさへ既に三四十年の物と見誤られる一事から見ても』などといふ末梢的難癖は、素通りして行つてかまはぬ程度のものである。

それよりも大切で且つ有益なのは、aの井泉は、大正十三年の旱魃時に、中浦忠太郎氏他二氏が共同して鑿つたものだといふことが分かつた點である。特に大正十三年の大旱魃時に當つても、其處のb（恐らくcも）の水が涸れず、またそれに加ふるにaといふ井を新に鑿つて灌漑用の水を得たといふ點にある。私は足立博士の此部分の批評を「批評の内容としてもなかなか好いものである」と云つたのはそのためであつて、あへて諧謔ではない。

そこで私は念のため、友人上村氏大村氏近森氏に依囑して當時の新聞を檢して貰つた。次は大正十三年夏の

記事である。

六月廿四日。「久し振りの雨。惠まれた田植。」〇七月三日。「悲鳴の渦卷。打續く旱天に。」中和地方では打續く旱魃に農村は擧げて困憊し、火のやうな悲鳴の渦卷を起してゐるが、溜池なく、天水にも惠まれぬ箇所は、まだ插秧さへ出來ず、ヘナ／＼の人力を機械力に替へ、半夏生を過ぎた昨今、借入發動機の爆音哀れに水揚喞筒から灌漑してゐる處もある。又插秧が終つた處でも、溜池は村の法度で拔かれぬため田地に小さなヒビが入り旱魃の悲哀を如實に見せてゐる處もある。高田町附近では此慘狀を地主に見せて早くも減石運動の活きた材料にしようとする火事泥的の手合もあり、ソコでもココでも天帝怨めしいの聲が漲つてゐる。〇七月四日。「黄金の雨降る、然し未だ降り足らぬ。」〇七月五日。「空梅雨でも悲觀するな　春日試驗場長談。」〇七月八日。「旱天が續くため西瓜は成績良い、大和西瓜の名を高めるため惡商人退治に懸命。」〇七月十日。「近く雨が降る。生晴雨計の豫言。」〇七月十一日。「此の天候も左程悲觀するに及ばぬ中耕と除草とを早めること。春日農事試驗場長談。」〇七月十二日。「待ちに待つた雨も遂に空梅雨で終つた。既往二十七年間第三位の近年稀な高温度で。」降るか降るかと待ち焦れてゐた梅雨期も遂に空梅雨に終つて十日に梅雨明けとなつた、八木測候所（[illegible]）の觀測による今年の梅雨期間中に於ける雨量氣温は左の通りで近年稀に見る高温と寡雨を示した。去年は梅雨中降雨甚だ寡く、旱天打續き、剩へ未曾有の高温で、農家は旱魃のため灌漑用水を得るに苦み、地方に依つては稻の移植不可能となつた所さへある。この現象は實に稀有のことで、今梅雨期中卽ち六月十一日より七月十日に至る三十日間の氣象を調査するに、六月十二日より同廿三日に至る間は降雨を催したが、その量極めて少なく、廿四日以後は晴天打續き七月三日に至り漸く降雨あつたが、これ亦その量僅かに十一粍（坪當り約一斗）に過ぎず單に地表を濡したと云ふだけに止まつた。爾後旱天續きで温度急激に上昇したのみである。以上の如く此期間中は年中最高雨期なるに拘らず、降雨のあつたは卅日間僅かに七日間を數へるのみで其

雨量合計亦百八粍（坪當り一石九斗七升六勺餘）に過ぎず、これを平年に比すると日數に於て八日間雨量に於ては百卅七粍六（二石五斗一升八合餘）の何れも寡少となる。次に既往廿七箇年間中最も寡雨は、明治三十年の一石二升二合餘で、大正二年の一石六斗一升四合餘これに次ぎ、本年はこれに次ぐ旱魃に當つてゐる。又一番多雨であつた明治卅八年に比すると、其五分の一にも當つて居らぬ。氣温は毎日の平均温度が平年に比し攝氏零度二乃至〇、五〇低温であつたが、七月に入り俄に上昇し毎日の平均温度は平年のそれに比し攝氏零度六分乃至四度四の高度を示し、日中最高は七月一日以後華氏八十六度以上を持續し、平年に比して華氏の四度乃至九度の高温を示し、昨年に比べると實に九度乃至十八度の高温であつた。〇七月十三日。「不良發動機を賣付ける、旱魃に惱む農家の足許に付込む悪商人跋扈。」〇七月十五日。「雨を待つ各地の模樣、水喧嘩や雨乞ひで大騷ぎ。」待ち焦れた梅雨も遂に空梅雨に終り、過般來連日旱天が打續いてゐる爲め、縣下の農家は稻本田の灌漑用水に不足を來し、中には挿秧未了の所も相當ある見込みで、農家は前途を憂慮し雨乞ひをなしてゐる所もあれば、水利紛擾を釀してゐる所もあるが、今各地の狀況を聞くに、磯城郡。耳成村方面は灌漑用水缺乏し既に田面に龜裂を生じ白土となつた箇所尠くなく、殊に同村大字十市の如きは飲用水にさへ缺乏を來して居ることとて困憊一方ならず、比較的湧出豐富な井水の供與を受けて辛うじて生活してゐる狀態である。又吉野郡十津川村方面……（以下略。）〇同日「地下水利用に依つて、今後旱魃が無くなる、大和平野を詳細に調査した、鈴木農商務技師談。」〇七月十七日。「雨が降らぬ、灌漑水の不足で各地の爭と雨乞。」〇同日。「喜雨が來た――が未だ足らぬ。」雨に餓えた縣下の農家は、過般來各地で雨乞ひやら水利紛擾やら大騷ぎをなしてゐたが、奈良地方は十五日朝より漸く雨氣付豪風加りて間歇的に黃金のやうな喜びの雨が降り、灌漑用水に不足を告げてゐた農家は滿面に喜びの色を漾はした。併し僅か地面に雨水の滲んだ位で燒石に水といふ有樣、物足らないこと夥しい。農家は今一雨を欲しいと天を仰いで祈つてゐる。（以下略。）〇七月十八日。「雨が來ぬか雨が！稻田に龜裂が生ずる始末。」〇七月十九日。「雨は未だ〳〵降らぬ、悲觀すべき測候所の觀測。」〇七月二十日。「茲四五日が運命、

畑作も殆ど枯死し旱魃の被害益多大。」(七月二十二日。「旱魃の被害甚大、其筋の調査に依る狀況」)、(七月二十三日。「旱魃と小作爭議、今から憂慮されてゐる」)(七月二十四日。「愈被害の增大する旱魃と螟蟲の對策。宇陀郡農會で率先着手」)(七月廿五日。「夥しい數に達する稻作植付不能の反別、近く當局で對策を發表」)、(七月廿六日。「旱害の對應策、夥しい農作物被害に對し縣當局發表」)、(七月廿七日。「雨が降らぬ、電力には影響ない、旱害に惱む各地」)(七月廿七日「被害益々甚大、五十日の大旱魃に農民は絶望の姿」(註。龜裂を生じた水田、灌漑に餘念ない農夫、の寫眞二葉あり)。(七月三十日。「當局も大狼狽、旱害救濟策のため急遽參事會を開く」)、(七月三十一日。「動力喞筒が大激增、今年の旱害を轉機に地下水利用に大努力」)(八月三日「喜雨が來た喜雨が、坪當一斗一升一合」)(八月五日。「本年の氣象　八木測候所觀測」。八木測候所に於ける七月中の氣象觀測によると、氣溫は明治三十年以來稀に見る所のもので、毎日平均溫度は平年より三度一以上高く最高溫度が平年より五度二以上高かつた。雨量は七月中僅に坪當り三斗餘で、既往二十七年間の最も少なかつた大正六年の七斗五升一合餘に比し尚その半分にも足らぬ。そして同月中の氣象は恰も大正六年と類似した所ある。雨量だけは同年より著しく減じてゐる。」)(八月六日。「旱害被害は實に五千町歩、殆んど手の盡しやうもなく只天を仰いで歎息」)(八月廿一日。「雨量一石四斗五升降つた〳〵。」」

如上の記事を見ても分かるごとく、當時の旱魃程度は著しく、"殆んど手の盡しやうもなく、只天を仰いで歎息"の狀態であつたことが分かる。かくの如き旱魃狀態の時に、aの水が湧きいでて灌漑に役立ち、然かもその水は現在も少しく手入保護すれば充分飲料に堪へるといふことは一體何を意味するものであるか、これ取りも直さずa（bもまた）の水の上等にして、決して輕蔑してはな

らぬといふことを立證してゐるのである。さうして此事はやがて、藤原宮殿の位置から考察して、藤原宮御井と何等かの關聯を有する井泉の水だとする私の假定說をば、ただ無下に否定してしまはれない事實を示してゐるものである。足立博士は私の說を駁擊せんがために、大正十三年鰲井の事實を調べられたのであつたが、この事は期せずして却つて私の說の補遺として役立つたことは私の主觀としては寧ろ感謝していいのである。

それから、足立博士はaやbをただ平凡な野井戶と解釋し、ほかの同形式の灌漑用の井と同一視してゐるけれども、これも旱魃時に於けるそれ等の水の狀態を各比較硏究したうへで、その特質、價値を論議すべきであるが、それは私も出來なかつたし、足立博士もまた毫もそれを實行してゐない。併し、未來に於て誰か私等に同情ある士の硏究補充を希ふのである。

なほ、足立博士は、『因みに高殿附近の他の水田の隅にも、同形式の灌漑用の井泉が相當見受けられる。』『一般にこの邊の田中に存在する同形式の野井戶を考へる際には一應この點にも留意して置く必要があると思ふ』と私に注意せられたが、これは既に私も明記して居る點である。『此は土地の習慣で、水を溜めるために掘つて置く井であつた』、(人麿評釋篇上卷)、『今でも土地の農夫は、旱魃のときのための溜水の如くに謂ふし、また他の田の隅にもさういふ性質の溜水があるので』、『然

ゐるに、此形式の井らしいものは、小學校の西の方にも北の方にも田の隅に見つかり、やはり溜め水で」云々と記してゐる。即ち足立博士の注意せられたことは既に一應考慮を通過してゐるのである。そして「村民が此等の井泉に重きを置かない」、ただの野井戸に過ぎぬといふものを私は顧慮したところが、足立博士等の態度と違ふのである。

七

吾々も、萬一出來る事なら、御井の位置を知りたいと云ふ念願に於いては、敢て人後に落ちぬつもりではあるが、未だ藤原宮の遺跡さへ正確に決定されぬ今日、たゞ徒らに御井の位置など云々するのは甚だ穩當ではないと思ひ、既に附近一帶の井泉を一通り踏査はしてゐるが、猶その問題にふれる事を愼んでゐるのである。然るに今回齋藤博士が考説を發表され、圖らずも大正末年の鑿井に係る野井戸等を以て藤原宮御井址であらうと高唱されるに至つたので、萬一世を誤る虞もあるかと慮り、茲に一言した次第である。

これは、最後の足立博士の感慨であつて、博士現在の感慨としてはさもあるべきことだとおもふ。博士等の發掘的研究は、いまだ中途なのであるから、それが完成せられたうへに、おもむろに御井考に著手せられるといふのはまことに喜ばしいことである。また「既に附近一帶の井泉を一通り踏査はしてゐるが、猶その問題にふれる事を愼んでゐるのである」といふ言も博士の主觀としてはその

とほりであらう。ただ客觀的内容の毫末も公にせられてゐないのを遺憾とするのみである。また、私の小論が、『世を誤る虞がある』と云ふが、廣い學界に私の小論の如き一假説が存在したところで、世を誤るの何のといふ訣合のものではあるまい。現に小論が發表せられていまだ半歳も經ぬのに足立博士の駁論の如きが出現したのを見ても分かるのである。若し私の小論の如き程度の假説が一々學界を誤るなら、學界を誤る學説の多きに堪へぬであらう。

そして、約めていへば、足立博士の私の小論に對する批評は、ただ消極的に否定する一面のみにとどまり、一事も一言も積極的方面に役立たなかつたことを遺憾とする。博士が愼重な態度云々と强調するものも、とほり一遍の通俗談にとどまり、それより一歩をも出でてゐないことを遺憾とする。それでも私は、私の假説の不備をば、足立博士等の發掘的研究によつて補つてもらひたい希望を有つてゐた。『この假説的結論は、今後續行せらるべき發掘調査に據つてもつと積極的な根據を得るものと豫感せしめられるものである』と書いたのはつまりそれである。希望は私の説の不備を補正して貰はうとする希願であり豫望でもあつた。そしてかかる希望はあへて私一人のみでなく、他の學者もまたさうであつた。例へば、『目下實施せられつゝある古文化研究所の發掘調査がますます進捗するに於ては、實地よりして更に之を確め得るの希望』、『或は其の發掘調査の結果を待つて』、

「尚是に就いては古文化研究所の發掘調査が望ましいものである」、「いづれ古文化研究所の發掘調査によりて其の實相か明かにせらるべく、余輩は之を待つて後更に考へて見たいと思ふ」、「是等は假定說の範圍を脫せざるものである。更に現在の發掘調査の進行によりて、考究を重ぬべきものがあらうと信ずる」（喜田博士）等の如きである。私の御井についての考察の如きは、礎石から殿堂を考察する場合よりももつと流動的でありもつと不安定なものであるが、それでも私は現在の私としては實行し得ない發掘作業といふものに幾分の手がかりを空想してゐたのであつたが、今は差向きその空想を廢棄することとしよう。

最後に、足立博士の文中、「未だ藤原宮阯が學術的に決定されてゐない今日、その宮殿のすぐ近くにあつたと云ふ御井の遺阯を求められんとする」といふのがある。この、「その宮殿のすぐ近くにあつたと云ふ御井」とはどういふ根據によつたものであるか。萬葉集の藤原宮御井歌だけでは、「宮殿のすぐ近くにあつたと云ふ」解釋にはなり得ないのである。そこで從來、鷺栖森近くといひ、或は傳說阯南方の高殿といひ、或は常願寺境内といひ、まちまちになつて居るのである。「御井」は「御舍の清水」だと解しても、その御井の位置について論議すると、さういふ具合になるのである。ただ萬葉集燈に、「此藤原ノ御井といふは、宮中にありける井にや」とある想像は、宮中にあつた井

だらうといふのである。さういふことを種々顧慮して、私は、『御井はやはり、大安殿の近くの宮中にあつたので、常願寺或は鷺栖神社の方では無かつたらうと空想しつつ』（柿本人麿評釋篇上卷）と云つたのであつた。それが大體の基本となつて、「御井考」の如き小假說となつたものであるが、若し足立博士が、私の意見以前に、何等かの證據によつてさういふ考になられたのだとすると、その事を明示せられむことを希望する。

以上で大體私の云はむとするところは云つた感じがする。おもふに、私の「藤原宮御井考」の如きは、多くの要約のもとに成立つた一つの假說であるから、その要約が覆へるならば無論私の假說は成立たない。これは假說の性質上、おのづからさういふ歸結をとるべきものなのである。また將來實證的根據が無く、却つて否定的根據がどしどし出現するやうなら、無論私の假說は成立たない。さういふ場合には何時でもいさぎよく撤回すべき性質のものである。また將來、私の假說よりももつと道理に叶つた假說が出現し、それが繼々に實證せられるやうな場合があるなら、私は喜んでその說に從ふ覺悟を持つてゐるものである。筆を擱くに臨んで足立博士の健康を祝する。

（昭和十三年九月上旬記）

「藤原宮御井考」追記

一

私は「藤原宮御井考」に於て、第一部井泉のaとbとの關係に就き、『abと二つ並んでゐるのは同一系統の水脈であるらしく、古へはこの二つは融合して一つの大きい井泉であつたらしいこと等、種々空想して、その根據としたのであつた』と書いた。併しこの同じ系統の水脈云々は推測に過ぎぬものだから、それを實際に證明する方法が無いだらうか。シユリヒター氏の裝置を用ゐて、電解物鹽化アムモニアの如きの流入により電流上昇の實驗方法もあるが、私の如き狀況にあつてはその實行がむづかしい。何か現在の私に出來る簡單な方法は無いだらうかとおもつてゐたところが、偶昭和十三年七月十七日中谷宇吉郎教授を通じて北川久五郎教授の業績を知ることを得た。

昭和十四年五月十一日、「藤原宮御井考」の地に行つた。（高安氏同道）井泉bの水を試驗管に入れ、

それに一%硝酸銀水を滴下して痕跡白濁といふ結果を得、これを豫備試驗、對照試驗とした。次いで食鹽二升を投入し、約三十分の後、同様の試驗にて著明白濁の結果を得、それから四時間を經たのち、aの水につき同一試驗をしたところが、やはり著明白濁の結果を得た。次にcの水について同様の試驗をしたが、白濁の程度が著しからず、やはり痕跡の程度であつた。

北川氏法を私はもつと簡略にして使つたのであるが、以上の結果に據ると、bとaとは同一地下水であること、またその地下水はbからaに向つて流れてゐるといふことが分かつた。同時にcも以上の二つの井泉と同一地下水で、cの水はbに向つて流れてゐると略推測して誤が無いだらうといふことも分かつた。つまり、私が前の小論に於て想像したことが、大凡これで實證せられたことになる。

北川教授の實驗では、距離二十六米を達するのに約二十八時間を要してゐるのに、私の場合は距離二十米を達するのに、四時間ぐらゐであるのは奈何といふに、この地下水の流速は大體ダルシィの法則に從ふものであるが、滲透流速の場合の砂礫の透水係數は砂礫の狀態によつてきまるものだから、私の場合は、流通速度の比較的大きい要約に置かれてゐるのであらう。これももつと專門學的に檢討すべきであるが、これは現在の私に出來ないのはいかにも殘念でならない。致し方がない

から未來同學の士の同情を豫想して、私は大體の結論をここに書き記すにとどめねばならぬ。

二

私の「藤原宮御井考」では、現在の鴨公村大字高殿小字メクロの井泉abcが、藤原宮御井と「關聯」を有つてゐるだらうといふ假說なのであつた。

昭和十四年五月八日(九日附)の大阪朝日新聞夕刊に、藤原宮の全貌が六ヶ年の探査で闡明したといふ記事が載り、それを私は備後布野で讀んだ。そこで私は十一日午後鴨公小學校に校長吉田宇太郎氏を訪ひ、その後の發掘調査について聽くことを得た。卽ち既に知られた、大極殿址、西殿堂址、東殿堂址のほかに、十二堂址の發掘を完成し、なほ大極殿(大安殿)より正南約百二十五丈にあつて桁行五間八丈二尺梁行二間三丈四尺の南門址をも探究し得た。この宮殿の廣袤南北五町足らず、東西三町足らずである。なほ、南門址から東へ廻廊が延び、それからそれが北へ延びて根石が絶えてゐる、そのあたりに東門があるのではなからうかと推測せられてゐた。現在の藤原宮址探究の結果は大體右の如くだといふのである。

さて、藤原宮の範圍は右の如くだとすると、私の記載した井泉abcは大體東門外、及び廻廊外

に位置することとなる。若し、廻廊の外部に宮墻があつてそれがどういふ風になつてゐたか私には好く分からぬし、東門の位置と考へられる處から、北の方の廻廊阯がいまだ證明せられぬから、餘り積極的には云へぬが、若しその廻廊が無ければ、その井泉は或は墻の內にあつただらう。併し、先づ廻廊は有つただらうと推察する方が穩當だから、さうすれば私の記載した井泉は恐らく東門の外に位置することとなる。從つて宮墻の外といふことになるであらう。

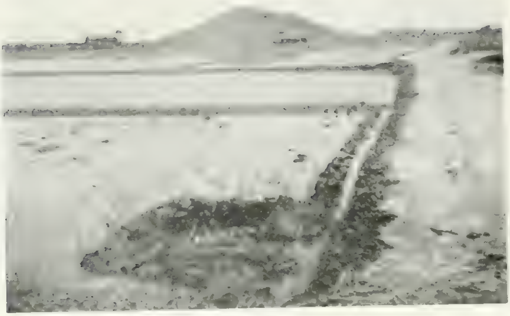
私の御井考では、なるべく御井が宮墻の內に位置することを欲したのであるから、御井は現在の井泉（a b c）と關聯しつつ、もつと大極殿阯の方に接近する方が都合好いのである。

昭和十年に私が吉田宇太郎氏に會つた時、校庭に清水の湧く處があるといふ話をせられたことがある。それを昭和十四年に會つて念を押したところが、それはかういふことである。鴨公小學校建築の際、壁土をねるのに初のうちは役場の近くの貯水池の水を使つてゐた、併しそれは距離があつて不便なので、試に井を掘つて見たところが、噴き出でるやうな勢で水が出た、それが話の校庭の一處に清水の湧く處といふのであつた。さうしてその位置は、大宮の土壇卽ち大極殿阯と推察し奉る處の、その際（その際は巖石である）から東へ七間程離れたところである。その井は今となつては餘計なものだから埋めたといふが、吉田氏は今でもその湧き出でた清水のことを想起して話せられ

るのである。

私は今度もいろいろに考へた。その井（今は埋めた）が若しも御井と關聯があるならば、大極殿に近いのであるから、位置としては却つて都合が好いこととなる。さうして恐らくその地下水は私の記載した井泉とも相通じてゐると想像することが出來るならば、實際の御井は、宮殿の墻内に於て、最も都合のよいところに、說の移動を行ふことも亦可能なのである。前にも云つた如く、かういふ性質の研究には、假說の變動などは當然のことなのである。併し大體に於て私の藤原御井考の說はさうひどい動搖は來さない。

私は御井考で、『この假說的結論は、今後續行せらるべき發掘調査に據つてもつと積極的な根據を得るものと豫感せしめられるものである』と云つたのは、やはりこの場合にも當嵌まるのであるが、それも發掘調査を指導する人が、學問を好み、學問に忠實なる場合に、その意味が甚深となることは言ふことを須ゐないのである。（昭和十四年五月十四日夜）



第一部（a）耳成山



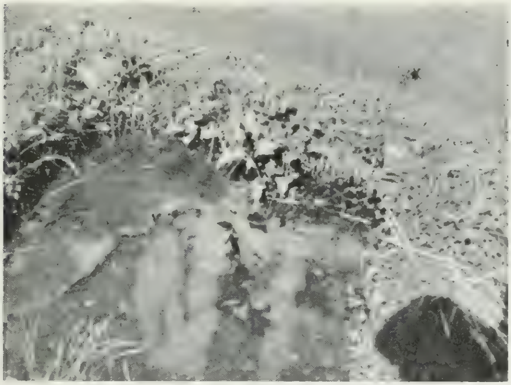
第一部（b）傳藤原宮址土壇の森・鴨公小學校



第一部（c）土壇の森・鴨公小學校・耳成山



第一部（a）土壇の森・鴨公小學校



第一部（a）水中狀態



第一部（b）水中狀態



第二部（a）耳成山（昭和十二年四月）



第二部（a）耳成山（昭和十二年五月）



第二部（a）土壇ノ森・鴨公小學校



第二部（b）高殿部落内



第二部（b）高殿部落内



第二部（c）

第三部（a・b）土壇の森・耳成山・高殿部落



第三部（a）



第三部（b）





第四部（a）別所八幡森（右）・耳成山・土壇の森（その前）



第四部（a）日高山



第四部（a）日高山



第四部（ち）香具山



第四部（り）日高山



第四部（ぬ）別所八幡森（右）・上壇の森（その左）・耳成山（その後方）



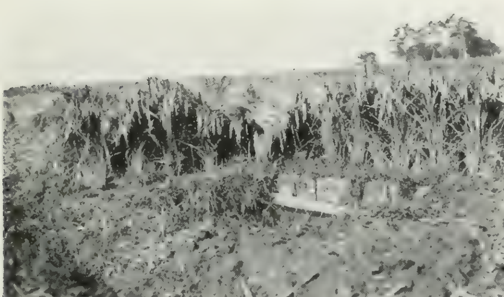
常願寺井（昭和十年十一月）



第一部（b）（昭和十年十一月）



第一部（a）（昭和十年十一月）



第一部（a）土壇の森（昭和十年十一月）

人㢧地理踏查錄

備後・石見・讃岐・伊豫・淡路・大和

一

昭和十二年五月十二日土屋氏夫妻同道東京を立ち、十三日備後布野に著き、十四日中村家新婚の賀筵にのぞんだ。翌十五日朝土屋氏夫妻と共に布野を立ち、赤名を越え、石見邑智郡濱原を過ぎた岡の上の畑に立つて、はじめて湯抱の鴨山を見た。粕淵の津目山からずつと山續きのやうになつて見えてゐるが、實はその間に谷と國道筋とがあるわけである。なぜ一見して鴨山だといふことが分かつたかといふに、その隣りの大釣山と共に植林して形が稍變つてゐたのと、前以て鴨山の寫眞を撮つてもらつて、その大體の形を知つてゐたためである。此處から遠望すれば、鴨山はさう高くはないが、よい形の山だといふことが分かる。湯抱湯谷に行つて其處で土屋氏夫妻とわかれ、土屋氏夫妻は大田から山陰の方へ行かれた。私は靑山旅館に入り、それから鴨山の寫眞を撮りに歩いた。

二たび粕淵の方まで行き、粕淵小學校長山田儔、川本小學校長舟木賢寛の兩氏に逢つて、相携へて鴨山の遠景を見て歩き、粕淵の龍眼地を見て歩いた。ここの龍眼寺址といふのは、あまり古い遺址でもないやうであつた。その夜は舟木・山田二氏と共に湯谷の鴨山について談合するところがあり、粕淵小學校敷地出土の土器につき、また鴨山の麓から粕淵村役場吏員の拾つたといふ土器につき、湯谷入口の千人塚につき、種々有益な話を聽いた。前の小川には河鹿がよい聲をして鳴いてゐることと江ノ川と同じである。

今日の午後、溫泉の出るところを見た。溫泉は炭酸鹽類泉で、谿流の岸に幾ヶ處も湧いてゐて飮めばラムネのやうな味がしてゐる。黃褐色の沈澱を有つのは鐵を含んでゐるためで、この特質はずつと川上、つまり鴨山の近くまで認めることが出來、暗綠の水綿が靡いてゐる特色もやはり川上の方まで探求出來るのを見れば、この邊の稍ひろい範圍に溫泉の出る傾向があるものと見える。安濃郡の川合にやはり炭酸泉が湧き、同郡の野畑、小屋原等にも微溫泉が湧くといふから、三瓶山を中心としてさういふ關係があるものと見える。湯抱の湯は神經痛・僂麻質斯に利くといふので、石見は無論出雲備後安藝の方からも湯治に來る人がある。ただ溫泉の量が豐富でなく、また溫める設備を要するので、遊山の客よりも療養の客が大部分を占めて居る。

この谿流の岸、谿流の中に湧き出る微溫湯泉と人類との關係は、相當に古く、或は人麿時代まで溯らしめることが絕待不可能とも謂ひ得ないであらう。さうして、その近接地の粕淵から出土した土器のこと、鴨山近くから拾つた土器のことなどを念頭に置いて考慮する時に、そのあたりに部落をなした氏族は恐らく、この溫泉と一定の生活的關係を有つたのではなからうかと想像することが出來る。また、人麿歌集に、「君がため浮沼の池の菱採むと我が染めし袖ぬれにけるかも」(萬葉卷七、一二四九)とある歌が、三瓶山の裾野にある現在の浮布池だとすると、何かその邊と人麿との關係があるものと看做さねばならず、その三瓶山に程遠からぬこの湯抱の地、それから湯抱の地と人麿との關係が絕待にないと否定してしまはれないものがあるやうにも思はれるし、その湯抱にある鴨山を人麿臨終の時の歌の鴨山と密接な關係あるものと考へても、そんなに妄斷ではなからうとおもふのである。いづれにしても今年發見したこの鴨山をば大切に取扱はねばならぬ等、いろいろなことが意識をかすめつつ私は眠つたのであつた。

二

五月十六日　日曜、晴。此處まで來たついでに、私の「辛乃崎考」と密接の關係ある唐鐘浦をもう

一度見ようとおもつて、午前七時二十一分湯抱發の省營バスで出掛けた。八時十八分大田著。八時二十五分發下り汽車に乘つた。八時四十五分仁万驛を通過した。仁万は昭和十一年六月から町になつたさうである。かういふことも一種の感慨があるので、「柿本人麿總論篇」を書いたとき、陸地測量部地圖に都野津村とあつたのが都野津町になり、大和の町村にもさういふ變化はいつのまにか行はれてゐるのであつた。九時四十五分下府（しもこふ）著。それから國分村大字唐鐘に行つて、戸別のやうに訪うて爲事をしてゐる翁媼或は若者に、この村にカラといふ音のつく土地が無からうか否かをたづねた。この質問は既に二回ばかり友人に頼んで行つて貰つたものだが、今度も念のため質問してまはつたのである。併し結果は陰性であつた。即ちカラといふ音の附いた場處は無い。

ただかういふことが分かつた。唐鐘にある猫島のことを『前のトウの島』といひ、犬島のことを、『後ろのトウの島』といひ、これは漁師のあひだだけの通用語で、鯕鰍（しいら）などを漁するとき、沖からの日標としてさう呼んでゐるさうである。これは『唐鐘』の『唐』であらうか。それからもう一つ『トウの島』といふところがある。これは金周布にあるので、山越をしてそれを見に行つたが、岬の向うかげの、二三軒人家のある處の、其處の濱に近い扁平な巖石群を『トウの島』といふのであつた。これもどういふ字を當てるか分からぬが、兎に角『トウ』の音が殘つてゐる。私はこれを唐

鐘（唐金）の唐だとし、唐金の唐は、唐茄子、唐團扇、唐瘡、唐がらし、唐寺などの唐で、もとはカラといつてゐたのを、中ごろから何でもトウといふやうになつたのだらうと想像してゐるのである。青銅のことをカラカネ（唐金）といふ、あのカラカネであつただらうと想像するので、兎に角「トウ」といふ名詞の音のあることを知つたのは今日の收穫であつた。

それから暫く歩いて來て、疊ヶ浦、千疊敷で休息し、辨天、賽の河原の洞窟を見た。この邊の荒磯で昆布若布のたぐひが採れる。また海苔も採れるといふことを聞いた。石見の海産物は唐鐘あたりには限らぬが、唐鐘あたりでも採れるといふことが分かつたのも今度の旅の收穫であつた。それから昭和七年三月文部大臣指定の、史蹟名勝天然記念物の説明として、「石見疊ヶ浦は大字國分の海岸にあり。臺地性を帶びたる第三紀丘陵は海に臨みて高さ二十メートルの波蝕崖をなし、崖下に千疊敷と稱する廣さ三町歩に餘る隆起海床をなす。明治五年二月の濱田地震の際に隆起せるものにして、有史後の隆起海床として模範的のものなり」とあるけれども、明治五年以前の書物にこの疊ヶ浦の繪圖のついた書物があるから、明治五年に隆起したといふのは、もとあつたのがなほ隆起したと解釋すべきもののやうである。

唐鐘を去つて私は下府を訪ねた。さうすると、廣島濱田間を通ずる廣濱線といふ鐵道工事がはじ

まつて居り、伊甘池を中斷して石垣がつまれ、様子がまるで變つてゐた。また石見國府址といふ標石も位置がかはつて神社の境内に建替へられてゐた。史蹟といへどかくの如くに變化するから、一度見たものはなるべくくはしく記載して置く必要がある。幸ひ私は拙著の「柿本人麿鴨山考補註篇」で、伊甘池の寫眞を載せて置いたから、後の人々の參考となるだらうとおもふ。

午後一時四十五分上り汽車に乘り、三時十一分大田着、それから省營バスで湯抱に歸つた。それから獨りで鴨山を見に行き、めら谷川に沿うてずつと奥深く歩いて見た。其處の道に處々敷かれた石の具合を見るに、君谷村の別府へ通じたと云はれる如く、もとは相當の人どほりがあつたものと想像せられる。それらの石は恐らく徳川時代ぐらゐのものであらうが、想像を恣にすれば、時代をもつと遠く溯らしめることもまた不可能ではない。鴨山へ行く途中の澤のところに女の子が數人遊んでゐて虎杖の嫩いのを採つて食べてゐたが、私が通り過ぎてから暫くすると、「ああそれなのにそれなのに」といふ俗謠を聲をはりあげて歌つてゐた。女の子等は學校に於て此唄をうたふことは戒められてゐるが、かかる山間では誰憚ることなくうたふことが出來て、それを實行してゐるのを私はあはれにおもつた。

植林は、昭和十二年植栽、面積三〇ヘクタール、樹種アカマツ＝三九〇〇〇本、ヒノキ＝二一〇

〇〇本、スギ＝五二〇〇本と記してあつた。鴨山の東の谿を鳴瀨といふ。カミゼンチョウ山、シモゼンチョウ山かあり、そのあひだを通つて安濃郡佐比賣村に行くことが出來る。鴨山も大釣山も只今は植林せられて、なまなましい新しい感じであるが、その麓を流れるめら谷川の様子などから見るとまことに古い感じのする山である。私がこの山を見つけ、けふ日のあたり此處に居るといふことも不思議な縁と謂ふべきである。

その夜、湯抱の果瀨辰一氏にあひ、鴨山あたりの様子をいろいろ話してもらつた。果瀨氏は植林の爲事にも雇はれ、山のことには精しい人である。

三

五月十七日（月曜、晴）。省營バス湯抱午前九時二十分發。十時三十八分赤名著。乘替、赤名十一時發。十二時二十七分備後十日市著。藝備鐵道、午後一時二十二分十日市發。三時二十二分廣島著。糸崎行三時四十五分廣島發。五時四十分糸崎著、乘換、五時四十三分糸崎發（東京行）、七時三十四分岡山著、乘換、七時五十三分岡山發（宇野行）、八時四十八分宇野著、汽船八時五十七分宇野發、九時五十七分高松著、十時十分高松發（琴平行）、十時四十五分坂出著。海岸の紅葉屋旅館投宿、間

もなく絃歌の聲は止んだが、蚊がしきりに襲ふので蚊帳を吊つてもらつた。

五月十八日（火曜、曇、小雨）。午前八時小船をやとつて、砂彌島を見に行つた。此は人麿の長歌、『讃岐狹岑島視二石中死人一作歌』云々の狹岑島であつて、現在は讃岐國仲多度郡與島村大字砂彌島である。船を榜いで行くともう遙か向うに、小さい扁平ともいふべき島が見える。それが砂彌島（沙彌島）である。近づくと磯は大きな巖石がむらがつてゐて、人麿の歌の『石中』云々を偲ばしめる處が多い。また石垣を積んで岸を修理した鹽田がある。この島について中河與一氏がくはしく考證し、川田順氏筆の柿本人麿碑が建つた。その右側面に中河氏の撰文がある。人麿が人屍を見たのは或はその邊であつたかも知れない。その近くに沙濱があつて上陸することが出來る。それから島の方へ入りこんだ處に鹽田があるのである。いま鹽濱といふが、これは元は東濱といつた。此處にも舟が泊てたものであらう。それから西浦（西濱）がある。これは兩側が岬でそれに保護せられた形の沙濱で、目下舟は多く其處に泊てる。私等も其處から上陸した。丁度麥の秋で、曇り日の森に山鳩などが啼いてゐる。目下人家三十戸ばかりあり紅瓦屋根の別莊風の家もある。氏神藏王權現は小山の上に鎭座してゐる。楢櫟の林もあり竹林などもある。小學校もある。理源大師の大師堂、井戸もある。私は西浦から二たび舟に乗り島を一周して、坂出に歸つた。砂彌島に關する考證は大體中

河氏の文に讓るが、人麿等がこの島の荒磯に廬したといふのも、東濱とか西浦とかいふ處に上陸したものに相違ない。そして偶溺死人のあることを知つてああいふ歌を作つたものであらう。卽ち最初からああいふ巖石の多い處に舟をとめて其處に宿つたのではあるまい。ことに、うはぎ(嫁菜)が咏みこんであるのを見てもさうであつただらう。

次になぜ人麿はこんな小さい島に立寄つたのであらうか。この島に特に淸い水でも湧いたか、或は何か特別な信仰上の關係でもあつたのか、この島は山でなくて住み好いのでもあつたのか、種々の聯想が湧くのであるが、けふ人麿が作歌したこの島にみづから上陸して、親しく見聞したことを私は滿足におもつた。それからまだ時間があるので理髮したり、午食を濟ませてから東京の諸友へ繪ハガキだよりを書いたりした。私の撮つた砂彌島の寫眞二三を本篇に入れて置いた。

中河與一氏の考證は、「佐美島考」(雜誌ごぎやう。昭和十一年十月・十一月、十二年一月)に載つてゐる。砂彌島は現在面積十三町七段八畝、人家三十戶、周圍二十町である。二三の古墳もある。中河氏は砂彌島の西海岸に上陸し、舊家の溝淵氏を訪ひ、人麿岩といふ名のついた岩が東海岸にあることを聞き、それから考を進めて行つて、人麿の歌の人屍は東海岸に漂著したのであらうといふ結論に達し、昭和十一年十一月二日其處の推定した場處に人麿碑を建てた。表面は川田順氏筆で「柿本人麿碑」、側面の撰文は、「文武天皇の大御世、柿本人麿、中之水門よりこの島に航海し來たり、長歌一首短歌二首を作る。中之水門は今の中津附近なるべし。途上海路の風色を讚歎し、この島に廬りて石中の死人を視、作歌す。惻隱の心底、哀烈

の神韻共に古今に絶す。地を卜して今その記念碑を建つ、人來たりて懐古し、わが民族の血統を思ふべし」昭和十一年十月一日、中河與一識」といふので、佐佐木信綱、川田順、萩原朔太郎、前川佐美雄、保田與重郎の諸氏が出席した。中河氏の考によると、人麿は筑紫からか或は鞆の津あたりから此島に航したものゝ如く、京へ歸る途上のものだらうといふことになる。

午後二時五分發の汽車で松山へ向つたところが、奇縁にも石井庄司教授と一しよになつた。石井氏は松山に講演に行かれるところであつた。二人は萬葉集の歌の話をしたり、埴安の池のことを話したり、三津濱と熟田津の關係を話したりして退屈もせずに松山に著き石井氏と別れた。三津濱はミツガハマともいひミツハマとも云つて既に一定してゐない。

松山では赤十字病院長酒井和太郎博士と永井姉妹に會つた。酒井博士は私の大學の同級生であり、虚子門の俳人默禪である。永井ふさ子さんはアララギ會員である。松山は正岡子規先生の生地であるために、常々から私のなつかしく思つてゐた地である。松山では城山、中の川子規舊居、正宗寺等を見た。城山には群鳥の聲がして、夜も夜鳥が啼く。中の川は石手川の水を引いたもので清い水である。正宗寺には子規と鳴雪の墓があり、子規の遺物がいろいろある。日本新聞入社の時の絹の羽織、敷布團の地、上布團の地、羽布團の地などもある。東海紀行の原稿、書簡等、「病牀をめぐる五人の雜煮かな」といふ俳句等。それから漱石舊居をも見た。二階は漱石（六疊に三疊）、階下は子

規（六疊に四疊半）。赤十字病院を見た。病室の廊下に注意書が貼つてある。『病客の爲め廊下を靜かにお歩き下さい』。城山の天主閣に上つて見るに、熟田津は、『今の古三津村三津濱等の舊名なり』と地名辭書にもあり、大體その説が有力であつたが、近時道後温泉に近い山寄りの地、御幸寺山の邊だらうといふ説がある。酒井博士の世話で道後温泉八重垣旅館に宿つた。道後では三等類の湯（一等靈の湯、二等神の湯、三等養生の湯）に入つた。伊社邇波岡、湯月八幡宮（今伊佐爾波社と云ふ）、寶嚴寺（時宗一遍上人開基）等を見た。松前女（賣魚婦）。鯛の鋤燒（金竹旅館）。草鞋一足三錢（湯太鼓の音）。大正十年三月に私は長崎を去つた時、別府から紅丸に乘り、高濱から道後に來て一泊し、松山に一寸立寄つて直ぐ高松に向つたのであつたが、記憶がもはや朦朧としてゐた。以上十八日十九日二十日の三日間松山及び道後滯在。

四

五月二十一日（金曜、晴）。午前九時五十五分松山發。多度津一時二十一分發。琴平一時三十九分著。琴平行の汽車の中から象頭山がもう見える。停車場から徒歩、鳥居、左右賣店、石段幾千。私は流汗淋漓、氣促迫、辛うじて拜殿にいたり、參拜祈願し、私ののぼるのを途中で追越した海軍軍人

の一隊は、私が未だのぼりつかぬのにもう參拜を了へて下つて來るのに會つた。金刀比羅宮は金毘羅大權現を明治維新に改稱したものである。祭神大己貴命、崇徳天皇を配祀し奉る。私は東北の山村に稚くしてこの靈祠の名を聞き、五十六歳にしてはじめて參拜を遂げた。

午後三時五十分琴平發(高松棧橋行)。五時十一分高松著。五時三十六分高松發(汽船)。六時四十五分宇野發、八時岡山發、十時二十分加古川著、高砂町石寅旅館投宿。

五月二十二日(土曜、晴)。高砂の松といふ老松も稚くして聞いた有名な松であるが、年老いて枯れつつあつた。舟をやとひ人麿の歌にある『加古島』を想像しようとした。私はあの歌をば加古川よりも西の方から來て加古を東の方にのぞんだものと解釋してゐるから、舟を西の方に漕がせてその趣を見た。漕ぐといつても今はモーターでやるから非常に便利である。これは寫眞を撮つて置いたから分かるとほり、稻日野をば加古川以西までひろがつてゐたと解するには、小山などが續いてただの平野ではないが、先づそれでも稻日野と解していいだらうと思つたのである。また加古川口に今は人絹工場などが建ち、古代の風光を偲ぶには邪魔するけれども、川口にやはり松林があつて、遠景では大體、岬、島の感じとして受取ることが出來た。次に、舟を東方に漕がせたが、現在では小山も少く松林も續いてゐて、この方は稻日野の感じが著しい。私の解釋では稻日野は加古川の東

西にわたつてゐたものと解釋したのであつた。また現在も印南郡は加古川の西にあり、和名鈔にも伊奈美(いなみ)とあり、萬葉集卷一中大兄御歌の「伊奈美國原」をば印南郡大國郷（今の曾根、阿彌陀、伊保、米田あたり）の平野と解してゐるから、人麿の歌の稻日野も大體そのあたりと解して間違が無いとおもふし、あの歌も、西から東へ向つた時の歌と解して說明がつくとおもふのである。なほ加古川の流について、地名辭書に、『加古川（一名印南川）其西を流れ、郡村界古今の變遷あり、按ふに上古は水流近世の如くに屈曲せず、稻屋木村(きむら)（今鳩里村に屬す）などを通過したるごとし、後漸く西方に轉じ、又水脈兩岐に分れ以て今日の形狀を生じ、加古川東岸に印南郡河南莊の號ありしは、其地蓋舊時の西北岸の域のみ、されば今の加古川町も其寺家(ジケ)以東は舊賀古郷の驛家なれど、其西なる加古川宿は舊印南郡河南(カナン)の地とす』とあるのは有益なる文字であつて、さうすれば、加古川口は人麿時代にはもつと東方にあつたもののごとくである。いづれにしても、稻日野の大體の解決がついて今日は愉快である。

五

十時二十分明石行の電車に乘り、明石著、十一時發の聯絡蒸汽船にて淡路へ渡つた。明石には人

丸の二字を冠した名があり、『人丸鐵工場』などといふのもあつた。船上で、人麿の歌の「明石大門」の趣を味ふことが出來、また、淡路の江崎燈臺あたりが、萬葉の『野島の崎』あたりだらうといふ說に從ふと、やはり蒸汽船の中でそれを望むことが出來る。そこでその寫眞を撮つたが、靄がうすくかかつてゐて旨く撮れなかつたやうである。淡路の岩屋に著き、そこから全淡バスに乘つて西海岸を走つた。

暫くすると松帆村を通る。これは萬葉笠金村の作、『名寸隅の、船瀨ゆ見ゆる、淡路島、松帆の浦に、朝凪に、玉藻刈りつつ』とある松帆である。これは三原郡の松帆と混同し易く、砲臺址を少し過ぎたところの松帆崎をば一時松尾崎と稱へた時もある。このあたり一帶を松帆の浦といひ、百人一首の『松帆の浦の夕なぎに』も此處を詠じたものである。

少しく過ぎると江崎の燈臺があり、その近くの突出した鼻あたりが、『野島の崎』だらうとも云はれてゐる。江崎を過ぎて野島がある。今は野島村に野島、常磐、簸を屬せしめてゐるが、海岸に簸、平林、大川、轟木、野島、蟇浦といふ順序に村がある。江崎のところを廻ると波が荒くなり、轟木に崎があり、野島の少し手前にも山が突出でてゐる。おもふに、人麿時代にはこの邊一帶を野島と稱し、今の轟木あたりの崎をば總稱して野島崎といつたものとも想像せられるが、今日は、江崎燈

墓あたりを見當にして寫眞を撮つた。地名辭書引用の常磐草に、「野島は墓浦村の海邊なり。里人の曰、むかしは一二町も澳へ出て高く平らかなる野あり、波に崩れて今はなし。古松の村立る汀を野島といふ也」云々とあるから幾分變形したと思はれるが、このあたりに野島の小湊があり、崎があり、漁村のあつたことは想像するに難くはない。遠望でも小岬を幾つか見ることが出來る。

後記。昭和十四年一月、淡路洲本中學校教諭下村章雄氏は、「野島と崎考」を著はして私に示された。この野島と崎については、折口信夫氏は鐙（今の岩屋）の鼻とし、松岡靜雄氏は、岩屋町と野島村との中間の松尾崎だとし、坂口保氏は松帆の裏場から東南十一町ばかりの古松の崎だとしてゐるが、下村氏はこれらを通覽した上、松帆より西海岸傳ひに南下して今の野島の地にその岬角を求めるのが一番穩當だとし、萬葉の歌からして、舟の泊る場であるべく、人麿も數日滯在したであらうと想像することも出來るし、なほ常磐草（仲野安雄、享保年中）の記事に、播磨國往還から津國大和田泊まで一日行の間に船を泊むべき處がなく、東南の風荒く一岩崎の避風を旅客の時には、富島・野島などに舟を泊めて風を待つた、と書いてあるのを見ても、富島・野島などは舟の泊る場であつたことがわかるが、富島・野島等は岩屋・松帆などよりも舟の泊る場としては適當であるやうに思はれる。なほ淡路國地記（元祿年中）、常磐草、淡路通記錄（享保年中）等から參考し、なほ淡路洲古地圖といふ德川時代の地圖なども考證してゐる。地圖では野島を挿入せしめその北端の岬に大石鼻とあり古の野島の崎だとし、次に野島といふ島が描いてゐる。そして仁和二年に地震に沈んだといふのである。地圖には、松帆、大川、繩と記して來て、大石鼻のところに、往古西國往來諸船淡海北大江神野島崎と記入してある。以上を綜合すれば、下村氏も古の野島崎をば現在の野島の地に求めたく、それは大體當つてゐるのではないかといふ結論になるのである。

富島町の處にも小崎がある。水越、斗ノ内（淺野村）、育波などを過ぎて室津町に著く。室津川があり、八幡神社がある。生活が活潑のやうである。少女もエプロンなどをかけて甲斐甲斐しい。路地に朝鮮の女が洗濯などをしてゐる。道で男女の會話が聞こえる。男『よく見えるなあ』、女『ほんとになあ』。午後一時郡家（ぐんげ）町に著いた。

此處で湊行のバスに乘換へるのだが、午後二時過ぎまで待つことになる。晝食をするのに不便だと思つてバナナ二つばかり食べて晝食を濟ませた。また繪ハガキを買つて諸友に便りをかいた。郡家町は和名鈔の津名郡郡家郷久宇希である。一時ミヤケとも云つたよし記載に見えてゐる。そこでバスに乘換へ、江井町、山田村、都志町、鳥飼村などを過ぎる。都志は和名鈔の津名郡都志郷豆之である。鳥飼を過ぎ鳥飼川を渡ると五色濱になり、海の景もひらけて來る。全淡バス案内書に、『桃山御陵の敷砂は、此地より獻納せるもの、眺望極めて雄大』とある。午後三時近くに湊町に著くが、その手前、三原川を隔てて、慶野（けいの）松原がある。これは現在、松帆村大字笥飯野（けいの）である。嘗て訛つて慶野などと書いたのであつただらう。萬葉名所考に、『飼飯は飼は笥の誤にやと思ふ人あれど、誤字とは云ひ難し。集中に飼飯を氣比と訓むべきもの三所あり。畜類を飼ふ料を古へ飼飯とぞ云ひけむ。カヒの切キなるをケに轉じてケヒと云るなるべし』。地名辭書に、『按に、應神紀に淡路は麋鹿

鳧雁の多き由を載せ、延喜式に調宍一千斤と錄す。蓋此鳥畜は御原の飼飯野に牧養せる者にして、飼飯野の北に鳥飼村の名あるも皆之に起因するごとし」とあるところである。松原は名所の名にそむかぬ、好い松原である。御津の濱松なども、かういふ松原であつただらうなどと空想し得るほどのものである。そこの浦を松帆の浦といつてゐて、前記の松帆の浦と混同し易いので、此處を歌枕の松帆浦だらうといふ說もあつたほどである。

人麿の歌の、「飼飯の海のには好くあらし」云々の『飼飯の海』は、このあたり一帶の海と解して好かるべく、「かりごもの亂れ出づ見ゆ海人の釣船」といふのであるから、必ずこの邊に漁村があつて漁夫が活潑に働いてゐただらうと考へることが出來る。さうして見れば現在の湊町の地位はまさしくそれに當ると謂つても好く、飼飯の海の風光は湊町の海岸から、翁媼崎の方へ道をのぼつてゆくその山寄りから眺め得るやうにおもふ。さうすれば、慶野松原をも籠めて眺めることが出來、大體ここの海と見當をつけて間違が無いやうにおもつた。地名辭書に、「三原湊。今湊村と云ふ。三原川の委口にして、西北に開く。即播磨洋なり。此江灣東北は松帆鳥飼の濱に至り、西は津井村の雁來埼に至る。廣さ二海里、北風を遮る者なし。然れども帆船の寄泊するもの多く、古より湊村の名を負たり」とある。此處に延喜式の三原郡湊口神社がある。今は三原川の川口のところに防波堤

が築かれ、船が泊るのに便にしてゐる。朝鮮人の子女も嬉々として遊んでゐるし、小さい舟工場などもあり、生活は相當に活潑である。此處では薩摩芋を食つて腹拵をした。

私のはじめの豫定は湊町に一泊して、飼飯の海の樣子をくはしく見るつもりであつたが、これ以上精しく見る必要もないので、四時三十分發の洲本行のバスに乘つて、淡路を東へむかつて横斷し、日暮に洲本に著き、三熊館に宿つたが、神戶からの團體客に騷がれて終夜安眠出來なかつた。洲本の城址にのぼるのに馬に乘つてのぼる風習があると見えて、途中でしきりにすすめられたが、旅の疲れで興味を牽かなかつた。洲本は淡路第一の町であるが、和名鈔の津名郡物部鄕の一部をなしてゐる。

六

五月二十三日（日曜、曇）。午前六時五十五分洲本發のバスに乘り、淡路の東海岸を走り、八時四十分岩屋著。九時半明石著。汽車十時六分明石發、十一時十分大阪著。

上六（うへろく）停車場から八木驛西口に至り、鴨公村高殿、別所あたりの井泉を調査、別所春日神社の方から高田山の麓へまはり、耳成山の麓の井泉を見、一旦大阪に向つたが、布施まで來て高殿の井泉に

疑問が生じたので、ふたたび八木に引返し、高殿再調、同道の高安氏は大阪に歸り、私は竹葉に宿つた。

五月二十四日月曜、曇、雨。朝八時鴨公村高殿から、別所、日高山を調べ、そのあたりの地質赤土、雲母混ずるに注意し、上飛驒八幡宮に詣で、雨やどりして、藤原のみ井のいづみを求《と》め來ればわれの草鞋は濡れそぼちつつ、いにしへの事にかかはる樂しさに日高のやまに雨ごもりせりなどと口ずさみつつ、鷺巢の池とか、鷺巢の坂とかいふ名を空想しつつ、雨に濡れるのも苦にならなかつた。それから、古文化研究所の發掘研究のあとを想像しながら、土壇の南方にまはり、それから現在の鷺巢神社に參拜し、飛鳥川に沿うて、八木町に歸り、竹葉に少憩して、夕方大阪に向つた。昨日以來調べた井泉と藤原御井との關聯について空想しつつ大阪に著き、平野町ガスビルといふところで、岡田貢、神田健雄、上村孫作、鈴江幸太郎、寺澤亮、梶村正義、岸哲夫、中島榮一、高安やす子、高安國世の諸氏と會食し、梅田ホテル投宿。

五月二十五日火曜、晴。明石人丸神社參拜。神戶湊川神社參拜。祭禮日（御渡《おわたり》）にめぐりあはせた。有馬溫泉入浴。有馬の湯は炭酸鹽類泉で、石見湯抱の湯と甚だ類似してゐるので特に花湯又新湯といふもののやうである、今回の鴨山調査とも密接の關係があるやうに思はれて愉快であつた。有馬の湯は、有間の湯とも書き、豐臣時代から文獻に見えてゐるが、その以前のことは未詳である。

微温湯のほかに、『大温無比』と形容されたほど熱い湯の湧出するところもある。有馬午後六時發のバスに乗り、六時四十五分寶塚著。七時大阪行急行電車に乗り、七時四十五分大阪著。梅田ホテル投宿。

五月二十六日（水曜、曇、雨）。午前八時、特急さくら大阪發。午後三時二十四分小田原著。下車、四時二十五分箱根强羅著、一福旅館投宿。夜豪雨。

五月二十七日（木曜、曇、雨）。午後四時二十一分强羅發。五時二十四分小田原發。六時四十二分東京著。

浮沼池・鴨山・尾道・鴨公其他

昭和十四年五月四日、午前十時半東京驛を發し、午後七時四十九分京都著。驛で休んでゐるとき、わが海軍機大擧して重慶を爆撃したといふ記事を讀んだ。九時四十分山陰線に乘換へ、翌五日午前八時二十二分石見大田著。大田はオホダと濁つて發音してゐる。それから九時十分發の池田行のバスに乘り、約一時間で池田に著いた。池田は安濃郡佐比賣村大字池田である。そこで案內人を雇つて浮布池を見に行つた。

萬葉集卷七(一二四九)に、「君がため浮沼の池の菱採むと我が染めし袖濡れにけるかも」とある、その「浮沼の池」が此處の浮布池だらうと謂はれてゐるので見に來たのであつた。この浮布池は三瓶山の南麓に位してゐる。池田のバス終點から數町歩いて行き、それから向つて右手に折れて、人家の散在してあるところを通つて行くと浮布池に著く。池は周圍五十町と云はれ水は綺麗である。この池の水は一方三瓶山麓の高利の方から流れる川と合して靜間川の上流を成してゐる。靜間川は

忍原川と川合で合して北上する。浮布池の水の清いのは湧水のためと池に流入る水が大概泉の水だからである。東側の林中には一八が澤山に咲き、また萬年青が群生してゐた。それから、萬葉の歌にあるやうに、菱があるかといふに、三ケ處ばかり群生してゐるところがあり、いまは未だ葉が小さくて浮いて見えないが、そろそろ葉も浮き、夏に花が咲いて初秋から實を結ぶし、兒童等は今でも競うて採つてそれを食ふ。また、菱の實のことをコツテカケといふ。コツテは牡牛のことで、コトヒウシがつまつたものである。コツトヒ、コツテ、コテ、ゴツテ等の語としてひろがつてゐる。菱の實は角があつて牡牛の頭に似てゐるので、コツテカケといふのであらうが、カケの意味がよく分からない。

萬葉卷七の歌は人麿歌集にある歌であるが、「君がため」云々の語調は、女の云ふ趣の歌である。『染めし袖』が濡れたといふのもまた女の語調のやうにおもへる。なほ萬葉卷十六（三八七六）の、『豐國の企玖の池なる菱の末を採むとや妹が御袖ぬれけむ』といふのは、まさしく女が菱の實を採む趣であるから、人麿歌集の歌も女が男にむかつて物を云ふ歌と解して先づ間違が無いやうにおもふ。さう極めて置いて、さてそれならば、これは人麿が自ら作つたものか、若しみづから作つたのだとすると、どういふ場合に作つたのか、頼まれて作つたものか、謂ゆる巡遊詩人的に作つたもの

か、或は人麿歌集にあるほかの民謠風な歌と共に、人麿がある機會に民謠として作つたものか、さういふことをいろいろに考へることが出來る。それから第二に、此歌は人麿の作つたもので無いとすると、人麿がある機會にこの土地の民謠をばおぼえのために書きとめて置いたといふことにもなる。さうして、そのいづれの場合にしろ、人麿と石見とに關係があり、人麿はどういふ機會にか、石見の國府を出でて、この邊を歩いてゐたといふことになる。さういふ點でこの浮布池は人麿傳を考察するうへに大切な處だといふことになり、また、私の發見した湯抱湯谷の鴨山が、人麿臨終のときに詠んだ歌の鴨山と密接の關係があるだらうといふ説に、一つの大切な根據を與へることともなるのであるが、このことはなほ後にもいふ筈である。

浮布池のほとりには既に放牧の牛がぼつぼつ見えてゐた。池の東南端に辨天祠があり毎年七月十五日はその祭禮であるが、近村から幾ら人出があつてもその島が狹く感ぜられたことはないと案内者がいふ。その島で晝の辨當を食べた。それから歩いて行くと、裾野の感じで、川原胡頽子が群生しもう少しく赤くなつてゐる。通草の花、木苺の花、さういふものをも珍らしくおもひつつ到頭池を一めぐりした。池の寫眞は大三瓶小三瓶孫三瓶をも含めて撮ることが出來る。兎に角これまで度度石見に來て居りながら此池を見なかつたのに、今日それを見るやうになつたのは、湯抱の鴨山を

發見したおかげである。

湯抱の鴨山が、人麿の歌の鴨山だとし、此處の浮布池が人麿歌集の浮沼の池だとすると、おのづから其處に聯絡があるわけである。人麿はその邊に恐らく一度ならず來てゐるといふこともまた想像することが出來る。

そんなら、浮布池と湯抱とはどういふ道路によつて交通するかといふに、その道路は二つある。第一は小田(をだ)の方から湯抱へ越す道、第二は槇原(まきわら)の方から湯抱の湯谷へ越す道である。けふは第一の方の峠を見ようとおもつて、浮布池を濟ましてから、小田に行き、山路にさしかかつて、鳥打(とりうち)といふところに行つた。此處から大體くだりになつて、邑智郡の湯抱に行くのである。此處をくだつて行くうち雨が降つて來た。今朝大田に著いたとき一點の雲もないほど空が晴れてゐたのに、かう雨が降り出すといふのは、やはり山の地帶だからだとおもひながら暫く歩いて行くうち、道に山笹が茂つてゐて、歩くのに難澁なのでもはや遠くまで行くことをやめた。またこの四月十四五日ごろ苫木虎雄君は私のために佐比賣村の小字を調査し、そのときこのコースを踏査してくれたのだから、私は自分で無理にこの道を行かずともよいとおもつたのであつた。

私と案内人は、鳥打に引返し、今度は三瓶山麓の陸軍演習地帶を歩いた。私は東京から用意して

來た草鞋は穿いてゐるので雨が降つても苦痛でない。數時間歩いた後平坦な原に出た。片腕松を右手に見、定松の下をとほつて池田に著いた。池田では湯淺といふ旅宿に入つた。夕がたから雨が晴れて日が見え出した。宿の童子の咳の聲を終夜聞きながら一夜を明かした。

五月六日、けふは第二のコースを通つて湯抱へ出て見ようと思つたが、幸ひ宿の女が草鞋を見つけて買つて來たのでそれを私は穿いた。午前八時宿を出發し、數町大田の方へ戻つてそれから南方、西田川の谿谷に沿うてのぼり、約一里にして槇原に著く、その邊に農家が散在し、木炭を負うた牛が鳴きつつ來るのなどに會ふ。そこを通つていよいよ山道になる。槇原までは人どほりが相應にあるからして道路が修理せられてある。そのあとの道は殆ど修理せられず、或時は笹が道をうづめ、或時は水が湧いて川のやうになつてゐるところを渡つて行く。併し今のやうに交通機關の發達しないうちは、人どほりが相應にあつたおもかげを殘してゐるところもある。笹は何處の山にも茂るものであるが、何しろ過去の人麿の歌をおもはしめるやうなありさまである。よつて數種の寫眞を撮つた。約半里歩いてやうやく峯に達した。此處は安濃・邑智兩郡の境で、案内者は、槇原の小字櫻原といふところの奥の堺だと説明してくれた。天氣は小雨が降つたり止んだりしてゐて、此處に著いたころには雨が止んで雲がしきりに動いてゐた。この峯、つまり「たをげ」で私は寫生をしたり

寫眞を撮つたりして小一時間あまり居た。そこから見ると、邑智郡の山々ばかりでなく、遠く那賀郡の山々、安藝境の山々まで、疊々として聳えてゐるのが見える、それほどの大觀的佳景であるから、どの方面から來る旅人も一たびは此處に足をとどめて、或は三瓶山から出雲方面、或は石見から安藝方面の眺をほしいままにしたものに相違ない。眼下に稍離れて粕淵小原の津目山が見える。その下を江川が流れてゐるのであらう。津目山は一たび私が鴨山に擬したものであるから、一見してその山だといふことが分かる。それから向つて右手に山が幾つかある。それは國道の向うの山である。それから國道から手前の山々が見え、そのまた手前に、大釣山・鴨山などを含めた一群の山が見え、その左手に粕淵小原、湯抱から小田島打の方へ越す山の一群が見える。山々は新綠で、萌黄なども浮きあがるやうにして動いてゐる。その二つの群山のあひだを私等はこれから下りて行くのである。鴨山はこの向つて右の山のかげになつてゐてこの峯からは直接見えない。

この下り道には、全く道跡を沒したところが幾個處もあつた。案內人は大體の目分量で其處を通つて行く。或は湧く谿水をば靑草が埋めつくして、其處を私等は渡らねばならなかつた。さういふ時にいつも私は草鞋の便利なことを感じた。私は昭和十年の大和旅行以來草鞋の便利なことを痛感し、それ以來の旅には時々脚絆と草鞋とを用意してゐるが、今回も非常に役立つたことかくの如く

である。このコースは今では殆ど全く人どほりが無いといふのは、人々は乘合バスで大田に出て、大田から亦名行の省營バスに乘れば、賃錢は合せて八九十錢で、時間もかからず樂に湯抱に著くことが出來るからである。

このコースを下れば、湯抱湯谷の丁度鴨山を向つて右に眺め得るところに出る。この鴨山の前山は殆ど皆岩石から成り、何かの鑛を含んでゐるのか、小さい試掘の痕などが二三ヶ處に見えてゐた。岩石はいづこの山にもあるだらうといふかも知れぬが、ここの山のはまた著明であるから、若し湯谷の鴨山が人麿の歌の鴨山だとすると、「巖根しまける」の句はただの觀念句でないといふ想像もつくのである。湯谷近くなると、道も修理して、石垣などもあり、炭燒小屋なども見え、炭を運ぶ牛の樂にとほれる便利な道になつてゐた。また近年植林がはじまつたから自然にこの谿間の道路もよくなつたわけである。因にいふと、ここの谿間の激湍はなかなかの佳景である。

午後零時半、疲勞して湯谷に著いた。鴨山は一昨年見たときにはまだ植林して間もなかつたので形が變つてゐたが、今度見ると形も稍豐かになり、それに新綠で色彩もよくなつてゐた。私はなつかしいものに會つたやうな氣持でそれを眺め、一休しようと思つた旅館はいづれも滿員で青山旅館からも日の出旅館からも皆ことわられた。爲方がないので日の出旅館の帳場に上りこみ、晝食を濟

ませたのち、湯の湧くところを見たり、入浴したり（浴場は一昨年來た時のは取拂はれて、新築せられてゐた）、鴨山の見えるところまで歩いて行つたりした。宿の主人の話に、今日私等の越えて來た道は先づ人どほりは無い。それに夏はマミ（蝮）が出てあぶないところである。數年前一人の六部が槇原の方から越えて來たが、あの澤でマミに嚙まれ、全身脹れあがつて湯谷の路傍に臥してゐたのを、村の倶樂部に連れて來て看護しやうやく生命だけはとり止めた云々。それを聞いて私は越えて來たのが夏分でなくてよかつたと思つたのであるが、さて、このコースを越えて來て空想したのは、若し此處の鴨山が人麿の歌の鴨山ならば、その頃にもやはり人々はこのコースを取つて、佐比賣山（三瓶山）から出雲の方へでも交通したであらう。人麿歌集に浮沼池の歌があつて、浮沼池は現在の三瓶山麓の浮布池に相違ないとせば、人麿が湯抱あたりに來てゐても毫も不自然ではなく、湯の湧くこの湯抱にある鴨山をば終焉地の如くにして一首の歌を殘してゐても毫も不自然ではないといふことになる。私は今度の旅で、この考を大體強めることが出來たのを多幸とする。

それから自動車をやとつて、粕淵を通つて二たび安濃郡に入り、志學溫泉浩然樓に投じた。そこで入浴し、三瓶登山を濟せて來た男女小學生數百の聲を聞きつつ夜を明かした。自動車賃四圓五十錢。

五月七日。午前三瓶山麓を歩く。白頭翁、蕨等群生。放牧の牛群れ、雲雀其他の群鳥止まず啼く。かへりに湯本を見、孫三瓶登山の心湧いたが、體の具合を顧慮し、旅宿に歸つて入湯し臥床した。三瓶山麓には山牛蒡、こうか茶、自然生大根（弘法大根）等を產する。志學には陸軍の廠舍があり、演習に來る兵のための宿舍である。その夜、場面が伯林で二三人の亡友なども交つてゐる夢を視た。

五月八日。十一時志學を發ち、午後零時五分濱原發の省營バスに乘り、赤名に午後零時五十八分著の豫定のところ、澤谷村宮の前で故障し、自動車を赤名から呼んだりして、赤名に著いたのは午後二時三十分過ぎであつた。次のバスの赤名發は午後五時十分だといふので、致し方なく赤名で一時間ばかり待つてやうやく自動車をやとひ、四時半ごろ布野に著いた。自動車賃六圓。中村憲吉君（昭和九年五月五日歿）、おばあさま（昭和十三年十二月十五日歿）、中村孝君（昭和十四年三月十日歿）の墓參をし、シヅ子未亡人、良子さん、厚惠さん等といろいろの悲しい話をしながら一夜寢た。

五月九日。布野滯在。病床の中村おばあさまを見舞ひ、山にのぼり、谿にくだり、午後晝寢の後、字を書いたりして、また一夜宿つた。備後の山もまた笹が多く、これは赤名を越えてから既に氣がつくが、布野の山を歩いても目立つものである。

五月十日。午前六時布野出發、良子さん厚惠さん同道、江川、馬洗川の霧を見ながら、三次、十

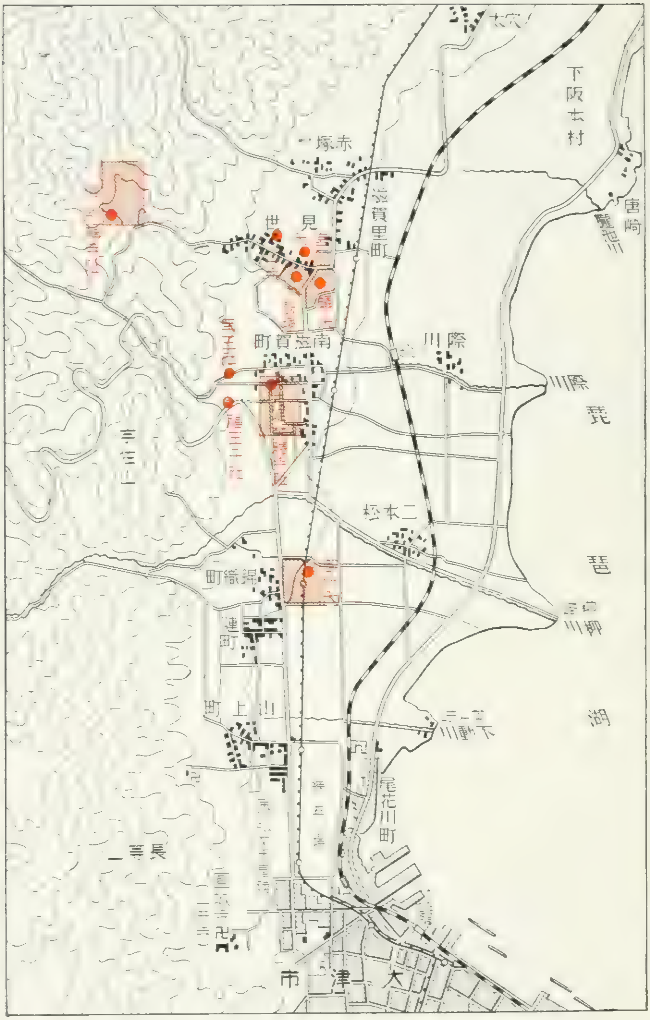
口市、山家、鹽町と過ぎる。鐵道鹽町驛で大阪線と福山線とが分かれる。三良坂町には出雲大社分祠がある。吉舍、八幡、大見を過ぎ、山間を幾度か過ぎる、東大田、甲山、諸田、市、三成を過ぎ、この邊一帶は備後表の產地で藺の田が多い。間もなく尾道に著いた。かく、雙三郡、甲奴郡、世羅郡、御調郡を經過するのは、私が人麿上來の道筋を想像した道筋をば今日通過したこととなり、自動車で通つてみると、大體ある川の流に沿ふやうでもあり、山道をも通過するが、さうたいした難路と謂ふべきところが少く、尾道に出ずに、國府のあつた府中あたりを過ぎて鞆に出て其處から船に乘つたと假定しても、決して難路といふのでなく、出雲路から山陰道を通過するよりどのくらゐ樂だか知れないのである。今日私等は備後を尾道まで南下して來て、これも私の想像說を肯定し得たやうにおもつた。

尾道の千光寺境內に中村憲吉君終焉の地があるから特に立寄つたのであり、三人してその家に寄り臨終の部屋をも見た。櫻の花は過ぎて既に葉になつてゐたし、槻の大木も若葉になつてゐたが、鐘樓も元の儘だし、尾道を一目に見わたす處である。私は亡友を飽くまで偲びつつ其處を辭し、展望臺を十時十五分に出發して直ちに鞆にむかひ、今津、松永、柳津を通り十一時半鞆に著いた。船つき場を鞆江浦といふ。對山樓に寄つて午食の用意の出來るひまに、辨天島、仙醉島をめぐり、恰

も舊三月廿七日、「辨當びらき」の日に當つて土地の人が多く群れてゐるのを見た。また椋(むろ)の木の大小を見たが、萬葉にあるやうな大樹は今は見られぬから、その當時にあつてもあゝいふ大樹は稀で人目を牽いたものであつただらうか。對山樓で鯛の骨蒸(こむ)しといふのを馳走になり、直ちに福山に向つた。途中水呑の倉田氏に寄り、二時四十分福山に著、そこで良子さん厚惠さんに別れて三時發の汽車で大阪に向つた。汽車が動いてから車房の中で萬感交々至つて盡くることを知らなかつた。七時四十五分大阪著、大村呉樓氏等の出迎を受けて後、アララギ歌會に暫時出席し、梅田ホテルに一泊した。

五月十一日。高安國世氏同道、大和高市郡鴨公小學校に吉田校長を訪ひ、布野で讀んだ「藤原宮の全貌」といふ記事について種々教示を得た。それから私の「御井考」に關して小實驗を濟ませ、大阪に歸つて諸友と夕食を共にし、梅田ホテルに一泊した。

五月十二日。午前九時二十分大阪發。午後七時三十五分東京著。



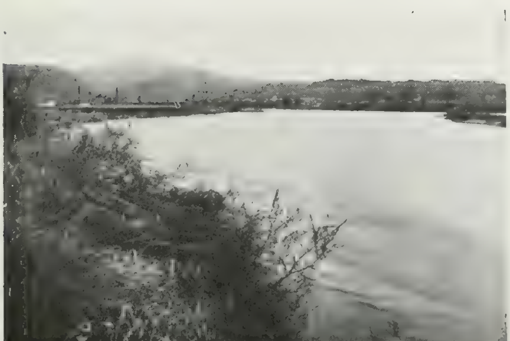
大津宮址図



大津志賀宮址・唐崎（左）



宇治河（三室戸附近）



宇治河（三室戸附近）



吉野川・喜佐山(右)・御船山(左)



吉野川宮瀧



吉野川宮瀧



吉野川・御園村東端・喜佐山(象山)・
御船山(左後方)



宮瀧村・傳宮址・御園村・喜佐山・
御船山



喜佐山(右)・喜佐谷(その左)・吉野山
(その奥)・御船山(左)・柴橋



初瀬町・泊瀬山



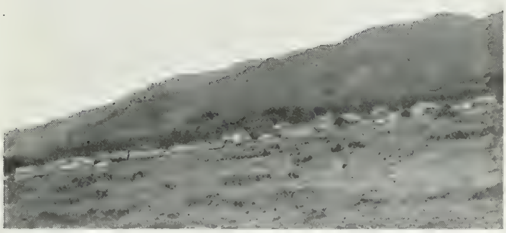
三輪山



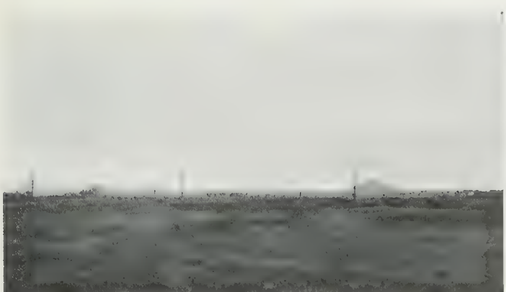
飛鳥川より南淵山



三輪山(右)・纏向連山(その左)
藤原宮阯より望む



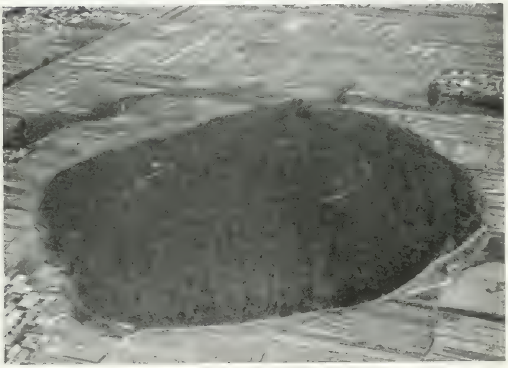
纏向山(由槻嶽を含む)・穴師村



大和三山(右より耳成山・畝傍山・香具山)三輪より望む



畝傍山・傳藤原宮址土壇の森（右）・鴨公小學校・鷺巣神社（畝傍山の左）



耳成山



雷岳・飛鳥川・豐浦村


三輪山の一部（右）・纒向連山


纒向山（右上）・衾田墓地（左）



飛鳥村・矢釣山・その右方は高家方面



飛鳥川・二上山（遠景）・畝傍山（左）



雷丘（豊浦丘陵より望む）



雷丘（貯水池畔より望む）



香具山・南浦



畝傍山(中央)・二上山(右)



耳成山・傳藤原宮址土壇の森



大輕(右)・森は輕豊明宮址・見瀬の一部(その左)・畝傍山



五條野・宮ノ丘の一部



岡寺[illegible]崎(中央森)・宮ノ丘(左)・[illegible]兵山



甘橿丘より雷(中央)・香具山(右)・耳成山(左遠景)・鷺巣神社(その左)



嫩草山・三笠山(右)・春日山(左)・高圓山(後方)



東大寺大佛殿・奈良公園・嫩草山・三笠山・春日山



二 薮川・石見安濃郡佐比賣村の高原



石見安濃郡浮布池（浮沼池）



石見安濃郡山道の笹



砂彌島（香川縣仲多度郡與島村大字砂彌）



砂彌島



砂彌島の磯



淡路野島埼



明石海峡（明石大門）



加古川口・高砂町松原（可古の島）



飼飯の海（淡路三原郡湊町）・慶野松原（黒く見ゆ）



飼飯の海（湊町海岸）



飼飯の海（湊町海岸）

人麿雜纂

同　文化八辛未年二月　廿六日。朝より晴天、六ツ後大森町出立、同所止宿前より御代官役所迄測二丁二十一間　夫より同町三次雲州街道三辻より初、石像五百羅漢道ノ左ニあり即石窟中ニ安置ス石窟モ石工ノ作ナリ道右ニ石室山羅漢寺アリ湯島靈雲寺ノ末ナリト　佐摩村福原村荻原村是迄邇摩郡大森より驛一里〇八丁此所中食理惣兵衛　小松地村此村より邑智郡となる　別府村㊤印迄測大森より二里三十〇丁一十八間二尺内一里〇六丁十二間二尺荻原驛迄内一里十四丁〇六間荻原より㊤印迄合二里二十六丁十八間二尺　又㊤印より小松地村止宿迄測五丁三十三間合二里二十八丁一十二間二尺　九ツ半後ニ着、止宿庄屋富三郎、此夜晴天測ゝ

同廿七日朝より晴天、朝六ツ頃小松地村出立、邑智郡㊤印より初、惣森村志君村湯抱村高畑村粕淵村枝小原驛中食別府㊤印より一里三十〇丁二十一間荻原より驛路三里荻原より㊤迄一里十四丁〇六間ヲ加荻原より小原驛迄三里〇八丁二十七間ナリ一間ヲ六尺五寸トシテ組合　久保村濱原驛村ニ云　迄測別府㊤印より二里一十三丁三十〇間小原より驛道半里餘測一十九丁、九間　九ツ半頃、濱原驛郎村着、本陣新屋森本脇宿吾江屋重藏此夜中晴測

同廿八日朝より晴天、六ツ後濱原村出立、同所より初、川戸村字乙原石原村千原村九日市村字多ゝ羅枝西ノ原組片山村地先少　九日市村驛迄測一里〇七丁一十二間　夫より仕越字亥ノ子田酒谷村界迄測一十四丁二十七間　行

迄九日市村止宿濱原より驛二里 本陣原田屋惣太郎此節他行好文字山 脇鍛治屋良右衛門九ツ後ニ着、此夜晴天測。

同廿九日。朝晴天、六ツ後九日市驛出立、酒谷村界より初字大平 酒谷驛迄測九日市より驛路一里半實測一里〇一丁五十七間此村銀山御料所終仕越共一里一十六丁二十四間 又同所より初、出雲國飯石郡廣瀨領松平佐渡守領 下赤名村赤名驛迄測酒谷より驛路一里一里〇二丁三十一間 止宿肥後屋柳右衛門、廣瀨侯より使者トシテ福井祖助出ル、侯より肴一折我等へ被贈之郎受納、外ニ家士今岡雄兵衛出ル、此夜曇天不測。

閏二月朔日。朝晴曇、六ツ赤名驛出立、同所より初、備後國三次郡廣島領横谷村枝室市迄測一里二十七丁一十七間 夫より仕越字屋ケ峠迄測二十一丁四十八間 行歸テ室市ニ止宿合二里一十三丁〇五間 本陣百姓幸四郎脇七九郎 此支配代官下役福原來助書付を村役人より出サシム 此夜晴天測。

同二日。朝晴天、六頃室市出立、横谷村字屋ケ峠より初、上布野村布野驛迄測一里二十六丁五十七間五尺赤名より驛路四里實測合四里〇四丁〇二間五尺 四ツ後ニ着本陣止宿 清兵衛當町年寄庄屋 長岡廣藏、驛所引請喜七郎、組頭市五郎、用所請割庄屋永川源兵衛、三次郡割庄屋代瀧口新兵衛年寄代田森六平 驛役人代三郎來ル、此夜曇天不測。

閏二月三日。朝曇天、六ツ後布野驛出立、下布野村戸河内村西河内村神ノ瀬川渡巾三十〇間二尺 枝藤地中使 字土取場下迄測一里一十二丁一十二間二尺 別手合坂部下河邊簗田上田平助三次本町本陣前より初右畑中小路左萬光小路 横町上市右牢小路左正房小路 上ノ段左西光寺小路 字大歲口原村字宮ノ關西河内村字三反田枝大坪谷字土取場下ニ而別手合

測 一里二十一丁十八間四尺 兩手共九ッ後、三次五日市町本町え着 我等青木永井箱田長藏初宿 坂部下河邊藥田上田平助再宿 （以下略）

伊能忠敬の測量日記は右の如くであるが、此處に少しく注解を加へて置く。この日記の私に有益なのは、忠敬が大森から恕森村、志君村、湯抱村、高畑村、粕淵村、濱原村、酒谷村を經て出雲廣瀬藩の赤名に出て、それから備後に越してゐる道筋は、私の想像してゐる人麿上來の道筋と一致してゐるために有益である。そして廿七日は小松地村を出立し、別府で中食をして、濱原に止宿してゐるから、そのあたりの道路を大體歩いてゐるのである。この道筋は銀山の出來てからのことで、志君村から粕淵へ行く道は只今の縣道筋よりも高い處即ち山の上を通つてゐた。それから道が分かれて、湯谷、湯抱の方へ通じてゐた。併しもつと往古になると、幾らか道筋が違つてゐたとおもふが、横道についてはさうたいした變化は無く、鴨山の麓の道などは、別府から程近いところであり、現在私等のおもつたよりも人々が往反してゐたかも知れないとおもふ。

伊能忠敬のこの時の一行は、伊能忠敬、下役青木勝次郎、永井要助、御弟子箱田良助、御若黨松井澤次、御侍黑田京吉、御竿取長藏、御草履取三人、御上下十人で、その測量用具は、松三寸角長さ五尺杭三本、長さ五尺片側削つた杭二本、小かけや一丁、ぼんでん竹十本、莚八枚、あわび貝二つ、鍬、はんかけ、鶴嘴等であつた。幕府天文方の測量だとあつて非常な助力と鄭重な待遇を與へたものである。今、赤名に於けるその狀態が記錄に殘つてゐるが、先づ赤名來著に先だち、庄屋二人を道普請引受とした。これは二月下旬であるから殘雪いまだ深く通行も困難であつたから、酒谷から備後境まで雪を掘り踏みならし、通行の際は人夫二十人を附けて道直なし、庄屋一人年寄二人を村案内に、庄屋四人を御用中附廻り役とし、その他に、ぼんでん持十人、じしやく臺持二人、火入持一人、丁繩持一人、ま繩持一人、杭莚つつ持一人、綱引七人、間竿持一人、しようぎ持二人、繪圖板持一人、鎗持一人、御刀持一人、人足二人、合計三十二人を附けた。なほ右の庄屋年寄は股引脚絆羽織脇差を體し、特に附廻庄屋は手帳矢立扇子を持ち、前日迄に九日市宿館に伺候し、翌日酒谷口境から御用を引受け備後境迄勤めたものである。また、下赤名村古市と上赤名の口境との二ケ所に休憩處を設け、兩處の休憩處共に一間半に

二間の小屋であつた。なほ、旅宿には本亭主一人、脇亭主二人と定め饗應も善美を盡した。

右は文化八年の日記と關係ある記錄であるが、それより先だつ五年、文化三年六月にも石見の一部を測量してゐる。「文化三寅六月十五日記、天文方測量方一件」といふ記錄に、「天文方御役人、十二日晩、溫泉津村御泊りにも可相成候旨、宿等手當ていたし置候樣、惣代宿より申越候に付、大津屋、上ミ屋供舖譜請掃除爲致候。御附廻御役人樣も可有御座旨に付、御茶屋引當テに取上置申候。其外町方取締船等配候。云々。『右測量方御役人樣六月十一日、鄕田村（今江津町）鹽屋京左衞門方へ御泊りに付、村方繪圖並明細帳等差出、御機嫌伺相濟、十二日明六つ時悴新次郎罷歸り申候。測量方御役人樣、今日當所へ御着、御泊りの積り、一手は鄕田より淺利村迄御打、一手は淺利村吉浦迄御打、一手は今浦より溫泉津村迄御打、右三手に別御打被成候趣』云々。かうして見れば、石見の測量も一回にしたのではなく、文化三年のは下府上府あたりからさらに江津町、江川を渡つて溫泉津を中心として測量したものの如くである。

附記。なほ伊能忠敬の測量日記中、鹿足郡、青野村あたりの記事に、「石川を渡船、横田村止宿」、「石川巾三十間」等がある。この「石川」といふのは、「高津川」のことである。そのころは、既に人麿の死と、依羅娘子の歌とを、高津の方に持つて行つてゐたので、「石川」が通稱になつてゐたのかも知れない。この名に迷はされてはならぬゆゑ、一語加へた。

人馬賃錢の事

寶曆三年酉十月改、石見國郡中入用其外取斗定書といふものの中に、「人馬賃錢」の條がある。

大森より荻原村迄
本馬壹疋ニ付錢五十四文
輕尻馬壹疋ニ付三十六文
人足壹人ニ付貳拾七文

荻原村より粕淵村迄
本馬壹疋ニ付百五十貳文
輕尻馬壹疋ニ付百壹文
人足壹人ニ付七拾六文

粕淵村より濱原村迄
本馬壹疋ニ付貳拾三文
輕尻馬壹疋ニ付十六文
人足壹人ニ付拾貳文

濱原村より九日市村迄
本馬壹疋ニ付八拾七文
輕尻馬壹疋ニ付三十八文
人足壹人ニ付四十四文

九日市村より酒谷村迄
本馬壹疋ニ付六十壹文
輕尻馬壹疋ニ付四十壹文
人足壹人ニ付三拾壹文

九日市村より廣瀨領雲州赤穴村迄　本馬壹疋ニ付百六文
輕尻馬壹疋ニ付七十一文
人足壹人ニ付五十三文

酒谷村より赤穴村迄　本馬壹疋ニ付四十五文
輕尻馬壹疋ニ付三十文
人足壹人ニ付二拾三文

(中略)

一右賃錢を以往返同事に可ニ心得一候、大坂道中村々に而馬賃錢に增者、不ニ請取一候間、何れ之道に而も馬に增賃不ニ相立一候、然共拾疋以下馬數入候節は、御定之賃錢に三割增可レ立レ之、人足之儀者、先觸等御定之賃可ニ相立一、駕籠其外荷物人足は是迄之通割增請取候積り、此度書入置候、

一輕尻馬之賃錢を以、人足賃可ニ相立一候、

乘物壹挺　人足六人
山駕籠壹挺　同　四人
長持壹棹　同　六人

但貳拾貫迄、其余リハ四貫目に付、壹人增之積り、貫目持出に而可致候、

(中略)

一郷川渡船之事
往來壹人に付　錢五文
馬壹疋に付　同拾文
荷物壹駄に付　同拾文
但乗物駕籠計兩掛荷笈賃錢右に准シ可レ取候、
一常水に三尺迄之増水に候はゝ、右定賃錢に可レ渡、三尺以上増水之節、船不レ可レ出事、
一御用に而通行之分大切にいたし、三尺以下之増水に候共、渡舟可レ成たけは増加子無ニ差滞一可ニ取計一事、
一増傍所杭渡津村立會川端に建置候間、常々心ヲ付、大切相守、紛敷儀無レ之樣心得、當所江相斷、改申請可レ申事、
一武家荷物渡賃不レ可レ取レ之、然とも商人請負候荷物は、定之通賃錢可レ取レ之事、
一右之外渡賃増取候歟、又者往還之者及ニ難儀一候段相聞へ候はゝ、渡守取放候儀は勿論、吟味之上、御咎之儀相伺候樣被ニ仰渡一候間、渡守、村役人共重ク可ニ相守一候、此外渡場有レ之候分は、右之趣に准シ増賃錢取候類、往還難儀無レ之樣急度可ニ相心得一事、

一村々庄屋之儀、高持に而身元宜キもの可レ願候、水呑之者ゟは決而不ニ申付一候、然共是迄も身元宜分、高持等之類も、百姓之爲に成候而、存分取計候得共、自分之爲に計成候類も有レ之候、是等之儀、村役人惣百姓共に相考、庄屋役之儀吟味を請可ニ申出一、然上者御年貢、諸役其外村役人ゟ申渡候御用、違背致間敷事、

本朝神社考 抄（羅浮子道春撰）

人丸 丸。和訓麻呂

柿本人麻呂者。石見國人也。或曰。未レ詳二其何許人一也。善詠二和歌一。多載二萬葉集一焉。紀貫之曰。先師柿本太夫者。高振二神妙之思一。獨歩二古今之間一。有二山邊赤人者一。並和歌之仙也。藤原敦光。作二柿下朝臣人麻呂。畫像賛一曰。太夫。姓柿下。名人麻呂。蓋上世之歌人也。仕二持統文武之聖朝一。遇二新田高市之王子一。吉野山之春風。從二仙駕一而獻レ壽。明石浦之秋霧。思二扁舟一而綴レ詞。誠是六義之秀逸。萬代之美談者歟。方今依レ重二幽玄之古篇一。聊傳二後素之新様一。因有レ所レ感。乃作レ讃焉。其辭曰。倭歌之仙。受二性于天一。其才卓爾。厥鋒森然。三十一字。詞華露鮮。四百餘載。來葉風傳。斯道宗匠。我朝前賢。涅而不レ緇。鑽レ之彌堅。鳳毛少レ彙。麟角猶專。既謂獨歩。誰敢比レ肩 見二續本朝文粹一。柒人丸。蓋以二天平元年一。卒二於石見國一。及二其將一レ死。詠二和歌一曰。伊波美乃夜。他加都能邪麻 高角山

乃。古乃摩擧利。宇幾與乃都幾於。美播提都流加奈。或曰。鴨長明云。人丸墓。在大和國。泊瀨傍。長明嘗往泊瀨問人丸墓。在何所乎。無知之者。士俗呼其地爲歌墳故也。或曰。未詳其所終也。

余案。世俗沿襲之訛誤。傳聞之詭僻。雖甚不鮮。而今論焉。以明一二。夫柿下。姓也。故國史。又有柿下臣猿乃。柿下朝臣人上者。萬多姓氏錄。亦載柿下姓。而云人丸生出于柿樹下。非也。藤原處名也。允恭天皇。爲衣通姬。定藤原部。持統文武。都于和州藤原。大織冠。居藤原宅。天智帝。賜藤原姓。而云大織冠以藤纏鎌。斬入鹿故。爲藤原氏。非也。淡海。近江也。封不比等于近江國。以比齊太公之故事。故號淡海公。而云。讃岐國海人。産不比等。是以名淡海公。非也。且謂房前。爲淡海公。亦非也。房前者。不比等之子也。菅原者。太和國。所名而所謂菅原伏見里也。土師宿禰古人。住于菅原。光仁帝始賜菅原姓。古人之孫。是善。相承爲菅原朝臣姓。右大臣者。是善之子。而所謂北野天神。是也。而云天神生于菅中。如伊尹出於空桑。非也。

柿本大明神略縁起

（柿本社別當　月照寺）

夫柿本大明神は、天の押人命の末葉にて、持統天皇、文武天皇に仕へ給ひて、和歌を以て世に鳴せ給ふ。其元は石見國高角の里に國司仲雪といふ人あり。無子ことを歎て恒に天に祈られしか、一日後園の柿の木の下に少童の立るあり、其姿の偉魁なるを見て是は天より我に給ふ子なりとて、仲雪自抱取養育し、朝廷に奏聞し勅を蒙り親子共に參內す。天子其子の異貌なるを叡覽ありて、汝は何ぞと勅問ありしに、人なりと申させ給へば、人は人なり誰といふ人ぞとありしかば、麻呂なりと申させ給ふ。然は人麻呂といふべしと勅許なされしとかや。誠に觀音の化身にてませし故に諸事人に勝れ給ひしとなん。蓋觀世音菩薩は衆生利益の爲に、神となり、佛と成、六道に遊化して迷る凡夫を救ひ給ふ事御經に委し。此御神も其一つなり。故に石見に化現の日も三月十八日にて御壽六十にて薨せ給ふ。辭世にも石見がた高角の松の木間より浮世の月を見はてつるかな、と有しなり。其跡をたれ給ふ所雖レ多其名高きは明石の浦にしくはなし。實にほの〳〵の御歌世に無類故にや。抑

和歌は天津神の御代より始りて、今の世までも我秋津嶋の風俗となり侍る。中にもほの〴〵の御歌は、上一人の御位より百官卿相、下萬民に至るまで此御歌を崇まし〳〵て人丸を先師とあがめ奉て、和歌を學者此御社に詣でずといふ事なし。扨明石の迫門は西海一の難所にて往來の船風波の難にあふ。昔此灘にて風惡敷已に舟かへさんとせしに御神を祈り丹心に、歌の道船の道をも守るとて明石の浦に跡たれし神、と讀て、其難の遁れし也。また筑紫より盲目の詣でて、ほの〴〵と誠明石の神ならば我にも見せよ人丸の塚、とよみて兩眼忽に開き、撞來し櫻の杖を庭のほとりに立て歸りしに枝榮花咲しと也。又此里に火難の起りし時、常に御神を信仰せし人の家に火既にかゝりしを主人至心に祈りければ、ほの〴〵と明石の浦はやくるとも般若防にてやかでひとまる、と御託宣あらたにして忽火とまりぬ。是を見る人聞人御神の御利證あらたなりとて信仰今に絶ず。是故に此里に火難なし。又難産の人の右の手に御守りを握り、口にほの〴〵の御歌をとなへて安々と平産せしこと國々に多し。其外の利證は筆にも盡がたし。此ほの〴〵の御歌は、一字に千里を含て眞言陀羅尼におなじ。去に依て毎朝三反七反乃至百反至心にとなへ奉れば、惡事災難を遁れ諸願成就疑なし。此外は古縁起石碑に委し。

註。右は横一尺四寸五分、縦一尺五分の一枚紙に木版刷にし、總振假名にしたものである。今その振假名を略す。

櫟本の柿本寺略縁起

柿本寺修理勸進趣意書

昭和十一年七月十四日、大阪每日新聞奈良版に、大和添上郡櫟本町柿本寺を訪うた大和史會の一行が、同寺の物置から縦七寸、横四寸ぐらゐの版木を見つけた。これには、人麿の像と、「正一位人麿大神」、「我宿のかきのもとまでやけしとも一こえたのめそこで火とまる」、「大和國添上郡柿ノ木村柿本社」とが彫つてある。「燒けしとも」、「一聲頼め」といふ意味で、人麿を火除けの神としたその神符の版下であつたのである。

そのほかに、寛政年間に住吉廣行の描いた人麿像、寶暦年中柿本寺修理の勸進趣意書、文化十五年櫟本の歌人中村訓榮（今の中村三二氏の曾祖父）の歌塚類題和歌集出版投稿規則の版木その他の版木二十餘枚が發見せられた。

なほ弘化三年十一月發兌、柿本社中藏板、菊田政史編の「櫟本十景」といふのもある。これは城戸富全の漢文の序と、跋に菊田政史の「詠十景長歌並短歌」があり、その間に、十景の繪と和歌とがあ

る。なほ、享保十七年に森宗範等の建てた人麿歌塚碑陰記（總論篇に收）、寶暦十二年の柿本寺略縁起の木版もあるが、暫く發行せずにゐたのを、最近櫟本町の中村三二氏が印刷して人に示した。その『柿本講式云』に、『柿本大夫はたかく神妙の思ひをふるひ獨古今の間にあゆめり。此道に仰ぐべき誰か敢てかたをならぶるものあらむ。仍柿本大夫を迎へたてまつりて、あしはら中つ田のことわざをのべんとなり』とある。

柿本寺略縁起

和州添上郡櫟本郷治道山柿本寺は、古へ柿本人麿此地に伽藍を建立し給て、堂舎佛閣甍をならべ、結構美を盡せる靈場たり。それ人麿は奈良帝（みかど）和歌の御師範にて、古今獨歩の歌仙たる事は萬人後代までよく知れる所也。そのかみ歌神石見國高角（たかつの）にて仙昇（せんしよう）有しとはいへども、遺命有て尊骸（そんがい）遠くのぼらせ給て、此地に葬し奉るゆへ自然と歌塚の名千歳ながく稱せり。則柿本講式又藤原清輔朝臣家集或は裄葉集の中には殷富門院の太輔こゝに詣（まうで）有し事をのせ、鴨長明の無名抄にも此所の事を記（き）せり。かゝる名刹たりとはいへ共、星霜一千餘年を經ぬれば、雲を凌ぐの殿堂門廡（もんぶ）も今たゞ一宇一院のみを存して、その堂塔の有し所いま礎石さへ定かならず。すべて田畝となりて傳記口碑ばかりに傳ふばかり也。かくて殘つる寺門さへ軒は傾き棟宇苔を生じて、況や寺資たる地尺寸

あらず、修補四方の他力を賴まざれば、一向叶ひがたく、貧道是を悲歎する事既に幾許の年月をへたり。堂外の松風且夕梵唄の聲をそへ、庭前の花紅葉春秋舊規の光彩を殘せり。雨露むなしく衲衣をうるほし、霜雪徒に野情をいたましむ。故に今十方僧俗の信財をこひ、修覆ならむ事を願ふ。わきて風雅の志あらむ人々は年來詠作のかぎり少料をそへ爰に奉納し給はば練若風雨にあるるを防ぎ、後に時を得てあらたに潤色の日あらば野僧の愁眉を開くのみに非ず、高く神聖の照覽あるゝ事なく、僧家は學道を成滿し武門は家運をいやまし好士は其道の奥義をきはめ農商の家は其業の安穩むなしからざるべし。さきに大木村森本宗範並松鄕に今住る藤門因齋志を一にし、國中及洛攝河の雅友をすゝめ、廟中の碑石成立すでに思るがごとく、歌塚の二大字は寶篋寺の宮眞翰を染させられ、碑陰の文は蘗派の老德百拙和尚の筆を勞せり。寺院微にして舊時の佳麗に殊也とはいへども、神聖の擁護はかはらざるべし。古緣起記錄等に猶委しといへども、其一二を書して遠近に告すゝめ侍る。まさに希はくはすべて有信の人々共に信誠を催し給へ。

寶曆十二年壬午十一月吉辰　柿本寺現住師政謹書

人麿神疫病除け靈驗

人麿神が人間の疫癘を癒す靈驗のあることは、既に「鴨山考補註篇」（六九一－七三頁）に尾崎恒雄、正宗敦夫兩氏の通信を得て記録するところがあつたところ、昭和十年八月二十四日の山陽新報に野田實氏の「久米のさら山和歌宮」が載り、人麿神の靈驗のことを記載してゐる。

私の子供の時には、まだ人麿の影供の像を刷つた神札が、村の辻や家の戸口に貼つてあるのを見たもので、今は全然影を沒して仕まつた。この神札は村の和歌の宮で授けてゐたもので、村に疫病などがあると厄病除けとして、近郷の者は必ずこれを戴いて歸つたのである。

私はこの人麿の影供の像がなぜ疫病除けになるか、そんなことを知らうとも思はなかつたし、もと〳〵村の無智な俗信としか考へてゐなかつたのであるが、世間の經驗をつんでゆくにつれてだん〳〵自分達の祖先の生活史が判つてゆくにつれ、これを單なる俗信とのみ片付けられない深い智識が祖先の間に默々と流れ傳はつて居つたことを覺えるのである。

この和歌の宮と云のは久米郡佐良村に在り今は村社佐良神社境内に移されてゐるが、もとは皿山（嵯峨山）の麓の人家の藪の中に在つたものである。どうして和歌の宮が此地に勸請されたかといふに今さら説明を要さないであらう。『美作や久米の皿山さら〳〵に我名はたてし萬代までに』といふ古今集の大嘗會の歌が古來名高い歌枕となつたが、後に修理大夫顯季が

美作の守となつて赴任した時に此地に人麿の神影を勸請して和歌宮を祀つたといふ。顯季朝臣は和歌を好みかつて都に住んでゐた頃六條洞院の亭に歌神柿本人丸の供養を行つたことがある。古今著聞集に

是は粟田讃岐守兼房人丸を愛み給ひて、其圖繪する所は左の手に紙を取り、右の手に筆を握りて、七旬計の人也、其上に讃を書くと云々。此像を白河院鳥羽の寶藏にこめさせ給ふを申うけてうつし取り顯季信仰ありしと也。

とある。又た詞花集卷九に

修理大夫顯季みまさかの守にて侍りけるとき人々いざなひて右近の馬場に罷りて時鳥まち侍りけるに俊子内親王の女房の車もうできて連歌し歌よみなどして明ほのに歸り侍りけるにかの女房の車より

美作やくめの皿山と思へ共和歌の浦とぞ云ふべかりける

とある如く、顯季は美作守となり和歌に堪能の人であつたから、久米の皿山なる和歌の宮の勸請が此人に結托せられたのかも知れぬが、この宮が古く文獻に殘つてゐるのは津山藩士岡村白翁の『美作風土略』(寶暦十二年)と『作陽誌』である。ところで、和歌宮の人麿がなぜ疫病除けとして崇められたかといふに、萬葉集卷二の人麿が石見の任地に在つて死に臨み自ら傷んだ歌に

鴨山の磐根しまける吾をかも知らにと妹が待ちつゝあらむ

といふのがあり、『和歌童蒙抄』以來、この人麿は單なる病死でなく疫癘などにかゝつて急死したと傳へられてゐることより起つたもので、この歌枕の地に祀られた歌神としての人麿も、さぞ苦笑してゐるだらう。くはしい考證は近日『汎岡山』へ改めて書く約束をしてゐるからそれに讓り、あの人麿の影供の札を保存してゐられる人があつたら、お知らせ願ひたいと思つてゐる。

野田氏の此論文は甚だ興味深いものであるが、ただ、和歌童蒙抄に、「この人麿は單なる病死でな

く疫癘などにかかつて急死したと傳へられてゐることより起つたもので」とあるのはどういふものか知らん。私は試に藤原範兼の和歌童蒙抄を檢したが、人麿が疫癘で死んだとは書いてゐないやうである。

私は「總論篇」（四五頁）に於て、人麿は或は疫病によつて死したのではなからうかと想像し、續日本紀の文武天皇の慶雲四年の條に、『夏四月丙申、天下疫飢、詔加二賑恤一、但丹波・出雲・石見三國尤甚、奉二幣帛於諸社一、又令三京畿及諸國寺讀二經一焉』とあるのをその根據とし、そしてその疫病は恐らく利疫（下痢）を證する疾患のたぐひだらうとしたのは、四月は陽曆の六月に當つてゐたから、利疫の流行時と考へて差支ないのである。若しさうだとせば、人麿は班田使として出張したといふよりも、疫の流行に關して賑恤に連結あるやうな出張であつたのかも知れない。若しも未來に歷史小說でも書くやうな場合があつたら、少くともこのくらゐの根據に本づくものでなければならぬとおもふのである。

さて、私の想像說は右のごとくであるが、若しも文獻に人麿が疫癘によつて死んだといふことの書いたものがあらば知りたいものである。さういふ意味で野田氏の和歌童蒙抄云々のことに注意したのであつたが、野田氏の文は記憶の誤であつたやうである。

人丸大明神碑樹立由縁碑撰文

大八洲のくにの、神のみこととして、心を天地にひらかし、詞を日月にてらしつゝ、目にみえぬ國の境、耳に聞えぬよのきはみをも、つばらかに思ひやり、まめやかにいひもて行ぬるものゆゑ、いかでか鬼かみをも國つちをもあはれと思はせ、かなしと思はせざらめやは、抑此歌よめる事は、天地ひらけはじまりける時より出來て、神より人のよにつたはりけるを、中につき藤なみの名におふみやの大御代、青によし寧樂のおほん時よりぞ、まことにさかりにはもておこなはれけむ、かかる大御代にぞ、歌よめる人もおほける、かけまくもかしこけれ、いはまくもかしこけれ、高く妙なる大御思ひは、ひとりいにしへ今にあゆめりしを、誰かはしのび誰かはあふがざらめやは、ここに此信濃國松城のみちかに、多々羅咸生といへる人なむ、いにしへをあふぎ、今をしのぶこころふかく、ふりたる跡をも尋ね、おくれたるよにものこれよとて、そらみつ倭のくに葛きの下郡、柿本といふ處になむある、大御おくつきにおひし青き苔をもとめつゝ、ここのはに科の郡、磯並の宮の

かたへにおさめ奉り、移し奉りけり、こは安永の初つかたの頃になむある、さるを其同じ友がきなりし藤原忠興、月にも花にも一つ心なりける昔を思ひ、露も霜もふりはてなむ後のよを思ふもの故、かつは大明神のめぐみをあふぎ、かつは友がきのいさをしをとどめむとて、それを石にゑりつけなむ其事をものせよとて、おのれ光枝にもとめるならし、抑大御神のみたまは、天にもつちにもみちたらむものから、いづこにもとめ、いづこに移し奉らむと、ま心のむかふ所にあらはれますらむ事、たとはばひびきの聲にあへるごとくありなむ、いでかくしあらば、彼大御いつくしみをあふぎつゝ、天地にうけ奉らむはさることにて、ふりぬべき後のよにもおなじ心ならむ人、是をきかむ時、遠く藤原の宮のひじりのみよをしのび奉り、ちかく寛政の徳にむくひ奉らずやあらむ、石にきざめるいさをしここにあらずやも、かかればそのことばにいはく、

みすゞ苅かた山かげにうつしもてみかげたかくもあふぎつるかも　藤原光枝

これは長野縣埴科郡東條村字中川天王山麓玉依比賣神社境内にある人麿碑に因んだ由緣碑の大村光枝の撰文であつて、人麿碑といふのは高さ凡そ五尺、幅二尺、自然石、表面に「人丸大明神」、「前黃門郎公夏書」とあり、向つて右側に、「以和州柿本村人麿冢之苔埋于玆」とあり、向つて左に、「安永四乙未春三月吉日」と彫してゐる。この、「人丸大明神碑樹立由緣碑」はそれに隣るものであつて、光枝の撰文は恐らく寛政六年秋のことであらうか。この撰文中にも「寛政の德」とあるし、な

ほ國雜解といふ光枝著の奥書に、「寛政六年とらの秋なが月しなのの國はに科のこほりちくまの河のほとりなる旅ねのやどりにてしるしぬ」とあるからである。なほ松代藩と光枝との關係につきては、山田孝雄博士の、百二十年にして世に出でたる萬葉集誤字愚考(アララギ第廿四巻第一號、昭和六年一月)といふ文に委しい。撰文は一志斐雄氏の好意によつて知ることを得た。この由緣碑は高さ三尺二寸方一尺である。なほ、文政の頃この碑のある宮の神職であつた小河原重賡の日記の一節に次の句がある。「三月十八日、人丸明神祭、早朝注連等張候事、上座敷に人丸神像飾り候事、机二ッ重、人丸像上箱に紙を敷き、其上に神像、安置し奉る前に神酒盃臺硯筆紙(但唐机置き此上に備へる)置く、人丸明神に參詣致し立寄、神像拜禮の人へ神酒等出す」云々。右、一志斐雄氏が、昭和十一年二月十一日附の通信に據つた點が多いことを感謝する。

小室氏　人麿明神緣起

昭和十四年六月廿七日、山口卯太郎氏、小室源さんの來訪を受けた。源さんの女が山口氏夫人で、小室氏は秋田藩士族であるが、家系を溯れば、柿本姓で、『傳ニ正三位柿本人麿之末流云云』といふから、源さんも人麿の子孫といふことになる。私が「柿本人麿」を著はしたことが偶山口氏の耳に入り、また今年大阪放送局で萬葉に關する坐談會吉澤義則、川田順、花田比露思、半田良平、森田たま諸氏があつたとき、人麿の傳記についでは何も分かつてゐないといふことを源さんが聞及んだので、その人麿傳の參考になるだらうかとおもつて來訪せられたのであつた。そして種々示された中に、「人麿明神之緣起」と、「柿本氏小室系圖」とがあるから、それを手抄して置くのである。

人麿明神之緣起

野州下野國宇都宮大明神者、柿本人麿靈神、是小室之元祖也、因ㇾ茲小室代々宇都宮大明神奉ㇾ崇ニ

氏神ハ、後秀只、慶長元丙申歲九月廿九日爲二御堂一造榮、則別當紫雲山寶勝院有二云者一、然所秀年代ニ依二養子一知行被二召上一、仍爲二困窮一、右寶勝院滅後、寶勝院儀諏訪之別當移二長善院一、右之依レ分長善院明神別當賴レ之、其後依二祈禱所一賢固山金照寺賴祭レ之者也、享保貳丁酉四月、秀將自刻二人麿像一堂椨、武運長久祈之爲、奉納誹諧千句納、是享保三戊戌歲閏十月廿九日賢固山金照寺開二眼之一、猶爲二子孫之一緣起如レ件

享保三戊戌歲

閏十月廿九日　　　秀將（花押）

柿本氏小室系圖

○光聖常　後漢國人也

正王　丹波矢田部柿本村人醫術通神靈變聲溢天下以醫心方三十卷選成公家時則人王三十三崇峻天皇御宇人也

阿智王　無官無位

高貴王　孝德天皇御宇仕曾我入鹿討位四位下丹波宿禰醫術博士

駒子　天智御宇仕藤原千方記供尼共討於此始賜坂上性紛

弓束　天武天皇御宇仕醫術自典藥頭

人麿　持統文武朝仕位從三位進柿本村家任故柿本氏號歌人也和銅四年三月十八日卒是則宇都宮大明神也

益麿　參議元明元正朝仕典藥頭施藥院主施外星殿聽禁色雜袍

清麿　聖武天皇之朝仕從三位昇大友魔取有戰軍忠故官大納言至

梟麿　稱德朝仕位從三位昇歌人風土記作者也

瀧麿　桓武平城朝仕平城天皇御宇天下將成宇都宮家任（住）。瀧麿ヨリ分坂上氏及宇都宮家ニ至故ニ坂上與小室之祖ナリ。

實行

秀頼　淳和天皇仕四位上進

胤秀　仁明文德之朝仕四位上進

秀正　文德清和仕四位上進

清秀　陽成院仕位從五位上

秀繼　柿本氏右衛門佐　武家下信濃國小室之宿家任（住）。孫兵衛秀將傳曰、小室ハ下野國白澤ノ内ナリト。但小室ノ臺ト云。秀精考ルニ、中古之先祖子細アリテ下野國ニ下リ年久居住シテ其臺ニ小室ノ名アルヘ（べ）下野ノ白澤ニ小室ノ臺アリテ是ヲ所トシタルニハアルベカラズ。

秀胤　小室冠者右衛門佐
依柿本氏崇是愛柿

秀次
秀行
秀方
秀宗
秀門
秀綱
秀宣
秀政
秀光
秀義
秀綱
秀只

土佐守下野守長久元庚辰年十二月十日七十八歳卒

小室冠者信濃國小室ニ居也、延文元年二月廿六日六十三歳ニテ卒。

（中略）

勘三郎、勘右衛門、上佐守、文祿四乙未年六月二十八日卒。常州水戸志加之御番ヲ勤ム。

後ニ秀光ト改、上左介、孫兵衛、常陸ヨリ參。慶長年中大坂戰場ヘ義宣公御供ス。寛永二十一年二月廿六日卒、行年七十五歳、法名來阿彌陀佛。秋田之城外常盤山龍泉寺ニ葬ル。家傳云、一小室者柿本氏之末ニテ野州下野國白澤ニ小室ノ臺ト云所有リ、右ノ地名ナリト申傳。同國宇都宮大明神者小室之氏神也。因テ秀只慶長年中宇都宮大明神ヲ勸請、屋敷ニ奉建所之氏神堂是也」

（下略）

卽ち秋田の小室家は秀只にはじまるが、信濃、下野、常陸と關聯して、常陸から秋田に移住し、連綿として今に至つたこととなる。人麿明神緣起に署名した秀將（ひでまさ）といふのは、元祿三庚午年三月二十二日生である。

按ずるに、今の宇都宮市に鎭座の國幣中社二荒山神社は舊名宇都宮大明神であるが、祭神が人麿でないことは明かであるのに、和漢三才圖會に、『在二宇都宮城艮一、社領千七百五十石。祭神柿本人麻呂靈』とある。それについて、地名辭書に、「是は當社の寶庫に、古き人麻呂の畫像あれば、其をやがて神體なりと思ひ違ひし非事なるべし」とあるから、或は、小室氏の人麿明神も、和漢三才圖會と同系統の傳說に據つたものであらうか。誰かの考證を聽きたいものである。

出雲伯耆より姫路・新見

昭和十一年五月一日附を以て、島根縣八束郡の果山氏から來書があつて、德川時代の山陰山陽の交通筋を報じて與れた。出雲・伯耆邊の人々が山陽道に來る道は、例へば伯耆會見郡溝口からならば、一方は四十曲を越え、大山の麓原を過ぎ、大山を左に見て作州に出で、作州津山の城下を過ぎ、姫路に出た。一方は二部から福岡・黑坂・神戸上を經て備中の新見に出た。今參考として文政三年四月の道中日記を抄すると次の如くである。

四月十五日。發足致し米子迄船にて見立人母其外共方頭分廿人計り米子にて盆いたし分ル夫より溝口泊り。十六日。一、三十四文坂井原中飯、一、貳十五文はね茶代、一、三百六十文三鴨泊り。十七日。一、三十文久せもち代(同所にて中飯)、一、十貳文福頭町わらじ、一、三百文津山より勝間田馬代、一、四百六十文津山泊り。十八日。一、三十五文なら原村中飯、一、十文新見茶代、一、三百八十文佐用泊り。十九日。一、三十五文千本中飯、一、廿文林田久保埼茶代、一、四百文姫路泊り。廿日。一、廿文小遣ひめじ、一、貳百文高砂中飯(以下略)

なほ、果山氏は文化三年渡邊靱負の道中日記を抄して與れた。これは距離を明細に書いてある。

松江 二リ七丁 出雲郷 三リ四丁 安來 米子 二リ九丁 溝口 一リ 法正寺 三リ 二部 一リ半 根雨 二リ 板井原 二リ廿丁 新庄 一リ半 三鴨 三リ 勝山 二リ 木山 二リ 久世 一リ八丁 坪井 三リ 津山 三リ 勝間田 三リ 土井 四リ 佐用 三リ 三ヶ月 二リ半 千本 一リ廿一丁 此角崎 二リ十六丁 餝西 一リ半 姫路

果山氏は、若しも人麿が松江を通り米子まで來て、山陽道に來るやうなことがあつたならば、かう道筋を通つたのではなからうかとも想像して、通信してくれたものであらう。私は果山氏に感謝して居る。

あての木

昭和十年一月三十一日の大阪毎日新聞島根版に、「九〇〇年前航路標識あての木を河底から發見、石見高津海岸大津浪の生々しい慘害の跡を物語る」といふ題で、高津河の底から巨木を發掘した。それは古へ人麿を祀つた鴨嶋に聳えてゐた大樹で、恐らく石見海岸を往來する船の命とも賴む航路標識ではなかつたらうかといふのである。私はこの結論は信せないが、興味ある記事だから次に轉載する。

今を去る九百年前石見海岸を襲つた萬壽三年五月の大海嘯に跡方もなくこの地上から姿を消したと傳へられる島根縣美濃郡高津港海岸唯一つの航路標識——あての木が目下改修工事中の高津川廿尺の河底から數日前發見され今さらながら當時の生生しい慘害の跡をもの語つてゐる。

發見された場所は高津河口から約一里上流の高津町大字飯田地內鐵道線路西側の河中で百馬力の威力を誇る鋼鏈式掘鑿機を使用して同附近に堆積する十二萬立方メートルの土砂を掘鑿作業中偶然にも掘當て同機械の力をもつてしても如何ともすることが出來ないのでチェーン・ブロックを使用連日數十人の人夫が交替で漸く巨軀を地下から掘起したものである。

この埋木の長さは約六十尺、周圍三十尺といふ素晴らしい巨木で樹齢少くとも五百年は下るまいといはれ結局二千年前から同海岸にそゝり立つてゐたものと推定されてゐる。

ところがこの謎の巨木をめぐつて次のような奇しき傳説が今もつて傳へられ飯田部落の古老がひとしく口を揃へてもの語るところはかうである――

萬壽の大津波で人丸を祀つた祠のあつた鴨島の東端を當時高津港の入口にそびえてゐたあての木から見透しさらに牛の角三本ほどの東寄りがそのころ千石船の通ふ航路になつてゐたもので大津浪以來海岸の地形は見る影もなく一變し同時にこのあての木も高津海岸から永遠に姿を消したといふ、いはゞ巨木あての木のあては的の意を現し石見海岸を往き來する船の命とも賴む航路標識になつてゐたものらしい。

かうした傳説の主人公あての木が九百年を經た今日發見されることを誰が豫期したことだらう、人々は傳説のいつはらざることを奇跡の如く信じ異口同音に驚異の眼を見はつてゐる、しかしこの埋木あての木が植物學上何科に屬するものであるか斷定を下すものがなくそれだけにとけぬ謎として數々の話題を提供してくれるわけである。

高津川改修事務所ではこの意外な掘出しものに對して近く學界の鑑定を乞ひ正體をつきとめることになつたがいづれにしても珍しいものだと毎日おすな〳〵の見物人で黑山を築いてゐる。

【武江年表】卷七

文化年間、淺草寺奥山三社權現の後へ、人麿の社を建る。社邊に山吹萩の類を栽、景色を造れり。

【遊歷雜記】人丸の社前岩本乾什が碑。同寺 淺草寺 境内人丸大明神の社前に乾什が碑あり、これは享保の頃淺草竹門に住し、俳諧を業とせし、岩本乾什といひしが、彼日本橋品川町に名たゝる河東ぶしの初代河邊や藤右衞門としたしく交り、河東節の文句を數多作りて、標題を竹婦人となづけたり、貴志沾洲の門人にて、はじめは吳丈と號し千蔵兒と稱しけり、俳諧の風は律儀にして當世のごとくの杜撰にはあらず、寶暦九己卯年二月十七日歿す、歲八十一、文化十二乙亥年に至りて最早五十七年におよぶ、死後乾什が四季の發句を鍛付て、社中打寄て碑を建たる也、これ乾什生涯ふかく人丸明神を信仰せしまゝ爰に建しが、碑左のごとし、

寶暦九卯年如月十七日　鷹一叟卒

雪解けや八十年のつくりもの

すゝしさや現に聞し物かたり

月今宵足跡つかぬひかりかな

立寄と花に追寄としのくれ

寶暦十一年仲冬十七日建之發起一杜

珍重庵

造立　雪齋

○註。遊歴雜記五編十五卷は小石川小日向水道町廓然寺（眞宗）前住釋敬順（號十方庵、名大淨）の著、その第二編には文化十二年七月無德齋眞人榮道の序あり、原本内閣文庫所藏、江戸叢書四所收

【砂子の殘月】下。湯島本郷上野邊。日暮淨光寺内に人麿社あり、人麿塔は、南部（都カ）柿本寺にあり、又和州初瀨の近邊にある歌塚、是人丸の墳墓なり、又洛西の鳴瀧妙光寺人丸堂あり、木像は俊賴の

作なりと人いふ、播州明石にも又あり、各三月十八日御影供を修す、是人丸忌日なり、人丸終焉の地は石見の國なり。

○註。著者未詳、原本は東京文理科大學所藏、幕末の著述、江戸叢書九所收

【住吉三神號大事】 ○備前吉備津彦神社所藏

住吉三神ハ日神ノ御異名也假令夜ハ日光北方ヘ遶坐ス、是則地ノ底ヲ御通遶アルナリ、其時ハ底筒男神ト申、又ハ底土命（ト脱カ）申、東南ニ現坐ス時ヲ中筒男神ト申ス、又ハ赤土命ト申ス、西乾ニ現坐ス時ハ表筒男神ト申ス、又ハ磐土命ト申、三聖者、衣通姫、赤人、人丸是ナリ、底通ヲ衣通トシ、明（アカ）日（ヒ）ヲ赤人トシ、日留ヲ人丸トス、皆是本名を秘スル故也、衣通姫ハ底土命ノ化現也、底通日同訓也、赤人ハ赤土命ノ化現也、明日ノ同訓也、

人丸ハ磐土命ノ化現也、日留ハ磐土ノ習ナリ、假令磐ト表トハ五音相通同訓也、故表筒ト磐土ト同名也、乾方ハ天ナリ、西乾ニ日留坐ス心ニテ表筒ト申ナリ、右能思惠、深憶陪、

○註。右は京都吉田家（代々神祇長上と稱す、神祇大副となる、全國神職の過半を支配す、唯一神道傳授の一である。足利末期のものか、或はもう少し下りても徳川初期のものであらうか。

【雜說囊話】（林自見正森輯錄）

或ハ曰、柿本人丸有レ故謫セラル上總國山邊ニ。時加フ萬葉集判者之內ニ。其時改メ姓名官階ヲ號ス正三位山邊ノ赤人ト。因テ人丸赤人ハ一人二名也ト云。

【尾張志】春日井郡 禪宗曹洞派 寺院

林泉寺　田幡村にあり、吉祥山と號し、熱田の圓通寺末也、はしめ永泉寺といひて、熱田の田中町にありしを、享保十二年二月こゝに移し、寶曆二年今の寺號に改む、本堂、十一面觀音の像を安置す、柿本朝臣人麿社、境內にあり、勸請の年月定かならず、頓阿法師の作れる人麻呂の尊像を安置す、

柿本神社參拜記念

【高津の柿本神社】

高津の柿本神社には、正一位々記、宣命、太政官符等の寶物あることは、既に總論篇で記したとほりであるが、その他、明治三十一年四月八日宮內省より、思召を以て萬葉集古義一部御寄附あらせられる旨の達があり、大正十二年三月十六日には、千二百年祭執行につき、明治天皇御集一部と幣饌料百圓御寄附あらせられる旨の達があつた。なほ名士の短冊色紙のたぐひ多數にのぼつて居る。また、人麿木像の安置せられてあることも既に記載したごとくである。

その他、高津の柿本神社でも、參拜記念のみやげとしては杯、箸のたぐひ、今ならば繪ハガキ等を賣つてゐること他の神社とかはりないが、ここに特有なのは、「筆草」といふのがある。「高津案內」の文は次の如くである。

柿本神社境內に筆柿と云ふ柿の樹あり。此の木老木となれば、其の穗をつぎて植ゑ、古より今に至りて絕えず其の葉は殆ん

ど櫻に似たれども、實は正しく柿にして其形極めて小さく、尖端やゝ黒みを帶び筆の穗の如く珍奇のものなり。近き頃里の熱心なる崇敬者の家門に、偶然に生出たる柿樹あるを見出し、當社に獻木せんとして極めて注意を用ひ愛育せしに未だ幾年ならずして大小種々の筆柿結實し年々變る事なき有樣に、愈神異の感に打たれ鄭重に手當して境內に獻木せる事あり。又此地の濱吹上の松原の海邊に盡くる邊りに筆草とて筆に似たる草の生ひ出づるあり。此草全く莖穗共筆に似て又書用を辨ず。柿本人麿朝臣御幼少より常に此を用ひて、言の葉を記し給ひしと言傳ふる尊き緣由により雅客の珍重する所なり。

この筆草のことは、柿本神社にふさはしい草であるが、その他にも記事がある。蒹葭堂雜錄には、諸國筆草の圖とその說明とがある。

攝播の海邊に生筆草といへるあり初春より青葉を生ず其葉細長く緣に細かきぎざあり小なるは葉の長さ七八寸大なるは一尺三四寸もあり大概菅葉の如し冬に至つて葉枯又春を迎へて葉生ず年々如此にして根絕る事なし冬の頃風烈しく吹て海あれ濤岸を穿ち磯邊の土砂を吹上るときに至つて自ら草の根あらはれ出る是を採て乾からし筆に製す筑前國にては天生筆といふよし伊勢國の海邊にも生ず又信州安曇郡千國村の山中にも生ず是は夏の日とりて日干よし北國にては蓮如筆と稱す是は蓮如上人始めて此草にて書せられし故斯は號くといふ尤北國に生ずるものは長みぢかし全く寒氣強きゆへなるべし　尙石州の海岸よりも出す攝播の海濱に生ずるもの圖のごとし

その他、北邊隨筆にも蓮如上人の筆草のことを記し、本草綱目にある蒒草で、弘法むぎとも云ふと云つてゐる。なほ、半日閑話、遠山著聞集等にも記事がある。要するに、筆草は蒒草、濱むぎ、弘法むぎのことであらう。

【明石の柿本神社】

明石の柿本社參拜記念のみやげ類にもいろいろあるが、津田驚三氏から贈られたみやげのうち、大きい貝の内面に「ほのぼのと」の歌をかき、小さい陶製の人麿が寵るやうにして入つてゐる、人麿の衣は青色をしてゐる。またもう一つの陶像人麿は黒色の烏帽子をかむり、黄色の衣を著てゐる。もう一つの陶像は黒褐色をしてゐる。さういふ種類の人麿像がいろいろある。次は酒杯であるが、この小さい杯の内面に人麿の像がいろいろ描いてある。あかし人丸盃と稱して居る。その他、人丸山名産酒茶の良媒盲杖櫻、明石名産さくら漬等、これ等は「ほのぼのとあかしの神ならばわれにも見せよ人丸の塚」といふ物語に因んで、人麿に關係があるのである。

それから神社の御いただきもの、柿本神社御大祓、柿本社御守護、柿本社火災除御守護、柿本社御祈禱御守護、柿本神社御大麻、柿本神社御筆柿、御神供。

それから、明石人丸山柿本神社の人丸像、(畫仙紙に印刷ほのぼのとの歌あり)。柿本人丸碑銘(總論篇に收む)、縣社柿本神社案内(スタンプ柿本神社、人丸山縣社柿本神社社務所)、繪ハガキ、案内記は最近の撰で、簡明に說明してあつて有益だから左に轉載する。

兵庫縣明石市人丸町一三四三番地

縣社 柿本神社

一、祭神 贈正一位柿本人麿朝臣

一、由緒

(イ)創立沿革 社傳ニ曰ク、仁和丁未ノ創建ナリト。元和四年領主小笠原忠政幕府ノ命ニヨリ、明石郡船上ノ城ヲ赤松山(今ノ明石城趾)ニ建城ノ際、本社ヲ今ノ地ニ遷シ、社殿門廡ヲ改造ス。此ノ移轉ノ際城内本丸ニモ小祠ヲ建テ、分靈ヲ祭祀シ、舊蹟ヲ止メタリ(今城内本丸ノ西南小丘ニ舊蹟ヲ存ス)。明治十二年十月六日、郷社ニ加列。大正元年十一月十四日神饌幣帛料供進神社ニ指定セラル。大正十五年三月二十三日縣社ニ列セラル。

(ロ)皇室ノ御崇敬 中御門天皇、享保八年柿本朝臣ノ千年祭ニ當リテ、同天皇ハ吉田侍從ヲシテ神位神號ノ宣下アリ。卽チ同年正月十九日、京都所司代松平伊賀守ヨリ上京方示達アリ。同年二月十八日、傳奏中院邸ニ於テ中山大納言及中院大納言列座ノ上神位正一位神號柿本大明神ト宣下。奉書拜戴ス。尙寶祚延長歌道繁榮ヲ懇禱スベキ旨ヲモ命ゼサセ給ヘリ。○仙洞東山天皇ノ御時、傳奏東園邸ニ於テ、東園大納言坊城大納言列座ノ上、三ケ年間寶祚長久御歌道繁榮ノ勅願ヲ命ゼラレ給ヒ、勅使桂雅樂御撫物ヲ御光臨在ラセ給ヘリ。○法皇後西院天皇亦三ケ年間毎月十八日御祈禱スベキ旨ヲ仰セ出サセ給ヘリ。○櫻町天皇延享元年初秋、仁和寺宮御執筆正一位柿本大明神ノ額ヲ御寄附アリ、同年八月廿八日同天皇ノ古今集御傳授ニヨリ、傳奏久我大納言葉室大納言列座ノ上七日間ノ勅願ノ命アリ、御撫物御臨光在ラセ給ヘリ。○桃園天皇寶暦十年、古今集御傳授アリ、傳奏姉小路大納言廣橋大納言列座、御撫物臨光在ラセ給ヘリ。○後櫻町天皇古今集御傳授ノ節、明和四年御撫物御臨光アラセ給ヒ、御製御短冊五十首ヲ御奉納アラセラレ、同年四月廿九日傳奏前大納言姉小路ヲ以テ同年以後永年勅願所ニ仰出サセラレ、以テ寶祚延長國家太平歌道繁榮ノ御祈誠ヲ抽デ、毎年三月祭祀ノ後傳奏ヲ經テ如例御

守札獻上、其御撫物返上ニ及ビ、然ル上尙更ニ申請被是聊モ疎略無之樣進退スベキ旨仰出サレ候趣御室御所ニ於テ達セラレ、爾來御歷代每年御撫物御臨光慶應二年迄奉仕シ來リシモ、同三年正月御沙汰ニヨリ御撫物奉還セリ。○明和八年三月十日ヨリ四月十日迄臨時大祭典ノ節御進納物。禁裏御所ヨリ、白銀十枚御臺付。女院御所ヨリ、白銀三枚御臺付。仙洞御所ヨリ、白銀五枚同上。准后御所ヨリ、白銀三枚同上。○文化十一年三月三日ヨリ四月三日迄臨時祭典ノ節御進納物。禁裏御所ヨリ、白銀十枚御臺付。東宮御所ヨリ、白銀三枚御臺付。中宮御所ヨリ、白銀三枚同上。○大正天皇ノ御時、大正五年四月五日、東宮殿下關西地方御行啓ノ砌御參拜在ラセ給ヘリ。

（八）武門武將の崇敬　天正六年春、羽柴筑前守秀吉織田信長ノ命ニヨリ、中國征討ノ軍ヲ進メ當地ニ來着シ、三木城主別所小三郎長治ニ勸降ノ軍使ヲ遣セシモ、長治是ニ應ゼザレバ、愈三木城征伐ト決シ、當神社ニ其ノ軍利ヲ祈リ、同七己卯年三木城ヲ圍ミ、同八年庚辰年正月十七日落城トナリ、同九年四月十一日附ヲ以テ當神社ニ三十石ノ領地併山林竹木諸役ヲ免ゼラル。其ノ文ニ曰ク、播州明石人丸社者和歌第一神仙而諸願之靈顯甚速也仍之大明石村新開之田地高三十石寄附之畢並山林竹木等永免除之全可受納也。天正九年四月十一日。筑前守、秀吉花押。別當坊。○元和二年丙辰年、小笠原左近太夫忠政當地ヲ領シ、居城ヲ舟上ヨリ赤松山ニ移轉ノ際、德川二代將軍秀忠公ノ命ニヨリ、姬路城主本多美濃守城地見分小堀遠江守奉行トシテ築城ニ際シ、元和四年今ノ地ニ移リシ事前述ノ如シ。又築城ノ爲元ノ社領地大半ハ家中ノ屋敷ニ充テタルニヨリ、替地トシテ明石郡長坂寺村ニ於テ三十石ノ領地ヲ寄附セラル。同四年正月十六日生木伊勢ヲ人麿廟社ニ抱ヘ、大藏谷村ニテ高五石ヲ充テ、同四年八月十三日巫子屋敷（龜ノ水西側）下渡サル。同七年五月二日中庄村ニテ、十石ノ領加増（高合セテ五十石）、境內山林竹木諸役免除（采邑私記）及市川惣助原與右衞門ヨリ山林境目添狀等下附ノ由、慶安元年八月十七日德川三代將軍家光公ヨリ社領四十石ノ朱印ヲ賜ヒ、別ニ社樂料五石ヲ寄附セラル。其ノ文ニ曰ク、播州國明石郡人丸社々領同郡長坂寺村ノ內三十石中庄村ノ內十石之事任先規令免除之如有來永不可有相違者也。慶安元年八月十七

日。朱印。○靈元天皇寛文四年冬、松平日向守源信之人麿卿碑銘ヲ廟前ニ建設、今尙現在セリ。弘文院學士林子撰ナリ。○同八年七月、松平日向守信之御本殿及幣殿ヲ修補シ、又延寶四年二月本殿屋根替ヲナス○元祿四年四月松平若狹守直明本殿其ノ他修補ス。○寛永六年七月松平左近衞督直常本殿拜殿鐘樓等ヲ修補ス。○寶曆八年八月廿二日松平左近衞督直純本殿ヲ再建ス。○寛政十一年十一月二日松平左近衞佐直周御本殿ヲ修補ス。○明治十八年拜殿改築。○大正元年社務所新築。○大正十一年人麿公千二百年祭ニ就本社屋根ヲ銅板ニ改葺ス。

其ノ他

(1) 盲杖櫻　昔筑紫ニ盲人アリ、ハルバル此社ニ詣デ、『ほのぼのとまこと明石の神ならば我にも見せよ人麿の塚』、カクナン詠ミケレバタチマチ二ツノ目ヒラキテ始メテ物ヲ見ルコトヲ得タリ。盲人ヨヨナフヨロコビテカ、レバカトタノミシ杖ハ用ナシトテ廣前ニサシ捨テサリヌ。然ルニ其ノ杖ヨリ枝葉生茂リ來ル春毎ニ花咲キヌレバ名付ケテ盲杖櫻トゾ云フ。

(2) 御筆柿(御神木)　播磨潟明石ノ浦柿ノ本ノ宮居ニ柿ノ古木アリ。昔此ノ神持統文武ノ朝ニ仕ヘ給ヒシ時石見ノ國ヨリ都ヘ通ハセノ路次必ズ此處ニ立寄ラセ地ノ風景ヲ愛シ給ヒ、或年我ガ園ニ結ビタル草柿ノ實ヲ一ツヽコヽニ殘シ我ガ敷島ノ道ト共ニ榮エヨト曰ヒシニ、果セルカナ芽ヲ生ジ發葉シテ今ニ繁茂シテ年々實ヲ結ベリ。然ルニ此ノ實口ニ含メバ齒ノ痛ミタチ處ニ止ミ、マタ子ヲハラメル婦人此ノ實ヲ懷中スレバ難產ノウレヒ無シトテ、乞ノ人ノマニマニコレヲ授ケヌ(口碑)。

(3) 八房梅(舟形梅)　元祿ノ昔、赤穗城主淺野工匠頭長矩公ノ臣、間瀨久太夫主家沒落ノ砌此ノ地ヲ過リ、大石良雄ト共ニ此ノ神ニ主君ノ仇ヲ討タンコトヲ祈誓シ、鉢植ノ八房梅ヲ自ラ地上ニ移植シテ素願ノ占トセシニ、枝葉繁茂シ無事主君ノ仇モ討タレシニ依ツテ永ク記念セシモノタリ。舊八房梅ハ經年ノ爲メ枯死シ月照寺境內ニアリ。

(4) 龜ノ水　舊參拜本道山麓ニアリ。淸水甘露自然ノ山水ニシテ、四時滾々トシテ湧出シ、旅人ヲシテ慰マシム。此ノ水茶ニ適ストテ茶人ノ間ニ珍重セラル。

柿本人麿御傳

中務卿兼明親王撰

いにしへ、孝照天皇の皇子、天足彦國押人命六代のすゑたえずつゞかせ給ひて、敏達帝の比よりひとしほ時めかせ給ふ事あり。その御すゑ天智の御時に姫みこなりしをめして幸し給ふとなり。しかれどもいまだ此みかどたゞ人にてわたらせ給ひしかば、御心ざしはせちにおぼしめしながら、萬かすかなる御もてなしなり。程へて御くらゐにのぼらせ給ひてその後もなを御うと／＼しきにはあらねど、打つけに角と色めきうち出させ給ふ事のつゝましさに、人しれぬ御あはれみもふかくて、つねに見そなはし給ふを、かしこくかたじけなき事におもひ給ふ。いつとなく月日をなやみあかしつゝ、物やみとなりて里おりすべき事など、つねに／＼なげき奉り給へど、上の御こゝろもいたましうしろめたくおぼしけるにか、やすらかにはゆるし給ふべき御けしきもなし。かくて程へにければ、いとゞ心ちもなやましう打ながめがちにありしも、いやましにくるしかりなやみまさるやうにやおぼへ給ひけん、ひたふるに今はと奏しなげき給ひけるにこそ、御かどの御心もくるしう心もとなきわ

うにはありながら、しぶ〳〵にゆるしおはしましけるまゝ、けふなん里へとてまかり出あひなんとするおりしも、ふときえいり給ふやうにて、御かきのもとにひきかつぎふさせ給ふ。付そへるおもと人などあしをそらに手をむねにあてゝ、こはいかなる事にかとあまたゝび人はしらせ、くすしもとめ出、あるひはしかるべき御いのりなどいへども、にはかの事なればとかくいひなげけどもかひなし。しばししてたすけおこしたてまつり、水など御かほにそゝぎてやう〳〵にかしづくほど、やがて此ところにてなん、おもひがけなく皇子一かたやすくうまれ出させたまへりける。此よしきこしめされし上の御こゝろおもひやるに、かねて心もとなう見そなはし給ひし御ものおもひも少ゆるびたるやうにはおぼしけれど、御かきのもとにて生れ出させ給ふが、つゝましうのみぞ今はおぼさるゝとかや。されども御名を給はらせ給ふとて、御かきのもとになりいで給ふをあらはになづけて、柿の本と給ひ御名を人丸となんよばせ給ひける。この御沙汰もいまだとりあへぬほどに、ひきつゞきてなをなやましうたへちり〳〵せさせ給ふよし、やすらかなる御心もせさせ給はぬに、又一かたの皇子おなじ腹よりつゞきてなり出給ふ。これなん世にいふめる二子とかや。めざましう耻かしき事に今さらおぼしなりにけれど、それをさへおぼしいたはり給ひつゝ名を赤人となん給ふも同じ除目にてぞありける。山邊と姓を給りし事はかくてやまんとおぼすうへにとの御心にかありけん。さ

きだちて人まろうまれさせ給ふが上に、時をもすぐさず又と申がゆへなればなり。あにおとゝ同じみすがたにしも、才などもましおとりなく、ひとへに御父みかどによく似させ給ひながら、二子になり出させ給ふがゆへに、御くらゐにつかせたまふ事はなし、ためしなければなり。されどたゞ人にてもおかせ給ひがたく、うとくもゝてなさせ給はず、やゝ人ならせ給ひては、内外わいためなくまうのぼり給ふ事たゞ人のやうにもゆめつぶやく人もなかりしかど、おもてたちたる時はみづからしりぞきつゝしませ給ひて出まじらひ給はねば、かへりて人はわざとも御そゝのかし申てまいる事もぞおほかりけれ。のち〳〵は持統文武の時につかへ、あるときは志賀の故郷にまうでては春草のながめをなし、ある時はいかづちの岡の御あそびにまいりて皇威のたふとき事をいはひ、芳野のみゆきにはんべりては山のさくらをしら雪かとうたがひ、紀の路の供奉に小松を引てはのちのときはへをねがひ、長の皇子、高市のみこ、新田部弓削のとねり、忍坂部の皇子にしたしみ、泊瀬部の皇子、丹比眞人にもうらなくかたらひまし〳〵ける。あるひは草壁の太子の天位につかせ給はぬをなげき、高市のみこをしたひては、壬申の御いくさのいきをしをつらね、明日香の皇女をおしみ、吉備津のうねめをかなしみては、朝霧夕ぎりの詠歌あり。あるひはあめにみち地にあらぶる物、よつの時うつりかはるにくらべ歌、たとへ歌そのかずあまた度なるめり。ましてその外の短歌旋頭歌相

聞などの諸躰にもこと〳〵く渡りてその妙を得たまへり。赤人もおなじ歌ににてわたらせ給へれども、猶世に高く遠く千とせの今に人の口すさぶものは、このみこやをのづからすぐれ給ひけんかし。中にも羇旅のおもひをのべて、且あかしのうらの詠歌古今におよぶものなくやとぞ。兼て御こゝろにはその時のまつり事をのみかけて、世をあはれび給ふのみふかく心とはし給ひけると見えたり。此ひとすぢにひかれて、赤人とおなじく別れて、おの〳〵ともにはるかなる旅にあそび給ひては、歌まくらの名を後の世にいひわたる事のはしをおこし、月にえいじ花にうそぶきつゝありきのみしておはしけるなり。此ゆへにその見めぐり給ふけるあとをとへば、播磨讃岐筑紫のはて、いたり給ふ所ごとによみ歌なきにあらず、おのづから人丸を以て三はしらとし奉るの心にやかなひけん。かしこければしらぬよしをぞ申める。赤人はまた闕のひんかしになんうそぶきありき給ふとなり。かくてそのおひらくを石見のくににゐまして身まかりなんとしける時、歌よみし其妻依羅娘御かへしの歌もあり。時はまさに文武の末にてぞありける。しかるをあるひは聖武の御時もなをいませりといふは非なり。おほきみつのくらゐをきはめ給ひ、爵は大夫にておはせし事は、貫之が説にてあきらかにしれるを、三品にのぼり給へりとあらそひ、又は六位におはり給へりといふ説、みなそれにはあらず。これは國史などにもしるして、天平勝寶のころ、けんたう使の副使に從五位上みちのく

の介王手の人丸あり、山しろの史生上道の人丸などもあり、此ゆへにその異なる姓氏をしらずして、名のひとしきを以て、人丸ある時はもろこしに渡り給ふのひが事をしるして、そのたゞしきよんどころをしらずやありけん。むかしならのみかど萬葉しうをゑらませ給ひし時、人まろのよみ給へる歌、四百首ばかりをひろひとりて入らせ侍るを、貫之もまたしたがひて古今をゑらめる時おほくその歌をとりて入るを、これをおしたふとみ、先師人まろとかけるをはじめとして、後の世の撰集ども皆その例にあらざるはなし。塚はいまなを石見の國高角の山にあり、これそのおはりをとり給ひし所なればなり。

藤原の兼房は和歌に執心ふかく、なをかきのもとの古風をしたひ、月のゆふべ花のあした雨の日風の暮、見るもの聞ものにつきても、かならず歌を詠じて人丸にさゝげ、此みちの秀逸をねがふ心ざしふかく、年月を經て感應あらん事をぞひとへにいのりける。ある夜の夢に見けるやう、所はあふみなるひんかしさかもとのほとりとおぼへて、梅の花さきみてるかうばしき林のもとに、年のほど六十ばかりの人にもやと見えしけだかき人の、おほきみすかたに、さしぬきしたるが、右の手に筆をもち、左にたたうがみたづさへ、おしまつきによりそひ、ふかくかの梅をながめて物など案じ

給ふけしきなり。兼房ゆめのうちにあれは何人の夢に物しておはしけるにかとふしんもはれねば、かたへの人にとふとおもふに、誰とはしらず、あれこそいましがつねにゆかしくむかひたてまつるかきのもとのあるじになんとこたふると見て、やがてそのゆめはうちおどろきてけり。うれしくもかしこく、御見そなはしの程のわすれがたきに、いそぎ繪かく人をひそかにまねき、夢に見たてまつりしありのまゝを、とかくもこのみて、秘藏しつゝ、人にも拜せさせず、我のみさしむかひていよ〳〵秀逸をねがひけるもしるく、歌かずもおほく時のゑらびには入たりけるとぞ。やがてその身まからんとする比、白川のみかどにたてまつりけるを、鳥羽の寶藏におさめられて侍り。其讃に、

梅のはなそれとも見えず久かたのあまぎる雪のなべてふれゝば

といふ歌を能書の公卿してかゝせけるとぞ。其後修理大夫藤の顯季ことに歌道の秀逸を得、みかどにもいとかしこくおもはれまいらせけるまゝに、つゐでを以て奏して彼像を申おろし、信茂といへる畫師にこれをうつさせ、心ゆくばかり表補繪して元永元年戊戌の夏、日をゑらみて人丸の影供をまふけらる。其比の儒に秀たる人なればとて、大學頭藤原敦光にあつらへ此讃をかゝしめたり。清書は源の顯仲ぞ書ける。

倭謌之仙　受性于天　其才卓爾　厥(其)鋒森然　三十一字　詞華露鮮　四百餘歳　來葉風傳　斯道

宗匠　我朝前賢　涅而不緇(涅)　鑽之彌堅　鳳毛少彙　麟角猶專　既謂獨歩　誰敢比肩

此時源俊頼以下の名匠おほく詠歌あり。後に顯季ほの／＼の詠歌を吟ずる事三たび、酒宴してしりぞきぬ。今世に人の影をつくる眞像これをはじめとぞ。但兼房が見たてまつりし夢中の人丸はえぼしにあらずとなり。尤さもあるべし。えぼうしは後の事なれば、顯季くはゆといふ。

化現の人まろと申は、かけまくもかしこきいはれある事にて、おぼろげの人に沙汰し申すべき事にあらずといへども、あら／＼そのありさまをあかさば、和歌の三神をゆるし傳ふる時、太陽の精の地よりのぼるが、此あきつしまをおほひてらし給ふかたちをさししめして、あまてらすおほんかみの御威光といたゞきまつり、やがてそのひかりのかげの西にいりまさんとするを、そのまゝに日留るとなん傳へ來れるなり。人にとりても非をあらたむる時は是とし、これをかしこき人とす。しかれば非をとゞむるはまつたくよき人なりとつたふるがゆへに、君につかへて忠あり、父母にしたがひて孝あり、女にまじはりて信ある時まことある人なるべしとぞ傳へて侍り。

權化の人まろと申あり。住よしの御神を申なり。御いみなを人たると申、又文武天皇の御いみな

は山丸なり。我本身の名の一字と帝の御名の一字とを取て、人丸といふとはいぶかしき説なり。これに三神の傳を書かすめしといふ説もあり、又しらず書にかきたりといふ説もあり、そのいぶかしきはよき人につたへてたゞしき説を聞てぞ、むねははらし侍るべきにや。

右一帖は時のみかどより勅問の事ありて傳へおける一ふしをなんかきつらね、奏覽にいれなんとするの草なり。火中にすべかりけるを、人にこはれてかくなん。

此本甲州儒醫傶三節より懇望して終に如本意傳畢

超大極秘人丸傳

人丸は、石見國堵田といふ所の人家の柿のもとより、童形にて出現ましますﾞ、尤仙人也、沒期も同所也。人丸集に

石見國にてなくなりぬべき折よめる

はも山の岩根しまける我をかもしらずて妹か待つゝあらん

説々多けれども、家集にある上は是に可決擇、時代は日野敦光卿人丸尊像の贊に、仕持統文武之聖朝云々、人丸之時代清輔袋草紙などに、さま／＼あれども、天智、天武、持統、文武、元明、元正此六代ありし人也。紹運錄曰、人王五代孝照天皇、(略)天足彦國押人命、柿本の祖とあり、亦敏達天皇の御末ともいふ。吉田神龍院兼倶曰、宇津宮大明神は人丸也、社頭の軒近く大木の柿木あり、花表の額に、日光大明神とあり、是にても日神の化現彌決せり。塚は歌塚とて、和州に有、勸請の社頭も舊跡も余多あれども、爰に不入事なれば略之。

續日本紀云、光仁天皇の御宇に、人丸三月十八日うせ給ふよし、其日諸國より同時に禁裏へ奏聞せしと也、然れば光仁天皇の時代まで在世と見ゆ。袋草紙に、萬葉集に入たる人丸の歌などを以、年數を考へられたるを見れば、凡百五六十年に及べり。信用しがたき事ながら、仙人なればさも侍るべし。人丸已前さもなき人の時代在世さへ正しくしるしとゞめたるに、古今に獨歩の人丸年記不知謂なし、是以神妙不思議と知べし。

人丸入唐の事、拾遺集に、

もろこしにてよめる　　柿本人丸

天飛やかりのつかひにいつしかもならの都にことつてやらん

如此集に出たれば、入唐の事うたがふべからず。惣じて撰集ほど物の證據に成ものはなし、いかにとなれば、詔を受て撰み、えらび終りて奏覽に入れば也。外の書籍はさもなし、依て撰集は公界のものなり、されば物の證に急度たつなり。

人丸圖像切紙曰、兼房朝臣云、諸道に祖師の像をうつして仰ぎ貴む事也、然るに歌道に其儀なし。人丸此道の祖神也、此像を圖し留めざる事遺恨なりと、常におもはれしに、或夜夢想に現じましま す。翌日、繪師にかゝしめて、白河院へ奉らる。帝大きに悅ましまして、御信仰なゝめならず、其

後宇治の寶藏にこめられしなり。絹一幅、長三尺、烏帽子直衣也。六條修理大夫顯季此像を申出し、影供を行はれけり。影供の時、一座の題に一首通り題にて、水風來晩といふ事を各詠ず。俊頼朝臣上首たり、道の規模なるべし、鳥羽院永久元年六月に始て行はる。阿波國里海士といふ處を影供料に被ㇾ下、其後中絶したるを、光明院の御宇に、安堵ありて、顯季の末孫隆轉朝臣ふたゝび影供を行れける。日野資宣卿を請ず、任₂先規₁例一首の通り題也。

初秋風　　資宣朝臣

里のあまの藻鹽の煙たちかへりむかしになびく秋の初風

と安堵の所を詠せらる　顯季始て影供執行るゝ時、日野敦光卿に人丸の贊かゝせられたり、資宣は此末葉也、其贊本朝文粹にも出たれば、爰にしるさず。人丸の像日輪の中に書たる有、是相傳の圖なり、其外夢想の圖品々有、木像は石見と大和に有。

文武帝人丸君臣合體の道理あれども、文武帝御一人に人丸こもり給ふと見る習有。人丸、赤人一躰と見るならば、いづれも化現の大事より悟るべし。古今集に、人丸一人の歌を入て、赤人、衣通姫の歌を入ぬは、三聖一躰の理をしらせたる也。序に、赤人、衣通姫の名を出したるにて、いよいよ同躰なる口訣を貫之下心にもちてかゝれたるとしるべし。

古今集序に、人丸なんうたの聖なりといへる心は、先三聖の中、人丸は盤土命にて、西乾の方を主ります。乾は天也、乾坤の時も、乾は天をさす日の西は中央也、亦表筒男命にて上に座す、中を得たる歌人なれば歌の聖とはいふ也。聖人も中庸を行の道理也、和歌も亦中和の和を行也、是亦日の徳をふくめり。赤人は歌にあやしくたへなりといへるは、赤土命にて東南を主る日の東より出て南にめぐります時なれば、妙なる光がみゆれば也。衣通姫の流と小町が歌を、さしてつよからぬは女の歌なればなりといへり。衣通姫の歌は弱きなり、底土命にて北方を主り、夜中地の底をめぐる日なり。されば光弱き道理也。

ほの〴〵との歌は別傳也、此歌にさま〴〵の奇妙ある事不レ可二勝計一。是は人も覺えある事なれば不レ注レ之。人丸相傳已後は、毎朝三返可レ誦レ之。いかなる神咒陀羅尼にもまさりて祈禱になる也。伊弉諾尊小戸の祓せさせ給ひて、身心ともに清淨にならせましまして生ます御神の御正體なれば、人丸を信仰すれば、則心中清くなる也。日神、月神、素戔嗚尊も同一躰也。八百萬神も、此中にこもります道理也、懈怠なく毎朝可レ唱。則小戸祓を只今行ふ理りと知べし。

人丸信仰の家は、火災をまぬかるといひつたへたり、ひとまるの和訓を可レ思。播州明石人丸明神の社頭の近邊、出火の節、いづくともなく老翁出て、火をふせぎ、即時にしづまりたるとぞ。又

男の一陽の女の一陰に合して懐妊す、其最初をひとまるといふ、十月に滿して人躰となる。所詮我身をはなれぬ人丸と知べし。如レ此難レ有之人躰に生れ出て、其身をおろそかにもち、悪念をさしはさまん事、かへすがへす勿躰なき事成べし。人丸明神を祈りて懐妊したる例どもあれど、因緣物語のやうになれば略レ之。人丸は懐妊亦人は平産を祈るに奇妙の利生あり、かりにもうたがふ事なかれ、和歌三神三聖も人丸一躰に歸する也。さて其人丸三躰我身を離れず、胸中に座す也。外にある昔の事と見るは一旦の事也、唯今我身の中にありと見ねば、隣の寶也。可レ仰可レ貴、能思惠、深憶陪。

右八雲神詠口訣和歌三神並化現之大事者、定家も卜部家より相傳し給ふ也。其後二條中納言亦卜部家より相傳へられき、亦近衞大閤惠雲院殿(尚嗣)も、卜部家より受給ふ。定家卿の流は御家より外へ不出、傳へても亦、其一代にて御家へ返し申也、千貫の禮式に定れり。卜部家に右の衆中の誓盟于今ありとぞ。清云、貞徳自筆ノ和歌寶樹予ガ姻家ニアリテ、曾テ電覽セシニ、此事ヲ詳ニ記セリ、信ズルニ足レリ。吉田神龍院殿より幽齋公へ八雲神詠和歌三神の口訣御相傳有て、其竟宴に、神龍院殿を幽齋公の吉田の屋敷へ請待有し時、下官も御取持のため伺公せしに、其御席へ御呼出し有て、神龍院殿予に仰せられけるは、卜部家をあなどり給ひそ、右の口訣定家卿も當家より傳受有て、于今我家に誓紙あり、そなたも此道に執心深ければ、さぞ浦山敷

こそ思はれ侍らめと、笑止そうに仰られけるに、さしうつむひて御返答もせず、落涙せぬばかりに赤面して、かしこまり居侍りぬ。予心中に思ふ様は、命に替ても傳り奉り度は思へども、身不肖にて難レ叶てやみぬ。しかありて月日を送る程に、不思儀の幸あり、岐阜中納言殿若年の時、予手跡を教へ申しに、道遂(隨カ)の御家賴泰(秦カ)の某とて、予入魂の人有、或時予が宿所へ不慮に來り、こしかたの物語などして懷中より一卷の書を取出し、是は亂妨に取たる書也、歌學の大事、神道の秘傳と見ゆ、そなたは歌道に執心深き人也、舊友のよしみも深し、其上大事の書を我身のなりゆく末もしらず、無道なる者の手にわたらんも本意なければ、是御邊にまいらする也、是而已に來る志を忘れ給ふなといひ、則歸らんとす、强て留め侍れど、さし當る大事をかゝへたる身なれば片時もやすらふことならずとて立出す、誠に難レ有芳志に預りたるにあらずや、扨早速ひらき見るに、神詠三神の口訣と見えたり、もしや卜部家の傳にてもや有らんと、心中に渴仰して、其儘幽齋公へ持參して御目にかけければ、幽公殊外驚き給ひたる御氣色にて、年比そなたの此道に眞實あるゆへに、自レ天あたへ給ふと覺ゆ、全神龍院殿より傳りたる秘卷に毛頭もたがはずとて、戴き給へられけり。其時、心肝にこたへて最難レ有覺へ、さて神龍院殿も此旨を聞しめし、只奇妙〳〵とのみ仰られ、此上はおもてだちて幽公相傳せらるべきよし御免ありて、則幽公より直にさづかり侍りき。其序に人丸相傳

まして御免ありけり。不肖の身に餘りたる大義の、天然とうけつきたる事、中々冥加おそろしくてぞ覺へ侍りけれ。穴賢、々々。

右八雲神詠和歌三神並化現之大事、人丸相傳者、雖レ爲二絶妙深秘之口訣、一貫傳心之正理一、在二奇異之大幸一上、於二此道一被レ抽二至誠一之者條、今長頭丸令二授與一之訖。如二誓盟一全不レ可レ在二他見漏脱一者也。

従二位大藏法印玄旨

昔慶長十一年霜月四日　　御判

右條々者、神國之奥旨、歌道之要訣、雖レ爲二一子相傳之極秘一、於二此道一感二厚心篤實一、如二一器水寫（寫）二一器一令二授與一訖。如二誓盟一全不レ可レ在二他見漏脱一者也。

道遊軒貞徳

慶安二年三月十八日　　判

望月氏

兼友丈後號二長孝一

右條々者、和國之大事、歌道之要訣、而雖レ爲二絶妙之極秘一、於二此道一備二其器一、以レ感二志之篤實一、今玄旨法印、明心居士嫡々相承之趣、不レ違二毫釐一令二附屬一訖。非二血脉道統之人一、而爭傳レ之哉、全他見漏脱令二禁止一者乎。

狹々野屋長好

延寶四歲八月廿日　判

平間氏

長雅丈

右八雲神詠和歌三神並化現之大事、人丸相傳者、大藏卿二位法印松永長頭丸、狹々野屋翁貞隆英丈嫡々相承之趣、而雖レ爲二歌道之極秘、神道之大事一、年來厚恩依レ在レ之、如レ瀉二一器水一器一令二授與一訖。如二誓盟一全他見漏脱在レ之間敷者乎。

盈細堂

元知

元祿十五歲五月吉辰　印印

北鷲見

正忠逸士

歌道筒守二重之卷（抄）

和歌三聖之叓

人麿ハ、石見國堵田ト云處之、人家ノ柹樹ノ本ヨリ童形ニテ出現シ給フ也。沒期モ同處ニテ終リ給フ。是生死始終一ニシテ日少宮ニ留ルノ義也。

人丸集ニ石見國ニテナクナリヌベキ節讀（ナリ）ル

はも（かい）山の岩ね（根に）しまける我をかもしらずて妹が待つゝあらん

天智天武持統文武元明元正六朝ニ在シ人也。天足彦國押人命ハ柹本ノ祖也ト云ヘリ。又家門ニ柹ノ樹有シ故姓トストモ云ヘリ。又敏達天皇ノ御末トモ云ヘリ。異人ナレバ出處不レ知ト云ヘリ。一說ニ光仁天皇之御宇ニ卒去云云續日本紀光仁紀ニ柹本人麿卒去不見同紀ニ外從五位下陽候忌寸人麿爲東市正從五位上石川朝臣人麿爲伊豆守同日也從五位下賀茂朝臣人麿爲常陸守

人丸入唐之叓拾遺集ニ

もろこしにてよめる　　柿本人丸

天飛やかりのつかひにいつしかもならの都にことづてやらん

影供ハ鳥羽院永久元年六月ニ始テ行ハル。宇津宮大明神ハ人丸也。社頭ノ軒近ク大木ノ柹有、日光大明神ト額アリト云ヘリ。山邊赤人ハ聖武ノ御時ノ人ト云云。又一説人丸ト同時ノ人ト云ヘリ。衣通郎姬者云々（下略）

三神三聖幽契之事

三神者、磐土命・底土命・赤土命也。

三聖者、人丸・赤人・衣通姬也。

三神三聖幽契ト云事ハ、神靈ト人體ト合德合體之義ヲ云也。御鎮座次第記曰天照太神與止由氣皇太神ニ豫結幽契、永治天下言壽降居大宮殿神留座云

亦是ハ造化之、御中主尊ト御人、天照大神ト御合德御合體ニシテ天下ヲ統御シ給フ事ヲ云ヘリ三神三聖モ此筋也

磐土命者、日留也。人體之人丸ヲ以配之。

磐土トハ本體也。磐ハ堅固不壞之義、人丸ハ日留之義也。丸トハ混沌之義、日ノ少宮之秘訣有之。

赤土命者、赤日通也。人體之赤人ヲ以配之。

赤ハ明カル義、日地上ヲ照シ給フ故、土地赤クシテ萬物明カニ見ユル也。日出ヨリ日沒マデノ日ニシテ晝也。

底土命者、外通日女也。底通日女也。人體衣通姫ヲ以配之。

日土地ノ底ヲ巡リ給フ故、底土ト云、夜也。此地ヲ照シ給ハヌ故、外通日トハ云也。夜ハ日陰ヲ巡リ給フ故、日女云也。(圖略之)

云々

卜部家之說、住吉三神ハ全ク日神ノ御異名也。夜ハ日光北方ヘ遶座ス。是則地ノ底ヲ通リマス也。其時ハ底筒男命ト申ス。亦底土命東南ニ現シ座時ヲ中筒男命ト申ス。亦赤土命西乾ニ現シ座時ハ表筒男命ト申。亦磐土命三聖ハ衣通姫・赤人・人丸也。底通日ヲ衣通姫トシ、明日ヲ赤人トシ、日留ヲ人丸トス。皆是本名ヲ秘スル故也。人丸ハ磐土命ノ仙現也。表筒磐土同訓也。乾ノ方ハ天也。上ニ座心ニテ、表筒男命ト申ス。畢竟三神三聖人丸一體ニ歸スルト知ベシ。可レ貴可レ仰能思惠

右卜部家日道三天幷二重之秘傳也。日道三天三重之極秘、日少宮之秘訣、別卷記之。(圖略之)

丑寅之隅ヲ日少宮ト云、是一晝夜ノ堺、日將出來出之處、伊弉諾之神靈留リ給フ處也。神道始終之本體、日留之本體也。秘訣深々也、別卷記之。

日留始終之傳

古今集ニ、人丸一人ノ歌ヲ入テ、赤人衣通姫ノ歌ヲ不レ入ハ三聖一體之理ヲシラシメン也。序ニ三聖ノ名ヲ出サレタルニテ、貫之ノ下心ヲ窺ヒ知ベシ。人丸ナン歌之聖ナリト書ル心ハ、三聖ノ中ニ人丸ハ磐土命ナレバ本體ナル故也。人丸トハ日道始終ヲ貫キ給フ事也。聖ト云訓ハ日知ト言事也。日德ヲ體認シテ日ノ道ヲ知リタルト云訓也。赤人ハ歌ニアヤシク妙ナリト云ヘルハ赤土命ニテ晝ニ當ル故ニ萬物アラハレ文ヲ布也。衣通姫之流ト小町ガ歌ヲサシテ强カラヌハ女ノ歌ナレバ也ト云ヘリ。衣通姫ハ底土命ニ當ル、北方地下ヲメグル日ナレバ光ノ弱キ義也。夜ノ日道ナル故陰中ノ陽ナレバ姫ト號ス、姫ノ訓ハ日女也。又ヒメハカクレタルノ義也。和歌三神三聖ハ日留一體ニ歸ス。扨其ノ日留我身ヲ不レ離我ガ胸中ニ有、高天原ハ虛空淸淨ノ處ヲ指、則我淸淨ノ胸中ヲ云也。天日ハ則我心ノ靈ト一般也。我胸中之高天原ニ留リ坐也。此ヲ自己ノ日留ト云、心ノ動靜ハ赤人・衣通姫之義也。神代卷曰、天地未剖陰陽不分、唯マンマロニシテ牙ヲ含メリ、牙ハ未發ノ生氣也始テ胎內ヘヤドル時、陰陽妙合シ火留テ子トナル。此火留也、心ハ則日ノ靈也、是日留也、未レ見未レ聞未レ言マンマロニシテ牙ヲ含ム、是人體ノ渾沌人圓ノ義也　是ヲ胎中人丸ト云、天地ノ開闢ハ人ノ誕生也　人體ハ土金也、混沌ノ形モ圓ク天ノ形モ地ノ形モ日月モ皆圓シ、マロキハ誠ノ姿

也。敬ミ誠ハ天地ノ道也、是ヲ道體ノ人丸ト云、人此ノ道ヲ守レバ胸中ニ日トマル故、心身一ニ人丸也。不レ守バ身ト破レ心亡ブ心身一ニヒトマルニ非ザレバ歌道ニ非ズ、歌ヲ詞花言葉ニ詠ズル而已ニ非ズ、此道ヲ身ニ行ヒ實地ヲ不レ踏バ浮華ニシテ實ナシ。言行一致花實相對ヲ第一ニ可心得（花十分實十分）歌ヲ讀ニ行跡ヲ第一トシ、威儀ヲ肅ヘ、心身一ニ愼ミ、全體人丸ニナリテ讀事ヲ肝要トセリ。神人混沌之始ヲ守ルト云㕝神道大㕝也。混沌ノ始メヲ守ルトハ未レ見未レ聞未レ言未レ發ノ時土金之功ヲ以大元靈ヲ敬ミ守ル㕝也。大元ノ靈内ニ存シ給ヘバ、日明カニ胸中ニ留リ給フ、人體胎中混沌ニシテ、又神退テ混沌ニ留ル、伊弉諾尊日少宮ニ留リ給フト云是也。少宮ハ留リ給フハ日留之義也。胎中火留今日人丸神退テ日留生死始終ヒトマル一體也。人體而已ニ非ズ、萬物皆火留也。神代卷曰、軻遇突智（造化之火神也）娶ニ埴山姫ニ（造化之土神也）生ニ稚産靈ニ（發生之靈也）此火氣入ニ於土ニ物ヲ生ズルヲ云。又曰、斬血激灑染於石礫樹草此草木沙石自含火之緣也。（血トハ火之義也）云云、萬物皆火留之一理ニ歸ス。是人丸傳之極秘安心也。非ニ其人ニ愼而莫レ傳焉可レ崇可レ秘矣。

和歌者流ニ、日形ノ内ニ人麿之像ヲ畫クハ此日留始終之極秘ヲ圖シテ示ス者也。

歌仙二葉抄（抄）

敷島の道は、其根千早振神の代より始り、其葉人の世となりて普くひろまり、賤きいやしきとなくたふともみもてあそぶならはしとはなりぬ。窟のうちもとおもへば、ことわざしげき身にしも、いたづらに東流水を詠暮さんもほいなくやと、三十一文字などふつゝかにならべ、あるは古き哥物語など九牛が一毛も見侍りき。過にしころ、京師に逍遥せしに、或人歌仙傳となん云を予にあたへて此書官くらゐなどすゝみし年月日をしるす而已なから雲の上にもとり〴〵もてはやし給ふなれど、歌の山をしるさず、ねがはくは歌人三十六人のあらまし事并哥の心などともにくはしくしるせよと請ふ、山かつの身におふせぬ物から、せちにゆるさねばいなみがたく、草を見てよろこぶの笑をまつも、下愚の身にしては又幸ならん歟と、筆をとりて歌仙傳にのせ侍る事どもは、其所のかしらにことはりて洩さず書しるし、又見およびし事どもは夫につぎてあらはし、且歌の心はかれこれを考合て、巻につゞり名づけて歌仙二葉抄と云ならし。

延享三丙寅年孟春　平春幸著

柿本人麿

歌仙傳先祖不見云云、又云件人就年々除目叙位等尋其昇進無所見云云、歌仙傳は官位の昇進年月を記せる而已の書なれば、人丸の事不詳、故に愚意のみを次に述る也。柿下は姓氏錄天足彦國押人命之後也。敏達天皇御世、依家門有柿樹為柿本臣氏云云、此天足彦國押人命と申は、日本紀見えたり。古事紀には天押帶日子命とあり。人皇第六孝照（マヽ）天皇第一の皇子也。柿本は此子孫也。元は柿本の臣といひしを、天武天皇の十三年に至つて、大三輪等の五十二氏に姓を朝臣と賜ひし其中にて、其時より柿本の朝臣となりし也。人麿は日本紀續日本紀に見えず。天武の御時柿本猨朝臣と云あり。是のみ日本紀に柿本氏の人見えたり。人丸は此親族なるべけれど、國史に見えざれば父祖詳ならず。時代異說まち〳〵なり。先人皇四十代天武天皇の時に出現すとも、又持統天皇文武天皇の時分に人丸出現し、元明元正聖武に至つて五代の帝に仕るとも申す。袋草紙人丸の勘文の奥人麿は聖武之臣萬葉者同帝之撰歟云云。是も分明ならず。又萬葉第一を考ふるに、持統文武の兩朝のみに柿本人丸の哥見えたり。萬葉第二に石見の國より妻に別れて都へ上り、又第二の奥に

石見國にて死する時自傷て作れる歌あり。是も持統の時都へのぼり、文武の末に石見にて死せられしやうには見ゆれど、時代と年月しるさゞればさだかならず。大學頭敦光の讃、大夫姓柿本名人丸蓋上世之歌人也、仕持統文武之聖朝、遇新田高市之皇子、吉野山之春風從仙駕而獻壽、明石浦之秋霧思偏舟而瀝詞、誠是六義之秀逸、萬代之美談者歟云云下略。是にも持統文武と書れたり。然ども萬葉を考ふるに、天武の朝に柿本の人麿の哥あり、又元正天皇の朝人丸の歌顯然たり。萬葉第十の七夕の哥九十八首ある中に、初三十八首有て、右柿本朝臣人麿の歌集出と書、其三十八首の歌、

天漢安川原定而神競者磨待無

此哥の左の註云、此歌一首庚辰年作之と云云、此庚辰年とは天武天皇の白鳳九年にあたれり。然れは天武の朝柿本人丸ありしと見えたり。又萬葉第三雜歌、天皇御遊雷岳時作歌一首柿本朝臣人麿とありて、

皇者神二四座者天雲之雷之上爾廬爲流鴨

季吟が萬葉の拾穗抄、此天皇とあるを元正天皇と記せるのみにて、其證據なし、是を考ふるに萬葉第二の末に、柿本人丸臨死時の歌より後に四首歌ありて、次寧樂宮和銅四年の哥あり、是元明

天皇の時の哥なり、其歌二首ありて、次キニ靈龜元年の哥あり、是は元正帝の時の年號也、第二の卷は此靈龜元年の長歌反歌等二三首にて終りて、第三の卷の初天皇御ニ遊雷岳ニ時作歌とて、人丸の哥あり、此天皇元正にあらずんば、天皇とばかりはしるさず。何の宮の御宇天皇御ニ遊雷岳ニと書べきに、さはなくして天皇とばかりしるせるにて、元正帝と決せり。第一にも高市岡本宮御宇登ニ香具山ニ望レ國御歌一首天皇御製とて哥有、次の哥の詞書に、天皇遊ニ獵内野ニ時間人連老が哥あり、此歌何の宮の御宇ともなく、たゞ天皇遊ニ獵内野ニとのみしるせり、高市岡本宮の御宇とは、舒明天皇也、遊ニ獵内野ニ哥も舒明天皇なり、又第一に近江大津宮御宇額田王の歌あり。大津宮は天智天皇の時也、其次に又額田王の歌井戸王の歌などありて、其次に額田王の哥の前書云、天皇遊ニ獵蒲生野ニ時作歌あり、此天皇とあるも、同大智帝の義也、是等の筆格をもつて見るに、前の御ニ遊雷岳ニとある天皇は、元正帝と見えたり、元正は文武より後にて、文武四十二代元明四十三代元正四十四代聖武四十五代とつゞけり、元正の時人丸の哥あるをもつて見れば、文武の時石見にて臨レ死の哥も不審也、袋草紙云、如ニ萬葉ニ人丸始レ自ニ天武ニ至ニ文武ニ如ニ家集ニ至ニ孝謙ニ云々、天武より孝謙までは天武四十代持統四十一代文武元明元正聖武孝謙四十六代とつゞきて、孝謙は元正より三代目の帝也、天武より年數を考見るに天武在位十五年、持統在位十年、文武在位十一年合三十六年なり、又是に元明在位八年、元正在位九

年、此二代を加へて五十三年なり。又是に聖武在位二十五年、孝謙在位十年、以上合見れば八十八年の年數也。是に人丸出生の比の年曆を加へて、凡百歳に少し余の年數に見えたり。年數にて見れは天武より文武までと見、又は天武より元正までと見て可なるべし。孝謙までといへる家の集年數久しくして難二信用一、萬葉文武の末とおぼしきに人丸死する時の歌あれば、元正の朝雷岳の歌と云ふなしは別人の哥を萬葉人丸とあやまつて書れたる歟。萬葉第三遊二吉野一時御歌一首、弓削皇子とありて、

瀧のうへのみふねの山にゐる雲の常にあらんとわがおもはなくに

一云、みよしのゝみふねの山に立雲の常にあらんとわがおもはなくに

かやうにありて、注此一首出二柿本人麿集一と、か樣の類にて、萬葉には弓削の皇子の歌也。人丸の哥萬葉第七より第十四まで作者未レ詳哥どもにまじへて載られたり。古代の事なればいかにしてもさだかならず、大學頭敦光の讚にも、仕二持統文武之聖朝一と書れ、又袋草紙にも人丸始レ自二天武一としるされ、又萬葉にも文武の朝の末とおぼしきに死する時の哥見えたれば、所詮くだくだしき說を捨て、時代は天武の朝より文武の末までの人と見て可なるべし。又古今集の序にいにしへよりかくつたはるうちにも、ならの御時よりぞひろまりにける、かのおほん世や歌の心をしろしめしたりけ

ん。かのおほん時におほきみつのくらゐかきのもとの人丸なん哥のひじり成ける云云。奈良の都は四十三代元明天皇より四十九代光仁天皇まで七代の帝平城に都し給ふ。古今の眞名序平城天子詔侍臣令撰萬葉集云云、或説に、此平城天子と申は五十一代平城天皇の事を云といへり。此説にて見れば、人丸も同帝の時世にありしと古今かな序のおもむきには見えたり。又萬葉集も同帝の時撰せられしと見ゆ。然れども袋草紙并萬葉の仙覺抄等にはあまた證文を引て、ならの帝と申は、聖武帝を申すとしるせり。又萬葉に文武の末とおぼしきに、柿本人丸死するの哥あり、文武の朝より平城天皇迄は時代十代、年數百十三年後の義也。天武の朝に人丸ありしよし前に見えたれば、天武天皇よりかぞふれば、時代十二代、年數百三十八年也。袋草紙に人丸雖及大同朝平城天皇事委しくしるせり。人生も限りあるもの也。いかにしても平城天皇の時、人丸世にあるべきやうなし、古今の序、奈良の帝と云は、疑らくは文武帝の事なる歟、定家卿はならの帝と云は、文武帝の事としるし給へり、秘説奈良の帝とあるは文武帝の事にて、ならとは古きと云詞と同じ、古き事を神代又は昔しなどいへる詞に同じ、奈良の都一代前なれば准じて云事也と云云、是古今の秘説也といへり。案ずるに昔し又は神代などは所をさす詞にあらず、奈良は其所をさす詞也、然るを古きと云事なりとの義いかゞと見ゆれど、後撰戀の一題しらずの前に、

身は早くならの都と成にしを戀しき事の又もふりぬる

是古きと云事にならと云詞を用ひし證歌也。其外奈良を古里のならの都とも、又ふるき都などおふくよめり。然ればならと云て古き事との義其謂なきにしもあらず。古今の序にならの御時よりぞひろまりにけるとあるを、古き御代よりぞひろまりにけると云と見れば、文武帝の御時と見ても難なき歟、眞名序に平城天子詔二侍臣一令レ撰二萬葉集一とあるを、聖武の御事と云ても、ならとは古きと云詞也と大やうに見れば其所〳〵にて何れの帝に見るにも難なし。文武は平城の都御一代前にて藤原の宮也。ならには都し給はず、文武の次は女帝にて元明天皇是より光仁まで七代奈良に都し給ふ。元明は文武の御母也、ならの都は盛に時めき給ひし時代也、御母帝より始て奈良に都し給ひしゆへ、御子の文武帝を准じてならの帝と申奉る也。然れば萬葉に文武の末に人丸死する時の哥あるによく叶へり。

人丸位階の事、古今のかな序にはおほきみつのくらゐと書、眞名序には先師柿本大夫と書り。おほきみつのくらゐは、正三位也、大夫は五位の通稱也、兩序の間大きに相違せり、忠岑が長哥にあはれいにしへ有きてふ人丸こそはうれしけれ身はしもながらことの葉を天津空まできこえあげてと云云、身はしもながらとあれば正三位にてはあるべからずと見ゆ、敦光の讃にも大夫と書れたり、

然らば五位なるべけれども、歌のひじりなるゆへたつとみて正三位のよしかな序に書しもの歟。眞名序は奏覽なしといへども、兩序の間にてかく異なるべきやうなし。正三位の事猶口傳畧す。北畠親房の古今の序注、此人正三位と云事昔より疑レ之、公卿補任などにも不レ見之故なり、是はあながちの難歟。上古の補任は現任ばかりを載て、散位をば不レ書レ之歟と、云云。是親房の說也、現任とは當官の事を云也、散位とは無官の人を云、官を散して位斗といへる義也。猶人丸の事深き旨あり、事繁きによつて畧す。

ほの〴〵とあかしの浦の朝霧に嶋がくれゆく舟をしぞおもふ

古今羇旅の部に入れり。古今隨一幽玄の哥とて、古人も稱嘆せし歌也。大納言公任此哥を解しがたきとて、三年まで工夫をこらし、此歌の玄妙をさとり、和歌の九品を立られしに、上品乃上と定められしと也。古今此歌の左書に、此歌はある人のいはく、かきのもとの人丸がなりとしるせり。古今に凡て誰人の歌と決したるは哥の右に名を書付侍り、此哥も人丸の哥にしかと決定せざるゆへ、左にある人のいはくと書る歟。然ども風體抄に、柿本人丸哥也と記せり、世々の先達名譽の人々人丸の哥と決し、古今にも如此ありて外により所なければ、其分なるべし。又人丸の事は、誰人の哥にても歌の玄妙をあらはせるを云など、古今の秘說あるなれば、左もあるべき也。ほの〴〵とは

夜の明ケ行空のおぼろにてさだかならぬを云。それを曙とは云也。ほの〴〵と有明の月の月かげに紅葉吹おろすなども詠り、此ほの〴〵の五文字人丸の哥秀逸比類なきによつて、定家卿詠哥大概に制せさせ給ふ、制せられしより前はほの〴〵とあかしとつゞける哥も多く侍り、

ほの〴〵とあかしの濱を見渡せば春の浪ともいつる舟のほ　順

ほの〴〵とあかしの濱をこぎゆけば昔し戀しき波ぞ立ける　重之

ほの〴〵とあかしとはいひかけの詞なり。或抄ほの〴〵と明石浦の朝霧に漕出したる舟の、嶋がくれ行か今いづくにゆくらんとながめやりて、哀に思ふとなりと云。又同抄貫之海路の旅に此集に入たり。されど我出たるとはきこえず、人の海路にこぎ出て行舟をはるかに見をくりてよめると見えたりと云云。或人是を難じて如此見れば、撰者の心にかなはず、其故は此哥古今羇旅の部に入れり、明石の浦より余所の舟を詠めりし眺望の歌ならば、羇旅の部には入らずして雑乃部に入べき事也、羇旅の部に入たればたゞ旅の心にて我れのりし舟の事を詠ぜる哥と見えたりといへり。予是を思ふに、我かのりし舟の事をよみたる人丸の哥萬葉第三に

あまさかるひなの長路を漕くれは明石の戸よりやまとじま見ゆ

此哥新古今羇旅の部に入れり。かやうなれは我かのりし舟の事にしかと聞ゆれども、此はほの〴〵

の歌は一首の躰我がのりし舟の事とは聞えず、古今旅の部に入るといふに着して、我がのりし舟の哥なりと云は實もとも聞えず。たゞ旅におもむきし比、此明石の浦に旅宿して夜の明方に陸より海路をはるかに見やりてよめると見るが面白き也。羇旅の部に入ればとて眺望の哥あるまじきにあらず、則古今羇旅の部第一の哥安倍仲丸が、天のはらふりさけ見ればの哥も、船路の事はよまずして月の事をよめる哥也。是等にて心得べし。嶋がくれゆくとは明石の浦に立ふたがりし霧にて嶋がくれ行舟も見えずと也。此嶋と云を或鈔ニ、或人明石に嶋なしと云、明石の沖にふたご嶋くらかけ嶋などあるをしらざる也と、云云、契沖が古今の餘材抄に顯注を引テ、明石の沖にはるかにちり／＼なる嶋ども見え侍り、ふたこしま、みなほし嶋、たれか嶋、くらかけ嶋、家しまなどうちちりたるやうに侍ると、云云、契沖が云、明石の浦は淡路の岩屋といふ所に向へり、岩屋の北の磯部は繪嶋なり、そのあはひの海わづかに一里ばかりにて、さらにひとつの小嶋ある事なし、顯注の申されたる嶋／＼は明石よりははるかに西南の方にあり、家嶋は播磨の揖保の郡にて、淡路の西海上八九里に及びて、何くれといふ小嶋其めぐりに有よしいへば、そこに嶋かくれん舟は離婁の目にあらずば見ゆべからず、しかれば顯昭もいまだよく彼あたりをみずして推量して申されけるにやと、云云、案ルに、嶋がくれの嶋は淡路嶋の義也、明石の沖の小嶋あるなしのさたにはおよばぬ義也。然共袖中抄にい

はく、隆緣云、あはち嶋こそあかしの浦にてはよむべけれ、或人の云、淡路の嶋大嶋にて一國也、嶋がくれ行舟をしぞおもふなど不レ可レ詠歟と云云。か様に袖中抄には侍れども、理にあたらざる歟。淡路は一國の嶋なりとて、此哥によむまじき理なし。或は津の國のなにはの里、近江路や志賀の浦、又はするがなるふじなどは其名所をいはんとて、先國の名をいひ出せるなり。淡路は是等とはちかひ、一國なれども淡路嶋又は淡路嶋山などよみならはせる事、人〳〵知れる事なれば、しるすにおよばず、又前に柿本人丸萬葉第三のあまざかるひなの長路を漕くれば明石の戸より大和しま見ゆ、とある哥の、大和嶋と云は、則淡路嶋の義也、いかにして淡路をかくいふぞと尋るに、伊弉諾、伊弉冊の尊國土を産給ふ最初に、淡路嶋をうみ給ふ、其後に大八洲(ヤシマ)を産給ひしなり、日本の惣名を倭(ヤマト)の國と云なれば、初めに先うみ出し給ふ嶋なるゆへに淡路嶋をやまとしまと云也。明石の浦に嶋の間近くなき事は、余材抄を引て前に述るごとし。明石より間ちかき嶋なれば淡路嶋をよめると見えたり、其上人丸の哥に、明石の戸より大和しま見ゆとよみ、又新勅撰雑四に名所の月といへる心を、

夕なぎに明石の門より見渡せば大和嶋根を出る月かげ　内大臣

此夕なぎにの哥方角大(キ)にあやまれり、明石と淡路とは南北に向合せり、名所月といへる題にて方角の事をとり違よめる哥也、月は四時にて出やうかはりあれど、大やう東より出る也、南より出る

事なし、明石より南にあたる大和嶋より月出るとよめる事方角の取やう違へり、此歌誤りなるべし。然れども大きに所をへだてたる名所を一首によみ合する例は多侍れども、是は夫とは違、正しく月の出たるよしよめる哥なれば誤也。然共此所へ引は其義にはかゝはらず、たゞ明石より淡路嶋をよめる證のみに引ばかりなれば、こゝに引るなり。

新千載旅　あかし潟大和嶋根も見えざりきかき曇にし旅のなみだに　土御門院

かくのごとく明石より淡路嶋をよみならはせり。然ればほの〴〵の哥もあまざかるの哥と同じく人丸の哥なれば、淡路嶋を嶋がくれとよめると決せり。船をしぞおもふとは惜むといふ心にあらず、しは助語にてたゞ船をぞ思ふとの心なり、證哥

萬葉十二　春日なる三笠の山にゐる雲を出見るごとに君をしぞおもふ

古今　唐衣きつゝなれにしつましあればはる〴〵きぬる旅をしぞ思ふ

ある抄に、此哥の下の心文武の御子高市皇子十九にて崩じ給ふ其無常を詠せるといへり、さもや侍らん。本宮は君とひとしきゆへに、君は舟の心にて舟にたとふる歟と、云云、此事秘抄等にも見え侍り、世の中の定めなきは、漕行船の朝霧に嶋がくれ行たるやうに、高市の皇子薨じ給ふとなげきよめる心也といへり。然れども此ほの〴〵の哥萬葉にも見えず、又高市の薨をいたみてよめる柿

本人丸の哥は萬葉第二に長歌反歌ともにあれども、此ほの〴〵の哥とは大きに異なり、其外國史等にも見えざる事なれば、何の證據もなければ用ひがたし、哥の詞表には海邊羇旅眺望の哥の詞なり、下心には世の有樣を觀じてよめる哥なり、然れども高市の薨をいたみてよめると云說は用ひがたし、たゞ裏には世の有樣を觀じてよめるとのみ心得て可ならん、凡て撰集には表の心をもつて撰せらるるものにて、裏の下心は撰集には不レ用、故に羇旅の部に入られたる也、裏の說は人間世の有樣を觀じて云、ほの〴〵とあかしとは夜明也、四時にとりては春夏に比すべし、人間にとりては人の出生世の盛なるを云也。朝霧に、霧は物をおほひたちきるゆへに霧と云、是殺伐の氣、時は秋也。嶋がくれ行、是人間の終りの世の衰へ、晝夜にとりては夜陰、四時にとりては冬也。なしぞおもふ、此結句至つて心ふかし。人〴〵常に此哥の心をよく〳〵心得べき事也、此哥を眞言經文等に比して注せる事あり、更に正道にあらず、和歌の道を辨へざる人猥にいひかすむる徒事也と心得べし。此ほの〴〵の

哥に心の類せる哥

萬葉第二十

あかとき(曉)のかたはれ(マヽ)時にしまかき(陰)をこぎにし(イニシ)舟のたつきしらずも

李遠が黃陵廟の句に、輕舟短掉(棹)唱レ歌去、水遠山長愁殺レ人、云云、又遊仙窟に、張文成が十娘に別れ行時の文に云、行至二一三里一廻レ頭看數人猶在二舊處一立、余時漸々去遠、聲沈影滅、顧瞻

不レ見、惻愴而去ルト云云、是等の句相叶ふべきにや。

拾遺集
世の中を何にたとへん朝朗漕行舟のあとのしらなみ

浪華　百川堂
峒山春幸撰

古以和歌稱仙者凡三十有六人、各刑（列）朝名臣、有出類之才、而遂爲後世儀矩、其和歌三十六首、遍在人口、而諷之吟之、浪華隱士平春幸者、追山柿之古風、以摸其體製、立志數年乃著歌仙二葉抄一卷、其爲書也、官品舊典之說、詞章幽玄之辨、意領心會、而底極淵奥、開發秘薀、可謂詳也、其功其勞不讀不可知焉、予深賞嘆之、況又相知久故爲之跋、

御厨子所預正五位下采女正紀宗直

延享四卯歲立秋吉日

大坂錦城大手錦町二丁目
菊屋勘四郎
書林　同南本町一丁目
泉屋喜太郎

人麿像補記

人麿像補記

狩野探幽筆人麿像（口繪參照）。狩野探幽筆和歌三聖圖（小坂順造氏藏）は、國華五百五十三號（昭和十一年十二月二十日發行）に載つたものであるが、そのうちの人麿を本書の口繪とした。解說は國華の解說をその儘拜借することにした。

探幽は狩野の正流を受けて一家をなし、元信、永德以來の家法を變じて、新時代に一新樣式を立てたのであるが、近世初期に於ける古典復活並に日本精神の勃興に關聯して漢畫系統の手法の外に、大和繪の法を參酌して作つたもの、往々存するのは、注目すべきことである。こゝに示す和歌三聖圖の如きは、即ちその著例といふべきである。

本圖は和歌の神たる住吉明神を中幅とし、柿本人麿と山邊赤人とを左右に配したものである。各幅の畫中には

　此和歌三聖者天兒屋根命五十四代孫傳乃圖乎以氐寫須探幽法印行年七十歲

とあつて、法印生明の白字の角印が押されてある。こゝに天兒屋根命五十四代とあるは誰そ、神祇要編中唯受一流血脈圖によると、吉田兼倶の六世の孫兼連であつて、同書に兼連は從三位行左兵衞督兼侍從とし、自ら天兒屋根命的的相承五十四世とあるのである。而してこの人は享保十六年七十七歲で歿したのであるから、探幽の七十歲即ち寛文十一年は十七歲の少年ではあるが、その時既に吉田家を相續してゐたのである。惟ふにこの和歌三聖の圖樣は當時吉田家に傳つてゐたので、探幽

が、その圖によつて畫いたのであらうと思ふ。なほ和歌三神といへば、住吉明神、玉津島（衣通姫）柿本人麿を指すのであるが、こゝに三聖として衣通姫の代に山邊赤人を以てしたる所に、吉田家傳來の圖に特異性を持つのであらう。この圖によつて見るに、如何に探幽が土佐派の手法を巧に參酌してゐるかを窺ふに足るのであつて、漢畫派に見るやうな佶屈な描線は更になく、力あつて軟かみがあり、歌聖はよくあらはされてゐる。またその背景幷に中幅の住吉明神圖をみるに、老松楓樹幷に遠山の手法等、よく土佐派の長所を取つて、これを自家藥籠中のものとなし、住吉明神を溫雅に且つ神々しくあらはしたのは、頗る効果的である。これよく土佐の古法を體得したのでなければなし能はざる所で、探幽の力量をこれによつて推察することができる。探幽は晩年病んで手の自由を妨げられたといはれるが、この圖が歿時を遡ること三年、七十歳の老筆であることを思ふ時、老いてなほ盛んであつた手腕の程が想見せらるゝのである。

小堀鞆音筆人麿像（挿圖參照）。宇都野氏藏。武官の服裝をして、鹿の皮の上に右膝を立てて坐し、硯を前に置き、左手に紙を持ち、右手に筆を持つて、俯向き加減にして歌を案じてゐる姿である。闕腋の袍を著、その下に半臂竝に下袴を著してゐる。脛に卷いてゐるのは革製の脛巾(はゞき)であり、足に穿いてゐるのは糸鞋(しかい)であらう。袍の文樣は異色の離文であり、右肩からは長紲を垂らして居り、腹部から前に垂れてゐるのは倭文(しづ)幡帶(はたおび)のやうである。そして左の腰には劍を吊つてゐる。被つてゐるのは漆紗冠で、その燕尾は先が右の肩にかかつてゐる。すべて奈良朝よりは下る時代の服裝である。顏は頰が豐かで、顎にもわづかな鬚を蓄へてゐる。四十二三歲位のつもりで筆者は描いたのであら

らか。行幸の供奉か、遊獵か、何れにせよ野外での、少くも屋外でのいでたちである。

小堀鞆音筆人麿像（挿圖參照）。宮森麻太郎氏藏。前の畫と反對に右向であり、從つて左膝を立ててゐるが、その服裝は殆んど同じである。ただ全體として描き方が細かく、顏も上向加減で、頰は豐かでなく、顎鬚も伸びてゐる。顏が上向であるために燕尾も背に垂れて居り、膝の立て方、折り方にも變化がある。立てた左膝の脇から半臂についてゐる忘緒（？）が長く出てゐる。右の肩からは長紐を垂らし、腹部から前には綺帶（かんはた）を垂らしてゐる。劒は外してゐるのか見えず、鹿の皮は敷いて居らず、矢立樣のものを右膝の前に置いてゐる。羇旅か、少くも野外に於ける人麿を意中においての筆者の一工夫といふことが謂へるであらう。落款の位階勳等などから推して筆者晩年の作であることがわかる。なほ小堀畫伯は、その歿する二日前、卽ち昭和六年九月二十九日に、夕顏棚下凉、人麿獻壽、賴政名譽の三點を描き、文部省に提出して居る。帝展二十五周年記念に際して最高の功勞者福原美術院長、牧野伸顯伯、正木美術學校長に贈呈すべき畫帖に執筆の約を果すために大正十五年以來制作を絕つてゐた畫筆を揮つたのであつた。

瀧上寺藏人麿像（挿圖參照）。日本肖像畫圖錄解說（望月信成氏）の文は人丸像一般にもわたり、極めて有益であるから、次に拜借する。

佛家に於ける祖師報恩の爲の影供は天台にも眞言にも存し、外典にあつては釋奠の孔子禮拜の事が日本には古來存する。藤原時代の末季に至つては歌會が盛行し、かゝる祖師影供に擬して、歌道の祖師として柿本人丸像を本尊となす所謂人丸供が行はれた。元來此の本尊の濫觴は、粟田讃岐守兼房が或夜の夢に「直衣に薄色のさしぬき紅の下のはかまをきてなえたる烏帽子をして、えぼしのしりいとたかくて、常の人にも似ざりけり、左の手に紙をもち、右の手に筆をそめてものを案ずるけしき」なる人丸形を感得して、後に繪師をして描かしめたと十訓抄に見ゆるものである。その後此の影像を白河院に奉進せるを、六條顯季が繪師信茂をして摹寫せしめ、之を本尊として元永元年六月十日に有名な人丸供を行つた。即ち本尊畫像は絹繪で、長さ三尺ばかり、烏帽子直衣を著け、左手に紙を採り右手に筆を握れる年六旬餘の人を描いた。之が後世信實流と言はるゝので、他に虎の皮を敷ける人丸影にして、岩屋流と稱せらるゝといふ、三井寺行尊大僧正の夢想本があるのと區別してゐる。

信實筆と稱せらるゝ著名な舊佐竹家藏卅六歌仙繪中の人丸は、略〻この像様に近く、然も歌聖の面目躍動して、清爽の容姿が卓絶してゐる。

現に瀧上寺の圖様と同形相の遺品は最も多く、硯を前方に置く人丸圖は、室町時代に至つてかくの如き摹し崩れを見せるものと考へられる。硯箱のみに就いて言へば、瀧上寺本は梅花文を散書し、卅六歌仙人丸像に源を出すと覺しい。本朝畫史說に依れば、信實筆人丸影の徵證となす所は「鬚髯黑稍多」にあると言ふ。然らばこの像は信實流と稱して可であらう。年六旬ばかりの老翁といふが、榮賀筆の脇息に倚る畫像に至れば、極めて老痩の相を現じて、又一種の人丸影の一典據となる。

本畫像の上方色紙形の歌は、「梅の花それとも見えず久方のあまぎる雪のなべてふれゝば」といふ普通人丸讃の歌と、「ほの〴〵と明石の浦の」の兩歌を書く。

影供は藤原時代の末期から絶えず隨所に行はれ、その規式なども一定してゐた。元永の初度影供より後は歌林苑の影供を經て、建仁に和歌所の開かるゝと共に行はれた建仁元年影供は、公の影供の始めであらう。影供歌合は枚擧に遑ない程、公私共に行はれ、その本尊畫像の種類多きは明月記寛喜元年三月十七日に、知家三位卿に向ひ、一軸牛紗縁表裝せる柿本影を態と拜する事、又柿本影を定家自ら成實に讓與する事（寛喜三年十月七日）、などに知られる。後鳥羽院の比などは俊頼の影供があり、（兼載雜談）後には定家の影供が始められるゝなど、遂には一流の歌仙の影供に迄發展することゝなつた。室町時代に入つては人麿影供の行はるゝ事は、鎌倉時代の初期に復つたやうに盛大で、各人持本の人丸影も多數にのぼつた事であらう。中にも信實筆といふものの最も多く、看聞御記（永享八年六月廿三日）に若しくは信實筆かと思はるゝ古本と、信實朝臣眞筆人丸影（嘉吉三年八月十五日）とが見え、他に賛中書王筆の人麿繪（永享八年六月十五日）が載つてゐる。實隆公記（延徳三年十二月廿四日）には、人丸像新圖（[illegible]）といふ光信本があり、兼載が持來せる畫信實筆、讃爲重筆かといふ人丸像（延徳二年十月廿一日）、及預置ける人丸影（文龜元年七月[illegible]日）、表背を施せる人丸影（永正三年四月十六日、十一月一日）、九、滋野井本人丸影（永正六年四月廿二日）、安富本信實筆人丸影（永正八年[illegible]）、[illegible]本人丸（[illegible]）、備師本人丸繪像（永正十年閏六月廿四日）、懷富本人丸（享禄二年三月十四日）、永元寺本人丸影（天文二年七月廿七日）等の多きに達し、又天文元年十二月十六日には人丸影（[illegible]）たる光茂本がある、又後法興院政家記に、信實筆本寫しの松藏主筆人丸影（延徳四年六月一日）があり、有名無名の畫家に依つて、幾多の影像が作り出された事を附け加へ、以つてその盛行を知る一班とする。

土佐光高筆人麿像（挿圖參照）。著者藏。類型的で取立てて云ふ程のものでない。ただ左手に持つた紙の具合に少しく變化を試みてゐる。

柿本宮曼荼羅　柿本宮曼荼羅といふものの寫眞が國華五百四十二號（昭和十一年一月）に載つた。珍

らしいものであるから、その解説を次に轉載する。

本圖は柿本人麻呂を祀つた社の宮曼荼羅と傳へられるもので、文明八年卯月日とある沙門慶範の勸進狀が添へられてゐる。この勸進狀は群書類從第二百八十三に、柿本像綵色勸進狀として收載されたものである。然しこの勸進狀は直接この宮曼荼羅に關係あるものではない。この勸進狀によると、「人丸の墓所柿本の明神といへるは播磨の國あかしのうらにありとかや」とあつて、次に「抑やまとのくにはりみちの社に人丸の堂あるこれぞまことの舊跡ともいふべき」とある。之によると大和國添上郡治道にある治道山柿本禪寺に人麻呂堂があつて、堂も破損し、是處の人麻呂像の綵色も剝落したので、十方の檀那を勸めて諸人の助緣を以て再興しやうといふのである。さすればこれによつて人麻呂堂と人麻呂像とが、文明八年頃に修覆せられん事の企てられたことはわかる。而して若し本圖の宮が柿本人麻呂を祀つた治道の人麻呂の社ならば、正さにこれは柿本宮曼荼羅なる譯である。然しこれが果して人麻呂の社であるか否かは明かでないが、人麻呂の宮曼荼羅として傳へられてゐる故に、今までその傳說を尊重して、強ちに之を斥けず更に研究を後日に俟たんとするのである。

惟ふに神社を寫す宮曼荼羅圖は、淨土變相圖の影響に依て作くられたもので、極樂淨土を寫すと同じやうに、壯嚴なる神域の全體を寫すものである。而して此柿本宮曼荼羅なるものに於ては正面の堂には三柱の神を祀りしもの丶如く、本地佛が三體あらはされて居り、他の小堂には一神に一體の本地佛が寫されてゐる。又此曼荼羅に於ては神域中に樹木茂り、その間に櫻花の咲き亂れたる樣を寫し、鳥居あり、社殿あり、細き流もありて、その奧に樓門あり、廻樓にめぐらされたる本殿あり、その背後には鬱蒼たる樹木に覆はれた山が重なり、その上に日輪の出づる所を寫してゐる。繪は細密を極めて典雅の趣あり、手法の上よりすれば鎌倉の樣式であるが、南北朝頃の作かと思はれる。何れにしても垂跡美術としての宮曼荼羅中屈指のものたるは論がない。

信實筆人麿像　伊達子爵家傳藏。これは既に「鴨山考補註篇」に載せた、仰思態像、榮賀筆と稱せられる（益田氏藏）人麿像と同系統のものである。即ち體を左向にして脇息に凭り、頭を右斜に向けて沈痛の面持をしたものである。これには探幽の極書と安信の畫中極がある。

柿本人麻呂畫像（挿圖參照）。東京渡邊綱彦氏所藏。

贊（藏舟島々霧晴邊、假寒青山吟聳肩、出入古今被天下、扶桑第一老歌仙。遯齋顯騰。）（操觚染翰二千石、浦思江情□塞存、兩璧□流□柿本、和歌達磨可人丸。前福山英與。）（日域翰才莫過和、拈毫物外獨婆娑、吟殘明石浦風月、萬日流傳一首歌。謙牧翁中諄。）大唐文物國、日本化人國、和與漢譬如掌與拳、展握固有異、要之手則然、或出人丸像請贊、又曰、人麻呂依歌之兩立、同途異轍乎、釋氏不知人丸之道、猥題四七禪詩、龍華翁擊節贊之、序其後云、柴桑處士爲東林之遠師、見尙其詩云、採菊東籬下、悠然見南山、故晋有達磨焉、摩圍老人爲江西二十五之詩祖、雖隻字片言不輕出、故宋有達磨焉、柿本大夫爲歌人三十六之長、明石浦朝霧歌如轉丸、感鬼神、天地開闢以來無此作也、故倭有達磨焉、天下皆滔々者、无不柿本之枝葉也。烟島雲林提妙旨、風柯月渚、以心傳心、或歌昔云、達磨和尙我朝用明天皇御宇來和州之片岡、獨守西山飢、聖德太子有歌、磨卽返歌、其二首歌審、世之歌典此不錄、磨爲歌僧七十四人之第一也、嗟三國游方如鳥過空、太子之所葬、後人呼曰

達磨墳、人丸人而曰人何歟、魯叟曰、管仲人也、聖所譽歟、和歌之道、晩世若凌夷、講習失淵源、其跡紛等狂顛知園紅柿葉稀云乎、要知人之所以爲人、丸之所以爲丸者、課歌冊莫忽、明應乙卯之第四春二月。相城懶菴之野釋英璵叙。

註 (一)遯齋顯騰は、建長寺一六二世住持笠雲顯騰である。遯齋は其の號、寂年不詳。(二)英璵は建長寺一六四世玉隱英璵である。璵は璵を略書せるもの、寂年不詳。(三)謙牧翁中諄は、圓覺寺一四四世誠中中諄である。謙牧翁は其の號、永正五年七月十七日寂す。

柿本人麿畫像（小林正直氏藏）。紙本墨書後西天皇宸翰土佐光起筆。

柿本人麿畫像 光貞筆。（森繁夫氏藏）

柿本人麿畫像（森繁夫氏藏）。山城寂光院所藏系統のもので、千蔭の贊がある。『柿本朝臣人麻呂大人波篠並大津能宮乃大御代爾生禮眞清水乃淨見原荒栫迺藤原能二御代皇子乃尊迺舍人乎經而後石見乃國能下都司仁任慶雲乃年迺中爾齡四十知餘爾志己任乃中爾終里給比奴 此大人波長歌序古爾志母勝禮短歌將續而有計留其形姿辭波海原迺潮乃湧我如久勢波雲乃上迺龍能過流我如久爾之己意者荒魂和魂不至事奈加理伎故自古乎今其名乎稱續而自今後乃千五百代爾母貴美續乍歌作人誰歟此恩賴乎不蒙在米哉此體乎貴武時波古盛在志御代爾人乃心直久雄々敷乎知而末代爾意毛言母訛奴留乎改都倍伎事乃本也(二)

安田靫彦筆人麿像　この畫は、あまり身分も高いとは見えない簡素な旅裝の人麿を描いたものであつて、從來全く見ることのなかつた新らしい構圖である。山路に蹲踞つて、兩脚を投げ出し氣味にし、著てゐる緇袍の盤領の胸をひらいて涼を入れてゐる。被つてゐるのは風折烏帽子である。幅の右方、上から一行に、『たかやまのみねゆくしゝのともをおほみそでふらずきぬわするとおもふなと』、萬葉集卷十一、人麿歌集所出の歌を書いて居られるのでも、筆者の意圖が知られる。昭和七年七月白日莊主催の東西日本畫大家新作繪畫展覽會に出品されたものである。

小野篁作人丸石像（挿圖參照）。小野篁が勅を奉じて七體だけ作つたと稱するもので、大體高さ一尺くらゐの圓みを帶びた自然石に、表に人麿の坐像（兩足を合せるやうな形に坐し、右手に筆、左手に紙を持ち、向つて右側に、柿本人丸とある）を刻し、裏に、『天長二乙巳年、石見がた高津の松の木の間よりもり來る月をひとりかも見ん、九月十八日七躰二造、野篁謹自寫之』と書いてある。昭和十一年十一月の報知新聞に、この像に關する記事が二回にわたつて載り、七體の內六體が發見せられ、所有主も分かつたと報じた。ただ製作年月につき、『天長四丁未年十二月十八日』となつてゐるのもあり、『小野篁』と明かなのもあり、『七體』の二文字の消えてゐるのもあつて六體皆同一ではないさうである。此は「總論篇」二三六頁に既に記したが、それには、『天長二乙巳四月日篁』

と刻んである由記した。

高取燒人麿像（挿圖參照）これは高さ一尺一寸、初代八山の作だらうかと云はれてゐる。昭和十年六月十八日福岡日々新聞夕刊に、この人麿陶像が福岡西新町の舊家高山家から發見せられたことを報じ、高取燒は朝鮮陶工の八山が筑前藩主專用のみの窯を築いて燒いただけに、遺品も尠い折柄、この人麿像が、『初代八山作品との折紙が着けられたが、（中略）今回の初代高取作品は九州窯業の大きな收穫だらう』と云つてゐる。

明石人丸山柿本神社寶物木像　これは頓阿法師作と稱へられ、右膝を立てた形の木像で、その他の木像と同型のものである。ただ彫刻が丹念で細部も殘つて居り、森繁夫氏藏（總論篇）のものや、新庄町柿本神社藏（總論篇）のもの、その他の木像（鴨山考補註篇）とも稍趣を異にし、面長である。明治十三年歌聖一千百五十年回忌東京舊麾下佐々井半十郎明石神社奉納、諸彥歌集副、世話人岩村英俊藤井忠弘といふ副書がある。なほ明石の柿本神社には御歌所寄人遠山英一氏書、『ほの〴〵と』の一軸があり、神社境内に、尾上柴舟氏書の人麿歌碑が建てられた。

津和野小川家の人麿像　昭和十年六月十八日大阪每日新聞島根版に左の記事が載つた。

歌聖人麿の坐像發見さる。（津和野の舊家小川家から）。石見戸田郷で生れひとしく石見高津の鴨山を終焉の地とした一歟百

年來傳へられる歌聖柿本人丸の事蹟については、最近アララギの大御所齋藤茂吉博士がその著書「柿本人麿」によつて堂々たる論文を發表して斯學界に大なる波紋を巻起し爾來諸説紛々として萬葉學者の話題を賑はせてゐるが、ここにはからずも晩年を人丸研究に捧げてゐる美濃郡高津町世良亮太郎氏によつて一民家から人丸の木像が發見されるとともにこの木像の作者で津和野藩の名彫刻師大島松溪に對する貴重な文獻が津和野出身の井上蘭崖畫伯によつて發見され歌聖柿本人丸研究に得難い資料を提供してゐる、この木像の所有主は津和野町大字小坂の舊家小川恒次郎氏で數年前前記世良氏がふと耳にした記憶を頼りに去る十五日津和野町の同家を訪問土藏二階に秘藏されてゐることを確かめたもので小川家ではこれに觸れることさへも恐れてゐるので寫眞はとれなかつたがこの坐像こそ文化十四年正月災禍に神祠、神像を燒失した人丸誕生地美濃郡小野村戸田人丸社再建立のため津和野龜井藩主の公命により文政二年十二月大島松溪が彫刻、當時試作して藩主の御目に供したものである、しかしてその前後の模様を記した柿本明神再造記は同町夕藏山林内で井上畫伯がこのほど發見、それによると大島家鎭守として當時試作の人丸像を夕藏の地に祠りその後いつの代にか廢り大島家の近親に當る小川家に傳はつてゐるもので松溪に彫刻に要する道具を全財産を投じて購入、人丸の童形老體、作者の像合計八體を刻み戸田人丸社に祠りさらに道具一切を夕藏に埋藏したことが記されてある、なほこの彫刻師大島松溪は江戸で鈴木梅溪の門に學び南蘋派の畫を能くしまた木彫、石彫にも長じ弘化二年七月十二日八十九歳の高齢で沒してゐるが在世當時幕命により伊能忠敬が高津海岸測量の際これが輔佐役を命ぜられ意見の衝突から憤然去つたことは有名な逸話として傳へられてゐる。

文字人丸　これは人丸と漢字で人形をかき、人の右方の凹んだところに、人麿らしい顏をかいてゐる。普通にある文字人丸は、多く平假名で書いたのが多く、別掲の寫眞もその一例である、私もその數種を見て居るが、これは漢字で書いてゐる。なほこれには、紫野大德寺の大心和尚の畫贊が

あるから次にしるす。

日本歌仙、妙句動天、吟無思竟、才發自然、明石風景、寫筆新鮮、人丸名字、遍界流傳、上自聖主、下至群賢、相習爲業、善問攻堅、笠偈神秘、唐詩精專、井君和詠、三皆齊肩

日ノ本ノ人丸獨リ歌ノ神非々想天ノ上ノ上ナキ　紫野大心

日禎和尙畫像　京都左京區嵯峨小倉町常寂光寺所藏。京都本國寺十四世、京都常寂光寺開山日禎は、元和三年八月二十二日寂。廣橋大納言光國卿息也とあるが、廣橋家譜には所見が無い。畫の上に『苔衣きて住そめし小倉山まつにそ老の身をしられける。究竟院僧正日禎聖人詠哥肖影』といふ贊がある。畫像は脇息に凭つた左向の僧形で、何の奇もなく、人麿と關係が無いのであるが、頭に普通人麿像に見るやうな、冠をかむつてゐる。さうしてよく見ると、後人がつけ足したものだといふことが分かる。卽ち、人麿の像に似せるためにいたづらをしたものである。

人麿大明神火防神託（插圖參照）。信濃國、田幡村林泉寺の神符で、中央に、人麿大明神火防神託、右に七難卽滅、左に七福卽生とあり、下に燒亡はかきの本まで來るともあかしといゑばすぐにひとまるとある。幅二寸八分。長さ一尺。



第二圖　宗于君像　土岐嘉齋氏藏



第一圖　宗于君像　[illegible]

第三圖　小堀鞆音筆　宇都野研氏藏



第四圖　小堀鞆音筆　宮森麻太郎氏藏





第五圖　瀧上寺藏



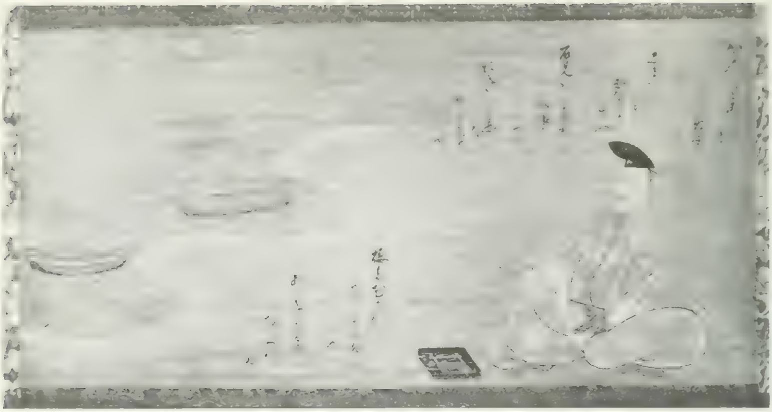
第六圖　土佐光高筆　著者藏



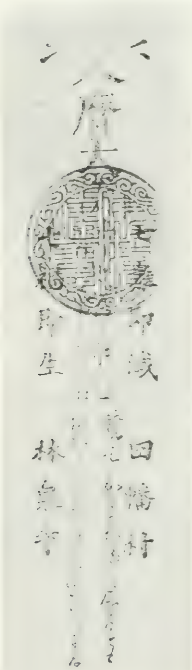
第七圖　渡邊綱彦氏藏



第八圖　仁阿彌道八作陶像　高橋道八氏藏



第九圖 北大路魯山氏藏

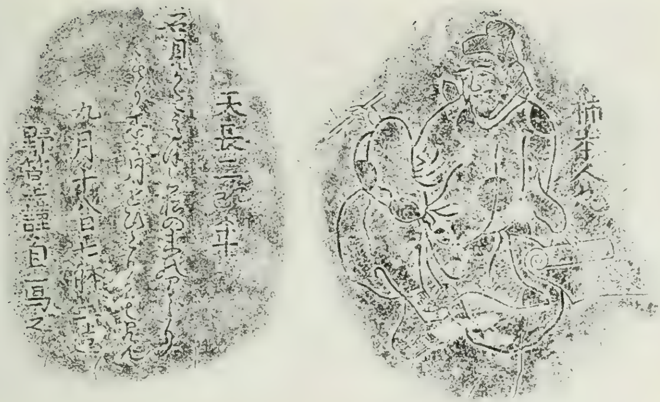


第十一圖

人麿大明神火防神札



第十圖 文字繪の人麿



第十二圖　傳小野篁作石像　秋元氏藏



第十三圖　木像　福岡某氏藏



第十四圖

陶像（高取燒）仲田氏藏

小考

萬葉卷二(二一七)の人麿の短歌中、『妻もあらば採而多宜麻之』の『採而』は舊訓トリテであつたのを、眞淵の考でツミテと訓んだやうに書いたが、これは、代匠記初稿本で既に、『とりてはつみてともよむべし。下のうはぎにかかる詞なり』と云つて居り、精撰本に、『トリテハ、ウハギヲツムナリ』とあるから、契沖はさういふ試訓を提出してあるので、眞淵はそれに據つたものであらう。併し、明かにツミテの一訓に定めたのは眞淵の考からであつた。それを明かにしないのは精しくなかつた。

私の註釋は、能ふかぎり文獻記載に努め、校本萬葉集諸說部の是正をも若干爲したほどであるが、それでも右の如き見落しがあつた。そのほかにもさういふ見落しがあるだらう、どうぞ自由に補正せられたい。

いほる考

萬葉卷二（二二〇）、人麿が讃岐狹岑島で詠んだ長歌の中に、「廬作而見者」といふ句がある。これをイホリシテミレバと訓むか、イホリテミレバと訓むか、イホルと動詞に考へる說には、槻落葉・略解・古義・檜嬬手・註疏・新考・新訓・新釋・全釋等があり、藤井高尙の松の落葉でもイホは體言、イホリは用言といつてをり、大言海、大日本國語辭典等もその動詞說である。然るに、山田孝雄博士は、「イホリはイヘヲリの約にして假初の家をつくりて居るをいふ。之を略してイホともいふ。かくして用より體に轉ずるなり。諸家往々イホといふ語よりイホリの出でたりといへるは逆なり。」（講義卷第一）「按ずるにイホリを直ちに動詞とせる例を知らねば、イホリテとよむは無理なるべし」（講義卷第二）と云つて居る。そこで私は評釋篇卷之上の原稿を作つた時は、イホリシテミレバを主とし、イホリテミレバを從として解釋し、それに未練を殘してゐたのであつた。

そして、廬利、廬入等の利・入が單に假名を表はしたのでなく、活用を暗指したのではあるまい

かといふ感じのもとに用例を求めてゐたところ、昭和十二年九月になつて、常陸風土記に一つの用例を見つけた。筑波郡の條に、

都久波尼爾、阿波牟等伊比志、古波多賀己等岐氣者、加彌尼阿須波氣牟也。

都久波尼爾、伊保利弖、都麻奈志爾、和我尼牟欲呂波、波夜母阿氣奴賀母也。

右、西野宣明校註本に據つたが、他書もかはりは無い。『加彌尼』につき、栗田寛の古風土記逸文考證に、『詳ならず、闕字あるべし。』といひ、『阿須波氣牟也』につき、『遊びけむにて、也は助辭の如く、歌一首の終に置たるなれば、歌詞にはあらず』といひ、『伊保利弖』につき、『庵にて假寐する意にや』と云つて居る。

この歌の、『伊保利弖』は、異本にあつても同様であれば、イホリテと訓むべきであるから、恐らくくこの歌の出來た頃から、イホリテと動詞にして使つたと結論して差支なかるべく、從つて人麿の歌の、『廬作而』もイホリテと訓んで差支の無いこととなる。因に云。鹿持雅澄は南京遺響で、『伊保利尼』利の下に都久利の三字の落しなどにやあらむ。さて尼は弖の寫誤なるべし』イホリツクリテとあるべし。萬葉十に、詠レ露、秋田苅借廬乎作吾居者云々』と云つたが、この脫字說はどうであらうか。それから、『尼』とあるのはやはり『弖』の誤であらう。

なほ、參考のために一二を記す。宣化天皇紀に、元年春正月遷二都于檜隈廬入野一とある廬入野につき通釋に、『廬入野は阿波國風土記に、檜前ノ伊富利野宮とあり。入は里の假名なること知られたり。里を省きても云しこと、慶雲四年威奈大村と云人の墓誌に、檜前五百野宮とあり』とある。また、萬葉卷十三(三三二四)に、雲入夜之迷間云々とある。此等の『入』は單に廣く『利』といふ假名の代用のことゝあらうが、動詞變化の時の『利』假名の時もあるであらう。

「うはぎ」補遺

萬葉卷二（二二一）の人麿の短歌、「妻もあらば採みてたげまし沙彌の山野の上の宇波疑過ぎにけらずや」の中の宇波疑はヨメナの事だと解釋して置いた。それで大體間違はないが、岡不崩氏の萬葉集草木考第二卷には精しい考證が載つてゐる。

宇波疑（於八木）には薺蒿・莪蒿等と「蒿」の字を用ゐてゐるが、蒿は蓬であるから、別な植物といふことになるが、若菜の時には相似てゐるので、總稱して蒿の字を使つたものと見える。支那でも白蒿・靑蒿・蔏蒿等と區別してゐるが、共に蒿の文字を用ゐてゐるのは通呼したのである

さて、岡氏は、「菊科なるヨメナ屬の Aster Laulureanus. *Franch.* 或は又菊花屬の、Ch. lavandulaefolium, *Makino.* の、古名にてはあらざるか。（中略）今本草和名に依れば、薺蒿菜を崔禹錫は、一名蘆蒿、一名薺頭草といへり。蘆蒿は爾雅に、莪蒿又は蘿蒿とあり、薺頭草は爾雅に牡蒿なりとあり。然らば萬葉時代に於て、ウハギを漢名蒿に宛つるは、いかゞにやとの說もあらむ、それは菟芽子又は

宇波疑（ウハギ）と、假名書せるを以てなり。されど予の推測するところによれば、當時の本草又は毛詩の注疏等によりて、若菜の宇波疑は、蒿の類に似たるも、蒿の類甚だ多くして、一定し難ければ、莵芽子又は宇波疑と假名書せるにはあらざるか。（中略）ウハギを、蒿の類に宛てたるは誤りなり。されど當時若菜として、其苗葉の類似せるを以て、凡て蒿の類ならんとせるなるべし。（後略）』と云つてゐる。

併し、宇波疑（うはぎ）はヨメナ（Aster indicus, L.）と解して大體差支はなく、雞兒腸（ヨメガハギノギク）とも解し、なほ鐵桿蒿（ヤマヂノギク ヤマシロギク）馬蘭（コンギク）等と古代は一しよにして採んだものであらう。味は少しづつ差別がある。

實物に就いての論議は大體以上で分かるが、人麿が宇波疑（うはぎ）を咏み込んだについて岡不崩氏は次の如くに云つてゐる。

（前略）人麻呂の詠じたる、妻もあらばの歌は、古今注の挽歌に題材を得たるにはあらざるか。宇波疑は蒿の屬なるべしと、解したることゝ想はるるなり。そは此哀傷の歌に、何等縁のなき、蒿なり宇波疑なりを、詠むの要はなかるべし。しかも期節を過ごしたる宇波疑なり。早春ならんには、誰にも分別して採むことを得るも、他の雜草の生ひ出でたる、初夏の頃には、唯一目（ひとめ）には見分けがたかるべし。秋深くして衆草に遲れて、愛らしき小菊花の咲くありて、更にウハギを知るに至るべし。されば人麻呂は、其實況を詠みたるにはあらで、假想的に

詠みたるか、將又聞き傳へて、作歌せるかに外ならざるべし。（下略）

岡氏文中、『古今注』といふのは崔豹古今注卷中にあるもので、薤露蒿里並喪歌也。（中略）言人命如薤上之露、易晞滅也、亦謂人死魂魄歸乎蒿里、故有二二章。一章曰、薤上朝露何易晞、露晞明朝還復滋、人死一去何時歸。其二曰、蒿里誰家地、聚斂魂魄無賢愚、鬼伯一何相催促、人命不得少踟躕。（中略）薤露送王公貴人、蒿里送士大夫庶人、使挽柩者歌之云々。その中に「蒿里」とあるのが卽ち宇波疑に關係してゐると做すのである。

右の如く、岡氏は人麿は支那の詩の模倣で、空想を以て、「野の上の宇波疑過ぎにけらずや」と作つたのであらうと云ふのであるが、愚考はさうは思はない。縱へ人麿は、前記の如き支那の詩を讀んでゐたにせよ、この歌はもつと現實に卽したもので、當時の食物史上、宇波疑はさういふ空想的なものでなく、實際に食用とし、然かも大切な滋養菜と看做されてゐたものであつただらう。卷十（一八七九）に、「春日野に煙たつ見ゆをとめらが春野の兎芽子採みて煮らしも」とあるのを見ても分かり、また、既に評釋篇にも觸れた如く、和名鈔卷十七に、薺蒿、七卷食經云、薺菜一名莪蒿（莪音鵝、和名於八木）崔禹錫食經云、狀似艾草而香作羹食之とあり、延喜式卷三十九、內膳司に、漬年料雜菜、薺蒿一石五斗、料鹽六升、右漬春菜料とあり、出雲風土記には、嶋根郡附島、有椿松薺頭蒿葦茅都波、

其薺頭蒿者、正月元日生長六寸とあるし、なほ、意宇郡砥神島、羽嶋、嶋根郡和多多嶋、結嶋、穴宇嶋、屋嶋、小嶋に有薺頭蒿の記述がある如く、煮ても漬けても食したことが分かり、海中の嶋に多く野生してゐたことも分かる。また現在砂彌島にヨメナを採集し得るのであるから、人麿の歌はただの空想で作つたのでないことが分かる。ただ、溺死體の傍に、時過ぎた宇波疑を採んで來たので無いこともまた明瞭であるから、私が現實的、實際的と云つてもそれを誤り解してはならない。薺蒿は支那でも日本でも食する如く、實際生活の樣式に類似共通の點のあるのは自然的事實である。從つて、その一方が一方の模倣・影響だなどとは速かに斷ずることが出來ない場合も多いのである。從つて、人麿の歌の宇波疑云々は、支那の古今注の、蒿里云々の模倣だと速斷することが出來ないのである。

近時、我國の上代文學と支那の上代文學との關係交渉について研究する學者が多く、これは學問發展上必要なことであるが、結論がややともすれば放縱になつて正鵠を得ない點もあるので、その一二は既に評釋篇に於て愚見を述べて置いたが、今偶、岡不崩氏の說に逢會してまた愚見を補充することとした。（昭和十二年九月）

賀茂・鴨・神・龜

私は、鴨山考、鴨山考補註を作つた時、賀茂・鴨・神・龜の相關に就いて述ぶるところがあつた。なほそれに關し機に接觸して得た參考資料を書繼ぐこととする。

出雲風土記、意宇郡、賀茂神戶。郡家東南卅四里、所レ造二天下一大神命之御子、阿遲須枳高日子命、坐二葛城賀茂社一、此神之神戶、故云レ鴨（神龜三年改二字賀茂一）即有二正倉一。ここには、賀茂・神・鴨の相通じて用ゐられたことが證明せられる。此地は風土記と和名鈔で違ふし、現在の地名は不明であるが、能義郡にあると考へて好い。

平田篤胤の古史傳卷三十一、瓊瓊杵命の御陵は筑紫日向埃之山に有りといふところの解釋がある。御陵は、前王廟陵記に薩摩國頴娃郡、和名鈔に薩摩國頴娃（江乃）郡頴娃鄕とある處だとし、種々考證した中に次の事が書いてある。

此の廟の山を、神龜山とも、龜山とも云ふは、山の形に依りてなり。（中略）此の山を龜山と云ひて、山の形の、龜

に似たりと云ふなるは、蓋元は、神山なるを、龜山と訛りしより、如此云へるには非ざるか。下略

卽ち、薩摩の國人は、龜山といふ名は、その形が龜に似てゐるからだといふけれども、それは神山が訛つたのだらうと、篤胤は考へてゐるのである。これは私が、『龜』といふ村について考へたところに補充してよく、神・龜と相通じてゐるのである。この龜山のことは、神社縁起に、『山者一而包二龜形勢一、因稱二神龜山一』云々。諸神記に、『鎭二座龜山一』云々。地理纂考に、『山の形狀圓くして、實に藏女に似たり、故に龜山とも云ふ』云々とあるによつて國人に通じてゐることが分かる。

「亂友」に關聯して

一

萬葉卷二（一三三）の人麿作、『小竹の葉はみ山もさやに亂友われは妹おもふ別れ來ぬれば』の中の『亂友』に、ミダルトモ、ミダレドモ、サワゲドモ、サヤゲドモ、マガヘドモ等の諸訓があるが、鑑賞上は皆共に參考して味はつて好いけれども、その中で私は、ミダレドモの訓に一番執著する旨を、評釋篇卷之上（八三頁）に記して置いたのであつた。

私の評釋はずつと以前（昭和八年）に書いたものだが、發行になつたのは昭和十二年五月であつた。それから少し經て、昭和十二年十月から、澤瀉久孝博士の『さやぐ攷』（アララギ第三十卷第十號より第三十一卷第二號迄）が出た。此論文は寔に精到なる攷證であつて、論文の出現するや早くも學界を動かし、橘守部のサヤゲドモの訓は、博士の攷證によつてまさに定說とならうとして居る。博士のその攷證の結論は次の如くで

ある。

一、「亂る」は自動詞の場合下二段にして四段の例なし。故にミダレドモとは訓めず。

一、「亂」はサワグと訓める例あり。

一、「みだる」は木の葉の場合に用例なく、葉のそよぐ事を「みだる」といふはふさはしからず。

一、木の葉の場合は「さわぐ」の例なく、すべて「さやぐ」なり。

一、「さや」に清爽の意あり、「さやぐ」も「さわぐ」も同様の語なれど、「さやに」につゞく場合、「さやぐ」の方ふさはし。

一、「さやぐ」は聽覺を主とすれども語源的に「視覺」を伴へるものにて、この場合も然り。その意味で、「さわぐ」よりもふさはし。

一、上代の歌には特にくりかへし多し。この歌もその一例と見るべし。

右の如くであつて、その一つ一つの結論には精密な理由が附してあるものである。そこで、斯くの如き精細な攷證に對しては、もはや一語も批判すべき餘地が無い觀を呈するのであるが、私は、ミダレドモといふ訓に未練があり執著があるために、評釋篇卷之上を發行した後も折に觸れて書きとどめて置いたものがあるから、それを次に記して、私見の一端を披瀝しようとおもふ。

二

『亂』の活用が萬葉集の假名書の例は、皆、ミダレ（美太禮、美多禮、美多要）といふやうに下二段に活用してゐるが、平安朝になつてからの例では、四段に活用したものは他動詞、下二段に活用したものは自動詞といふ具合にいつのまにか約束が出來てゐた。

水之上丹、文織紊、春之雨哉、山之緑緒、那倍手染濫

黄葉、誰手向砥歟、秋之野丹、秘麻砥散筒、吹交紊良牟

この二つは共に新撰萬葉に載つたもので、『織紊』は連體格であつて、字餘りにせぬためにはミダルと訓まねばならず、さすれば四段に活用することとなる。それのみでない、この歌は、『寛平の御時きさいの宮の歌合のうた』として新古今集にも收められた伊勢の作で、明かにミダルと記されてあるものである。なほ、

秋くれば野もせに蟲の織りみだる聲の綾をば誰かきるらむ（後撰、藤原元善）

といふ歌のオリ・ミダルによつても明かなるが如く、ミダルは四段に活用し、他動詞に使つてゐる。その次の、『吹紊』をフキミダルと訓むことは、

ふきみだる柞が原を見渡せば色なき風ももみだしにけり　（千載、賀茂成保）

ふきみだる風の氣色に女郎花しをれしぬべき心地こそすれ　（源氏物語）

等のフキミダルによつても推論することが出來るのである。然らば、

我刺、柳絲乎、吹亂、風爾加妹之、梅乃散覽　（萬葉卷十、一八五六）

といふ歌の『吹亂』をフキミダルと訓んでもいいと類推し得、また連體格であつて字餘にせぬためには、どうしても四段に活用せしめてミダルとせねばならぬところである。さうすれば、萬葉集にミダルといふ四段の活用が確かにあると謂つて差支ないこととなる。

然不有、五百代小田乎、苅亂、田廬爾居者、京師所念　（卷八、一五九二）

蚊黑爲髮尾、信櫛持、於是蚊寸垂、取束、擧而裳纏見、解亂　（卷十六、三七九一）

從つて此等の亂字はミダリと四段に活用せしめ得て決して不合理ではないだらう。さうして是等は皆他動詞卽ち後のミダシと同じ意味に使つたものと解釋し得るから、此處は下二段のミダレではどうしても調をなさぬ。

春のきる霞の衣ぬきをうすみ山風にこそみだるべらなれ　（古今春上、行平）

ぬき亂る人こそあるらし白玉のまなくも散るか袖の狹きに　（古今雜上、伊勢物語、業平）

瀧つ瀨にたれ白玉を亂りけむ拾ふとせしに袖はひぢにき　（後撰雜三、讀人不知）
ぬき亂る淚の玉もとまるやと玉の緒ばかりあはむといはなむ　（拾遺戀一、讀人不知）
ぬきみだる淚も暫し止るやと玉のをばかり逢ふ由もがな　（續後撰戀二、貫之）
おきあかし見つつながむる萩の上の露ふき亂る秋の夜の風　（後拾遺秋上、伊勢大輔）
さゝがにのいかになるらむけふだにも知らばや風の亂る景色を　（蜻蛉日記）
氷とけし池のおもてに小車のあや織りみだり春雨ぞ降る　（香川景樹）
春雨を物にたとへば水引の絲をみだりて散らすなりけり　（井上文雄）

このミダルと他動四段に活用した例は、古今集以後傳統をなして德川から明治の歌壇にも及んで居るのである。約めて云へば、萬葉集編纂の頃から現代にまで及んでゐるといふことになる。

次に、然らば、下二段に自動詞に活用せしめた例はどうかといふに、假名書の例は、
うるはしとさ寢しさ寢てば刈薦の美陀禮婆美陀禮さ寢しさ寢てば　（古事記下）
伊豆の海に立つ白浪の在りつつも繼ぎなむものを美太禮志米梅楊　（卷十四、三三六〇）
白雲の絕えつつも繼がむともへや美太禮曾米家武　（右同、或本の歌に云ふ）
刈薦の美太禮氐出づ見ゆあまの釣船　（柿本朝臣人麿の歌に曰く（卷十五、三六〇九左註）

都べに行かむ船もが刈菰の美太禮乎おもふ言告げやらむ　（卷十五、三六四〇）
逢はむ日の形見にせよと手弱女の於毛比美多禮乎縫へる衣ぞ　（卷十五、三七五三）
くれなゐの赤裳裾引きをとめらは於毛比美太禮底君待つと　（卷十七、三九七三）
卯の花山のほととぎす哭のみし泣かゆ朝霧の美太流流許己呂　（卷十七、四〇〇八）

かくの如くに假名書の例があるのだから、訓に異論の出でやうが無く、それから類推して、集中の自動詞の『亂』を大體は下二段に活用せしめてよいといふ結論になるのである。

飼飯の海の庭よくあらし苅薦の亂出所見あまの釣船　（卷三、二五六）
否といはば强ひめや吾背菅の根の念亂而戀ひつつもあらむ　（卷四、六七九）
戀ふる事まされる今は玉の緒の絶而亂而死ぬべく念ほゆ　（卷十二、三〇八三）
青柳の絲のくはしさ春風に不亂いまに見せむ子もがも　（卷十、一八五一）
梅の花枝にか散ると見るまでに風爾亂而雪ぞ落りくる　（卷八、一六四七）
片絲もち貫きたる玉の緒を弱み亂哉爲南人の知るべく　（卷十一、二七九一）

等の『亂』は盡く下二段に活用することとなる。この結論は、『玉の緒を片緒に搓りて緒を弱み亂時爾戀ひざらめやも』（卷十二、三〇八一）の例で明かにミダルルトキニと訓む方の可なるを以てその證と

することが出來る。

これは既に澤瀉博士の結論であるが、萬葉集の、「亂」の自動詞の活用は盡く下二段だとせば、人麿の歌の、「み山もさやに亂友」の「亂友」をミダレドモとはどうしても訓めないこととなる。博士が、

> 自動の場合は文獻の存する以來既に下二段になつてゐたものである。卽ち本論の主題の歌の第三句を「ミダレドモ」と訓むべき「證古今に一も存せず」と申すべく、この訓には從ひ難いのである。

といはれたとほりである。

これであるから、續日本紀興福寺大法師等の、「亂絲乃亂而有禮度絹垂飛波志」などをはじめ、新撰萬葉集の、「沙亂丹物思居者」、「沙亂丹情解筒等」、ミダレと活用させしめて、「さみだれ」に借りて居る程である。

打亂物緒思歟女倍芝世緒秋之風心倦介禮者（新撰萬葉集下）

青柳の絲よりかくる春しもぞ亂れて花のほころびにける（古今春上、貫之）

春日野の若紫のすり衣しのぶのみだれ限り知られず（伊勢物語、新古今、業平）

陸奥の信夫もぢ摺誰ゆゑに亂れむと思ふ我ならなくに（古今戀四、河原左大臣）

浪のうつせみれば玉ぞ亂れける拾はば袖に儚なからむや（古今物名、滋春）

東屋のかやが下にし亂るれば今や月日の行くもしられず（後拾遺戀三、康資王母）

盤へしかもの社のゆふだすきかへる朝ぞみだれたりける（後拾遺雜四、安法）

東路にかるてふ萱の亂れつつ束のまもなくこひや渡らむ（新古今戀三、延喜御歌）

まめなれど何ぞはよけく苅萱の亂れてあれど惡しけくもなし（古今雜體、讀人不知）

朝な朝なけづれば積るおち髮の亂れて物を思ふころかな（拾遺戀三、貫之）

斯くのごとくに、ここに掲げた用例の盡くが自動詞として下二段に活用してゐるのであるから、澤瀉博士の、「文獻の存する以來既に下二段になつてゐたものである」をば認容せねばならぬがごとくである。

三

然るに私は、人麿の歌の中の、『亂友』をば、ミダレドモと訓みたいのであり、萬已むを得ずばミダルトモと訓み、いよいよ致方が無いときにサヤゲドモに至らうといふのであるから、私は稍別な方面から、このミダレドモと訓む理由を追尋しようと思つたのである。

日本語の動詞は、古く四段に活用し、或時期から下二段に活用するやうになつた例は幾らもある。「隱る」でも、爾呂何可久里爲（卷十四、三三八三）は四段であり、可久禮奴保刀爾（卷十四、三三八九）は下二段であつて、同じ萬葉に既に二とほりの活用があつた。「垂る」でも亦さうである。之良比氣乃宇倍由奈美太多利（卷二十、四四〇八）は四段であり、玉垂之小簀之垂簾乎（卷十一、二五五六）は下二段である。「觸る」も、伊蘇爾布理宇乃波良和多流（卷二十、四三二八）は四段であり、伎美我手敷禮受（卷十七、三九六八）、和我比布禮奈奈（卷二十、四四一八）は下二段である。斯くの如く、同じ萬葉集にあつて、二とほりの活用が既に存じて居たものであるが、「亂る」も亦同様であるのみならず、この「亂る」は、いつの間にか、四段は他動詞に使ひ、下二段は自動詞に使ふといふやうに分化してしまつてゐる。この分化は他の動詞と比較して時間的に早い如くである。どうして早かつたか、それは私にも分からぬけれども、發音上の便利不便利もあるべく、それが發聲學的に解明が出來ることもあるべく、ミダラズ、ミダラヌよりも、ミダレズ、ミダレヌの方が發聲學的心理學的に自然だといふやうなこともあるべく、いづれにしても「亂る」の分化は萬葉時代に既に行はれてゐたことは明瞭である。

併し、此處に斯ういふ問題がある。萬葉で「亂る」の假名書きの例は僅かばかりであるが、あの例を以て、當時の「亂る」の用語の全體を律し得るであらうか否かといふのがその問題である。

この問題を提出して、さうして自ら斯う考へる。『亂』は恐らく、古くは自動・他動共に四段に活用したものであらう。それが漸く、下二段活用に變化し、次いで第二次の變化として、古い四段活用が他動にのみ限局し、下二段活用の方に自動が限局するやうになつた。これは事實であらう。併し、それは必ずしも同時期に一樣に行はれたのでなく、漸を以て自然約束的に行はれたのであると思ふから、さうすればその混合型・移行型が未だ隨時隨處に行はれて居たと推論して大きい誤が無いやうにおもふ。即ち、語を換へて云へば、『亂』の自動四段活用が萬葉時代に未だ實際生活の用語に殘つてゐたものと謂つて差支ないやうにおもふ。また、萬葉集の歌の整理せられた時は既にミダレと下二段に訓ませたが、原作はミダリと四段に活用せしめたのかも知れぬのである。萬葉に『美太禮』と假名書にしたのは、『亂』字の訓が『美太利』よりも却つて耳新しかつたからだといふ如き假說も成立たぬことがなからうと思ふ程である。

以上はこの問題に對する私の結論であるが、この結論を導いた材料を次に記すこととする。この材料は用例の直接的材料でなしに、稍間接的となるが、これも亦貴重材料の一部となるものである。

ここに、ミダリニといふ副詞があるが、これは四段に『亂』を活用せしめた證で、古來、妄・濫・猥・漫・浪などの字にこの訓を當てて居る。例へば、書紀、孝德天皇紀大化二年に、浪要㆓他女㆒而

未レ納際、女自適レ人、其浪要者云々とあるが、その中の「浪」をミダリニと訓み、同紀同年の、「恒生二浪訴一」をばイカムゾ・ミダリニ・ウタフルコトヲナサムと訓み、雄略天皇紀十三年の條に、妄歟答とあるをミダリガハシク・モノイフ或はミダリニ・タダコタヘスルヤと訓み、清寧天皇紀の作亂をミダリ（ミダレ）ヲナス、或はミダリゴトヲナスと訓んでゐる。

なほ、支那の書、例へば戰國策の民不二妄取一でも、老子の不レ知レ常妄作凶でも、「妄」をばミダリニと訓んだに相違ない。音讀せずに訓讀した時には、さうであつただらうと推察するのである。妄は亂也。从女亡聲と注せられてゐるのを見ても、ミダリニと訓んで差支の無いことが分かる。

なほ、金光明最勝王經の、「依二止根處一妄貪求、如二人奔二走空聚中一」（重顯空性品第九）の句は、「ミダリニ貪り求む」云々と倭訓したに相違なく、「六根六境妄生二繫縛一」（同）は、「ミダリニ繫縛を生ず」云々と倭訓し、「惑二人眼目一妄謂二象等一」（依空滿願品第十）は、「ミダリニ象等を謂ふ」云々と倭訓したに相違ない。なほ、法華經の、「以レ不二妄與一レ人」（安樂行品第十四）も、「ミダリニ人に與へず」云々と訓み、「我常守護、不二妄開示一」（同）も、「ミダリニ開示せず」云々と訓んだに相違ない。即ち、そのころ既に渡來してゐた佛典中の、「妄」といふ副詞を倭訓にした場合にはそれを「ミダリニ」と訓んでゐたと結論して差支なからうと思ふのである。

白川の瀧のいと見まほしけれど妄(みだり)に人をよせじものとや（後撰雑一、中務）

白川の瀧の絲なみ亂れつゝよるをぞ人はまつといふなる（同かへし、太政大臣）

後撰集のこの二首は、副詞として、ミダリニ（妄）があつて、返歌の方にはミダレ（亂）といふ下二段の動詞のある例で、有益な例である。卽ち古く『亂』が自他共に四段に活用した、その名殘がミダリニ（妄）となつて行はれて居り、一方その四段の自動詞が下二段に變化して此處に用ゐられてゐるのである。吾等は心しづかにこの二首の歌に相對して、『亂』字の活用の歴史を顧慮せねばならない。語を換へて云へば、『亂』字の自動四段の活用を否定してはならない。

次に、ミダリガハシといふ形容詞がある。大言海に、妄なる狀なり。イソガハシのガハシと同趣と解釋してゐる。類聚名義抄には、濫・浪・叨・慢等にミダリガハシの訓を附し、亂にミダル、ミダリガハシ、妄にミダリ、ミダリガハシの訓を附してゐる。天治本新撰字鏡に、論篤を彌太利加波志(ミタリカハシ)と訓ませ、伊呂波字類抄に漫・濫・猥・妄・喪・淆・狂等にミダリカハシの訓を附してゐる。なほ、倭玉篇に、妄にミダリガハシ、日本靈異記（卷下第十六）、天骨婬泆、濫嫁爲レ宗、我齡丁時、濫嫁邪婬、濫嫁惜レ乳、不レ賜二子乳一云々の濫にミダリガハシの訓を附した。この語のミダリは卽ち四段に活用した語に本づいてゐる。

このミダリガハシは、ミダレガハシとも轉じた。上記靈異記の濫字の如きも掖齋の攷證に『高野本リ作レレ』とあるから、一本にはミダレガハシとあるものである。これは同じく靈異記卷中、第三十二、濫就(下)甑(ニ)供養(ニ)之處(上)の濫をミダレガハシと訓んでゐるのを見ても分かる。源氏に、『みだりがはしき中を分け入り給ひ』、『みだりがはしきことを聞え給ひつつ』、狹衣に、『さやうにみだれがはしく心をわくるかただになくて』とあるのを見れば、ミダリ、ミダレと兩方に使つてゐることが分かる。そして此は必ずしも自動他動の區別は無いところを參攷すれば、亂の四段活用も古くは自動他動の差別なく、共にさう活用せしめたと推論して差支ないやうにおもふのである。

次に、名詞として、ミダリアシ(亂足)、ミダリアシノケ(亂足氣)、ミダリカクビヤウ(亂脚病)、ミダリカゼ(亂風)、ミダリゴコチ(亂心地)、ミダリゴト(亂語)、ミダリムネ(亂胸)、ミダリヲ(亂尾)等の語があり、既に倭訓栞・雅言集覽・言海・國語辭典等にも收錄せられて居るが、この熟語のミダリは、亂字を四段に活用せしめた證據となるものであつて、それが自動にも他動にも共に使ひ得る自在性を有するところを見れば、四段活用の亂字も古くは自他兩用であつたと想像して誤が無いとおもふのである。そこで、孟子の「妄人」なども、若し和訓にせば、ミダリビト或はミダリガハシキヒトと訓んだであつただらう　それから此等の語は、ミダレアシ(亂足)、ミダレゴト(亂語)、ミダ

レゴコロ（亂心）といふ具合に下二段に活用せしめて熟語としてゐるから、亂字の活用の變化につれて變化したことが分かる。

四

古事記下卷の、美陀禮婆美陀禮をはじめ、古事記安康卷に、『意富祁王袁祁王二柱聞此亂而逃去』とある『亂』をミダレと訓ませてゐる等、また萬葉の假名書きの全部がミダレであるところを見れば、この活用の變化は存外早く行はれてゐたのであつただらうといふことは既に前言したとほりであり、また、その下二段活用の中に交つて從來の四段活用も未だ用ゐられてゐたことは想像するに難くはないといふことも亦既に前言したとほりである。

それから、これも既に前言したが、原の四段活用の自動詞の用例が失せて他動詞の場合のみ殘留するやうになつたのは、恐らく發音上の關係であらうが、それと同時に、例へば、巧言亂レ德、小心不レ忍則亂二大謀一（論語）、孔子曰、惡二似而非者一、惡レ莠、恐二其亂一レ苗也。惡レ佞、恐二其亂一レ義也。惡二利口一、恐二其亂一レ信也。惡二鄭聲一、恐二其亂一レ樂也。惡レ紫、恐二其亂一レ朱也。惡二郷原一、恐二其亂一レ德也。（孟子）の如く、他動詞の傾向の時に、原の活用の方が便利であつたといふ點などもあるのかも知れ

ない。それが變化してミダスとなり、好レ勇疾レ貧亂也（論語）の如くミダスと訓ませ、このミダスの語は既に、故實手澆多之（三代實錄卷十七）の如く載つてゐるのである。この三代實錄の例は澤瀉博士も手抄せられて居た。この四段のミダルの殘留は、例へば、是亂二天下一也（孟子）といふ場合に、既に「亂」が下二段に活用してゐて、それが、ミダレム、ミダルと自動に活用してゐるのであるから、それと區別するには、ミダラム、ミダルと從來の活用を以てするのが便利であつたので、ミダラムを他動にしようとする語感に限局せしめることとなつたのであらう。なほこの事は專門の學者の説を聽くべきである。

五

次田潤教授は改修萬葉集新講上卷（一五七頁）で、「引馬野爾、仁保布榛原、入亂」の處で、集中には、「亂る」が下二段に活用した事を示す假名書の例もあるが、一方平安朝時代に用例の多い、「みだり心地」「みだり言」「みだり足」「みだりがはし」等の「みだり」は、嘗て四段に活用した名殘を示して居る。上古に於て四段に活用した動詞で、後世下二段活用に轉じた語の例は幾らもある。例へば「青山に日が隱久良ば」（古事記）、「いかにか和可むと」（八一六）「礒に布理」（四三一八）「涙多利」（四四一八）「和須良むと」（四三四四）等の「隱る」

「分く」「觸る」「垂る」「忘る」は、何れも四段活用の動詞として用ゐられてゐる。因つて「亂る」も古くは四段に活用したものと思はれるから、今はイリミダリと訓んで置く。

と云はれて居るが、これがやがて私の結論と同樣に落著くのである。なほ私の評釋の文は當時山田孝雄博士の著書から多くの恩賴を受けたものであつたが、山田博士は、『古語にてはこの語四段活用たるなれば、その連用形にてミダリとよむべし』（講義卷第一）、『亂は古は四段活用なれば、ミダリといふべきなり』（講義卷第三）と云つて居られる。なほ本居宣長の文を讀むに、『あらく、みだりにして』、『甚みだりなることとなり』、『みだりによみちらせ』、『みだりなる强ごとなり』（うひ山ふみ）等に逢著する。卽ち宣長も、『亂』を古くは自他共に四段に活用したものとして、その模擬古文を書いて居るのである。

右の如くで、『亂』も嘗ては自他共に四段に活用しただらうといふ結論には先づ間違はないとおもふ。ただ澤瀉博士の云はれるごとく、文獻の存する以來下二段になつてゐたといふ結論をも否定することが出來ない。尠くとも明かに假名書になつてゐる例を證據とする以上は否定することが出來ない。

そんなら、何時頃から自動下二段に限局したか、また、萬葉集時代の日本語全體が、或は人麿や

奥麻呂時代の日本語全體が、既に下二段に『亂』を活用せしめたか、それは容易に極められない問題だとおもふ。澤瀉博士が、「言葉の放濫時代に生きてゐる現代の人にはそこまでの別を考へなくともと思はれるかも知れないが、かうした上代人の言語感覺を今の人ももう少し尊重してよいのではないかとわたくしは思ふ」と云はれたのは私も至極同感であるが、萬葉集の假名書きの數例のみを以て、萬葉集を通じた時代の全體の日本語を律するのはどうか知らんと私かに思ふのである。前にも云つた如く、私の推察では、萬葉の上期は四段、末期でもいまだ下二段との混合狀態が行はれてゐたのではあるまいか。

さまざま亂れさせ給ふ。今年は先づ下人などはいといみじう、唯だ此頃の程に亡せ果てぬらんと見ゆ。（中略）三月ばかりになりぬれば、關白殿の御惱みもいと頼もしげ無くおはしますに、内に夜の程參らせ給ひて、斯くてみだり心地いと惡しく候へば、此程の政は内大臣行ふべき宣旨下させ給へと奏せさせ給へば（下略）（榮華物語）

榮華物語のこの文には、動詞の時には下二段になつてゐるが、名詞の時にはいまだ四段の形の儘に殘つてゐる實例があるのである。當時の人々は、國語學者、文法學者でなかつたために、その變

遷のありさまを歴史的に一々究めたのではないが、自然的潮流としてこの實行が見られるのである。もう一度語を換へて云へば、さう意識せずにこの混合の使ひ方を實行してゐるのである。

和須良牟砥、努由伎夜麻由伎、和例久禮等、和我知知波波、和須例勢努加毛　（巻二十、四三四四）

これには、『忘る』といふ動詞の四段と下二段と二つ含んでゐる例である。即ち、一首にその混合例の明かな例である。この作者は特に文法上の疑などを起さずに一首の中に二つの活用を平然として使つてゐるのである。「宇奈波良乃、根夜波良古須氣、安麻多阿禮婆、伎美波和須良酒、和禮和須流禮夜」（巻十四、三四九八）の「忘る」の活用もまた、一首の中に兩方使つて居る。

上の如き事實をいろいろ綜合して考へると、「亂」の活用の場合も、萬葉集の時代全體から見れば、やはり混合して行はれてゐたのではなかつただらうか。二つの活用（他動四段、自動下二段）と、その原形（自動四段）がいまだ殘つてゐたのではなかつただらうか。即ち、人麿の時代には、いまだ自動四段の活用が殘つてゐたのではなかつただらうか。然らば、人麿の歌の、『亂友』をば、『ミダレドモ』と訓んで差支あるまいといふことになる。澤瀉博士の精細なる攷證があるにも拘らず、なほ西本願寺本、寛永本（仙覺）、代匠記精等の訓の『ミダレドモ』に執著し、それに私見を附する所以である。

六

右にも云つたやうに、古寫本中で、ミダレドモと訓んだのは西本願寺本のみであるが、そのほか、大矢本、京都大學本には青を以てレと記入あり、なほ京都大學本には亂の左に赭くミタレと書いてある。これは校本萬葉集に據つたのであるが、此等の訓は、仙覺の訓に從つたのがあるやうである。さすれば、古い寫本の大部分（元・金・類・古・神・溫）はミダルトモである。

自分はまた次のやうにも考へてゐる。トモといふ助詞は、縱ひ、條件を附し、假令をあらはす時に使ふのだといつても、やはり人麿の作、『大和田、與杼六友』（巻一、三一）の場合の如く、現在淀んでゐてもよい。此は既に拙著（評釋篇上）で説いたごとくである。（なほ、柴生田稔氏、佐伯梅友氏の考説がある）然らば、『亂友』をどうしても、下二段に、訓まねばならぬとせば、この際ミダルトモの訓に還元してもかまはぬと思ふのである。このトモは矢張り人麿作、『石見乃海、角乃浦回乎、浦無等、人社見良目、滷無等、人社見良目、能咲八師、浦者無友、縱畫屋師、滷者無鞆』（巻二、一三一）の例をも參考にして好く、現在山篠がざわめいて亂れ立つて居つても、さうミダレテ居つても、それでも、といふやうに解し得るのである。この古い訓もまた棄てずに味つて好いと思ふのである。今勅撰集で『みだるとも』の

入つた歌數首を示せば次のごとくである。この方は假令の色合がもつと強い。

亂るとも人知るらめやかげろふの岩がき淵の底の玉藻は（續古今戀一、政村）

下にこそ忍ぶの露の亂るとも袖の外にはいかがもらさむ（新後撰戀一、成茂）

心こそ絶えぬ思ひに亂るとも色にな出でそ忍ぶもぢずり（新後拾遺戀一、藤經）

みさび江の底の玉藻の亂るとも知らるな人にふかき心を（新續古今戀一、兼好）

七

友人柴生田稔氏に、次の如き假定がある。（亂を自動下二段と極めて）。

『みだるれども』を發音の關係より「みだれども」とは言はれぬかといふ假定。例へば、『忘らる』は四段活用の殘りと說明してゐるが、何故にこの形だけ四段活用時代の痕を留めてゐるかと言へば、發音上の要求が考へられるのではないかと思ふ。「みだる」がもと四段であつたとすれば、下二段になつて後も、『みだれども』の形が殘つたと考へる事も出來るのではなからうか。

右は柴生田氏の假定であるが、人麿の歌の、「妹之結、紐吹返」（卷三、二五一）のフキカヘスに就いて、佐伯梅友氏が說をたてて、カヘスはカヘラセル心持で、今は濱風に向つて自分が紐を吹きカヘ

ラセルといふ心持に、吹きカヘスと云つたものと考へられまいかと云つてゐる。斯ういふことが言語學上可能だとすると、柴生田氏の說も認容出來るやうにも思はれる。この佐伯氏と同じ說を吉澤義則博士もたてて居られたやうであるから、私等は參考すべきである。

此處に「忘る」の例が出たが、「あまざかる鄙に五年住まひつつ美夜故能提夫利（ミヤコノテブリ）、和周良延爾家（ワスラエニケ）利」（卷五、八八〇）も、「忘られにけり」と下二段にするところを、「忘らえにけり」と原形の四段に使つてゐるのは、發音の便利のためであるからであらうか。

八

類聚名義抄に、亂にミダル、ミダリガハシの訓あり、妄にミダリ、ミダリガハシ、浪にミダリガハシ、淫にミダルの訓がある。伊呂波字類抄に、ミダルに亂、攬、擾、闌、浪、縻、爛、絲、監、紊、惹、滑、猾等を當て、ミダリガハシに妄、猥、漫、濫、喪、淆、狂等を當ててゐる。また心空の法華經音訓には、亂にミダル、ソタル、ヲサムの訓を附して居る

斯くの如くに、亂にサワグの訓が無いのであつて、萬葉ではサワギに、動、散動、騒、驂、躁、騷、颯等を當ててゐるのであるが、神武紀の未平をサヤゲリと訓み、景行紀の不平をミダルと訓み、

允恭紀の散をサワグ、崇峻紀の散をミダレと訓んでゐるから、サワグ、ミダルは相通じた點がある。そこで、萬葉の「松浦舟亂穿江」（卷十二、三一七三）の亂をサワグと訓めないことはないとも云へる。なほ、萬葉の『苅薦之擾』（卷十二、三一七六）、神武紀の『聞喧擾之響焉』、繼體紀の「擾亂加羅」等をも參考とすることが出來る。萬葉の例は小竹の葉などにはサヤグの例が多いやうであるが、併し、例へば張詠詩に、「汀葦亂搖寒夜雨」の句があるが、この『亂搖』を倭語の一語に訓むならば、ミダルと訓んでもかまはぬであらう。必ずしもサヤグと云はずとも足るやうに思へるのである。

ただ澤瀉博士のは『亂友』を、サヤゲドモと訓むに至る攷證であり、私のは、ミダレドモと訓むのに未練を持つての攷證である。作歌稽古の態度からいへば、ミダルトモ、ミダレドモ、サソグドモ、サヤゲドモ等を皆活かして鑑賞することが可能である。そのうちで私はミダレドモを一番好いとおもつて味はつてゐるものである。

「みだる」の語原

私は、ミダレは水垂(ミダリ)ではなからうかと想像したことがある（假說）。然らば、水垂(ミダリ)と四段に活用するのが原形で、水垂(ミダル)と下二段に活用するやうになつたのは、第二次なのである。これにつき少しく類推に役立つ實例を擧げる。

涎ヨダレは、大言海では、「よよむ口ヨリ垂リ出ヅルシヅクノ意」とその語原を解釋してゐるが、これも正解の如くである。ヨヨムは、萬葉卷四（七六四）に、「百年に老舌(おいじた)出でて與余牟(よよむ)とも我は厭はじ戀は益すとも」とあるヨヨムで、なほ、源氏物語の、「しづくもよよに、くひぬらしたまへば」、「おのれもよよと泣きぬ」、徒然草の「よよと飲みぬ」などの意が轉じたが、同じ語原のものに相違ない。

實際、涎ヨダレは、もとはヨダリであつた。新撰字鏡に、唌。口水也、液也、唾也、與太利又豆波志留。和名鈔、津唾（病源論云、津唾、與太利。類聚名義抄口部、醫心方等同訓）このタルを

四段に活用せしめた例は古事記等にも多く、また、垂氷、垂水をはじめ、萬葉集卷五（八〇四）に、伊豆久由可斯和何伎多利斯（裳掻き垂りし）。卷二十（四四〇八）に、多久頭怒能之良比氣乃宇倍由奈美太多利（涙垂り）とあるに據つて知ることが出來る。なほ、祈年祭祝詞の水沫畫垂も四段に活用せしめたものであらう。そしてこのあたりは、自動詞とも他動詞とも解釋のつくことに注意すべきである。後段に關係す古事記上卷の、『神産巢日御祖命之登陀流天之新巢之凝烟訓凝烟云州須之八拳垂摩弖燒擧』のタルは、やはり四段に使つてゐる。

シダルは下垂だらうといふ説があるが、萬葉集卷十（一八五二）に、垂柳者雖見不飽鴨　同（一八九六）に、爲垂柳十緖。同（一九〇四）に、梅花四垂柳爾。同（一九二四）に、四垂柳之縵爲我妹などがあり、シダレヤナギとも訓み得るところであるが、從前からシダリヤナギと訓んでゐるところを見れば、古くから名詞としてさう落著いてゐたものであらう。春去爲垂柳はシダルヤナギノとも訓んでゐるが、いづれも四段に活用せしめてゐる。卷十一（二八〇二）の或本歌、足日木乃山鳥之尾乃四垂尾乃長永夜乎一鴨將宿の四垂尾もシダリヲと從來訓んでゐるが、これもヤマドリノ……シダリヲノと、同音で調子を取つてゐるのだから、やはりシダレヲでなくてシダリヲであらう。即ち四段活用の自動詞と看做して差支ない。なほ、古事記、『其の矛の末より垂落る鹽つもりて嶋となる』のシ

タダルは四段に活用してゐる。

コダルは木垂だとおもふが、萬葉集卷三（三一〇）に、東市之殖木乃木足左右不相久美宇倍戀爾家利があり、契沖も、「木タルハ木垂ナリ。木ノ老スレバ枝ノサガルナリ」と云つてゐる。なほ同じ用例は、卷十四（三四三三）に、多伎木許流可麻久良夜麻能許太流木乎麻都等奈我伊波婆古非都追夜安良牟とあり、許太流は木垂の意である。この動詞も自動詞、四段活用である。

ナダル即ち傾くことの語は、山ナダレ、雪ナダレの如く下二段に活用されてゐるが、これは大言海に、「長垂ルノ意カト云フ」と注してあるし、又祝詞（大祓祝詞・廣瀬祭祝詞）に佐久那太理爾、狹久那多利爾の語がある。この語につき、眞淵は、「分流垂の義なるべし」、「逆垂といふ言にて、久那の約加なり」（祝詞考）といひ、宣長は、「眞下垂なり。川水の山より落るさまをいへり。……考に、逆垂といはれたるは心得ず」（大祓詞後釋）といひ、重胤は、「狹回垂には非じかと所思ゆ」（祝詞講義）と云つて居る。以上、諸説があつても皆、「垂」に關係せしめて釋いてゐる。恐らく此は動かない點であらう。然らば、『垂』といふ動詞は、先に四段活用であつて、後に下二段になつたものと看て差支ないとおもふのである。大言海にも、「決頽ノ約。頽る。古クハ四段ニモ活用セシナラム。即チ、なだるるノたるるモ、垂るるニテ、古キ四段活用ノ、垂るノ一轉ナリ。其外、隱る、亂るナドニ、二活用ア

ル例アリ」とある。

次に、其後計らずも大島正健氏の説を知つた。大島氏は、ミダルにつき次の如く解釋してゐる。

『ミは水、タルルは垂るるにて、ミタルルを水垂るると注することと正當の解釋にて、即ち其本義は降雨なり。この第一義は既に忘れられて傳はらざるに至れり。次に物の錯綜する狀態を降雨に比して形容し、ミダルルと唱ふ。是れ第二義にして、現今行はるる所の語意なり。而して第一義と第二義との關係に就いては、殆ど知る者無きに至らんとせり。ミタルルをミダレの名詞に据ゑ、之に接頭語のサを添ふれば、サミダレと爲りて、梅雨の義に用ゐらる。此處に至りて、忽ち隱れ居りたる第一義の、再現するを見るなり』(國語の語根とその分類)。大島氏の說には他に牽强のものもあるが、このミダルの說は顧慮すべき說で、私の嘗ての想像說を支持するものであり、アメ(雨)は大水の轉、ナミ(波)は並水だといふたぐひと共に、語原說としてはやはり妥當なのではなからうか。

以上は、亂は水垂に本づいた語だといふ假定、要約のうへに立つての言說である。そこで若しそれが破れれば成立しないのである。例へば松岡靜雄氏はミダルは、マダラ(斑)の轉音轉義だとしてゐる(新編日本古語辭典)。これが本當ならば私の說は成立たないのであるが、私は松岡氏の說には贊成しない。

月西渡

萬葉卷一（四八）の人麿作の、東野炎立所見而反見爲者月西渡の結句は、舊訓ツキカタブキヌと訓み殆ど定訓であつて、西渡と書いてカタブクと訓むのは義訓の例だと解釋してゐるのであるが、古葉略類聚鈔に、「東野炎立所見而反見爲者月西渡 日雙斯皇子命乃馬副而御獵立師斯時者來向」とあつて、ツキニシワタリと訓み、代匠記精撰本に、「又案ズルニ東野ト書西渡トカケルハ相對スル詞ナレバ、ヒムガシノノトヨミ、ニシワタルト字ノマヽ、ニヨムベキニヤ」といふ提言があつて、この「西渡」をくだいて訓み、ニシといふ音を活かさうとする說も出でるかも知れぬとおもふが、支那に、「西渡」、「西度」の用例があるから、それに倣つたものと看、やはり義訓としてカタブキヌと訓むのは動かないところだと思ふのである。なほカタブケリと訓む說もあつたが、「月可多夫伎奴」（四三一一）、「月加多夫伎奴」（三九五五）、「月斜烏」（二二九八）があるから、やはりツキカタブキヌであらう。

「抹」を『たむ』と訓む小考

萬葉集にある『抹』の字は、これを『ウチ』と訓ませてゐることは、評釋篇卷之下（二一八頁二七五頁）に記述したとほりであるが、この『抹』字に本來『ウチ』の意が無く、そこで私は、『ヒク』、『トル』と訓んではどうであらうかといふ說をも出して置いたのであつた。然るに、萬葉集の『抹』の用例は次の三例である。

妹が手を取りて引き攀ぢ抹手折わが挿頭すべき花咲けるかも（卷九、一六八三）

抹手折多武の山霧しげきかも細川の瀨に波の騷げる（卷九、一七〇四）

引き攀ぢて枝もとををに抹手折吾は持ちて往く公が頭刺に（卷十三、三二二三）

この三用例であるが、抹手折をウチタヲリと訓むのが不適當として、ヒキタヲリ、或はトリタヲリと訓ませるとすると、上の方に、既にヒク、トルといふ字があるために、音の重複が惡い意味で邪魔をする。例へば、

妹が手を取りて引き攀ぢ拺手折わが挿頭すべき花咲けるかも

かくの如くに、トリとヒキとが調和の取れぬ重複となつて具合が惡い。そこで何とかもつと好い訓、山田博士のフサタヲル以外に、何かの訓が無からうかと思つてゐたのであつた。

その後、朱駿聲の說雅を見てゐると、『撓』に、『拺也』と註してあつた。そこで幸田露伴先生に種々敎示をあふいだが、說文解字義證にも、裘は求で、タワムの意があり、また擾、撓擾で、拺に通じ、說文一日拺也といふことが書いてある。撓はタワムであるから、然らば拺は即ちタワムである。そこで私は、これをタムと訓ませ、麻行下二段に活用する動詞として、拺手折をば、『タメタヲル』と訓んだならばどうであらうかと考へたのであつた。

萬葉集には『撓』字の用例は無いやうであるから、『拺』を以て代用したものかも知れず、二例とも柿本朝臣人麿歌集にあるところを見ると、他の漢字の用例と相俟つて興味ある問題である。卷十三の例は、恐らくはそれ以後のものであらう。

さて、然らば萬葉集に、タム、タムル、タヽム等の下二段活用の例があるかといふに、

玉鉾の道に出で立ち岡のさき伊多牟流ごとに萬たび顧みしつつ（卷二十、四四〇八）

許伎多武流浦のことごと往隠る島の埼埼隈もおかず思ひぞ吾來る（卷六、九四二）

かういふ例がある。これ等は活用がちがふが、榜回舟者（卷二、二五七）、榜轉小舟（卷三、二五八）などと同じ語原であるべく、主として、回、廻の字を當ててゐるが、なほ、迂とか轉とか、撓とかにも通じて同じ語原となるのではなからうか。撓は類聚名義抄にタハムとある如くであるが、タメ、タムはその略であつて、和名鈔十二に、揉を註して太無とあるし、字類抄に揣、矯、直、撤、擎、檠、揉等を當ててゐるが、それ等も同じ語原だらうと考へても好くはあるまいか。さうすれば、枝を撓めて手折ることを、枝をタメタヲルと訓ませても差支ないとおもふのである。

右のごとく、扳手折をタメタヲルと訓ませ、萬葉の三用例に就いて考へるに、

妹が手を取りて引き攀ぢタメ・タヲリわが挿頭すべき花咲けるかも

タメ・タヲリ多武の山霧しげきかも細川の瀬に波の騒げる

引き攀ぢて枝もとををにタメ・タヲリ吾は持ちて行く公が頭刺に

かういふ具合になつて、一首の聲調に破綻を來すことは無いとおもふのである。特に第二首目の扳手折は枕詞化して、多武に續けてゐるとせば、タの音を三つ續けて調子を取つてゐると解して好く、第三首目もトヲヲから、タメ・タヲリと多行の音で續けたものと解釋し得るのではあるまいかとおもふのである。よつてこの私訓を學界に送ることにした。

併し、ウチ・タヲルといふ從來の訓も、聲調の上からは棄てがたいものであるから、この說明をどうつけるかといふと、既に評釋篇卷之下でしたごとく、誤字として、あのやうな說明をしたが、誤字でなしに、飽くまで捄を活かすとして、ウツの訓を認めようとするならば、捄は撓に通じ、撓は挑に通じ、挑は摷に通じ、摷にウツ「擊」の訓がある（類聚名義抄）からして、擊越、擊日刺のごとくに、ウチ・タヲルと訓んで好いことになる。そして萬葉の人麿歌集では、撓、摷の如き面倒な字よりも捄の如き形態の好いものを選んで代用せしめたものと解釋し得るのではあるまいか。これはウチ・タヲルを認容しての解釋であるが、露伴先生も、少し無理な說明だと云はれた。

それから、捄をウツと訓ませることを認容しての說明にもう一つある。萬葉卷十七（三九四〇）の歌の「都美之手」を、佐佐木博士の新訓萬葉集には、「摘みし手」と書下してゐる。諸書には、「摘」にツムの訓が見當らぬが、今博士の說に從ふこととし、「捄」は天治本新撰字鏡に、「採也」とあり、「採」は萬葉にもツムと訓ませた例の多いこと、此岳爾菜採須兒（卷一、一）、妻毛有者採而多宜麻之（卷二、二二一）、春野爾須美禮採爾等（卷八、一四二四）などの例を見て分かる。また、捄は捊に通じ、捊にツマミトル、ツムの訓があることも既に云つたが、一方に「摘」は、類聚名義抄に「ウツ」、字鏡

に『撃也』とあり、書經に、『於予石を撃ち、石を拊てば、百獸率ゐ舞ひ』の例があるのであるが、然らば、拔は捋に通じ、採に通じ、共にトル、ツムであつて、拊がツム、ウツだといふことが分かれば、同訓の拔、拊をば相通はしめて、拔にウツの訓を與へても好いのではあるまいか。此もまはりくどい說明であるが、拔を飽くまでウツと訓ませることとなれば、かういふ徑路を取らざることを得ない。

ここに、萬葉のタム(回、廻、轉)が出たから序に一言するが、榜回舟者(卷三、三五七)、榜轉小舟(卷三、三五八)、許藝廻者(卷三、三八九)、榜多味行之(卷一、五八)、多末弖榜來跡(卷十六、三八六七)等は四段に活用せしめたものであらう。それから、許伎多武流(卷六、九四二)、伊多牟流(卷二十、四四〇八)は下二段に活用せしめたものであらう。さすれば、萬葉集に二とほりの活用の例があるのであつて、そこで、『撓』(拔)を、下二段に活用せしめ、タメ、タムルと活用せしめて不道理でないと思つたのである。(昭和十四年十一月)

人麿文獻補遺

土屋文明　**萬葉集名歌評釋**（昭和九年、非凡閣發行）

人麿作歌十八首、人麿歌集三十五首の評釋が含まれ、簡潔のうちに、その缺くべからざるものを說述し、著者獨特の解釋を見出すことが出來る。

次田潤　增訂**萬葉集新講**　**上卷**（昭和十年、成美堂書店發行）

舊版を更に增訂したもので、その後の諸說をも盡く網羅し、自說を述べるにも丁寧親切であり、初版に比し全く面目を新にしてゐる。

菊池壽人　**萬葉集精考**（昭和十年、中興館發行）

特異な見解があり、萬葉卷一・二の全歌について精細な評釋を施したものである。序に、著者が萬葉の註釋も目的はむしろ人麿の歌にあつたことをのべてゐるごとく、人麿の歌に力をそそがれた點が多いので有益である。

久松潛一　**萬葉集考說**（昭和十年、栗田書店發行）

「第三篇萬葉歌人と特殊問題」の中で人麿について、くはしく說かれてあるが、此は講座に發表した論文なので、拙著の總論篇で既に抄した。

佐佐木信綱　**萬葉讀本**（昭和十年、日本評論社發行）

齋藤瀏　**萬葉集名歌鑑賞**（昭和十年、人文書院發行）

萬葉集總釋　**十二卷**（昭和十年、樂浪書院發行）

卷一を武田祐吉、卷二を土屋文明といふやうに、萬葉の各卷を一人宛二十氏が擔當したもので、解說、口譯、語釋、後記に分けて說述して居る。評釋十卷。總訓一卷。作者傳、歌句索引一卷。合せて十二卷である。

金子元臣　萬葉集評釋　一・二（昭和十年、昭和十三年、明治書院發行）

第一册は萬葉集卷一・二、第二册は卷三・四の評釋である。語釋も鑑賞も丁寧で、萬葉寫眞は特に著者の苦心に成つたものである。

山田孝雄　萬葉集講義　卷第三（昭和十二年、寶文館發行）

精到なる講義なること卷第一、卷第二と同樣であるが、前二者よりもくはしい。本卷は拙著執筆後の發行なので參照し得なかつた。

佐佐木信綱　萬葉集百話（昭和十二年、明治書院發行）

「柿本人麿傳及びその資料の研究」の一項があり、明治以前の人麿傳記文獻をも概說してゐる。

澤瀉久孝・佐伯梅友　新校萬葉集（昭和十二年、樂浪書院發行）

もと萬葉集總釋の第十一に當るものに正誤表を添へ、裝幀を改めた單行本。原文に旁訓を附し、國歌大觀番號、寛永版本の丁數を入れてある。

井上通泰　萬葉集追攷（昭和十三年、岩波書店發行）

昭和七年七月から昭和十三年十月まで雜誌アララギに發表された論文四十篇を收めてある。「玉久世清河原」は、人麿歌集中（卷十一・二四〇三）の一二句についての考說である。「柿本人麿の閱歷の一暗示」は、示唆に富む論文で本文中にも引用した。「水陰生山草」の一篇は、人麿歌集の歌（卷十一・二四五六）、（卷十二・二八六二）の「山草」に關するものである。

佐伯梅友　萬葉語研究（昭和十三年、文學社發行）

「吉野における人麿の歌」、「淀むとも考」、「人麿の歌二首」（卷三、二五一・三〇三）等人麿に關する論考がある。

齋藤茂吉　萬葉秀歌　上・下（昭和十三年、岩波書店發行）

上卷に人麿作人麿歌集併せて三十首、下卷に同じく三十首を抄出評釋した。

井乃香樹　新建萬葉學（昭和十三年、日本國學會發行）

本書は井乃香樹（井箆節三）氏の萬葉研究であつて、萬葉の歌は從來の說の如く單純素朴ではなく却つて後世の歌よりも複雜な技巧を持つて居る、卽ち萬葉の歌には諧謔が多く、戲書が多く、古歌や故事や漢籍や佛典を引くことが頗る多いといつて、その考證につとめたものである。その一例をいへば、柿本人麿の作「嗚呼兒乃浦爾、船乘爲良武、孃嬬等之、珠裳乃須十二、四寶三都良武香」の歌の「嗚呼兒」は、書經の泰誓「嗚呼西土有衆」に基き、大和は伊勢より見れば西土に當り、「四寶三都良武香」の「四寶」は阿含經の「以爲第四寶」から來て居り、「三都」は文選の三都賦の「三都」から來て居るといふ說であつて、結句この歌は人麿が持統天皇を諷諫し奉り、持統天皇を殷の紂王に擬し奉つて坐興を弄したものだと說く、たゞいづれもこれ等は氏の新意見であるが、私等には過ぎたるはなほ及ばざるが如しの感を強ふるものである。

豐田八十代　萬葉集通釋（昭和十三年、昭和十四年、有英書院發行）

萬葉集中日本精神の作興に寄與する歌を選んで、語釋・口譯・後記を施したものであつて、上卷は卷一から卷十まで、下卷は卷十一から卷二十まで、上卷には附錄として「吉野離宮について」がある。

赤松景福　萬葉集創見（昭和十四年、東京堂發行）

訓詁を主とした研究で、萬葉集八卷を通じて三百五十首の問題を提出し、これに對して私見を示してゐるが、みだりに本文の文字を改めずに訓を下してゐる點に特色がある。「珠水激」（三六）をウキタギツ、「釧著」（四一）をクシロハク、「雪驟」（二

六二）をユキニクロマ」と訓むなど人麿に關する項目が相當にある。

二　人麿主題の圖書

自笑・白露　柿本人麿誕生記（寶暦十二年）

寶暦十二歳、京都八文字屋板の淨瑠璃式よみ物五卷で、空想を恣にした妄誕を極なものである。播磨國明石の浦に蜑の小さんといふ女がゐたが、ある夜枕元へ東帶の人忽然と顯れ、節會の御當座に天子九穴の貝といふ題を探り給ひしゆゑ、其出生をしろし召れんが爲の勅諚あり、汝ならでは知るものなし、急ぎ昇殿せよと、いふので御殿にまゐり、九穴の貝の由來を具に勅答申上げ奉つたが、その時御文臺の硯石が動くと見るまにふはふはと小さんの口中に入つたと見て夢がさめたが、これから小さんは只ならぬ身となり、軒口の柿の木今年はめつきりと出來ばえよく、鈴なりの枝を手折て近所の子どもらに與へようとすると、不思議や俄に脇章門（あたり）痛出、わき腹を押やぶり、ひよいと出るは玉のやうな男の子、生れたてより惣身に毛あり、髪延あり一髪白く、老子も是に誕生かと怪しまれし、この子左へ十七足、右のかたへ十四足都合三十一足歩み、左右の手にて天上天下和歌獨尊々々と高聲に呼はれば、妙なる哉々々、和歌の心神盡く顯れ出、正風躰に熱湯をそゝげ、幽玄躰にぬる湯をそゝぐ。其外十躰三十躰産衣をきせゝば、惡魔を拂ひ守護ある事ぞふしぎなれ云々。かういふ調子のもので、赤人は赤蛇の化身だといつたり、衣通姫だの橘逸成だの和泉式部だのいろいろ出て來るのであるが、人麿がいろいろに取扱はれるのはかまはぬとして、かういふ奔逸ぶりを整理するにはまた特別な態度が要るものとおもふ。

柿本人麻呂影供記

安永三年、阿波、賴充寛の識語ある木板本、その他寫本六種ある。

たかつの山

柿本社播州石州御法楽享保八癸卯三月十八日、播磨國柿本社、奉納和歌を輯めたものである。

齋藤茂吉　**柿本人麿　總論篇**（昭和九年、岩波書店發行）

齋藤茂吉　**柿本人麿　鴨山考補註篇**（昭和十年、岩波書店發行）

窪田空穗　柿本人麿篇（昭和十年、非凡閣發行）

「作者別萬葉集評釋」の第二卷。卷頭に「柿本人麿について」といふ總論があつて、人麿の歌の性質、歌人としての特徴を論じ、萬葉集中人麿作と明記せられた歌全部と、人麿歌集中の主だつた歌について評釋したものである。語釋、譯、評の三、特に評は丁寧親切で氏一流の新鮮な看方を隨處に見出すことが出來る。

齋藤茂吉　柿本人麿　**評釋篇卷之上**（昭和十四年、岩波書店發行）

齋藤茂吉　柿本人麿　**評釋篇卷之下**（昭和十四年、岩波書店發行）

志田延義　**人麿・憶良・家持**（昭和十二年、至文堂發行）

日本精神叢書の第四十四卷。人麿については、傳統的精神の把握といふ點を主眼として考察してある。

武田祐吉　**柿本人麿（歴代歌人研究一）**（昭和十三年、厚生閣發行）

前篇「時代評論」は、古代の歌舞・支那的作品の發達・萬葉歌史の大観・挽歌の傳統・人麿の作品の本質・宮廷歌人としての人麿・表現技術・全作品の展開・配偶者の作品・人麿の後を追ふもの十一項。後篇「傳記及び作品研究」は、人麿の傳記資料・その家系・妻子と旅人・吉野の宮等十三項である。人麿歌集を資料として人麿研究に活用する傾向の論者で、それが本書の特色ともなつてゐる。

竹味ユキノ　**詩聖柿本人麿の生涯とその歌**（昭和十四年、教育研究會發行）

人麿の幼年時代の世相、青年壯年の各時代、妻の死、石見に下る、彼をめぐる女性、人麿歌集の歌、大和櫟本なる人麿塚を訪ふ記事の各項に亙つて記述がある。

三 雜誌、講座、單行本中の人麿、人麿の歌を主題とする文章

畠山健 **人麿過近江荒都作歌評釋**（早稻田文學卷二〇―三〇、明治二十五年十一・十二月）

服部躬治 **吾嬬歌談、人麿の大業平の眞**（國文學、明治三十五年）

永井一孝 **歌謠の隆盛―柿本人麿**（文藝百科全書、早稻田文學社、明治四十二年）

人麿の歌の優れたことをいひ、祝詞との修辭的交渉を云つてゐる。

河合醉茗 **柿本人丸評傳**（和歌講義錄、日本短歌會發行、明治四十五年）

岩野泡鳴 **人麻呂の佳作傑作**（短歌雜誌一ノ一、大正六年十月）

泡鳴はほかの處でも、「人麿の天地は人の心を鳴り響かせるほど動いてゐるが、赤人の天然は澄み渡つてゐるけれども固定してゐる」、要するに、人麿は前回に於て論じた如く、想像に豐富な天才的詩人であつたに反して、赤人は趣味に適確な能才的技術家であつた。後者は摸倣ができるが、前者は古今獨歩である」とも云つてゐる。泡鳴は人麿の長歌をも論じてゐるが、今短歌についての彼の批評を抄記してその大體を傳ふることとする。

「近江荒都」も過去としてまだ間がない歴史の追憶哀悼であるが、作として自然と想像とがよく調和した内容は寧ろこれをその反歌に讓つてゐる。乃ち、左の如くで、二つともいい短歌である。——

ささ浪の志賀の辛崎幸くあれどおほ宮人の船待ちかねつ

　　ささ浪の志賀の大わだ淀むとも昔の人にまたも會はめやも

人麿の短歌三百五十二首のうちから、僕が書き抜いて二重マルを附したのはこの志賀の追回二首をも入れて都合七首の外にない。

　　ものの夫の八十宇治川のあじろ木にいさよふ波の行くへ知らずも

これは非常に人の心を引きつける歌である。考へれば考へるほど僕等は何となく引ツ込まれて行つたものだ。が、決して佛教的な無常觀は這入つてゐない。佛教的なものごころが附いた當時の青年などにはその方へ持つて行かれても仕かたがないかも知れぬが、元來は日本民族の特色なる現在性をそのまま深めたものだ。無常觀では自己を無にして外存の理的觀念に捕へられて行くが、それがこの歌にはない。自己の生活をそのまま内觀した性質は僕等元來の特色であらう。「波の行くへ」を思ふ寂しみが心を心理的に單純な孤獨に徹せしめないで、何となく大きな、複雜の感じを伴つてゐる。それは「あじろ木にいさよふ」と云ふ形容に既に發音上の巧みの味があるからでもあるが、今一つさか登つて「もののふの——八十」とつづけた枕詞に百萬の軍をも率ゐてゐる重みがある爲めだ。斯くして古代の枕詞なる物は後世に於ける如く無意義に使はれたのでなかつたことが分る。次ぎに、

　　あふみの海ゆふ波千鳥汝が鳴けば心もしぬにいにしへおもほゆ

ここにミとユと二種の間韻が上の句に各々三つづつ重なつて口調と意味とを朗らかに發展させてゐるのに注意せよ。そして千鳥に對し、はつきりと二人稱を使つたのは珍らしい。後世から見れば遊びの技巧とも見える細工を發見することもできるけれども、古今集に於けるかかる場合とは全く違つて、少しもそれが爲めに作者の意氣を縮少されてはゐないのである。

　　あし引の山川の瀬の鳴るなべに弓月が岳に雲たち渡る

これには、さきの諸作に於ける如き思ふとか、知らずとか、待ち偲ぬと云ふ主觀的な言葉に、一つも這入つてゐない。而も

最初の二句のゆツたり出たのが、第三句の間韻迄這入つた、矢ツ張り別な意味の主觀的な取扱ひに緊張され、雲の渡らいが讀む人の心に大きな響きと内容とを與へるのだ。

この「弓月が岳」がおもて向きでは殆ど全く客觀的叙景詩に見えるのとは反對に、こゝに於て、餘りに傳統的主觀をおしな過ぎてある爲めに、うツかりすると傑作えらびから見落されさうなのがある。乃ち、「持統天皇雷岳に御遊の時」の作で、

おほ君は神にしませばあま雲のいかづちの上にいほりせるかも

僕はこれに就いて、「昨春「新自然主義」に云つて置いた、「無定見の技巧家輩には、これを山を歌ふ爲めに面白く云ひまはしたに過ぎないと云ふものがあるかも知れないが、たゞア韻と濁音とが旨く急所に當つてゐるといふだけでは、到底この莊嚴な歌の背景と條韻とを解し得たとは受取れない」と。つまり、生々慾の出現たる痛切な人間神の信仰がたま〳〵山の名たるいかづちと共鳴して、無限の威力を歌の音律にまで表現したのだ。今一つこれは戀歌であるが、——

わぎも子しわれを思はばまそ鏡照り出づる月のかげに見え來ね

「われを思はば」と斷わつたのがくどいが、一面には、また、この音律上に「ヲ―オモ」（オ韻三續）から「ハバ」（ア韻二續）の開展があつて、そこに湛へる感情を「マ（そ）カガ（み）」で持續し、最後の「見え來ね」の想像的希望を却つて一層熱烈にしてゐる。ついでに、人麿の死んだ時その妻依羅娘子の作つたと云ふ哀悼歌を引用して見よう、——

ただの會ひは會ひも兼てむ。石見山雲立ち渡れ、見つつしぬばむ

これにまた僕は二重マルを打つてあつた。始終の感化を受けてゐた爲めか、たま〳〵かの女に作られたのが如何にもあり餘る響きがあつて、その所天の少數な傑作にも劣らない、一體に戀歌にせよ、國家詩にせよ、人麿の莊嚴の熱烈にして、而も大きな響きを傳へた點に於いて、わが國の他のどんな詩人にも優つてゐる、その他に、羇旅歌として、

淡路の野島のさきの濱風に、いもが結びし紐吹き返す

これに僕が二重のではないが單純なマルを附けたのは、一つには僕の國で僕が遊んだことのある土地が讀み込まれてある爲だが、また一つには『あはぢの』と四の句で初まつたのが少しも不自然でないのが面白く、その上、旅立つ人に女が紐を結ぶと云ふ習慣が面白かつたのだ。僕の單純なマルの附いた拔萃は長歌で『吉野の宮御幸』兩篇と短歌十四首と旋頭歌一首とだ。

見れど飽かぬ吉野の川の川なめの絶ゆることなくまた返り見む

まき向くのあなしの川も行く水の絶ゆることなくまた返り見む

前者は吉野御幸の反歌、後者は別に河を詠じたものだが、孰れも下の句は同じだ

とほ妻のふりさけ見つつしぬぶらむ、この月の面に雲なたなびき

これは前の「わぎも子」の實を行つたもので、想像的熱烈の度がさきの程には現はれてゐない。

こぞ見てし秋の月夜は照らせども、相見しいもはいや年さかる

鴨山の岩根し卷けるわれをかも知らずといもが待ちつつあらむ

前者は妻の死を、後者は自分の臨終を痛んだ作である。それから、なほ、「高市皇子の殯宮」の反歌として、

久かたのあめ知らしぬる君ゆゑに日月も知らず戀ひ渡るかも

「いかづち山」の人間神的解釋のしかたで行けば、これも大きな、いい歌であらう。

あめ地と云ふ名の絶えてあらばこそ、いましとわれと逢ふこと止まめ

割りに勝ち過ぎてゐるが、さきの「八十宇治川」の肯定的人生觀に合はせて讀めば、この戀の如何に熱いことを現はしてるかが分らう。

ひんがしの野にかげろひの立つ見えて、返り見すれば月かたぶきぬ

『返り見すれば』に主觀的あしらひが這入つて來てゐながら、作者として寧ろ叙景味に傾いたが、口調もよく餘韻も長いところの佳作である。其の他に。——

あごの浦に舟乘りすらむ乙女らがたま裳の裾にしほ滿つらむか

伊勢の國御幸の時自分は京に留まつて作つたものだ。これが想像的でなく、若し實際を見ての奇麗な叙景であるべきであつたら、かの大伴家持の『藤なみのかげなる海のそこ清み、しづく石をも玉とぞわが見る』の如きに寧ろよく繼承されてゐる。

はにやすの池の堤のこもり沼の行くへを知らず舍人はまどふ

作者自身をさしてだが、『舍人はまどふ』と云ふ現はしかたが、どうも少しこぢれてゐるやうで、同作の反歌『久かたの天しらしぬる』の餘韻ほどには行かぬ氣がする。

名ぐはしき稻見の海の沖津なみ、千重に隱れぬやまと島根は

遠くありて雲井に見ゆるいもが家に早く至らむ步め、黑駒

一は海路、一は陸上の旅の感じだが、後者の如き多少想像拔きの實感に近い方面は寧ろその後に家持の得意であつた。乃ち、家持の『しぶ谷をさしてわが行くこの濱につく夜飽きてむ、馬しまし止め』の如きにだ。

ついでに云ふが、人麿の作で出來そくなひと思はれたのを僕は二首拔いて、三角のしるしを附してあつた。その一は『天を詠ず』で、……

あめの海に雲の波立ち、月の船星の林にこぎ隱る見ゆ

最も單純な比喩、而も直喩的なのを四つもくどく疊み上げたに過ぎぬものだ。それにしても、かゝる特別な試みの比喩はその時代には渠自身のにも又他の作者のにも他に殆ど存在しなかつたのを見ると、ちよつと珍らしくないことはない。けれど

も、下の句が少し調子がいいだけで、その意味しようとしたことと云ひ、その與へる感じと云ひ、渠としては——さすがに多少のゆとりはあるが——決してこれを活かしてはゐない。丸で大人が假りに子供になつて修辭上の技巧を稽古して見せたやうだ。今一つは、——

こもりくの泊瀬の山の山の間にいさよふ雲はいもにかもあらむ

上の句から『いさよふ雲は』までは大きな進みでないこともないが、『山の』をただ口調の爲めに二つ重ねたのは餘りいいことではない。さきに『吉野川の川』と續いたのがあるけれども、これを直ぐ『の』で受けてゐないからかまはなかつた。且、雲を最後の七の句で女に見ようとした具合が、さきの依羅娘子の同じやうな挽歌で雲を男に見たのに比して、甚だ不自然に響く。もちろん、『あめの海に』ほどはまづいものではないが、——

最後に、人麿の旋頭歌は萬葉集に總計三十五首あるのだが、僕はそのうちからたつた一つを取つて單純なことを打つてある、その他に佳作もなく、傑作はもちろんのことに見たと見える。その一つは左のだ、——

あられ降り遠つ近江の吾跡川楊、枯れれども、またも生ふちふ吾跡川楊

別に何でもないやうなことを云つてるのかも知れないが、またあつさりと人間の生々慾を多少でも表象してゐるやうにも取れる。渠が短歌の行きかたとはちよつと違つてるではないか？

兎に角、人麿はわが國の古今を通じて第一流の熱烈な想像詩人であつた。その想像力に自然の熱の加はつてゐた點に於いては、後世に萬葉時代を活かした實朝も、眞淵も、小澤蘆庵も、なかなか渠の足もとへすら寄りつけるものではない。そこが渠をして今日に至るまで歌に於ける莊嚴と偉大とを獨占せしめる所以であらう。

今の國學者どものうちには、渠が得意の長歌をお定りの如く、『八隅知しわがおほ君』若くは『かけまくもあやにかしこき……あまつ御門』などを以つて初めたのを、愛國者として時代の外國崇拜者どもに對するわざとの反動であつた如く、云ふ

のもある。が、集自身に取っては、恐らく、そんなに反動的、形式的なのではなく、莊厳偉大の民族的熱烈詩人としておのづからに湧き出た形容であったらう。集はまた儒教や佛教の思想的影響を受けなかったことを僕等は承知して、集を純日本人的に研究しなければならぬ。

臼木歳次　特殊な人麿の長歌（槻の木。昭和六年十一月號）

窪田空穗　人麿及びその當時の人の死に對して持つ觀念（槻の木。昭和七年三月號）

丸山冷長　人麿と其妻（みづがき。昭和九年一―十月號）

佐々木臥山　歌聖人麿と日本精神に就て（日本精神文化。昭和九年四月號）

品田太吉　人麿歌集の訓點について（短歌研究。昭和九年四月號）

巻十一、二四二二・二四九四。巻十二、二八四四・二八五一・二八五二・二八五三・三一三〇・二八六二。巻十、二〇一三・二〇九四・二〇九五。巻九、一七〇九の十二首（人麿歌集）について自訓を示したものである。

森本治吉　人麿（昭和九年六月、日本文學大辭典第三卷。新潮社）

氏姓・生歿・閲歴・作品・作風・影響・參考の各項に分けて概說してゐる。

西田忍　人麿の歌鑑賞（一路。昭和九年七・八・九月號）

巻十一、二四五五・二四五七・二四一四・二四一五。巻十二、二二四〇・一八九四についての鑑賞である。

岡田桂　詩聖人麿點描（靑虹。昭和九年十一月號）

石井庄司　柿本人麿（昭和九年十二月、日本文學講座第七卷和歌文學篇下。改造社）

「人麿とその時代」の項で、人麿生存期間と推定される持統・文武・元明三代の時代樣相と人麿との關聯を考へ、「人麿の特質」の項で、人麿の寫實的作風と詩的想像力の豐富とを特に强調して論述してゐる。

谷亮平　**柿本和歌備材抄に就て**（國學院雜誌。昭和九年十二月號）

次田眞幸　**人麻呂の長歌の修辭研究**（國語と國文學。昭和十年一月號）

人麿長歌の詩形の長大なのは、主に對句・枕詞・序詞を多く使驅してゐることによるとなして、その對句構成の特徴、枕詞序詞の使用數などを調べ、人麿の長歌は萬葉各期を通じて最も顯著完成したものであるといってゐる。

窪田空穗　**斷想―人麿について**（短歌研究。昭和十年一月號）

染谷進　**柿本人麿の近江荒都の歌の反歌につきて**（槻の木。昭和十年一月號）

土屋靜男　**人麿の歌**（あしかび。昭和十年一月號）

次田眞幸　**萬葉集卷二「下部留」攷**（文學。昭和十年二月號）

「秋山下部留妹」（卷二、二一七）の下部留を、四段活用のシタブに助動詞リが附いた形と見て、シタベルと訓んでゐる。

北島葭江　**「さやにさやぐ」に就いて**（文學。昭和十年二月號）

「清衞亂友」（卷二、一三三）について、サヤニは清爽の意であると解してゐる。

齋藤茂吉　**人麿歿處國府說に就て**（アララギ。昭和十年一・三・四月號）

「柿本人麿」（鴨山考補註篇）に收めてある。

正宗敦夫　**柿本人丸の御守**（アララギ。昭和十年四月號）

「柿本人麿」（鴨山考補註篇）に抄錄した。

安田青風外九氏　**柿本人麿短歌評釋**（白波。昭和十年五月號）

白波同人十氏が分擔執筆して、人麿作及び人麿歌集の歌全部を評釋してゐる。

佐伯梅友　**語法的に問題のある柿本人麿の歌二首**（國語教育。昭和十年五月號）

粟路の（巻三、二五一）の歌の「吹きかへす」は、「吹きかへさる」の意に解し、又名細寸（巻三、三〇三）の歌の三・四句は、「沖つ波」の下にあるべき「の」を聲調上の要求から省略した句法として考察してゐる。「萬葉語研究」所收。

石井健司　私の好む歌人と歌（柿本人麿）（青虹。昭和十年六月號）

人麿歌碑について（青波。昭和十年六月號）

森伊左夫　柿本人麿の研究（槻の木。昭和十年六月號）

人麿の歌に「一云・或云・或本歌」の如く、異同を註したものの多いのは、廣く口唱されたためであらうといふ角度から、人麿と記紀歌謠との關係を考へ、「歌舞所」との關係を考へてゐる。

村崎凡人　人麿調（槻の木。昭和十年六月號）

口誦文學として高市皇子尊殯宮時の長歌を觀察したものである。

加藤政吉　人麿歌雜考（東邦。昭和十年六月號）

山田孝雄　萬葉集巻三・長皇子遊獵路池之時柿本朝臣人麿作歌の反歌について（奈良文化。昭和十年六月號）

巻三、ひさかたの（二四〇）の歌の「綱爾刺」の解釋で、萬葉集攷證（岸本由豆流）の説を補正したものである。

窪田空穗外三氏　萬葉集の綜合研究（短歌研究。昭和十年七月號）

巻一（二九・三〇・三一）の三首。題意・釋義・口譯・鑑賞（窪田空穗）。文法・歌格・修辭（遠藤嘉基）。人類學的視角から（西村眞次）。特殊研究、天離夷者雖有・石走淡海・志我能大和太與杼六友（品田太吉）。文獻摘要（森本健吉）。

佐佐木信綱外二氏　萬葉集の綜合研究（短歌研究。昭和十年九月號）

巻一（三六・三七・三八・三九）の四首。文字・題意・語釋・口譯・鑑賞（佐佐木信綱）。文法・歌格・修辭（佐伯梅友）。文獻摘要（藤森朋夫）。

武田祐吉外二氏　**萬葉集の綜合研究**（短歌研究。昭和十年十月號）

巻一（四〇・四一・四二）の三首。文字・題意・釋義・口譯・鑑賞（武田祐吉）文法・歌格（藤田德太郎）文獻摘要（森本治吉）。

森本治吉外二氏　**萬葉集の綜合研究**（短歌研究。昭和十年十一月號）

巻一（四五）の一首　文字・題意・解義・口譯・鑑賞（森本治吉）。歌格・修辭（粂川定一）。文獻摘要（森本健吉）。

森本治吉外二氏　**萬葉集の綜合研究**（短歌研究、昭和十年十二月號）

巻一（四六・四七・四八・四九）の四首。文字・題意・釋義・口譯・鑑賞（森本治吉）。文法・歌格・修辭（粂川定一）文獻摘要（森本健吉）。

武田祐吉外二氏　**萬葉集巻二の綜合研究**（短歌研究。昭和十二年十一月號）

巻二、一三一・一三二・一三三・一三四について。訓釋・口譯・鑑賞（武田祐吉）。考證（石井庄司）。特殊研究（豊田八十代）（豊田氏は、渟野津の風景、都野津から大和への通路、袖振るといふこと、高角山について記述してゐる。）

豊田八十代外二氏　**萬葉集巻二の綜合研究**（短歌研究。昭和十二年十二月號）

巻二、一三五・一三六・一三七について。訓釋・口譯・鑑賞（豊田八十代）。考證（今井福治郎）。特殊研究（藤森朋夫）。

藤森氏は一三五の枕詞について諸説を擧げて考察してゐる。

藤森朋夫　**人麿の歌一首**（國語特報。昭和十年十一月號）

ひむがしの（巻一、四八）の評釋である。

齋藤貫　**柿本人麿**（**歴代歌人傳一**）（ことだま。昭和十一年一月號）

石井庄司　**歌人列傳—柿本人麿—**（短歌研究。昭和十一年二月號）

人麿の詩的想像力の特異性を主題としてゐる。

早川幾忠　萬葉集短歌味解（卷第二）（高嶺。昭和十一年二・三月號）

秋山の（二〇八）、黄葉の（二〇九）、去年見てし（二一一）、衾道を（二一二）、去年見てし（二一四）、家に來て（二一六）、ささ浪の（二一八）、天數ふ（二一九）、妻もあらば（二二一）、奥つ波（二二二）、鴨山の（二二三）、今日今日と（二二四）、ただの逢は（二二五）等の解釋鑑賞である。

幸田露伴　遊副川の訓に就て（アララギ。昭和十一年三月號）

卷一（三八）の、「遊副川之神母」の訓讀を試みられたもので、その要略は評釋篇卷之上に抄錄して置いた。幸田博士の試訓は、（一）ナビキソフカハノカミモ、（二）シラガツク・ユフカハノカミモ、（三）オチタギツ・ユフカハノカミモ、（四）ユフハガハノカミモ、ユフカハノ・カハノカミモ、ユフハガハ・カハノカミモ等である。

次田眞幸　萬葉集卷十一「夕方枉戀無乏」考（文學。昭和十一年三月號）

「夕かたまけて戀フルガスベナサ」といふ訓を提出してゐる。

武田祐吉　萬葉史生手實（アララギ。昭和十一年三月號）

「人麿歌集と季節」。卷九にある人麿歌集の歌で、一六九四から一七〇九の十六首は春から冬にかけ排列されてゐることに注意し、人麿歌集の原形を想像して、人麿集には季節によつて歌を分類した部分があり、雜・相聞等の部類立も行はれてゐたらうと推測してゐる。

齋藤茂吉・鹿兒島壽藏・落合京太郎・柴生田稔・佐藤佐太郎・土屋文明・吉田正俊・藤森朋夫・山口茂吉・五味保義　萬葉集研究（十八）（アララギ。昭和十一年一月號）

「人麿の歌十首」の合評。私の提出した三一、四八、一六九、一三三、一九八、二〇八、二一九、二三五、二五〇、二五三

の十首について諸氏の意見がある。

土屋文明外三氏　**萬葉集研究（十九）**（アララギ。昭和十一年二月號）

「人麿と卷十三」。眞淵の批評の示唆（五味保義）。先後の問題に關する覺書（柴生田稔）。傳誦と個性と（落合京太郎）。卷十三は模倣の一種（土屋文明）。

土屋文明外四氏　**萬葉集研究（二十）**（アララギ。昭和十一年三月號）

「人麿作風の變遷」。石見時代が頂點（土屋文明）。變化と進展（五味保義）。一二の見方（落合京太郎）。前後に別つ[illegible]（壇内諸考）。長歌技法上の一現象（柴生田稔）

山口茂吉・吉田正俊・柴生田稔・五味保義・土屋文明・藤森朋夫・佐藤佐太郎・鹿兒島壽藏　**萬葉集研究（二十一）**（アララギ。昭和十一年四月號）

「人麿の歌五首」、四七、一九五、二一一、四二九、五〇三の五首の合評である。

山口茂吉・吉田正俊・落合京太郎・鹿兒島壽藏・土屋文明・五味保義・藤森朋夫・柴生田稔　**萬葉集研究（二十二）**（アララギ。昭和十一年五月號）

「人麿の歌五首」、[illegible]の合評である。

柴生田稔・藤森朋夫・土屋文明・藤田清・五味保義・鹿兒島壽藏・吉田正俊　**萬葉集研究（二十三）**（アララギ。昭和十一年六月號）

「人麿の歌五首」、二二二、二四〇、二五〇、二六四、三〇四の合評である。

鹿兒島壽藏・藤森朋夫・五味保義・柴生田稔・土屋文明・藤田清・吉田正俊　**萬葉集研究（二十四）**（アララギ。昭和十一年七月號）

「人麿の歌五首」、二〇〇、二一八、二二三、二六二、二六六の合評である。

土屋文明・吉田正俊・藤田清・五味保義・藤森朋夫・柴生田稔・鹿兒島壽藏　萬葉集研究（二十五）（アララギ。昭和十一年八月號）

「人麿の歌五首」、一三二、一七〇、二二一、二五五、四九六の合評である。

五味保義・鹿兒島壽藏・竹尾忠吉・土屋文明・吉田正俊・佐藤佐太郎・柴生田稔　萬葉集研究（二十六）（アララギ。昭和十一年九月號）

「人麿の歌五首」、三〇、三九、四一、四九、二五四の合評である。

藤森朋夫・鹿兒島壽藏・柴生田稔・五味保義・山口茂吉・藤田清・土屋文明・吉田正俊・佐藤佐太郎　萬葉集研究（二十七）（アララギ。昭和十一年十月號）

「人麿の歌五首」、四六、一三六、一九七、三〇三、五〇二の合評である。

藤森朋夫・柴生田稔・五味保義・土屋文明　萬葉集研究（二十八）（アララギ。昭和十一年十一月號）

「人麿の歌五首」、四二一、一六八、二二一、四一八、四九八の合評である。

鹿兒島壽藏・柴生田稔・五味保義・藤森朋夫・土屋文明　萬葉集研究（二十九）（アララギ。昭和十一年十二月號）

「人麿の歌五首」、二一六、二四一、二五六、四三〇、四九九の合評である。

武智雅一　柿本集に就いて（立命館文學。昭和十一年四月號）

佐伯梅友　淀むとも考（奈良文化。昭和十一年六月號）

巻一（三一）の三句「淀むとも」は、假定說と現在淀んでゐる狀態を見てゐるとする說と二種あるが、氏はこれは「修辭的假定」として、後者の解釋に歸著してゐる。「萬葉語研究」所收。

森本治吉　萬葉巻一「小綱さし渡す」に就て（國語解釋。昭和十一年七月號）

巻一（三八）の「小綱さし渡す」を解釋して、「さす」は、綱を仕掛ける、設備すること、「渡す」は、行爲を連續することであるとして、供奉の人々が幾人も連つて小網をつかつてゐることだと解してゐる。

佐藤小吉　柿本人麿傳（大和志。昭和十一年七月號）

柿本氏の出自、人麿の血統、人麿の時代及びその經歴について記述がある。

次田潤　柿本人麿作歌選釋（むらさき。昭和十一年七月號）

玉藻刈る（二五〇）、淡路の（二五一）、ともしびの（二五四）、大君の（二〇四）、淡海の海（二六六）を註釋してゐる。

春日井瀇　柿本人麿と日本精神の再展開（短歌。昭和十一年七月號）

久松潜一　柿本人麿の歌一首（解釋と鑑賞。昭和十一年八月號）

巻三、天ざかる（二五五）の歌の解釋鑑賞である。

簒作の柿本人丸像（報知新聞。二一五〇一號、昭和十一年十一月六日）

井上通泰　萬葉雜攷（アララギ。昭和十一年十二月號）

「柿本人麿の閲歴の一暗示」と題し、後に「萬葉集雜攷」に收められた。論の要旨は本文の方にも引用したが、博士は人麿が山城の國府に勤務し班田使の下僚などとして國内を巡行したかも知れぬと臆測して居る。

花田比露思　柿本朝臣人麻呂羇旅歌八首に就て（内外研究。文學號第三號、昭和十一年十二月）

佐佐木信綱　上代文學史　下巻（昭和十一年、東京堂發行）

日本文學全史（全十二冊）第二巻。人麿の項に、人麿の業績、出身、近江旅行、吉野宮の歌、天皇讃仰、安騎野の歌、妻の死を悲しむ歌、九州旅行、石見の妻に別るゝ歌、人麿の死、人麿の年齢、人麿の長歌の構成と形式、人麿の精神、人麿の

短歌等の記述がある。

森本健吉　人麿歌集の訓法（國語解釋。昭和十一年十二月・十二年一月號）

卷十一（二三九五）の初句「行行」を、ユキユクニと訓み、卷十二「秋柏、潤和川邊、細竹目、人不顏面、公無勝」（二四七八）の第四句をヒトコソシヌバ（又はヒトニハシヌビ）と訓んでゐる。

森本健吉　萬葉集に於ける訓詁と鑑賞（文學。昭和十二年一月號）

「人麻呂集を中心として」といふ副題があり、萬葉集を理解するには訓詁的態度と鑑賞的態度との二面の融合を期すべきであることを强調し、卷十「霞發春永日」（一八九四）、卷十一「我勢古波幸座」（二三八四）等を實例として記述してゐる。

澤瀉久孝　枕詞を通して見たる人麿の獨創性（國語・國文。昭和十二年一・二月號）

人麿の歌にある枕詞をば、人麿作品に初めて見えるもの、記紀に例のあるもの、萬葉集中人麿以前又は前後不明のもの、この三種に分つてそれぞれ實例によつて說明し、枕詞使用上の人麿の特徴を考察して獨創性を立證してゐる。從屬として、「あしひきの」「たまきはる」「とぶとりの」「あをもよし」等の枕詞について注目すべき解釋がある。

早水城春・中津賢吉・三鬼實・國枝稔・飯沼喜八郎・原田春乃・小泉光男・伊東仲子　全人の立場より見たる萬葉歌人（歌と觀照。昭和十二年自一月至七月號）

「柿本人麿論」が七回に亙つて載つた。作品の制作時代調査、人麿の生涯、作品の風格、抒情的作風、作品に流れてゐる精神、ロマン的傾向、皇室に關する詠進歌、大君に對する觀念、挽歌、人麿の血液型の想定、人麿の理念、相聞歌と人麿、死相の表現、人麿と戀愛、人麿歌集の歌、人間性に無關心な人麿、浪漫主義者、一種の形式主義者、人麿の自然觀、長歌作者としての人麿、戀歌と人麿、皇室尊崇の歌とその歌風、人麿の本領、全人的な人麿等の諸項がある。

吉原敏雄　柿本人麿とその頃（むらさき。昭和十二年二月號）

淺野晃　**人麻呂的なもの**（思想。昭和十二年四月號）

拙著「柿本人麿」（總論篇）の私見を參照しつつ「人麻呂的なもの」を考察したもので、特に「悲劇的」と「カオス」とに注意し、そして赤人と比較することによつて人麿の特質を考へ、人麿作歌の性格を「渾沌からの慟哭」といふことに要約し、『人麿の情熱といふのは、渾沌からの慟哭であつた。個體のなかで個體を超えて波立つてゐる民族の生命の原始的な號叫であつた（中略）人麿は個性的歌人としてではなく、むしろ民族的歌人として、國家と民衆とに代つて渾沌からの慟哭を歌つた。』といつてゐる。

國崎望久太郎　**柿本人麿論について**（ポトナム。昭和十二年四・五月號）

中島光風　**玉蜻存疑**（文學。昭和十二年五月號）

「玉蜻」といふ枕詞は、もと「たまかぎる」にかかる語であらう。それゆゑ雅澄の如く、玉カゲヤクといふ意味に解するのは當を得ないだらうとして疑問を提出してゐる。

中河與一　**人麿並びに人麿歌集の歌**（[illegible]。昭和十二年五月號）

白畑よし　**人麿像の像容に就いて**（美術研究。第六年第六號、昭和十二年六月）

美術史專門的の論文で有益。[illegible]氏による[illegible]以前までの畫像について四種[illegible]の系統に分け[illegible]（一）兼房朝臣夢像系、體右向[illegible]、[illegible]紙、歌を案ずる像容、[illegible]な像[illegible]方に置き、[illegible]（二）信實[illegible]、[illegible]人麿像で高橋[illegible]氏藏の[illegible]などはそれに近[illegible]所在[illegible]所夢施之於事指殊夢[illegible]、[illegible]向き、又は[illegible]系統の[illegible]等[illegible]に屬[illegible]若尿流（行[illegible]若尿流）像容。行[illegible]時[illegible]の[illegible]、梅樹[illegible]等の變化[illegible]人麿[illegible]の態に行[illegible]の趣[illegible]、虎の皮[illegible]、延喜式に、一凡五位以上聽[illegible]虎皮[illegible]豹皮[illegible]參議三位聽[illegible]とある

如く、獸皮が唐物として上流人に愛用せられた。なほ先德圖像中には河上公が豹の皮を敷き、吉備大臣入唐繪詞にも虎の皮を敷いてゐる。（四）唐服像容。古典尊重、復古の氣運の興つた鎌倉時代に於て服裝もまた復原傾向を帶びたものであらう。（一）結論として、『是れを要するに以上四系統の人麿像容は、其の一々に就いて發生の年代的推定を加へることは困難であるが、兼房視夢の像容を首とし、信實視夢の像容なるものを是れに次ぐものとして、其の他の岩屋流及び唐服像の二系統は、其の像容の特異に過ぐるを見ても、恐らく人麿像の多數が畫かれたに及んで、故らに新様を望み新意を加へて圖繪されたもので、漠然とながらも、其の源流の鎌倉末期以上に出でないものでないかと推定される』と云つてゐる。

井上通泰　萬葉雜話（アララギ。昭和十二年七月號）

「水良玉、五百都集乎、解毛不見」（卷十、二〇一二）の解釋であるが、當時地方官などが歸京に先だつて、地方の特産物をサキミヤゲとして贈る習しがあつただらうと想像し、この歌も牽牛星が織女星を訪ふ前に、サキミヤゲとして「しら玉のいほつつどひ」卽ち眞珠を贈り、織女はその包を解いて見る事もなく只ひたすら牽牛を待つ趣の歌だらうといふのである。

宮崎昇　人麻呂集爲字考（短歌鑑賞。昭和十二年七月號）

武田祐吉　萬葉史生手實（アララギ。自昭和十二年八月號至十五年）

〇「柿本人麻呂の妻」に關する考察は、人麿作と明記せられた歌、人麿歌集出の歌全部にわたつての考察である。『持統天皇の宮女であつたらうと思はれる人麿の妻は、紀伊の國への行幸の後、夫に先立つて死んでしまつた。行を共にしたのは多分四年九月の行幸の度であつたらうと思ふのである。この妻は天皇の宮女として、人麿は舍人その他の役人として行つたのであらう。』『輕に居た妻、纏向に居た妻、引手の山に葬つた妻は、同じ人であつたのでは無からうか。』『春日なる羽易の山に、妻を求める人麻呂のこの歌は、都が奈良に遷されてからの作であらう。』〇「柿本人麻呂の歌集」は、人麿歌集の全面的な精細にして極めて有益なる研究である。目下なほ繼續中であるが、其歌數を三八六首と定めて、その内容及び表現法の

二大部門に分かち、表現法中その用字格の研究、表意文字と表音文字との配當、正字と假字、書樣の顚倒、具書、省略、助動詞助詞の書き方、その省略法、用言の書き方、題詞の書き方、訓假字の多種複雜性等について調査し、作者姓名の略記、漢字の正用、漢字風の記載を論じ、「人麻呂歌集における一人の書留として一つの性質を見る」とも云はれてゐる。（私の人麿歌集に關する考の誤があつたら、博士のこの精細な研究によつて、是正せらるべきである。）

澤瀉久孝　**萬葉集訓詁私案**（アララギ。自昭和十二年十一月號至十三年二月號）

「[illegible]」の歌一首、卷三（二二三）の歌の左注「[illegible]」、「亂文」の訓を檢討したもので、舊訓「[illegible]」を否定して、「[illegible]」と訓むべき説に落着いてゐる。

佐佐木信綱　**柿本人丸明石の松蘇利**（國語と國文學。昭和十二年十一月號）

「柿本人丸明石の松蘇利」といふ書の紹介で、京本は鳥居清滿が寶暦十年に作つたものであるといふ。人麿の生涯を物語[illegible]に書いたもので、事蹟等も全然架空である。

鈴江　**歌聖人麿**（古典研究。昭和十二年十二月號）

久松潛一　**萬葉集に現れたる日本精神**（昭和十二年、至文堂發行）

なかに「柿本人麿の歌」の項があり、長歌がある（卷三、二六三）を評釋し、『人麿が特に倭島といつたのは日本といふことを意識しないで用ゐたのではあらうが、自ら人麿の國家意識が現れてゐるのである。萬葉歌人の中でも特に神々國家の思想を强く抱いて居る人麿が自ら倭島とうたつたのであらう。』といつてゐる。

伊藤左千夫　**短歌文學全集・伊藤左千夫篇**（昭和十二年、第一書房發行）

「短歌文學全集」の一篇で、歌論中「柿本人麿論」がある。

水野一彦　**再び「人麿」について**（抒情。昭和十三年三月號）

佐野保夫　人丸神社（飛魚。昭和十三年五月號）

次田潤　萬葉集選釋（むらさき。昭和十三年五・九月號）

「人麻呂の挽歌」で「玉藻よし」（二二〇）、「妻もあらば」（二二一）、「天飛ぶや」（二〇七）、「秋山の」（二〇八）の解釋鑑賞がある。

石井庄司　人麿の長歌と敍事詩的要素（日本文學。昭和十三年六月號）

日文本學に於ける敍事詩的展開の源流として人麿の長歌を考察したものである。

宮崎健三　人麿の作品に於ける詞句の別傳（國語。昭和十三年七月號）

人麿作歌中、一云・或云といふ注の多いことに注意して、この別傳は製作當時の一案であらうといひ、殊に「越野過去、一云 乎知野爾過奴」に就いて詳論がある。

今井福治郎　拾遺集と人麿（學苑。昭和十三年九・十月號）

中島光風　廣島と柿本人麿（雲雀笛。昭和十三年十二月號）

廣島市の西郊宮内村明石の里に傳はる傳説を紹介批判したもので、口碑には人麿が石見から上京の途次この地に滞在して「ほのぼのと」の歌を詠んだといふのである。然し「藝備國郡志」（續々群書類從所收）には「宮内之明石村者相傳山邊赤人之所レ産也舊記未レ見二其據一」とある。

宇野浩二　一途の道（昭和十三年、三和書房發行）

なかに「齋藤茂吉と柿本人麿」といふ一篇がある。

西角井正慶　柿本集對照表（國文學論究第九册。昭和十四年三月）

柿本集について、類從本（新校群書類從）と、三十六人集本（校註國歌大系）とを番號によつて對照し、それと萬葉集、古今六帖、その他の勅撰集とを比較しそれを國歌大觀の番號によつて示してゐる。骨の折れたくはしい仕事である。私もこの

對照表は一部作製したが全部でなかつたから、私の作製した對照表の不備な點はこの對照表によつて補ふことが出來る。私のものは既に校正済であつたからその儘にして西角井氏の對照表は參考しなかつた。

坂口保　人麻呂羇旅難訓歌一首（國歌研究　昭和十四年九月號）

「三津埼、浪矣恐、隱江乃、舟公、宣奴島爾」（卷三、二四九）の歌について、新説を提出したものである。「公宣」はもと二人宣」であるべきを、公に「同」字を補つて、「三津の埼浪をかしこみ隱り江の舟人ナリヤ奴島ニ向キテ」と或は生田幸一氏の方法に從ひ「舟」の下に「爾」を補つて、「舟ナル人ヲ呼バフ奴島ニ・舟ナル人ヲ呼ブモ奴島ニ」と訓まうとし、最後に氏は萬葉地理に照らして「舟爾人、喧美奴馬爾」といふ訓に落著いてゐる。

四　雜誌、講座、單行本等の文章にして人麿、人麿の歌に言及せるもの

平田篤胤　歌道大意（明治十八年發行）

柿本朝臣人麿に就て、「有難キ事ラレマシ關司ナガラ私ニ讃嘆イタシマスルヲ、ト是ニイヘマシテ…」といひ、「ほのぼのと」の歌について、俗說に、この歌は過去現在未來三世佛法の妙理をのべたもので、それには深祕口傳あるなどといふのを、一蹴讃岐ノ宮ナル八の歌を見たやうな體だと云つてゐる。また、歌神、和歌三神についても論じてゐる。

久保田米僊　米僊畫談（明治二十四年十一月、松邑三松堂）

「人丸の像」について記事あり、小野篁作の畫圖もある。

あらたま同人　萬葉集短歌研究（あらたま　昭和二年四月至十年四月號）

中島光風　寄物陳思歌の表現方法について（國語と國文學　昭和四年八月號）

五味保義　**萬葉卷十一・十二の類歌**（國文雜誌。昭和六年五月號）

橋本敏夫　**萬葉集十一「鴨川」の歌について**（短歌研究。昭和六年十月號）

青木三二　**人麿と赤人**（短歌草原。昭和九年一月號）

土屋文明　**萬葉集歌人の研究**（昭和九年十二月、日本文學講座第七卷。改造社）

「人麿を中心とする作者群」の一項がある。

人見圓吉　**人麿・赤人・憶良**（學苑。昭和十年一月號）

淡海の海（卷三、二六六）、久方の（卷三、二四〇）、東の（卷一、四八）、春の野に（卷八、一四二四）の評釋鑑賞がある。

齋藤茂吉　**童馬山房夜話**（アララギ。昭和十年五月號）

人麿が石見の角の里にゐた娘子と情交を結ぶやうになつた事情、又「貝」を「峽」の意に使つた地名について述べた

野田實　**久米のさら山和歌宮**（山陽新報。昭和十年八月二十四日）

久米のさら山和歌宮の神札が疫病除けになるといふ理由を考察し、修理大夫顯季が美作守になつた時、和歌宮の勸請がこの人に結托せられたからだらうと云つてゐる。

吉水千之　**萬葉集の音韻聲調の研究**（文學。昭和十年十月號）

人麿・赤人・憶良・家持・福麿の短歌を比較した一項がある。

吉水千之　**萬葉聲調試論**（國語と國文學。昭和十年十一月號）

「人麿・赤人・憶良の韻律研究」といふ副題がある。

進藤淸　**常滑試論**（鳴澤。昭和十年十一月號）

「常滑」は、水苔の附著したなめらかな恒久岩であらうといつてゐる。

窪田空穗　現代歌論歌話叢書・窪田空穗篇（昭和十年、改造社）

なかに「柿本人麿」の一篇があつて、拙著「柿本人麿」を紹介され、これを機縁として人麿を論じてゐる。

太田水穗　現代歌論歌話叢書・太田水穗篇（昭和十年、改造社）

「人麿的なるもの、赤人的なるもの」がある。舊稿である。

宇都野研　萬葉口譯集（勁草。昭和十一年一・二・三・四・十月號）

去年見てし（卷二、二一一）、衾道を（二一二）、現身と（二一三）、去年見てし（二一四）、衾道を（二一五）、家に來て（二一六）、秋山の（二一七）、さざなみの（二一八）、天數ふ（二一九）、玉藻よし（二二〇）、妻もあらば（二二一）、奥つ波（二二二）、鴨山の（二二三）、今日今日と（二二四）、直の逢は（二二五）、皇は（卷三、二三五）、やすみしし（同、二三九）、久方の（同、二四〇）、三津の崎（同、二四九）、珠藻刈る（同、二五〇）、淡路の（同、二五一）、荒妙の（同、二五二）、稻日野も（同、二五三）、ともしびの（同、二五四）、天離る（同、二五五）、飼飯の海の（同、二五六）、やすみしし（同、二六一）、矢釣山（同、二六二）、物部の（同、二六四）、淡海の海（同、二六六）、名ぐはしき（同、三〇三）、大君の（同、三〇四）、草枕（同、四二六）、隱口の（同、四二八）、山の際ゆ（同、四二九）、八雲さす（同、四三〇）の口譯がある。

神月素兒　萬葉集研究（大和。昭和十一年一月號）

柿本人麿の歌を主としてゐる。

品田太吉　溫古隨筆（香蘭。昭和十一年二・七月號）

「假字」（卷一、二九）はカ、ミダチと、又「造問」（卷二、一九六・二〇七）[illegible]

坂村眞民　人麿型と赤人型（蒼穹。昭和十一年四月號）

濱津初　萬葉集研究（野菊。昭和十一年五月號）

谷馨　歴代名歌評釋（記紀萬葉篇）（昭和十一年、交蘭社發行）

カール・フローレンツ著、篠田太郎・土方定一共譯　日本文學史（昭和十一年、樂浪書院發行）

人麿の歌にも觸れてある。

武田祐吉　萬葉集と忠君愛國（昭和十一年、日本文化協會出版部發行）

「天皇の聖德」の項に人麿の歌が引かれてある。

金子薫園　歌の作り方（昭和十一年、新潮社發行）

「歌の味ひ方」、「古今名歌評釋」の二章に人麿の作をあげてある。

高崎正秀　萬葉集叢考（昭和十一年、人文書院發行）

なかに「柿本傳私見」一篇がある。

田中健三　萬葉集の訓と解（國語解釋。昭和十二年一月號）

卷一、三〇・三一・三三・三六・三七・三八・三九の歌につき、從來の諸説を批判したものである。

豐田八十代　萬葉卷一の研究（花房。昭和十二年自一月至九月號）

卷一、二九・三〇・三一・三六・三七・四〇・四一・四二・四五・四六・四七・四八・四九の語釋口譯がある。

田中勘次　古今の愛誦歌鑑賞（いぶき。昭和十二年一・三・四月號）

なかに、淡海の海（卷三、二六六）、けふけふと（卷二、二二四）、袖振るが（卷十一、二四八五）、鳴る神の（同、二五一三）、もののふの（卷三、二六四）、あまざかる（同、二五五）の鑑賞がある。

宇都野研　萬葉口譯集（勁草。昭和十二年二月號）

卷四、四九六・四九七・四九八・四九九・五〇一・五〇二・五〇三の口譯である。

池田毅　**萬葉集短歌の鑑賞**（歌と評論。昭和十二年自二月至七月號）

卷一、四八。卷二、一三三・一三七・二一六・二二四。卷三、二五一等の人麿作の鑑賞がある。

次田潤　**萬葉集選釋**（むらさき。昭和十二年三・四月號）

なかに、天雲の（卷十一、二四九〇）、大船の（同、二四三六）、古の（卷十一、二六一四）の人麿歌集の歌の解釋批評がある。

中塚莞二　**初學講座、萬葉集の七及一〇**（[illegible]昭和十二年三・八月號）

あかねさす（卷二、一六九）、鴨山の（同、二二三）、けふけふと（同、二二四）、秋山の（同、二一七）、たらちねの（卷十一、二四九五）の簡單な解釋がある。

岡本明　**萬葉名歌鑑賞**（ことたま。昭和十二年三・七・十・十一月號）

あふみのみ（卷三、二六六）、あしひきの（卷七、一〇八八）、しきしまの（卷十三、三二五四）、ゆけどゆけど（卷十一、二三九五）の解釋鑑賞がある。

齋藤茂吉　**制作と研究**（文學。昭和十二年五月號）

文中、卷二（一三三）の「清爾亂友」の訓釋について一言した。

五味保義　**第三句の末尾に助詞「は」を有する短歌**（文學。昭和十二年五月號）

表題のやうに特殊な表現法を對象とした考察であるが、人麿作「八雲さす」（卷三、四三〇）の歌に論及してゐる。

今井邦子　**萬葉集歌話**（明日香。昭和十二年五・六月號）

玉襷（卷一、二九）、ささなみの（同、三〇）、ささなみの（同、三一）の評釋があり、人麿についての概說がある。

薄井一　**萬葉集私解**（くぐひ。昭和十二年五・九月號）

ひさかたの（卷十、一八一二）、たらちねの（卷十一、二三六八）の評釋が見える。

丸山靜　**人麿再興**（抒情。昭和十二年六月號）

拙著「柿本人麿評釋篇」を紹介した文章である。

山本康夫　**萬葉集卷四珠衣の歌について**（眞樹。昭和十二年七月號）

たまきぬの（卷四、五〇三）の解釋である。

木之下正雄　**歌語雜考**（あけび。昭和十二年七月號）

「人麿の歌一首」として、ささなみの（卷一、三一）の歌の解釋がある。

島津久基　**日本文學史**（岩波講座國語教育、昭和十二年八月）

北住敏夫　**齋藤茂吉氏の人麿觀**（文化。昭和十二年九月號）

加藤政吉　**萬葉集講話**（東邦。昭和十二年九・十・十二月號）

泊瀨河（卷九、一七七五）、黃葉の（同、一七九六）、ひさかたの（卷十、一八一二）の解釋がある。

中村憲吉　**萬葉集短歌輪講**（中村憲吉全集第二卷、昭和十二年、岩波書店發行）

大正三年六月より昭和五年三月にかけて、雜誌アララギに載つた共同研究の中から憲吉執筆の分を抽いたものである。

岡本明・伊藤壽一　**萬葉名歌評釋**（昭和十二年、言靈社發行）

「淡路の」（卷三、二五一）の註釋鑑賞がある。

品田太吉　**萬葉集の訓點について**（短歌研究。昭和十三年十一月號）

三項中「春葉茂如」「四能乎押靡」の二つが人麿の歌に關する。「春の葉」は人麿の新造語であらうといひ、「押靡」を舊訓のままオシナミと訓むべきことを云つてゐる。

次田潤　**萬葉集抒情歌の三樣式**（學苑。昭和十三年十二月號）

築瀨一雄　學生の爲めの萬葉集の鑑賞（昭和十三年、興文閣書房發行）

久松潜一　日本文學評論史（昭和十三年、至文堂發行）

五　人麿地理文獻

日本國花萬葉記（菊本賀保、元祿十年）

石見國名所之部に、妹山、渡りの山、高角山、石見野、からの浦、石見かたを記入してゐる。

大井重二郎　萬葉集大和歌枕考（昭和八年九月、曼陀羅社發行）

山田梅吉　獵路の池（大阪朝日新聞奈良版。昭和九年一月六・七日）

獵路池の位置を現在の榛原盆地であらうと推定してゐる。

齋藤茂吉　鴨山考（文學。昭和九年十月號）

拙著「柿本人麿」（總論篇）に附錄として收めた。

島本正義　雷岡について（大和志。昭和九年十一月號）

奥野健治　萬葉大和志考（昭和九年、同人社發行）

大和に關する萬葉地理の考證で、五十音順に地名を排列し、諸說を擧げて歸趨を明かにし、萬葉の例歌をも揭げてゐる。人麿に關する項目も當然多く見える。

北濱正男　狹岑島（一路。昭和十年三月號）

齋藤茂吉　童馬山房夜話（アララギ。昭和十年四月號）

「鴨山考」に關する。

阪口保　**萬葉集大和地理辭典**（短歌研究。昭和十年四月號）

萬葉集にある大和關係の地名百二十一項を五十音順に排列してある。地名を假名書にし、その下に萬葉の用字例を擧げ、陸地測量部地圖の所屬を注記し、實地踏査道順をも示してある。

豐田八十代　**所見二つ**（國學院雜誌。昭和十年七月號）

阪口氏の「萬葉集大和地理辭典」に對する異見二項であるが、その一は秋津野に關する。

川田順　**人麿と卷向地方**（短歌研究。昭和十年四月號）

人麿歌集に卷向地方を詠んだ歌が多いことに注目して、人麿は穴師の里あたりに假寓したことがあるだらう、又弓月嶽の麓に隱妻を置いてゐただらうと推測してゐる。

齋藤茂吉　**童馬山房夜話**（アララギ。昭和十一年三・十一月號）

「人麿萬葉地理正誤」、「鴨山考補註篇正誤」がある。

中村耕三　**鴨山は三瓶山ならずや**（心の花。昭和十一年四月號）

石見安濃郡の三瓶山（さんべやま）はもとミカメヤマと云つただらうといふ推定を根據として人麿の終焉地をその山に關聯せしめた說である。

齋藤茂吉　**鴨山「三瓶山」說に就いて**（アララギ。昭和十一年六月號）

三瓶山は佐比賣山（さひめやま）から轉化したものであることを云つて、前項中村氏の說を否定した。

小島貞三　**柿本寺と歌塚**（大和志。昭和十一年七月號）

人麿の遺跡を記し、櫟本町極樂寺の歌塚緣起を紹介してゐる。

中河與一　**人麿地理**（東京朝日新聞。昭和十一年十月十七—十九日）

佐美島、人麿岩、中之水門について記してゐる。

中河與一　**佐美島考**（ごぎやう。昭和十一年十・十一月、十二年一月號）

人麿作、讃岐狹岑島の歌にある、狹岑島（砂彌島）の踏査考證で、人麿歌の場處は東海岸であらうといふのである。よつて其處に「柿本人麿碑」（川田順氏書）を建立（昭和十一年十一月二日）したのと關聯して居る。なほ、『なかの水門』につき、「結論的に云へば、地名としては、まぎれもなく今の仲多度郡中津であり、實際の場所としては、寧ろ中津よりは丸龜寄りではないかといふ事である』と云つてゐる。

井上雪下　**出雲風土記にあらはれたる山陰山陽の交通**（水甕。昭和十二年三月號）

出雲風土記の記事により、仁多郡、飯石郡、大原郡、神門郡中の『剗』の記事を調べ、「石見から大和への旅にも備後通過の事を容易ならしめたことをうなづかせるわけにもなるのである」といふ結論になつてゐる。この出雲風土記の『剗』のことは、私も「總論篇」（二六一頁）、「鴨山考補註篇」（五八頁）で、既に注意して置いたものである。

保田與重郎　**佐美島に建つ柿本人麿歌碑**（コギト。昭和十一年十二月號）

石田美枝　**名ぐはしの佐美の島**（ごぎやう。昭和十一年十二月號）

齋藤茂吉　**辛乃崎考**（文學。昭和十二年一月號）

佐佐木信綱　**萬葉學の流布と砂彌の島**（ごぎやう。昭和十二年五月號）

卷二（一三五）の長歌にある「辛乃埼」を現在の唐鐘浦に擬したものである。この「雜纂篇」に收めてある。

田村吉永　**大津京考**（大和志。昭和十二年八月號）

齋藤茂吉　**藤原宮御井考**（文學。昭和十二年八月號）

中河與一　**萬葉の精神**（昭和十二年、千倉書房發行）

「佐美島考」「瀬戸内海と萬葉集」等がある。雜纂篇に抄して置いた。

橘井清五郎　**藤原宮御井歌考說**（國學院雜誌。昭和十三年一月號）

「井」の本義は「居」、御井は御居であるとして、「藤原宮御井」は「藤原宮皇居」の意と解し、本文の「御井之清水」をも「皇居の清水」と解してゐる。それは埴安池の清水で、埴安池は藤原宮の內裏の北に接して在つただらうと想像してゐる。

齋藤茂吉　**鴨山後考**（文學。昭和十三年一月號）

人麿の終焉地「鴨山」を石見粕淵村湯抱に發見したことの報告である。

大井重二郎　**萬葉集攝河泉歌枕考**（昭和十四年、立命館出版部發行）

萬葉集に見える攝津・河內・和泉三國の地名七十一項についての地理研究であるが、そこに人麿關係の地名が含まれてゐる。

人麿文獻追加

木公迂人　**人丸赤人の優劣**（知玉叢誌。三四、明治二十三年）

花友情仙　**人丸赤人優劣の辯**（知玉叢誌。三五、明治二十三年）

荻野由之　**萬葉集講義**（文學第一號より、明治二十五年）

新　貞老　**萬葉集摘英新釋**（明治二十六年、吉川半七發行）

畠山　健　**萬葉集講義**（早稻田講義、明治二十六年）

大町芳衞　**柿本人麻呂**（明叢、明治二十七年）

畠山　健　**柿本人麻呂の歌**（國學院雜誌三・二、明治二十九年）

「柿本人麿」縁起

「柿本人麿」縁起

総論篇

人麿はいはゆる歌仙、歌聖であつて、古今集の序に、『柿本の人丸なむ、歌のひじりなりける』とあるのに本づき、顕昭の柿本朝臣人麿勘文にも「歌仙事」といふ條があるほどである。また人麿は歌神であり、和歌三神の一である、さういふ具合であるから、和歌に執心するものは人麿を崇び念じてつねにその感應あらむことを希つたことは既にいろいろの書物に見えてゐる。

正岡子規が嘗て歌を論じた中に、『柿本人丸を歌聖といふ。彼等は人丸の價値を知らず、否人丸の歌を知らずながら雷同してしかいふのみ』といふのがあつた。自分が歌を弄しはじめたのは正岡子規の歌集が機縁となつたのだから、私も一たび人麿に言及して見ようといふ氣持はそのころから萌してゐたもののごとく、であつた。そして、自分の習癖と慣例とによつて人麿に關する資料をぼつぼ

つ蒐めつつあつた。それは明治四十一二年の頃からである。

そのうち先師伊藤左千夫の人麿論が萬葉集新釋の一部として雜誌アララギに載り、人麿の歌に對する不滿の情をのべられた。『予が人麿の作歌につき、多くの不滿を感ずる樣になつたは、餘程以前よりの事である。子規子世を去りて後間もなき程の頃からと記憶する。爾來人麿の作歌に注意を絕たないのである。考究熟察如何に考へても、人麿の作歌は世に買過ぐされて居るとの念が去らないのである。予は必ず一度大に人麿の作歌に就いて論ずる所あらんとの覺悟ありしも、予の境遇を以て人麿の作歌を論ずるは、其の責任の極めて大なるを感ずるものから、容易に筆を下し得なかつたのである。然るにたまたま萬葉新釋の稿を進めて、人麿の作歌に到著したのである。予は今此の稿に臨んで、愈多年胸中に蓄積せる問題を解決せねばならぬことの容易ならざるを思うて、覺えず戰慄したのである。此の長歌を評すれば、自然人麿を論せざるを得ない。歌人が人麿を難ずるは、宗敎家が宗祖を難ずるの感がある。予は稿に對して十數日猶一行を綴ること能はず、每日萬葉集を手にして、復讀幾十回漸く意決し、心定まるを得たのである。』これは先師の人麿論の序言のやうなものであつた。先師の人麿論といふものはそれほど骨を折られたものであり、先師晩年の歌論として注目すべきものの一つである。

先師の歌論は、既に如是の域にまで到達してゐたが、私は總論篇で告白して、「力相應に」「力に順つて」といふ言葉を使つてゐる如く、私は自らの力量を顧慮すれば、到底先師その儘の人麿論をあへてするわけには行かなかつたのである。そこで私はあいふ具合の人麿論を作つた。それから、これも總論篇の序文で告白してゐるごとく、私は大正十三年火難に逢つて一切の藏書を焚燒してしまつた、さういふ自分の境遇のために、一切かういふ著述などのことは斷念してゐたのであつたのを、昭和五六年頃から、雜誌社の徴求に應ずるために書きはじめたのが即ち私の人麿論であるのだから、これも序文で告白してゐるやうに、「柿本人麿に關する研鑽の書を撰述しようなどといふ大望をはじめから抱懷してゐたものではなかつた」のである。總論篇でその根幹をなすものは、「柿本人麿私見覺書」であらうが、これも極めて氣儘な一家見に過ぎぬのである。萬人を前にして叫ぶといふよりも、閑居して獨語するといふところがある。それにもかかはらず、環境を拔きにするといふことが出來ず、相待的な言說の混入したことを自ら顧みねばならぬのである。例へば文中唯物史觀に立脚した文藝觀を批判してゐる如きは、當時環境の文藝觀を反映してゐるのであつて、さういふ批判などといふ事は私の人麿觀の眞の意圖ではないのである。私の人麿觀はさういふ部分的に道草を食ひつつ行くのではなく、抒情詩人としての人麿をもつと本質に徹して論ぜんと欲したのである。

儒の至るところは孔丘也と謂ふけれども、歌の仙として人麿をどういふ位置に据ゑるべきものでもるか、たまたま反對の意味にむかつてひどく動搖しつつあつた人麿の評價について、私の取つた態度もまたこの總論篇に於て約說せられてゐる筈である。進擊は勇猛を要することは既に言ふことを須ゐないが、防禦卽ち『守勢』にもまた勇猛を要すること、學問界に於てもまたかはりは無い。

人麿の歿處卽ち『鴨山』に關する考察は、「鴨山考」として記述したが、これは自分にとつては主觀的に最も樂しいものであつた。それに、そのころ佐藤佐太郎君が石見の古地圖二種類を求めてくれたり、いろいろと不思議に考證が發展したものであつた。後、この「鴨山考」は、「鴨山後考」によつて改正せられたが、その礎をなすものでもあり、また種々の點に於て人麿に關する從屬的な問題にも觸れ得たものである。例へば、人麿の病志について考察し、歿年を慶雲四年ごろとした如き、人麿をば一人と看做さず、集團的に考へる一派の說をも、この「鴨山考」に於て否定してゐるが如き、人麿上來の道筋を備後路、瀨戸內海と推察したごとき等々である。

長谷川如是閑氏の人麿論についての私見は、雜誌に賴まれて書いたものであるが、これは、世の萬葉學の泰斗、萬葉學の權威と自らも任じ人も許す諸家が、この長谷川氏の人麿論に對して一言も批評の言葉を與へなかつたために、私が書いたといふ結果になり、極まりの惡いおもひをしながら

公表したのであつた。

この總論篇は實に多くの方々から恩賴を蒙つた。石川岩市、板坂達麿、岩波茂雄、牛尾正一、宇野定吉、大島幾太郎、香取秀眞、五味保義、中村重由、佐佐木清一郎、佐佐木信綱、佐藤佐太郎、柴生田稔、末田齊、武田祐吉、土屋文明、土岐善麿、德富蘇峰、豐田藤彌、橋本欣也、橋本清之助、橋本福松、廣野三郎、藤森朋夫、舟木賢寛、堀内通孝、三成重敬、森本治吉、安原次郎、山口茂吉、山中範太郎、山本熊太郎、蕨橿堂、岡鹿太郎、岡麓、小野賀榮、小野寺八千枝の諸氏の芳名を記して深甚感謝の念をささげる。

また、本篇が發行になると、德富蘇峰（東京日日新聞）、佐佐木信綱（岩波書店特報）、窪田空穗（短歌研究）、相馬御風（野を歩む者）、武田祐吉（短歌研究）、岡崎義惠（東京朝日新聞）、久松潛一（帝國大學新聞）、齋藤昌三（書物展望）、武者小路實篤、川田順（大阪朝日新聞）、尾山篤二郎（自然）、宇都野研（勁草）、池崎忠孝（大阪時事新報）、宇野浩二（文學界・書物展望）、片山敏彦（レツェンゾ）、淺野梨郷（武都紀）、岡山巖（短歌研究）、藤田德太郎（日本短歌）、佐伯梅友（國語・國文）、橋本德壽（青垣）、早川幾忠（高嶺）、四賀光子（潮音）、島田忠夫（秋田魁新聞）、石田德太郎（創作）、中河幹子（ごぎやう）、藤川忠治（歌と評論）、阪口保（詩歌）、伊東月草（同上）、笹月清美（文學研究）、山下秀之助（歌帖）、梅澤彦太郎（日本醫事新報）、土屋文明（東京日日新

聞）、森山汀川（信濃毎日新聞）、今井邦子、室生犀星（四季）、北夏夫（短歌詩人）、高桑菊子（青垣）、鹿兒島壽藏（アララギ）、森本治吉（讀賣新聞・國語と國文學）、藤森朋夫（文學）等の諸先生諸先輩諸友人から同情に充ちた紹介文を書いていただき、佐藤佐太郎君が後に、「柿本人麿」批評集を編んでくれた程であつた。

本篇は、（本篇以下雜纂篇に至る全部も）、その紙質、印刷、製本等近來稀に見る立派な點に於て、定價の安い點に於て好評を博した。これは岩波書店主岩波茂雄氏の好意によつたものである。そして第一刷は昭和九年十一月、第二刷は昭和九年十二月、第三刷は昭和十年五月、第四刷は昭和十四年七月といふ具合に、思ひまうけぬ世の同情を得たことを深く感謝してゐる。その間、誤謬を訂し、挿圖をあらため、文獻を補充し、第四刷からは索引を改良し、簡單な跋文を添へた。

鴨山考補註篇

これは「鴨山考」を作つた前後に手に入れた新資料だの、「鴨山考」の結論の註として役立つ事柄だのをいろいろと書記したものである。そのうちでも嬉しかつたのは、昭和九年九月九日附で小野賀

榮氏から手紙を貰ひ、ついで九月十四日附舟木賢寛氏から手紙を貰ひ、現在の邑智郡川本町が、往古の石河邑と稱したことが分かつたので、私が以前に、人麿の死んだ時その妻依羅娘子の作つた歌の中の『石川のかひ』は只今の江ノ川の峡だらうといふ推察を立てた說が、はじめて積極的な證據を得ることとなつたことであつた。

それから、私の「鴨山考」では鴨山を粕淵村小原の津目山に擬したので、その他の町村、川本、川下、中野、矢上、高原、阿須那、仁万方面の土地臺帳を調べて、鴨山の重複してゐないことを知つた。その序に、カミ・カモ・カメの音韻變化の例、石見古代の諸氏族分布の狀態、神社分布の狀態、交通狀態、驛制等に言及し、人麿上來の道筋を備後路に及ばしめたその理由を記入した。また、石見國府の所在地を考へ、邇摩郡仁万村說は寧ろ否定しようとする結論に達した。なほ、人麿神社は火防・安産の神として禮拜せられてゐる事實を記した。

私の「鴨山考」を樹立せしめるには、自然、人麿歿處高津說、人麿歿處國府說、伊甘歿處說、を否定することとなるので、隨分くどくその考證をした。その他の人麿巡遊傭人說、出雲歿處說、明石歿處說等に對しての否定も亦同樣である。私はこの項に於て隨分くどく繰返して否定の考證を爲したのであつたが、それでも私の說に從はない學者が依然として居つて現在に及んでゐる。

雜記帳抄では、人麿傳說の種々相、人麿同名の人々、その他古文書所載の人麿傳關係記事に及び、人麿肖像補遺をその附錄とした。

なほ、手帳の記、石見瞥見記、鴨山踏査餘錄、備後石見紀行等をも附載した。昭和五年の手帳の記の如きは、人麿傳に關係の無いものであるが、平福百穗・中村憲吉の二亡友が未だ健在の時であり、私は手帳を紛失したために、再度高津の柿本神社に參拜し得たのであつた。さういふ關係で私の「柿本人麿」に深い因緣を有つてゐるものである。

本篇は以上の如く、雜事を記入したに過ぎぬのであるが、今にして顧れば、やはり人麿を全體として考察するうへに、多くの有益な事柄を含んでゐると思ふのである。本篇は昭和九年歲末に原稿を纏めて印刷に著手し、昭和十年十月十五日發行になつた。

本篇を作るに際し、小野賀榮、舟木賢寬、土居光知、柳田國男、尾崎恒雄、正宗敦夫、中島匡彌、村岡典嗣、松村勇、中村達吾、中村重孝、牛尾正一、岡鹿太郎、大島幾太郎、土屋文明、岡田眞、金子規矩雄、幸田露伴、泉哲三、大村呉樓、柴生田稔、德富蘇峰、武田祐吉、末田齊、中島好吉、岩波茂雄、山口茂吉、佐藤佐太郎、藤原運一、山崎慧、辻村直、廣野三郎、橋本欣也、岡麓、荻野仲三郎、脇本樂之軒、護城鳳山、藤森朋夫、山口隆一の諸氏より多大の敎示と助力とを得たことを

深く感謝する。

なほ本篇が發行になると、澤瀉久孝（國語・國文）、豐田八十代（短歌研究）、松村英一（國民文學）、西下經一（國語と國文學）、岡山巖（歌と觀照）、早川幾忠（高嶺）、長谷川富士雄（香蘭）、清水文雄（國文學攷）、宇佐美喜三八（水甕）、藤森朋夫（文學）、石田德太郎（創作）等の諸氏から同情に滿ちた批評乃至紹介をたまはつた。

評釋篇卷之上

人麿の歌に對する結論を云々するに當つては、つまりはその一首一首に言及するのでなければ、その結論に到つた證據を示すわけには行かぬので、私が總論篇で公にした、「柿本人麿私見覺書」の終の方に、人麿作と明記されたもの、及び人麿歌集に出づといふものの中から、傑作若干首を選びその評釋をして載せようと意圖したのであつた。さて評釋しようとすると如何なる程度に如何なる體裁に爲すべきであるか、鑑賞を主とするとせば、訓詁解釋上に煩瑣な筆を行る必要が無くなつて來るし、加之、契沖の萬葉代匠記以來、現代に至るまで諸先學の精到なる注釋書が幾つも出來てゐる

るのであるから、ただそれを繰返すのは所詮屋上屋を架するに過ぎぬと思つたのであつた。そこで始は、諸説の考證等は抜きにして、大體私の好しと思ふ訓なり解釋なりを採り、例へば、巻三（二六二）の人麿作、矢釣山（ヤツリヤマ）、木立不見（コダチモミエズ）の初句は、『矢』は、細井本、無訓本には『矣』とあるし、『釣』は、類聚古集、神田本、細井本、無訓本には『駒』とあり、京都大學本には左方に赭く『駒イ本』とあり、從つて其等ではイコマヤマと訓じてゐる。若し矢釣山だとすると、高市郡飛鳥村大字八釣の山であるし、伊駒山だとすると、生駒郡になる。射駒、伊駒、伊故麻等と書かれた。私は矢釣山の方が解釋し易いので、伊駒山説は棄てたのであつた。さういふ具合にして、最初は筆を進めようとしたのであつたが、評釋を進めて行くと必ずしもさういふ風にばかりは行かぬといふことが分かつた。そこで自然にああいふ風な體裁になつてしまつたものであるが、人麿作短歌の部は、昭和三・四年あたりから書いてゐて、昭和八年の暮には書き畢へて居る。それから、はじめは長歌の評釋はせぬつもりであつたが、土屋文明・武田祐吉二氏の奬勵によつて長歌の評釋に著手し、箱根に籠つて勉强したので主要な部分は其處で出來た。それから附錄の藤原宮之役民作歌、藤原宮御井歌、皇子尊宮舍人等慟傷作歌の評釋をも籠めて、昭和十年十二月末迄に出來上り、それから印刷校正に著手して、昭和十二年五月五日に發行になつた。

この評釋篇は盡く前賢先輩の著書から恩賚を蒙つたものである。その著書の大部分は纏めて總論篇の人麿文獻のところに記して置いたし、また一首一首の評釋の條下に記し、索引でもそれを明かにして置いた。さういふ風であるから、新説などといふものは極めて稀で、偶『遊副』を、『ユキメグレル』或は、『イユキメグレル』と訓ませた如きに過ぎない。また私程度の學力を以てしては濫りに新説などのことを云々すべきで無いことも評釋の進行中に氣づき、また同時に、未解決の部分は必ずしも前賢の説に從はずに、力を盡して究尋せねばならぬといふことをも切に感じたのであつた。

本篇は千頁を超えた大卷となり、その校正、索引の作製等も並大抵ではなかつた。そしてそれ等は前篇同樣、山口茂吉・柴生田稔・佐藤佐太郎・鈴木三郎諸氏の盡力になり、發行全部は岩波茂雄氏の厚意によつて出來あがつたものである。

本篇の評釋は、人麿作と明記せられてゐる歌の評釋なので、私は一語一句人麿のいぶきに觸れる如き感奮を持續しつつ筆を行つたのであり、肉體的には甚だ疲勞を感じつつも、なほ人麿の偉大を犇々と感じて心に飽くことを知らなかつたものである。

本篇が發行になると、德富蘇峰（東京日日新聞）、武田祐吉（日本短歌）、久松潛一（短歌研究・帝國大學新聞）、臼井大翼（覇王樹）、中野重治（日本讀書新聞）、西下經一（東京堂月報・帝國大學新聞）、木村毅（東京日日新聞）、

楢崎勤（新潮）、岡山巖（歌と觀照）、橋本德壽（青垣）、四賀光子（潮音）、西角井正慶（多磨）、安富六男（まなす）、水野一彦（抒情）、西郷信綱（抒情）、結城哀草果（山形新聞）、森本治吉（國語と國文學・明日香）、柴生田稔（文學）、柳田新太郎（短歌新聞・短歌年鑑）の諸先生諸友人より甚大の同情をたまはつたことを感謝する。

評釋篇卷之下

本卷は、萬葉集中、柿本朝臣人麿歌集に出づと左註せられた歌、柿本朝臣人麿之歌集、柿本朝臣人麿歌集歌曰等といふ題の附けられた長歌短歌全部を評釋したものである。

はじめは其等の歌から、人麿作と想像せらるべき歌を主觀的に抽出してそれを評釋し、他は棄てるつもりで、先づ二百餘首を選んで評釋終了したのは昭和九年四月であつた。然るにその後、全部を評釋補入することとし、その業を了へたのは昭和十一年八月であつた。能ふ限り日課にして筆を進めたが、長歌二首、短歌三百五十三首、旋頭歌三十五首といふので、業餘の執筆としては進捗遲遲、時々筆を投じて茫然たることも一再にとどまらなかつたほどである。

本卷の評釋も盡く、先進諸學者より恩惠を蒙り、特に萬葉全卷の注釋である、代匠記、考、略解、古義、新考（井上）、全釋（鴻巣）等に深き感謝の意を表するものであつて、なほ、本卷の校正中、幸田露伴先生ほか、日本學術振興會第十七小委員會の、瀧精一、姉崎正治、阿部次郎、市河三喜、佐佐木信綱、新村出、鈴木虎雄、武田祐吉、辻善之助、橋本進吉、山田孝雄、吉澤義則の諸先生と相會する機會を與へられ、折に觸れて大小となく教示をあふいだのであつた。なほ、井上通泰先生の萬葉雜話、正宗敦夫氏の萬葉集總索引、澤瀉久孝・久松潛一二教授の業績より恩惠を蒙り、萬葉三水會の、石井庄司、五味保義、佐伯梅友、中島光風、藤森朋夫、森本健吉、森本治吉、遠藤嘉基の諸氏によつて鞭撻激勵せられたことも多大であつた。また雜誌アララギでは土屋文明氏指導のもとに五味保義氏、柴生田稔氏はじめ諸同人相勵んで萬葉集諸作家を研究し、柿本人麿の歌にも幾回か言及したので、それから學んだ點も僅小ではなかつた。斯くの如くにして、昭和十四年二月十日無事發行することを得たのであるが、その發行に先だち、宮內省圖書寮御藏の「柿本人麿集」全部を附載する御許可を得たことは私の深く謹しみ感謝するところである。

　本卷が發行になると、德富蘇峰（東京日日新聞）、武田祐吉（圖書）、久松潛一（東京朝日新聞）、次田眞幸（國語と國文學）、森本治吉（短歌研究）諸氏の同情溢るるはかりの紹介文をたまはつた

【柿本集考證】歌仙家集〔三十六人集〕中の柿本集（人丸集）に就いての考察意圖は、昭和四・五年ごろであつて、何時も中絶がちであつたところが、それでも幸に數人の助力者を得て少しづつ進行したものである。助力者は、故山口隆一（昭和六年）、佐藤佐太郎（昭和九年）、藤森朋夫（昭和十二年）の諸氏であつたが、宮内省圖書寮御藏本を閲覽し得るに至つてから、頓に爲事が捗り、それを私が毎年夏休を利用して整理しつつ昭和十三年になつて辛うじて纏めたものである。そのあひだ時々幸田露伴・山田孝雄の二先生に敎をあふいだ。原稿は一とほり柴生田稔氏の校閲を經てそれから印刷所にまはした。この考證は片手間にした爲事のやうな具合で、隨分長い間かかつたことになるわけである。

【勅撰集選出歌考證】これも何時の頃の企圖であつたか、だいぶ以前であるが、纏まらずに放棄してゐたものである。然るに、雜纂篇に收めるために昭和十年になつて歌を書拔き、私が小閑を得次第ぼつぼつと書足して行つたものである。それを近時山口茂吉・柴生田稔の二氏が補充せられた。

【柿本朝臣人麻呂歌師說】（香川景樹）これは景樹の講話を門人熊谷直好が筆記したもので、文政

二年冬と記されてゐる。正宗敦夫氏が數十年以前に筆寫して置かれたのを、私の「柿本人麿」のために贈られたもので、以て珍とするに足りる。これを一讀するに景樹の創見が隨處に見あたるが、その中に、人麿が歿したとき、依羅娘子の作つた歌の、「石水貝爾交而」の『貝』を「峽」と解したのがある。即ち、『貝は借字にて山のかひのかひなり。交るは、春の山べにまじりなん、などの交るに同じ。そこに葬りてあるをいふ也』とある。私は評釋篇卷之上で、この歌を解いたとき、橘守部の檜嬬手の、「貝(カヒ)も峽(カヒ)なること、一本に谷(タニ)爾とある以(モ)て知るべし」を以てプリオリテートとしたのであつたが、景樹の說の方がずうつと先行してゐるのは注意すべきであり、創見の譽は景樹に冠せらるべきものの如くである。近藤芳樹、安藤野雁等も同說であり、芳樹の說は評釋篇で抄したが、野雁の萬葉集新考でも、「貝は峽の借字にて山の谷を云ふ」と云つてゐるが、時代はずつと後れてゐる。以上の三學者等は景樹の說を知らずに、銘々獨創の見として發表したのかも知れぬが、獨創の見は景樹に歸すべきものである。因に云。文政二年は景樹五十二歲に當る。それから、丹比眞人の、「荒浪に寄りくる玉を枕に置き吾ここにありと誰か告げなむ」等に就き、「次の擬歌は後に心得違ひてよめるものなるべし」と云つてゐるのは、流石に眼光が鋭い。この歌を、「心得違ひてよめる」と感ずる人にして、はじめて、鴨山の所在地を海邊でなくとも好いと論斷し得るのであつて、私が「鴨山考」

を作つた時に、既に丹比眞人の歌は考の中に入れてはならぬと論斷したのであつた。

【鴨山後考其他】 人麿が石見國で死せむとした時、作歌した中の「鴨山の巖根し纏ける」の「鴨山」は現在石見のどの邊だらうといふことは、既に大正三年あたりから注意してゐたが、國府から十四五里ぐらゐ離れたところだらうといふこと、江ノ川に近いところだらうといふことの、大體の見當をつけたのは、昭和になつてからの事である。それから江ノ川に近い處で、賀茂神社の所在地などを調べてゐるうち、邑智郡濱原村に『龜』といふ大字のあることに注意し、それから考が急に發展して、昭和九年に「鴨山考」を作つて、濱原に隣る粕淵の津目山(つのめやま)を以て鴨山に擬することになつた。ついで「鴨山考補註篇」で、川本町の古名が石河邑と稱したことを發見し、鴨山考の説に一證を與へたことを記載した。然るに昭和十二年一月に至り、邑智郡粕淵村の大字湯抱の溫泉地、即ち湯谷に「鴨山」といふ山のあることを發見し、「鴨山後考」(昭和十三年一月文學卷六ノ一)を發表して大體の結論を得たのである。この考證に著手してから、不思議に石見の古地圖が手に入つたり、そのほか思ひがけぬ發見があつたりして、この鴨山に關する考說はここまで到達したのであつた。昭和十三年三月二十二日、河野與一教授夫妻にあつたとき、河野氏は獨逸の考古學者シユリーマン(Schliemann)の話をして吳れた。シユリーマンはホメロスのトロヤに深く憧憬して、希臘の地をながらく踏査してゐるう

ちに、小亞細亞のヒサルリクの丘を發掘し、その第二層目の出土品から考證して、其處をばホメロスのトロヤだと推定發表した。そして彼の死後、彼の友ドエルプフエルト（Dörpfeld）によつて實證せられたといふ話である。河野氏は微笑しつつ話し、私も微笑しつつそれを聽くのであるが、私は甚だしく感動した。私の空想がつひに石見湯抱に鴨山を見付けしめたけれども、私の歿後、ドエルノフエルトのごとき人を豫想し得るか否かをもおもつたからであつた。その後、「湯抱」といふ處を土地の人は「ユガカイ」と發音し、陸地測量部の地圖にも「ユガカヒ」とあるので、これは、「湯か峽」のことだらう、卽ち現在「湯谷」といふのは、その「湯かかひ」のことだらうとおもふやうになつた。そして、この事は、「石川の貝」は「石川の峽」（峽は谷）だといふ說に關聯して居るのである。

その後、昭和十四年七月號の短歌研究の萬葉集綜合研究で、武田祐吉博士は、人麿臨終時の歌を解き、「人麿が石見の國府で死んだと見るのが順當であるから、その附近に求むべきである。死ねば葬られる筈の山であり、以下の歌の內容に依るに海岸に近く且川に臨んで居た地形であると思はれる」と云つてゐる。私は嘗て（鴨山考補註篇）、武田博士の人麿國府歿處說を否定しくどくどと說いたのであつた。それから數年經過した今日、博士は依然として國府說を固守し、然かも、「病に罹つて將に死なむとする心細さのままに、もう墓穴に橫はつてゐる身を想像して詠んでゐる」妻とは多少離

れた處にあり、通ふのを常として居つて、自分の來るのを待つて居る。遠い旅の空で獨寂しく妻を思ひながら死んで行く人麻呂の氣持がよく出てゐる』と鑑賞してゐる。そして妻の依羅の娘子は角の里に住んで居り、娘子の歌の、『貝に交りて』を、『川ではあるが海に近い河口の處に思はれる。その河原で人麻呂を火葬にしたやうである。それでその骨が貝に交つてあるといふのである』と說いてゐる。昭和十四年の只今、萬葉學專門家中の專門家とも謂ふべき武田博士がかういふ解釋をしてゐる以上は、私の鴨山考の如き、シユリーマンに對するドエルプフエルトの出現もただの夢想として後代に殘るに過ぎないであらうか。

　なほ少しく補記するに、武田博士は人麿は死に臨み娘子に使を遣れない事情があつたのだと解した。それについて私は「鴨山考補註篇」で、「間使ひ」の歌の例を列記したが、その後、佐藤佐太郎氏は、卷十六（三八一三）の、『吾が命は惜しくもあらずさ丹づらふ君に依りてぞ長く欲りせし』といふ歌に注意して私に話した。この歌には、『右傳へ云ふ。時に娘子あり。姓は車持氏なり。其の夫久しく年序を逕て往來することを作さず。時に娘子係戀心を傷ましめ、痾疹に沈み臥しき。痩羸日に異にして忽ち泉路に臨む。ここに使を遣して其の夫君を喚び來る。しかるに歔欷流涕して斯の歌を口號み、登時逝沒りき』といふ左註が附いて居る。即ち此歌の言傳へでは、女が死に臨んで男に使を遣つた例

である。女でさへ使を遣るのに、男がなぜ使を遣れないか。この「事情」は、單に人麿と娘子とが私通の間柄で、人目をしのぶ爲めだ、といふやうな理由では解け難い常識である。そこで私は、人麿と娘子との距離がその時遠かつたので、使を出す暇が無かつたと解し、その場處を粕淵あたりの江ノ川沿岸と想像したのであつた。武田博士の國府歿處說では、この「事情」がどうしたら解明が出來ないものである。

【辛乃埼考其他】　辛の埼についての疑問はだいぶ前からの事だが、それを具體的に書いたのは、「評釋篇卷之上」である。それで私の辛の埼に關する愚案は盡きるのだが、それを纏めて昭和十二年一月號の「文學」に發表した。この考は大體昭和十年に書いたのだが、評釋篇卷之上の發行は昭和十二年五月になつたので、それに先立つて發表したのであつた。その時、石見の學者小篠大記の說を石見八重葎から手抄して紹介して置いた。この小考證と關聯して、「琴高磯・辛の浦・床の浦其他」、「カラノ浦に就いて」、「唐の島其他」等の小文がある。是等はいづれも小考證に過ぎぬが、岡鹿太郎、山崎慧、藤原（布野）運一、村岡典嗣、岡田眞、金田賢作、山田儔諸氏の厚意を忝うした。

【藤原宮御井に就いて】　これは「評釋篇卷之上」にその斷片を書いたが、昭和十年十一月から昭和十二年六月に至るまでの調査を纏めて、「藤原宮御井考」と題して、昭和十二年八月號の「文學」に發

表した。「二たび藤原宮御井に就いて」は足立康博士の駁論に對する私見で、昭和十三年九月に書いて置いたものである。それから、「追記」は昭和十四年五月の調査について記入したものである。この論考については、土屋文明、藤森朋夫、石井庄司、吉田宇太郎、高安やす子、大村呉樓、上村孫作、高安國世諸氏から多大の助力を得た。

この御井考は、藤原宮阯の研究と相待的、依存的な一つの假說であること、度々本文中に記載したとほりであるから、藤原宮阯に關する專門的研究家の助力を得たい希望を持つてゐたのであつたが、足立博士の駁論を讀むと、ただ一笑に附せようとする傾向のあるものであつた。そして「御井」の位置を定めるにつき、發掘の礎石につき、大安殿（大極殿）であらう、朝堂であらう等と云ふと、それを、『甚だ迷惑な』言葉だといひ、博士等の發掘作業には、『一切の先入見を去り』、客觀的な中正な見地から發掘してゐるといふから、成程さういふものか、さういふ客觀的な態度ならば、千萬年たつても、あそこが藤原宮阯か否か、大宮土壇が大極殿阯か否か、といふやうな問題は解決せられる筈が無い。今後博士はどういふ態度に出るか、興味あることだと私は思つてゐた。然るに昭和十四年六月發行の雜誌月光創刊號に、「藤原宮」と題する足立博士の論文が載つた。その中に次のやうなことが書いてある。

く日本古文化研究所に於いては、吾々をしてこの地の發掘調査を行はしめることとなり、昭和九年より着手し、爾來連年その發掘を繼續し今日に及んで居り、この間發見されたる建築物の遺趾は既に十九棟の多きに上つてゐる。いまこれらの配置を見るに、「大宮堂」より發見された南面せる大殿堂を中心とし、その左右及び南方に多くの殿堂が左右對稱を守つて整然と相並び、その全體の布配は平城宮や平安宮に於ける朝堂院のそれと寔によく一致してゐる。これらの點から推察すれば、高殿の遺趾は疑もなく藤原宮朝堂院の一郭と認むべきものであり、「大宮堂」の大殿堂趾は大極殿に當り、その南方に在る十二棟の殿堂は所謂十二堂に該當する。斯くの如く、今回の發掘によつて、藤原宮趾の正確な地點を決定なし得たと共に、亦その朝堂院の規模をも明し得たのである。(この朝堂院の規模は頗る大きく、南北約五町東西約三町の範圍に亙り、二十數棟の殿堂・門・廻廊等が堂々と布置されてゐたのであつて、平城・平安兩宮の朝堂院の規模と雖もこれに一籌を輸してゐる。また個々の殿堂も頗る大きく、大極殿は正面百十四尺、側面六十尺、更に十二堂の中には正面二百五尺側面四十尺にも及ぶものが六棟もある。これらは瓦葺丹塗の莊麗たるものであるが、その木材は藤原宮役民作歌に見える「近江國の衣手の田上山のまきさく檜」が用ひられてゐたと思ふと自ら深い感興の湧くを覺える。)

この博士の文中、大宮土壇が「大極殿」即ち私の御年考に散見する大安殿に同じいに當り、その大きさを計算せられ、「疑もなく」、決定なし得た」といふ點は、博士の言にも決して動搖はあるまい。私が大宮土壇を大安殿＝大極殿趾だと記載して博士から批評せられてから、一年半も經たぬ

うち、博士は私が記載したとほりのことを云ふやうになつた。藤原宮阯研究者の權威たる足立博士が、かく決定し、別に迷惑をも感ぜられないやうになつたといふことは、大に學界のために慶賀すべきことであり、同時に私の「御井考」を全面的に否定することなどは不可能になつたことを喜ぶものである。この足立博士の文は、本文中に抄すべきであるが、本文は校正濟であるから、この「緣起」中に入れることとした。

なほ補記せむに、昭和十四年八月號の國學院雜誌に、足立博士は「藤原宮の位置」といふ論文を發表せられた。これは藤原宮の位置に關する從來の諸説を述べ、高殿説が最も有力だと述べると共に、博士等の發掘調査について、次の如き結論を述べて居る。

結局藤原宮朝堂院の一部と認めるの他なく、「大宮堂」の大殿堂阯は大極殿阯と考ふべく、その南方の十二棟の殿堂は所謂十二堂と認むべきものであらう。尚今回の發掘によつて夥しき古瓦が發見されたが、その文樣は明らかに白鳳式の特徵を示し、中には持統天皇御造營の本藥師寺阯より出土する古瓦に酷似してゐるものもある。この事は上記の建物が持統天皇御宇頃に造營された事を示してゐる。斯くの如く今回の發掘によつて、藤原宮阯の正確な地點を決定なし得たと同時に、亦その朝堂院の規模をも知り得たわけである。○この朝堂院の規模は頗る大きく、南北約五町東西約二町の範圍に亘り、二十數棟の殿堂・門・廻廊等が堂々と布置されてゐたの

であつて、平城・平安兩宮の朝堂院の規模と雖もこれに一籌を輸してゐる。また個々の殿堂も頗る大きく、大極殿と推定されるものは正面百十四尺側面六十尺、また十二堂と推定されるものゝ中には正面二百五尺側面四十尺にも及ぶものが六棟もある。これらはいづれも瓦葺丹塗のものであつたが、その木材は、「近江の國の衣手の田上山のまきさく檜」が用ひられてゐたと思ふと、自ら深い感興の湧くを覺えるであらう。〇朝堂院の規模が上述の如くであれば、內裏及び諸官省を含む全藤原宮の規模は實に宏大なものであつたと思はれる。御井歌に宮の四方の門が、それ〴〵香具・耳成・畝傍及び吉野の四山に相對してゐたと荘重な言葉で詠まれてゐるのは、よくこの藤原宮の雄大荘嚴な有様を偲ばしめるものがある。

右の如く、足立博士もこの土壇を中心として藤原宮阯だといふ結論を公にするやうになつて見れば、私の「御井考」を積極的に否定することが出來なくなつたのである。なぜかといふに、私の「御井考」は、そもそも其處をば藤原宮阯だといふ要約・前提・條件のもとに成立つた一つの假說だからである。さういふ意味でも、博士のこの論文は、「御井考」のために有益なものである。また、嘗ては喜田博士も、「近ごろ古文化研究所の手によりて發掘調査中の鴨公村小學校庭の遺蹟は、それが內裏であつたか、朝堂であつたかは暫く問題として保留するとしてゐる」（藤原京再考）と云はれたのであつたが、このたび足立博士によつてそれが略解決せられたのは學界の慶事と謂はねばならない。

然るに、博士は私の「御井考」を否定しようとするのであるから、おのづから次の如き言說となるのは止むことを得ない。

> 藤原宮の位置の決定に伴ひ、萬葉學者が第一に想起するのは御井歌に詠まれた御井の位置であらう。吾々もこれに就いては大なる關心をもつてゐるが、この種の井戸は原則として內裏附近にあるべき筈で、儀禮的に用ゐられる朝堂院の附近にはないと思はれるから、その位置の決定は更に今後の調査に俟たねばならぬ。因に先頃齋藤茂吉博士は、玉稿「藤原宮御井考」（文學昭和十二年八月號）に於いて、大宮堂の東南約二町の小字「メクロ」にある野井戸を以て問題の御井に擬定されてゐるが、實のところこの井戸は大正十三年の旱魃の際、その田地の所有者が新に鑿井したもので、今より僅か十數年前の新しい野井戸に過ぎない。

かういふ言說になるのは自然のいきほひと謂ふものであらう。「今より僅か十數年前の新しい野井戸に過ぎない』といふ如き批難の、いかに單純無邪氣なものだかといふことは、既に、「二たび藤原宮御井に就いて」の中に述べて置いたごとくである。

また、博士が御井を內裏近くに求めむとする意圖のあることは私も贊成で、私の「御井考」もそれに他ならぬことは、既に繰返して書いてあるとほりである。ただ博士がその內裏の位置、從つて御井の位置をどの邊に持つて行かれるかが私の興味を以て觀察し得る點である。「同一宮城內に內裏

と朝堂とが並び存する狀態にあつた』（喜田博士、日本都制と藤原京）藤原京にあつて、内裏をどの邊に持つて行かれるか、これは專門家としての足立博士に吾々は期待してゐるのであるが、内裏は大體朝堂の東北に當るとして、比較的狹いあの土地の宮城周垣内に内裏を推定するとせば、そんなに遠い處に推定するわけにも行かぬとおもふし、規模の莊大な内裏としてどう整理せられるか、また喜田博士の臆說、慶雲元年十一月以後の擴張を豫想に入れるとして、あの藤原宮御井の長歌は、それ以前の、寧ろ最初造營時の作歌と考へらるるから、その邊の考をどう整理すべきか、『藤原京に前後の別があつたであらうとの余輩の假定說に從へば、其の宮城の位置其の他に於ても、亦當然前後其の別あることを認むべく、彼の慶雲元年十一月始めて宮地を定むとあるものは、其の擴張後の宮城であつたと解せられる』（喜田博士）を念頭に置けば、今回の發掘せられた朝堂阯といふのは、『持統天皇御造營の當初の藤原宮』の朝堂の謂であらうか、或は文武天皇慶雲元年擴張後の藤原宮の朝堂であらうか、その解決をもせねばならぬであらう。（もつとも、喜田博士は、上壇を中心とする建築物は、やはり宮殿として最初に建てられたものであらう。和銅四年に燒亡したものでは無からう。さうでなければ餘り狹隘だと云つて居られる。）

さういふ大切で且つ興味深い事柄を長い年月かかつて、纖々と究尋して行くあひだに、私の『御井考』は否定せられずに、却つて肯定せられることとなるであらう。これは私の空想といふもので

あり、豫感といふものである。

なほ、昭和十四年から大和地方も雨雪尠く、鴨公村あたりは昭和十四年十一月から約九十日間雨らしい雨降らず、十一月下旬にほんの小雨、昭和十五年一月廿三日に三十分間ぐらゐ降雪があつたのみで、從つて、鴨公小學校北方に接した大池などは底が顯はれるまでになつた。この時の井泉の狀態を吉田宇太郎氏にたづねたところが、二月二日附を以て、懇に調査報告せられた。第一部a、水面は地表から〇・五米、水の深さ四・五米、稍白濁。b、水面は地表から〇・五米、水深四・〇米。清冽澄明。c、水面は地表から〇・五米、水深二・三米、稍白濁。さうして見れば、第一部の井泉の水量は減つてゐるけれども、涸れるやうなことは無い。これは注意すべきことである。序に云。日本古文化研究所の作業で、土壇東方廿五間に、大極殿正門（おもてみかど）の阯とおもはれる基壇石の連續群を發掘したことを報せられた。寔に慶賀に堪へぬ。

【人麿雜纂】これはこれまで手控にして置いたものを雜然と載せた。伊能忠敬の測量日記、人馬賃錢、本朝神社考、高津柿本大明神略緣起、櫟本柿本寺略緣起、人麿神疫病除靈驗、埴科人麿大明神由緣碑撰文大村光枝、德川時代山陰山陽交通路、あての木、柿本神社參拜記念等である。此等を纏めた後に、昭和十四年初夏になつて、人麿の子孫だといふ小室氏の來訪を受けたので、「柿本氏小室系圖」

を補充した。此種類の雜事は今後も集め得ると思ふから、幸に私が健康であつたら、補充したいとおもつてゐる。

「柿本人麿御傳　中務卿兼明親王撰」初代豐田文三郎氏舊藏本を、岡田眞氏が昭和十年三月十日に影寫しておいてくれたものである。本篇の原稿とするとき廣野氏の助力を得た。これは人丸と赤人とが雙生兒だといふやうに書いたほどの書であるが、神道の方と結び付いたことが、他の類書と同様である。

「超大極秘人丸傳」、「歌道筒守」「重之卷（抄）」、「歌仙」「葉抄」（抄）、此等は、昭和十一年に、故中村澤之孝氏がこの「雜纂篇」のために筆寫しておいてくれたものを、一應廣野三郎氏に目をとほしてもらつたものである。然るに中村氏は本篇の發行を見ず、昭和十四年三月に病歿せられた。私は深く君の死をいたみ、是等諸篇の君の筆蹟を形見として永く愛惜するものである。

【人麿地理踏査録】　これは、昭和十二年五月の、備後・石見・讃岐・伊豫・淡路・大和と、昭和十四年五月の、「淨沼池・鴨山・尾道・鴨公其他」との二つであるが、前者は「鴨山後考」の鴨山を實地踏査した記事である。ついで私の「辛乃埼考」に關係ある唐鐘浦を訪ひ、伊甘國府址を訪うた。それから四國へ渡り、讃岐の砂彌島を見、松山・道後をとほり、ふたたび山陽道に入つて、加古川の

近海に舟を浮べて古への『加古の島』を偲び、それから淡路へ渡り、『明石の門』、『野島の埼』、『飼飯の海』等を偲び、大和へ行つて藤原宮阯の井泉をしらべたものである。この旅行は一人旅で、先を急ぎ急ぎしたけれども、私にとつて極めて有益なものであつた。後者は、三瓶山の麓の、浮沼池の寫眞を撮るのが目的であつたが、同時に、その浮沼池の邊と、私の發見した鴨山との交通路を實地に踏査しようといふのであつて、それが無事實行せられ、私の學説に積極的な根據を與へたのであつた。この道は今は殆ど全く人の往來が絶えてゐるので、世の學者は顧みないのであらうが、私は可なり重要な道だと思ふのであるし、なほ調査したい事柄が幾つも私の心中を去來してゐるけれども、それが私の如き個人の力では如何とも爲し難いのである。この旅行もまた一人旅であつたが、空想を恣にするには却つて好かつたかも知れない。

【人麿像補記】　總論篇・鴨山考補註篇で記載した以後に目に觸れたもののうち、注目すべきもの若干を載せた。なほ人麿の畫像は全國では甚だ澤山あるとおもふが、大體は僅かの種類に分類が出來ると推察せられるゆゑ、先づこのくらゐにして忍ぶこととする。なほ人麿像に就いては、白畑よし氏の研究（美術研究、昭和十二年六月）があるから參攷すべきである。

【小考】　これには「諸説記載に就いて」、「いほる考」、「うはぎ補遺」、「賀茂・鴨・神・龜」、「亂友に

關聯して」、「みだるの語原」、「月西渡」、「抹をタムと訓む小考」等を收めた。いづれも小文であるが、人麿の歌を解くうへに若干の關聯を有するものである。評釋篇が發行になつた後、業餘の小閑を得て斯かる事にこだはつたのであつた。

【人麿文獻補遺】 これは總論篇で文獻を記載したものの補遺と、總論篇發行以後に世に公にせられた文獻の大體である。助力せられた人々は、市毛豐備、小野寺八千枝、石田德太郎、須釜善勝、藤森朋夫、佐藤佐太郎諸氏であるが、わけても藤森朋夫氏より多大の助力を得た。

本卷（雜纂篇）を發行するに際し、御盡力たまはりし方々。秋岡武次郎、足立康、石田德太郎、市毛豐備、一志斐雄、宇都野研、宇野浩二、上村孫作、奧野健治、大村呉樓、幸田露伴、鹿兒島壽藏、金田賢作、北村庸夫、果山、小坂順造、齋藤泰全、澁澤喜守雄、下村章雄、須釜善勝、瀧精一、竹内英之助、津田騰三、德富蘇峯、中村入澤孝、中村三二、苫木虎雄、橋本欣也、橋本福松、廣野三郎、藤森朋夫、舟木賢寛、布野藤原運一、正宗敦夫、宮森麻太郎、村岡典嗣、森繁夫、森本治吉、矢代幸雄、山口恭代、山崎慧、山田儔、吉田宇太郎、渡部信、岡鹿太郎、尾形鶴吉、岡田眞、小野賀榮、小野寺八千枝、岩波茂雄、岡麓、土屋文明、柴生田稔、佐藤佐太郎、山口茂吉の諸氏に甚深感謝の念をささげる。

本卷に載せた寫眞のうち、鴨山後考、辛乃埼考、人麿地理に關係あるものの大部分は、私自身が覺束ない技で撮つたものであるが、それに上村孫作、奥野健治二氏の盡力に依つたものが加はつてゐる。衾田墓地の寫眞、吉野宮瀧地方、五條野地方の寫眞等が卽ちそれである。

總論篇で、人麿の日常生活等のことを顧慮したとき、聯想が食物のことに及び、果物のことをも少しく記載したのであつた。然るに、その果物の中に柿の實が書いてない。一友人が私に諧謔して云つた。『柿本人麿が柿を食はぬといふのはをかしいではないか』。この質問は如何にもそのとほりで、あそこの蔬菜、果物等は大體を示すに止まつてゐた。例へばあそこに掲げた蔬菜のほかに、蒲公英の葉だの、土筆だの、菫だの、酸模だの、木の若萌の種々のものだの、それから後世救荒植物として記載せられてゐるものの大部分は、上代の人々はこれを日常の食用としたかも知れないのである。果物でもまたさうである。あそこに掲げた果物のほかに、自然產のものも、既にその頃外國から渡來して栽培して居たものがなかなかあつたと考へることが出來るだらう。あそこには日本產の覆盆子とか、葡萄とか、岩棠子とか、木瓜(早く渡來せりとも云ふ)とか、榛栗、榧、胡頽子とかいふものが書いてないが、さういふものも無論食用に供したのであらう。胡桃なども種類により(例へば姫胡桃)人麿時代以後の渡來とも思ふものがあるが、人麿時代に既に渡來して居たと謂つて好いものもあら

う。柿などもまたさうである。和名鈔に、音市和名賀岐、赤實菓也。鹿心柿、和名夜末加岐とあるから、渡來種であつても餘程古く既に渡來してゐたと考へて好く、柿本といふ姓が第一それを證してゐるのである。その柿も次々に異つた種類が渡來したものと見えるし、三代實錄に、雷雨震ニ内敎坊柿樹。延喜式、内膳司、供奉雜菜の條、柿子二升、漬年料雜菜の條、柿五升料鹽二升。園地、雜菓樹の條、柿五株云々の記事があるから、實用向にも柿樹はどしどし植ゑられたことが分かる。その他、和名鈔に載つてゐる食用植物の一部は既に人麿時代に渡來してゐたと看做し得るから、專門上の知識を以て、私の書いた總論篇の不備の點は自由に之を補ふことが出來るのである。

この雜纂篇も諸友の助力により殆ど校了となり、目下索引作製中である。昭和九年十一月總論篇を出してから、昭和十五年の三月に至るまで足掛七年を經過した。さてこの雜纂篇の校正を了らうとして顧るに、補訂を加ふべくして私の力の足らざるが爲めに、如何とも爲し難いものが幾つもある筈である。

例へば「小考」として載せた如き題目のものは、今後も續々と出で來ると思ふし、また、あの時以後の考說として少しく加ふべきものの出來あがつたのも幾らかあるとも思ふのである。「小考」の中

で、捄をタムと訓ませたのは、撓と相通じたのに據つたのであるが、廣雅に拱捄法也とある、その『法』と通ずる心持が卽ち『撓』なのである。さういふ事をもつと突きつめたいのであるが差當つては出來ない。また、嘗て一たび顧みた事のあつた、（高崎氏說、鴨山考補註篇）采詩官のやうな職と人麿との關係であるが、周に采詩の官があつたと謂はれてゐる（其を疑ふ學說もある）けれども、本邦にさういふ職掌が特にあつたか、古今集にある大歌系統のものが、以前には雅樂寮で取扱つたと謂はれて居るし、萬葉集卷一・二の歌などは大歌の種類だと考ふる學者も居る程で、その采詩の實行は本邦ではどういふ具合に行はれたか、東歌の蒐集等は地方官と宮廷（家持も含む）との間に密接の關係があつたとおもはれるから、さういふ蒐集の爲事に人麿が躬を以て從事したか、柿本朝臣人麿歌集の歌と人麿自作との關係、從つて人麿と當時の作歌し得た人々との交流等に就いても、なほ考察を續けねばならぬ問題が、幾つか心中を去來するのであるが、これも差當つては考證が出來難い。そこで拙著「柿本人麿」も大體このくらゐにして切上げることとした。茲に「緣起」の餘白增補を終るにのぞみ、更めて諸先生諸友人の健康を祝する。

なほ、中川顯允の石見外記（柿本人麿總論篇三二六頁參考）に、『石川』は、『石見川』（卽ち江ノ川）のことだといふ說を立ててゐることを、濱田の三浦庄市氏が注意せられた。

○石見川〔一書ニ石川〕　石見名所記ニ、夫木集ヨミ人不知、「アサゴトニ石見ノ川ノミヲタヘズ戀シキ人ニ逢見テシカナ」トイヘルヲ引テ、江ノ川ノ事トス。扨テ此川ハ石見第一ノ大河ニシテ一國ノ中ヲ流レ恰モ一條ノ帯ニ似タリ。顯允ガ讀メル角彰經石見乃國乃帯爾爲流石見乃川婆看杼不倦鴨、イト拙キ業ニコソ。抑モ此川ハ源ヲ市木三坂ノ南溪ヨリ發シ、安藝備後ノ地ヲ繞リ、大河トナリテ再ビ邑智郡ニ入リ那賀郡ノ海ニ入ル。此海口ノ地ヲ石見ノ郷トイヘル一ヨリ、石見川トモ石水トモ川ノ名トハナリシモノナリ。扨又鴨山モ此川トイト遠カラヌ所ニテ、古ヘ柿本人麿ハ生國大和ノ柿ノ本ノ人、六位以下ノ賤官ニテ石見ノ任ニ下ラレシガ、久シク職田ナリシ鴨ト云ヘル地ニ病ミ伏シ玉ヒシガ故郷忘レカネ妻ノ依羅娘子ニタノミスクナキヲ傷メル消息ヲタビタビ贈ラレシニ、逢ヒ見ンコトノ難クシテ命終今日ヲカギリトナレリ。扨テ大和ナル妻ノ依羅娘子ハ夫ノ病ノサシカサナリタル消息ヲ讀ミテ、周章驚キ急ニ石見ノ國ヘ馳セ來ラレシニ、夫ノ人麿ハスデニ此世ヲ辭シ玉ヒ、角枕錦衾ノ粲爛タヾ獨リ悲傷タトヘンニ物ナシ。萬葉集同ジナラビニ見エタル、柿本朝臣人麿ガ死時妻依羅娘子作歌二首〔ミマカル時トアレドモオマカルルノ誤ナルベシ歌ノスガタニテ味ノベシ〕　且今日吾待君者石川貝爾〔一云谷爾〕交而有登不言八方〔印本ノ點ニ、アヂマツ君トアレドモ、是ハアマツ君ナルベシ。貝ニ交リテ、考ノ二、次ニ臣ナキシカバ、此川ノ海ハ落ル所ニテ貝モアルベシトアリ。然レドモ此貝ハ借字ニテ川合ノ義ナルベシ。谷爾トアレヨモテ知ルベシ。〕　直相者相不勝石川爾雲立渡禮見乍將偲。扨初ノ

歌ノ意、今日今日カト待ネ來リ妻ヲ思ヒツヽ、身マカリ玉ヘル夫ノ君ノ御魂戀シヤ、モシヤコノ石見川ノ河合ニ沈ミモヤシテデ居玉フカ。次ノ歌ノ意ハ、夫ノ君ニ逢タク見タク泣キカコツトモ黄泉ノ山坂ヘダヽレバセメテハ此石川ニ雲トモ君ハナリテアラハレ玉ヘ、妾ハソレヲ夫ノ君ゾトナガメテナグサメン。案ズルニ、石見川ト石川ハ同ジ川ニテ分テ二ツトスベカラザルモノナリ。

斯う記してある。この文章で注意すべきは、「案ズルニ、石見川ト石川ハ同ジ川ニテ分テ二ツトスベカラザルモノナリ」といふので、これは萬葉集にある、石川は即ち石見川(江ノ川)だといふ考である。それから、『鴨山モ此川トイト遠カラヌ所ニテ』といふのは、人麿の歿處鴨山もこの石見川(江ノ川)から遠くない處にあるといふ說である。私は川本町の石水山弓峯八幡三社の緣起によつて、『石河邑』といふ名稱を知り、私の假說に一根據を得たのであつたが、私と同じやうな考を、既に石見の學者中川顯允が立てて居るのは、極めて興味あることであり、感謝すべきことである。私は昭和九年夏、濱田圖書館を訪うて此書物を一見したのであつたが、旅の慌しさにこの文章を見おとし、八重葎の說のみを抄記したのである。然るに三浦庄市氏によりて二たび此書の說を顧慮することを得たのは、まことに忝いことである。顯允は、依羅娘子は大和に居たこととしてゐるが、『久

シク職田ナリシ鴨ト云ヘル地ニ病ミ伏シ玉ヒ』といひ、石川貝を借字にて『此貝ハ借字ニテ川合ノ義ナルベシ』といつて居るあたり、思考の機轉がいかにも儁敏であつて、後進の吾々はおのづからそれを尊敬せねばならぬのである。

併し、石川を江川としたのは斯くの如くであるが、鴨山をば都農郷の中と考へてゐた。

(一)鴨山ハ都農郷石見川ニ近キ地ニ、古ヘ鴨トイヘル所アリ。此ノ鴨ノ地ノ山ナルベシ。搦鴨曉筆卷十七ニ、加茂、山城・石見ニアリト 加茂・鴨ニ同ジ是レナリ。今ノ世コノ賀茂ノ地ヲ求ムレバ、サダカナラネバ、カモ・カミ訓通ヘバ賀茂・神トナヘノ變リテ今ノ神村ノ山ニテハナカリシカ。此アタリハ國府ノ官人ノ職田モアリ、古ヘ人麿ハ國府ノ官人ニテ、病痾養生ノ爲メニ職田ノ別業ニ住セシニモアラン。カクイフハ全ク牽强ノ言ニシテ、カナラズ徵トハセンガタシ。ソモソモ此山ハ萬葉集卷二ニ柿本朝臣人麿在石見國臨死時自傷シテ作歌、鴨山ノ磐根之卷有吾乎鴨不知等妹之待乍將有ト見エシ是レナリ。サテ人麿ノ辭世、加茂眞淵ノ說ニハ、人麿石見ノ國ニ下ツテ司ヲ任ケ、慶雲年ノウチニ、ヨハヒ四十アマリニシテ、任ノ內ニ終リタマヒヌトアリ。(下略)

これで見ると、顯允の說は、『神村』說であるから、私の鴨山とは場處が違ひ、吉田東伍博士の大

日本地名辭書の說と合致する。これは鴨山は都農郷の中にあるだらうといふ前提の下に成立つた說であるから、おのづから斯ういふ結論となるので、その不適當な前提だといふことは既に幾たびも論じたごとくであるが、私の感服したのは、『石川』を『江川』に見立てたのにあり、この結論は動かぬのである。

なほ此の「石見外記」で注意すべきは、人麿の歌の中の、『辛乃埼』をば邇摩郡宅野近くの韓島だとせずに、那賀郡で國府に近く、カラは角の里に近い處で、辛乃埼は今の唐鐘であらうと云つて居る點にある。

○辛乃崎(カラノサキ)　言高磯附　人麿ノ長歌ニ、言佐敝久辛乃崎有(ナル)ト見エタルハ、タヾ辛トノミイヘル地ニテ、萬葉三ニ苦毛零來雨可神之崎トイヘル神ト同ジク、之ハ助字崎ハ先ト訓通ヒ出張タル地ヲイフナリ。然レバ辛トハ何レノ所ゾトイハヾ、辛ハ枯虛(カ)空ナド、同ジク、渺茫タル一草一木モ生ゼザル野原ヲイフナリ。是ハ下國府アタリヨリ江津邊ヘカケテ砂山白濱多ク目モトヾカザルノ曠野ナルヲ、辛トノミ名ヅケタルモノナリ。此ノ辛ノ地ノ出張タル崎ニハ石多キヲ以テ伊久里爾ゾトハ胃(原)トハ咏ゼラレタルモノナリ。石見名所記ニ辛乃崎可良崎ト折(原)テ二ケ所トスルハ非ナルベシ。

堀河百首 源俊頼朝臣「石見潟コヽタカ磯ニヨル浪ノヶダケテ歸ルモノトシラズヤハトミユ」言高磯ノ地イマダ思ニ得ズ。モシヤ八疊ノ言高コトサヘグカラノサキトアル辭ニヨリテ、石見潟ニツケテコト高磯ト俊頼ハ詠ゼシレシカ。

ノ疊浦　此浦ハ國分村ニアリ。東西十餘町南北六七町、タヾ平坦ナル一枚石ニテ、中程ニハ小高ク枕ト思ハレ、處モアリ、マタ椀家具ナドナラベタルガ如キ岩モアリ、オシナベテ莚席ヲ敷タルガ如キニヨリ、タヽミガ浦トハ名ヅケシモノナリ。一ニハ床ノ浦トモヨベリ。其風景奇絶ニシテイハンカタナク、思フニ神御代ニ大己貴命少彦名命ニ柱ノ大神犬ガド所作玉フ時ノ神造ニモアランカ。サリテ是ヨリ西六七町ヲ隔テ海中ニ犬島トイヘル島アリ。遠クコレヲ望メバ海上ニ一玉環ノ半分ヨリ上ノ出タルガ如シ。ソノ環ノ中ハ洞ニテ小船ナドニテ通ラルヽナリ。サテマタ此ニ猫島トイヘル島モアリ。床ノ浦ヨリ東北ニアタリクナスフトイヘル海礁アリ通行ノ舟用心スル所ナリトイフ。唐金ノ里トイヘル地モアリ。コヽハ唐乃嶺ニテ辛乃崎ニモアランカト疑フ地ナリ。

即ち、右の文中、『唐金ノ里トイヘル地モアリ。コヽハ唐乃嶺ニテ辛乃崎ニモアランカト疑フ地ナリ。』は、辛乃埼をば唐鐘の疊浦をも含めた埼を差すのであつて、取りも直さず、私の「辛乃埼考」の結論と合致するのである。さすれば、私の説と合致するものに、「石見八重葎」附記の小篠大記の説

と、この「石見外記」の中川顯允の說とで、共に槃游餘錄の記事に類似した點もあるが、いづれにしても、私の說に前行して、石見の學者二人まで『辛乃埼唐鐘疊浦說』を出して居るのは、愉快至極のことと謂はねばならない。そこで、實に長い間、辛乃埼は邇摩郡の韓島だといふ說が殆ど學界を支配して居たのであつたが、この辛乃埼唐鐘說は近き將來に於て學界の定說となるのではなからうかとさへ思はれるに至つた。石見外記の題言には、『文政三年庚辰冬十月望、石見濱田臣中川顯允公修識』とあるから、その頃から此說を持してゐたことが分かるのである。

索引

凡例

一、索引は事項索引と歌句索引とに分かち、歴史的假名遣による五十音順に配列した。

一、事項索引は語句・人名・地名・書名等の索引を兼ね、書名及び論文には『』を附した。

一、歌句索引は本書に考證した柿本集及び勅撰集選出歌の各句を出した。而して其他本文中隨處に引用されたものは之を略してゐる。

事項索引

ア

イ

ウ

エ

オ

シ

ス

セ

ソ

タ

ツ

テ

ト

ナ

歌句索引

ア

イ

ウ

カ

キ

ク

ケ

コ

サ

シ

タ

チ

テ

ト

ナ

ニ

ヌ

ネ

ノ

ハ

ヒ

フ

ヘ

ホ

マ

ミ

ム

メ

モ

ヤ

昭和十五年十二月五日印刷
昭和十五年十二月十日第一刷發行

定價七圓

著者　齋藤茂吉

發行者　岩波茂雄
東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

印刷者　白井赫太郎
東京市神田區錦町三丁目十一番地

發行所　岩波書店
東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
電話九段(33)一一八七・一一八八番
一一八九・一一六八番
振替口座東京二六二四〇番

精興社印刷　大倉製本

柿本人麿

鴨山考補註篇

菊判・六六六頁
寫眞挿畫一一葉
定價二圓八十錢
送料二十一錢

目次大要 一鴨山考補註 江ノ川の舊名石川說。龜村舊名賀茂說。鴨・神岡源說。石見八重葎所載の濱原本鄕・龜村の記事。石見國名跡考所載の記事。古代石見諸民族分布の狀態。古代石見神社分布の狀態。古代石見に於ける交通狀態。石見國府に關する考察 一人麿歿處高津說に就て 一人麿歿處國府說に就て 人麿時代の婚姻習俗。人麿歿時依羅娘子の居處。國府三村及び附近の字名調査 一人麿歿處に關する他の諸說 ○鴨山考雜補 一手帳の記 一石見踏見記 一鴨山踏査餘錄 一備後石見紀行 ○雜記帳抄 ○人麿肖像補遺 一專項索引 ○歌句索引